

大阪大学大学院文学研究科

年報 2012

教育・研究(2010-2011年度)

定

一書生と而く多し。今も其の行履に於て其の

修習も其の偏所を以て其の

一学法雅法と其の多し。雅法も其の

其の多し。其の多し。其の多し。

一其の多し。其の多し。其の多し。

其の多し。其の多し。其の多し。

一本業も其の多し。其の多し。其の多し。

其の多し。其の多し。其の多し。

其の多し。其の多し。其の多し。

一其の多し。其の多し。其の多し。

其の多し。其の多し。其の多し。

一其の多し。其の多し。其の多し。

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科

年報 2012

教育・研究(2010-2011年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却つて立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2012

目 次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2012』の刊行に寄せて	永田靖	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2012』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	5
1-2	教育・研究の支援体制	10
	研究推進室	10
	評価・広報室	12
	教育支援室	19
	国際連携室	24
	国際交流センター・留学生相談室	26
1-3	国際交流活動	28
1-4	外部資金の導入	30
1-5	グローバル COE プログラムについて	33
1-6	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	36
1-7	多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム	37
1-8	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム	38
1-9	懐徳堂研究センターの活動	39
1-10	埋蔵文化財調査室の活動	41
1-11	ハラスメント問題委員会の活動	44

第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	49
2-2	現代思想文化学	62
2-3	臨床哲学	74
2-4	中国哲学	86
2-5	インド学・仏教学	94
2-6	日本学	102
2-7	日本史学	117
2-8	東洋史学	139
2-9	西洋史学	155
2-10	考古学	174
2-11	人文地理学	187
2-12	日本文学	196

2-13	比較文学	213
2-14	中国文学	224
2-15	国語学	231
2-16	英米文学	240
2-17	ドイツ文学	252
2-18	フランス文学	261
2-19	英語学	271
2-20	日本語学	282
2-21	美学・文芸学	300
2-22	音楽学・演劇学	317
2-23	美術史学	340
2-24	共生文明論	361
2-25	アート・メディア論	373
2-26	文学環境論	385
2-27	言語生態論	393
2-28	留学生専門教育	403
	編集後記	406

大阪大学大学院文学研究科 『年報2012』の刊行に寄せて

大阪大学文学研究科の教育研究活動の成果を隔年で刊行し、自己評価に役立てる『年報』はこれで6冊を数える。今号は2010～2011年度をカバーしている。2010年度からは第2期中期計画が始まり、文学研究科もこの新しい6年間の中期目標に向けて努力することになった。しかし何よりもまず記すべきは、2011年8月から総長以下本部執行部の体制が大きく変わったことである。大阪大学では、文系出身の初めての総長であった鷺田清一総長から、現在の平野俊夫総長に交代になり、それともなつて理事・副学長も一新された。本部における大学運営の基本であった室体制が全廃され、新しく理事補佐制度による運営が始まった。様々な変化が起こったが、ここではまず2010～2011年の文学研究科の教育研究活動で特筆すべきことを挙げておく。

2010～2011年度には、比較的大きな出来事が多かった2008～2009年に比べて、どちらかと言えば小さいが、しかし重要な教務上の制度変更が多くあった。まず卒業論文提出にかかわる修得単位要件(3年次終了時96単位)を廃止して、3年次から4年次の就職活動期の過ごし方に自由さを与えることとした一方で、1年次から計画的に単位修得をするよう指導強化し、履修モデルも学生便覧に掲載した。

また入試関係では大学院入試における成績評価基準を明確にし、口頭試験における「着眼項目」の設定や入学許可基準の見直し等を行い、内規を整備した。また大学院入試出題ミスを防止するために、入試関連部門、各専門分野、研究科執行部による出題問題点検体制を強化整備した。教務上の制度以外では、全学経費により文学部本館及び文法経講義棟の文41、文12、文13など各講義室や演習室のAV機器の設置や更新を行うことができた。また無線LANを配備して教育環境の改善を行うことができた。

国際性を涵養する様々なプログラムや海外との交流も充実していた。2008年から始まったエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムが軌道に乗り始め、同プログラムから毎年5名の院生を受け入れ、英語による授業を5科目開講してきたが、2011年秋からは同プログラムのフル・パートナーに格上げされ、提供単位数もそれまで15ECTSから25ECTSに増えることになった。同時に、同プログラムは2012年度から5年間さらに延長されることが決定され(Phase 2)、今後博士後期課程の設置を検討中である。また2010年2月から新規プログラム日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採択された「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」が本格化し、主として2週間～2か月間の短期派遣を実施、多くの院生やポストクを海外に送り出した。

そして2010年には日本学術振興会の「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に採択された「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究 - 日英間に広がる21世紀の地平」が開始された。主として1年間の長期派遣を軸に教員や院生の研究を支援している。また2010年夏には「日本語超短期プログラム」を実施し、7名の学部生を短期受け入れ、芸術系教員の導入的な授業と中レベルの日本語授業を融合させたユニークな日本語授業を展開した。しかし残念ながら2011年には、東日本大震災の影響で海外からの渡航者が減り、実施を見合わせる事となった。海外の大学との交流も活発にし、ゲッティンゲン大学、クラコフ大学、台湾師範大学、ハイデルベルグ大学と部局間協定を締結した。ハイデルベルグ大学のISAPプログラムにより、教員と学生の相互派遣も実施している。

その他、ここには書き切れない様々な改革が進んできた。これらについては教員各人の献身的な努力の賜物である。詳細は後述の各部門の報告をご参照頂きたい。懸念材料も少なくない。例えば、文学研究科への入学者数は大きく定員を割り込んでいるわけではないが、徐々に減少傾向が続いている。定員充足を図るためには、今一度入試制度や教育制度を抜本的に再考するべき時期に差し掛かっていると思われる。また2008年度に新設した修士課程文化動態論専攻は4年を過ぎて、諸問題も見え始め、一層の充実と体制の整備が求められて来ている。運営費交付金の1%削減、教員ポスト削減など縮小傾向の話題は今後も続くが、教員各人の充実した研究成果は国内外に自慢すべきことであり、優秀な院生を多く輩出している事実にも、変わらず誇りを持ち続けたいと思う。

2012年12月

文学研究科長・文学部長
永田 靖

大阪大学大学院文学研究科 『年報2012』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

文学研究科では、1997年から2001年までのデータを収集した『年報2002』の発刊以来、自己評価活動や自己点検作業の一環として、2年ごとに定期的に『年報』を発行してきた。このたびの『年報2012』で、2011年までをカバーするので、文学研究科の教育・研究活動に関わるデータの蓄積はこれで15年間となる。この種のデータは、先ずは長期間継続して記録されることが求められるであろうから、そうした意味では決して十分な期間の蓄積とは言えない。ただ、この期間に国立大学の法人化や大阪外国語大学との統合という大きな教育・研究環境の変化を迎えるなか、本研究科では、一定の期間を限って、その成果の評価と点検を行ってきた。その際、継続的に刊行してきた本『年報』は、自己評価だけでなく、外部評価の基礎資料としても大きな役割を果たしてきたと言える。高等教育と学術研究という国家と国民の将来にかかわる重要な任務と責任を持つ大学は、その任務を遂行するにあたって、常に自己点検を行い、また第三者の客観的な立場からの厳しい評価を受けて、教育と研究の質を保持し、教育内容をさらに向上させるための努力が求められているので、自主的に刊行してきた『年報』が、そうした改善に少しでも役立つことになれば幸いである。

『年報』の内容は、これまでのデータとの比較を容易にするということもあり、従来通り、二部構成となっている。第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における2010年度～2011年度の教育・研究活動の概要」では、文学研究科・文学部の教育および研究活動全般に関わる事項を報告する。その項目は、先の『年報2010』を基本的には踏襲したが、部分的に削除したり簡素化したりした。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」では、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色と、所定の項目ごとのデータを提示した。さらに、当該期間中の教員・院生個人の業績とともに、教育・研究活動に関する自己評価を各専門分野・コース単位で報告いただいた。

今号『年報』では、これまであった「新専攻の設置と開講」の項目を削除した。大阪外国語大学との統合に伴って新設された新専攻「文化動態論」も、2008年度に学生を受け入れて、翌2009年度には修了生も出しており、改めてこの項目を置く意義が減じたためである。反対に新たに付け加えた項目として、前『年報』の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」（通称、OVC）に続き、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」がある。どちらも若手研究者の海外派遣を促進するためのプログラムであり、他の項目と併せて、両プログラムの活動を容易に概観できるようにしている。

データの収集に関しては、これまでも遺憾なく威力を発揮してきた個人業績入力用のエクセルシートを利用した。このシートを用いたワークフローは、『年報』の編集作業の負担を大きく軽減してくれているが、既に実情にそぐわなくなっている部分もあるので、シートを改めて見直してゆく必要がある。

『年報2012』においても、これまでの『年報』の特色を継承して、大学院生の業績を詳細に記録している。文学研究科の教育・研究成果に対して、外部・自己を問わず評価を加えるには、教員が関わった業績を掲げるだけでは不十分であり、院生のそれを能う限り列挙しておく必要がある。そこには、各専門分野・コースにおいて積み重ねてきた研究・教育活動が、如何なる成果として結実しているのか、比較的分かり易いかたちで反映されているからである。

なお『年報2012』も、これまで通り、文学研究科のホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>) を通じて Web 上に公開する予定である。文学研究科の教育・研究活動全般を広く知っていただき、忌憚のないご意見を頂ければ幸いである。

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として2010年度および2011年度のデータに関するものであるが、『年報2010』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度4月1日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

以下に掲げる表から明らかのように、博士前期・修士課程の入学者数は、2010年度に大きく落ち込む結果となった。2009年度に、同上課程の総定員(94名)の8割を大きく割り込んだ減少の趨勢が、さらに加速されて、一挙に約6割にまで減じたと言える。しかしながら、翌2011年度には再び2009年度レベルに入学者数の数は回復しており、急激な定員割れに、一応歯止めがかかったように見える。ただ構造的な不況がなお続くなか、全体として入学者数が減少傾向にあることは否めず、今後いかに大きな定員割れを防ぐかが最大の課題である。とくに問題として挙げられるのは、内部進学者が減少していることと、一年に2回、入試の機会を設けてはいるものの、秋入試合格者の他大学大学院(東大・京大のほか一流私大など)への流出が続いていることである。これらに対する早急な対策が求められている。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	77	7	15	99
2005	68	4	15	87
2006	61	3	9	73
2007	74	4	11	89
2008	70・18	4・3	10・0	84・21
2009	58・15	3・1	8・2	69・18
2010	48・12	4・2	6・2	58・16
2011	57・20	4・0	7・4	68・24

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

2008年度の新専攻設置にともない増加した学生数は、それ以降、減少傾向を示しているが、2011年度は2010年度の水準を何とか保持している。休学率・留年率ともに大きく悪化はしていないが、その率は決して低くはなく、改善の努力を要する状態が続いている。とくに修士課程で修了する動態論における留年率が顕著である。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2004	230	16	37	85
2005	223	23	39	100
2006	187	15	30	78
2007	193	21	31	59
2008	208・21	22・0	40・―	83・―
2009	188・39	18・0	40・10	77・11
2010	158・43	16・8	32・10	68・17
2011	158・49	17・8	32・9	60・10

1-3. 大学院博士後期課程入学者

2010年度は、前年度の定員割れの状態を回復し、募集定員の41名を大きく上回ったものの、翌2011年度には再び定員割れをおこし、過去最低の39名となった。社会人の入学状況については、後期課程ということもあり、これまでも小規模な数に留まっており、従来とあまり変わるところはないが、外国人入学者数については、2009年度以来、一貫して10人にも達しない状況が続いている。ここでも定員以上の入学者の確保を図ることが課題となっているが、そのためには博士後期課程修了後の就職という、国家レベルで解決に当たらざるを得ない大きな難題を抱えている。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	45	5	15	65
2005	34	2	9	45
2006	44	3	9	56
2007	26	3	17	46
2008	30	4	13	47
2009	31	3	6	40
2010	36	4	8	48
2011	29	2	8	39

1-4. 大学院博士後期課程学生

学生数は、大きく減じた2009年度以来、微減の状態にあるが、学位論文提出者の数は、2009年度に比べて2010年度は一挙に半減した。ただし2011年度は、その数を大きく回復している。また休学者数については、あまり変化は認められないものの、退学者数については、2009年度と比べて大幅に増大した。ただ退学者数については、2009年度だけが他年度に比して例外的に低いので、これについては従来並みと見なせる。問題は、学生数に比して、学位論文提出者数の率が低いことにあるが、この点は人文学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、

研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程終了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討すべきであろう。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2004	321	76	25	57
2005	294	77	28	36
2006	304	81	24	50
2007	290	93	41	46
2008	276	80	48(25)*	46
2009	248	68	45(18)*	23
2010	245	68	23(12)*	40
2011	232	71	33(19)*	37

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

2010年度・2011年度も、日本人・留学生ともに大学院研究生の数は、低い状態が続いている。とくに2010年度は過去8年間で最低の総数となった。ただし留学生について言うと、研究生への希望者も同時に少ないわけではないことが十分に考えられる。大学院で研究を続けてゆくだけの十分な能力がなく、研究生になれなかったケースも少なくない。研究生を院生への予備軍と見なすならば、今後、文学研究科として研究生をどのように受け入れて教育してゆくのか、検討してゆく必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	20	2	22
2005	21	2	23
2006	14	7	21
2007	13	8	21
2008	8	9	17
2009	8	6	14
2010	6	5	11
2011	8	4	12

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学は、過去8年間、定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5~10名程度上回る数で推移しており、大きな変化はない。外国人入学者は、2004年度から2005年度にかけては0名の状態であったが、2006年度以降、毎年入学者があった。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2004	174	0	174
2005	174	0	174
2006	177	2	179
2007	173	1	174
2008	170	2	172
2009	171	3	174
2010	175	2	177
2011	171	1	172

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数に大きな変化はない。休学者数は2008年度には減ったものの、翌2009年度には倍増し、その水準が2010・2011年度と続いている。そのほかに、過去2年間の大きな変化はない。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2004	773	29	64	150
2005	791	35	87	179
2006	785	28	74	163
2007	793	31	84	188
2008	770	16	80	165
2009	779	34	84	166
2010	786	28	79	174
2011	777	30	73	165

2-3. 学部研究生

日本人、留学生とも、全体としては、2009 年度までは漸減の傾向がうかがわれたが、2010・2011 年度には回復しつつある。とくに留学生は、2011 年度は激増し 2004 年度のレベルにまで戻ってきている。今後も、中国などアジアからの留学生が増えることが予想でき、そうした学生のための環境作りも重要になってこよう。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	15	23	38
2005	12	14	26
2006	10	10	20
2007	9	10	19
2008	7	13	20
2009	2	8	10
2010	9	10	19
2011	8	20	28

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。

研究推進室は文学研究科の教職員によって構成される。室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長より委嘱される。

研究推進室は、科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門の3部門より成り、各部門には室長が委嘱するチーフが置かれる。各部門の主な業務内容は次の通りである（研究推進室内規からの編集引用）。

1. 科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
- 2) 「各種共同研究の補助」の募集・選定、運営に関すること
- 3) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
- 4) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること

2. 図書管理部門

- 1) 「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
- 2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
- 3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること

3. 紀要・論叢部門

- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行および関連の諸問題の処理に関すること
- 2) 若手研究者のための「外国語論文発表補助」の募集・選定に関すること

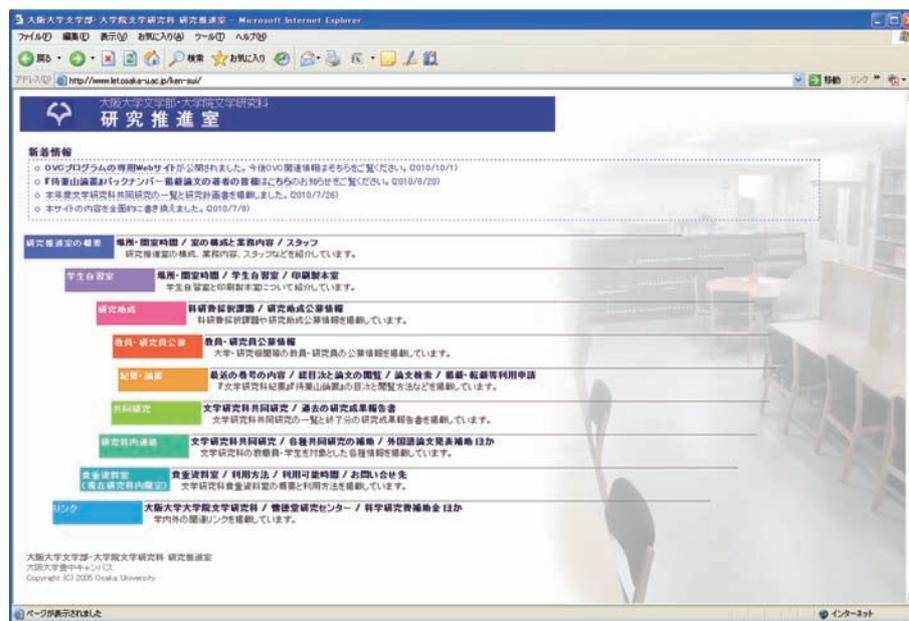
活動状況

1. 研究推進室ホームページを管理・運営し、研究推進のための情報提供を行った。
2. 文学研究科共同研究の募集・選定および運営に当たった（2010年度6件、2011年度6件採択）。また、各種共同研究の補助（文学研究科教員が中心となって開催する各種研究会等の経費補助）を行った（2010年度10件、2011年度5件）。
3. 競争的外部資金に関する情報の収集・提供を行ったほか、日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」等への応募を推進・支援した。
4. 科学研究費補助金の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーの開催、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。2010、2011の各翌年度における採択状況は次表の通りである。

年度	新規課題			新規課題＋継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	採択件数	交付総額(円)
2011	60	36	60	78	205,669,000
2012	53	27	51	90	217,600,000

5. 日本学術振興会特別研究員の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーを開催するとともに、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを行った。

6. 文学研究科共同施設である学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。
7. 附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
8. 2009年度末に完成した文学研究科「貴重資料室」の管理・運営を進めた。
9. 『大阪大学大学院文学研究科紀要』第51巻、第52巻（論集編・モノグラフ編）および『待兼山論叢』第44号、第45号を刊行した。
10. 若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、外国語論文発表補助（外国語論文や外国語による口頭発表の原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った（2010年度21件、2011年度11件）。



研究推進室ホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/ken-sui/>)



学生自習室の風景



大学院生・若手研究者向け科研等申請書作成セミナー

(田野村忠温)

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、2004年度の法人化に伴い、従来の企画・評価委員会と広報委員会を合わせて新たに設置された組織で、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っている。

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門によって構成され、室長・副室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。研究評価部門は、教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施など、広報部門は文学部説明会（オープンキャンパス）の開催、高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科紹介』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの管理など、また、ネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長および副室長は、室全体の活動を統轄するとともに、全学基礎データの収集、外部評価、メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統轄している。また、教務補佐員1名が配置され、室の事務全般を担当している。

(藤岡穰)

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. 各部門の活動内容と会議（室会議、総務委員会）

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門から構成されており、各部門の2年間の主な活動内容は、以下の通りである。

研究評価部門は、『大阪大学大学院文学研究科年報 2010 教育・研究（2008-2009年度）』の編集と刊行を行った。また、教育評価部門はFDや大学院生を対象とする各種アンケートを実施した。広報部門は、学部紹介誌である『大阪大学文学部紹介』、研究科紹介誌である『大阪大学大学院文学研究科紹介』の編集・刊行をはじめ、文学部説明会や大学見学会の開催、高校への出張講義などを行った。さらに、ネットワーク部門とともに、HPの維持・管理も行った。ネットワーク部門は、文学研究科サーバ、メールアドレス、LAN等の維持・管理にあたった。

本室の業務の決定は、基本的に室員全体が出席する全体会議で決定する。しかし、業務内容に応じて、各部門やその一部がそれぞれ独自に開催する部門会議や、外部評価や文学研究科サイトの刷新など特別な必要に応じて、所属部門を超えて選ばれた委員で構成される特別委員会の会議も重要な役割を担った。2010・2011年度は、全体会議は、原則として教授会の行われる日に定期的に開催され、他の会議は不定期に開催された。

なお、室長は、総務委員会において、本室に関わる事項の確認を行うとともに、総務委員会から本室への依頼事項を室に持ち帰り、室会議に諮った。副室長は、外部評価の責任者となった。

1-2. データ収集（全学基礎データ、教員基礎データ）と『年報』作成

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、教務補佐員が主に担当し、その収集、データの整理などを行った。なお、「教員基礎データ」の収集は、「教員基礎データ」、『年報』、ReaDの三者に共通して利用できるデータベース作成用ソフトを利用しているが、すでに実情と合わない部分も生じており、その活用は教務補佐員の能力によって補われているのが現状である。文学研究科教員の「教員基礎データ」入力率の維持も、教務補佐員の尽力に依存していることを付記しておきたい。

このほか、文学研究科独自のものとして、2010年度および2011年度においても引き続き、専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

2010年度には、これまで蓄積したデータに基づいて、自己評価書である『大阪大学大学院文学研究科年報 2010 教育・

研究（2008-2009年度）』を刊行し、本研究科の専門分野・コース別の教育・研究状況とその自己評価を学内外に公開した。
(藤川隆男)

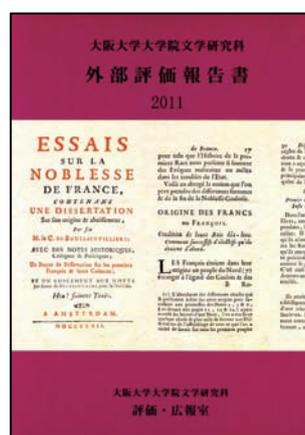
1-3. 年度計画・達成状況と「外部評価書」の作成等

全学の中期目標・中期計画に基づいて定めた文学研究科の中期計画・中期目標の方針に則り、各年ともに年度計画の策定（12月）と達成状況の自己評価（3月）を行った。また、学生編集委員との共同による『文学部紹介』を作成し、高校生のための文学部説明会のプログラムや進行に改善を加え、高校生のための見学会も積極的に受け入れ、文学部の魅力を発信することに努めた。さらに、大学院文学研究科入学者募集のポスターを作成し、ホームページに「大学院におけるサポート体制」のトピック記事を掲載するなど、大学院における定数確保を目指すべく、積極的に広報活動を展開した。

2011年度には、3名の学外有識者に外部評価委員を委嘱して外部評価を実施し、その結果を『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2011』として刊行した。この外部評価は、2008年度に実施した外部評価が各専門分野に対するピアレビューであったのに対し、文学研究科・文学部の組織全体に対する評価に主眼を置いたものである。2004年度の法人化以降、2010年度までの7年間の活動を評価の対象とし、主な評価項目として①文学研究科・文学部の概要、②教育活動、③研究活動、④国際交流活動、⑤社会貢献活動、⑥管理運営、⑦FDおよび評価体制、⑧建物・施設、⑨動態論専攻の9項目を設定した。
(藤岡穰)



「外部評価委員会」(2011年12月)

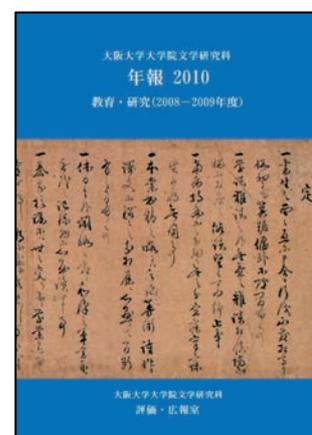


『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2011』
文学部・文学研究科公式サイトにてPDFで公開中。

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2010年度に、過去2年間（2008～2009年度）における教育・研究活動の情報を収集整理した『大阪大学大学院文学研究科年報2010』（A4判388頁。以下、『年報2010』と記す）を刊行し、各教員および各専門分野・コース、各室、事務部、学内の他部局、学外機関等に、450冊あまりを配布した。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第1部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第2部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前々号・前号に引き続き、過去2年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。第1部では、当時プロジェクト期間途中であった「グローバルCOEプログラム」の記事のほか、今号よりエラスムス・ムンドゥスとOVCのプロジェクトに関する記事が加わった。『年報2010』は文学部・文学研究科の公式サイトにおいてPDFファイルとして公開中である。なお、2011年度末には『外部評価報告書2011』も刊行され、これも公式サイトにおいて公開されている。



『年報2010』文学部・文学研究科
公式サイトにてPDFで公開中。

2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報 2010』を 2010 年に刊行したことを受けて、各専門分野・コースにおいてその後の改善状況の検証を行った。具体的には次期に刊行予定の『大阪大学大学院文学研究科年報 2012』に関して、早くも 2010 年度～2011 年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『大阪大学大学院文学研究科年報 2012』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野・コースにおける教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。このようにして、点検・評価・改善が連続して実行されていく動きが本格化し、実質性を持った自己点検・自己評価が実現することとなった。

2-3. 教員データ収集用エクセルシート

2007 年度以降、全学レベルの教員基礎データと文学研究科『年報』の作成用データを一括して収集するためのエクセルシートの運用を始めた。これ以降、全学の教員基礎データの公表フォーマットの変更に伴い、いくつかの修正を加えたりした。このエクセルシートは、本研究科の教員情報収集の合理化に大いに役立ってきたと評価できよう。2011 年度には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所からの評価システムに関する視察を受け入れた。その際、前記の『年報』のほか、当該エクセルシートも注目・評価されたツールの一つであった。

(堤研二)

3. 教育評価部門

2010 (平成 22)・2011 (平成 23) 年度に、評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行ったアンケートおよびファカルティ・ディベロップメント (FD) について、報告する。

3-1. アンケート

評価・広報室の教育評価部門は、2011 年 11 月～2012 年 1 月に、博士前期課程と修士課程の大学院生を対象に、授業改善を目的としたアンケートを実施して、アンケート対象学生・全 205 人中の 120 人 (59%) から回答を得た。このアンケートの集計結果は 2012 年 3 月 20 日の教授会において公表・分析された。

3-2. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

2010 年 12 月 2 日、教育支援室と評価・広報室は FD 講演会を開催し、保健センター吹田分室内学生相談室の石金直美准教授が「学生を育てるコミュニケーションのありかた—学生相談室からみた、今どきの阪大生気質—」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は約 40 名であった。その後、フロアの有志と石金准教授による座談会も実施された。

また、2010 年 12 月 9 日、文学研究科・文学部は FD の一環として研究教育フォーラム (教員研究会) を開催し、その第一部では本研究科・飯倉洋一教授が「偽りと倫理—上田秋成の晩年—」という題で、第二部では本研究科・小林茂教授が「近世東アジアの疫病空間—天然痘と麻疹の流行秩序と小規模社会—」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は約 50 名であった。

次年度の 2011 年 11 月 17 日、文学研究科・文学部は FD の一環として研究教育フォーラム (教員研究会) を開催し、その第一部では本研究科・清水康次教授が「文芸雑誌『明星』の美術とのかかわり —『白樺』に先行する動きとして—」という題で、第二部では本研究科・森安孝夫教授が「日本伝来マニ教絵画と中央アジア出土ウイグル語手紙文から見る文化交流」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は約 50 名であった。

また、2011 年 12 月 1 日、教育支援室と評価・広報室は FD 講演会を開催し、保健センター吹田分室内学生相談室の石金直美准教授が「学生生活を支えるための教職員の関わり方を探る」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は約 60 名であった。

(榎本文雄)



「研究教育フォーラム」(2011年度)



「文学研究科 FD 講演会」(2011年度)

4. 広報部門

少子化が顕著になり、とりわけ大学院の入学定員確保に支障が出始めている状況にあって、大学の広報が果たす役割はますます大きくなっている。文学研究科の広報部門は、このような大学広報の役割をふまえ、とりわけ文学研究科・文学部から発信する情報がどのようなものであるべきかを常に意識し、研究と教育の現況を提供し続けるように努力してきた。以下では、冊子メディア、電子メディア（HP ほか）、オープンキャンパス・各種見学会に分け、それぞれのジャンルの活動について、2010年度から2011年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べる。

4-1. 冊子メディア

文学部で広報活動の一環として重要なものが、『文学部紹介』である。この冊子は、毎年刊行されているもので、各高校、各種大学説明会などで配布されている。毎年5500～6000部を刊行し、文学部の研究と教育の現状や理念などを分かりやすく紹介している。

2011-2012年度版は、学生に編集委員として関わってもらった2010-2011年度版の方針を引き継ぎ、新たに8名の学生編集委員が、教員・スタッフと協力して編集にあたった。学生の発想によるより親しみやすいトピック、誌面による構成という傾向は引き継がれているが、一方でカリキュラム構成が学生の視点からより実質的に図式化されたり、「使ってみよう！学生スペース」と題して教育支援室、研究推進室、メディアラボなどの学生スペースが紹介されたり、さらには資格取得についての体験記が載っていたり、と随所で充実がはかられた。

2012-2013年度版でも、同じく学生の編集委員募集により、6名が編集に加わった。今回も「専修語学選択の道」と題されたページ、あるいは留学に関する情報のページ、大学入試の「合格体験記」、さらには研究室のメンバーによる「研究室レポート」など新機軸が加わっている。もちろん、従来通りの専修紹介や教員紹介も掲載されており、全体では95ページの厚さ



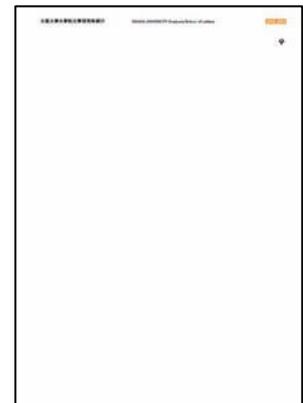
『大阪大学文学部 2011-2012』



『大阪大学文学部紹介 2012-2013』



『大阪大学大学院
文学研究科紹介 2011-2012』



『大阪大学大学院
文学研究科紹介 2012-2013』

となった。

このような『文学部紹介』は、外からは見えにくい文学部の学生の生活ぶりを伝える、という本来の目的でももちろん重要な役割を果たしているが、同時に編集に加わった学生・院生たちにとってはきわめて大きな教育的経験であり、さらに教員にとっても学生の中から文学部を見直す良いきっかけになっていると考えられる。

『大阪大学大学院文学研究科紹介』も毎年刊行しており、全国の大学に配布している。『文学研究科紹介 2011-2012』では、従来の情報を整理し、「大学院サポート体制」のページを設けた点など、改善を施し、これは最近刊行された2012-2013年版においても引き継がれている。最新版はデザイン面でも、これまでより大胆なものとなり、印象的な冊子となった。なお、冊子ではないが、大学院、とくに入試に向けた広報として、ポスターの作成もおこなっており、『文学研究科紹介』と共通するデザインとしている。

4-2. 電子メディア

大学と学部選択、及び大学院と研究科選択にあたって学生たちが参照する割合が最も大きいのが、文学部公式サイト(以下 HP と略記)である。ほとんどの新入生は HP を見て、詳しい情報を得ている。前記の『文学部紹介』がある程度本格的に阪大文学部を受験しようと考えている学生にとって重要であるのに比べると、HP は阪大文学部に興味をもつきっかけ、入り口としての意味がより大きい、と言えるかもしれない。

HP の中では、文学部紹介での内容とは基本的に変わらないものの、差異化を計った情報発信を行っている。大学院入試問題の掲載を行なうことで、入学希望者への便宜を図っている一方で、各教員の出版、受賞、研究会などの様々な活動を「トピックス」欄においてタイムリーに掲載することに努力し、冊子媒体にはない迅速な情報提供に資している。また英語版 HP も作成し掲載している。これら HP については、全面的な改訂が計画され、2011 年度にその準備作業を開始した。2012 年度以降に改訂が行われる見込みである。

2009 年度から始められた受験関係などの情報サイトに文学研究科の記事を登録するやり方については、費用対効果を見きわめながら、多少調整をしつつ継続し、資料請求に対応して、希望者に無料で研究科紹介冊子を送付している。

4-3. オープンキャンパス・各種見学会

広報活動の 3 つ目の柱はオープンキャンパスなどの見学会実施である。これには大阪大学の全学部が 8 月に行なう大学説明会の一環として文学部で行うものと、文学部独自に行なう文学部見学会あるいは教員が高校に出向く出張講義などがある。

まず、毎年 8 月に行なわれる大学説明会(文学部)には、多くの高校生や父母が来られ、毎年千人前後の参加者があり、関心の高さが窺われる。学部長の挨拶の後、教員の講演、在校生のスピーチのほか、各ブロックから一人ずつ教員が出て各ブロックの教育と研究を分かりやすく説明している。その後、参加者との質疑応答があり、参加者への理解を高める努力をしている。また、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気を味わってもらう貴重な機会なども提供している。2010 年度からは、在校生によるスピーチの時間を拡大したほか、各研究室への案内法などに工夫を加えた。

文学部独自の見学会は、希望する高等学校から事務局学生部学務課総務係を通じて申し込みをもらい、評価・広報室で受け入れの可否を決定している。この見学会では、高校側の希望に合わせて柔軟にプログラムを組んで対応しているが、基本的には文学部紹介ビデオを用いての全体の紹介、および模擬授業、そして研究室見学などが主なメニューである。見学に際してのアンケートは引き続き行っており、見学会終了後すぐに集計され、評価広報室員に共有される体制となっている。

2010 年度には、島根県立松江東高校、神戸龍谷中学校、大阪府立天王寺高校、近畿大学附属東広島高校、鹿児島県立鹿児島中央高校、大阪府立池田高校、2011 年度には、滋賀県立高島高校、大阪府立市岡高校、大阪府立豊中高校、大阪府立住吉高校、大阪府立天王寺高校、開明高校、大阪府立春日丘高校、和歌山信愛短期大学附属女子高校、大阪府立池田

高校の見学会受け入れを行った。このほか、教員の出張講義としては、2010年度には、広島市立舟入高校、2011年度には、高知学芸高校に教員の派遣をした。これらの見学会や講義などでは、上記冊子媒体や入学要項、その他の冊子を提供するなどして広報に努めている。

4-4. 展望

以上のように、広報部門の活動は多岐にわたるが、まだまだ課題は多い。上記のとおり『文学部紹介』は単なる広報活動を超えて意義を持ち始めているように思われるが、『研究科紹介』はとりわけ大学院の定員充足率が低下している現状から考えて、何を冊子体で伝え、何をポスターで訴え、何をHPで発信してゆくべきなのか、もう一度整理する必要があるように思われる。日常の業務に追われて、十分に検討できなかったのが、将来の課題として記しておきたい。

そのほかでは受験希望者、海外の留学希望者、在学生などをとりまく情報環境の変化などに伴い、HPの見直しが課題だったが、これはすでに着手されている。また長年使われてきた文学部紹介ビデオは、登場する教員の多くがすでに退職された方々であり、そろそろ耐用年限が来ている。経費との関係もあって懸案のまま終わってしまったが、できるだけ早い時期に改訂されるべきだろう。

(伊東信宏)



「文学部説明会」(2011年度)



「文学部見学会」(2011年度)

5. ネットワーク部門

評価・広報室、ネットワーク部門の主な業務は、文学研究科サーバ管理、教職員および学生へのメールアカウント管理、その他、研究科内ネットワーク設備の管理およびネットワーク・セキュリティの維持全般である。以下に、「サーバ管理」「メールアカウント」および「ネットワークの維持」に分けて2年間の総括を行う。

5-1. 文学研究科サーバ管理

Webサーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、COEプログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会におけるITへの依存度が増せば増すほど、サーバの安定運用ということが求められるのであり、Webやメールが止まることで、さまざまな業務がたちまち大きな影響を受けることになるのである。しかも、外部からのアタックやウィルスメールなど、ネットワークに対する脅威への不安も日々高まる一方であり、セキュリティ保持の作業は、大変責任の重い業務である。ネットワーク部門では、Webサーバ、メールサーバ、ネームサーバを、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスにて運営しており、サーバの安定性を保っている。なお2011年度には、文学研究科ホームページサーバをリプレイスした。この作業によって、文学研究科のサーバのセキュリティが高まった。また作業においては、基本ソフトウェアのバージョンアップもおこない、今後数年間の運用にたえるサーバ環境を整えた。

5-2. メールアカウント

上に述べたように、文学研究科では、…@let.osaka-u.ac.jpのアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバー

メディアセンターに委託したが、メールアドレスの管理は引き続き、ネットワーク部門が行っている)。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、以前より発行数が減少している。この減少は、全学生について、教育システムによるメールが使えるということが浸透したため、研究科発行のアカウントを必要としなくなったことによるものと考えられる。一方、メーリングリストの設定は増加しており、室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究会運営においても、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、もとめられるのは、安全・安心な運用である。即ち、サーバダウンの回避、ウィルスメール、スパムメール等の排除など、セキュリティと安定性の確保を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスによって、より安定した運用がなされることとなった。

ウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムを介することによって、かなり安全性が高まった。しかしながらこれも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。

5-3. ネットワークの維持

時折、ネットワークの不具合が生じる。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどの現象であるが、原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等さまざまであり、その原因の特定が難しい。不具合が見出された際に、ODINS 機器の不具合であることが考えられれば ODINS による対応があるが、まずはネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるようになっている。

講義室や演習室でのネットワーク利用の要望に応える形で、2010 年度と 2011 年度に文学部本館の演習室ならびに文法経講義等の講義室に無線ランのルータを設置した。その一方で、依然として旧式の機器が設置されている美学棟、日本学棟では継続的にトラブルが発生している状況である。

5-4. 展望

すでに述べたように、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバはサイバーメディアセンターのホスティングサービスに移行している。とはいえ、なお残る問題もあり、これを今後どのようにしていくかが一つの課題となる。ブロックごとにネットワークの管理責任者を設定して、問題が起きたら、まずはその中で対処していただくという管理方式を徹底していけば、ネットワーク部門の教員の負担もある程度軽減されるであろう。インターネットの維持・管理は、全てのユーザによる不断の努力が不可欠であるということを、文学研究科ユーザが自覚していくためにも、管理責任の分割は必要な方針であると考えられる。

また、各ユーザが、必要な知識がないままネットワークに接続すると、問題が生じることがある。また著作権を侵害するようなダウンロードソフトウェアの使用も問題となっている。そのためにも、ネットワークについての情報提供がますます望まれる。研究科内向けのホームページに、ネットワークに関する情報をより多く載せるなどして、情報提供に努めているが、より一層の広報活動が必要となるであろう。

(吉田耕太郎)

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、2010・2011年度も引き続き、以下の5つの部門に分かれて業務をおこない、室長（1名）および副室長（2名）で全体を統轄した。

- (1)教務・学位部門：部門チーフ、学位専門委員および室員
- (2)入試関連部門：部門チーフおよび室員
- (3)学習・生活支援部門：部門チーフおよび室員
- (4)就職支援部門：部門チーフおよび室員
- (5)共通教育部門：部門チーフおよび室員

このうち、教務・学位部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、就職支援部門は、室窓口に配置された非常勤職員（2名）とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、大学教育実践センターとの連絡を担当した。

各部門では、教授会開催日に定例会議を開催するほか、博物館実習委員会、教務係、庶務係、会計係とも連携して、機動的に日常業務を遂行した。また、隔週で室長、副室長、各部門チーフ、および教務係係員からなるチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

また、室内の学生用スペースでは、これまでと同様に、非常勤職員 2 名が窓口を担当して、常時学生からのリクエストや相談を受ける体制を維持するとともに、午後 5 時以後 7 時までは学生アルバイトを配置して、スペース利用の便を図った。同スペースにはコンピュータ端末 8 台を設置するほか、キャリア形成関連の書籍・雑誌などを常備し、また求人情報を掲示するなどして、学生の就職支援をおこなった。

さらに、非常勤職員により、室ホームページの維持・更新、ミーティングルームの管理、また授業用 AV 機器の貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

活動状況

1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものが大半である。2010・2011年度における特記すべき取り組み等は、部門ごとに記する。

室全体として、教務係および会計係と連携して取り組んだのは、教室設備の大幅更新を中心とした、教育環境の改善である。全学における競争的予算措置により、文学部本館および文法経講義棟の各講義室・演習室について、AV機器の新規設置や全面更新をおこない、また無線LAN設備を充実させることで、現在の社会情勢に対応する教育を実施できる設備環境を整えた。あわせて、一部教室では空調設備・照明設備、さらには机・椅子の更新、バリアフリー化のためのドア交換など、教室アメニティの向上を図った。

(三谷研爾)

2. 教務・学位部門

2010・2011年度において、教務・学位部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下の3点である。

① 卒業論文提出にかかわる修得単位要件規程の廃止

従来の文学部履修規程では、卒業論文を提出しようとする者は、前年度末すなわち3年次終了時点までに96単位（平成18年度以前入学生は92単位、学士入学者は34単位）を修得することが定められていた。しかしながらこうした制限は、就職活動の時期と3年次2学期の試験期間がちょうど重なる現在の社会情勢をかんがみると、学生に必要以上に大きなプレッシャーや不利益を与えることが懸念された。種々の学生データの入念な調査・分析、ならびに教授会を含む各種会議での慎重な議論をへて、2010年度よりこの制限を撤廃した。

あわせて学生にたいし、1年次から計画的に単位を修得するよう新入学時の履修指導を強めるとともに、標準的な履修モデルを、学生便覧に掲載した。さらに、各専修が提供している授業科目の教育上の位置づけや相互の関連を明示して、シラバスの充実を図った。

② 転部試験制度の見直し

最近の転部希望者増加の現実をふまえ、学部共通の外国語と各専修による専門試験および面接を課したうえ、合否判断についてもより慎重に審議するよう、2010年度実施分から選抜の方式と手続をあらためた。

③ 専修ガイダンスの実施形態の見直し

1年次生に各専修に所属する学修システムの意義を早い段階から十分に理解させるため、2011年度から1学期開講の必修科目「文学部共通概説」において、ガイダンスと研究室訪問とを組み合わせたコンテンツを提供することとした。あわせて、従来11月初旬に実施していた専修ガイダンスもその内容を一新し、学生のより主体的な選択判断を促すために、研究室訪問の時間を設定した。

(加藤洋介・服部典之)

3. 入試部門

入試関連部門は、これまでどおり教務係と緊密に連携して、大学院入試および関連業務の計画、実施、改善などに取り組んだ。また、2010年度より文学研究科選出の全学入試委員（1名）が部門メンバーを兼ねることとなり、学部入試についても本部門で積極的に対応していくこととなった。

2010・2011年度における重要な取り組みは、以下のとおりである。

① 大学院入試における成績評価基準の明確化

各専門分野・コースの学問的特性に応じた評価基準に加えて、研究科全体としての評価基準をいっそう明確にする必要があるとの認識に基づいて、口頭試験における研究科共通の「着眼項目」の設定、成績導出方式や入学許可基準の見直し等を行い、関連する内規を整備した。

② 大学院入試の出題ミス防止策の強化

出題ミスを防ぐために、入試関連部門、研究科執行部、各専門分野・コースの3者による問題点検の体制を整えるとともに、点検回数を2回に増やすなどして対策を強化した。あわせて、解答用紙の体裁・文言の統一をおこなった。

③ 大学院学生募集要項の大幅な見直し

複雑化した出願枠や入試方式が志願者に適切に理解されるよう、募集要項を課程別（修士、博士前期、博士後期）にまとめて冊子体とした。あわせて、入学願書の体裁・文言等を細かくチェックし、必要な改訂をおこなった。

④ 学部入試制度改革にかんする検討

平成 24 年度以降の「入試センター試験の出題科目の選択範囲等の変更」、平成 27 年度以降の「高等学校学習指導要領改訂に伴う入試制度変更」への対応方式について入念に調査・検討し、部局としてすみやかな回答ができるよう準備をおこなった。

⑤ 入試方法の適切性にかんする評価・検討

現行の学部入試、大学院入試の適切性を評価・検討するために、入試反省会（学部・大学院）、入試成績と卒業成績の相関性の調査（学部）、社会人特別選抜および留学生選抜による入学者へのアンケート調査（大学院）を実施した。

（福永伸哉）

4. 学習・生活部門

部門のルーティンとして、奨学金および奨学金返還免除関連、TA 任用関連、インターンシップ関連、学習相談関連の各セクションについて担当者を定め、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。

2010・2011 年度の活動のうち、以下の 3 点を特記しておく。

① TA 制度の抜本的見直しにともなう制度運用準備

全学で 2012 年度から新 TA 制度の導入が決定されたため、教員へのアンケートをブロック単位で実施し、TA 任用の現状、問題点、新制度のもとで期待しうる業務内容等を把握し、新設される STA の業務内容や選考方法などを定めた。

とくに STA の採用によって業務内容の多様化とさまざまなトラブルの増大が予測されるため、TA 研修会の充実と強化（ハラスメント講習をプログラムに加える、等）を策定し、2011 年度 10 月の研修会から前倒で実施した。

② 学習相談への対応

本部門ではこれまで、専修決定、履修方法、進路相談など学習上の悩みに対して、メールおよび教育支援室への来室に応じて、随時相談を受け付ける一連の業務を「学習相談室」の呼称のもとですすめてきた。

2010・2011 年度、相談件数は増加傾向にあり、しかもメンタルヘルスに関連すると思われる内容がやや目立ってきている。学生がより気軽に相談できるように、2011 年度より呼称を「学習相談デスク」にあらため、またその活用を広く呼びかける常設ポスターを掲示し、さらに学生便覧にもより詳しい説明を記載した。

2011 年度から全学レベルでスタートした学生対応のフロントスタッフ・ミーティングは時宜を得た会議（2011 年度は 3 回開催）であり、部門教員および非常勤職員を派遣して他部局の学生支援担当者と積極的に情報交換をおこない、部局連携による支援のありかたを検討することができた。

メンタルヘルス・ケアに関しては、保健センターの協力をえて、これをテーマとする文学研究科教職員向け FD 研修会を 2010 年度および 2011 年度に連続して開催する一方、教育支援室および教務係の担当者が保健センターの専門家と会合をもち、センター学生相談室との連携体制を確認した。

③ インターンシップの実施

2010・2011 年度とも、従来どおり授業に組み込むかたちでインターンシップを実施した。授業としては、「インターンシップを含む科目群」という名称で、学生便覧およびシラバスをとおして学生に周知している。受入れ機関は劇場、ホール、美術館であり、2010 年度には 8 名、2011 年度に 13 名が参加した。両年度とも、各受入先でのインターンシップの概要および参加学生のレポートをまとめた報告書を刊行した。

（三宅祥雄）

学習相談ポスター

5. 就職支援部門

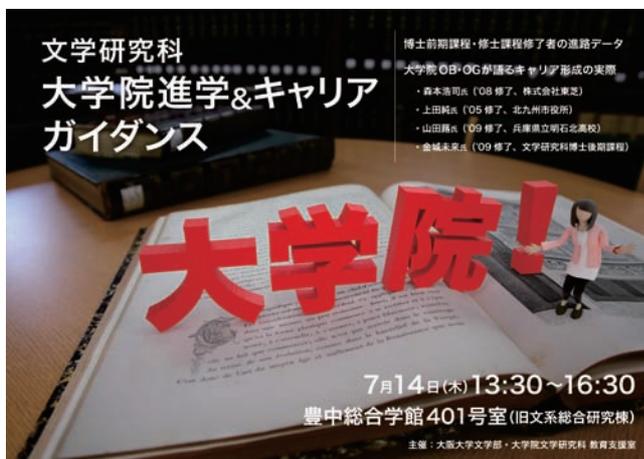
就職支援部門は2010・2011年度も、「就活サポート講座」(4回連続の就職セミナー:5,7,10,12月)を軸に、各種のキャリア支援事業をおこなった。同講座のコンテンツは、これまでどおり就職状況全般の概観、就職活動スケジュール、インターンシップ準備、自己分析・企業研究、エントリーシート対策、面接対策、教職志望者対策などである。とりわけ2011年度は、文部科学省の指導により就職活動の開始時期が大きく変更されたこと、また東北大震災が各企業の採用活動に大きく影響したことから、例年をはるかに上回る学生の参加があった。なお、面接対策については、2010年度から人間科学部学生支援室と連携して、合同模擬面接やグループディスカッションを実施している。

文学部単体での合同企業セミナーも従来どおりおこなった。

新たな取り組みは、以下の2点である。

① 大学院進学&キャリアガイダンスの実施

2010年度から、7月に大学院進学&キャリアガイダンスを実施した。これは、本研究科博士前期課程の修了者を講師に招き、それぞれの体験をふまえてそのキャリア形成の実際を語ってもらうことで、学部学生に大学院進学後の将来設計について検討を促すものである。参加者は40〜60名で、大学院進学後のキャリアが多様化している現実を理解させるという点で、たいへん有意義であった。



大学院進学&キャリアガイダンスポスター



大学院進学&キャリアガイダンス(2010年度)

② 文学部・文学研究科学生に特化したキャリアガイダンスの実施

2011年度に、主として本研究科博士前期課程修了者を講師に招き、私立中学・高校の教職志望者向けに、私立学校の職場としての特質、ならびに教員採用の実際を紹介するガイダンスを開催した。これは、私立中学・高校では博士前期課程修了者の教員採用が進んでいる現実に応え、高度専門職業人養成を図るためのものである。

同様の趣旨から、2011年度にマスコミに絞った就職支援講座を開催した。これは、かねてから就職希望者の多いジャーナリズム・マスコミ業界(出版社・放送局・新聞社など)について、本学部の卒業生・修了生、さらには内定を得ている現役学生による講演会を実施した。参加者は107名にのぼり、きわめて好評であった。



就職支援講座(2011年度)

全学規模でさまざまな就職支援事業が展開されている現在、文学部・文学研究科の学生の特性とリクエストをふまえたサービスを提供する必要がある。今後の課題として、

- ・文学部・文学研究科同窓会と連携して同窓生を掘り起こし、現役生と結びつけるネットワークを構築する
- ・気軽に就職活動や進路について話をできる「カフェ」などを実施する
- ・既卒者にたいしても一定の対応をおこなう

などを検討していきたい。

(北原恵)

6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の大学教育実践センター兼任教員 3 名で構成されている。うち 2 名は全学共通教育の企画運営を行う「共通教育実践部」に、1 名が大学教育全体の実践的研究を行う「教育実践研究部」に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている（2012 年度からは大学教育実践センターは全学教育推進機構に改組され、兼任のありかたも一部変わる）。したがって教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討・運用することにある。

現在、文学部は教養教育科目だけでなく、専門基礎教育科目・基礎セミナーに多くの開講科目を全学に提供しているが、全学に提供する科目の多様性や質を落とすことのないように、非常勤講師ではなく専任教員が担当することが求められている。退職した教員の担当していた授業の継続など、調整しつつ維持している。

基礎セミナーは、少人数による対話・報告を重視した参加型の授業である。共通教育でも力を入れているものであり、共通教育部門としても開講を奨励し、新たな科目を増やすことが出来、研究科内の各ブロックから最低 1 科目のセミナーを出すことになり、専門教育との連携も計ることが出来たと思える。専門教育との連携では、専門基礎教育も引き続き、各専修から出されている。

実践センターの FD ではあるが、文学部の専門基礎教育の FD 担当教員は、文学研究科の兼任教員がこれに当たっている。両年度ともにメールでの開催となったが、多くの議論がなされた。専修ごとの事情もあり、すべての条件を揃えて授業を行うことは出来ないが、寄せられた情報は有意義なものとして共有された。

(岡島昭浩)

7. 博物館実習委員会

2010 年度は大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、神戸市立博物館、兵庫県立考古博物館の 5 館、2011 年度は大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、神戸市立博物館、高島屋史料館の 5 館を受入機関として、博物館実習をおこなった。実習生の数は、2010 年度が 34 名、2011 年度が 34 名であった。両年度とも、実習前年の 12 月に実習履修予定者に登録させ、実施年度当初の 2 度にわたるガイダンスにおいて事前指導ならびに最終的な実習館振分けをおこなった。また実習に前後して、博物館実習委員会委員が各館に挨拶ならびに御礼に赴いた。

(三谷研爾)

国際連携室

組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の 4 部門の室員（各部門にチーフ 1 名を配置）、国際交流センター助教 1 名、同事務職員 1 名（2010 年 10 月より）、および教務系の留学担当職員 2 名で室を構成し、活動を行う。

「連携推進部門」は部局間協定、大学間協定の締結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入れ等を行い、海外の研究教育機関との交流をはかる。「留学生受入部門」は留学生の受入れと学習・生活支援、日本語超短期プログラムの運営等を担当する。「留学助成部門」は、グローニンゲン大学、マヒドン大学への夏期短期英語研修プログラムおよび協定校への交換留学プログラムを担当し、学生の海外派遣を促進する。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の域外協定校として、同プログラムに基づく学生・教員の受入れと派遣、英語コースの運営などを担当する。

さらに、国際連携室のもとに国際交流センター（室長および副室長がセンター長および副センター長を兼務）と留学生相談室を設置し、留学生の受入れ関連業務、留学生に対する学習・生活上のサポート、協定校での勉学を希望する日本人学生への広報活動やアドバイスを行うほか、日本語超短期プログラムやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡など、高度な実務を担当している。

活動状況

1. 国際連携室全般

2010 年 10 月、国際交流センターに事務職員 1 名が配置され、室運営のための体制や制度をあらためて整備した。具体的には、国際連携室・国際交流センター・留学生相談室の役割分担の明確化、国際連携室と教務の役割分担の明確化、室業務年間予定表の作成、室業務運営マニュアルの整備、協定校との学生交換システムの整備などである。また、あわせて、教育支援室と連携しつつ、「外国人留学生の留学等についての申合せ」をはじめとする研究科の規定に大幅に改定を加えた。

その他、留学生数の増加等に対応すべく、室予算の全般的な見直し、チューター制度の見直しとタンデム学習制度の構築などを行った。また、従来、留学生に関する記事を中心にして編集してきた『室報』をあらため、研究科の国際交流活動全般を幅広く広報することを目的とした『国際交流ニューズレター』を年 1 回刊行していくこととした。

2. 連携推進部門

1. 協定の締結。ゲッティンゲン大学、クラクフ大学（以上 2010 年度）、台湾師範大学、ハイデルベルク大学（以上 2011 年度）と部局間協定を締結した。また、ジョージア大学、フランクフルト大学、香港中文大学との大学間協定を本部国際交流室に提案し、締結した（2010 年度）。

2. 外国人招へい研究員の受入れ。2010 年度 12 名（ほかに外国人教員 1 名）、2011 年度 15 名を受け入れた。

3. 新規プログラムの設置。ハイデルベルク大学日本学研究所が DAAD の資金によって 2011 年 10 月より開始する ISAP プログラムに協力することとし、ワーキンググループを設置した。2011 年度は教員 1 名を派遣し、1 名を受け入れた。

4. 学生派遣規定の改正。協定校への派遣は、従来、派遣時に 3 年次生以上であることとしていたが、社会の情勢に対応すべく、2 年次生以上にあらためた。

5. その他の制度の整備。外国人招へい研究員の申請時期をあらため、博士号を取得した留学生の受入れの便宜をはかった。また、招へい教員室の利用規定を整備した。

3. 留学生受入部門

1. 日本語超短期プログラムの新規開設。2010年度、海外の大学で学んでいる中級日本語学習者を主な対象とし、CLIL (Content and Language Integrated Learning) の方法で運営する夏期2週間のプログラム「人文学のための日本語」を新規に開講した。本部門の内部にワーキンググループを設置し、このワーキンググループを中心にして、プログラムの計画、本部へのプログラム開講申請、日本学生支援機構の Short Stay プログラム奨学金の申請、パンフレット作成、HPでの情報提供、学生からの応募の受付と選考、プログラムの実施、報告書の作成等、一連の業務に当たることとした。なお、2011年度は東日本大震災の影響を受けて応募者が少なく、中止した。
2. 留学生の受入れ。従来どおり、正規外国人学部留学生・(国費・私費)外国人研究生・交換留学生(部局間、大学間(部局分散、OUSSEP、Maple))、各種プログラム生の受入れ関連業務を行った。2011年度は、東日本大震災の影響により、上記日本語超短期プログラムを中止したほか、交換留学生や研究生に若干の入学辞退があった。
3. 他のルーティンワーク。奨学金の選考、メールマガジン『国際連携室便り』の編集・発行、来日後1年未満の留学生へのチューターの配置、学位論文執筆留学生への論文チューターの配置等、従来どおり実施した。
4. 交換留学生の受入れシステムの整備。2010年10月、国際交流センターに事務職員が配置されたことを受け、部局間協定校との連絡システム、学生交換システムを整備した。同時に、交換留学生の受入れ手続きを簡素化し、応募書類の受付時期についても柔軟に対応することとした。
5. 協定のない海外の大学からの大学院生の受入れシステムの運用。協定のない海外の大学からの大学院生を特別研究学生として受け入れる制度の運用を開始し、本研究科での研究の機会を幅広く提供することとした。

4. 留学助成部門

1. 協定校への学生派遣。上記「3. 留学生受入部門」4項記載のとおり、部局間協定校への学生派遣システムを整備し、年2回の募集を行って定期的・継続的に学生を派遣する制度を整えた。また、派遣生の選考に当たって、面接を実施した。
2. 留学案内の作成。例年どおり、留学プログラム一覧を掲載したパンフレットを作成、配布した。
3. 緊急連絡網の整備。海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を整備した。
4. 夏期短期英語研修の運営と単位化。文系海外短期研修委員会と連携して、グローニンゲン大学・マヒドン大学での夏期短期英語研修プログラムの運営にあたった。また、その単位化に向けての検討を行った。

5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. ルーティンワーク。学生の受入れプログラムについて、5科目から成る英語授業「世界の中の現代日本」(3ヶ月)を計画・実施したほか、関連業務として、HPでの情報提供、学生との各種連絡、宿舍の手配、講師の補充等を行った。同時に、希望する学生に対して日本語学習の機会を提供した。また先方への学生の派遣(推薦)について、学内で説明会を実施した。なお、2010年度と2011年度は例年どおり各5名ずつ学生を受け入れているが、派遣についてはこの期間には奨学金が確保されず、派遣を希望する学生がなかった。教員については、コンソーシアム校で開催されるマネジメントミーティングやインテンシブプログラムに2010年度1名、2011年度2名を派遣したほか、招へい研究員として、2010年度、2011年度ともに1名を受け入れ、2010年度3名をコンソーシアム校に派遣している。
2. 今後のための準備。開講科目についての現15ECTSから25ECTSへの変更や、フルメンバーとしての参加など、引き続きPhase2に参画する準備を整えた。その後、EU側で2012-2017年のPhase2プログラムが採択され、それを承けて2012年度の学生の派遣と受入れの手続きを進めた。その他、新規開設予定のPh.D.コースに参加するための準備も行った。
3. 問題点の検討と整理。2012年2月にグローニンゲン大学の事務局のスタッフが来学し、問題点について協議を行って次期に備えた。

(渋谷勝己)

国際交流センター・留学生相談室

組織・体制

国際連携室のもとに国際交流センターおよび留学生相談室を設置している。

国際交流センターは、センター長 1 名（国際連携室長兼任）、副センター長 1 名（同副室長兼任）、助教 1 名、事務職員 1 名で構成され、それに留学生専門教育教員 1 名が加わって、バス旅行や留学生パーティ等の各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムや日本語超短期プログラムなどの各種プログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携しての留学生および招へい研究員の受入れ手続き補助などの国際交流に関する諸業務を担当している。

留学生相談室は、前記助教 1 名、事務職員 1 名、留学生専門教育教員 1 名によって運営されている。助教および事務職員は、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。また留学生専門教育教員は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

活動状況

国際交流センターと留学生相談室の活動状況を、事項ごとにまとめて報告する。

1. 留学生相談

留学生相談室では、①留学生の学習・研究上および生活上の多様な相談、②海外への留学に関する相談などに対応した。相談・質問件数は、2010 年度 60 件、2011 年度 70 件。

① 留学生の学習・研究に関する相談・質問は、大学院入試、学位論文、研究の方法、受講する授業内容や単位の取得、休学・退学・転学など、手続きや制度についての一般的なことから、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまで、多岐にわたった。また、生活に関わる相談には、奨学金の応募情報や、宿舍の確保、在留資格の延長・変更手続きなど、毎年多数寄せられるもののほか、生活用品の入手方法や医療機関の受診についてのものなどがあり、これらの質問や相談のなかには即答、解決することがむずかしいものもあった。また少数ではあるが、進路や人間関係などについての相談が寄せられることもあった。このような場合には、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対処する、3. 助教が参加する「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」（留学交流に携わる学内の教職員で組織、年 4 回定例ミーティング開催）を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方に対応している。

② 部局間協定校が増加したこともあり、今期は海外協定校への留学に関する相談が増加した。本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図るとともに、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。

2. 年間行事

留学生の日本での生活の充実を目的に、例年どおり、以下の行事を開催した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション（4 月、10 月）
- ・チューター懇談会（5 月、11 月）
- ・新歓バス旅行（2010 年度：4 月 30 日くらしの今昔館、天満天神繁盛亭、2011 年度：5 月 2 日姫路文学館、姫路城）
- ・ことばの教室（2010 年度：中国語、2011 年度：英語）
- ・日本の芸能鑑賞
- ・親睦パーティー（12 月）
- ・着物体験教室（2011 年度 12 月）

これらの行事には、留学生同士だけでなく、留学生と日本人学生・教職員との交流の場となるものもあり、学内での国際交流を深める機会となっている。



着物体験教室 (2011年12月)



バス旅行 (2011年5月)



親睦パーティー (2011年12月)



ことばの教室 英会話 (2010/2011年)

3. その他の留学生支援活動

1. 新規入学の留学生には同じ研究室の学生をチューターとして配置し、留学生が日本での学生生活になじむための支援活動となるように、新規に採用されたチューターを対象に、説明会を実施している。また、学位論文執筆者には、日本語の添削を目的とする論文添削チューターを配置し、英語対応機種を含む貸出用ノートパソコンを常備するなど、執筆活動を支援した。

2. 国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語・英語プログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、海外留学オリエンテーションなどへの参加者を募るとともに、留学生に学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、また必要に応じて申込み手をサポートしている。さらに、適切と判断される各種調査研究や地域団体の企画への参加要請に応じて、留学生、在学生に当該企画への参加を促している。

3. エラスムス・ムンドゥス・プログラムや日本語超短期プログラムなど、研究科の設置する国際交流プログラムについて、関係部門や事務部と連携しつつ、その計画と実施をサポートした。

4. 協定校をはじめ、海外の研究教育機関への留学を希望する学生に関係情報を提供するとともに、応募書類の作成補助などの支援活動を行った。

4. 広報活動

研究科の実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流ニューズレター』を年1回刊行した(1号、2号)。

(西田充穂)

客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

2010年度の外国人招へい研究員は12名（新規9名、継続3名）、他に外国人招へい教員1名を受け入れた。出身国の内訳は中国（6名）、韓国（5名）、オランダ（1名）、タイ（1名）。受入れ分野は、考古学（1名）、日本文学（1名）、中国文学（3名）、国語学（2名）、日本語学（2名）、美学（1名）、音楽学（1名）、美術史学（2名）。

2011年度の受入れは15名（新規7名、継続8名）。出身国は中国（5名）、韓国（5名）、アメリカ、イスラエル、スウェーデン、ドイツ、ハンガリー（各1名）の7カ国。受入れ分野は、哲学哲学史（1名）、日本学（1名）、西洋史学（2名）、考古学（1名）、中国文学（2名）、国語学（2名）、日本語学（2名）、音楽学（2名）、演劇学（1名）、美術史学（1名）。

2. 教員の海外研究活動

2010年度の外国出張は33カ国・地域へ延べ118名。訪問国・地域の内訳は、アイルランド2件、アメリカ13件、イギリス16件、イタリア2件、インド2件、オーストラリア5件、オーストリア3件、オランダ1件、韓国14件、シンガポール1件、スウェーデン4件、スペイン2件、スリランカ1件、タイ2件、台湾18件、チェコ3件、中国14件、デンマーク2件、ドイツ15件、トルコ1件、ハンガリー1件、フィンランド4件、ブータン1件、ブラジル1件、フランス7件、フィンランド1件、フランス6件、ベトナム3件、ペルー1件、ポーランド1件、メキシコ1件、ルーマニア1件、ロシア1件。海外研修は8カ国へ10名。韓国3件、中国3件、シンガポール2件、アメリカ1件、イギリス1件、イタリア1件、ドイツ1件、ベルギー1件。

2011年度の外国出張は27カ国・地域へ延べ118名。訪問国・地域の内訳は、アメリカ10件、イギリス15件、イタリア4件、インド1件、オーストラリア2件、オーストリア2件、カナダ2件、韓国22件、ギリシア1件、スイス1件、スウェーデン1件、スペイン1件、タイ1件、台湾11件、チェコ1件、中国15件、ドイツ10件、トルコ2件、ハンガリー1件、フランス6件、ベトナム1件、ポルトガル1件、マレーシア1件、メキシコ2件、モンゴル2件、ルーマニア1件、ロシア1件。海外研修は7カ国・地域へ18名。韓国3件、中国3件、イギリス2件、イタリア2件、エストニア2件、台湾3件、ドイツ3件。

留学状況および留学生の受入れ状況

1. 留学状況

2010年度の留学等による国外の研究機関への派遣者数は、全27名（休学事由としての「留学」を含む）。このうち、交流協定による派遣は7カ国へ11名（部局間交流協定校への派遣は1名）。在籍区分別では博士後期課程4名、博士前期課程2名、学部5名。派遣国の内訳は、フランス3名（博士後期課程3名）、イギリス2名（学部2名）、ドイツ2名（博士前期課程1名、博士後期課程1名）、オーストリア1名（博士前期課程）、アメリカ1名（学部）、フィンランド1名（学部）、ベルギー1名（学部）。休学中に留学、海外渡航、海外研修を行ったものは17名。博士後期課程11名、博士前期課程4名、修士課程1名、学部1名。派遣国は13カ国・地域。内訳は、フランス4名（博士後期課程2名、博士前期課程2名）、イギリス2名（博士後期課程1名、学部1名）、アメリカ1名（博士後期課程）、イタリア1名（博士後期課程）、インドネシア1名（博士後期課程）、オーストリア1名（博士後期課程）、オランダ1名（修士課程）、カナダ1名（博士後期課程）、ドイツ1名（博士後期課程）、フィリピン1名（博士前期課程）、ベルギー1名（博士前期課程）、台湾（博士前期課程）、中国1名（博士後期課程）。このほか、海外短期派遣プログラムへの参加者は8名。タイ1名（博

士後期課程)のほか、オランダ5名、イギリス1名、オーストラリア1名へはいずれも学部生の参加であった。

2011年の留学等による国外の研究機関への派遣者数は43名。このうち、交流協定による派遣は8カ国・地域へ12名(部局間交流協定校への派遣は4名)、交換留学以外での留学は、5カ国へ8名。在籍区分別では博士後期課程9名、博士前期課程7名、学部5名。派遣国・地域の内訳では、イギリス5名(博士後期課程3名、博士前期課程1名、学部3名)、アメリカ4名(博士後期課程2名、博士前期課程1名、学部1名)、ドイツ4名(博士後期課程1名、博士前期課程1名、学部1名)、オーストリア2名(博士前期課程2名)、カナダ1名(博士前期課程)、グルジア1名(博士後期課程)、台湾1名(博士後期課程)、フィンランド1名(学部)、フランス1名(博士後期課程)、ベトナム1名(博士前期課程)。休学中に留学、海外渡航、海外研修を行ったものは22名。博士後期課程10名、博士前期課程1名、修士課程3名、学部8名。派遣国は15カ国。内訳は、アメリカ3名(博士後期課程2名、学部1名)、イギリス2名(博士後期課程1名、学部1名)、中国2名(博士後期課程2名)、フランス2名(博士後期課程1名、博士前期課程1名)、イタリア1名(学部)、インドネシア1名(博士後期課程)、カナダ1名(博士後期課程)、韓国1名(博士後期課程)、タイ1名(博士後期)、ドイツ1名(修士課程)、ニュージーランド1名(学部)、フィリピン1名(学部)、ベトナム1名(修士課程)、ペルー1名(学部)、マリ共和国1名(学部)、渡航先未記載2名(修士課程1名、学部1名)。

短期語学研修への参加者は学部生2名で、研修先はオランダ、オーストラリア、1名ずつであった。

2. 留学生の受入れ状況

韓国・中国・台湾からの留学生が圧倒的多数を占める傾向が続いている。

2010年度の受入れ留学生総数は135名(年間延べ数。男45名、女90名)、29カ国・地域からの留学生を受け入れた。在籍区分別では、博士後期課程48名(3年34名、2年6名、1年8名)、博士前期課程・修士課程17名(2年9名、1年8名)、学部生9名(4年2名、3年2名、2年3名、1年2名)、研究生31名(研究科9名、学部22名)、特別聴講学生30名(研究科9名、学部21名)。文学部・文学研究科以外へのプログラム参加者については、OUSSEP11名、Maple4名(いずれも学部生)の受け入れを担当した。

文学部・文学研究科に在籍した留学生の出身国・地域別の人数は、韓国44名、中国37名、台湾8名、アメリカ7名、ロシア6名、タイ3名、インドネシア、オランダ、スペイン、ドイツ、フランス、ラトビア、ルーマニアから各2名、アルゼンチン、イギリス、イスラエル、イタリア、インド、ウクライナ、カナダ、グルジア、スロベニア、チェコ、トルコ、バングラディッシュ、ブラジル、ブルガリア、ベルギー、マレーシアから各1名。

2011年度の受入れ留学生総数は130名(年間延べ数。男40名、女90名)、28カ国・地域からの留学生を受け入れた。在籍区分別では、博士後期課程39名(3年23名、2年8名、1年8名)、博士前期課程・修士課程20名(2年9名、1年11名)、学部生8名(4年2名、3年3名、2年2名、1年1名)、研究生32名(研究科5名、学部27名)、特別研究学生4名(部局間交流協定利用1名)、特別聴講学生27名(研究科10名(部局間交流協定利用2名)、学部17名)。このほかに、OUSSEP11名、Maple8名(部局間交流協定利用6名)の受け入れに関わった。

文学部・文学研究科に在籍した留学生の出身国・地域別の人数は、中国42名、韓国31名、台湾9名、アメリカ8名、ドイツ6名、ロシア4名、インドネシア3名、イタリア、インド、オランダ、タイ、フランス、ラトビアから各2名、アルゼンチン、ウクライナ、オーストラリア、カナダ、スペイン、スロベニア、チェコ、トルコ、バングラディッシュ、ブラジル、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、マレーシア、ルーマニアから各1名となっている。

留学生の博士学位取得

2010年度は、比較文学3名、日本語学1名の計4名が、2011年度は日本学3名、国語学1名、英米文学1名、日本語学4名の計11名が博士(文学)の学位を取得した。

(西田充穂)

ここ数年来変わらぬことであるが、文学研究科では、教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

* コメントは、原則として2010年度および2011年度のデータに関するものであるが、『年報2010』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。

1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
件数	66	69	89	92	94	108
増減	1.03	1.05	1.29	1.03	1.02	1.15
金額(千円)	146,100	138,680	182,820	157,090	161,560	181,930
増減	0.96	0.95	1.32	0.85	1.03	1.13
科研費予算総額(億円)	1,895	1,913	1,932	1,970	2,633	2,566
増減	1.01	1.01	1.00	1.01	1.34	0.97

本表には表示されていないが、2004年度、2005年度において横ばいであった科学研究費の取得件数は、2006年度から上昇に転じ、2010・2011年度においても増加し続けている。ただし2010年度より科研費全体の予算総額が拡大したものの、本研究科において取得された科学研究費総額はほとんど伸びなかったが、2011年度には、予算総額が2010年度より微減したにもかかわらず、本研究科の取得金額は増大している。全体としての文学研究科における件数と取得総額の増加は、申請者の努力の反映であると考えられる。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
特定領域研究件数	2	2	3	3	1	0
同金額(千円)	9,100	9,000	18,200	16,900	7,300	0
基盤研究(A)	4	3	4	5	4	8
同金額(千円)	34,200	23,700	42,700	38,100	37,600	58,600
基盤研究(B)	18	17	18	14	14	14
同金額(千円)	61,600	61,100	63,500	44,400	50,400	44,400
基盤研究(C)	19	25	37	32	31	31
同金額(千円)	21,700	25,500	28,100	34,700	27,600	29,600

基盤研究(A)は、2010年度までの取得数は4・5件ほどであったが、2011年度には8件に倍増しており、高い水準を維持している。これに対して、特定領域研究は2006年度以降、毎年数件ほどは確保していたものの、2011年度にはゼロに転じた。また基盤研究(B)は、2009年度にかけて件数、金額とも減少に転じた傾向が、2010・2011年度もそのまま継続している。このほか、基盤研究(C)については、2009年度以降、件数は減少することなく安定しているが、金額ベースの総計では2010・2011年度ともに、2009年度の額を大きく下回っている。科研費の取得件数や総金額の増減については、短期的に見て判断してもあまり意味はない所はあるが、特定領域研究の取得に向けた努力は、個々の教員にすべて依存するのではなく、文学研究科全体の問題として取り組むべき課題である。

2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金もひきつづき極めて重要である。また、研究拠点形成費等補助金など近年始まった助成金制度や、各種財団などからの奨学寄付金も積極的に申請・受給している。この中には大学院生が取得しているものもあるが、その件数は2010・2011年度に関しては、かなり減少した。ただし、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。さらに、2009年度から開始された組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(OVC)により、また2010年度から頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラムが新たに採択されたことにより、院生らが若手教員やポストとともに海外調査に従事できる機会が一挙に拡大したことも考慮しなければならないであろう。なお2011年度より新たに国宝重要文化財等保存整備補助金による事業が始まっている。

種類	件数と金額	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
21世紀COE	件数	1	—	—	—	—	—
	金額(千円)	76,670	—	—	—	—	—
グローバルCOE	件数	—	1	1	1	1	1
	金額(千円)	—	8,830 ¹	4,300 ¹	2,400 ¹	3,400 ¹	1,050 ¹
組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(OVC)	件数			—	1	1	1
	金額(千円)				936	28,697	30,558
優秀若手研究者海外派遣事業	件数			—	1	—	—
	金額(千円)				4,722	—	—
研究拠点形成費等補助金(若手研究者養成費) ²	件数	1	0	—	—	—	—
	金額(千円)	18,792	0	—	—	—	—
研究拠点形成費等補助金(海外先進研究実践支援) ³	件数	2	2	1	—	—	—
	金額(千円)	4,153	5,552	2,620	—	—	—
研究拠点形成費等補助金(海外先進教育実践支援) ³	件数	0	1	—	—	—	—
	金額(千円)	0	10,000	—	—	—	—

¹ 文学研究科教員獲得分

² 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

³ 大学教育の国際化推進プログラム

種類	件数と金額	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
頭脳循環を活性化する 若手研究者海外派遣 プログラム	件数	—	—	—	—	1	1
	金額(千円)	—	—	—	—	11,574	23,797
国宝重要文化財等 保存整備補助金	件数	—	—	—	—	—	1
	金額(千円)	—	—	—	—	—	15,000
各種財団などからの 研究助成金	件数	4	9	7	8	6	5
	金額(千円)	8,200	10,270	11,532	6,663	4,930	3,243
大学院生の獲得して いる研究助成金	件数	13	27	17	27	22	17
	金額	4,501千円 49,417 USドル 15,590 ポンド 5,600 ユーロ 45,000 コルナ 45,000 デンマーク クローネ	9,331千円 40,262 USドル 10,290 ユーロ 21,180 フラン 11,545 ポンド 18,463 ノルウェー クローネ 7,260 ズウォティ 135,000 コルナ	17,297 千円 13,000 USドル 10,920 フラン 5,220 ユーロ	21,145 千円 300,000 台湾ドル 3,900 ユーロ	10,255 千円 2,000 豪ドル 8,100 ユーロ	7,572千円
受託研究	件数	3	2	2	1	1	1
	金額(千円)	15,450	10,950	10,976	2,200	1,950	1,870

概要

本研究科は、2007年8月より、人間科学研究科と共同でグローバル COE プログラムに取り組んでいる。概要は次の通りである。

- **プログラム名** 「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」(英語名:A Research Base for Conflict Studies in the Humanities)
- **担当部局** 人間科学研究科、文学研究科、コミュニケーションデザイン・センター、グローバルコラボレーション・センター
- **拠点リーダー** 小泉 潤二 (大阪大学理事・副学長)
- **期間** 2007年8月採択 (5カ年計画)
- **交付金額 (文学研究科分)** 2010年度 3,400千円
2011年度 1,050千円

事業推進担当者(2010～2011年度)

小泉潤二 (拠点リーダー、理事・副学長)、栗本英世 (拠点サブリーダー兼事務局長、人間科学研究科)、工藤眞由美 (文学研究科)、渋谷勝己 (文学研究科)、園府寺司 (文学研究科)、伊東信宏 (文学研究科)、三谷研爾 (文学研究科)、富山一郎 (文学研究科)、金水敏 (文学研究科)、中岡成文 (文学研究科)、辻大介 (人間科学研究科)、中川敏 (人間科学研究科)、池田光穂 (コミュニケーションデザイン・センター)、志水宏吉 (人間科学研究科)、ヴォルフガング・シュヴェントカー (人間科学研究科)、友枝敏雄 (人間科学研究科)、牟田和恵 (人間科学研究科)、中村安秀 (人間科学研究科)、平沢安政 (人間科学研究科)、渥美公秀 (人間科学研究科/コミュニケーションデザイン・センター)、鷲田清一 (総長: 2011年8月まで)、小林傳司 (コミュニケーションデザイン・センター)

プログラムの目標・活動方針

本拠点は、「グローバルな次元におけるコンフリクト」という問題について実践的研究を推進し優秀な人材を育成する。このため、人文科学の諸分野ばかりでなく、社会科学の一部分野を連結し協働することが必要である。中心となるのは人類学の諸分野 (文化人類学、政治人類学、社会人類学、経済人類学、医療人類学) である。これに、言語学 (社会言語学、言語接触論、言語類型論、歴史言語学)、哲学 (とくに臨床哲学)、芸術学 (とくに越境美術論) が中心的な役割を果たす。

グローバルな問題についてさらに広い基礎的展望を得るために、歴史学 (植民地史)、社会思想史、社会学 (グローバル研究)、科学技術社会論、現代文明学、文学 (越境文学) が加わる。このほか、グローバルな取り組みにおける実践的分野として、国際協力学、多文化教育学、臨床教育学、人間開発学、地域共生論、人間の安全保障論を加えている。グローバルなコンフリクトという問題は、単に研究されるべき対象ではなく、研究と実践的取組みとの間に常に相互のフィードバックが形成されるべきである。

以上にあげた分野は多彩である一方、「グローバルな次元におけるコンフリクト」というテーマのもとに緊密に収斂している。

本プログラムは、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」の成果に基づいて、大阪大学に「コンフリクトの人文科学」の国際的な研究教育拠点を形成することを目的とする。この目的のために、前項で述べた人類学、言語学、哲学などを中心とし、歴史学や社会学ほかの基礎的分野に加えて国際協力学、人間開発学、教育学、人間の安全保障論等の実践的分野が協働して、研究教育を推進する体制を構築する。

社会的・文化的・民族的な対立と対抗関係の問題を分析し、その問題になんらかのかたちで対処することは、現代のグローバル世界における最も緊要な課題の一つである。東西の冷戦構造が崩壊した 1990 年代以降、この課題は先鋭化する

と同時に質的にも変化した。国家間、ブロック間、あるいは大イデオロギー間の比較的わかりやすい政治対立の図式から、きわめて多数の社会的・文化的・民族的集団が互いに複雑に絡まりあい、ここでは集団自身が急速に変化していくような流動的状况が生まれる中で、文化的、宗教的、社会的、経済的なレベルを含む様々な対立が様々に生起している。このように複雑化し流動化する対立の状況を理解するためには、現地調査に基づく綿密な、あるいは「厚い」(thick) 現実理解が必須であり、そのような対立を減じる方策があるとするれば、それはそのような理解を前提としなければならない。これが、クリフォード・ギアツの解釈人類学が教えるところである。

国家や社会や文化など、グローバル社会を構成する部分要素が相互の関係を緊密化したことにより、そうした関係の実態を研究者が分析することさえ困難であるような状況がもたらされている。そこに生起するコンフリクトの質も変化した。従来よく知られてきた政治的軍事的コンフリクトや経済利害をめぐるコンフリクトばかりでなく、それらに加えて、民族あるいはエスニックなコンフリクト、言語を基盤とするコンフリクト、芸術の所有や越境やアイデンティティに関するコンフリクト、各種イデオロギーのコンフリクト、宗教的信仰や実践に由来するコンフリクト、歴史あるいは歴史理解をめぐるコンフリクトなどが、現代世界の最前面でますます目立つようになっている。つまり「価値」をめぐるコンフリクトである。

この種のコンフリクトを理解し、それに対処する現実の方策を考えるためには、社会科学あるいは政治経済的なアプローチに加えて、人文科学的なアプローチによる研究が必要であることが明らかになりつつある。そうした研究を展開できる拠点を、国際的な協力体制のもとに構築することが、本グローバル COE プログラムの目的である。

本拠点の研究上のアプローチは以下のような特徴を持つ。

1. 対立とコンフリクトの状況について個々の事例ごとに現実を経験的かつダイナミックに把握する。
2. 個別に生きる人びとの視点と実践を現在進行形の中で臨床的に捉える。そのためにフィールドワークに基づいて資料収集をはかる。
3. そうした資料に基づいて、分析のための概念装置の洗練と理論構築を進める。その際個別の学問分野に閉じることなく、関係しうる学問分野を広くリベラルに展望する。
4. 概念化と理論化は、欧米中心主義的な「歴史の終焉」や「文明の衝突」などに還元するのではなく、新しい枠組みによる。そうした枠組みを求めて、欧米や欧米外の研究者を含む国際的な協働を実現する。
5. そのような協働に基づいて、問題への実践的取り組み（対立やコンフリクトの解消ではなく軽減に向かうような現実的な取り組み）を、理解と対話の中に目指す。（プログラム HP : <http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/about.html> より）

主要な成果

1. 出版物

機関誌『コンフリクトの人文科学』全 5 号をはじめとし、特別号として国際会議の報告書である英文論文集、最終年度には、5 年間の成果のとりまとめとして、叢書『コンフリクトの人文科学』全 4 巻を大阪大学出版会から刊行した。

ジャーナル『コンフリクトの人文科学』

編集：大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」

発行：大阪大学出版会

第 1 号：染田秀藤（編集委員長）2009 年 3 月 15 日発行

第 2 号：染田秀藤（編集委員長）2010 年 3 月 15 日発行

第 3 号：栗本英世（編集委員長）2011 年 3 月 25 日発行

第 4 号：富山一郎（編集委員長）2012 年 1 月 10 日発行

第 5 号：富山一郎（編集委員長）2012 年 3 月 25 日発行

Conflict Studies in the Humanities Special Issue: Migration and Identities: Conflict and the New Horizon.

Edited by Junji Koizumi and Mayumi Kudo, 2011/3.

叢書「コンフリクトの人文学」(全4巻)、2012年3月30日刊行

監修：小泉潤二・栗本英世

発行：大阪大学出版会

1. 『コンフリクトから問う——その方法論的検討』 富山一郎・田沼幸子編
2. 『コンフリクトと移民——新しい研究の射程』 池田光穂編
3. 『競合するジャスティス——ローカリティ・伝統・ジェンダー』 牟田和恵・平沢安政・石田慎一郎編
4. 『コンフリクトのなかの芸術と表現——文化的ダイナミズムの地平』 圀府寺司・伊東信宏・三谷研爾編

2. イベント

本拠点は、5年間の事業期間中に、84回の「コンフリクトの人文学セミナー」、15回の国際シンポジウム・ワークショップ、多数の国内シンポジウム・ワークショップを主催した。以下に一部を紹介する。

- ・国際研究ワークショップ「空間とガバナンス」、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン(希望の家)、2012/1/14-15
- ・公開参加型ワークショップ「民魂の音を聴く——東欧ユダヤ民族音楽〈クレズマー〉と現代世界」、大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ、2011/11/27
- ・参加型公開研究イベント：共有の空間をつくる実験『「ちっちゃい火」を囲む』、大阪大学豊中キャンパス浪高庭園、2011/11/25
- ・「コンフリクトの人文学」セミナー第78回「アフガニスタンで平和を創るということ」、大阪大学大学教育実践センター、2011/10/18
- ・International Workshop OSAKA-PRAHA 2011: Between “National” and “Regional” Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, Faculty of Philosophy Charles University Prague, 2011/3/21-22
- ・GCOE 国際シンポジウム「コンフリクトを軽減する対話と実践——人文治療学の挑戦」(Global COE Program International Symposium: “Dialogue and Practice Reducing Conflicts: Challenge of Humanities Therapy”), 大阪大学待兼山会館, 2010/2/17
- ・国際シンポジウム「中欧の詩学——ハンガリーの作家エステルハージ・ペーテルをむかえて」、大阪大学21世紀懐徳堂, 2009/2/8
- ・国際シンポジウム「移動とアイデンティティ——コンフリクトと新たな地平」(Migrações e Identidades: Conflitos e Novos Horizontes), 大阪大学中之島センター, 2008/8/5-7 (サンパウロ大学都市カマルゴ・グアルニエーリ講堂, ブラジル, 2008/8/24-26)

2008年4月より、正式にエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)の域外協定校としての活動を始めたが、2011年10月からはヨーロッパ域外の full partner として、他の3つの域外校とともに当該プログラムの運営により大きく関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関の共同と流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパ域外の大学がパートナーとなって参加することによって、世界的な規模で展開する最先端教育プログラムであり、本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム域外協定校となったものである。

国際連携室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門(EM部門)は毎年 RA2 名を受け入れ、プログラム運営を担当している(派遣学生および教員の宿舎の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会・面接選考、本学からの派遣教員の募集等)。10月~12月の3ヶ月間同コンソーシアムの学生5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目(2010年度は「比較社会環境論」「現代日本思想論」「現代日本文学論」「比較芸術論」「日本現代史」)を10回にわたって開講し、15ECTS(10単位相当)を認定している。同プログラム英語授業には他の留学生や日本人学生も参加し、双方向的な授業を行うとともに、各授業においてフィールドワークを実施している。同時期に毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず密度の高い教育効果があげられている。同プログラムの4校の域外協定校の中でも常に高い評価を得ており、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最も多い域外パートナー校となっている。また同プログラムに基づき、2010年度は本学学生1名を奨学生としてユーロカルチャー・コンソーシアム大学に派遣するとともに、本学教員3名がそれぞれ3週間、6ヶ月、4週間の期間、同コンソーシアム大学で教育・研究に携わった。また11月にはストラスブールで開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員1名が参加し、full partner として当該プログラムに加盟し直すための準備を進めた。

2011年度もエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)のパートナー校として、ユーロカルチャー・コンソーシアム大学から5名の学生、および1名の教員の受入れ、本学学生1名の派遣を実施した。本年度に関しては、ユーロカルチャーのEUコミッションへのプログラム継続の申請が却下されたことから、財政的な問題があり、交流の規模は若干縮小された。本研究科で開講するエラスムス・ムンドゥス英語授業に関して、前年度と同様に「世界の中の現代日本」という総タイトルのもと、「比較芸術論」「現代日本文化論」「日本現代史」「現代日本思想論」「現代日本文学論」を開講した。プログラム主催者および受講生の要望を踏まえ、ヨーロッパと日本の関係に力点を置くよう本年度も配慮した。また6月にはドイツ・ゲッティンゲンで開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議および Intensive Program (IP)に本研究科教員2名が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

(岡田禎之)

2009年度に本研究科が申請した「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」An overseas visiting program complex for multilingual and multicultural studies (略称：OVCプログラム)は、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採択され、2010年2月11日から2013年2月10日にかけての3年間で、総数約150名の若手研究者等(講師、助教、ポスドク、大学院生、学部学生)を、渡航費・滞在費を給付の上、調査・研究のため海外に派遣するものである。

本プログラムは、異文化が混在し多文化化する現代世界において、真に国際的視野を有する若手研究者の育成を目的とし、世界の様々な国、地域で文献調査、フィールドワーク等を実施するとともに、国際的な学会・研究会等で成果を公表することをめざしている。

本プログラムは、A 横断的研究視察、B 共同プロジェクト、C 個人リサーチの3つの派遣タイプより構成されている。

A 横断的研究視察

海外での調査経験のない学部学生・博士前期課程(修士課程)在籍者を主な対象とし、各視察5名程度を募集する。およそ1週間にわたって、教員の引率・指導のもとに、各図書館・資料館の概要・利用方法等を学ぶとともに、参加者の研究テーマに基づき、資料調査を実践する。

2010年度 派遣先：2カ国(イギリス、アメリカ合衆国) 派遣者：10名(PD1名、博後2名、博前・修士5名、学部2名)

2011年度 派遣先：1カ国(フランス) 派遣者：5名(博前・修士5名)

B 共同プロジェクト

引率教員の指導、および助教、ポスドクの補佐を受けつつ、海外の大学等と共同でワークショップ、インターンシップ、フィールドワーク等をおよそ1週間にわたって実施する。各プロジェクトごとに成果を報告書として公開する。

2010年度 派遣先：2カ国(タイ、チェコ) 派遣者：9名(PD2名、博後5名、博前・修士1名、学部1名)

2011年度 派遣先：2カ国(台湾、イタリア) 派遣者：11名(PD2名、博後5名、博前・修士2名、学部2名)

C 個人リサーチ

博士後期課程在籍学生、ポスドク、助教、講師を対象とし、海外研究機関等で研究・資料調査・フィールドワーク等を実施する。大学院生は15日間、若手研究者(ポスドク、助教、講師)は60日間以上の日程で、毎年合計30名程度を派遣する。国際学会等での成果発表をめざしている。

2010年度 ①若手研究者 派遣先：8カ国(タイ、フランス、ドイツ、アイルランド、イタリア、ポーランド、イギリス、アメリカ合衆国) 派遣者：14名(助教1名、ポスドク13名)；②大学院生(博後) 派遣先：8カ国(中国、台湾、フランス、ドイツ、オランダ、ロシア、カナダ、アメリカ合衆国) 派遣者：11名

2011年度 ①若手研究者 派遣先：8カ国(中国、台湾、チェコ、ドイツ、イタリア、ノルウェー、イギリス、アメリカ合衆国) 派遣者：19名(講師2名、助教6名、ポスドク11名)；②大学院生(博後) 派遣国：5カ国(中国、台湾、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国) 派遣者：12名

2010年度は14カ国に総数44名、2011年度は9カ国に総数47名を派遣した。派遣者は研究成果の報告書を提出し、年数回実施している報告会で研究分野を超えて意見交換を行うとともに、国際的な学会や研究会、学術誌において外国語で研究成果の発表を行っている。

(和田章男)

2010年度に本研究科が申請した「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平」Art and Design in Asia - from British and Japanese perspectives - (略称：頭脳循環プログラム)は、日本学術振興会の「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に採択され、2010年10月15日から2013年3月31日までの約2年半で、計6名の若手研究者等(准教授、ポスドク、大学院生)を、渡航費・滞在費を給付の上、調査・研究のためロンドンに長期派遣している。また、計6名の特任研究員が学内で関連研究に従事している(同プログラムは2011年度以降「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」として実施されている)。本プログラムは、ロンドンの関連3研究機関と提携し、国際共同研究ネットワークの核となる優れた研究者を育成し、我が国の学術の振興を計ることを目的として実施され、本学文学研究科から若手派遣者を、本研究で日本と対をなす拠点国であると同時に、学術研究ネットワークの世界的中心の一つであるイギリス(ロンドン)に派遣し、さまざまな課題に挑戦する機会を提供する取り組みである。以下の3研究機関に各2名を約1年間時期を変えて派遣し、継続的に研究を推進している。

- ◇ 王立美術大学(The Royal College of Art, London)：イギリスの美術教育の最高学府にあたる大学院大学で、1837年創設の官立デザイン学校を前身とし、その歴史からも、アートとデザイン双方の研究の世界的拠点となっている。下記のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、自然史博物館、科学博物館、王立音楽大学、ロイヤル・アルバート・ホールなどが集中する、ロンドンの文教地区、サウス・ケンジントンの一角をなしている。
 - ◇ ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(The Victoria and Albert Museum, London)：上記官立デザイン学校の教育用コレクションや世界初の万博である1851年ロンドン博出展品等を基礎に創設されたミュージアムを前身とする、大英博物館と並ぶ大規模な美術館で、別称National Museum of Art and Designが示すように、本研究の対象であるアートとデザインの研究部門がともに充実した、国立の研究機関である。国立美術図書館(National Art Library)を併設し、イギリスのアートとデザインの研究には不可欠の美術館・図書館でもある。
 - ◇ ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(The School of Oriental and African Studies, University of London)：1916年に創設された、アジア・アフリカ研究の世界的拠点の一つで、SOASとして知られる。上記の2機関が全世界を対象としながらもアートとデザインに特化しているのに対して、SOASはアジア・アフリカに特化しているが、人文・言語・社会の全般に及ぶ総合的研究機関である。ロンドン大学に属し、南に大英博物館、北に大英図書館がある、サウス・ケンジントンと並ぶロンドンの文教地区、ブルームズベリーに位置する。
- これら3研究機関と共同で、以下の3つの国際ワークショップをロンドンで開催している(第3回は開催予定)。

- 第1回国際ワークショップ(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館)2011年7月22-23日
「New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, Chronologies, Methodologies」をテーマに開催。
- 第2回国際ワークショップ(ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院)2012年3月2-3日
「Approaching Art and Design from Asia: Questions of Method, Between Art and Design」をテーマに開催。
- 第3回国際ワークショップ(王立美術大学)2013年2月22日
「Global Perspectives on Colour」をテーマに開催予定。

頭脳循環プログラム「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平」の研究成果は、主担当及び担当研究者、派遣研究者、特任研究員の計15名が国際会議や国内の諸学会で個別に発表するとともに、研究報告集としてもまとめられ、全体を総括する国内研究報告会も2013年3月19日に文学研究科で開催される。また、2016年を目指して、本研究実施の背景の一つであった百科事典「The Encyclopedia of Asian Design」全4巻(英文)の刊行準備がロンドンで進められており、そこにも派遣研究者や特任研究員は協力し、本研究の社会的かつ国際的還元が行われている。

(藤田治彦)

1. 懐徳堂研究センターの目的と意義

2009年5月、旧「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懐徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懐徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

このうち、(1) の調査・研究およびデジタルコンテンツの制作は、本センターの基幹事業であり、当該期間中にも大きな活動成果を上げている（詳細は下記の2参照）。また(2)の『懐徳堂研究』は、旧来のセンターが刊行してきた『懐徳堂センター報』を継承しつつ、装いを新たに創刊することになったものである。『懐徳堂センター報』は、センターの活動報告と論考で構成されており、論考はいずれも学術的に高い価値を持つものであったが、「センター報」という名称が、広報誌や内部雑誌ではないのかという印象をも与えてきた。そこで、『懐徳堂研究』は「研究」を全面に押しだし、全国で唯一、懐徳堂の研究を専門に取り扱う学術雑誌として創刊されたのである。

2. デジタルコンテンツの制作

センターの活動の特徴づけるものの一つにデジタルコンテンツの制作がある。2010年度～2011年度にかけては、次のようなコンテンツを制作し、懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)」に公開した。

- ・2010年12月：「聖賢扇」……中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたもの。原本は失われて存しないが、文政3年（1820）に履軒の子柚園が写したものが残されており、その扇面の記載は、『懐徳』17号付録の吉田鋭雄「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」に翻刻されている。資料の経年劣化により、展示公開できない状況にあったが、資料の修復が行われ、同時にデジタルコンテンツとして公開した。この資料は、表に記された聖賢の名と裏に書かれた戯評とを対照してみても初めてその意義が分かるが、このコンテンツでは、クリック一つで、その表裏を容易に対照することができる。
- ・2011年1月：「越俎弄筆」……中井履軒が記した人体解剖図説。自序に続き、解剖の手順に沿って十五葉の人体解剖図が記され、その図に続き、各々について、漢字片仮名交じりで解説文が記されている。このデジタルコンテンツでは、全ページを閲覧できるのはもちろん、細部を拡大して見ることもできる。さらに、標題、印記、注記、重要な語句などには閲覧者のクリックを促す赤枠を表示し、それをクリックすると解説文が表示される仕組みとなっている。つまり、デジタルブックに辞書機能が搭載されているのである。
- ・2012年3月：懐徳堂文庫蔵版木「画本大阪新繁昌詩」……『画本大阪新繁昌詩』は明治8年（1875）に出版された明治初期における大阪の文明開化の様子を記した画入りの詩集。大阪城、造幣場、大阪府庁などの大阪を代表する建造物から、庶民生活を一変させた鉄道・蒸気船・郵便・ガス灯にいたるまで、文明開化の新風がもたらした大阪の変化が細かく描写されている。懐徳堂文庫にはこの『画本大阪新繁昌詩』の印刷原版である版木が保存されている。今回、これまであまり知られることのなかった版木をWEB上で公開した。彫りの詳細を閲覧でき、この版木から刷られたと思われる紙面と対照することができる画期的なコンテンツである。

3. 諸活動

(1) 刊行物の発刊……2010年度の活動成果として、『懐徳堂研究』第2号、『三木家寄託資料調査報告書』、ニューズレター第2号を刊行した。また、2011年度の活動成果として、『懐徳堂研究』第3号、ニューズレター第3号を刊行した。この内、「三木家寄託資料」とは、兵庫県福崎町の旧大庄屋三木家が所蔵する資料で、懐徳堂関係資料を多数含む。2004年から3年間（その後、さらに2年追加）の寄託を受けたものであり、2010年8月末で寄託を終了した資料である。報告書を作成した上で、全資料を2011年3月に返却した。

(2) 資料展示……「懐徳堂展」（2010年10月27日～12月20日、大阪大学・大阪歴史博物館・懐徳堂記念会共催、於大阪歴史博物館）開催について協力（企画・準備・展示・展示入れ替え・撤収など）した。

(3) ホームページの刷新……旧「懐徳堂センター」時代から引き継がれていたホームページを一新した。センターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懐徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーをPDFファイルで提供するなど、大幅なりニューアルを完成した（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>）。

4. 運営上の課題

2009年5月に懐徳堂研究センターが発足してから、センター実務は、センター長、研究員、職員が担当し、中期計画・年度計画、予算・決算など基本的な運営に関わることは、運営委員会（運営委員長（研究推進室長兼務）、懐徳堂研究センター長、（財）懐徳堂記念会部内運営委員幹事1名）で検討することとなった。

こうして一応の態勢は整ったが、センター長・研究員は、いずれも文学研究科教員が兼務し、職員も非常勤であることから、上記のような膨大な業務を専任で担当する人員がないという大きな問題を抱えている。

また、2011年度制作のデジタルコンテンツ『画本大阪新繁昌詩』が、2012年6月7日付け読売新聞に取り上げられるなど、センターの活動は高い学外評価を受けているにもかかわらず、センター発足以来、予算は毎年減少しており、諸活動の維持に課題を残している。

さらに、懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、ほとんど懐徳堂研究センターに委託されている。これは、図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがいないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

(湯浅邦弘)

活動の概要とその特色

2010年度の専任スタッフは寺前直人助教、2011年度の専任スタッフは中久保辰夫助教の1名である。室長として永田靖文学研究科長、兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦准教授の2名が業務を担っている。

豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、医学部や附属病院がかつて所在し、現在は大阪大学中之島センターがある大阪市北区中之島は、江戸時代の蔵屋敷が建ち並んだ場所として知られている。さらに2009年度には吹田キャンパスにおいて、遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることとなった。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が校地内遺跡の調査にあっている。

2010年度、2011年度においても吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修や新設が引き続き進行しており、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理作業をすすめ、その作業工程の一部を大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している。

現在の組織

教授 2(兼任2) 准教授 1(兼任1) 助教 1

教授：永田 靖(兼任)、福永 伸哉(兼任)

准教授：高橋 照彦(兼任)

助教：中久保辰夫

組織の活動

1. 発掘調査

2010・2011年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2010年度】

・吹田地区

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 4月16日 | 工学部E7棟等改修工事にともなう立会調査 |
| 4月16日 | 工学部フォトテクニクス新営その他にともなう立会調査(1) |
| 4月30日 | 工学部楠本会館にともなう立会調査(1) |
| 5月10日 | 工学部楠本会館にともなう立会調査(2) |
| 5月28日 | 免疫学フロンティア研究センター新営にともなう立会調査 |
| 5月31日 | 工学部フォトテクニクス新営その他にともなう立会調査(2) |
| 7月9日 | テクノアライアンス新棟関連工事その他にともなう立会調査(1) |
| 7月13日 | テクノアライアンス新棟関連工事その他にともなう立会調査(2) |
| 7月15日 | (微研) 微研本館改修工事にともなう立会調査 |
| 7月22日 | 先端研究施設整備に伴う特高変電所新営にともなう立会調査 |
| 7月22日 | テクノアライアンス新棟関連工事その他にともなう立会調査(3) |
| 7月28日 | テクノアライアンス新棟関連工事その他にともなう立会調査(4) |
| 12月15日 | 工学部E2棟等改修その他にともなう立会調査 |

- 2月11日 (蛋白研) 管路構築蛋白研管路構築にともなう立会調査
 2月14日 外灯改修にともなう立会調査 (1)
 2月23日 外灯改修にともなう立会調査 (2)
 3月18日 工学部ポンベ庫新営埋設配管にともなう立会調査
- ・豊中地区
- 9月25日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (1)
 10月1日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (2)
 10月1日 サイバーメディアセンター北側駐車場にともなう立会調査
 11月22日 学生交流棟北側外構整備にともなう立会調査
 11月22日 国際公共研究棟ボール設営にともなう立会調査
 11月22日 図書館トイレ改修にともなう立会調査
 11月22日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (3)
 12月17日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (4)
 12月21日 シグマホール改修機械設備にともなう立会調査
 12月28日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (5)
 1月19日～21日 修学館北収蔵庫試掘調査
 1月21日 大阪大学会館 (豊中イ号館) 改修その他にともなう立会調査 (6)
 2月21日 待兼山会館北ガス改修にともなう立会調査
- ・箕面地区
- 2月23日 外灯設備改修にともなう立会調査 (1)
 3月15日 外灯設備改修にともなう立会調査 (2)
 3月18日 バス停上屋取付にともなう立会調査

【2011年度】

- ・吹田地区
- 5月23日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (1)
 6月7日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (2)
 6月22日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (3)
 6月28日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (4)
 8月9日 NICT MRI 実験棟 (仮称) 工事にともなう立会調査 (1)
 8月9日 人間科学部本館改修にともなう立会調査 (1)
 8月31日 人間科学部本館改修にともなう立会調査 (2)
 9月12日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (5)
 9月20日 NICT MRI 実験棟 (仮称) 工事にともなう立会調査 (2)
 9月22日 工学部 A1 棟・E3 棟等外構工事にともなう立会調査 (6)
 10月6日 医学部立体駐車場工事にともなう立会調査
 10月26日 高圧ケーブル改修工事にともなう立会調査
 10月26日 工学部 E4 棟改修にともなう立会調査
 12月13日 人間科学部本館改修にともなう立会調査 (3)
 1月14日 (産研) 外構・テニスコート工事にともなう立会調査
 2月17日 バス停屋根の取設工事にともなう立会調査
- ・豊中地区
- 5月16日～6月17日 高機能収蔵庫新営工事にともなう発掘調査
 8月25日 豊中市水道改修にともなう立会調査

- 10月27日 NMR 実験室（理学部本館中庭）増築にともなう立会調査
- 12月16日 高圧ケーブル改修にともなう立会調査（1）
- 12月26日 高圧ケーブル改修にともなう立会調査（2）
- 12月28日 高圧ケーブル改修にともなう立会調査（3）
- 12月26～28日 新柴原口環境整備に係る試掘調査
- 2月2日 豊中保育施設新営にともなう立会調査（1）
- 2月7日 豊中保育施設新営にともなう立会調査（2）
- 2月8日 バリアフリー対策改修工事にともなう立会調査
- 3月15日 文法経道路陥没調査にともなう立会調査
- 3月15日 都市ガス管改修にともなう立会調査
- 3月15日 文法経・法経講義棟空調改修にともなう立会調査
- 3月26日 庭園灯設置にともなう立会調査（1）
- 3月30日 庭園灯設置にともなう立会調査（2）
- ・箕面地区
- 9月20日 西側敷地境界フェンス取設工事にともなう立会調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2010年度】

国立民俗博物館 2010年度博物館学習中コース研修の案内（寺前）

大阪大学総合学術博物館サイエンス・カフェ講師担当（寺前）

『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』2の刊行（寺前）

【2011年度】

21世紀懐徳堂 i-spot 講座（中久保）

21世紀懐徳堂 アカデミックッキング（中久保）

国立民族学博物館 2011年度博物館学集中コースの案内（中久保）

28史遊会（大阪府高齢者大学校・28期歴史考古学科OB）見学时、大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館展示解説（中久保）

池田郷土史学会講師（中久保）

兵庫県立須磨友が丘高等学校出張講義（中久保）

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。また、調査成果を積極的に公開するとともに、地域社会への還元をはかる。

大阪大学豊中地区に所在する待兼山遺跡は、弥生時代から江戸時代までの遺構や遺物が確認されており、これまでに多数の埋蔵文化財が出土している。すでに、これらの発掘成果については、現地説明会の実施と発見された遺構の説明板と地表表示を現地に設置し、2007年度からは総合学術博物館の常設展示において出土品を常時公開することにより、大阪大学関係者のみならず、地域住民に広く公開している。しかし、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の調査や整理作業ではこれらを学術的に解明したうえで、その成果に基づき、地域の歴史を復元することに努めたい。吹田地区に所在する山田丘遺跡の全貌を把握していくことも今後の課題である。2009年度の山田丘遺跡の発見により、またキャンパスの増加に伴い、埋蔵文化財調査室は豊中地区、吹田地区、箕面地区という三つのキャンパスにおける開発にともなう立会、試掘等に対応する必要が生じている。このような調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務となっている。

大阪大学総合学術博物館や地域の文化財関係者と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用して普及、啓蒙活動をさらに進めていく予定である。

（中久保辰夫）

組織・体制

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名（主として、セクシュアル・ハラスメントを担当）、副委員長1名（主として、アカデミック・ハラスメントおよびパワー・ハラスメントを担当）を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。

2010年度：委員会メンバー11名(女性6名、男性5名)。

2011年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

活動状況**2010年度実績**

1. 学部・大学院新生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」を新生に配布。(4月)
2. 新生と在生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：中嶋雅美さん（大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室 専門相談員）
演題：「大阪大学にはセクシュアル・ハラスメント相談室があります」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. セクシュアル・ハラスメント相談員研修会（全学）へ参加。(7月)
5. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第16回全国集会（名古屋で開催）に、研修のため委員2名が参加。(9月)
6. 教職員向け研修会を開催。講師：加藤容子さん（椙山女学園大学人間関係学部准教授） 演題：「学生支援の観点から考えるハラスメントの予防と対応について」(11月)
7. 新しいパンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめよう ハラスメント」（セクシュアル・ハラスメントに加え、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントについての記述を加えるなど、大幅に改訂）を作成。(3月)。
8. 4月より、新体制づくりに向けて、メンバーの選出および規約・申合わせの改定に関して、断続的に会議。
9. 年間相談・対処件数は0件。ただし、個人的に対処したものあり。

2011年度実績

1. 学部・大学院新生オリエンテーションで委員会活動について説明。新しいパンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめよう ハラスメント」を新生に配布。(4月)
2. 新生と在生のためのハラスメント防止対策説明会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室 専門相談員） 演題：「ハラスメントのない学生生活のために」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. 工学研究科新任者研修会にて、委員長が「ハラスメント問題の基礎知識」を講演。(5月)

5. ハラスメント相談員研修会（全学）へ委員 9 名が参加。(7 月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第 17 回全国集会（広島で開催）に、研修のため委員 3 名が参加。(9 月)
7. TA 研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10 月)
8. 教職員向け研修会を開催。講師：座古勝さん（豊中地区アカデミック・パワー等ハラスメント相談室 専門相談員 大阪大学大学院工学研究科特任教授） 演題：「大阪大学のパワー・アカデミックハラスメントの現状とその対策について」(11 月)
9. パンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめようハラスメント」改訂版を作成。(3 月)
10. 年間相談・対処件数は 1 件。他に、個人的に対処したものあり。

(舟場保之)

第 2 部

各専門分野・コースにおける

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、2012年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2010年度(2011年3月修了・卒業)および2011年度(2012年3月修了・卒業)について記す。

- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2010年度～2011年度に在籍した者が、2010年度～2011年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2010年度～2011年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。

- III. 教員の研究活動については、原則として2012年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員のものを示す。研究業績については2010年度～2011年度に発表されたものを記載する。2010年度～2011年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2010年度～2011年度にかぎらず記載する。

- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2012年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が代表者になっているもので、2010年度～2011年度の間に配分を受けたものを記す。

- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2012年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が、2010年度～2011年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

2-1 哲学 哲学史

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：上野 修、入江 幸男

准教授：舟場 保之

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
37 (哲学・思想 文化学)	6	10	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	4 (哲学・思想文化学)	2	0	0	0
2011	5 (哲学・思想文化学)	2	1	0	1
計	9 (哲学・思想文化学)	4	1	0	1

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎ゼミを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP

にアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/大学院留学生が TA として、英語によるディスカッション能力向上に向けて、有志の院生および学部生に対して指導を行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 6 号、第 7 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 41 号、第 42 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/現代思想文化学専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の〈ビデオ・メタフシカ〉から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に市民向けの記念講演会を実施する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎ゼミを開講し、専修独自のガイダンスを行うことにより、専修生の数を増やすことに成功した。/英語による授業を複数開講するとともに、大学院留学生を TA として学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/後述 (V-11) のように、当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、哲学のお題セミナーおよび新入生歓迎イベント PFB を行った。/同じく後述 (V-11) のように、院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 6 回開催した。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 6 号、第 7 号を刊行し、海外主要大学(16ヶ国、217 校。個人宛を含む)および国内主要大学(164 校)に送付した。また、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 41 号、第 42 号を発刊し、国内主要大学(164 校)に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に外国人研究者らを招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 3 回、また *handai metaphysica* 研究例会を 3 回開催した。また学内共同研究(スピノザ研究企画)として、学外の研究者も交えたワークショップを開催した。また複数のスタッフが国際学会で発表し、また院生の 1 人が国際学会で発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された〈ビデオ・メタフシカ〉から、各スタッフの授業紹介等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画として市民向けの講演会を 2 回開催した。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	1	1
2011	0	1	1
計	0	2	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

- 家高洋 「メルロ=ポンティの空間論」 2011/3
主査：上野修 副査：浜渦辰二、加國尚志
- 檜垣立哉 「瞬間と永遠 ジル・ドゥルーズの時間論」 2011/8
主査：上野修 副査：須藤訓任、小泉義之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	1(1)	1(1)	1(1)	0(0)	3(3)
2011	1(1)	0(0)	5(5)	0(0)	0(0)	6(6)
計	1(1)	1(1)	6(6)	1(1)	0(0)	9(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	2	13	0	0	15
2011	1	1	4	0	0	6
計	1	3	17	0	0	21

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

野々村梓「デカルトの物質的事物の存在証明について——『哲学原理』の証明は「第六省察」よりも妥当な証明か」『メタフシカ』第41号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 13-24, 2010/12

Luke Malik「Ullin Place's Cartesian Remnants: Identity Theory and the Lack of Animal Minds.」『待兼山論叢』第44号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 19-38, 2010/12

多田雅彦「ルイス・キャロル——構造と表面」宇野邦一・堀千晶・芳川泰久＝編『ドゥルーズ 千の文学』, せりか書房, pp.105-117, 2011/1

【2011年度】

〔博士後期〕

多田雅彦「反復者、反復そのもの、反復されるもの——ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について」『メタフシカ』第42号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 47-63, 2011/12

田中悠介「ベルクソンの身体概念と個性の問題」『メタフシカ』第42号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 65-78, 2011/12

野々村梓「デカルトにおける「能動 - 受動」概念」『待兼山論叢』第45号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-34, 2011/12

原田淳平「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与えるのか」『メタフシカ』第42号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 79-91, 2011/12

嘉目道人「討議の規則知は誰の知か」『待兼山論叢』第45号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 51-65, 2011/12

嘉目道人「事行としての自己関係性 —フィヒテ知識学の言語哲学的変換に向けて—」『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会), 第19号, pp. 85-98, 2011/11

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

鶴原仁「言語と社会はどのように関係しているのか？」第3回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館2F大会議室, 2011/1/10

須賀佳苗「ハーバーマスにおける「人権」概念について」第2回哲学ワークショップ, 兵庫県淡路市, 民宿ひさしげ, 2010/9/17-19

須賀佳苗「何が平和の実現を促進するのか？」第3回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館2F大会議室, 2011/1/10

朱喜哲「パトナムのローティ批判」第1回哲学ワークショップ「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」大阪大学豊中キャンパス文学部本館演習室254, 2010/4/16

西田剛「何が平和の実現を促進するのか？」第3回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館2F大会議室, 2011/1/10
〔博士後期〕

田中悠介「シルヴァン・フランコット、『ベルクソン：持続と道徳』(Sylvain Francotte, "Bergson : Durée et morale", Academia Bruylant, 2004.) 第14回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館2F会議室, 2011/3/18/

野々村梓「デカルトの物質的事物の存在証明について——『哲学原理』の証明は「第六省察」よりも妥当な証明か」第14回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館2F会議室, 2011/3/18

原田淳平「パトナムのハーバーマス批判」第1回哲学ワークショップ「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」大阪大学豊中キャンパス文学部本館演習室254, 2010/4/16

原田淳平「事実と価値の二分法は崩壊するのか」第4回哲学ワークショップ, 大阪大学・待兼山会館2F会議室, 2011/3/16

原田淳平「いつ『証拠超越性』は有害ではないのか：クリスピン・ライトへの応答」(Crispin Wright, Truth as Sort of

- Epistemic: Putnam's Peregrinations, *Journal of Philosophy*, Vol. 97, 2000, pp. 335-364 ; Hilary Putnam, When "Evidence Transcendence" Is Not Malign: A Reply To Crispin Wright, *Journal of Philosophy*, Vol. 98, 2001, pp. 594-600.) , 第 14 回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館 2 F 会議室, 2011/3/18
- 嘉目道人「ローティのハーバーマス批判」第 1 回哲学ワークショップ「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」大阪大学豊中キャンパス文学部本館演習室 254, 2010/4/16
- 嘉目道人「カントかフィヒテか —超越論的語用論の源流をめぐる—」第 2 回哲学ワークショップ, 兵庫県淡路市, 民宿ひさしげ, 2010/9/17-19
- 嘉目道人「カントかフィヒテか —超越論的語用論の源流を巡って—」実存思想協会・ドイツ観念論研究会共催第 19 回シンポジウム, 同志社大学, 2010/10/3
- 嘉目道人「事行としての自己関係性 —フィヒテ知識学の言語哲学的変換に向けて—」日本フィヒテ協会第 26 回大会, 長崎総合科学大学, 2010/11/20
- 嘉目道人「言語と社会はどのように関係しているのか?」第 3 回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2 F 大会議室, 2011/1/10

【2011 年度】

〔博士後期〕

- 多田雅彦「反復者、反復そのもの、反復されるもの——ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について——」第 15 回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館 2 F 会議室, 2012/3/6
- 田中悠介「ベルクソンにおける経験的事実としての「開かれたもの」の意義」日仏哲学会 2012 年春季研究大会, 京都大学, 2012/3/31
- 藤野幸彦「ミカエル・デラ・ロッカ著『スピノザにおける表象と心身問題』(Michael Della Rocca: REPRESENTATION and the MIND-BODY PROBLEM in SPINOZA, Oxford University Press, 1996)」第 15 回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館 2 F 会議室, 2012/3/6
- 原田淳平「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与えるのか」第 15 回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館 2 F 会議室, 2012/3/6
- Michihito Yoshime, „Selbstbezüglichkeit als Tathandlung. Zur sprachphilosophischen Transformation von Fichtes Wissenschaftslehre“, *Transzendentalpragmatik 2.1*, Villa Paradiso, Dubrovnik, Croatia, 2011/9
- 嘉目道人「なぜ討議は重要なのか」第 6 回哲学ワークショップ, 大阪大学文学部本館 2 F 大会議室, 2012/2/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010 年度】

〔博士後期〕

- 嘉目道人(文献紹介)「ヴォルフガング・クールマン、背後遡行不可能性と「短い討議」 —反省的な究極的根拠付けをめぐる論争について— (Wolfgang Kuhlmann, „Unhintergebarkeit und „Kurze Diskurse“. Zum Streit über reflexive Letztbegründung“, in ders.: Unhintergebarkeit, Würzburg, Königshausen & Neumann, 2009, S. 9-95.)」『メタフュシカ』第 41 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 95-100, 2010/12
- 田中悠介(文献紹介)「シルヴァン・フランコット『ベルクソン: 持続と道徳』(Sylvain Francotte, “Bergson: Durée et morale”, Academia Bruylant, 2004.)」『メタフュシカ』第 41 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 81-87, 2010/12
- 原田淳平(文献紹介)「クリスピン・ライト「一種の認識としての真理: パトナムの遍歴」(Crispin Wright, Truth as Sort of Epistemic: Putnam's Peregrinations, *Journal of Philosophy*, Vol. 97, 2000, pp. 335-364)」および「ヒラリー・パトナム、「いつ『証拠超越性』は有害ではないのか: クリスピン・ライトへの応答 (Hilary Putnam, When “Evidence Transcendence” Is Not Malign: A Reply To Crispin Wright, *Journal of Philosophy*, Vol. 98, 2001, pp. 594-600.)」『メタフュシカ』第 41 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 89-94, 2010/12

【2011 年度】

[博士後期]

野々村 梓 (翻訳) 「ウィープ・ファン・ブング「スピノザとオランダ」(Wiep van Bunge: Spinoza and the Netherlands)」
『メタフィシカ』第 42 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 159-170, 2011/12

藤野 幸彦 (文献紹介) 「ミカエル・デラ・ロッカ『スピノザにおける表象と心身問題』(Michael Della Rocca: Representation and the Mind-body Problem in Spinoza, Oxford University Press, 1996.)」『メタフィシカ』第 42 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 135-141, 2011/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 1 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2011 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 学部 : 1 名 大学院 : 2 名 (計 3 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 2 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 2 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度 : 0 名 2011 年度 : 0 名

9. 刊行物

2010 年度 『メタフィシカ』第 41 号、*Philosophia OSAKA*, No. 6

2011 年度 『メタフィシカ』第 42 号、*Philosophia OSAKA*, No. 7

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

ファン・ブング教授講演会「スピノザとコレギアント」

2011 年 10 月 8 日

於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室

スピノザ協会事務局

2007 年 4 月～現在に至る

関西哲学会事務局

2009 年 1 月～2010 年 12 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 第13回 *handai metaphysica* 研究例会（現代思想文化学専門分野と共催） 2010年8月12日
発表者：山口信夫（岡山大学教授）「パリと思想家たち——エラスムスの場合」
於：大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者16名。
- 第14回 *handai metaphysica* 研究例会（現代思想文化学専門分野と共催） 2011年3月18日
発表者：【第一部】田中悠介（博士後期課程）：「シルヴァン・フランコット、『ベルクソン：持続と道徳』」（Sylvain Francotte, “Bergson: Durée et morale”, Academia Bruylant, 2004.）、原田淳平（博士後期課程）：「いつ『証拠超越性』は有害ではないのか：クリスピン・ライトへの応答」（Crispin Wright, Truth as Sort of Epistemic: Putnam’s Peregrinations, *Journal of Philosophy*, Vol. 97, 2000, pp. 335-364 ; Hilary Putnam, When “Evidence Transcendence” Is Not Malign: A Reply To Crispin Wright, *Journal of Philosophy*, Vol. 98, 2001, pp. 594-600.）。【第二部】野々村梓（博士後期課程）：「デカルトの物質的事物の存在証明について——『哲学原理』の証明は「第六省察」よりも妥当な証明か」、平野一比古（博士後期課程）：「ベルクソンにおける時間の側面について——時間が「働く」ということおよび自由——」
於：大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者15名。
- 第15回 *handai metaphysica* 研究例会（現代思想文化学専門分野と共催） 2012年3月6日
発表者：【午前の部】藤野幸彦（哲学哲学史博士後期課程）：ミカエル・デラ・ロッカ著『スピノザにおける表象と心身問題』（Michael Della Rocca: REPRESENTATION and the MIND-BODY PROBLEM in SPINOZA, Oxford University Press, 1996）、谷山弘太（現代思想文化学博士後期課程）：ラース・ニーハウス著『問題としての道徳』（Lars Niehaus: Moral als Problem, Zum Verhältnis von Kritik und historischer Betrachtung im Spätwerk Nietzsches, Königshausen & Neumann 2010, 104S.）。【午後の部】中村征樹（現代思想文化学准教授）「研究不正への対応を超えて：「リサーチ・インテグリティ」というアプローチとその含意」、多田雅彦（哲学哲学史博士後期課程）「反復者、反復そのもの、反復されるもの——ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について——」、原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与えるのか」
於：大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者25名。
- 第12回 *handai metaphysica* 特別講演会（現代思想文化学専門分野、美学・文芸学専門分野と共催） 2010年10月1日
発表者：エーバーハルト・オルトランド博士（ヒルデスハイム大学哲学部 共同研究員）、「生と芸術にとって『生の芸術の哲学』が持つ利と害について」
於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者15名。
- 第13回 *handai metaphysica* 特別講演会（現代思想文化学専門分野と共催） 2010年12月10日
発表者：戸田山和久（名古屋大学・教授）、「志向性の自然化をどのように進めるか」
於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者28名。
- 第14回 *handai metaphysica* 特別講演会（現代思想文化学専門分野と共催） 2011年3月21日
発表者：Halla Kim, Ph.D. (Associate Professor of Philosophy, University of Nebraska at Omaha), “Kant on Properties” (or “Kant’s Hidden Realism”). 参加者 名。→発表者が帰国したため中止
- 第14回 *handai metaphysica* 特別講演会（現代思想文化学専門分野と共催） 2012年2月2日
発表者：品川哲彦（関西大学・教授）、「ケアと正義」
於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者27名。
- 新入生歓迎イベント PFB（現代思想文化学専門分野と共催） 2011年4月15日
於：大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者17名。
- 新入生歓迎イベント 哲学のお題セミナー（現代思想文化学専門分野と共催） 2011年4月21日
「ドーナツの穴はあるのかわからないのか？」「何故気付いたら夕方になっているのか。」「天災について、哲学的に語りうることは何か？ あるいは、天災についての哲学的問題はあるのか？ あるとすれば何か？」「日常的に体験される世界と、科学的な世界観はどういう関係にあるのか？」「哲学者はM.サンデルのテレビ番組を見ておくべきか？」「東電の

清水社長は謝罪をする必要があるのか？」「なぜ“自粛”するのか。」

於：大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者12名。

第1回哲学ワークショップ「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」

2010年4月16日

提題者：嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程1年）「ローティのハーバーマス批判」、朱喜哲（哲学哲学史博士前期課程2年）「パトナムのローティ批判」、原田淳平（哲学哲学史博士後期課程1年）「パトナムのハーバーマス批判」、舟場保之（哲学哲学史准教授）「ハーバーマスのパトナム批判」

於：大阪大学豊中キャンパス 文学部本館演習室254、参加者14名。

第2回哲学ワークショップ

2010年9月17日-19日

9月17日「J. バトラーと哲学」、発表者：祖川明子（哲学・思想文化学）「J.バトラー『ジェンダー・トラブル』」、舟場保之（哲学哲学史准教授）「トラブルと遂行的矛盾について」分科会・発表者：嘉目道人（博士後期課程）「カントかフィヒテか—超越論的語用論の源流をめぐる—」、9月18日「倫理と人権」、発表者：入江幸男（哲学哲学史教授）「道徳的な問いとはなにか——濃い倫理的概念と人間の尊厳——」、須賀佳苗（博士前期課程）「ハーバーマスにおける「人権」概念について」、分科会・発表者：糸谷哲郎（哲学・思想文化学）「心の哲学」

於：兵庫県淡路市、民宿ひさしげ、参加者9名。

第3回哲学ワークショップ

2011年1月10日

「何が平和の実現を促進するのか？」、発表者：西田剛（哲学哲学史博士前期課程）、須賀佳苗（哲学哲学史博士前期課程）、森本誠一（日本学術振興会特別研究員）、「言語と社会はどのように関係しているのか？」、鶴原仁（哲学哲学史博士前期課程）、嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程）

於：大阪大学文学研究科本館2F大会議室参加者19名。

第4回哲学ワークショップ

2011年3月16日

1. 「事実と価値の二分法は崩壊するのか」、発表者：原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）、舟場保之（哲学哲学史准教授）、2. 「事物はどのようにとらえられるのか」、発表者：糸谷哲郎（哲学・思想文化学）、西村知紘（哲学・思想文化学）、3. 「何が平和の実現を促進するのか」、発表者：祖川明子（哲学・思想文化学）、浜辺章（哲学・思想文化学）

於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者18名。

第5回哲学ワークショップ

2011年8月2日

1. 「意味についての懐疑とその解決」、発表者：重田謙（大阪大学特任研究員）、コメンテータ：原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）、2. 「何が平和の実現を促進するのか」、発表者：舟場保之（哲学哲学史准教授）、コメンテータ：浜辺章（哲学・思想文化学）

於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者17名。

第6回哲学ワークショップ

2012年2月11日

<第一部>「討議」、発表者：森本誠一（日本学術振興会特別研究員）「熟議と公共性——熟議は公共性を担保しうるのか」、嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程）「なぜ討議は重要なのか」、<第二部>発表者：入江幸男（哲学哲学史教授）「意味の全体論とフィヒテ知識学」

於：大阪大学文学部本館2F大会議室、参加者18名。

2010年「世界哲学の日」企画 「哲学のお題」

2010年11月18日

「教師にとって必要な言語能力とは？」「生きることの意義」「家族の愛とは？」「フリートークとは何からフリーなのか？」「哲学的とは？」「<役に立つこと>とは？あるいは<哲学が世の中の役に立つこと>とは？」

於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟I、ステューデント・コモンズ2Fセミナー室2、参加者17名。

2011年「世界哲学の日」記念セミナー：上野修著『スピノザ』を読む

2011年11月17日

於：大阪大学会館2Fセミナー室1、参加者23名。

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 上野修教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

1-1. 論文

- 上野修 「世界の奥行きを創出するーライブニッツ(二)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド21)」『本』428, 講談社, pp. 2-6, 2012/3
- 上野修 「スピノザの崖っぷちから引き返すーライブニッツ(一)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド20)」『本』427, 講談社, pp. 2-6, 2012/2
- 上野修 「ライブニッツ、あるいは世界の修復(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド19)」『本』426, 講談社, pp. 2-6, 2012/1
- 上野修 「ふたたびホッブズとスピノザ(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド18)」『本』425, 講談社, pp. 2-6, 2011/12
- 上野修 「約束という暴カーホッブズ(四)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド17)」『本』424, 講談社, pp. 2-6, 2011/11
- 上野修 「契約説のパラドックスーホッブズ(三)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド16)」『本』423, 講談社, pp. 2-6, 2011/10
- 上野修 「決定論の彼方、自由としての必然ースピノザの場合(後日考を付す)」『西日本哲学会年報』19, 西日本哲学会, pp. 145-160, 2011/10
- 上野修 「意志がなかったとは言わせないーホッブズ(二)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド15)」『本』422, 講談社, pp. 2-6, 2011/9
- 上野修 「哲学はシミュレーションーホッブズ(一)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド14)」『本』421, 講談社, pp. 2-6, 2011/8
- 上野修 「国家論へーホッブズとスピノザ(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド13)」『本』420, 講談社, pp. 2-6, 2011/7
- 上野修 「敬虔なるマキャベリストースピノザ(六)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド12)」『本』419, 講談社, pp. 2-6, 2011/6
- 上野修 「証明の秘儀ースピノザ(五)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド11)」『本』418, 講談社, pp. 2-6, 2011/5
- 上野修 「精神は自分の外にいるースピノザ(四)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド10)」『本』417, 講談社, pp. 2-6, 2011/4
- 上野修 「私ではなく神が……ースピノザ(三)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド9)」『本』416, 講談社, pp. 2-6, 2011/3
- 上野修 「「現実」を作ってみるースピノザ(二)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド8)」『本』415, 講談社, pp. 2-6, 2011/2
- 上野修 「光がそれ自身と闇とを頭わすようにースピノザ(一)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド7)」『本』414, 講談社, pp. 2-6, 2011/1
- 上野修 「心身問題とその彼方ーデカルト(五)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド6)」『本』413, 講談社, pp. 2-6, 2010/12
- 上野修 「無根拠の支えとしての神ーデカルト(四)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド5)」『本』412, 講談社, pp. 2-6, 2010/11
- 上野修 「私はある、私は存在するーデカルト(三)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド4)」『本』411, 講談社, pp. 2-6, 2010/10
- 上野修 「不可能に出会うことーデカルト(二)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド3)」『本』410, 講談社, pp. 2-6, 2010/9
- 上野修 「確実性に取り憑かれてーデカルト(一)(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド2)」『本』409, 講談社, pp. 2-6, 2010/8
- 上野修 「世界の底が抜けたとき(様相の十七世紀ー哲学史のワンダーランド1)」『本』408, 講談社, pp. 2-6, 2010/7

1-2. 著書

上野修 『デカルト、ホッブズ、スピノザ—哲学する十七世紀』講談社, 263p., 2011/10

上野修, 永井均, 入不二基義他(共著)『(私)の哲学 を哲学する』講談社, pp. 115-152, pp. 331-338, pp. 368-369, 2010/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修(書評)「國分功一郎『スピノザの方法』」『思想』1047, 岩波書店, pp. 105-110, 2011/7

上野修(書評)「国家を制作するのはだれか—川添美央子著『ホッブズ 人為と自然』を読む—」『創文』533, 創文社, pp. 23-26, 2010/8

上野修(書評)「手島勲矢『ユダヤの聖書解釈—スピノザと歴史批判の転回』」『図書新聞』2976, 図書新聞, p. 5, 2010/7

1-4. 口頭発表

上野修 「Okay, I'll be Part of This World—可能なき世界とスピノザ的自由」ICU 哲学研究会第4回研究会:自由と必然, ICU 哲学研究会, 2011/11

上野修 「『VOL05 エピステモロジー:知の未来のために』以文社, 2011 へのコメント」大阪大学最先端ときめき研究推進事業パイオサイエンスの時代における人間の未来第19回ときめき☆セミナー:【合評会】『VOL05 エピステモロジー:知の未来のために』以文社, 2011, 大阪大学人間科学研究科, 2011/8

上野修 「『(私)の哲学 を哲学する』(講談社 2010)合評を受けて」, Cogito 研究会, 東京大学山上会館, 2011/7

上野修 「決定論の彼方、自由としての必然—スピノザの場合」西日本哲学会第 61 回大会シンポジウム: 可能的なものの実在的なもの—自由とはなにか, 西日本哲学会, 鹿児島大学, 2010/12

上野修 「真理と主体—デイヴィドソンの根元的解釈とラカン」日本ラカン協会第 10 回ワークショップ: 後期ラカンへのアプローチ, 日本ラカン協会, 専修大学神田校舎, 2010/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 上野修

課題番号: 22320007

研究題目: 近現代哲学の虚軸としてのスピノザ

研究経費: 2010 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

2011 年度 直接経費 2,700,000 円 間接経費 810,000 円

研究の目的:

本研究は、西洋近現代哲学思想の形成にスピノザ思想が与えた影響について、影響作用史的視点から明らかにする。「神即自然」の哲学者スピノザ(1632-1677)の登場はヨーロッパを震撼させ、彼の名はひとつの躰きとなった。「スピノザ主義」という呼称は学派の理念や方法を意味するよりは、むしろ何らかの忌避と抵抗、あるいは畏怖を交えた魅惑を伴うある種のアノマリーの符牒として機能してきたのである。このようなスピノザ哲学の特異な影響作用力に注目し、近現代哲学思想の形成史を縦断するいわば「虚の軸」としてスピノザのプレゼンスを明らかにすること、これが本研究の目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・評議員

2011 年 6 月～現在に至る

西日本哲学会・理事

2010 年 12 月～現在に至る

日本哲学会・編集委員
関西哲学会・委員
スピノザ協会・運営委員

2009年7月～現在に至る
2007年10月～現在に至る
1989年3月～現在に至る

2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻:哲学哲学史。

2-1. 論文

-
- Irie, Yukio, "Identity Sentences as Answers to Question" O.Ueno, Y. Irie, N. Suto, and Y. Funaba(編) *Philosophia Osaka*, No. 7, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Osaka University, pp. 79-94, 2012/3
- Irie, Yukio, "Exploring the Possibility of the Unconscious Imitation of Others' Desires" O. Ueno, Y. Irie, N. Suto, and Y. Funaba(編) *Philosophia Osaka*, No. 6, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Osaka University, pp. 63-73, 2011/3
- 入江幸男 「内在的基礎づけ主義とドイツ観念論」小川真人『ヘーゲル哲学研究』(日本ヘーゲル学会), Vol. 16, こぶし書房, pp. 70-81, 2010/12
- Irie, Yukio, "Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre" J. Stolzenberg und O-P. Rudolph *Fichte-Studien*, Band 35, Rodopi, pp. 329-337, 2010/7

2-2. 著書

入江幸男 (共著)『フィヒテ —— 『全知識学の基礎』と政治的なもの ——』創風社, pp. 267-300, 2010/8

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男 (News Letter)「21世紀の文明が直面する哲学的な問題」大阪大学広報・社会連携室『阪大 NEWS LETTER』48, 大阪大学広報・社会連携室, p. 20, 2010/6

2-4. 口頭発表

-
- Irie, Yukio, "How Is It Possible to Imitate Unconsciously a Desire of Another Person?" The second Meeting of IMITATIO: Imitatio, IMITATIO JAPAN, International Christian University, 2010/12
- Irie, Yukio, "Was ist eine moralische Frage?" Internationale Tagung "Würde und Werte": Würde und Werte, Nanzan University, Nanzan University, 2010/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第一回フィヒテ協会研究奨励賞(日本フィヒテ協会)受賞, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男
課題番号: 2520023

研究題目: 意味の全体論とドイツ観念論

研究経費: 2010年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2011年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

意味の全体論を最初に主張した哲学者としてのヘーゲルの読み直しと再評価が、ピッツバーグ大学の R.ブランダムと J.マクダウ

エルを中心に活発に行われている。ただし、彼らの論証方法は、フィヒテの超越論的な論証にせよ、ヘーゲルの弁証法にせよ、現代の分析哲学での論証方法とは異なっている。そして、それゆえにこそ、ドイツ観念論の議論が、現代の意味論、認識論、存在論に大いに貢献できる点があり、それを追究することが目的である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・理事	2011年7月～現在に至る
日本哲学会・評議員	2011年5月～現在に至る
日本フィヒテ協会・賞選考委員	2010年3月～現在に至る
関西哲学会・委員	2004年11月～現在に至る
日本哲学会・委員	2003年5月～2011年5月
日本フィヒテ協会・常任委員	1999年11月～現在に至る

3. 舟場 保之 准教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

3-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, “Zum Kongress als einer willkürlichen, zu aller Zeit auflöslichen Zusammentretung” *Philosophia OSAKA*, (Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), 7, pp. 95-104, 2012/3

Funaba, Yasuyuki, “Der performative Widerspruch und die Verantwortung als Fähigkeit zur Antwort (response-ability)” *Philosophia OSAKA*, (Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University), 6, pp. 75-84, 2011/3

舟場保之「遂行的矛盾と〈応答〉としての責任——「規範の欠陥は遂行的矛盾において明らかとなる」——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 44, pp. 19-33, 2010/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之(書評)「ゲアハルト・シェーンリッヒ著、加藤泰史監訳『カントと討議倫理学の問題』」『日本カント研究12 カントと日本の哲学』理想社, pp. 215-218, 2011/7

舟場保之, 御子柴善之(監訳)(翻訳、マティアス・ルッツ=バツハマン、アンドレアス・ニーダーベルガー)『平和構築の思想——グローバル化の途上で考える』粹出版社, pp. 1-256, 2011/4

加藤泰史(監訳), 舟場保之, 日暮雅夫他(共訳)(翻訳、ゲアハルト・シェーンリッヒ)『カントと討議倫理学の問題』晃洋書房, pp. 97-131, pp. 171-213, 2010/9

3-4. 口頭発表

Funaba, Yasuyuki, “Gilt dieser oder jener Satz zwar in thesi, aber nicht in hypothesi? Klugheit bei Kant” Villa Vigoni-Gespräch in den Geistes- und Sozialwissenschaften: Das Wissen des Klugen: phronesis, prudentia und moralisches Handeln in Mittelalter und

Neuzeit, Villa Vigoni, Deutsch-Italienisches Zentrum, 2012/3

舟場保之「任意の、いつでも解消しうる会議についての考察」〈9.11〉を多角的に考える哲学フォーラム:「〈9.11〉から10年——なおも多角的に考える哲学フォーラム」, フォーラム企画グループ, 首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス, 2011/9

舟場保之「何が平和の実現を促進するのか ——ある会議についての考察」第5回哲学ワークショップ:「何が平和の実現を促進するのか」, 哲学哲学史/現代思想文化学専門分野, 大阪大学待兼山会館2F 会議室, 2011/8

Funaba, Yasuyuki, “Zum Kongress als einer willkürlichen, zu aller Zeit auflöslichen Zusammentretung”, 5. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium: Die Ethik im Zeitalter der Globalisierung II, Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY, 2011/8

舟場保之「ハーバーマスの場合」第4回哲学ワークショップ:「事実と価値の二分法は崩壊するのか」, 哲学哲学史/現代思想文化学専門分野, 大阪大学待兼山会館2F 会議室, 2011/3

舟場保之「トラブルと遂行的矛盾について」第2回哲学ワークショップ: J. バトラーと哲学, 哲学哲学史/現代思想文化学専門分野, 兵庫県淡路市, 民宿ひさしげ, 2010/9

Funaba, Yasuyuki, “Der performative Widerspruch und die Verantwortung als Fähigkeit zur Antwort (response-ability)”, 4. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium: Die ethische Verantwortung im Zeitalter der Globalisierung, Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY, 2010/8

舟場保之「ハーバーマスのパトナム批判」第1回哲学ワークショップ:「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」, 哲学哲学史/現代思想文化学専門分野, 大阪大学豊中キャンパス 文学部本館演習室 254, 2010/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2005/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・編集委員	2009年6月～現在に至る
日本カント協会・委員	2007年4月～現在に至る
日本フイヒテ協会・会計監査	2007年4月～現在に至る

2-2 現代思想文化学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 兼任1 講師 0 助教 1

教授：須藤 訓任、望月 太郎

准教授：中村 征樹(全学教育推進機構所属・兼任)

助教：入谷 秀一

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
37 (哲学・思想 文化学)	8	5	0	0	1	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	4 (哲学・思想文化学)	1	0	2	0
2011	5 (哲学・思想文化学)	3	0	0	0
計	9 (哲学・思想文化学)	4	0	2	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎ゼミを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論

文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP にアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/大学院留学生が TA として、英語によるディスカッション能力向上に向けて、有志の院生および学部生に対して指導を行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 6 号、第 7 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 41 号、第 42 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/哲学哲学史専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の<ビデオ・メタフシカ>から、さまざまな情報を発信する。/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に市民向けの記念講演会を実施する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎ゼミを開講し、専修独自のガイダンスを行うことにより、専修生の数を増やすことに成功した。/英語による授業を複数開講するとともに、大学院留学生を TA として学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/後述 (V-11) のように、当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、哲学のお題セミナーおよび新入生歓迎イベント PFB を行った。/同じく後述 (V-11) のように、院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 6 回開催した。目標は達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 6 号、第 7 号を刊行し、海外主要大学(16ヶ国、217校。個人宛を含む)および国内主要大学(164校)に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 41 号、第 42 号を発刊し、国内主要大学(164校)に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に外国人研究者らを招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 3 回、また *handai metaphysica* 研究例会を 3 回開催した。また学内共同研究(スピノザ研究企画)として、学外の研究者も交えたワークショップを開催した。また複数のスタッフが国際学会で発表し、また院生の 1 人が国際学会で発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ビデオ・メタフシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画として市民向けの講演会を 2 回開催した。目標は達成されたと考える。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	2	0	2
2011	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

田中潤一 「西田哲学における知識論の研究—知識の客観性と生成のプロセスを中心に—」 2010/9

主査：須藤訓任 副査：望月太郎、入江幸男

中野彰則 「スピノザにおける「神の存在証明」 — 『エチカ』第一部定理 11 について —」 2010/9

主査：望月太郎 副査：須藤訓任、上野修

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)
2011	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	0	0	0	0
2011	0	1	1	0	0	2
計	0	1	1	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

平野一比古「バルクソンにおける時間の一側面について—時間が「働く」ということおよび自由—」『メタフュシカ』第41号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 25-36, 2010/12

(2)口頭発表

【2011年度】

〔博士後期〕

生島弘子「認識と懐疑 — 自分がどのような者であるかは如何にして知られるか?」日本ショーペンハウアー協会・第15回ニーチェ・セミナー, 龍谷大学セミナーハウスともいき荘, 2011/4/30

谷山弘太「ラース・ニーハウス著『問題としての道徳』(Lars Niehaus: Moral als Problem, Zum Verhältnis von Kritik und historischer Betrachtung im Spätwerk Nietzsches, Königshausen & Neumann 2010,104S.)」第15回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学・待兼山会館2F会議室, 2012/3/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2011年度】

〔博士後期〕

谷山弘太(文献紹介)「ラース・ニーハウス著『問題としての道徳』(Lars Niehaus: Moral als Problem, Zum Verhältnis von Kritik und historischer Betrachtung im Spätwerk Nietzsches, Königshausen & Neumann 2010,104S.)」『メタフュシカ』第42号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 143-149, 2011/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2011年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2011年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度~2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2010 年度：1 名 2011 年度：2 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 2 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度：0 名 2011 年度：0 名

9. 刊行物

2010 年度 『メタフィシカ』第 41 号、*Philosophia OSAKA*, No. 6

2011 年度 『メタフィシカ』第 42 号、*Philosophia OSAKA*, No. 7

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2010 年度 第 9 回ニーチェ研究者の集い 2010 年 9 月 11 日

ファン・ブング教授講演会「スピノザとコレギアント」於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室 2011 年 10 月 8 日

関西哲学会事務局 2009 年 1 月～2010 年 12 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 13 回 *handai metaphysica* 研究例会（哲学哲学史専門分野と共催） 2010 年 8 月 12 日

発表者：山口信夫（岡山大学教授）「パリと思想家たち——エラスムスの場合」

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 16 名。

第 14 回 *handai metaphysica* 研究例会（哲学哲学史専門分野と共催） 2011 年 3 月 18 日

発表者：【第一部】田中悠介（博士後期課程）：「シルヴァン・フランコット、『ベルクソン：持続と道徳』（Sylvain Francotte, “Bergson: Durée et morale”, Academia Bruylant, 2004.）、原田淳平（博士後期課程）：「いつ『証拠超越性』は有害ではないのか：クリスピン・ライトへの応答」（Crispin Wright, Truth as Sort of Epistemic: Putnam’s Peregrinations, *Journal of Philosophy*, Vol. 97, 2000, pp. 335-364 ; Hilary Putnam, When “Evidence Transcendence” Is Not Malign: A Reply To Crispin Wright, *Journal of Philosophy*, Vol. 98, 2001, pp. 594-600.）。【第二部】野々村梓（博士後期課程）：「デカルトの物質的事物の存在証明について——『哲学原理』の証明は「第六省察」よりも妥当な証明か」、平野一比古（博士後期課程）：「ベルクソンにおける時間の一側面について——時間が「働く」ということおよび自由——」

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 15 名。

第 15 回 *handai metaphysica* 研究例会（哲学哲学史専門分野と共催） 2012 年 3 月 6 日

発表者：【午前の部】藤野幸彦（哲学哲学史博士後期課程）：ミカエル・デラ・ロッカ著『スピノザにおける表象と心身問題』（Michael Della Rocca: REPRESENTATION and the MIND-BODY PROBLEM in SPINOZA, Oxford University Press, 1996）、谷山弘太（現代思想文化学博士後期課程）：ラース・ニーハウス著『問題としての道徳』（Lars Niehaus: Moral als Problem, Zum Verhältnis von Kritik und historischer Betrachtung im Spätwerk Nietzsches, Königshausen & Neumann 2010, 104S.）。【午後の部】中村征樹（現代思想文化学准教授）「研究不正への対応を超えて：「リサーチ・インテグリティ」というアプローチとその含意」、多田雅彦（哲学哲学史博士後期課程）「反復者、反復そのもの、反復されるもの——ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について——」、原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与えるのか」

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 25 名。

第 12 回 *handai metaphysica* 特別講演会（哲学哲学史専門分野、美学・文芸学専門分野と共催）

2010 年 10 月 1 日

発表者：エーバーハルト・オルトラント博士（ヒルデスハイム大学哲学部 共同研究員）、「生と芸術にとって『生の芸術の哲学』が持つ利と害について」

於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 15 名。

第 13 回 *handai metaphysica* 特別講演会（哲学哲学史専門分野と共催）

2010 年 12 月 10 日

発表者：戸田山和久（名古屋大学・教授）、「志向性の自然化をどのように進めるか」

於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 28 名。

第 14 回 *handai metaphysica* 特別講演会（哲学哲学史専門分野と共催）

2011 年 3 月 21 日

発表者：Halla Kim, Ph.D. (Associate Professor of Philosophy, University of Nebraska at Omaha), “Kant on Properties” (or “Kant's Hidden Realism”). 参加者 名。→発表者が帰国したため中止

第 14 回 *handai metaphysica* 特別講演会（哲学哲学史専門分野と共催）

2012 年 2 月 2 日

発表者：品川哲彦（関西大学・教授）、「ケアと正義」

於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 27 名。

新入生歓迎イベント PFB（哲学哲学史専門分野と共催）

2010 年 4 月 15 日

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 17 名。

新入生歓迎イベント哲学のお題セミナー（現代思想文化学専門分野と共催）

2011 年 4 月 21 日

「ドーナツの穴はあるのかなのか?」「何故気付いたら夕方になっているのか?」「天災について、哲学的に語りうることは何か? あるいは、天災についての哲学的問題はありますか? あるとすれば何か?」「日常的に体験される世界と、科学的な世界観はどういう関係にあるのか?」「哲学者は M.サンデルのテレビ番組を見ておくべきか?」「東電の清水社長は謝罪をする必要があるのか?」「なぜ“自粛”するのか。」

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 12 名。

第 1 回哲学ワークショップ「真理と価値に関する相対主義をめぐる論争を追う」

2010 年 4 月 16 日

提題者：嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程 1 年）「ローティのハーバーマス批判」、朱喜哲（哲学哲学史博士前期課程 2 年）「パトナムのローティ批判」、原田淳平（哲学哲学史博士後期課程 1 年）「パトナムのハーバーマス批判」、舟場保之（哲学哲学史准教授）「ハーバーマスのパトナム批判」

於：大阪大学豊中キャンパス 文学部本館演習室 254、参加者 14 名。

第 2 回哲学ワークショップ

2010 年 9 月 17 日-19 日

9 月 17 日「J. バトラーと哲学」、発表者：祖川明子（哲学・思想文化学）「J.バトラー『ジェンダー・トラブル』」、舟場保之（哲学哲学史准教授）「トラブルと遂行的矛盾について」、分科会・発表者：嘉目道人（博士後期課程）「カントかフィヒテか——超越論的語用論の源流をめぐって—」。9 月 18 日「倫理と人権」、発表者：入江幸男（哲学哲学史教授）「道徳的な問いとはなにか——濃い倫理的概念と人間の尊厳——」、須賀佳苗（博士前期課程）「ハーバーマスにおける「人権」概念について」、分科会・発表者：糸谷哲郎（哲学・思想文化学）「心の哲学」

於：兵庫県淡路市、民宿ひさしげ、参加者 9 名。

第 3 回哲学ワークショップ

2011 年 1 月 10 日

「何が平和の実現を促進するのか?」、発表者：西田剛（哲学哲学史博士前期課程）、須賀佳苗（哲学哲学史博士前期課程）、森本誠一（日本学術振興会特別研究員）、「言語と社会はどのように関係しているのか?」、鶴原仁（哲学哲学史博士前期課程）、嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程）

於：大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室参加者 19 名。

第 4 回哲学ワークショップ

2011 年 3 月 16 日

1. 「事実と価値の二分法は崩壊するのか」、発表者：原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）、舟場保之（哲学哲学史准教授）、2. 「事物はどのようにとらえられるのか」、発表者：糸谷哲郎（哲学・思想文化学）、西村知紘（哲学・思想文化学）、3. 「何が平和の実現を促進するのか」、発表者：祖川明子（哲学・思想文化学）、浜辺章（哲学・思想文化学）

於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者18名。

第5回哲学ワークショップ

2011年8月2日

1.「意味についての懐疑とその解決」、発表者：重田謙（大阪大学特任研究員）、コメンテータ：原田淳平（哲学哲学史博士後期課程）、2.「何が平和の実現を促進するのか」、発表者：舟場保之（哲学哲学史准教授）、コメンテータ：浜辺章（哲学・思想文化学）

於：大阪大学待兼山会館2F会議室、参加者17名。

第6回哲学ワークショップ

2012年2月11日

<第一部>「討議」、発表者：森本誠一（日本学術振興会特別研究員）「熟議と公共性——熟議は公共性を担保しうるのか」、嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程）「なぜ討議は重要なのか」、<第二部>発表者：入江幸男（哲学哲学史教授）「意味の全体論とフィヒテ知識学」

於：大阪大学文学部本館2F大会議室、参加者18名。

2010年「世界哲学の日」企画 「哲学のお題」

2010年11月18日

「教師にとって必要な言語能力とは?」「生きることの意義」「家族の愛とは?」「フリートークとは何からフリーなのか?」「哲学的とは?」「<役に立つこと>とは?あるいは<哲学が世の中の役に立つこと>とは?」

於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟I、ステューデント・コモンズ2Fセミナー室2、参加者17名。

2011年「世界哲学の日」記念セミナー：上野修著『スピノザ』を読む

2011年11月17日

於：大阪大学会館2Fセミナー室1、参加者23名。

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955年生。1983年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学修士(京都大学)。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より現職。専攻：西洋近現代哲学。

1-1. 論文

須藤訓任「芸術と道徳としての身体——ニーチェの場合」西田哲学会『西田哲学会年報』(西田哲学会), 8, pp. 69-87, 2011/7

須藤訓任「諦念という戦略——アルトゥールとヨハナ」大阪大学大学院文学研究科『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 51, pp. 1-48, 2011/3

須藤訓任「哲学者の揺籃——ショーペンハウアー母子の旅日記 1803-1804年」京都大学哲学論叢刊行会『哲学論叢』(京都大学哲学論叢刊行会), 37, pp. 13-28, 2010/11

須藤訓任「苦悶の恍惚——アデーレ・ショーペンハウアー「アリッチャの麗人」をめぐる」日本ショーペンハウアー協会『ショーペンハウアー研究』(日本ショーペンハウアー協会), 15, pp. 3-31, 2010/6

須藤訓任「憑依としての哲学」『KAWADE 道の手帳 ニーチェ入門』河出書房新社, pp. 17-24, 2010/6

1-2. 著書

須藤訓任『ニーチェの歴史思想——物語・発生史・系譜学』大阪大学出版会, 431p., 2011/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任(翻訳)『フロイト全集』第14巻, 岩波書店, pp. 1-130, 2010/9

須藤訓任(書評)「H・H・エリス『ニーチェ』」『図書新聞』2979, 図書新聞, p. 5, 2010/8

1-4. 口頭発表

須藤訓任「「力への意志」——エリーザベト・ニーチェの場合」ヨーロッパの文学・思想継承における歪曲の系譜, 科学研究費補助金基盤研究(C)「ヨーロッパの文学・思想継承における歪曲の系譜」(研究代表:古澤ゆう子)研究課題番号:21520316, 2011/11

須藤訓任「芸術と道徳としての身体」西田哲学会第8回年次大会:身体, 西田哲学会, 明治大学, 2010/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:須藤訓任

課題番号: 20520016

研究題目: 哲学と家族

研究経費: 2010年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、哲学を家族関係という観点から再考察する試みである。取り上げるのは、アルトゥール・ショーペンハウアーの思想であるが、その父・母・妹との関係を、思想の家族間「対話」として規定し、そのことによって、思想形成に果たす家族の役割を明らかにするとともに、哲学者の思想が具体的な家族関係にどのように波及するかを論及し、従来伝記的事実としてしか問題にされてこなかった領域を、哲学研究の新たな課題として発掘し深化させてゆきたいと考える。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員

2007年11月～現在に至る

2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学、1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学教育実践センター教授、2012年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

2-1. 論文

早田幸政, 望月太郎, 齊藤貴浩他(共著)「東アジア圏の教育における大学間交流と質保証システム」大阪大学大学教育実践センター(編)『大阪大学大学教育実践センター』8, pp. 17-39, 2012/3

望月太郎「大学教育の国際化とインターナショナルプログラムの展望」慶応義塾藤沢学会(編)『KEIO SFC JOURNAL』(慶応義塾藤沢学会), 11-2, pp. 19-30, 2012/3

望月太郎「アーレントとアンリー「退きこもり」と内在—」日本ミシェル・アンリ哲学会(編)『ミシェル・アンリ研究』(日本ミシェル・アンリ哲学会), 1, pp. 25-37, 2011/6

中村征樹, 早田幸政, 望月太郎他(共著)「「高度教養教育」の位置付けと科目展開に関する取り組み事例に係る調査研究」大阪大学大学教育実践センター(編)『大阪大学大学教育実践センター紀要』7, pp. 9-18, 2011/3

2-2. 著書

望月太郎, 大学評価学会(共編著)『大学評価基本用語100』晃洋書房, 2011/9

楠見孝, 子安増生, 望月太郎他(共著)『批判的思考力を育む』有斐閣, pp. 178-186, 2011/9

望月太郎, 大学評価学会(共著)『大学改革・評価の国際的動向』晃洋書房, pp. 155-167, 2011/4

早田幸政, 諸星裕, 望月太郎他(共著)『高等教育論入門—大学教育のこれから—』ミネルヴァ書房, pp. 166-177, 2010/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

望月太郎(辞典項目)「市民社会と大学」(第1部リード文, p. 1)「シティズンシップ教育」(第1部項目, pp. 2-4)「授業評価と授業改善」(第7部項目, pp. 160-161)「大学ランキング」(第7部項目, pp. 170-172)「新自由主義的な大学改革と大学評価」(第7部コラム, pp. 172-173)「ボローニャプロセス」(第8部項目, pp. 176-177), 望月太郎, 大学評価学会(共編著)『大学評価基本用語100』晃洋書房, 2011/9

2-4. 口頭発表

Mochizuki, Taro, “The Role of Philosophical Practice in Disaster Recovery”, International Symposium on Philosophical Practices in Peace-Building and Sustainable Development, 17 March 2012, Pannasastra University of Cambodia, Phnom Penh, Pannasastra University of Cambodia, Phnom Penh, 2012/3

本坊恭子, 大塚ルリ子, Mochizuki, Taro, “Globalization of Education and FD via e-Learning Systems: Challenges and Prospects” The 2011 Annual Conference of the International Association for Asia Pacific Studies, November 26-27, 2011, 立命館アジア太平洋大学, 立命館アジア太平洋大学, 2011/11

Mochizuki, Taro, “Ethics of Disaster Recovery after the Devastating Earthquake and Tsunami in Northeast Japan”, Ethics and Climate Change: Energy Ethics after Fukushima, UNESCO-Bangkok, Rembrandt Hotel, Bangkok, 2011/8

望月太郎 「アンリとアーレント-「退きこもること」の意味」, 日本ミシェル・アンリ学会第2回研究大会, 日本ミシェル・アンリ学会, 東京大学, 2010/7

Mochizuki, Taro, “A Comparative Study of Civil Society Movements in Post-war Europe and Japan”, Euroculture, a challenge for interdisciplinary research, Groningen, Euroculture Conference, The University of Groningen, Groningen, 2010/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:望月太郎

課題番号: 21520014

研究題目: 批判的思考教育のアジア型適応

研究経費: 2010年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2011年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

批判的思考とその教育のアジア型適応について、日本と日本以外のアジア諸国(主としてタイ)での調査研究と教育実践に基づき、理論と実践の両面から、もっともパフォーマンスが高いと考えられるモデルを提示することを目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本科学者会議・常任幹事・事務局次長・国際部長

2011年5月～現在に至る

大学評価学会・理事

2006年3月～現在に至る

日仏哲学会・理事

2001年9月～現在に至る

3. 中村 征樹 准教授

1974 年生。2005 年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官、大阪大学大学教育実践センター准教授を経て、2012 年 4 月より大阪大学全学教育推進機構准教授。2007 年 11 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻: 科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

3-1. 論文

- 中村征樹 「研究不正への対応を超えて—リサーチ・インTEGRITY・アプローチとその含意」『メタフシカ』42, pp. 31-46, 2011/12
- 中村征樹, 早田幸政, 望月太郎他(共著) 「「高度教養教育」の位置付けと科目展開に関する取組事例に係る調査研究」『大阪大学大学教育実践センター紀要』7, pp. 9-18, 2011/3
- 中村征樹, 齋藤貴浩, 早田幸政他(共著) 「「授業改善のためのアンケート」の教員による活用に関する調査研究」『大阪大学大学教育実践センター紀要』7, pp. 29-47, 2011/3
- 中村征樹, 齋藤貴浩, 望月太郎他(共著) 「卒業生による全学共通教育ならびに大学教育に関する意識調査」『大阪大学大学教育実践センター紀要』7, pp. 49-68, 2011/3
- 中村征樹 「イギリスにおけるサイエンスコミュニケーションの取り組み—科学技術をめぐる社会との「対話」とは?」『日本機械学会誌』(日本機械学会), 114-1107, pp. 121-122, 2011/2
- 中村征樹 「学術・科学技術政策と大学の研究機能」早田幸政・諸星裕・青野透(共編著)『高等教育論入門—大学教育のこれから』ミネルヴァ書房, pp. 143-152, 2010/11
- 中村征樹 「ドイツ若手アカデミーの挑戦」『学術の動向』2010 年 9 月号, pp. 92-97, 2010/9

3-2. 著書

- 中村征樹, 桑原雅子, 川野祐二他(編) 『[新通史]日本の科学技術』3, pp. 577-598, 2011/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

- Nakamura, Masaki, “Rethinking Science Communication in Japan after 3.11” Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science, Society for Social Studies of Science, 2011/11
- 中村征樹 「科学技術史から読み解く世界史」第 55 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2011/11
- 中村征樹 「科学技術と現代社会」三国丘カレッジ, 大阪府立三国丘高等学校, 2011/9
- 中村征樹 「宇宙へ行くことの倫理的・哲学的課題」第 4 回宇宙総合学ユニットシンポジウム: 人類はなぜ宇宙へ行くのか〜宇宙生存学における課題〜, 京都大学, 2011/3
- 中村征樹, Ryuma Shineha, Arisa Ema et al. “Network Analysis of Keywords for Envisioning East Asian STS: A Comparative Analysis of STS journals” 4S/JSSTS Joint Meeting, 4S/JSSTS, The University of Tokyo, 2010/8
- 中村征樹 「科学技術への市民参加や科学コミュニケーションの現状と課題〜欧州・米国における動向を踏まえた我が国のあり方について〜」文部科学省科学技術政策研究所所内講演会, 文部科学省科学技術政策研究所, 文部科学省科学技術政策研究所, 2010/8
- 中村征樹 「研究不正をめぐる科学者コミュニティと社会」日本科学史学会第 57 回年会, 日本科学史学会, 東京海洋大学, 2010/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2009年度～2011年度、若手研究(B)、代表者:中村征樹

課題番号: 21700842

研究題目: 米国における研究者倫理の生成過程に関する研究

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

研究不正行為が、研究者コミュニティの枠を超えて、社会的・政治的争点として位置づけられ、行政や規制機関などによる介入・関与を背景として、研究者倫理が制度化されてきたプロセス(「研究者倫理」の明示化、防止措置・対策の制定、教育プログラムの確立など)について、とりわけ1980年代以降の米国での展開に注目して明らかにする。その際、研究者倫理の生成が、科学者コミュニティと社会との関係や、科学研究活動の社会的位置づけが大きく変容していくプロセスと互いに密接に関係しあっている点に注目し、研究者倫理の生成過程の解明をとおして、生命倫理の制度化とは違ったかたちでの、研究活動と社会との関係の変容を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

化学史学会・評議員	2011年1月～現在に至る
East Asian Science, Technology and Society: an International Journal・Book Review Board	2010年4月～2012年10月
大学評価学会・編集委員	2009年4月～現在に至る
化学史学会・理事	2009年1月～2010年12月
科学技術社会論学会・理事	2005年4月～現在に至る
大学評価学会・理事	2004年4月～現在に至る
日仏教育学会・編集委員	2003年9月～現在に至る

4. 入谷 秀一 助教

1975年生。2002年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2004年)。大阪大学非常勤講師を経て、2010年4月より現職。専攻:哲学、ドイツ思想史。

4-1. 論文

入谷秀一「全体性の幻想——アドルノのワグナー論再考」コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点(編)『コンフリクトの人文科学』4, 大阪大学出版会, pp. 125-153, 2012/1

4-2. 著書

入谷秀一他(共編)『生命と倫理の原理論——バイオサイエンスの時代における人間の未来——』大阪大学出版会, 223p., 2012/3

入谷秀一他(共著)『新しい時代をひらく 教養と社会』角川学芸出版, 208p., 2011/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入谷秀一(翻訳)「エバーハルト・オートランド『「生の技法」とはどのような技法か?』』『メタフィシカ』41, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 63-80, 2010/12

4-4. 口頭発表

入谷秀一 「制度の道徳的基礎づけは可能か——ホネット『イデオロギーとしての承認——道徳と権力との連関に寄せて』から承認論の現在を読む」批判的社会理論研究会 第二十一回研究例会, 大阪大学, 2012/3

入谷秀一 「アドルノとは誰か——バイオグラフィーのビオポリティーク」最先端ときめき推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」, 大阪大学, 2011/12

Nyuya, Shuichi, “What compels you to tell about yourself?—Autobiography, biography, and biopolitics—”シンポジウム「諸文化の境界における哲学像」, ウラジオストク極東技術大学, 2011/5

Nyuya, Shuichi, “About philosophy and education of philosophy in Japan”シンポジウム「諸文化の境界における哲学像」, ウラジオストク極東技術大学, 2011/5

入谷秀一 「アドルノの知識人論——「風景」をキー・ワードとして」日本倫理学会, 日本倫理学会, 2010/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入谷秀一 第1回関西倫理学会優秀論文賞, 関西倫理学会, 2006/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2011年度～2013年度、若手研究(B)、代表者:入谷秀一

課題番号: 23720010

研究題目: 現代フランクフルト学派研究: アドルノの影響作用史を基軸として

研究経費: 2011年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

現代ドイツのいわゆる「フランクフルト学派」の思想動向を、様々な観点から追跡し、その学際的活動の可能性を検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

ハイデガー・フォーラム第六期・実行委員

2010年10月～2011年9月

2-3 臨床哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：中岡 成文、浜渦 辰二

准教授：本間 直樹

助教：大北 全俊

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	16	11	0	1	0	3	0	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 9 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	8	1	1	0	0
2011	10	3	1	0	0
計	18	4	2	0	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題（例えば、科学技術、医療／看護／介護、教育、環境、アート／メディア／パフォーマンス、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、教育に関しては、臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させることを目標とし

た。「臨床哲学概論」等の授業を通して、過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にすることを目指した。また分科会形式をとる授業を設定することで、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することを目標とした。また、外国語（主として英語）の発信能力を組織的に養成することを目標とした。さらに、生命・医療の倫理学および人間学については、先端的テーマに関する教育を提供することを目標とした。

2. 研究

教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、研究に関しては、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。また、そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させることを目標とした。共同研究については、大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」と連携して、移民の政治哲学についての調査研究の実施、および、引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究の実施を目標とした。さらに、学内に結成された医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進することを目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実化させることを目標とした。すでに言及しているが、大学外のような職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させることでその教育的な意義も視野に入れた。また、そういった研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。さらに、京阪電鉄なにわ橋駅にある「アートエリア B1」など大学外の場所で、任意団体「café philo」と連携しながら、研究活動に関係する事柄について各種のイベントを実施することでじかに市民との交流を図ることを目標とした。また、大阪大学中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 3~4 回の「高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度~2011 年度)

1. 教育

「臨床哲学概論」等の授業を通して、過去の哲学思想の振り返りに基づく臨床哲学の理念の明確化を実施した。分科会形式をとる授業では、学生が積極的にイニシアティブをとり、学生の自主性を促進することに成功している。それらの成果として、学生がグループを形成して学外におけるワークショップに積極的に取り組んだり、哲学カフェを企画運営したり、身近なところで「臨床哲学」的なテーマを開拓してそれを研究的なものに結びつけたりしている。外国語の発信能力の養成についても、英語のみで行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行ったりして対応した。科学技術基礎論および科学技術コミュニケーションについては、学内講師を委嘱して先端的テーマについて教育を行った。

2. 研究

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行った。これらは企業・自治体・NPO などからも注目を集めた。また、これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な、またインターンシップにもつながる経験を積んだ。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用いつつ、京都の洛星高校で 5 年間にわたり、学生を巻

き込んで、あるいは学生の企画運営を監督しつつ、哲学の授業を行った。共同研究については、大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」と連携して、移民の政治哲学についての調査研究を行ったほか、引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究につながる活動を行った。さらに、学内に結成された医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進した。

3. 社会連携

社会連携については、これもすでに上記の教育・研究活動のおおよそが学外諸団体や市民との連携によって成立していることから明らかであるだろう。研究活動として移民の政治哲学に関する研究、CSCD と連携したサイエンスショップの実施、洛星高校など学外での哲学の授業の実施、「アートエリア B1」等での研究会の開催など大学の内外を越境する研究に従事し、かつそのような研究に学生もイニシアティブをとって従事するよう促し、かつそれに成功した。また、中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 3~4 回の「高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、毎回 100 人程度の参加者があり、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることに成功した。

IV. 自己点検・自己評価(2010 年度~2011 年度)

1. 教育

臨床哲学の理念の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育の目標としたのであるが、それについては大学内での授業および大学外と連携した活動への従事という点で、両者ともその目標は達成できたものと考えている。

2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、およびその研究成果を広く社会に発信するという点など、いずれの目標も達成されたものと考えている。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものとする。また、社会からの認知および反響もえられた。

V. 基本情報(2010 年度~2011 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	2(2)	3(3)	4(4)	0(0)	0(0)	9(9)
2011	0(0)	2(2)	2(2)	1(1)	0(0)	5(5)
計	2(2)	5(5)	6(6)	1(1)	0(0)	14(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	2	0	0	0	2
2011	0	5	5	0	0	10
計	0	7	5	0	0	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 著書

【2010年度】

〔博士後期〕

中村剛『社会福祉学原論—脱構築としての社会福祉学』みらい, pp. 1-296, 2010/5

中村剛『底辺にむかう志に学ぶ—“社会問題と連帯”の今』あいり出版, pp. 1-158, 2010/11

(2) 論文

【2010年度】

〔博士後期〕

中村剛「社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践—ジェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とした理論的枠組みと実践」関西福祉大学社会福祉学部社会福祉研究会編『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』14(1), pp. 79-86, 2010/9

中村剛「社会福祉学を支える基盤の探究—基盤を探究する方法としての現象学」日本福祉図書文献学会編『福祉図書文献研究』9, pp. 43-57, 2010/11

中村剛「福祉思想としての新たな公的責任—『自己責任論』を超越する福祉思想の形成—」日本社会福祉学会編『社会福祉学』51(3), pp. 5-17, 2010/11

中村剛「相談援助演習の考え方と内容—実践力の育成に焦点を当てて—」関西福祉大学社会福祉学部社会福祉研究会編『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』14(2), pp. 67-76, 2011/3

中村剛「社会福祉学の原理としての「存在」—人間本来の尊厳を露わにする「存在」の探究—」『臨床哲学』12, pp. 59-70, 2011/3

東暁雄「法システムと対話的合理性」『メタフュシカ』41, pp. 37-47, 2010/12

服部佐和子「個と類との間の一考察—キェルケゴール『不安の概念』を中心に—」『メタフュシカ』41, pp. 49-62, 2010/12

森本誠「熟議民主主義としての市民参加型会議—日本における現状と展望—」『待兼山論叢』44, pp. 39-54, 2010/12

小菅雅行「専門家と非専門家との対話型コミュニケーション活動の意義ならびに、その実現に向けた設計方法の分析と検討」『臨床哲学』12, pp. 47-58, 2011/3

【2011 年度】

〔博士後期〕

中西チヨキ「看護における語ることと聴くことに向けて」『メタフュシカ』42, pp. 109-122, 2011/12

高山佳子「語りえなさをめぐる「人格」と「非人格的なもの」」『待兼山論叢』45, pp. 35-50, 2011/12

中村剛「福祉哲学とは何か —「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」の序論として—」『メタフュシカ』42, pp. 123-134, 2011/12

中村剛「社会福祉における承認の重要性—A.ホネットの承認論を理論的基盤として」『社会福祉研究』111, pp. 85-91, 2011/07

中村剛「福祉思想におけるケアの倫理の可能性—正義の倫理を補完する福祉思想—」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』15(2), pp. 37-44, 2012/3

(3)口頭発表

【2010 年度】

〔博士前期〕

中川雅道「アナロジーによる問いの連鎖とその治療—ウィトゲンシュタイン『青色本』から」関西倫理学会 2010 年度大会, 於 : 南山大学, 2010/11/6

〔博士後期〕

高山佳子「生命とケアをつなぐもの——ゾーエーとビオスの生命論的差異を手がかりに——」関西倫理学会 2010 年度大会, 於 : 南山大学, 2010/11/6

森本誠一「何が平和の促進を実現するのか？」第 3 回哲学ワークショップ, 於 : 大阪大学, 2011/1/10

【2011 年度】

〔博士前期〕

田口了麻「死刑確定囚におけるその存在の意味と罪・死の関係性」応用哲学会臨時大会, 於 : 京都大学, 2011/9/24

辻明典「南相馬と臨床哲学」第 26 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学, 2011/10/22

〔博士後期〕

森本誠一「医療現場で働く人びとを対象とした倫理教育モデルの提案」日本医学哲学・倫理学会, 於 : 東京大学, 2011/11/5

森本誠一「市民参加型社会へ向けた公衆関与のあり方について —英国ビーコンズ・プロジェクトの取り組みを手がかりに」第 26 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学, 2011/10/22

東暁雄「主体・環境・法システム —法規範はいかなる価値によって定式化され得るのか?—」関西倫理学会, 於 : 関西大学, 2011/10/30

東暁雄「手続的正義と規範としての法」第 26 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学, 2011/10/22

中西チヨキ「病と看護と語ること聴くこと」第 25 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学, 2011/7/9

服部佐和子「類と個の間の一考察——キェルケゴール『不安の概念』を中心に——」キェルケゴール協会, 於 : 大谷大学, 2011/6/19

服部佐和子「内観と自己の時間を巡る一考察」日本内観学会, 於 : 文教大学, 2011/6/25

山口弘太郎『『危機』書における「生活世界の存在論」について』第 10 回フッサール研究会, 於 : 東京大学, 2012/3/4

(4)その他(書評・翻訳など)

【2010 年度】

〔博士後期〕

中村剛「書評りぷらい 福祉哲学の構想：福祉の思考空間を切り拓く」日本社会福祉学会編『社会福祉学』51(1), pp. 106-108, 2010/5

中村剛「論壇 社会的養護を支える倫理と正義」全国児童養護施設協議会編『季刊 児童養護』41(1), pp. 2-3, 2010/6
小菅雅行ほか「臨床哲学自閉症分科会ワーキングペーパー」『臨床哲学』12, pp. 92-101, 2011/3

【2011 年度】

〔博士前期〕

辻明典「《研究ノート》 沁み透る寂寥 一生所への手記として」『臨床哲学』13, pp. 107-115, 2012/3

川崎唯史「《翻訳》 ディーター・ローマー『非言語的思考とコミュニケーション』 —AAC への応用という側面とともに」『臨床哲学』13, pp. 62-84, 2012/3

〔博士後期〕

山口弘太郎「《文献紹介》 榎原哲也『フッサー現象学の生成 方法の成立と展開』」『メタフュシカ』42, pp. 151-157, 2011/12

正置友子「《研究ノート》「なぜ生きているのか、という問い」（10 歳）から「臨床哲学に身を置く」（71 歳）まで —臨床哲学に、一番遅くやってきたものとして、考えてみる—」『臨床哲学』13, pp. 91-106, 2012/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2011 年度 PD : 1 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 2 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2010 年度 : 0 名 2011 年度 : 1 名

9. 刊行物

2010 年度 『臨床哲学 vol.12』

2011 年度 『臨床哲学 vol.13』『臨床哲学のメチエ vol.17』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2010年度 関西倫理学会事務局

「Roundtable with prof. Nick Zangwill (ニック・ザングウィル教授を囲む会)」(哲学哲学史研究室と共催)	2011年4月27日
鷺田総長最終講義「大学と人文学」大阪大学会館講堂	2011年8月4日
第24回臨床哲学研究会	2011年4月9日
第25回臨床哲学研究会	2011年7月9日
第26回臨床哲学研究会	2011年10月8日
第27回臨床哲学研究会	2012年1月14日
「ケアの臨床哲学」研究会主催シンポジウム「高齢社会を考える」シリーズ	
シンポジウム「高齢社会における終末期医療を考える」大阪大学中之島センター2階会議室1	2010年4月25日
シンポジウム「高齢社会におけるホスピスを考える」大阪大学中之島センター7階セミナー室1	2010年8月29日
シンポジウム「高齢社会における施設での看取りを考える」大阪大学中之島センター10階ホール	2011年1月15日
シンポジウム「終末期ケアと死生観」大阪大学中之島センター7階セミナー室	2011年3月12日
シンポジウム「高齢社会における人工栄養を考える」大阪大学中之島センター7階セミナー室	2011年5月29日
シンポジウム「高齢社会における認知症のターミナルを考える」大阪大学会館講堂	2011年8月21日
シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」大阪大学中之島センター7階セミナー室	2012年1月14日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」、あるいは大阪大学医療人文学研究会との共催で研究会を年にそれぞれ1-3回開いている。

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 中岡 成文 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。福岡女子大学専任講師などを経て1996年9月、大阪大学教授。医学系研究科「医の倫理学」教授を兼任。2005年から2年間、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

1-1. 論文

中岡成文 「遺伝子検査の規制枠組みと商業的遺伝子検査の関連:欧州(ドイツ語圏)」(共著)『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究、平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))、研究代表者・山中浩司』pp. 37-41, 2012/3

中岡成文 「体質遺伝子検査についての関係者の見解——認定遺伝カウンセラーの見解」『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究、平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))、研究代表者・山中浩司』pp. 106-125, 2012/3

Nakaoka, Narifumi, “Self-transformation and Its Philosophical Support” 輔仁大学(台湾)(共著) *Monthly Review of Philosophy and Culture*, 446, 哲学與文化月刊雑誌社, pp. 3-20, 2011/7

中岡成文 「自我轉化及哲学支持」輔仁大学(台湾)(共著)『哲学與文化』446, 哲学與文化月刊雑誌社, pp. 21-33, 2011/7

中岡成文 「誰の声を聴くか——医療におけるコミュニケーションデザイン」(共著)『日本語学』30-2, 明治書院, pp. 54-63, 2011/2

1-2. 著書

中岡成文, 戸田山和久, 出口康夫他(共著)『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 274-284, 2011/5

本間直樹, 鷺田清一, 中岡成文(共編)『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会, pp. 2-14, pp. 32-36, pp. 158-166, pp. 167-177, 2010/9

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

中岡成文「よいパフォーマンスのための「持続可能な倫理」」第5回臨床倫理事例研究会シンポジウム, 臨床倫理事例研究会, 大阪大学, 2012/2

Nakaoka, Narifumi, "Toward an empowering ethics in healthcare and research", 熊本大学グローバルCOEリエゾンラボ研究会, 熊本大学発症医学研究所カンフェレンス室, 2012/2

Nakaoka, Narifumi, "Kyoto-School Philosophers Confronting Western Modernity" 第1回日蘭学生会議, 日蘭学生会議, 大阪大学, 2010/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

応用哲学会・理事	2010年6月～2012年3月
関西倫理学会・委員	2002年4月～現在に至る
日本倫理学会・評議員	1998年4月～現在に至る

2. 浜渦 辰二 教授

1952年生。1984年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学博士(九州大学)。1989年、九州大学文学部助手。1991年、静岡大学人文学部助教授。1996年、同教授。2008年4月より現職。専攻: 哲学/倫理学/臨床哲学。

2-1. 論文

浜渦辰二「生老病死について」『最期の居場所—暮らしの中のホスピス』pp. 6-25, 2012/1

浜渦辰二「ケアの現象学への途上で—故・渡邊美千代を偲んで—」『メタフィシカ』42, pp. 9-22, 2011/12

Hamauzu, Shinji, "To a Phenomenological Approach of the Problem of Organ Transplant after Brain Death" *Clinical Philosophy*, 12, pp. 20-30, 2011/3

浜渦辰二「ビジネスとケアをつなぐ倫理」『異文化コミュニケーション研究』23, pp. 123-132, 2011/3

浜渦辰二「人間の成熟をめぐる—成熟の間主観性という次元」『哲学と現代』(名古屋哲学研究会), 26, pp. 6-19, 2011/2

Hamauzu, Shinji, "Identity and Alterity - Schutz and Husserl on Phenomenology of Intersubjectivity - "Kwok-Ying Lau, Chan-Fai Cheung, Tze-Wan Kwan(eds.) *Identity and Alterity -Phenomenology and Cultural Traditions*, Konigshausen & Neumann, pp. 99-112, 2010/12

浜渦辰二「脳死臓器移植問題への現象学的アプローチにむけて」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 45, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2010/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浜渦辰二, 川崎唯史(共訳)(翻訳)「ディーター・ローマー」『臨床哲学』13, 大阪大学臨床哲学教室, pp. 62-90, 2012/3

浜渦辰二(翻訳)「ラズロ・テンゲイ」『生活世界における経験』『臨床哲学』11, 大阪大学臨床哲学教室, pp. 151-164, 2010/6

2-4. 口頭発表

浜渦辰二 「死生観が必要である」シンポジウム, 高齢者ケア・フォーラム, キャンパスプラザ京都, 2012/2

浜渦辰二 「応用現象学とケア論～北欧現象学との交流のなかから」シンポジウム, 静岡大学哲学会, 静岡大学, 2011/11

浜渦辰二 「ヒューマン・ケアと人間観—いのちの暮らしと人生を支える—」基調講演, 人間福祉学会, 岐阜都ホテル, 2011/11

浜渦辰二 「直観とそれを隠れて支えているもの—「直観と倫理」へのフッサール現象学からのアプローチ—」シンポジウム, 関西倫理学会, 関西大学, 2011/10

浜渦辰二 「死と向き合うこと」ホスピスボランティア講座, 東神戸病院緩和ケア病棟, 六甲道勤労市民センター, 2011/9

浜渦辰二, 大北全俊, 紀平知樹「ケアとシステム」ワークショップ, 日本倫理学会, 富山大学, 2011/9

浜渦辰二 「終末期を考える～尊厳死～」第40回「ケアの人間学」合同研究会, 「ケアの人間学」合同研究会, 静岡市産学交流センター, 2011/1

浜渦辰二 「ケア学ヨーロッパアカデミーとボラス大学」科研「北欧ケア」第3回研究会, 科研「北欧ケア」プロジェクト, 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス, 2011/1

Hamazu, Shinji, "To a Phenomenological Investigation on the Problem of Organtransplantation after Brain Death" The Fourth International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle): Border-Crossing, PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), 国立中山大学(台湾、高雄), 2010/12

浜渦辰二 「リビングウィルについて」市立砺波総合病院緩和ケア勉強会: 終末期を考える, 市立砺波総合病院緩和ケア勉強会, 市立砺波総合病院, 2010/7

浜渦辰二 「人間の成熟をめぐる一成熟の間主観性という次元—」名古屋哲学研究会: 人間の成熟をめぐる, 名古屋哲学研究会, 名古屋市立大学, 2010/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(B) 海外、代表者: 浜渦辰二

課題番号: 22401016

研究題目: 北欧ケアの実地調査に基づく理論的基盤と哲学的背景の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 1,350,000円

2011年度 直接経費 4,000,000円 間接経費 1,200,000円

研究の目的:

北欧諸国は福祉先進国として知られ、わが国からもたびたび施設や制度の調査が行われ、福祉・ケアの研究者や政治学者・経済学者によって報告され、ノーマライゼーションの理念やスウェーデン・モデルの八つの主導価値(自由、平等、機会均等、平和、安全、安心感、連帯感・協同、公正)が紹介されているものの、それがどういう理論的基礎をもち、さらにどういう哲学的背景をもったものなのかまでは十分明らかにされていない。北欧ケアの理論的基礎と哲学的背景を、単なる文献研究ではなく、実地の現場のなかでそれがどう生かされているかを学際的に調査し、それに基づいた学際的な研究として展開することは、わが国でもこれからの超高齢社会のための福祉・ケアの理論的基盤作りが急務となっているなかで大いに貢献することが期待される。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

九州大学哲学会・委員	2005年4月～現在に至る
日本現象学会・委員	2000年4月～現在に至る
西日本哲学会・委員	2000年4月～現在に至る
静岡大学哲学会・幹事	1991年4月～現在に至る

3. 本間 直樹 准教授

1970年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に着任し、文学研究科を兼任。2006年4月より現職。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

3-1. 論文

-
- 本間直樹, 松川絵里他(共著)「ひとつではない哲学(中之島哲学コレクション)」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』6, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 17-36, 2012/3
- 本間直樹, 久保田テツ(共著)「CSCD インタビューズ:CSCD の顔を撮る」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』6, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 69-74, 2012/3
- 本間直樹「教えない授業は可能か? ——対話学習と対話進行役養成プログラムにおけるネオ・ソクラティックダイアログの活用」大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室(編)『臨床哲学』12, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 31-46, 2011/3
- 本間直樹, 高橋綾(共著)「「どっちに入るかな?」フラフープを利用した授業から——小学校で哲学する(2)」大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室(編)『臨床哲学』12, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 71-91, 2011/3
- 本間直樹, 西村コミ他(共著)「「からだトーク」あるいは身体表現ワークショップの映像記録化について」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』4, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 75-85, 2011/3

3-2. 著書

-
- 中岡成文, 高山佳子, 本間直樹他(共著)『コンフリクトと移民—新しい研究の射程』大阪大学出版会, 340p., 2012/3
- 本間直樹, 鷲田清一, 中岡成文他(共編著)『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会, 310p., 2010/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

-
- 本間直樹, 新宮一成(監訳)『フロイト全集』14, 岩波書店, pp. 1-425, 2010/9

3-4. 口頭発表

-
- 本間直樹「ネオ・ソクラティックダイアログの基本的な進め方」日本倫理学会第61回大会ワークショップ:「臨床哲学と公共的対話:ネオ・ソクラティックダイアログ(NSD)の可能性」, 日本倫理学会, 慶應大学, 2010/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2010年度、若手研究(A)、代表者:本間直樹

課題番号:20682001

研究題目:哲学対話における反省的・協働的思考:学年と専門を横断する対話学習プログラム研究

研究経費:2010年度 直接経費 1,700,000円 間接経費 510,000円

研究の目的:

本研究は、哲学対話を通して反省的・協働的思考を学習するプログラムである「子どもの哲学」の重要性を確かなものとしつつ、さらに年齢・学年・専門を横断して学習される哲学対話プログラム実施の仕組みを考案し、試行を重ねながらその意義と実効性を理論・経験研究の双方から検証することを課題とする。こうした横断的な学習プログラム作成と試行にむけて、具体的に以下の5つの研究に取り組む。

1. 協働的学習過程における反省的・批判的思考の働きを考察する基礎研究、2. 各種専門教育に並行して行われる対話教育に関する研究、3. 哲学学習者・研究者に求められる対話進行役能力に関わる実践的研究、4. 学習-教育プログラムのデザインに関する研究、5. 学習のためのカリキュラムとプログラムに関する海外調査、とりわけアジア地域における哲学対話教育の状況調査。

さらに、これら研究プログラムを実際に動かしながら、下記の5つの点についてどのように具体的な解答を与えることができるのかを考察し、これらプログラムを分析・評価を試みる。

1. 初等・中等教育従事者を巻き込んだ哲学対話の学習プログラム作成のために、どのような仕組みが必要か。2. 学部・大学院において対話学習を新しい教養教育の在り方として位置づけることができるか、その意義は何か。3. 大学院における哲学・倫理学教育に対話進行役の学習プログラムをどのように導入するか。4. 教育全体の課題の探究のなかで、反省的・協働的思考の学習がどのような役割をもつのか。5. 高等教育における哲学教育にどのような可能性があるのか。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アートミーツケア学会・理事

2006年10月～現在に至る

4. 大北 全俊 助教

1974年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学大学院医学系研究科「医の倫理学」教務補佐員等を経て、2009年4月に財団法人エイズ予防財団リサーチ・レジデント(国立大阪医療センターに配属)に着任。2010年4月より現職。専攻:哲学/倫理学。

4-1. 論文

大北全俊 「〈ヘルスコミュニケーションの倫理〉のための試論」日本保健医療社会学会機関紙編集委員会『保健医療社会学会論集』(日本保健医療社会学会), 22-2, pp. 22-29, 2012/1

大北全俊 「M.フーコーの社会医学/公衆衛生の記述について」大阪大学文学会『待兼山論叢』45, pp. 1-15, 2011/12

大北全俊 「HIV 感染予防介入の政治哲学・公衆衛生倫理学の研究」服部健司『HIV 感染予防個別施策層における予防情報アクセスに関する研究』pp. 73-76, 2011/3

大北全俊 et al. (共著) 「急性感染者の早期発見のための医療機関と社会とのコミュニケーションの形成」白阪琢磨『HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究』pp. 27-28, 2011/3

大北全俊 「HIV 感染症対策が内包する枠組みに関する政治哲学的分析の試み」大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフィシカ』41, pp. 1-12, 2010/12

大北全俊 「感染症の拡大を防止することと個人の権利を制限すること—インフルエンザ対策などにみられる倫理的な問題について—」日本生命倫理学会『生命倫理』(日本生命倫理学会), 21, pp. 94-101, 2010/9

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

Okita, Taketoshi, "On the political and ethical implications of public health actions concerning HIV infection" The 6th International Conference on Applied Ethics, International Conference on Applied Ethics, 北海道大学, 2011/11

大北全俊 「インフルエンザ対策をめぐる倫理的な議論の析出の試み」第 23 回日本生命倫理学会, 日本生命倫理学会, 早稲田大学, 2011/10

浜渦辰二, 大北全俊, 紀平知樹他 「組織・制度・経済からみる「ケア」」第 62 回日本倫理学会, 日本倫理学会, 富山大学, 2011/9

大北全俊他 「疾病対策をめぐるヘルスコミュニケーション」第 37 回日本保健医療社会学会大会, 日本保健医療社会学会, 大阪大学, 2011/5

大北全俊 et al. 「急性感染者の早期発見の促進に関する倫理的な課題について」第 24 回日本エイズ学会学術集会, 日本エイズ学会, 高輪プリンスホテル, 2010/11

大北全俊 et al. 「地方在住の陽性者のライフストーリー研究に基づく HIV 感染症の予防対策の概念枠組みの検討に関する研究」第 24 回日本エイズ学会学術集会, 日本エイズ学会, 高輪プリンスホテル, 2010/11

大北全俊 「病をめぐる個人と社会の関係に関する記述について—public health ethics の議論より—」第 29 回日本医学哲学・倫理学会, 日本医学哲学・倫理学会, 岩手医科大学, 2010/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大北全俊 日本生命倫理学会若手論文奨励賞, 日本生命倫理学会, 2010/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2011 年度～2013 年度、若手研究(B)、代表者:大北全俊

課題番号: 23720011

研究題目: HIV 感染症を主とする public health の政治哲学的枠組みの分析

研究経費: 2011 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

健康増進・疾病予防といった public health(公衆衛生)に関する事象、なかでも HIV 感染症をめぐる事象に焦点を絞りながら、主に個人と社会の関係をめぐる問題について哲学的・倫理的な見地から分析し、現実の事象に隠された政治哲学的な枠組みを明確にすることを目的とする。また、HIV 感染症以外の public health に関する諸事象について分析する場合にも有効な哲学的・倫理的な議論の枠組みを構築することを試みる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

特定非営利活動法人 関西エイズ対策協議会・理事(副代表理事)

2011 年 6 月～現在に至る

2-4 中国哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	2	1	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	1	1	0	0	0
2011	1	0	0	0	0
計	2	1	0	0	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むための必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室 HP の更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、

本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①新出土文献の研究を推進し、海外学術調査を進め、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を刊行する。③懐徳堂研究会の事務局として、懐徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する。などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、財団法人懐徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懐徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進めて公開する。②中国や台湾の大学と共催して国際学会を開催する。③懐徳堂アーカイブ講座（懐徳堂記念会）の開催準備を進め、運営に協力する。などである。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解説に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。また、大学院生 1 名については、日本学術振興会特別研究員 DC2 に採用され、博士予備論文にも合格した。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、懐徳堂事業や中国出土文献に関する研究情報について、研究室 HP に公開し、随時更新を行った。

2. 研究

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会（旧戦国楚簡研究会）が、上海博物館、浙江大学などの学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 51 号、第 52 号、第 53 号を刊行した。懐徳堂文庫の調査研究については、その成果の一部を『懐徳堂研究』第 2 号および第 3 号に掲載した（湯浅）。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。特に、湯浅教授は、中国・台湾で開催された国際学会において 2 年連続で研究発表を行った。大学院生も、懐徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

3. 社会連携

具体的な成果として、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懐徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進め、北京大学（儒蔵編纂委員会）に提供した。②懐徳堂記念会創立 100 周年記念事業に協力した。特に、平成 22 年 10 月 27 日～12 月 20 日まで大阪歴史博物館で開催された「懐徳堂展」については、研究室は、その展示準備に協力し、また、湯浅教授は、複数の新聞社の取材に応ずるとともに、期間中、資料解説の講演会「懐徳堂アーカイブ講座」において講師を務めた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懐徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。また、名古屋大学の中国学関係研究室との定期的な研究交流はすでに 10 回を超えたが、これも、学生の学力向上に資するものとして評価できる。

2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

3. 社会連携

国際学術交流は、儒蔵の編纂協力や国際学会の共催という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懐徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教授・学生とも全面的な協力を努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)
2011	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)
計	4(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	0	0	0	0
2011	1	0	5	0	0	6
計	1	0	5	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

金城未来「上博楚簡『鄭子家喪』訳注」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 第51号, pp. 105-130, 2010/10

金城未来「銀雀山漢墓竹簡「兵之恒失」考釈」『待兼山論叢』(哲学篇), 44号, pp. 35-50, 2010/12

【2011年度】

〔博士後期〕

金城未来「清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』の思想史的特質」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 第53号, pp. 213-228, 2011/6

金城未来「銀雀山漢墓竹簡「五議」について」『待兼山論叢』(哲学篇), 45号, pp. 1-16, 2011/12

(2)口頭発表

【2011年度】

〔博士後期〕

金城未来「『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』解題」中国出土文献研究会(第42回研究会), 2011/2

金城未来「『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』訳注」中国出土文献研究会(第43回研究会), 2011/3

金城未来「清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』初探」東亜文化交渉学会第三屆年會, 於華中師範大學, 2011/5/8

金城未来「清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』の文献的特質」中国出土文献研究会(第45回研究会), 2011/10

金城未来「上博楚簡『成王既邦』について」中国出土文献研究会(第46回研究会), 2011/12

金城未来「上博楚簡『成王既邦』における「天子之正道」について」中国出土文献研究会(第47回研究会), 2012/1

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔博士後期〕

竹村渉・金城未来「(翻訳)李学勤「清華簡『保訓』の諸問題を論ず」(共同・翻訳参加),『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 第51号, pp. 131-140, 2010/10

金城未来「懷徳堂関係研究文献提要(二十八)」『懷徳』(懷徳堂記念会), 79, pp. 52-54, 2011/1

竹村渉・金城未来「(翻訳)劉国忠「周文王称王史事弁」(共同・翻訳参加),『中国出土文献研究2010』(『中国研究集刊』別冊(大阪大学中国学会), 第52号, pp. 92-104, 2011/2

【2011年度】

〔博士後期〕

金城未来「『懷徳』(51号～79号)総目次」「懷徳堂関係研究文献提要」(52号～79号)一覧」『懷徳』(懷徳堂記念会), 80, 2012/1

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2011年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2011年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2010 年度：2 名 2011 年度：1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 2 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度：0 名 2011 年度：0 名

9. 刊行物

2010 年度 『中国研究集刊』・半年刊(年 2 回)

2011 年度 『中国研究集刊』(第 53 号を 6 月に刊行)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受) 2000 年～現在に至る
中国出土文献研究会(2010 年 10 月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受) 1998 年～現在に至る
大阪大学中国学会(学会、事務局引受) 1984 年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 40 回戦国楚簡研究会(於大阪大学中国哲学資料室(19 日)・ホテルグランヴィア大阪(20 日午前))

2010 年 7 月 19-20 日

第 41 回中国出土文献研究会(戦国楚簡研究会を改称、於広島オフィスセンター 第 15 会議室)

2010 年 10 月 10-11 日

第 10 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会

2010 年 11 月 20 日

第 42 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2011 年 2 月 11-12 日

第 43 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2011 年 3 月 19-21 日

第 44 回中国出土文献研究会(於新宿ワシントンホテル新館会議室)

2011 年 7 月 17 日

第 45 回中国出土文献研究会(於博多第一ホテル会議室)

2011 年 10 月 9-10 日

第 46 回中国出土文献研究会(於貸会議室フォーラムミカサ(東京))

2011 年 12 月 11 日

第 47 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2012 年 1 月 21-22 日

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学、1997 年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻：中国哲学／中国古代思想史／懐徳堂研究。

1-1. 論文

- 湯浅邦弘「興軍の時—銀雀山漢墓竹簡「起師」について—」『大阪大学文学研究科紀要』, 52, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-31, 2012/3
- 湯浅邦弘「漢代における『論語』の伝播」『国語教育論叢』, 21, 島根大学教育学部国文学会, pp. 129-143, 2012/3
- 湯浅邦弘「朱子『家礼』と懷徳堂『喪祭私説』」『朱子家礼と東アジアの文化交渉』汲古書院, pp. 367-382, 2012/3
- 湯浅邦弘「懷徳堂と白鹿洞書院」『懷徳堂研究』, 3, 大阪大学懷徳堂研究センター, pp. 17-25, 2012/2
- 湯浅邦弘「幕末大坂の知的拠点—懷徳堂・適塾・泊園書院—」『泊園記念会創立五十周年記念論文集』, 関西大学出版部, pp. 121-142, 2011/10
- 湯浅邦弘「太姒の夢と文王の訓戒—清華簡「程寤」考—」『中国研究集刊』, 53, 大阪大学中国学会, pp. 183-198, 2011/6
- 湯浅邦弘「銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」について」『中国研究集刊』, 52, 大阪大学中国学会, pp. 23-41, 2011/2
- 湯浅邦弘「懷徳堂展と資料修復」『懷徳堂研究』, 2, 大阪大学懷徳堂研究センター, pp. 3-13, 2011/2

1-2. 著書

- 湯浅邦弘『論語』中央公論新社, 304p., 2012/3
- 湯浅邦弘(編)『概説中国思想史』ミネルヴァ書房, 406p., pp. 1-32, pp. 210-211, pp. 367-385, 2010/10
- 湯浅邦弘『故事成語の誕生と変容』角川学芸出版, 203p., 2010/9
- 湯浅邦弘『中国古典に探る座右の銘』角川 SS コミュニケーションズ, 190p., 2010/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 湯浅邦弘(解説)「中国における道徳思想(徳育論)」『道徳性形成・徳育論』(放送大学大学院), 財団法人放送大学教育振興会, pp. 46-71, 2011/9(放送大学大学院教材、第三章・第四章)
- 湯浅邦弘(解説)「よみがえる兵典—『孫子』解説—」『孫子』中央公論新社(中央公論新社・中公クラシックス『孫子』解説), pp. 1-25, 2011/7
- 湯浅邦弘(解説)「『温故知新』のリーダー論」『春秋』2011年4月号, 春秋社, pp. 9-11, 2011/3
- 湯浅邦弘(解説)「知徳の遺産 世紀を超えて—懷徳堂記念会創立百周年記念映像の制作—」『懷徳』79, (財)懷徳堂記念会, pp. 58-61, 2011/1
- 湯浅邦弘(解説)「谷文晁「帰馬放牛図」に描かれた花—懷徳堂展によせて—」『大阪大学図書館報』44-2, 大阪大学附属図書館, pp. 3-4, 2010/10

1-4. 口頭発表

- 湯浅邦弘「懷徳堂文庫の歴史」第13回図書館総合展フォーラム, パシフィコ横浜, 2011/11
- 湯浅邦弘「日本漢學與朱子學—江戸時代大阪「懷徳堂」的學術—」朱子學國際學術研討會, 南昌大学, 2011/10
- 湯浅邦弘「懷徳堂のはぐくんだもの—大阪人の知的風土—」生き物文化誌学会例会, 大阪大学中之島センター, 2011/10
- 湯浅邦弘「近世大坂の美と学び—懷徳堂文庫5万点の資料から—」財団法人頴川美術館文化講座, 頴川美術館, 2011/7
- 湯浅邦弘「中国の古典—漢字で記された人類の英知—」夢ナビライブ 2011, インテックス大阪, 2011/7
- 湯浅邦弘「興軍之時—關於銀雀山漢墓竹簡「起師」—」東亞文化交渉学会第三屆年会, 華中師範大学, 2011/5
- 湯浅邦弘「太姒之夢與文王訓誡—清華簡《程寤》考—」武漢大学簡帛研究中心講演会, 武漢大学, 2011/5
- 湯浅邦弘「大阪力の源流—「懷徳堂」に学ぶ—」第301回パブリック・アフェアーズ懇談会, クラブ関西, 2011/4
- 湯浅邦弘「『懷徳堂文庫』資料解説」「懷徳堂文庫」資料修復研修会—修復技術の今・昔—, 大阪大学附属図書館, 2010/12
- 湯浅邦弘「よみがえる懷徳堂—五万点の貴重資料に学ぶ—」懷徳堂アーカイブ講座, (財)懷徳堂記念会, 大阪歴史博物館, 2010/11
- 湯浅邦弘「現代社会を生き抜く智恵—中国古典に学ぶ—」火会例会, リーガロイヤルホテル, 2010/11
- 湯浅邦弘「幕末大坂の知的拠点—懷徳堂・適塾・泊園書院—」泊園記念会創立五十周年記念国際シンポジウム, 関西大学, 2010/10

湯浅邦弘 「銀雀山漢墓竹簡《論政論兵之類》考釋」先秦文本與思想國際學術研討會，台湾大学，2010/8

湯浅邦弘 「諸子百家の思想—新出土文献から考える—」第二十六回 漢文教育研修会，漢文教育学会，湯島聖堂斯文会館，2010/7

湯浅邦弘 「懷徳堂學派的《大學》理解—中井履軒《大學雜議》」2010 國際漢學與東亞文化「國際學術研討會，台湾師範大学，2010/6

湯浅邦弘 「近世日本における漢学塾の印章—懷徳堂印の研究—」東アジア文化交渉学会第二回大会，台湾大学，2010/5

湯浅邦弘 「山東省曲阜の孔子廟、孔林、孔府」懷徳堂春季講座，(財)懷徳堂記念会，大阪大学中之島センター，2010/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)，大阪大学，2011/7

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003年度前期)，大阪大学共通教育機構，2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号: 21320012

研究題目: 戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

2011年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

本研究は、現在、中国古代思想史研究の分野で世界的に注目を集めている戦国楚簡の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦思想史の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』(馬承源主編、上海古籍出版社)に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、また、中国・台湾などで活発な活動を続けている出土文献関係の学会・研究会と学術交流を進める。従来の通説に大幅な修正を加えた、新しい中国古代思想史の記述を行いたい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員(東方学査読委員)	2011年7月～現在に至る
全国漢文教育学会・理事	2005年4月～現在に至る
日本道教学会・理事	2004年4月～現在に至る
懷徳堂研究会・代表	2000年4月～現在に至る
中国出土資料学会・理事	1989年4月～現在に至る

2. 辛賢講師

1967年、ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻:中国哲学、易学哲学史。

2-1. 論文

辛賢 「邵雍「先天」初探—元会運世法の暦年構造—」井川義次(編)『宋学西漸IV—西洋哲学における宋明理学の受容と展開—』平成23年度科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号21520044)研究成果報告書』pp. 23-36, 2012/3

辛賢 「「首」から「数」へ—張行成の『翼元』をめぐる—」堀池信夫(編)『知のユーラシア』明治書院, pp. 304-324, 2011/7

辛賢 「《太玄》的“首”与“赞”」曹峰(編)『日本学者論中国哲学史』華東師範大学出版社, pp. 264-276, 2010/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

辛賢(訳注)『朱子語類』訳注一卷三十四論語十六述而篇(その1)堀池信夫編『宋学西漸Ⅲ—中国イスラーム哲学の形成—(平成20年度～平成22年度科学研究費補助金(基盤研究 B)研究成果報告書、研究代表者 堀池信夫(筑波大学))』pp. 45-62, 2011/3

2-4. 口頭発表

辛賢 「分科会1(思想・文学)の総評」第2回日中学者中国古代史論壇:魏晋期南北朝期における貴族制の形成と三教・文学, 東方学会, 日本教育会館(東京), 2010/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:辛賢

課題番号: 23520053

研究題目: 宋代易学の再検討—象数学派を中心に—

研究経費: 2011年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

今井宇三郎『宋代易学の研究』(1958)以来、半世紀もの間、手薄となっている宋代易学史を再検討し、今井の段階で及ばなかった儒・道教の両面における術数学の成果を総合し、新たな宋代易学史の構築を目指す。「古易」と「新易」が交差する唐・宋に焦点を当て、両代における漢易術数の波及、その展開の様相を考察し、宋学における「数」「象」の哲学的意味について分析を試みる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事	2012年1月～現在に至る
日本中国学会・HP委員会委員	2007年4月～現在に至る
三国志学会・評議員	2006年7月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：榎本 文雄

講師：堂山英次郎

助教：生野 昌範

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
3	3	3	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	0	3	0	0	0
2011	1	1	0	0	0
計	1	4	0	0	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。

3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、既に数年前から始めていた書評発表などの新たな形を定着・発展させ、また臨時で教員が発表したり、学外からゲストスピーカーを迎えるなどして、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流を活発に行なった。教員も学生も、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。その他、教員 1 名が他研究者による 2 種類の科学研究費の研究分担者となり、重要な役割を担った。そのうちの一つでは、本専門分野の招へい研究員や、本専門分野出身の本学・他大学の非常勤講師、さらに本専門分野の大学院生を研究協力者として、インド仏教の基本的術語の基準訳語集を構築するために、それら術語の定義的用例を収集する作業を実施した。また教授会メンバーの教員 2 名は 2011 年度の文学研究科内の共同研究に参加し、研究会での発表・議論や論文の執筆を行い、他分野の研究者との交流を図った。国外での研究活動としては、教員 1 名が 2011 年秋にルーマニアで行われた国際学会で招待発表を行ったことと、別の教員が「2011 年度多言語多文化研究に向けた複合派遣プログラム (OVC) : 個人リサーチ型」による若手研究員の海外派遣に採用され、同年秋から冬にかけてドイツのゲッティンゲンを訪れ、第一線で活躍する研究者のもとで研究を大きく進展させたことは特記すべきである。

3. 社会連携

教員 1 名が、在阪銀行グループが顧客を対象に発行している機関誌 (2011 年 9 月号) の「巻頭言」を執筆した。研究・教育に関する情報発信ができたと同時に、反響も得ることができた。また同教員は、2011 年度の春休み (2012 年) に「ヴェーダ」と題して大阪の京橋で 3 回の連続講演を実施した。教授会メンバーの教員はいずれも「日本印度学仏教学会」等で理事・評議員等の職務を遂行している。また同両教員は、2011 年度に開催された日本南アジア学会第 24 回全国大会 (2011 年 10 月、於大阪大学) の実行委員や司会として大会の運営に携わった。教員 1 名は更に、新しく立ち上げられた日本歴史言語学会の発起人の一人となり、同学会の第一回大会の開催 (2011 年 12 月、於大阪大学) において事務局の一端を担った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力が上がった。また上記のような、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、卒業論文・修士論文が、程度の差こそあれ幅広い視点や掘り下げた議論で構成されるようになった。中でも 2011 年度の博士前期課程修了生による修士論文は、その完成度の高さが高く評価され、同学生の 2011 年度文学

研究科賞受賞の一因ともなったことは特筆すべきである。つまり、研究室内の切磋琢磨が促進され、学部生・院生ともに論理的思考や知識・議論のレベルが2008～2010年度期よりも更に上がったと言え、設定目標は十分に達成できたと言える。古典文献の読解が中心の分野だけに、レベルアップやその速度には個人差があるが、学生1人1人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、全体のレベルアップにつながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行っており、全体として目標を達成したと考えられる。とりわけ海外との交流や国際学会への参与に関しては、特に目覚ましい成果があったと言える。

3. 社会連携

一般向けの講演・著作においても、学会等における役員の責務遂行においても、目標は達成されたと言える。特に、学術大会開催への関与・協力という点では、大きな成果をあげたと考えられる。その一方で、今後学会・研究会等の主催という点では、更なる積極的役割を果たす余地はまだある。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2011	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	0	0	0	0
2011	0	1	2	0	0	3
計	0	1	2	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔その他〕

日野勇「慈雲尊者『理趣経講義』梵語文の研究」『密教学』（種智院大学密教学会），第47号，pp. 79-119, 2011/3

【2011年度】

〔博士後期〕

名和隆乾「チャンナの自殺」『待兼山論叢（哲学篇）』（大阪大学文学会），第45号，pp. 67-82, 2011/12

(2)口頭発表

【2011年度】

〔博士後期〕

富田真理子「涅槃の諸相と初期仏教経典—abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について—」日本佛教学会，第八十一回学術大会，於北海道大学，2011/8/30

名和隆乾「榎本班の活動内容について」仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築（科学研究費補助金・基盤研究(S)），2011年度第二回研究会，於東京大学，2012/3/14

名和隆乾「cetanā について」仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築（科学研究費補助金・基盤研究(S)），2011年度第二回研究会，於東京大学，2012/3/14

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）

2011年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2011年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2010 年度：1 名 2011 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度：0 名 2011 年度：0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」(東洋史学専門分野と共同で主催)

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 榎本文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。専攻:インド仏教学。

1-1. 論文

榎本文雄 「初期仏教における涅槃——無我説と関連して——」『佛教研究』(国際佛教徒協会), 40, pp. 149-160, 2012/3

榎本文雄 「ジャイナ教と仏教」奈良康明、下田正弘(共編)『新アジア仏教史』2, 佼成出版社, pp. 116-118, 2010/10

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・監事	2009年9月～現在に至る
日本西蔵学会・委員	2005年10月～現在に至る
仏教史学会・評議員	2003年11月～現在に至る
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在に至る
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在に至る
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る

2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒，東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(東北大学)，博士(文学，東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て，2004年4月現職。専攻：インド・イラン学，比較歴史言語学。

2-1. 論文

堂山英次郎 「Mandhatar の系譜」『印度學佛教學研究』60-1, pp. 266-272, 2011/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堂山英次郎 「古代インドの英雄神話について ——異常出産と捨て子を中心に——」第5回ギリシア・ローマ神話学研究会＋第2回大阪大学大学院文学研究科共同研究「神話表象のアレゴリズム研究 ——文学・哲学・レトリックに即して」合同研究会，大阪大学，2012/2

堂山英次郎 「Mandhatar の系譜」日本印度学仏教学会第62回学術大会，龍谷大学，2011/9

Dōyama, Eijirō, “Kṣetrasya Pati and Mandhatar” The 5th International Vedic Workshop, Bucharest, Romania, 2011/9

堂山英次郎 「Vādhūla-Śrautasūtra 10.4.1-32(英訳とコメント)」京都大学人文科学研究所共同研究班「王権と儀礼」第61回研究会，2011/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成20年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞，大阪大学，2009/2

堂山英次郎 第50回日本印度学仏教学会賞，日本印度学仏教学会，2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第1回学会賞，日本南アジア学会，2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第3回学会賞，印度学宗教学会，2006/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本印度学仏教学会・評議員

2004年7月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員

2004年6月～現在に至る

3. 生野 昌範 助教

1975年生。大阪大学文学部卒、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)、博士(文学、大阪大学)。2010年4月から現職。専攻:インド仏教学。

3-1. 論文

生野昌範「仏教僧団内のヒエラルヒー」、『印度學佛教學研究』, 60-1 (2011), pp. 353-348.

生野昌範「雨季の逗留生活と布薩」、『印度學佛教學研究』, 59-1 (2010), pp. 338-333.

3-2. 著書

船山徹, 石井公成, 生野昌範他(共著)『真諦三蔵研究論集』, 京都大学人文科学研究所, 2012, pp. 155-178.

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

生野昌範「仏教僧団内のヒエラルキー」日本印度学仏教学会第62回学術大会, 日本印度学仏教学会, 2011/9

生野昌範「『律二十二明了論』と五大広律」, 京都大学人文科学研究所共同研究班「真諦三蔵とその時代」, 京都大学人文科学研究所, 2011/3

生野昌範「雨季の逗留生活に関する一考察」日本印度学仏教学会第61回学術大会, 日本印度学仏教学会, 2010/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011年度～2013年度、若手研究(B)、代表者:生野昌範

課題番号: 23720026

研究題目: 古代インドにおける受戒儀礼に関する基礎的研究

研究経費: 2011年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

古代インドにおける受戒儀礼(志願者を仏教の出家者として承認し、仏教教団に入団させる儀礼)を研究対象として、文献学的アプローチに基づき儀礼の式次第、儀礼を行なうのに必要な参加メンバー、儀礼を受けることのできる志願者の条件を考察することにより、古代インドにおける受戒儀礼の実像を構築する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 0

教授：川村 邦光、杉原 達、平田 由美

准教授：北原 恵、宇野田尚哉

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
68	17	32	1	0	4	0	2	1

※うち留学生 21名、社会人学生 7名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	21	5	8	2	0
2011	17	5	7	7	0
計	38	10	15	9	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の6点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携)⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の 3 点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する(『日本学報』の活用とその内容の充実)。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける(研究に関わる討議空間の創出)。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する(研究ネットワークの強化)。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の 2 点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGO をはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境が達成されつつある。具体的には複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が強化された。また学外者とのコミュニケーションも深まった。特に注目すべき点は、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」において院生主導のシンポジウムが複数実現したことである。またさらに学部生も自発的な議論の場を持つようになった。また、院生の海外での国際発表の機会を増やすために、2011 年度からオーストラリア国立大学 (ANU) 主催のサマースクールに院生の参加・発表を支援してきた。他にもマンガやアニメといったポピュラーカルチャーにかかわる学生や院生による研究の自主的な情報発信も、随時おこなわれている。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

2. 研究

上記の「日本学方法論の会」の成果を、『日本学報』において特集として発信した。京都大学や立命館大学、神戸大学といった関西圏の大学との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の間が機能しつつある。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。また大阪大学グローバル COE「コンフリクトの人文科学」プロジェクトの研究フォーカスである「横断するポピュラーカルチャー」においても、日本学が中心的な役割を果たした。(2011 年度で終了)

3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも市民が多く参加している。また大阪で活動する NPO や NGO のグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深化がすすんだ。特に 2011 年度は課程博士が 7 件授与されるなど、多数の成果を出すことができた。また、海外との学術交流も活発に行い、国際日本学研究会の開催 (2010 年度韓国、2011 年度台湾) や、「東アジアの視覚文化とジェンダー」

プロジェクト（文学研究科研究推進室の助成）によるシンポジウム開催や韓国の大学との学術交流は、特筆される教育活動の成果を挙げることができたと言える。また、学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場としての日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。オーストラリア国立大学のサマースクールへの院生派遣も順調に進み軌道に乗り始めたところである。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。こうした研究環境が個々の研究に反映されていったものと考えられる。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動する NPO や NGO ならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に連携しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010 年度～2011 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	2	1	3
2011	7	0	7
計	9	1	10

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 水野守 「明治ナショナリズムと『人種主義』—1880年代後半～90年代における政教社の思想をてがかりに—」 2010/9
主査：杉原達 副査：富山一郎、川村邦光
- 藤本純子 「『やおい』からみる現代的親密性の現状と可能性」 2011/3
主査：川村邦光 副査：富山一郎、北原恵
- 崔恩珠 「民族教会と女性、そして愛をめぐって—在日大韓基督教会に対するジェンダー論的な“読み”を試みる—」 2011/9
主査：川村邦光 副査：富山一郎、杉原達
- 植野真澄 「戦後日本の戦争犠牲者援護と傷痍軍人」 2011/9
主査：杉原達 副査：富山一郎、川村邦光、赤澤史朗
- 沈恬恬 「物の思想史—言葉、もしくは、経験という現場から—」 2012/3
主査：富山一郎 副査：川村邦光、三谷研爾
- 廣岡浄進 「植民地帝国日本における主体化と動員一名乗りをめぐる陣地戦についての歴史研究—」 2012/3
主査：富山一郎 副査：川村邦光、杉原達、水野直樹

永岡崇 「宗教文化の近代的再編成をめぐる研究—新宗教の経験と表象—」 2012/3

主査：川村邦光 副査：富山一郎、杉原達

鄭柚鎮 「サバルタン再現に関する研究—日本軍「慰安婦」と「女性のためのアジア平和国民基金」—」 2012/3

主査：富山一郎 副査：川村邦光、杉原達

宋英子 「1970年代以降における在日朝鮮人教育の再考」 2012/3

主査：杉原達 副査：富山一郎、川村邦光

【論文博士】

赤嶺政信 「歴史の中の民俗社会—久高島の社会組織と祭祀的世界の研究—」 2011/3

主査：川村邦光 副査：富山一郎、笠原政治

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(1)	14(0)	5(0)	0(0)	4(0)	24(1)
2011	1(1)	5(0)	6(0)	0(0)	6(0)	18(1)
計	2(2)	19(0)	11(0)	0(0)	10(0)	42(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	3	9	6	0	5	23
2011	3	6	16	0	3	28
計	6	15	22	0	8	51

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 著書(共著)

【2010年度】

〔博士後期〕

上地美和「もうひとつの『沖縄戦』—疎開と沖縄出身者社会—」富山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験—希望、あるいは未決性について—』青弓社、2010/7

鄭柚鎮「『安保の問題を女の問題として矮小化するな』という主張をめぐるある政治—感情問題をめぐる政治の葛藤、あるいは葛藤という政治—」富山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験—希望、あるいは未決性について—』青弓社、2010/7

【2011年度】

〔博士後期〕

荒川裕紀「ディベートから作り上げる歴史観—日系人をとりまいた諸事象を主題として—」矢口祐人、森茂岳雄、中山京子編『真珠湾を語る : 歴史・記憶・教育』東京大学出版会、pp. 215-222, 2011/12

平田祐子「秘書と人間関係」『秘書概論』樹村房、pp. 78-88, 2012/3

(2)論文・単行本

【2010年度】

〔博士前期〕

鎌倉祥太郎「津村喬における『日常性』批判の射程—戦略的『読み』の可能性をめぐって—」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp. 68-94, 2010/7

川崎智子「来日西洋人と幕末・明治前期の書画会」『近代画説』19, 明治美術学会, pp.35-56, 2010/12

中務のぞみ「障害者とアート—アウトサイダー・アートを中心に—」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp. 26-41, 2010/7

中西美穂「布ナプキンブランド『ノラ』—『ノラの会』と『取扱店』訪問から考えたこと—」「20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究—アジアにおける戦争とディアスポラの記憶—」報告書（平成20年度—22年度 独立行政法人日本学術振興会・科学研究費補助金 基盤研究（B）課題番号：20310156）, pp. 158-174, 2011/3

〔博士後期〕

井濱葉月「結核から『低肺』へ—ある病いが過去になること—」『日本学報』30, pp. 29-45, 2011/3

井濱葉月「病と聖化の近代—神谷美恵子をめぐって—」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp.3-25, 2010/7

魏仙芳「日本における喫茶文化の発展—日常生活への普及を中心に—」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp. 106-121, 2010/7

鹿野由行「『運命の物語』と計算された親密さ—ゲイの出会いのツールの変化と合コンの流行—」『日本学報』30, pp. 47-66, 2011/3

崔恩珠「戦前の在日大韓基督教会とバイブル・ウーマン—民族教会の『オモニ信仰』との関連性を求めて—」『待兼山論叢』44, pp. 1-19, 2010/12

鄭祐宗「解放後在日朝鮮人教育史研究の方法と実践」『教育史・比較教育論考』20, pp. 48-56, 2010/6

鄭祐宗「在日朝鮮人教育闘争における二重の課題について—政治闘争と経済闘争の結合問題に関する考察（1947年-1948年）—」『次世代研究者フォーラム論文集』3, pp. 55-73, 2010/7

鄭祐宗「植民地支配体制と分断体制の矛盾の展開—敗戦後山口県の対在日朝鮮人統治を中心に—」『立命館法学』333・334, pp. 868-915, 2010/3

土井智義「米軍統治期の沖縄における『外国人』参政権問題」『日本学報』30, pp. 67-84, 2011/3

永岡崇「マヨネーズと両義性」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp. 42-67, 2010/7

中山良子「『乙女の性典』と純潔—新制中学生・高校生のセクシュアリティとメディア—」『日本学報』30, pp. 143-158, 2011/3

パイエ由美子「植芝盛平—合気道創成プロセスをめぐって—」『日本学報』30, pp. 159-178, 2011/3

日高由貴（庭鳥）「うたのなかの『神さま』—うたうこと、物語を見出すこと—」『Cultures/Critiques』2, 国際日本学研究会, pp. 95-105, 2010/7

日高由貴「わたしから／への旅」『日本学報』30, pp. 85-101, 2011/3

平田祐子「現代社会におけるマナーの捉え方—秘書検定の視座するものから—」『高田短期大学紀要』29, pp. 39-49, 2011/3

増子美緒「犬ぞりの現在—『JAPAN CUP 全国稚内犬ぞり大会』を事例として—」『日本学報』30, pp. 103-122, 2011/3

弓谷葵「システムとしての象徴天皇制—戦争責任論の心臓部—」『日本学報』30, pp. 19-21, 2011/3

弓谷葵「丸山思想史における帝国日本—戦時期における『自然』と『作為』—」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』12, pp. 53-76, 2011/3

林曉淳「台湾の家庭アルバムにおける記憶と語り」『日本学報』30, pp. 123-142, 2011/3

【2011年度】

〔博士前期〕

小野絢子「民藝運動の中の女性」『東アジアの視覚文化とジェンダー—戦争/植民地/移動の視点を中心に—』大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書（研究代表者：北原恵）, pp. 38-44, 2012/3

川崎智子「書画会をめぐる人々—ワーグマンと暁斎—」『暁斎』第105号, 財団法人河鍋暁斎記念美術館, pp. 2-7, 2011/3

- 徐潤雅「歴史を語る作品の前で—1995年、韓国のメディアに映った富山妙子—」『東アジアの視覚文化とジェンダー 戦争/植民地/移動の視点を中心に』大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書(研究代表者:北原恵), pp. 46-52, 2012/3
- 中西美穂「淀川テクニックの《チヌ》制作過程をたどって—2010~2011年、大阪にて—」『アートマネジメント研究』第12号, アートマネジメント学会, pp. 77-87, 2011/12
- 黛友明「門付け芸受容の一断面—群馬県利根郡川場村門前の春駒—」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 78-101, 2011/8
- 三浦詩織「テキスト化する伝承—ムカシコとストーリーテリングの語りから—」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 52-77, 2011/8
- 山口良太「複製技術時代の霊」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 102-128, 2011/8
〔博士後期〕
- 荒川裕紀「太平洋戦争後の十日戎開門神事」『北九州工業専門学校研究報告』第45号, pp. 103-112, 2012/1/31
- 鹿野由行「都市における構成要素としての性的マイノリティ」『東アジアの視覚文化とジェンダー 戦争/植民地/移動の視点を中心に』大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書(研究代表者:北原恵), pp. 29-35, 2012/3
- 竹原明里「1920~30年代における生人形と『人形芸術』をめぐる—『創造性』の再発見と『伝統』からの脱却—」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 29-51, 2011/8
- 張懷文「歌仔戲再考—《台湾我的母親》から見る『代表的台湾文化』の揺らぎ—」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 3-28, 2011/8
- 張紋絹「台湾台北市における日本語による高齢者デイケアセンター『玉蘭荘』に関する基礎的研究」『東アジア研究』55, pp. 65-88, 2011/4
- 鄭祐宗「公職追放と朝鮮研究—特別高等警察から外国人登録担当官への任用例の検討—」『玄界灘』第7号, pp. 311-326, 2012/3
- 鄭弁芸「植民地台湾を生きる『家』の諸相—呂赫若の『財子壽』を中心に—」『待兼山論叢』第45号, pp. 27-44, 2011/12
- 富永悠介「映画『無言の丘』における琉球・朝鮮表象—富美子と韓服女性が経験した植民地台湾—」『東アジアの視覚文化とジェンダー 戦争/植民地/移動の視点を中心に』大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書(研究代表者:北原恵), pp. 20-27, 2012/3
- 増子美緒「樺太犬の発見—1930年代後半の日本領樺太を対象として—」『Cultures/Critiques』3, 国際日本学研究会, pp. 129-146, 2011/8

(3)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

川崎智子「書画会を巡る人々—ワーグマンと暁斎—」第28回河鍋暁斎研究発表会, 蕨眼科レクチャールーム(蕨市), 2010/8/29

松葉志穂「愛と死の諸相—大正・昭和前期における女性同士の心中事件を中心に—」クィア学会, 中京大学(名古屋市), 2010/11/20

黛友明「『定着』とは何か—門前地区の春駒から—」日本民俗学会第62回年会, 東北大学(仙台市), 2010/10/3

〔博士後期〕

宇都宮めぐみ“Tourism to Korea and Manchuria, and 'the Gaze of Empire': Focus on the Tourism of Doshisha Women's College In 1925~1930” JAPANESE STUDIES GRADUATE SUMMER SCHOOL 2011, Australian National University(Canberra), 2011/2/3

柿田肇「転換期の『宝塚』作者・試論—1930年代後半を起点に—」国際日本学研究会第4回学術大会(北九州市), 2010/8/8

柿田肇「『宝塚』メディアとしての機関誌—躍進と、後続する〈総動員〉への応答の時代から—」日本風俗史学会第51回大会, 九州女子大学(北九州市), 2010/10/17

柿田肇“The Representations of the Takarazuka Revue during Wartime Mobilization” JAPANESE STUDIES

GRADUATE SUMMER SCHOOL 2011, Australian National University(Canberra), 2011/2/3

柿田肇『宝塚』という表現—女性が演じた100年—大阪大学公開ワークショップ「男女の指標としてのズボンとスカート」, 国際交流基金バンコク日本文化センター(バンコク), 2011/3/28

栗山新也「沖縄移民一世の戦前の芸能実践にみられる競争するという発想」東洋音楽学会, 東京学芸大学(小金井市), 2010/11/14

鹿野由行「新しい出会いの場を求めて～出会いツールの変化から～」クィア学会, 中京大学(名古屋市), 2010/11/21

染川清美「日台米俳句会の世界俳句の視座による一考察」日本社会学会第83回大会, 名古屋大学(名古屋市), 2010/11/6

張懐文「歌仔戯(クアーヒ)における日本の表象—《台湾、我的母親》《青春美夢》《黃虎印》《風起雲湧鄭成功》を中心に—」国際日本学研究会第4回学術大会(北九州市), 2010/8/8

張紋絹「帝国日本における民衆の生活社会史—台湾在住内地人女性の中のアジア・太平洋戦争に関する一考察—」大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成成果報告会, 大阪大学(豊中市), 2010/4/10

張紋絹“The Life History of People in Imperial Japan: A study of the Asia-Pacific War within the "Naichijin" who Lived in Colonial Taiwan” Osaka University Forum 2010 "Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations", University of Groningen(The Netherlands, Groningen), 2010/9/29

張紋絹「台湾における日本語によるシルバーデイケアセンター『玉蘭荘』に関する一考察—日本と日本語に対する共感という場所性をめぐって—」大阪経済法科大学アジア研究所月例研究会, 大阪経済法科大学(八尾市), 2010/11/4

張紋絹「台湾台北市における日本語高齢者デイケアセンター『玉蘭荘』の研究」日本順益台湾原住民研究会第4回大会, 沖縄国際大学(那覇市), 2011/3/6

張紋絹「在台『日本人』の中のアジア・太平洋戦争」大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成成果報告会, 大阪大学(豊中市), 2011/3/18

鄭柚鎮「痛みを語るということ、聞くということ、あるいは関係性としての痛み—『わたしとフクロウ』を手がかりにして—」20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究—アジアにおける戦争とディアスポラの記憶—(平成20年度—22年度 独立行政法人日本学術振興会・科学研究費補助金 基盤研究(B) 課題番号:20310156) 主催シンポジウム, 2010/7/23

戸田弘子「仏教の社会貢献と ex-spiritualism」日本トランスパーソナル心理学/精神医学会, 2011/11/27

日高由貴「『感情』は『商品』になりうるのか—A.R.ホックシールドにおける『感情労働』概念の再検討の試み—」大阪大学「横断するポピュラーカルチャー」, 大阪大学(豊中市), 2010/3/20

日高由貴「音の色。『うた』について。ジャズについて。」国際日本学研究会第4回学術大会(北九州市), 2010/8/8

平田祐子「大学生の起業意識に関する調査報告」日本ビジネス実務学会全国大会, 自由ヶ丘産能大学(東京都), 2010/6

平田祐子「起業意識を高める実務教育」日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会, 富山国際会議場(富山市), 2011/1

【2011年度】

[博士前期]

小野絢子「民藝運動の中の女性」大阪大学大学院・聖公会大学大学院アジア文化研究学術交流発表会(ソウル), 2011/3/5

川崎智子「明治前期の書画会—仮名垣魯文を中心に—」第5回横断するポピュラーカルチャー研究交流ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス学生コモンズ開放型セミナー室(豊中市), 2011/7/30

川崎智子「仮名垣魯文とイベント」第31回河鍋暁斎研究発表会, 蕨眼科レクチャールーム(蕨市), 2012/2/26

徐潤雅「歴史を語る作品の前で—1995年、韓国のメディアに映った富山妙子—」大阪大学大学院・聖公会大学大学院アジア文化研究学術交流発表会(ソウル), 2011/3/5

中西美穂“Revolving SECRET garden (Workshop of University of the Philippines Diliman, Department of Art Studies)” , University of the Philippines Diliman, 2011/10/7

中西美穂 “Through the Japanese Art Director’s Eye” , University of the Philippines Baguio, College of Arts Communication Bldg, 2011/12/1

中西美穂“Through My Experience of “House of Comfort Art Project””, The 6th International Conference of Asian Art

Management, Indonesia Institute of the Arts(ISI) Yogyakarta, 2011/12/13

中西美穂「被災地支援が発端となったコミュニティ・アートプロジェクト5年後の展開に立ち会う・文化庁新進芸術家海外派遣制度(特別・美術・アートマネジメント・フィリピン)小報告」アートマネジメント学会関西西部会, 神戸市立灘区民ホール(神戸市), 2012/3/11

布山美慕「ポスター発表 物語読書に於ける非インタラクティブ性」知識共創フォーラム, 北陸先端技術大学院大学, 2012/3/4

黛友明「旅する獅子がいる風景—伊勢大神楽における芸能の実践について—」第5回横断するポピュラーカルチャー研究交流ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス学生センターコモンズ開放型セミナー室(豊中市), 2011/7/30

黛友明「伊勢大神楽の民俗—民俗社会の観客論—」国際日本学研究会第5回学術大会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23
フィリップ・モッタ「半田知雄とその評論活動について」2011年度アジア・ディアスポラ研究会, 立命館大学(京都市), 2011/4/18

山口良太「怪談会の現在—関西の怪談会を事例として—」オカルト研究会, 工学院大学(東京都), 2012/3/3
[博士後期]

荒川裕紀「Education for Global Strategy in Rwanda and Singapore – A Perspective from JICA’s Overseas’ Training for Teachers」, 韓国国際理解教育学会, ソウル大学(韓国), 2011/11/12

荒川裕紀「高等専門学校の歴史教育における多文化共生への実践—近現代史での移民史・文化事象を題材として—」日本国際理解教育学会, 京都橘大学(京都市), 2011/6/18

柿田肇「青年会議所と共同体」国際日本学研究会第5回学術大会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23

鎌倉祥太郎「猪俣津南雄をめぐる『読みの連鎖』—高野実/津村喬の『読み』から」日本思想史学会, 学習院大学(東京都), 2011/10/30

川口葉子「大阪万博キリスト教館に見るキリスト教の戦後」日本宗教学会, 関西学院大学(西宮市), 2011/9/3

鹿野由行「都市における構成要素としての性的マイノリティ」大阪大学大学院・聖公会大学大学院アジア文化研究学術交流発表会(ソウル), 2011/3/5

鹿野由行「セクシュアリティとジェンダーの狭間に—戦略としての『オネエ』文化」国際日本学研究会第5回学術大会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23

張懷文「歌仔戲の西洋性と宝塚歌劇」国際日本学研究会第5回学術大会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23

張紋絹 ““Japanese” in Taiwan after Japanese Empire Period: A Case Study of Taipei Gyokuransou Japanese Care Center”, Asia and Pacific Network, Paris(France), 2011/9/15

鄭祐宗「朝鮮現代史と山口県—解放後在日朝鮮人抑圧の性格分析」朝鮮史研究会第48回大会, 立命館大学(京都市), 2011/10/23

土井智義「大東諸島における『非琉球人』の歴史的な位置づけのために—植民地主義の歴史から—」大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成成果報告会, 大阪大学(豊中市), 2011/6/18

戸田弘子「パネル発表 『社会貢献』の靈的次元—日本仏教からの再考—」日本宗教学会第70回学術大会, 関西学院大学(西宮市), 2011/9/4

富永悠介「映画『無言の丘』における琉球・朝鮮表象—富美子と韓服女性が経験した植民地台湾」大阪大学大学院・聖公会大学大学院アジア文化研究学術交流発表会(ソウル), 2011/3/5

平田祐子「マナー意識と共感性の相関—秘書関連科目受講者への調査結果—」日本国際秘書学会第20回研究大会, 愛知学泉大学(岡崎市), 2011/8/20

平田祐子「内的・外的・空想的他者意識とマナーの関係」国際日本学研究会第5回学術大会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23

(4)その他(書評・翻訳など)

【2011年度】

〔博士前期〕

黛友明「“民俗学的知性”とは何か—大月隆寛さんをお招きして—（セミナーレポート）」『Cultures/Critiques』臨時増刊号,国際日本学研究会, pp.174-177, 2012/3

三浦詩織・山口良太「『メディア』としての私たち—方言研究と昔話研究を手がかりに（セミナーレポート）」『Cultures/Critiques』臨時増刊号,国際日本学研究会, pp.165-173, 2012/3

山口良太「ちび火に『巻き込まれ』て（レポート）」『Cultures/Critiques』臨時増刊号,国際日本学研究会, pp.91-93, 2012/3
〔博士後期〕

柿田肇「帝国と愛、不滅のものとは？（劇評）」『宝塚イズム』17, 青弓社, 2011/9

柿田肇「巴里の夢物語として—ついでた夢、受け継ぐ夢（劇評）」『宝塚イズム』19, 青弓社, 2012/3

鄭祐宗「文献紹介 金廣烈ほか著『帝国日本の再編と二つの『在日』—戦前、戦後における在日朝鮮人と沖縄人』」『同時代史研究』第4号,同時代史学会, 2011/12

平田祐子「第六章 言葉遣い」『ビジネスのマナー・文書・実務の基礎知識』ぎょうせい, pp.50-67, 2012/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

中西美穂, 第42回博報賞（日本文化理解教育部門）, 博報財団, 2011年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 RPD:1名 PD:1名 DC2:2名 DC1:3名 (計7名)

2011年度 RPD:1名 PD:1名 DC2:3名 DC1:3名 (計8名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:1名 大学院:2名 (計3名)

2011年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

崔博憲 博士後期課程修了, 広島国際学院大学, 准教授, 2011/9

宇都宮めぐみ 博士後期課程在籍, 東亜大学校, 招聘教授, 2011/3

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2010年度:1名 2011年度:0名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2010年度:2名 2011年度:0名

9. 刊行物

2010年度 『日本学報』30, 『Cultures/Critiques』2

2011年度 『Cultures/Critiques』3, 『Cultures/Critiques』臨時増刊号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

イメージ&ジェンダー研究会・事務局

国際日本学研究会・事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2010年度 日本学方法論の会（担当 北原恵）

日付・場所 2010年12月17日 待兼山会館会議室

テーマ 象徴天皇制の現在を考える

報告者 フジタニ・タカシ(同志社大学)

コメンテーター 弓谷葵(大阪大学大学院生)、富永悠介(大阪大学大学院生)、謝花直美(大阪大学大学院生)

2011年度 「東アジアの視覚文化とジェンダー」研究会（担当 北原恵）

日付・場所 2012年1月12日 待兼山会館会議室

テーマ「植民地統治下の美術—官設美術展覧会を通して—」

報告者 ラワンチャイクン寿子（福岡アジア美術館学芸員）、原舞子（三重県立美術館学芸員）

大学院生の報告 富永悠介、フィリップ・モッタ、徐潤雅、鹿野由行、小野絢子

2011年度「大阪大学大学院-聖公会大学大学院アジア文化研究学術交流発表会」（担当 北原恵）

日付・場所 2012年3月5日 聖公会大学（韓国・ソウル）

テーマ「東アジアの視覚文化とジェンダー」

報告者 富永悠介（大阪大学大学院生）、鹿野由行（大阪大学大学院生）、小野絢子（大阪大学大学院生）、徐潤雅（大阪大学大学院生）、金ジュナ（大阪大学大学院研究生）

コメンテーター コ・ヨンオク（聖公会大学大学院生）、ヨン・ヘスク（聖公会大学大学院生）、キム・ユンヨン（聖公会大学大学院生）、チェ・ジョン（聖公会大学大学院生）、ウ・ジョンハン（聖公会大学大学院生）

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 川村 邦光 教授

1950年生。1984年東北大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(東北大学)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻:民俗学／宗教学／民衆思想史。

1-1. 論文

川村邦光「地獄めぐりの心」立命館大学文学部(編)『日本文化の源流を求めて2』文理閣, pp. 101-116, 2010/11

川村邦光「救世主幻想のゆくえ: 皇道大本とファシズム運動」竹沢尚一郎(編)『宗教とファシズム』水星社, pp. 23-62, 2010/6

1-2. 著書

川村邦光『写真で読むニッポンの光景100』青弓社, 216p., 2010/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

川村邦光(書評)「西村大志編『夜食の文化誌』(青弓社)」『神戸新聞』2011/2

川村邦光(コメント)「消えゆくイタコ」『朝日新聞』2010/12

川村邦光(記事)「「アニミズムが考える死」「飢饉と死」「イタコとは」」『大法輪』7-7, 2010/7

1-4. 口頭発表

川村邦光「戦死者の霊、亡霊、そして弔いをめぐって」「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」シンポジウム:「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」, 国学院大学研究開発推進センター, 国学院大学, 2011/2

川村邦光「皇道大本とファシズム運動を巡って」パネルディスカッション「ファシズム期の宗教と宗教研究」[代表:竹沢尚一郎],
日本宗教学会, 東洋大学, 2010/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川村邦光

課題番号: 22520821

研究題目: 東アジアにおける家族写真の歴史民俗学的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2011年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

日本・沖縄、また韓国や台湾、中国などの東アジアの家族写真を比較研究して、各地域の家族写真に現れた類似点や相違点を明らかにし、歴史的に家族写真がどのように作成され、どのような民俗的慣行として存続してきたのか、各地域の家族写真の独自性や共通性を探究し考察することが、本研究の目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業。1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977-91年、関西大学経済学部助手、専任講師、助教授、教授を経て、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院教授。専攻: 日本学／文化交流史。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

杉原達「絶句した徐勝さん」徐勝先生退職記念事業実行委員会(日本・韓国)編『東アジアのウフカジ』かもがわ出版, pp. 173-175, 2011/2

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学専攻科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

3-1. 論文

平田由美 「「列女」から「烈女」へ:近代日本の伝記における女性表象」,『タイ国日本研究国際シンポジウム 2010 論文報告書』,チュラロンコーン大学, pp. 151-171, 2011/9

平田由美 「女の書き物を奪胎する——後藤明生における“父の物語”の創生——」,『表現研究』92, 表現学会, pp. 33-41, 2010/10

平田由美 「토론하는 공중公衆의 등장:대중적 공론장으로서의 소신문小新聞 미디어」,『일본의 문화사 3:근대 지식의성립』, Somyong Publishing, Seoul, pp. 221-252, 2011/2

Hirata, Yumi, “The Narrative apparatus of Modern Literature: The Shifting “Standpoint” of Early Meiji Writers”, Michael Bourdaghs ed., *The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies*, University of Michigan Press, Ann Arbor, pp. 73-96, 2010/5

平田由美 「「引揚げ」物語をめぐるジェンダーと言語:後藤明生における過去の表象」,『日本学』30 輯, 東国大学校文化学院 日本学研究所, pp. 107-134, 2010/5

3-2. 著書

平田由美 『女性表現の明治史——樋口一葉以前——』(岩波人文書セレクション版)岩波書店, 320p., 2011/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平田由美 「ことばをひらく」,『文学』11-4, 岩波書店, pp. 113-114, 2010/7

平田由美 「西川祐子著『日記をつづるということ——国民教育装置とその逸脱——』」,『女性史学』20, 女性史総合研究会, pp. 162-164, 2010/7

3-4. 口頭発表

Hirata, Yumi, “Colonial Children in Postwar Japan: Displaced Identities betwixt and between”, *The Discourses and Memories on Trans-border Movements in Postwar Japan and Beyond*, Department of Culture Studies and Oriental Languages, University of Oslo, Norway, 2011/8

平田由美 「《移動》をめぐる文学表象」,《越境移動與漂流的記憶》, 国立交通大学社会與文化研究所, 国立交通大学(台湾), 2011/1

平田由美 「ポストコロニアリズムと《移動》の文学表象」,《植民地とディアスポラ》, 建国大学アジア・ディアスポラ研究所, 建国大学(韓国), 2010/12

平田由美 「「列女」から「烈女」へ——近代日本の伝記における女性表象——」, タイ国日本研究国際シンポジウム 2010, チュラロンコーン大学(タイ), 2010/10

平田由美 「女の書き物を奪胎する——後藤明生における「父の物語」の創生——」, 表現学会全国大会, 表現学会, お茶の水女子大学, 2010/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2010年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号: 19520154

研究題目: 近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的現象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員基盤研究等第1段審査委員

2009年11月～2010年11月

4. 北原 恵 准教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美学及び芸術学)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学准教授、2012年同教授。専攻:表象文化論/ジェンダー研究。

4-1. 論文

北原恵 「放射能は色がついていないからいいのかもしれない…と深い溜息をつく—イトー・タリーに聞く」『インパクション』183, インパクト出版会, pp. 138-141, 2012/1

北原恵 「「Inner Voices=内なる声」展—境界から、境界へ響く“アジア”の“女”の声」『インパクション』181, インパクト出版会, pp. 144-148, 2011/8

北原恵 「社会に介入するゲリラアート—日系アメリカ人アーティスト、スコット・ツチタニさんに聞く」『インパクション』178, インパクト出版会, pp. 106-119, 2011/2

4-2. 著書

北原恵 (共著) 『アート・検閲、そして天皇』社会評論社, pp. 118-140, 2011/8

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

北原恵 「「人間天皇」の表象―「天皇ご一家」像から見えるもの」CGraSS 公開レクチャーシリーズ, 一橋大学大学院社会学研究科・ジェンダー社会科学研究所, 一橋大学, 2012/1

北原恵 「戦時下の長谷川春子―1932～40年の活動を中心に」ジェンダー史学会・全国大会, ジェンダー史学会, 明治大学, 2011/12

北原恵 「フェミニズムと美術」連続「夜話講座」, ヒルゲートギャラリー, ヒルゲートギャラリー(京都), 2011/11

北原恵 「戦争と文化―戦時下の天皇表象と日本美術」, 高麗大学 KIEP(対外政策研究院)&GSIS(国際大学院), 高麗大学(韓国・ソウル), 2011/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

北原恵 大阪大学共通教育賞(2010年度前期), 大阪大学全学共通教育機構, 2010/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:北原恵

課題番号: 20310156

研究題目: 20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究

研究経費: 2010年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

本プロジェクトは、美術(史)で周縁化されてきた女性アーティストに焦点を絞り、海外・日本におけるジェンダーの視点から美術史研究や、表象文化理論とアート実践の調査を行い、特にアジア太平洋戦争期の女性美術家の活動を実証的に跡付けることによって、戦争や暴力、ディアスポラに関わる表象・アートを明らかにする。

4-6-2. 2011年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:北原恵

課題番号: 23310191

研究題目: 「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究

研究経費: 2011年度 直接経費 4,300,000円 間接経費 1,290,000円

研究の目的:

本プロジェクトは、ジェンダーと「移動」の視点からアジア太平洋戦争期の女性画家の移動や、移民として国外に出た女性美術家について調査研究を行うものである。具体的には①女性アーティストの表現・活動の歴史と実践の調査、②周縁化されてきた彼女たちの活動の再評価による近現代の美術史・ジェンダー研究の再考、③研究者・学芸員らとの研究交流を活発化しネットワークを形成することによる美術や表現現場の発展を目的としている。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

イメージ&ジェンダー研究会・事務局

2009年4月～現在に至る

表象文化論学会・理事

2006年7月～2010年7月

5. 宇野田 尚哉 准教授

1967年生。1993年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、96年同後期課程単位修得退学。博士(文学)。2000年神戸大学国際文化学部講師、01年同助教授、07年同大学大学院国際文化学研究科准教授。2010年より現職。専攻:日本思想史。

5-1. 論文

宇野田尚哉 「島根県立図書館所蔵「桃家資料」:解題と目録」松江市教育委員会『松江市歴史叢書』5, 松江市教育委員会, pp. 87-108, 2012/3

宇野田尚哉 「五〇年代サークル詩運動への視点」日本近代文学学会『日本近代文学』(日本近代文学会), 83, 日本近代文学会, pp. 222-227, 2010/11

5-2. 著書

宇野田尚哉, 細見和之, 丁章他(共著) 『「在日」と50年代文化運動:幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』人文書院, pp. 16-31, 2010/5

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-7 日本史学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 5 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：平 雅行、村田 路人、飯塚 一幸、川合 康、武田佐知子

准教授：市 大樹

助教：北泊謙太郎

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
55	9	20	0	1	0	4	0	0

※うち留学生 4 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	13	7	1	1	2
2011	12	5	1	5	2
計	25	12	2	6	4

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

- ①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

- ①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒論・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、和田萃氏、スザンヌ・ゲイ氏、村田修三氏、フース・ハラルド氏といった学界の第一人者に、その研究成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を取得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかたわら、『古代の都』（吉川弘文館）、『講座 明治維新』（有志舎）をはじめとする講座・通史の編集・執筆や、『大系真宗史料』（法蔵館）、『吉田清成関係文書』（思文閣出版）、『杉田定一関係文書史料集』（大阪経済大学日本経済史研究所）といった史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が保管している旧撰津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧撰津国嶋下郡沢良宜浜村高島家文書、旧撰津国住吉郡北田辺村三杵家文書、旧撰津国住吉郡猿山新田奥田家文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めるとともに、兩年ともその成果の一端を、大学行事である「いちょう祭」において披瀝した。同じく本専門分野が所蔵している会沢正志斎書簡について、科研に応募したところ採択され（「会沢正志斎書簡の研究」、代表飯塚一幸）、史料集刊行に向けて大学院演習の中で解読・校正作業を行った。
- (2) 学会活動については、日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会・史学研究会・史学会・仏教史学会・続日本紀研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史科学協議会については、編集事務局（2008年6月～現在）を本専門分野で引き受けた。
- (3) 国際的な共同研究としては、武田佐知子教授が、平城遷都1300年記念国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）で「遣唐使粟田真人の冠から見た日本古代の礼服冠について」を報告した。また平雅行教授が、ハノイ国家大学附属人文社会科学大学東洋学部日本学科との共同研究として「日本中世に

おける寺院と武力」と題する論考を『日本研究論文集 法制と社会』（日本語版、ベトナム語版）に発表した。また市大樹准教授が、「東アジア木簡学」（科研、奈良大学、代表角谷常子）の一環として、“東亜簡牘與社会—東亜簡牘学探討”研究会（中国、北京）にて「日本古代木簡の多機能性」を報告した。

- (4) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。平雅行教授は「法然上人行状絵図高精細デジタル画像による研究会」（浄土宗）、「親鸞像の再検討」（大谷大学真宗総合研究所）、「歴史における周縁と共生」（科研、奈良女子大学、代表鈴木則子）、「出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究」（科研、島根大学、代表井上寛司）に参加し、美術史研究者とのシンポジウム「浄土宗の文化と美術」（仏教美術研究上野記念財団助成研究会）において「法然と顕密体制」の報告をおこなった。村田路人教授は、大阪歴史博物館シンポジウム「都市と河川のかかわりをさぐる」（大阪歴史博物館）で「近世淀川の治水と大坂」の報告を、平成 23 年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム「河内の近世をつむぐ」（大阪商業大学）で「大和川付替の治水史的意義」の報告をそれぞれおこなった。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会（代表堤一昭）、軍港都市史研究会（代表上山和雄）、吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）、「第一次世界大戦後の世界秩序の変容と日本」（科研、京都大学、代表伊藤之雄）に参加した。市大樹准教授は「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」（国立歴史民俗博物館、代表平川南）、「東アジア木簡学の確立」（科研、奈良大学、代表角谷常子）、「東アジアにおける日本墨書土器データベースの構築」（科研、明治大学、代表吉村武彦）、「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的比較研究」（科研、京都府立大学、代表菱田哲朗）に参加した。廣川和花兼任助教は「近代大阪の都市衛生環境に関する総合的研究」（三菱財団法人人文科学研究助成金、代表廣川和花）を組織するとともに、「薬用資源の文化財分析法を用いた新規標準化インデックスの探索」（科研、代表高橋京子）、「近現代の日本における医療の構造変化と歴史の重層」（科研、代表鈴木晃仁）に参加し、また大阪大学総合学術博物館第 11 回企画展（適塾特別展示）「えがかれた適塾」（待兼山修学館）、特別展示「抵抗を縫うーチリのキルトにおける触覚の物語」（待兼山修学館）にあたった。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動を通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料の調査・整理をしたり、『日本書紀』壬申紀を読む会のボランティア講師などもおこなっている。
- (2) 『三重県史』『大阪狭山市史』『新修豊中市史』『撰津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『三田市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 平雅行教授が「時代を生きる—法然・親鸞と今—」を毎月 1 回、1 年間にわたって朝日新聞に連載したり、「鎌倉仏教の 2 巨人と現代」を毎日新聞に寄稿するなど、研究成果を社会に広く還元した。
- (4) 旧北田辺村三枚家文書を日本史研究室として整理・研究し、田辺 HOPE ゾーン協議会との共催で「北田辺村三枚家古文書展」（2011 年 3 月 19-27 日、南田辺法楽寺）を開催した。

IV. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。従来確保されていた非常勤講師の割り当てがなくなってしまうが、講座運営費で 2 セメスター分を確保することによって、これまでの体制を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論発表会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は

達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかたわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、国内外の学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。また本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	0	1
2011	5	1	6
計	6	1	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中尾浩康	「律令国家軍事編成の研究」2011/3 主査：市 大樹 副査：平 雅行、飯塚一幸
後藤敦史	「開国期における徳川幕府の外交と海防掛」2011/9 主査：飯塚一幸 副査：村田路人、平 雅行
太田光俊	「豊臣期本願寺勢力の研究」2012/3 主査：村田路人 副査：平 雅行、市 大樹
能川（尾島）志保	「戦前日本の町村長会と地方行政」2012/3 主査：飯塚一幸 副査：村田路人、平 雅行
吉永壮志	「留守所目代考—古代から中世にかけての国務運営—」2012/3 主査：市 大樹 副査：平 雅行、飯塚一幸
牧野雅司	「明治維新时期における日朝関係の変容」2012/3 主査：飯塚一幸 副査：村田路人、市 大樹

【論文博士】

永松圭子

「日本中世付加税の研究」2011/5

主査：平 雅行 副査：村田路人、市 大樹、水野章二（滋賀県立大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	10 (8)	3(2)	0(0)	0(0)	0(0)	13(10)
2011	7(7)	2(2)	0(0)	2(0)	0(0)	11(9)
計	17(15)	5(4)	0(0)	2(0)	0(0)	24(19)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	20	12	0	0	32
2011	0	22	14	2	0	38
計	0	42	26	2	0	70

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010 年度】

〔学部生〕

佐竹恵「中世日朝関係における塩の交易と宗氏」『史敏』※ 2010 秋号(通巻 7 号), 史敏刊行会, pp.17-34, 2010/9

〔博士後期〕

中尾浩康「授業開き・歴史を学ぶ時の視点—「旧石器発掘捏造事件」から考える」『あいち歴史教育』14 (愛知大会レポート特集), 愛知県歴史教育者協議会, pp. 144-159, 2010/7

中尾浩康「天平期の節度使に関する一考察」『続日本紀研究』※388, 続日本紀研究会, pp. 1-20, 2010/10

中尾浩康「律令国家の戦時編成に関する一試論—八世紀における「寇賊」と征討—」『日本史研究』※581, 日本史研究会, pp. 1-28, 2011/1

中尾浩康「健児制に関する再検討」『ヒストリア』※219, 大阪歴史学会, pp. 1-27, 2011/3

中尾浩康「高校日本史 1 時間目の授業はこうする 歴史を学ぶ時の視点—「旧石器発掘捏造事件」から考える」『歴史地理教育』772 (2011 年 3 月増刊号 新年度の授業づくり プラン 11), 歴史教育者協議会, pp. 52-57, 2011/3

中野賢治「今川かな目録追加」と今川氏の領国支配構造」『史敏』※ 2010 秋号(通巻 7 号), 史敏刊行会, pp. 1-16, 2010/9

中村翼「鎌倉幕府の「唐船」関係法令の検討—「博多における権門貿易」説の批判的継承のために—」『鎌倉遺文研究』※25, 鎌倉遺文研究会, pp. 71-94, 2010/4

中村翼「鎌倉中期における日宋貿易の展開と幕府」『史学雑誌』※119-10, 史学会, pp. 1693-1717, 2010/10

長谷川裕峰「葛川明王院における行者中」『日本仏教総合研究』※8, 日本仏教総合研究学会, pp. 109-127, 2010/5

長谷川裕峰「葛川明王院蔵「諸御領役御仏事用途廻文」再考 (平成二十一年度 天台宗教學大會記念號)」『天台学報』※52, 天台学会, pp. 169-175, 2010/11

平井誠「明治期における城郭の公園化—松山公園と道後公園—」『研究紀要』16, 愛媛県歴史文化博物館, pp. 101-138,

2011/3

柳沢菜々「古代の園と供御蔬菜供給」『続日本紀研究』※389, 続日本紀研究会, pp. 1-17, 2010/12

【2011 年度】

〔博士後期〕

加藤伸行「明治後期～大正期優等糸生産地域における養蚕組合の展開」全国農業協同組合中央会編『協同組合奨励研究報告』37, 御茶の水書房, pp. 9-36, 2011/11

久保田裕次「日露戦後における対中国借款政策の展開—漢冶萍公司を中心に—」『日本史研究』※589, 日本史研究会, pp. 16-41, 2011/9

久保田裕次「日露戦後における日本外交と清朝の鉄道政策」『日本歴史』※764, 日本歴史学会, pp. 108-124, 2012/1

久保田裕次「漢冶萍公司の日中合弁化と対華 21 カ条要求」『史学雑誌』※121-2, 史学会, pp. 66-90, 2012/2

長谷川裕峰「青蓮院門跡の所領経営と葛川明王院」『史敏』※8 (村田修三先生古稀記念号 (1)), 史敏刊行会, pp. 47-68, 2011/6

本井優太郎「戦後部落解放運動における〔共闘〕論の形成 (第 48 回部落問題研究者全国集会報告、歴史 2 分科会「戦後社会運動史像の再検討—地域における民主主義的主体の形成」)」『部落問題研究』※197, 部落問題研究所, pp. 95-118, 2011/6

本井優太郎「戦後地域社会における教育実践と生活改善—島根県大原郡日登村を対象として—」『日本史研究』※587, 日本史研究会, pp. 29-53, 2011/7

森脇崇文「豊臣期大名権力の変革過程—備前宇喜多氏の事例から—」『ヒストリア』※225, 大阪歴史学会, pp. 1-26, 2011/4

森脇崇文「宇喜多氏分限帳の分析試論—諸写本の比較検討から—」『史敏』※9 (村田修三先生古稀記念号 (2)), 史敏刊行会, pp. 75-98, 2011/10

芳澤元「慶長期の絵画・漢詩の製作過程—前田利家夫人・芳春院の女人図—」『文学』12-5, 岩波書店, pp. 164-180, 2011/9

芳澤元「応永期における渡唐天神説話の展開」『史学雑誌』※120-10, 史学会, pp. 37-58, 2011/10

(2)口頭発表

【2010 年度】

〔博士前期〕

内田敦士「称徳・道鏡政権について—景雲一切経の写経・勘経事業と道鏡事件を中心に—」名古屋古代史研究会卒論報告会, 名古屋古代史研究会, 名古屋大学/愛知県名古屋市, 2010/4/4

内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同 2010 年度卒業論文大報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, ウィングス京都/京都府京都市, 2010/6/6

内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」大阪市立大学古代史研究会, 大阪市立大学古代史研究会, 大阪市立大学/大阪府大阪市, 2010/7/2

内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業について」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター/大阪府大阪市, 2010/7/24

内田敦士「竹内亮「五十戸と知識寺院—鳥坂寺跡出土篋書瓦の釈読から—」について」日本史・考古学合同研究会, 日本史・考古学合同研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2011/2/21

内田敦士「論評：竹内亮氏「五十戸と知識寺院—鳥坂寺跡出土篋書瓦の釈読から—」(2011 年度大会共同研究報告業績検討会)」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2011/3/5

高木純一「細川氏内衆による『評定衆』形成について」日本史研究会・大阪歴史学会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2010/5/30

高木純一「戦国期細川氏の権力構造について—内衆・評定衆を中心に—」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター/大阪府大阪市, 2010/7/24

高木純一「久留島典子氏の研究とその課題」大阪歴史学入門講座委員会, 大阪歴史学入門講座委員会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2011/1/16

- 高木純一「戦国期畿内政治史研究の現状と課題 —細川京兆家を中心に—」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大学コンソーシアム大阪／大阪府大阪市, 2011/3/19
- 時広雅紀「桜田門外の変後の彦根藩政と幕末政治」大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2010/5/1
- 時広雅紀「慶応期彦根藩の周旋方—幕長戦争への対応を素材に—」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2010/11/14
- 久野洋「明治中期における対外硬運動の地方基盤」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2010/9/18
- 久野洋「明治中期における進歩党・憲政本党系勢力の地方基盤—犬養毅の選挙地盤を中心に—」岡山地方史研究会例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学／岡山県岡山市, 2010/9/20
〔博士後期〕
- 片山早紀「大坂町奉行所による寺社支配の特質—意思伝達とその経路—」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2010/7/23
- 片山早紀「大坂町奉行所の都市支配の特質—大坂における寺社支配の視点から—」大坂諸藩研究会, 大坂諸藩研究会, 関西大学／大阪府吹田市, 2011/1/23
- 久保田裕次「日露戦後における対中借款政策の展開」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会合同修士論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2010/5/1
- 久保田裕次「対華二ヵ条要求第三号をめぐる日英関係」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター／大阪府大阪市, 2010/7/24
- 久保田裕次「漢冶萍公司の日中合弁化と対華二ヵ条要求」戦間期研究会, 戦間期研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2010/9/27
- 久保田裕次「三井物産の木材輸出と東亜興業株式会社」日本近代史研究会, 日本近代史研究会, 駒澤大学深沢キャンパス／東京都世田谷区, 2011/1/29
- 中尾浩康「教科書企画・『中学社会 歴史的分野』（日本文教出版）第2編3日本の古代国家の形成／4古代国家の展開」名古屋歴史科学研究会・愛知県歴史教育者協議会合同例会, 名古屋歴史科学研究会・愛知県歴史教育者協議会, 名古屋大学文学部大会議室／愛知県名古屋市, 2010/4/29 ※西宮秀紀氏（愛知教育大学教授、中学教科書執筆者・日本古代史）・梅村喬氏（大阪大学名誉教授、高校教科書執筆者・日本古代史）との共同報告。中尾氏の発表題目は「地域・民衆の姿を授業に」
- 中尾浩康「授業開き・歴史を学ぶ時の視点—旧石器発掘捏造事件から考える—」歴史教育者協議会第62回全国大会・日本前近代分科会, 歴史教育者協議会, 南山高等・中学校（南山学園）／愛知県名古屋市, 2010/8/2
- 中村翼「鎌倉中期における日宋貿易の展開と幕府」鎌倉時代史研究会, 鎌倉時代史研究会, 京都大学／京都府京都市, 2010/5/31
- 中村翼「入宋僧の活動と鎌倉幕府一元寇対策開始以前における—」海域アジア史研究会6月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2010/6/26
- 中村翼「日宋文化交流の展開と鎌倉幕府の宗教政策」歴史学研究会9月例会, 歴史学研究会, 早稲田大学／東京都新宿区, 2010/10/2
- 中村翼「書評：渡辺滋『古代・中世の情報伝達』」大阪歴史科学協議会前近代史部会1月部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立大学／大阪府大阪市, 2011/1/17
- 前田英之「小原嘉記氏の業績検討」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2010/4/27
- 正岡義朗「山本博文「豊臣政権「取次」の特質」」日本史研究会中世史部会・近世史部会合同部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2010/6/15
- 本井優太郎「戦後部落解放運動史像の再検討—主に北原泰作文書の検討を通じて—」部落問題研究所第48回部落問題研

- 究者全国集会, 部落問題研究所, 同志社女子大学／京都府京都市, 2010/10/24
- 柳沢菜々「園池司の廃止からみた供御供給体制の再編」明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2010/12/11
- 柳沢菜々「出土文字資料 一木簡・墨書土器・漆紙文書一」日本史・考古学合同研究会, 日本史・考古学合同研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/2/21
- 芳澤元「中世禅林の文芸興行と室町文化サロン」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2010/12/14
- 【2011年度】**
- 〔学部生〕
- 今井貴之「8世紀の山陵研究」古代史・考古学合同研究会, 古代史・考古学合同研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/10/17 (※黒木太郎との共同報告)
- 黒木太郎「8世紀の山陵研究」古代史・考古学合同研究会, 古代史・考古学合同研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/10/17 (※今井貴之との共同報告)
- 〔博士前期〕
- 宇垣政寛「戦時期におけるブロック紙の誕生一名古屋新聞から中部日本新聞へ一」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター／大阪府大阪市, 2011/7/17
- 内田敦士「光仁・桓武朝の仏教政策について」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2011/9/16
- 加藤伸行「明治中期蚕糸業新興地域における技術普及」名古屋近現代史研究会, 名古屋近現代史研究会, 名古屋大学／愛知県名古屋市, 2012/1/21
- 國原卓哉「戦国期細川氏権力の展開と同族間紛争」日本史研究会・大阪歴史学会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 大阪大学豊中キャンパス文法経中庭会議室／大阪府豊中市, 2011/6/5
- 國原卓哉「戦国期細川氏権力の展開と同族間紛争」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター／大阪府大阪市, 2011/7/17
- 國土仁風「奈良時代における私度僧尼と社会」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同2011年度卒業論文大報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, 関西学院大学大阪梅田キャンパス／大阪府大阪市, 2011/6/5
- 國土仁風「文献からみる八世紀の寺院」古代史・考古学合同研究会, 古代史・考古学合同研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/6/13
- 國土仁風「竹内亮氏・大会共同研究報告反省(2011年度古代史部会)」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2011/11/23
- 國土仁風「奈良時代社会における僧尼の位置」明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/12/24
- 時広雅紀「譜代藩と幕末政治—桜田門外の変後の彦根藩を事例に—」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 淀川区民センター／大阪府大阪市, 2011/9/30
- 東野将伸「災害データベース作成状況について」岡山県立記録資料館調査報告会, 岡山県立記録資料館調査報告会, 岡山県立記録資料館／岡山県岡山市, 2012/2/18
- 東野将伸「幕末維新期の豪農と地域金融」岡山地方史研究会3月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学／岡山県岡山市, 2012/3/18
- 久野洋「明治中期における岡山県の政治状況」岡山地方史研究会10月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学／岡山県岡山市, 2011/10/1
- 久野洋「明治中期における進歩党・憲政本党系勢力の地域的基盤—犬養毅の選挙地盤を中心に—」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学

- 協議会, キャンパスポート大阪／大阪府大阪市, 2011/11/11
- 李希泉「暦から見る世界史～社会との関わりをとおして」大阪大学歴史教育研究会例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/11/19 (※院生 3 人によるグループ発表、第 2 章「太陰暦・太陰太陽暦について」を担当)
- [博士後期]
- 久保田裕次「辛亥革命 100 周年と日本近代史研究—政治史・外交史の研究動向を中心に—」大阪歴史科学協議会 1 月例会, 大阪歴史科学協議会, 難波市民学習センター／大阪府大阪市, 2012/1/22
- 久保田裕次「第一次世界大戦期における「日中経済提携」と漢冶萍公司—九州製鋼株式会社の設立をめぐって—」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2012/3/22
- 中村翼「論評：河音能平「王土思想と神仏習合」」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市浪速区民センター／大阪府大阪市, 2011/12/1
- 中村翼「鎌倉前中期の禅宗と幕府」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大学コンソーシアム大阪／大阪府大阪市, 2012/2/3
- 中村博司「天正記第 4 (8 オ～9 オ)」天正記を読む会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館会議室／京都府京都市, 2011/4/5
- 中村博司「天正記第 5 (4 オ～5 オ)」天正記を読む会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館会議室／京都府京都市, 2011/8/2
- 中村博司「天正記第 5 (10 オ～11 オ)」天正記を読む会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館会議室／京都府京都市, 2011/12/6
- 中村博司「天正記第 5 (16 オ～17 オ)」天正記を読む会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館会議室／京都府京都市, 2012/3/6
- 中村博司「基調講演：大坂城の石垣と小豆島の石切丁場」小豆島町・土庄町主催「小豆島 石のシンポジウム」, 「小豆島 石のシンポジウム」, 旧福田小学校講堂／香川県小豆郡小豆島町, 2011/11/5
- 前田英之「平重盛の儀礼勤仕」明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/12/24
- 前田英之「平家政権と朝廷儀礼」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2012/1/31
- 正岡義朗「『将基馬日記』について」島本町立歴史文化資料館／大阪府島本町, 2011/11/29
- 本井優太郎「書評：三輪泰史『日本労働運動史序説』」近現代史サマーセミナー企画「近現代と労働」(書評会), 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, エル・おおさか／大阪府大阪市, 2011/12/24
- 森脇崇文「豊臣期大名権力の寺社政策—宇喜多氏分国における文禄期の転換—」徳島地方史研究会 2011 年 6 月例会, 徳島地方史研究会, 徳島県立文学書道館／徳島県徳島市, 2011/6/11
- 森脇崇文「大規模災害と資料救助活動」第 8 回四国ミュージアム研究会, 四国ミュージアム研究会, 阿波海南文化館／徳島県海陽町, 2012/2/26
- 柳沢菜々「木簡などからみた日本古代史研究」文献史料と考古資料から古代史を考える会, 文献史料と考古資料から古代史を考える会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2011/4/21
- 柳沢菜々「古代の「林」と供御供給 (大阪歴史学会大会第 1 回準備報告 (部会報告))」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2012/1/27
- 柳沢菜々「古代の「林」と供御供給 (大阪歴史学会大会第 2 回準備報告 (部会報告))」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2012/3/16
- 芳澤元「大田壮一郎氏・大会共同研究報告反省」日本史研究会中世史部会サブグループ, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2011/11/8
- 芳澤元「中世後期社会の価値体系と禅宗 (大阪歴史学会大会第 1 回準備報告 (部会報告))」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大学コンソーシアム大阪／大阪府大阪市, 2012/1/20
- 芳澤元「室町期日本の禅宗と文化 (大阪歴史学会大会第 2 回準備報告 (部会報告))」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大学コンソーシアム大阪／大阪府大阪市, 2012/3/23

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔学部生〕

奥田麻希「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』201, 大阪歴史科学協議会, pp. 49-51, 2010/5

〔博士前期〕

浅田祐治「懷徳堂研究センター編『三木家寄託資料調査報告書』(同,2010年12月)調査協力者」(※大浦和也氏・時広雅紀ほかと共同)

浅田祐治「2009年12月例会「後藤雅知氏「近世の請負制と海・山の利用」彙報」『歴史科学』203, 大阪歴史科学協議会, pp. 68-69, 2011/2

大浦和也「懷徳堂研究センター編『三木家寄託資料調査報告書』(同,2010年12月)調査協力者」(※浅田祐治氏・時広雅紀氏ほかと共同)

高木純一「部会ニュース(中世史部会):2010年5月部会報告要旨」『日本史研究』577, 日本史研究会, p. 86, 2010/9

高木純一「質疑・討論(2010年度大阪歴史学会大会中世史部会山田徹報告討論要旨)」『ヒストリア』223, 大阪歴史学会, pp. 145-147, 2010/12

時広雅紀「懷徳堂研究センター編『三木家寄託資料調査報告書』(同,2010年12月)調査協力者」(※浅田祐治氏・大浦和也氏ほかと共同)

山田蒔「部会ニュース(中世史部会):2010年1月中世史部会山岡瞳報告討論要旨」『日本史研究』573, 日本史研究会, pp. 83-84, 2010/5

〔博士後期〕

片山早紀「2009年10月例会「近世・近代移行期の再検討—松沢裕作『明治地方自治体制の起源』(東京大学出版会、2009年)をめぐって—」彙報」『歴史科学』203, 大阪歴史科学協議会, pp. 67-68, 2011/2

久保田裕次「部会ニュース(近現代史部会):2010年5月近現代史部会報告要旨」『日本史研究』576, 日本史研究会, pp. 85-86, 2010/8

久保田裕次「部会ニュース(近現代史部会):2010年5月近現代史部会佐々木拓哉報告討論要旨」『日本史研究』576, 日本史研究会, p. 86, 2010/8

久保田裕次「質疑・討論(2010年度大阪歴史学会大会近代史部会後藤敦史「開国期の幕府外交と海防掛」報告討論要旨)」『ヒストリア』223, 大阪歴史学会, pp. 260-262, 2010/12

中野賢治「兵庫津歴史講演会—パネルトークを終えて—」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』63, 歴史資料ネットワーク, p. 5, 2010/7

中野賢治「巻頭言 情報メディアの発達と災害対応—奄美豪雨対応をめぐって—」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』64, 歴史資料ネットワーク, p. 2, 2010/12

中野賢治「奄美豪雨災害の状況と史料ネットの対応」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』64, 歴史資料ネットワーク, p. 4, 2010/12

中村翼「部会ニュース(中世史部会):2009年12月中世史部会佐藤泰弘報告討論要旨」『日本史研究』573, 日本史研究会, pp. 81-82, 2010/5

中村翼「討論と反省:2010年度日本史研究会大会(中世史部会共同研究報告・小原嘉記「中世初期の地方支配と国衙官人編成」)」『日本史研究』582, 日本史研究会, pp. 54-58, 2011/2

本井優太郎「大阪府公文書館の統合・移転に関する要望書提出」『ヒストリア』219, 大阪歴史学会, pp. 120-123, 2011/3
※「大阪歴史学会委員会」名で叙述。岸本直文氏との共同執筆。

本井優太郎「北原泰作文書(その3) 井元麟之「証言書」・山本政夫「証言書」」『部落問題研究』192, 部落問題研究所, pp. 72-98, 2010/4

本井優太郎「北原泰作文書(その4) 八幡事件関係史料(愛媛県宇和島市)」『部落問題研究』194, 部落問題研究所, pp. 62-103, 2010/11

本井優太郎「初代松江市長・福岡世徳(6)」『山陰研究』3, 島根大学法文学部山陰研究センター, pp. 68-90, 2010/12,

※福岡世徳文書研究会（代表：竹永三男）による共同研究の成果

本井優太郎「旧真田山陸軍墓地に関する研究集會」『ヒストリア』224, 大阪歴史学会, pp. 98-99, 2011/2

森脇崇文「巻頭言 運営委員としての3年間を振り返って」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』62, 歴史資料ネットワーク, p. 2, 2010/5

芳澤元「新刊紹介：武田佐知子編『太子信仰と天神信仰』」『日本史研究』581, 日本史研究会, pp. 89-90, 2011/1

芳澤元「『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）一訓読と注釈一」『花園大学国際禅学研究所論叢』6, 花園大学国際禅学研究所, pp. 175-222, 2011/3

【2011年度】

〔博士前期〕

國原卓哉「質疑・討論（2011年度大阪歴史学会大会中世史部会・萩原大輔「足利義尹政権考」報告討論要旨, および共同要旨）」『ヒストリア』229, 大阪歴史学会, pp. 111-113, 2011/12

佐藤靖子「部会ニュース(古代史部会): 2009年2月古代史部会報告要旨」『日本史研究』590, 日本史研究会, pp. 105-106, 2011/10

高木純一「部会ニュース(中世史部会): 2010年12月中世史部会芳澤元報告討論要旨」『日本史研究』585, 日本史研究会, pp. 152-153, 2011/5

長谷川裕美「部会ニュース(古代史部会): 2009年6月卒業論文大報告会報告要旨」『日本史研究』591, 日本史研究会, pp. 139-140, 2011/11

〔博士後期〕

片山早紀「質疑・討論（2011年度大阪歴史学会大会近世史部会・水谷友紀「近世社会の秩序編成と寺社一葉師寺郷の近世一」報告討論要旨）」『ヒストリア』229, 大阪歴史学会, pp. 170-171, 2011/12

中村翼「書評と紹介：柳原敏昭著『中世日本の周縁と東アジア』」『日本歴史』765, 日本歴史学会, pp. 97-99, 2012/2

中村博司「研究ノート：古活字版『天正記』第三の改訂文と註解」『国史学研究』35, 国史学研究会, pp. 85-104, 2012/3
(※「天正記を読む会」の研究成果)

中村博司「史料紹介：慶應義塾図書館所蔵 古活字版『天正記』第四」『国史学研究』35, 国史学研究会, pp. 105-121, 2012/3
(※「天正記を読む会」の研究成果)

本井優太郎「報告：大阪府・市公文書館問題の経過と現状」『ヒストリア』227, 大阪歴史学会, pp. 94-97, 2011/6

本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会): 2011年2月近現代史部会田中希生報告討論要旨」『日本史研究』589, 日本史研究会, pp. 111-112, 2011/9

本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会): 2011年3月近現代史部会長尾宗典報告討論要旨」『日本史研究』590, 日本史研究会, pp. 107-108, 2011/10

本井優太郎「例会ニュース: 2011年4月例会「大規模自然災害から京都の地域歴史遺産を守る—東日本大震災の歴史史料保全活動から考える—」報告要旨と討論」『日本史研究』593, 日本史研究会, pp. 97-99, 2012/1

本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会): 2011年7月近現代史部会前田結城報告討論要旨」『日本史研究』593, 日本史研究会, pp. 110-111, 2012/1

本井優太郎「日本史研究会大会近現代史部会共同研究報告：討論と反省」『日本史研究』595, 日本史研究会, pp. 148-155, 2012/3

本井優太郎『大阪狭山市史 第4巻史料編 近現代』大阪狭山市史編さん委員会, 大阪狭山市教育委員会教育部社会教育・スポーツ振興グループ市史編さん担当編, 大阪狭山市, pp. 37-66, pp. 92-107, pp. 121-155, pp. 309-338, pp. 708-730, pp. 755-859, 2012/3 (※共編)

森脇崇文「参加記 歴史資料救出活動の現状にふれて」『歴史科学』204, 大阪歴史科学協議会, pp. 36-38, 2011/4

森脇崇文「書評：大西泰正『豊臣期の宇喜多氏と宇喜多秀家』」『日本史研究』563, 日本史研究会, pp. 41-46, 2011/6

森脇崇文「アラカルト：宇喜多氏備中領の範囲について」『倉敷の歴史』22, 倉敷市, pp. 126-128, 2012/3

柳沢菜々「2・11建国記念の日「不承認」大阪府民のつどい 開催記録」『ヒストリア』225, 大阪歴史学会, pp. 106-107, 2011/4

柳沢菜々「報告：大阪府条例による君が代起立斉唱の義務づけに対する反対活動」『ヒストリア』227, 大阪歴史学会, pp. 88-90, 2011/6

柳沢菜々「部会ニュース(古代史部会)：2008年6月卒業論文大報告会報告要旨」『日本史研究』589, 日本史研究会, pp. 103-104, 2011/9

柳沢菜々「書評：古尾谷知浩著『文献史料・物質資料と古代史研究』」『日本史研究』590, 日本史研究会, pp. 83-90, 2011/10
(※高橋照彦・奥村茂輝・中川あやとの共同執筆)

柳沢菜々「部会ニュース(古代史部会)：2010年3月古代史部会報告要旨」『日本史研究』593, 日本史研究会, pp. 102-103, 2012/1

柳沢菜々「『阪神・淡路大震災15年 震災と地域社会』に参加して」『歴史科学』207, 大阪歴史科学協議会, pp. 15-18, 2012/2

芳澤元「部会ニュース(中世史部会)：2010年12月中世史部会報告要旨」『日本史研究』585, 日本史研究会, p. 152, 2011/5

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD：0名 DC2：1名 DC1：1名 (計2名) ※DC2：芳澤元、DC1：中村翼

2011年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：1名 (計1名) ※DC1：中村翼

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部：1名 大学院：0名 (計1名) ※鈴木奈穂 (短期留学)

2011年度 学部：1名 大学院：0名 (計1名) ※伊崎 翔 (私費留学)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

尹 菡 博士前期課程修了、中南財經政法大学、日本語教師、2010/4

木下 光生 博士後期課程修了、奈良大学文学部史学科、准教授、2011/4

廣川 和花 博士後期課程修了、大阪大学適塾記念センター、准教授、2011/4

中川すがね 博士後期課程修了、愛知学院大学文学部、教授、2012/4

伊藤 真昭 博士後期課程修了、華頂短期大学歴史文化学科、教授、2012/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2010年度：2名 2011年度：1名

<内訳> 2010年度 中・高等学校教員 2名(私立東海高等学校・中学校、大阪府立豊中高等学校)

2011年度 中・高等学校教員 1名(京都府立高等学校)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010年度：0名 2011年度：0名

9. 刊行物

- 2010年度 『史友会会報』第25号(待兼山史友会編、同、2010年12月)
2011年度 『史友会会報』第26号(待兼山史友会編、同、2011年12月)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」(学会、編集事務局引き受け)

2008年6月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会(1998年度～2011年度)

- ・「国中(くんなか)、三輪山、カミナリ線」 2011年1月21日
発表者：和田 萃氏(京都教育大学名誉教授)
- ・「北米史学界における日本史の近年の潮流と日本中世史研究に関する研究報告」 2011年6月2日
発表者：スザンヌ・ゲイ氏(オベリン大学教授)
- ・「城からみる戦国日本の東西」 2012年1月18日
発表者：村田修三氏(大阪大学名誉教授)
- ・「明治期の婚姻と離婚」 2012年3月22日
発表者：フース・ハラルド氏(ハイデルベルク大学教授)

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 平 雅行 教授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻：日本中世史／古代中世仏教史。

1-1. 論文

- 平雅行 「明恵の怒りと法然」『伝道』77, 浄土真宗本願寺派伝道部, pp. 34-37, 2012/3
平雅行 「中世宗教の成立と社会」『宗教社会史』山川出版社, pp. 28-56, 2012/3
平雅行 「善光寺と女人罪業観」『歴史における周縁と共生』科学研究補助金基盤研究A研究成果論集, pp. 68-79, 2012/3
平雅行 「法然・親鸞と今」『GLOBE』68, 世界人権問題研究センター, pp. 8-9, 2012/1
平雅行 「善鸞の義絶と義絶状」『親鸞像の再構築』筑摩書房, pp. 13-33, 2011/10
平雅行 「親鸞の時代と仏教」『伝道』76, 浄土真宗本願寺派伝道部, pp. 67-72, 2011/9
平雅行 「『教行信証』後序と奏状」『『教行信証』の思想』筑摩書房, pp. 289-308, 2011/8
平雅行 「法然のあゆみとその教え」『法然上人八百年忌特別展覧会 法然——生涯と美術』京都国立博物館, pp. 10-15, 2011/3
平雅行 「専修念仏の弾圧と法然上人」『孝養父母』浄土宗大本山百萬遍知恩寺, pp. 77-85, 2011/3
平雅行 「法然誕生の時代」『別冊太陽 法然』平凡社, pp. 22-23, 2011/2
平雅行 「建永の法難と『教行信証』後序」『真宗教学研究』(真宗教学学会), 31, pp. 18-36, 2010/6
平雅行 「親鸞のあゆみと恵信尼」『御流罪八百年——親鸞の道を生きる』真宗大谷派高田教区教化委員会, pp. 9-63, 2010/6

1-2. 著書

- 平雅行(共著) 『心のめざめ』長野市南長野仏教会, pp. 125-158, 2012/2
平雅行(共著) 『ABC ラジオ ちよっといひ話』新風書房, pp. 326-330, pp. 353-357, 2011/8
平雅行(共著) 『日本研究論文集 法制と社会』世界出版社, pp. 43-54(ベトナム語翻訳は pp. 49-64), 2011/6
平雅行 『歴史のなかに見える親鸞』法蔵館, 212p., 2011/4
平雅行 『嘉禄の法難講演録』念仏行脚連絡協議会, 83p., 2011/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平雅行(インタビュー記事)「感性の人親鸞」『毎日新聞』2011/10/30 朝刊, 毎日新聞社, p. 11, 2011/10

平雅行(新聞コラム)「自己責任論からの脱却」『毎日新聞』2011年5月19日夕刊(東京版は6月16日朝刊に掲載), 毎日新聞社, p. 2, 2011/5

平雅行(新聞コラム)「鎌倉仏教 解釈の矛盾」『朝日新聞』2011年4月4日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2011/4

平雅行(新聞コラム)「眠り許されぬ戦死者」『朝日新聞』2011年2月28日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2011/2

平雅行(新聞コラム)「東国仏教 激変続いた」『朝日新聞』2011年1月31日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2011/1

平雅行(新聞コラム)「出家入道 社会の中核に」『朝日新聞』2010年12月27日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/12

平雅行(新聞コラム)「武力決起 仏法守るため」『朝日新聞』2010年11月29日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/11

平雅行(新聞コラム)「仏教改革 明恵の怒り」『朝日新聞』2010年10月25日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/10

平雅行(新聞コラム)「裏切り あり得ぬはずが」『朝日新聞』2010年9月27日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/9

平雅行(新聞コラム)「揺れる心こそ慈悲の姿」『朝日新聞』2010年8月30日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/8

平雅行(新聞コラム)「流罪でも心は折れず」『朝日新聞』2010年7月26日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/7

平雅行(新聞コラム)「「みんな愚か」弾圧的」『朝日新聞』2010年6月28日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/6

平雅行(新聞コラム)「罪犯すゆえ救われる」『朝日新聞』2010年5月31日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/5

平雅行(新聞コラム)「中世にもガチンコ討論」『朝日新聞』2010年4月26日夕刊, 朝日新聞社, p. 5, 2010/4

1-4. 口頭発表

平雅行 「上島享『日本中世社会の形成と王権』を読んで」12月例会, 日本史研究会, 2011/12

平雅行 「法然上人行状絵図と建永の法難」: 国宝法然上人行状絵図フォーラム, 浄土宗, 2011/11(フォーラム要旨が2011年11月24日朝日新聞(東京版)に掲載)

平雅行 「法然と顕密体制」: 浄土宗の文化と美術, 仏教美術研究上野記念財団助成研究会, 2011/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2006/11

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平雅行

課題番号: 22520666

研究題目: 中世社会における「出家入道」の基礎的包括的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

2011年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

日本中世では貴族から武士・百姓にいたるまで、家督を保持したままの出家が広汎に行われた。これは世界的に見てもきわめて珍しい現象であり、日本古代や近世・近代社会にも確認することができない。この点で出家入道は、すぐれて日本中世に特有の存在である。そこで本研究では、出家入道の実態を解明するとともに、それを手がかりにして日本の中世社会の特質を考察したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・代表

2008年6月～2010年6月

史学会・評議員	1999年11月～2012年3月
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在に至る
史学研究会・評議員	1990年5月～現在に至る

2. 村田 路人 教授

1955年生。1977年大阪大学文学部史学科卒業。1981年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002年4月より現職。専攻:日本近世史。

2-1. 論文

村田路人 「幕末期大坂周辺地域の触伝達—將軍家定死去時の「慎み」関係触を例に—」適塾記念会編『適塾』44, 適塾記念会, pp. 57-63, 2011/12

村田路人 「堤外地政策からみた近世治水史」日本歴史学会編『日本歴史』761, 吉川弘文館, pp. 19-21, 2011/10

村田路人 「享保改革期における京都代官玉虫左兵衛の堤外地開発事業」大阪商業大学商業史博物館編『大阪商業大学商業史博物館紀要』12, 大阪商業大学商業史博物館, pp. 1-19, 2011/10

村田路人 「近世淀川の治水と大坂」大阪歴史博物館編『シンポジウム「都市と河川のかかわりをさぐる」報告書』大阪歴史博物館, pp. 18-32, 2011/3

村田路人 「安政五年のコレラ流行と医療行政」適塾記念会編『適塾』43, 適塾記念会, pp. 55-61, 2010/12

村田路人 「享保初年における幕府派遣役人の上方川筋見分・普請と堤外地政策」枚方市立中央図書館市史資料室編『枚方市史年報』13, 枚方市立中央図書館市史資料室, pp. 1-26, 2010/4

2-2. 著書

多田羅浩三, 木下タロウ, 村田路人他(共編著)『大阪大学創立 80 周年にあたって 継承する適塾の精神』大阪大学適塾記念センター・適塾記念会, 2011/12 (p. 22, p. 23, p. 26 を執筆したほか、全体を編集)

芝哲夫, 木下タロウ, 村田路人(共編)『緒方洪庵全集』第二巻, 大阪大学出版会, pp. 1-420, 2010/11

芝哲夫, 木下タロウ, 村田路人(共編)『緒方洪庵全集』第一巻, 大阪大学出版会, pp. 1-426, 2010/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

村田路人 「大和川付替の治水史的意義」平成 23 年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム:河内の近世をつむぐ, 大阪商業大学商業史博物館, 大阪商業大学, 2011/12

村田路人 「近世淀川の治水と大坂」都市と河川のかかわりをさぐる, 大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館, 2010/10(『シンポジウム「都市と河川のかかわりをさぐる」報告書』pp. 18-32, 2011/3)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2010年度～2010年度、研究助成、助成金獲得者:村田路人

助成金名:河川整備基金助成事業

研究題目:堤外地政策よりみた近世治水政策の研究

助成団体名:(財)河川環境管理財団

助成金額:2010年度 直接経費 700,000円

研究の目的:

日本近世における幕藩領主の治水政策の中で、堤外地(集落から見て堤防より川側の地、すなわち堤防と堤防とに挟まれた地)に生育していた葭の刈捨て強制や、堤外地に存在した田畑の作付規制をはじめとする堤外地政策は、きわめて重要な位置を占めていた。本研究では、江戸幕府の堤外地政策の実態を、領主の堤外地領有権や河川沿岸住民の堤外地用益・所有権、また幕府の開発政策などとの関わりにおいて明らかにするとともに、堤外地政策という観点から、新たな近世治水史研究の方法論的提起を試みる。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・編集委員

2008年6月～2012年6月

3. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学修士(京都大学、1985年)。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻:日本近代史。

3-1. 論文

飯塚一幸「国会期成同盟第二回大会と憲法問題」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 51, pp. 49-85, 2011/3

3-2. 著書

飯塚一幸他(共編著)『佐賀新聞に見る佐賀近代史年表 明治編下』佐賀新聞社, pp. 1-507, 2011/3

飯塚一幸他(共編著)『懐徳堂記念会百年誌 1910～2010』財団法人懐徳堂記念会, pp. 19-48, 2010/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯塚一幸(解説)「民権ネットワーク【京都府】二〇一〇年・二〇一一年の研究状況」『自由民権』25, 町田市立自由民権史料館, pp. 128-132, 2012/3

飯塚一幸(辞典項目)「香月経五郎」『明治時代史大辞典』1, 吉川弘文館, pp. 521-522, 2011/11

飯塚一幸(書評)「居石正和『府県制成立過程の研究』」『日本史研究』586, 日本史研究会, pp. 54-62, 2011/6

飯塚一幸(書評)「竹田健二『市民大学の誕生—大坂学問所懐徳堂の再興—』」『懐徳』79, 懐徳堂記念会, pp. 43-51, 2011/1

3-4. 口頭発表

飯塚一幸「居石正和『府県制成立過程の研究』をめぐって」第310回日本近代法制史研究会例会, 日本近代法制史研究会, 2010/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号: 20520579

研究題目: 地方名望家の親族ネットワークと地方政治に関する研究

研究経費: 2010年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

近代日本における地方名望家の親族ネットワークのあり方とその特徴について、京都府京丹後市久美浜町の稲葉家と愛媛県宇和島市三浦の田中家を事例として究明し、それが地方政治に持った意味を明らかにする。

3-6-2. 2011年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号: 23320136

研究題目: 会沢正志齋書簡の研究

研究経費: 2011年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

研究の目的:

文学研究科日本史研究室が所蔵する会沢正志齋書簡を翻刻し史料集として刊行するとともに、その作業を通して得られた新たな知見から、近世後期から幕末に至る水戸藩に関する政治史的 analysis を行い水戸藩を中央政治史の中に位置付け直すこと、後期水戸学の再評価を行い会沢を取り巻く思想的ネットワークを解明すること、明治維新後の旧水戸藩改革派顕彰運動を追跡して寺門家から会沢書簡が流出した経緯を明らかにすることを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・編集委員長

2010年10月～2012年3月

大阪歴史科学協議会・委員

2007年6月～2012年6月

4. 川合 康 教授

1958年生。1987年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程単位修得退学。文学博士(神戸大学、1994年)。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012年4月より現職。専攻: 日本中世史。

4-1. 論文

川合康 「『鹿ヶ谷事件』考」『立命館文学』(立命館大学人文学会), 624, pp. 235-248, 2012/1

川合康 「鎌倉幕府の草創神話 ―現代人をも拘束する歴史認識―」『季刊東北学』(東北芸術工科大学東北文化研究センター), 27, pp. 41-57, 2011/5

川合康 「鎌倉幕府・戦争・『平家物語』」『宮城歴史科学研究』(宮城歴史科学研究会), 68・69, pp. 1-15, 2011/3

4-2. 著書

白川哲郎, 西村さとみ, 川合康他(共著)『伊賀市史 第一巻 通史編 古代中世』伊賀市, pp. 334-386, 2011/3

川合康 『源平合戦の虚像を剥ぐ 治承・寿永内乱史研究』講談社, 285p., 2010/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

川合康 「治承・寿永内乱期の和平をめぐる」中世史研究会 2010 年度大会, 中世史研究会, 名古屋大学文学部, 2010/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号: 19520578

研究題目: 鎌倉幕府の平和政策に関する研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

治承・寿永内乱期の戦争のなかから形成された鎌倉幕府権力が、いかなる政策や行事の遂行によって、内乱期の敵・味方関係を清算し、長期にわたり存続しえたのかという問題を、I 敵方武士の赦免、II 敵方張本の遺族の保護、III 味方の戦死者遺族と負傷者の保護の問題、IV 村落の勸農・復興政策、V 敵・味方を問わない鎮魂・供養、の5つの検討課題から具体的に追究する。

4-6-2. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号: 23520833

研究題目: 『平家物語』成立圏の歴史学的研究

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

本研究は、従来、国文学研究で膨大な研究成果が積み重ねられてきた『平家物語』の成立に関して、治承・寿永内乱史研究の成果に基づいて新たな視点から検討を行うものである。具体的には、『平家物語』の「原構想」の中核にある「鹿ヶ谷事件」譚の展開を、鎌倉時代の文献・諸史料のなかを探るとともに、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される同時代の文学作品などを収集・検討することによって、『平家物語』の原型が成立した時期やその「成立圏」を、歴史学的に解明することが目的である。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

メトロポリタン史学会・委員

2005 年 4 月～現在に至る

5. 武田 佐知子 教授

1948 年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻: 日本古代史・服装史。

5-1. 論文

武田佐知子 「古代浴衣復元のための覚え書き」鈴木則子(編)『「歴史における周縁と共生～疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼」研究成果論集』pp. 131-142, 2012/3

5-2. 著書

武田佐知子 (CD)『古代日本の衣服の変遷 ―貴族の服装と庶民の貫頭衣―』アートデイズ, 2010/11

武田佐知子(編)『太子信仰と天神信仰——信仰と表現の位相——』思文閣, 352p., 2010/5

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

武田佐知子 「衣服と笏」学術シンポジウム「古代シナノ地域史の再構築―地域から古代史を読み直す―」:第Ⅱ部「戸隠神社所蔵の(重要文化財)通天牙笏と古代の笏」, 日本学術振興会科学研究費「目録学の構築と古典学の再生」/社団法人 金鶏会, THE SAIHOKUKAN HOTEL(旧 長野ホテル犀北館), 2011/10

武田佐知子 「仏教文化史から見る聖徳太子」第5回学術研究大会:聖徳太子をめぐる諸問題, 藝林会, 2011/9

武田佐知子 「古代人は何を着ていたか」, 総社市/古代吉備のロマン学―総社観光大学―, 岡山県立大学, 2011/8

武田佐知子 「第二部 パネルディスカッション」東京新聞フォーラム「よみがえる古代の大和 卑弥呼の実像」, 東京新聞, 江戸東京博物館ホール, 2011/8

武田佐知子 「ズボンとスカートの歴史学」, 東京学芸大学附属高等学校, 2011/2

武田佐知子 「古代吉備の風景」, 総社市第25回国民文化祭, 総社市総合文化センター, 2010/11

武田佐知子 「古代の衣服と社会」立命館大学講演会:古代の衣服と社会, 立命館大学, 立命館大学衣笠校舎清心館, 2010/11

武田佐知子 「咲くやこの花―大阪の歴史と四天王寺・聖徳太子―」, 大阪大学工学部同窓会桜花会, 大阪大学银杏会館, 2010/11

武田佐知子 「聖徳太子像の謎」, 愛媛県 法蓮寺, 2010/10

武田佐知子 「一遍と熊野詣」, 世界遺産熊野本宮館, 世界遺産熊野本宮館多目的ホール, 2010/10

武田佐知子 「邪馬台国の女王、卑弥呼の衣服」, 長野高校金鶏会, 長野高校同窓会金鶏会館, 2010/7

武田佐知子 「古代の国際関係と邪馬台国の女王卑弥呼の衣服」文化講座『三輪山セミナー』, 大神神社, 2010/6

武田佐知子 「民族衣装における異装と共装」第37回総会・研究発表大会 公開シンポジウム:異装の考現学, 日本生活学会, 武庫川女子大学, 2010/5

武田佐知子 「遣唐使粟田真人の冠から見た日本古代の礼服冠について」国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」, 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 平城遷都 1300年記念春季特別展「大唐皇帝陵展」実行委員会, なら 100年會館, 2010/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

武田佐知子 紫綬褒章, 2003/11

武田佐知子 第8回濱田青陵賞, 大阪府岸和田市/朝日新聞社, 1995/9

武田佐知子 サントリー学芸賞 思想・歴史部門, サントリー文化財団, 1985/11

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2010年度、研究助成、助成金獲得者:武田佐知子

助成金名:サントリー文化財団研究助成

研究題目:創唱宗教における民間信仰受容による変化の総合的研究

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2010年度 直接経費 1,000,000円

研究の目的:

これまでの歴史学が創唱宗教の社会的展開の様相や、教義の系譜などに関心を持ってきたのに対し、民俗学では民間信仰の事例報告に重きをおいて、その地域的特性を明らかにすることに主たる関心を払ってきたため、その結果として両者の狭間における宗教状況については研究がほとんど見られない現状に鑑み、創唱宗教と民間信仰の狭間における宗教状況を明らかにする。本研究では、7月7日における習俗・行事に焦点を絞り、従来の「七夕」についての研究史を、天文学や国文学の視点からも批判的に検討するとともに、7月7日の行事・習俗について、それを先験的に「七夕」とするのではなく、あるがままの行事・習俗について現地調査し、その本質を考える。

5-7-2. 2011年度、研究助成、助成金獲得者: 武田佐知子

助成金名: サントリー文化財団研究助成

研究題目: 七月七日の習俗について

助成団体名: サントリー文化財団

助成金額: 2011年度 直接経費 1,000,000円

研究の目的:

前年度に実施した「創唱宗教における民間信仰受容による変化の総合的研究」を研究の方向性を明確化し進展させたものである。従来の歴史学と民俗学が役割分担したかのように研究対象としてきた創唱宗教と民間信仰の研究の狭間には、両学問間の連絡体制の不備から落ち込んでしまった多様な信仰形態が存在する。七夕の起源・役割・行事の内容等に関する理解に学術的な統一性や共通性が希薄である中、七月七日の習俗を全て七夕の習俗と同一視する安易な解釈が定説化している実態がある。本研究においては、七月七日の習俗の多様性をさぐり、当該日の行事がどのような信仰によって形成されたものかを具体例によって検証する。

5-8. 外部役員等の引き受け状況

文化審議会・整備計画委員	2010年9月～現在に至る
大阪府・山片蟠桃賞選考委員	2010年4月～2012年3月
小林国際奨学財団・評議員	2010年3月～現在に至る
大阪市博物館協会・評議員	2009年10月～現在に至る
女性史総合研究会・女性史学賞選考委員	2006年4月～現在に至る

6. 市大樹 准教授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2001年)。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員を経て、2009年4月より現職。日本学術振興会賞(2012)、日本学士院学術奨励賞(2012)。専攻: 日本古代史。

6-1. 論文

市大樹 「日本古代木簡の多機能性」『東アジアの簡牘と社会』(中国法政大学法律戸籍整理研究所・奈良大学簡牘研究会・中国法律史学会古代法律文献専門委員会), pp. 85-99, 2012/3

市大樹 「物品進上状と貢進荷札」藤田勝久・松原弘宣『東アジア出土資料と情報伝達』pp. 261-297, 2011/6

市大樹 「飛鳥浄御原令について」『歴史と地理』645, pp. 21-26, 2011/5

市大樹 「木簡からみた飛鳥寺」『明日香風』119, pp. 29-34, 2011/5

市大樹 「興道寺廃寺と周辺社会を舞台とした人々」美浜町教育委員会『ここまで分かった 興道寺廃寺』pp. 63-86, 2011/3

市大樹 「木簡からみた飛鳥・藤原の都」木下正史・佐藤信(編)『古代の都』1, 吉川弘文館, pp. 274-297, 2010/12

市大樹 「木簡と平城宮大極殿」『地図情報』114, pp. 4-6, 2010/8

6-2. 著書

市大樹『すべての道は平城京へー古代国家の〈支配の道〉』吉川弘文館, 247p., 2011/5

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹(新刊紹介)「白石成二著『古代越智氏の研究』』『ヒストリア』228, 大阪歴史学会, p. 111, 2011/10

市大樹(書評)「館野和己編著『古代都城のかたち』』『古文書研究』70, 日本古文書学会, pp. 123-125, 2010/11

市大樹(書評)「八木充『日本古代出土木簡の研究』』『日本歴史』747, 日本歴史学会, pp. 109-111, 2010/8

6-4. 口頭発表

市大樹「日本古代交通史の研究現状と課題」総合展示1室新構築にむけての古代社会の実態についての準備研究会, 国立歴史民俗博物館, 2012/3

市大樹「飛鳥・藤原木簡の研究現状」国際学術研究会「交響する古代Ⅱ」, 明治大学, 2012/3

市大樹「律令公民制の成立過程と木簡」日本史研究会, 機関誌会館, 2012/1

市大樹「木簡からみた日本古代国家の形成過程」奈良歴史研究会, 奈良女子大学, 2011/12

市大樹「日本古代木簡の多機能性」“東亜簡牘与社会—東亜簡牘学探求”研究会, 花園飯店(中国・北京), 2011/8(『東アジアの簡牘与社会』pp. 85-99, 2012/3)

市大樹「日本律令国家の建設と藤原京」大阪大学歴史教育研究会第49回, 大阪大学歴史教育研究会, 2011/3

市大樹「大仏開眼への道」風土記の丘教室10月例会, 島根県立八雲立つ風土記の丘, 2010/10

市大樹「興道寺廃寺と周辺社会を舞台とした人々」平成22年度美浜町歴史フォーラム, 美浜町教育委員会, 2010/9(『ここまで分かった 興道寺廃寺』pp. 63-86, 2011/3)

市大樹「志摩国の荷札木簡—調と贄—」第38回古代史サマーセミナー, 古代史サマーセミナー実行委員会, 2010/8

市大樹「平城京から若狭へ 若狭から平城京へ」福井県立歴史民俗資料館, 2010/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市大樹 日本学術振興会賞(第8回), 日本学術振興会, 2012/2

市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号: 22520667

研究題目: 木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較による日本古代文書論の再構築

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

日本古代文書論の再構築を目指して、奈良時代の行政文書に焦点を定め、木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較をおこなう。〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉に注意しながら、日本古代の行政システムを具体的に再現し、従来の様式論に変わる新たな枠組みの構築を模索する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

古代文化刊行委員会・編纂参与	2010年4月～現在に至る
大阪歴史学会・編集委員	2009年6月～現在に至る
続日本紀研究会・編集委員	2006年6月～現在に至る

7. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻:日本史学/日本近現代史。

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

北泊謙太郎 「今こそ「教育の自由」を —大阪府における「教育改革」の歴史的背景—」九条の会・豊中いちばん星, 九条の会・豊中いちばん星, 豊中市立岡町図書館, 2011/11(『いちばん星通信』29, p. 2, 2012/3)

北泊謙太郎 「維新の会「君が代」起立条例の歴史的背景」大阪学研会府政問題討論会, 大阪学研会, たかつガーデン, 2011/10

北泊謙太郎 「「君が代」起立条例案の歴史的 position—学校現場における「日の丸」「君が代」の歴史的経緯から—」阪大九条の会緊急集会, 阪大九条の会, 大阪大学大学院文学研究科, 2011/6

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・会計監査

2011年6月～現在に至る

大阪歴史学会・編集委員

2006年6月～2010年6月

2-8 東洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

准教授：田口宏二郎

助教：赤木 崇敏

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	8	12	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	8	6	0	0	0
2011	3	2	0	4	0
計	11	8	0	4	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

大学院の教育においては、以下の 6 項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生同士からの批評を糧にして水準向上をめざす。2010年度は修士論文 6 本、2011年度は博士論文 3 本、修士論文 2 本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。

④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年 1 回は発表するようにする。⑥専門教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部の教育においては、以下の 4 項目を目標とする。①2 年次生向けの漢文演習を 2 種類開講し、卒業論文執筆のための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3 年次生、4 年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の 3 分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員では毎年 1 人平均で単著論文ないしそれに匹敵する内容のもの 1 本を発表することを目標とする。ただし東洋史学分野では印刷・編集などの関係で毎年確実に 1 本という目標はそもそも無理なので、実際には 3 年に 3 本を目標とする。本分野の単著論文とは、理科系の共同論文の少なくとも 5 本程度、一般的には 10 本程度、さらに場合によっては 20 本以上に相当する時間と労力を要するものである。博士後期課程の院生では 2 年に 1 本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。こうした学内での順調な教育を反映して、2010 年度においては卒業論文 8 本、修士論文 6 本を提出させることができた。とくに修士論文は、年度目標で設定していた提出本数を順調にクリアするとともに、6 本のうち 5 本は、A 以上の評価を与え得る優れた論文となった。加えて、院生の論文発表は全 6 件ののぼり、学会・研究会（国際会議：上海交通大学研究交流セミナー、国内会議：野尻湖クルルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪大学歴史教育研究会など）における発表は、全 18 回にもおよんでいる。また片山は 10 月に、第 15 回大阪大学・上海交通大学学術交流セミナー（於上海）に院生 2 人を帯同し、中国語で研究発表と討論を行う機会を与えた。さらに荒川は博士後期課程の学生 2 人を帯同して、内モンゴルにおいて出土史料や遺跡の調査などを行い、桃木は 2 回のベトナム史上の政治・軍事拠点の調査にのべ 3 名の大学院生を同行させて現地学習の機会を与えた。留学状況としては、2009 年 9 月から台湾の教育部華語文奨学金により国立台湾師範大学へ留学していた 1 名が 8 月に成果を得て無事に帰国した。中国史の院生 2 名は、文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」を利用して、それぞれ中国と台湾で調査研究を行った。また専門教育と並んで桃木を中心にした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。

また 2011 年度においても、卒業論文 4 本、修士論文 2 本、博士論文 4 本を提出させることができた。とくに博士論文は、年度目標で設定していた提出本数を 1 本上回るかたちで順調にクリアした。加えて、院生の論文発表は全 7 件にのぼり、学会・研究会（国際会議：International Conference on Stage of Development of Turkic Culture: The Beginnings and the Era of Inscriptions (Ulaanbaatar, Mongolia)、国内会議：野尻湖クリルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪大学歴史教育研究会など）における発表は、全 23 回にもおよんでいる。また片山は、自身の科研調査の一環として、院生・学生各 1 人を台湾での文献資料調査に帯同し、資料探索の方法、デジカメによる資料撮影の方法等を指導した。また荒川は、自身の科研調査の一環として、院生 1 人を中国の河西地域に派遣し、研究対象地域を実地調査する機会を与え、桃木は、冬の北部ベトナム調査に院生・学生各 1 名（ほかに文化動態論専攻の院生 1 名）を参加させ、農村歴史調査の基礎訓練をおこなった。留学状況としては、中国史・東南アジア史の院生 3 名が、中国・インドネシア・オーストラリアの大学に留学中である。さらに中国史・中央アジア史の院生 6 名は、文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」を利用して、それぞれ中国本土や少数民族自治区、さらにはヨーロッパで調査研究を行った。また専門教育と並んで桃木を中心にした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。

2. 研究

2010 年度では、森安、片山、荒川、桃木はそれぞれ、科研研究プロジェクトの代表者として、学内外の分担者・協力を率いて各自の研究計画を遂行するなど、着実に研究成果を挙げている。また研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。森安は 3 本の研究論文を発表しただけでなく、8 月にはベルリンで英語の研究発表をおこない、11 月の内陸アジア史学会 50 周年記念シンポジウムでは基調講演を担当した。片山は日本語論文 1 本と中国語に翻訳した論文 1 本とを発表し、また第 15 回大阪大学・上海交通大学学術交流セミナー（於上海、10 月）の歴史学分科会を企画・運営した。桃木はタンロンに関する論文を 1 本発表した。なお文学研究科が日本学術振興会に応募して採択された「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」が本年度も継続しているが、それを利用して坂尻が海外において調査研究を行った。また荒川は、予定通り中国の新疆（トゥルファン）・内モンゴル（フフホト）における資料・遺跡調査を 8 月に行うとともに、10 月より 3 ヶ月間、「北京大学国際漢学家研修基地（IACS）」の援助を得て北京大学に滞在して研究を進めた。この間、10 月に北京の人民大学、12 月に上海の東華大学にて研究報告を行った。さらに桃木は、夏季と冬季にベトナム史上の政治・軍事拠点の立地調査をおこなう一方、建都 1000 年を迎えたタンロン（ハノイ）の初期の状況について、10 月にハノイの建都 1000 年記念シンポとソウルでの東南アジア研究のシンポでそれぞれ報告した。2 月にはグローバル経済史に関するシンガポールのワークショップで、中世ベトナムの交易と農村社会について報告した。なお荒川・桃木は、既に提出して学位を取得した博士論文をそれぞれ著書として公刊した。

また 2011 年度では、森安は 3 本の研究論文を発表したほか、科研研究プロジェクトの成果をまとめあげ、それを出版助成を得て著書として刊行した。片山は、評価の高い既発表論文 2 本の中国語版を公刊し、また台湾の中央研究院台湾史研究所主催の国際シンポジウムに招かれて基調講演を行い、さらに科研費を利用して 1930 年代中葉の南京市における土地調査事業に関する文献資料調査を台湾で実施した。また荒川は英語論文 2 本を含む 5 本の論文を公刊し、桃木は英語論文 1 本を公刊した。また 7 月に北京の WHA（世界史学会）でコメント、3 月にトロントの AAS（アジア学会）でパネル報告をおこなうなど、グローバルヒストリー関係の成果報告につとめた。赤木は中国語 1 本を含む研究論文 3 本、学会動向 1 本を公刊し、研究発表 1 本を行った。なお文学研究科が日本学術振興会に応募して採択された「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」が本年度も継続しているが、それを利用して赤木が中国において調査研究を行った。また森安は、昨年度のロンドン・ベルリンでのウイグル文書調査に引き続いて、パリでの調査を実施し、荒川は 9 月に中国の新疆（トゥルファン）において資料・遺跡調査をした。さらに森安・荒川はモンゴル国（カラバルガスン）において遊牧民の遺跡の調査をし、桃木は冬季にベトナム北部の近世農村史調査を実施した。

このほか両年度を通じて、中央アジア学フォーラム、海域アジア史研究会などが予定通り開かれるとともに、その運営を主導することによって、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上に貢献した。また森安・荒川は『内陸アジア言語の研究』を編纂し、この分野の日本優位に尽力した。

3. 社会連携

2010年度は、桃木は全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、森安・荒川がこれを補佐した。具体的には、歴史教育研究会の例会のほかに、8月9日～11日にわたって「阪大史学の挑戦2」と題した大会を開催し、世界史教育に関わる高大連携を積極的に推進した。またその場で森安は、2つの講演をおこなった。片山は財団法人懐徳堂記念会の常務理事として、当該記念会の創立100周年を記念する各種イベントの企画・実施に参画した。さらに桃木は三重県、神奈川県、岐阜県の高校教員研究会で講演をおこなったほか、タンロン皇城遺跡の調査保存に関する日越合同専門家委員会委員として、10月の建都1000年記念シンポの歴史部会の運営協力その他の活動をおこなった。なお荒川は、テレビ東京によるシルクロード関係番組作りへの協力を行った。

また続く2011年度も、桃木は大阪大学歴史教育研究会の活動を継続し、月例会で科学技術、環境、病気と医療などの新しいテーマを取り上げ、引き続き荒川がこれを補佐した。また研究会公式ブログを開設し、これまでの成果をまとめた2冊の報告書の刊行を実現するとともに、神奈川・北海道などの教員の研究会にも協力した。また片山も引き続き財団法人懐徳堂記念会の常務理事として、当該記念会の管理・運営および各種イベントの企画・実施に参画し、荒川も懐徳堂記念会の運営委員として秋季講座を企画し、その実施に尽力した。さらに桃木は歴史教育関係で計12件の研究報告、講演、出前講義等を実施したほか、タンロン皇城遺跡の調査保存に関する日越合同専門家委員会委員として、歴史部会の夏季中国調査その他の活動をおこなった。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

教育目標として掲げた諸項目は、何れについても順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られた。こうした学内での順調な教育を反映して、卒業論文12本、修士論文8本、博士論文4本を提出させることができた。何れの論文も高いレベルで作成されており、さらに修士論文については目標としていた数を大きく上回っている。また院生の論文発表および学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに順調に行われた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

2. 研究

教員・大学院生の研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	4	0	4
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 岡田雅志 「18-19世紀ベトナム・タイバック地域ターイ(Thai)族社会の史的研究」 2012/3
主査：桃木至朗 副査：片山剛、荒川正晴
- 齊藤茂雄 「7・8世紀の陰山における突厥と隋唐帝国——遊牧民と定住民の接触をめぐって——」 2012/3
主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、桃木至朗
- 山本一 「清代地方政治・官僚制度における柔構造」 2012/3
主査：片山剛 副査：荒川正晴、桃木至朗
- 山本明志 「モンゴル時代チベット交通史研究——駅伝の利用実態と設置過程の検討を中心に——」 2012/3
主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、桃木至朗、中村淳（駒澤大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	6(0)	6(0)
2011	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	7(6)
計	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	7(0)	13(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	2	0	13	1	2	18
2011	1	2	14	0	6	23
計	3	2	27	1	8	41

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士前期〕

新見まどか「〔報告要旨〕8～9世紀、華北における諸藩鎮の交流・対立——平盧節度使を中心として——」『遼金西夏史研究会 NewsLetter』第3号, 2010/12, pp. 7-8.

小野潤子・吉川和希・高木純一「最初のヘゲモニー国家 17世紀のオランダ」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授史料の研究開発』平成20年度～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究(B)・課題番号 20320094）成果報告書シリーズ4, 大阪大学文学研究科内堤一昭研究室, 2011/2, pp. 20-38.

〔博士後期〕

赤木崇敏・伊藤一馬「現地情報（2）ロシア編 ロシア・サンクトペテルブルク, 東方文献研究所」『遼金西夏史研究会 News Letter』第3号, 2010/12, pp. 19-24.

伊藤一馬「2010年度ロシア・カラホト文書調査メモ」荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信』（2010年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書）1, 2011/3, pp. 101-103.

- 鈴木宏節・齊藤茂雄「現地情報(3) 内蒙古編 調査報告」『遼金西夏史研究会 News Letter』3, 2010/12, pp. 25-35.
- 齊藤茂雄「新出敦煌文書「駙程記断簡」に基づく内蒙古陰山南麓調査報告」荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信』(2010年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書) 1, 2011/3, pp. 93-99.
- 【2011年度】
- 〔博士前期〕
- 多賀良寛「19世紀における阮朝の通貨統合政策とベトナム銭の広域的流通」『南方文化』第38輯, 2011/12, pp. 43-60.
- 〔博士後期〕
- 伊藤一馬「北宋における将兵制成立と陝西地域——對外情勢をめぐって——」『史学雑誌』120-6, 2011/6, pp. 39-61.
- 伊藤一馬「南宋成立期の中央政府と陝西地域——「宋西北辺境軍政文書」所見の赦書をめぐって——」『東方学』第123輯, 2012/1, pp. 54-69.
- 齊藤茂雄「突厥「阿史那感德墓誌」訳注考——唐羈縻支配下における突厥集団の性格——」『内陸アジア言語の研究』26, 2011/8, pp. 1-38.
- 新見まどか「唐代後半期における「華北東部藩鎮連合体」」『東方学』第123輯, 2012/1, pp. 20-35.
- David Bennett, 塩崎由梨, 田由甲, 横林泰広「タイ」『海外フィールドスタディ試行プログラム活動報告書』大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 2011/8, pp.36-96.
- 西田祐子「『新唐書』回鶻伝の再検討——唐前半期の鉄勒研究に向けて——」『内陸アジア言語の研究』26, 2011/8, pp. 75-139.

(2)口頭発表

- 【2010年度】
- 〔博士前期〕
- 入野恵理子「北魏のバイリンガル性——史料に見える「鮮卑語」——」第39回中央アジア学フォーラム(大阪・大阪大学), 2010/7/31.
- 入野恵理子「北魏のバイリンガル性——史料に見える「鮮卑語」——」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」(大阪・大阪大学中之島センター), 2010/8/10.
- 齊藤茂雄・旗手瞳「突厥文字碑文と唐蕃会盟碑の歴史的重要性」第39回中央アジア学フォーラム(大阪・大阪大学), 2010/7/31.
- 齊藤茂雄・旗手瞳「突厥碑文と唐蕃会盟碑の歴史的重要性」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」(大阪・大阪大学中之島センター), 2010/8/10.
- 横山博俊「宋代における官僚処分と「上訴」制度」第134回宋代史談話会(大阪・大阪市立大学), 2010/11/13.
- 吉川和希「16世紀の中国ポルトガル関係をめぐる諸問題」海域アジア史研究会6月例会(大阪・大阪大学), 2010/6/26.
- 吉川和希「15世紀後半のベトナムと雲南」2010年度第6回中国近世近代史研究会(大阪・大阪市立大学), 2010/12/4.
- 〔博士後期〕
- 向正樹・矢部正明・後藤誠司・伊藤一馬「中央ユーラシア史関係用語リストの提示」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」(大阪・大阪大学中之島センター), 2010/8/10.
- 伊藤一馬「1000年前の「中国」と「世界」」第3回研究交流会「合ケン。」(大阪・大阪大学), 2010/11/27.
- 伊藤一馬「北宋の対西夏戦略と情報伝達」第135回宋代史談話会(大阪・大阪市立大学), 2010/12/4.
- 齊藤茂雄・旗手瞳「突厥文字碑文と唐蕃会盟碑の歴史的重要性」第39回中央アジア学フォーラム(大阪・大阪大学), 2010/7/31.
- 齊藤茂雄・旗手瞳「突厥碑文と唐蕃会盟碑の歴史的重要性」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」(大阪・大阪大学中之島センター), 2010/8/10.
- 齊藤茂雄「碎葉とアクベシム:漢文資料による研究について」中央アジア・キルギス共和国チュウ河流域の遺跡について(東京・東京文化財研究所), 2011/1/14.
- 田由甲「通過歴史資料和田野調査來看福建沿海地區的一個特殊單位‘境’」第15回上海交通大学・大阪大学学術セミナー(上

海・交通大学), 2010/10/22. 【中国語発表】

富田暁「『ファジャル・サラワク(Fajar Sarawak)』巻頭言翻字・翻訳・解題」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同プロジェクト「マレー世界における地方文化」研究会(東京・東京外国語大学), 2010/10/31.

富田暁「オランダ国立公文書館とオランダ東インド会社史料」大阪大学歴史教育研究会第46回例会(大阪・大阪大学), 2010/11/20.

山本一「清末の幕僚と地方政治——張之洞の幕僚を例として——」海域アジア史研究会10月例会(大阪・大阪大学), 2010/10/9

山本一「晚清幕僚と地方政治——以張之洞の幕僚為例——」大阪大学・上海交通大学研究交流セミナー(上海・上海交通大学), 2010/10/23. 【中国語発表】

【2011年度】

[博士前期]

猪原達生「中国の歴史と宦官——「嫌われ者」たちの真実——」第5回研究交流会「合ケン。」(大阪・大阪大学), 2011/4/28.

猪原達生「元和の逆党」再考——唐代における宦官の派閥の実態について——」第139回宋代史談話会(大阪・大阪市立大学), 2011/5/12.

多賀良寛「ベトナム阮朝の通貨統合政策と中国沿海部におけるベトナム銭の広域的流通」2011年海域アジア史研究会6月例会(大阪・大阪大学), 2011/6/25.

多賀良寛「19世紀前半の東~南アジアにおける貿易と貨幣制度:ベトナムの事例」「帝国・システム・海域ネットワーク」科研・東方学会国際シンポ準備会合同研究会プログラム(名古屋・名古屋大学), 2011/9/8.

甲斐田純・多賀良寛・宗村敦子「身体観の東西——伝統的身体観とその変容——」大阪大学歴史教育研究会・第56回例会(大阪・大阪大学), 2011/12/17.

吉川和希「東南アジアにおける初期交易の時代」論をめぐって」海域アジア史研究会6月特別例会(大阪・大阪大学), 2011/6/4.

吉川和希「15世紀後半~16世紀前半における中越間の「越境」」2011年度第3回中国近世近代史研究会(大阪・大阪市立大学), 2011/7/23.

YOSHIKAWA Kazuki, “Foreign Trade of Vietnam during the 15th-17th century,” Kiiiki Aja-shi Kenkyukai [The Research Group of Maritime Asian History] (Osaka: Osaka University), 2012/3/28.

[博士後期]

石川禎仁「「転帖」の運用形態に見える帰義軍期敦煌の土地利用」第42回中央アジア学フォーラム(大阪・大阪大学), 2011/7/30.

伊藤一馬「南宋成立直後の陝西地域と中央政府」第109回史学会大会東洋史部会(東京・東京大学), 2011/11/6.

伊藤一馬「北宋陝西地域の堡寨と烽火台——現地調査報告を兼ねて——」第144回宋代史談話会(大阪・大阪市立大学), 2011/11/19.

伊藤一馬 “Military Policy and the International Situation in Northern Song: Eastern Eurasia in the 10th-13th Century” 海域アジア史研究会3月例会(大阪・大阪大学), 2012/3/28.

岡田雅志「18-19世紀ベトナム産肉桂の流通からみた東アジアの生薬交易」(日本医史学会・学術大会(6月11・12日)において内野花氏(大阪大学・CSCD教員)と共同報告)(東京・順天堂大学), 2011/6/11-12.

岡田雅志「越境するアイデンティティ:「黒タイ」たちの歴史と民族文化」(第7回松下幸之助国際スカラシップフォーラム「地球をつなぐ:アジア・アフリカ学の可能性」(東京・東京大学), 2011/10/15.

齊藤茂雄 “A Report on the Rubbings of the Orkhon Inscriptions Belonging to the Institute of Oriental Manuscripts in St. Petersburg”, Aug. 16, 2011, International Conference on Stage of Development of Turkic Culture: The Beginnings and the Era of Inscriptions (Ulaanbaatar, Mongolia), 2011/8/11.

塩崎由梨, 田由甲, 横林泰広「フィールドスタディで何か学べるのか——タイからの報告——」海外フィールドスタディ試行プログラム報告会(大阪・大阪大学), 2011/4/27.

田由甲「近世、福建沿岸地域における「境」の形成——辺境で起きた衝突と防衛の視点から——」大阪大学 G-COE 「コ

「コンフリクトの人文学」院生助成成果報告会（大阪・大阪大学），2011/6/18.

田由甲「明清時期、福建沿海地域における「境」第25回明清史夏合宿（京都・聖護院），2011/8/10.

田由甲「明代、福建沿海都市聚落における「境」の形成」2011年度第7回近世近代史研究会（大阪・大阪市立大学），2011/12/17.

西田祐子「唐の第三次阿史那賀魯征討と西突厥の牙庭について」第48回日本アルタイ学会（野尻湖クリルタイ）（長野県・藤屋旅館），2011/7/16.

旗手瞳「吐蕃後期におけるアシヤ人千戸長の一族について」第43回中央アジア学フォーラム（大阪・大阪大学），2011/12/3.

山本一「18世紀前半、督撫による地方官の選任——清代地方政治・官僚制度における柔構造の一端——」2011年度第3回近世近代史研究会（大阪・大阪市立大学），2011/7/23.

山本一「清末地方政治における財政関係局所——山西省の攤捐改革を中心に——」2011年度第7回近世近代史研究会（大阪・大阪市立大学），2011/12/17.

(3)その他(書評・翻訳など)

【2011年度】

〔博士後期〕

大坪慶之著、田由甲訳「有關光緒帝親政開始問題的清朝中央決策過程」『日本中國史研究年刊（二〇〇九年度）』上海古籍出版社，2011, pp. 187-218.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD：1名 DC2：0名 DC1：1名（計2名）

2011年度 PD：2名 DC2：1名 DC1：1名（計4名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

2011年度 学部：0名 大学院：3名（計3名）

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

白玉冬 博士後期課程修了，中国内蒙古自治区内モンゴル大学，講師，2011/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名

2010年度：4名 2011年度：2名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 5名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2010年度：2名 2011年度：0名

9. 刊行物

2010年度

- ・『内陸アジア言語の研究』第25号(中央ユーラシア学研究会)
- ・荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信 第1号』(2010年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書) 1, 2011年3月, 103p.
- ・桃木至朗(編)『中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成』(2008年度-2010年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書), 大阪:大阪大学文学研究科, 2011年3月, 196p.

2011年度

- ・『内陸アジア言語の研究』第26号(中央ユーラシア学研究会)
- ・荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信 第2号』(2011年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書) 1, 2012年3月, 85p.

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- ・中央ユーラシア学研究会(森安研究室に事務局)

- 1)『内陸アジア言語の研究』の編集・出版
- 2)中央アジア学フォーラムの開催;会場は大阪大学文学部で年2~3回
参加人数は毎回35名~45名,参加者の所属機関は延べ約30
2010年度 2010年7月31日(第39回)、2010年12月4日(第40回)
2011年度 2011年4月2日(第41回)、2011年7月30日(第42回)

- ・海域アジア史研究会(桃木研究室に事務局;会場は大阪大学文学研究科)

- 参加人数は毎回10名~30名,参加者の所属機関は延べ約26
- 2010年度 2010年4月9日、2010年4月24日、2010年5月8日、2010年6月26日、2010年7月24日、
2010年9月8日、2010年10月9日、2010年10月29日、2010年11月27日、2010年12月18日、
2011年1月29日、2011年2月19日
- 2011年度 2011年5月21日

- ・大阪大学歴史教育研究会(会の運営に参加;会場は大阪大学文学部)

- 参加人数は毎回30名~40名,参加者の所属機関は延べ約120
- 2010年度 2010年4月17日、2010年5月15日、2010年6月19日、2010年7月17日、2010年10月16日、
2010年11月20日、2010年12月18日、2011年1月16日、2011年2月12日・13日、
2011年3月19日
- 2011年度 2011年4月16日、2011年5月21日、2011年6月18日、2011年7月16日、2011年10月15日、
2011年11月19日、2011年12月17日、2012年1月21日、2012年3月17日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2010年度~2011年度の過去2年間)

1. 片山 剛 教授

1952年生。1981年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より大学院文学研究科教授。専攻:中国近世/近代史。

1-1. 論文

片山剛「对自然的擁有形態の多重結構」森時彦(編)『二十世紀的中国社会(上卷)』北京:社会科学文献出版社, pp. 348-376, 2011/12

片山剛「有関近世広東珠江三角洲地区歴史由来的言説」《日本中国史研究年刊》刊行会(編)『日本中国史研究年刊(2008年度)』上海:上海古籍出版社, pp. 280-298, 2011/5

片山剛「擁有土地自然的重層結構——20世紀前期広東農村的単位地名及単宗農田の領域」劉傑(編)『日本当代中国研究』2010, 日本 人間文化研究機構(NIHU)当代中国地区研究基地聯合項目核心基地 早稲田大学現代中国研究所, pp. 60-81, 2010/10

片山剛「近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説について」歴史学研究会(編)『由緒の比較史』青木書店, pp. 97-123, 2010/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

片山剛「珠江三角洲地区漢族齊民社会的誕生及其特質」第三屆「族群・歴史与地域社会」國際學術研討会:族群・歴史与地域社会, 中央研究院台湾史研究所, 2011/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(A) 一般、代表者:片山剛

課題番号: 23242043

研究題目: 中国における土地領有の慣習的構造と土地制度近代化の試み

研究経費: 2011年度 直接経費 6,400,000円 間接経費 1,920,000円

研究の目的:

第一に、近代中国における土地の調査・整理事業と土地制度近代化の試みについて、主に 1930年代中葉～40年代後半の南京市の土地調査・整理事業、および 1930年に制定された土地法の理念を対象に考察する。これを通じて、20世紀前半の中国大陆における土地制度のあり方を、古代から現在に至る中国史上のなかに定位するとともに、近代東アジア諸地域と対比した位置づけも行う。第二に、伝統中国における「土地の近代的所有」の範疇に収まらない事象に関する知見を、土地調査事業時に報告された事例の解析と、当該事例に即して実施する農村古老への探訪調査とによって実証的かつ具体的に提示する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

史学会・評議員

2001年10月～現在に至る

2. 荒川 正晴 教授

1955 年生。1986 年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001 年 4 月より現職。(財)東洋文庫研究員。専攻:中央アジア古代史。

2-1. 論文

荒川正晴 「唐代天山東部州府の典とソグド人」森安孝夫(編)『ソグドからウイグルへーシルクロード東部の民族と文化の交流ー』汲古書院, pp. 47-66, 2011/12

荒川正晴 「英国図書館蔵和田出土木簡の再研究ー以木簡内容及其性質を中心」朱玉麒『西域文史』(北京大学中国古代史研究中心・新疆師範大学西域文史研究中心), 6, 科学出版社, pp. 35-48, 2011/12

荒川正晴 「唐の西北軍事支配と敦煌社会」『唐代史研究』(唐代史研究会), 14, 唐代史研究会, pp. 71-98, 2011/8

荒川正晴 「唐代の交通と商人の交易活動」鈴木靖民、荒井秀規(編)『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版, pp. 179-190, 2011/7

Arakawa, Masaharu, "Aspects of Sogdian trading activities under the Western Turkic state and the Tang Empire" *Journal of Central Eurasian Studies*, (Center for Central Eurasian Studies), 2, Center for Central Eurasian Studies, pp. 25-40, 2011/5

荒川正晴 「ソウル、シルクロード博物館参観記」『西北出土文献研究』(西北出土文献研究会), 8, 西北出土文献研究会, pp. 95-100, 2010/5

2-2. 著書

荒川正晴 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会, 630p., 2010/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Arakawa, Masaharu, "China's View of the World" Seija Jalagin, Susanna Tavera, Andrew Dilley(編) *World and Global History: Research and Teaching (CLIOHWORLD Reader)*, (CLIOH), 7, CLIOH, pp. 56-67, 2011/9

2-4. 口頭発表

荒川正晴 「トゥルファンの城邑問題について」中央ユーラシア学フォーラム, 中央ユーラシア学研究会, 2011/7

Arakawa, Masaharu, "The transportation of Tax Silk to the Northwest under Tang Rule" *Textiles as Money on the Silk Road*, Donghua Univ./The British Museum/ Yale Univ, 2010/12

荒川正晴 「唐代天山東部州府の典和粟特人」『西域敦煌出土文献研究』學術研討会, 中国人民大学国学院, 2010/10

荒川正晴 「唐の西北軍事支配と敦煌社会」唐代史研究会夏期シンポジウム, 唐代史研究会, 2010/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 大阪大学共通教育賞(2010 年度後期), 大阪大学全学共通教育機構, 2010/11

荒川正晴 流砂海西奨学会賞, 流砂海西奨学会, 1986/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010 年度～2013 年度、基盤研究(A) 海外、代表者:荒川正晴

課題番号: 22251008

研究題目:シルクロード東部の文字資料と遺跡の調査ー新たな歴史像と出土史料学の構築に向けてー

研究経費: 2010 年度 直接経費 11,200,000 円 間接経費 3,360,000 円

2011 年度 直接経費 9,000,000 円 間接経費 2,700,000 円

研究の目的:

シルクロード東部の多言語におよぶ出土文字資料とその関連遺跡に対してフィールド調査を行い、シルクロード東部世界の新たな歴史像の構築に寄与することを目的としている。またこの研究を通して、同地域出土の文字資料を「史料」とするための「出土史料学」の基盤を確立し、学界や社会にその成果を還元できるようにすることも目的とする。

2-6-2. 2010年度、研究成果公開促進費、代表者：荒川正晴

課題番号：225101

研究題目：ユーラシアの交通・交易と唐帝国

研究経費：2010年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 0円

研究の目的：

本書は、長年にわたる交通と交易に関する研究を集大成したものである。ユーラシアの大動脈として機能した所謂「シルクロード」の交通と交易の問題は、政治・社会・経済・文化の多方面にわたる研究とリンクする重要課題として大きな関心を呼んできたが、その実態についてはほとんど解明されていない。そうした研究の空白に対して、本書は中央アジア出土の文書史料を詳細に分析することにより、「シルクロード」の隆盛期である6～8世紀に展開したユーラシア東部における交通や交易の実態を浮き彫りにした。著書というまとまった形での公表により、これまでの概説書などに往々に見られる「シルクロード」の交通と交易に対する誤解や根拠のないイメージを払拭することが、本書刊行の大きな目的であり、意義でもある。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・評議員 2009年4月～現在に至る

内陸アジア史学会・監事 1987年4月～現在に至る

3. 桃木 至朗 教授

1955年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科修了。博士(文学、広島大学)。大阪外国語大学専任講師(ベトナム語)、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授(いずれも東洋史学)などをへて現職。現在、タンロン遺跡調査保存のための日越合同専門委員会委員。専攻：東南アジア史／アジア海域史／歴史教育。

3-1. 論文

桃木至朗「大越(ベトナム)李朝の昇竜都城に関する文献史料の見直し」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢(史学編)』44, pp. 1-29, 2010/12

Momoki, Shiro, "‘Mandala Champa’ Seen from Chinese Sources," Trần Kỳ Phương and Bruce M. Lockhart ed., *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*, NUS Press, pp. 120-137, 2011

Momoki, Shiro, "Nation and Geo-Body in Early Modern Vietnam: A Preliminary Study through Sources of Geomancy," Geoff Wade and Sun Laichen *Southeast Asia in the 15th century and the China Factor*, NUS Press, pp. 126-153, 2010

3-2. 著書

桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会, 473p., 2011/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

桃木至朗「中世大越の地方支配～唐宋変革期「小帝国」の比較史への問題提起」国際シンポジウム「周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」－歴史学・考古学研究からの視座」, 関西大学文化交渉学教育研究拠点, 2011/10(『報告集』pp. 1-12に掲載)

桃木至朗「フランスのアジア進出と東南アジア世界」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「ウ

- エスタンインパクトをどう教えるか」, 鎌倉市・栄光学園, 2011/8
- 桃木至朗 「高校歴史教育の抜本的改革を可能にするために大学・学界がすべきこと」北海道高等学校世界史研究会第 42 回研究大会, 札幌市教育文化会館, 2011/8
- 桃木至朗 「歴史教育とジェンダー～アジアから全体史を学ぶ／教える」日本学術会議学術フォーラム「歴史認識を変える－歴史教育改革とジェンダー」, 日本学術会議, 2011/7
- 吉嶺茂樹, 桃木至朗 「日本列島北方史と東南アジア史を比較する歴史教育の試み」東南アジア史学会第 85 回研究大会パネル「北海道でどのように東南アジア史を教えるか／学ぶか」, 北海道大学, 2011/6
- 桃木至朗 「普通の高校教員が東南アジア史を積極的に教える気になるところはどこにあるか」栃木県高等学校教育研究会地歴・公民部会, 栃木県立博物館講堂, 2011/5
- Momoki, Shiro, “Local Rule of Đại Việt under the Lý dynasty: Evolution of a Charter Polity after the Tang-Song Transition in East Asia,” panel 199: “Big Empires, Small Empires: Commercial Networks and Socio-economic Structures of Polities in Early Modern Northeast and Southeast Asia,” Association for Asian Studies 2012 Annual Conference, AAS (Association for Asian Studies), Sheraton Centre Hotel Toronto, 2011/3
- 桃木至朗 「なぜ歴史を学ぶのか～東南アジアを通して日本を見る～」近畿中学校社会科教育研究会教員交流会, 大阪市立南中学, 2011/2
- Momoki, Shiro, “New Light on the Charter Polity of Dai Viet: A Comparative Approach to Goryeo and Other Small Empires in Southeast and Northeast Asia,” International Workshop: Empires and Networks: Maritime Asian Experiences 9th to 19th Centuries, Singapore: Institute for Southeast Asian Studies, 2011/2
- 桃木至朗 「高校教員が東南アジア史を積極的に教える気になるところはどこにあるか」岐阜県高等学校教育研究会地歴・公民部会総会, 岐阜県総合教育センター, 2011/1
- Momoki, Shiro, “Cac cong trinh duoc xay dap trong kinh do Thang Long thoi Ly,” Hoi thao Quoc te: Phat trien ben vung thu do Ha Noi van hien, anh hung, vi hoa binh, Ban Chi dao Quoc gia Ky niem 1000 nam Thang Long, Hanoi: Internaitonal Conference Center, 2010/10 (*Proceedings of the Congress*, pp. 237-247, 2010/10) (ベトナム語報告。紀要に全文掲載)
- Momoki, Shiro, “A Spatial Analysis of Thang Long Capital during the Ly Period through Re-examination of Written Sources,” International Conference on Southeast Asian Studies: Beyond Boundaries: Southeast Asian History, Culture and Society, Institute of East Asian Studies, Sogang University, Korea, 2010/10
- 桃木至朗 「全体を見る、違った世界にまたがって生きる～日本の「歴史業界」再生に向けた一方策～」愛知歴史学入門講座, 愛知歴史学研究会, 名古屋: 愛知県青年会館, 2010/9
- 桃木至朗 「20 世紀の東南アジア」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会高大連携の試み「近現代のアジア世界をどう教えるか」, 鎌倉市: 栄光学園, 2010/8
- 桃木至朗 「趣旨説明」大阪大学歴史教育研究会大会: 「阪大史学の挑戦2」, 大阪大学中之島センター, 2010/8
- 桃木至朗 「20 世紀の東南アジア史」三重県高等学校社会科研究会総会, 2010/7
- 桃木至朗 「歴史学と歴史教育の再生をめざして－阪大史学の挑戦－」日本西洋史学会第 60 回大会: 大シンポジウム「世界史教育の現状と課題」, 別府市・ビーコンプラザ, 2010/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 桃木至朗

課題番号: 20320111

研究題目: 中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成

研究経費: 2010 年度 直接経費 5,000,000 円 間接経費 1,500,000 円

研究の目的:

10～18世紀のベトナムにおける権力構造の歴史の変遷を研究する一環として、狭義の都市域以外も含む支配拠点の立地や空間配置という未開拓の領域に着目し、文献・地図研究と実地調査を組み合わせた事例研究を試みる。北部のタンロン＝ハノイと中部のフエのほか、各時期の副都クラスの拠点をおもに調査する。

3-6-2. 2011年度～2013年度、基盤研究(A) 一般、代表者:桃木至朗

課題番号: 23242034

研究題目: 最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成

研究経費: 2011年度 直接経費 11,700,000円 間接経費 3,510,000円

研究の目的:

全国の高校・大学教員と協力し、大学院生も巻き込んだ月例会および作業部会を通じて、(1)大阪大学史学系が重点課題としてきた諸テーマに加え、新しい歴史教育に必須な文理融合などのテーマ群について、教員用(高大両用)の解説・教材・用語集を作成し、その内容や実践報告も含め、可能な部分は海外や、来日した留学生に向けても発信する。(2)それらの内容と、他大学の教養歴史教育や世界の歴史教育の状況の調査研究をふまえて、大学教養課程向けの世界史教科書を作成する。(3)以上の取り組みを通じて、教職免許用の教育内容や歴史研究法の改善をはかる。

3-6-3. 2010年度、研究成果公開促進費、代表者:桃木至朗

課題番号: 225102

研究題目: 中世大越国家の成立と変容

研究経費: 2010年度 直接経費 2,400,000円 間接経費 0円

研究の目的:

博士学位論文(2009年、広島大学)をもとにした研究書の出版を目的とする助成である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員(史学委員会)	2011年10月～現在に至る
東南アジア学会・理事(教育・社会連携担当)	2011年1月～2012年12月
文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア専門委員会委員	2006年12月～現在に至る

4. 田口 宏二郎 准教授

1971年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2003年大阪大学文学研究科助手、2004年追手門学院大学文学部講師、2008年追手門学院大学国際教養学部准教授を経て、2012年4月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:中国近世史。

4-1. 論文

Taguchi, Kojiro, "Empire as a Constructed Phenomenon", *Empires, Systems and Maritime Networks Working Paper Series*, 6 pp. 89-117, 2012/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Taguchi, Kojiro(Commentary),“Concept,Substance and Strategy (Comments on the Presentation by Dennis Flynn)”, *Empires, Systems and Maritime Networks Working Paper Series*, 5, pp. 63-66, 2011/12

4-4. 口頭発表

Taguchi, Kojiro,“Empire as a Constructed Phenomenon”Annual Meeting of AAS, Association for Asian Studies, 2012/3

Taguchi, Kojiro,“The Segmentation of Empire?”International Workshop: Empire and Networks, Institute of Southeast Studies, National University of Singapore, 2011/2

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 赤木 崇敏 助教

1976 年生。2007 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学(博士)。甲南大学非常勤講師、関西大学非常勤講師、神戸市外国語大学非常勤講師・客員研究員を経て、2011 年 4 月より現職。専攻:中央アジア古代史。

5-1. 論文

坂尻彰宏・赤木崇敏「ミーラーン・敦煌調査記録」荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信』第 2 号, 大阪大学, pp. 21-30, 2012/3

赤木崇敏「宋代「検文書」攷——「宋西北辺境軍政文書」の性格」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52, 大阪大学文学研究科, pp. 33-90, 2012/3

赤木崇敏「唐代前半期の地方公文行政——以吐魯番文書為中心——」鄧小南・曹家齊・平田茂樹(共編)『文書・政令・信息沟通:以唐宋时期為主』(北京大学出版会), pp. 119-165, 2012/1

赤木崇敏「壁画と古文書から見る敦煌オアシス社会の実態」桃木至朗(編)『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ 5——阪大史学の挑戦 2——』(大阪大学), pp. 101-108, 2011/11

赤木崇敏「ロシア蔵コータン出土唐代官文書 Dx.18921, 18940, 18942」『西北出土文献研究』9, 西北出土文献研究会, pp. 87-100, 2011/5

Akagi, Takatoshi,“Six 10th Century Royal Seals of the Khotan Kingdom”Yoshiro IMAEDA, Matthew T. KAPSTEIN and Tsuguhito TAKEUCHI(共編) *Old Tibetan Document Online Monograph Series*, (Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies), 3, pp. 217-229, 2011/3

赤木崇敏「唐代敦煌縣勅印簿羽 061, BD11177, BD11178, BD11180 小考」高田時雄(編)『敦煌寫本研究年報』(京都大学人文科学研究所西陲發現中國中世寫本研究班), 5, pp. 95-108, 2011/3

赤木崇敏「十世紀敦煌の王権と転輪聖王観」『東洋史研究』(東洋史研究会), 69-2, pp. 59-89, 2010/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

赤木崇敏 「敦煌王国の終焉と「沙州ウイグル」の台頭 ——11世紀中央ユーラシア東部の国際情勢——」第43回 中央アジア学フォーラム, 中央ユーラシア学研究会, 2011/12

赤木崇敏 「壁画と古文書から見た敦煌オアシス社会の実態」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」第2部 中央ユーラシア史の枠組みの理解に向けて, 大阪大学歴史教育研究会, 2010/8

赤木崇敏 「杏雨書屋・中国國家圖書館藏燉煌縣勘印曆——羽 061、BD11177、BD11178、BD11180」西陲發現中國中世寫本研究班夏期大會, 京都大学人文科学研究所西陲發現中國中世寫本研究班, 2010/8

赤木崇敏 「唐代コータン地域の羈縻支配と文書行政」第47回野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会), 日本アルタイ学会, 2010/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2010年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:赤木崇敏

課題番号: 22720271

研究題目: 唐代中国の文書行政システムの研究—中央アジア出土唐代公文書の古文書学的分析による

研究経費: 2010年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2011年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

中央アジアより出土した唐代公文書の古文書学的調査を行い、同時代の東アジア・中央アジアに広く受容された、唐代の文書行政システム——帝国全土に張り巡らされた超広域の情報伝達ネットワーク、円滑に情報を伝達するための運用規定、それらを用いるための行政機構——の具体相を解明する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

遼金西夏史研究会・評議員

2010年4月～現在に至る

遼金西夏史研究会・2010年度大会実行委員長

2010年4月～2011年3月

2-9 西洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 4 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

准教授：中野耕太郎、栗原 麻子

助教：水田 大紀

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
46	7	5	0	0	0	2	0	1

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	12	4	1	1	2
2011	12	3	0	0	1
計	24	7	1	1	3

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習をいっそう定着させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、③IT教育を充実させ、教材のデータベースを構築することを目標とした。大学院においては、①論文作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学

研究科内外の他専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をとおした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史研究室は、研究成果を社会一般、特に高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校への出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修と）、④放送大学への出講、を目標とした。また、個人および研究室のホームページを充実させることで、研究・教育活動の広報と研究成果の公開に努めた。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチに分化することによって、大学院、学部における論文作成指導のシステムを効率的に整備した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に導入することができた。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の一層の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めることができた。

2. 研究

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、イギリス帝国史研究会、関西アメリカ史研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。教員は、計24篇の学術論文（2010年度14篇、2011年度10篇）を刊行するとともに、専門学術書『人種差別の歴史』や、『イギリス近現代史』（共編）・『イギリス史研究入門』（共著）・『アニメで読む世界史』（編集）などの概説・入門書、『東アジアの歴史摩擦と和解可能性』（共著）・*Africa, Empire and Globalization*（共著）などの専門論文集を出版し、また日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする数多くの競争的外部資金の代表者となっている。大学院生は計10篇の学術論文（2010年度3篇、2011年度7篇）、48本の学会報告（2010年度27回、2011年度21回）を公表した。さらに、研究室として計10回のグローバルヒストリー・セミナー、ワークショップを開催するなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化に尽力した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史A・B教科書（第一学習社）の執筆に関わるとともに、高等学校への出張講義を実施した。また、東洋史学専修、文化動態論の共生文明論講座と協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を月1回（年間9回）共催した。さらに、教員の一部が放送大学に出講し、社会一般への貢献を推進することができた。加えて、ホームページの内容を随時拡充することで、研究・教育活動の概要を広く社会に周知できた。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制が大きく改善された。卒業論文、修士論文ともに質の高いものが多く出たが、課程博士は1名にとどまった。また、教職を中心に計4名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標は概ね達成された。卒業生、修了生以外の学生についても、論理力・分析力および外国語運用能力において顕著な向上のあとが見られ、十分な成果があったと考える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標は概ね達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも質量ともに、十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学術会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものとする。

3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。特に高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修との協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	0	1
2011	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中尾恭三 「ヘレニズム時代における信仰とポリス共同体—サラピス崇拝の伝播と受容を中心に—」 2011/3

主査：栗原麻子 副査：江川 温、大戸千之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
2011	6(6)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	7(6)
計	9(9)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	3	8	16	0	0	27
2011	2	5	12	2	0	21
計	5	13	28	2	0	48

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

森本慶太「両大戦間期スイスにおける観光業の危機と革新—ホテルプラン協同組合とマス・ツーリズム—」『待兼山論叢（史学篇）』（大阪大学文学会），44，pp. 61-85，2010/12

〔その他〕

上山益己「中世盛期フランスの“聖なる”諸侯—諸侯家系の聖性をめぐる戦略—」『西洋史学』（日本西洋史学会），237，pp. 1-19，2010/6

北原靖明「演じる人と観る人と—セルヴオンが描く異郷の風景—」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），8，pp. 59-71，2011/2

【2011年度】

〔博士前期〕

福島邦久「18世紀におけるオランダ東インド会社とアジア経済—綿と貴金属の貿易を通して—」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），9，pp. 95-114，2012/3

〔博士後期〕

岩崎佳孝「南北戦争後のアメリカ先住民連合による立憲共和政体構想—インディアン・テリトリーにおけるオクムルギー会議（1870-1878）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），9，pp. 115-133，2012/2

森本慶太「現代スイスにおけるソーシャル・ツーリズムの誕生—スイス旅行公庫協同組合の設立（1939年）とその背景—」『旅の文化研究所 研究報告』（旅の文化研究所），21，pp. 49-58，2011/12

森本慶太「1910年代スイスにおける観光政策の形成—ホテル業界と観光局の設立—」『二十世紀研究』（二十世紀研究編集委員会），12，pp. 21-38，2011/12

森新太「他都市における同職組合—在ボローニャ・フィレンツェ商人組合規約—」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），9，pp. 29-36，2012/2

〔その他〕

中尾恭三「マグネシアのアシュリアと国家間関係」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），9，pp. 15-28，2012/2

紫垣聡「ドイツ中近世の地域社会における秩序形成をめぐる研究状況」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），9，pp. 37-46，2012/2

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

高橋果江，中村優希，矢景裕子「19世紀イギリスのヘゲモニー」大阪大学歴史教育研究会第43回例会，大阪大学／大阪府豊中市，2010/6/19

金辰姫，齊藤若菜，坂東亜美「20世紀アメリカのヘゲモニー」大阪大学歴史教育研究会第44回例会，大阪大学／大阪府豊中市，2010/7/17

- 吉田雪恵「ドイツ大学史研究の変遷」第8回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/7/29
- 中村優希「ネイティブ・アメリカン史研究動向—ジョン・コリアとの関連を中心に」第9回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/9/28
- 金辰姫「東アジア経済成長に関する理論の考察と今後の研究について」第11回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/11/11
〔博士後期〕
- 中尾恭三「ポリスはいかにして『衰退』し『再興』するのか—K. ヴラスプロスのネットワーク論を手がかりとして」第1回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/4/8
- Kazuo Kobayashi, 'British Atlantic Slave Trade and East Indian Textiles, 1650s-1808', Global History and Maritime Asia Workshop: Exploring global linkages between Asian Maritime World and Trans-Atlantic World, 大阪大学中之島センター/大阪府大阪市, 2010/4/9
- 森本慶太「両大戦間期スイスにおけるソーシャル・ツーリズム形成をめぐるコンフリクト」, 大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成(平成21年度)第二・第三次成果報告会, 大阪大学/大阪府吹田市, 2010/4/10
- 森本慶太「『観光史』研究の回顧と展望—Hasso Spodeの研究をてがかりに」第2回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/5/6
- 小林和夫「世界史研究の現状と課題—パトリック・マニングの著作を手がかりとして—」第3回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/5/20
- 森本慶太「1930年代スイスにおける「ソーシャル・ツーリズム」の形成—スイス旅行公庫協同組合とツーリズムの転換—」日本西洋史学会第60回大会, 別府大学/大分県別府市, 2010/5/30
- 紫垣聡「西欧近世における紛争・暴力・犯罪と社会的コントロール—Herman Roodenburg, 'Social Control Viewed from Below: New Perspectives' を通じての研究状況の整理」第4回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/6/3
- Kazuo Kobayashi, 'East India Cotton in West Africa, 1700-1850', Summer Dissertation Workshop, ピッツバーグ大学世界史研究所/米国・ペンシルヴァニア州ピッツバーグ, 2010/6/7
- 伊永雅昭「西アフリカ・カレンシーボードとナイジェリア統合(1900-1914)」第15回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/6/26
- 安井倫子「人種がアメリカ社会・政治の中で果たしてきた役割」第6回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/7/1
- 伊永雅昭「ナイジェリアを研究対象とした経緯」第7回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/7/15
- 石田真衣「プトレマイオス朝エジプト法制史研究」第8回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/7/29
- 中村武司, 森本慶太・中村薫「高校世界史授業で使えるグローバル・ヒストリー関連用語」大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」, 大阪大学中之島センター/大阪市北区, 2010/8/9
- 森新太「13世紀末都市ボローニャにおける商人層」第10回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/10/14
- 堤一昭, 向正樹, 森本慶太・後藤敦史「「阪大史学の挑戦2」をふりかえる」大阪大学歴史教育研究会第45回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2010/10/16
- 安井倫子「クロソン判決に帰結したヴァージニア州リッチモンド市のアフターマティブ・アクション」九州西洋史学会, 九州大学/福岡県福岡市, 2010/12/12
- 森本慶太「スイスにおける「ソーシャル・ツーリズム」の形成—スイス旅行公庫協同組合の設立(1939年)とその背景—」ドイツ現代史研究会例会, キャンパスプラザ京都/京都市下京区, 2011/1/22
- Kazuo Kobayashi, 'Indian Cotton Textiles in the British Atlantic Slave Trade', SOAS African History Seminar, The

School of Oriental and Asian Studies, University of London／英国・ロンドン, 2011/3/23

〔その他〕

田中晶子「西ドイツ APO 期の『対抗的公共圏』の展開—ハンブルク地域の反シュプリンガー・キャンペーンを中心に—」
日本西洋史学会第 60 回大会, 別府大学／大分県別府市, 2010/5/30

田中晶子「『1968 年』のアメリカニズム」第 33 回ドイツ現代史学会シンポジウム「ドイツ史のなかの『68 年』」関西大学
／大阪府吹田市, 2010/9/19

松田祐子「19 世紀の女性—『レ・ミゼラブル』の少女コゼットより」女性作家を読む会（日仏女性研究学会）, 奈良女子大学／奈良県奈良市, 2010/11/3

田中晶子「ラウンドテーブル<日常>からとらえる戦後ドイツ」西ドイツの「戦後」はいつ終わったのか?—社会史から見た「1968 年」、「1989 年」大阪大学ドイツ文学会第 17 回研究発表会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2010/11/20

【2011 年度】

〔博士前期〕

菊地乃依瑠「近代初期の科学と無神論—ボイルレクチャーを中心に」第 18 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/11/29

藤田弘晃「『政治指導者』としての紀元前 4 世紀のアテナイの将軍」第 17 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学
／大阪府豊中市, 2011/11/22

荒木陸, 鉄本麻由子, 藤田弘晃, 渡部玲子「歴史人口学からみた日本の歩み」第 57 回大阪大学歴史教育研究会例会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2012/1/21

Fujita Hiroaki, 'Involvement of Generals in Athenian Politics during B.C. 4th Century', 「日独学生ワークショップ—人文学研究のグローバルな地平を目指して—」, 大阪大学／大阪府豊中市, 2012/3/27

福島邦久「18 世紀オランダ東インド会社のアジア間貿易—綿と貴金属を中心に」第 12 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/4/28

坂倉美早紀, 福島邦久, 李希泉「暦からみる世界史—社会との関わりをとおして」第 55 回大阪大学歴史教育研究会例会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/11/19

福島邦久「18 世紀アジアにおけるオランダ東インド会社と私貿易商人—綿織物貿易を中心に」第 17 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/11/22

宗村敦子「ラント金鉱山におけるジョブ・カラー・バー 1924-1932 年」第 18 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/11/29

Munemura Atsuko, 'The Policy of Job Colour Bar in 1930s South Africa: the Case of Cape Town', 「日独学生ワークショップ」, 大阪大学／大阪府豊中市, 2012/3/28

〔博士後期〕

岩崎佳孝「アメリカ先住民による連合政体構想—南北戦争末期および再建期のインディアン・テリトリーにおける 2 つの試みを中心に」日本西洋史学会第 61 回大会, 日本大学／東京都世田谷区, 2011/5/15

岩崎佳孝「アメリカ先住民集団連合による立憲政体構想—20 世紀初頭のインディアン・テリトリーにおけるセコイヤ州憲法制定会議への道程」関西アメリカ史研究会第 49 回年次大会, キャンパスプラザ京都／京都府京都市, 2011/11

森本慶太「現代スイスにおけるソーシャル・ツーリズムの誕生—スイス旅行公庫協同組合の設立（1939 年）とその背景—」第 17 回公募研究プロジェクト報告会, 旅の文化研究所／東京都中央区, 2011/5/28

石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける紛争処理と地域社会」2011 年度広島史学研究会大会, 広島大学／広島県東広島市, 2011/10/30

石田真衣「プトレマイオス朝エジプト在地社会における紛争解決」第 10 回古代史研究会大会, 京都大学／京都府京都市, 2011/12/18

森新太「13 世紀末ボローニャにおける政治権力構造と商人層」日本西洋史学会第 61 回大会, 日本大学／東京都千代田区, 2011/5/15

森新太「13 世紀末ボローニャにおける商人層とその組合のプレゼンス」関西イタリア史研究会, 同志社大学／京都府京

都市, 2011/12/10

〔その他〕

鷺田睦朗「音楽堂のウィッラと都市ローマ——ローマ近郊研究の一動向——」第15回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学／大阪府豊中市, 2011/7/8

鷺田睦朗「ワインの道もローマに通ず」古代地中海世界の人々とくらし(第4回), NHK文化センター京都教室／京都府京都市, 2011/7/11

鷺田睦朗「ローマ人もまた旅人なり」古代ローマ人の生き様・死に様(第1回), NHK文化センター京都教室／京都府京都市, 2011/10/31

鷺田睦朗『音楽堂のウィッラ』とローマ近郊」平成23年度九州史学会大会, 九州大学／福岡県福岡市, 2011/12/11

中尾恭三「ヘレニズム時代におけるアシュリアと国家間関係—テオスの事例を手がかりとして」第10回歴史家協会大会, 同志社大学／京都府京都市, 2011/6/18

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔博士前期〕

金辰姫(書評)「조이제/카터에 커트 편 『한국 근대화, 기적의 과정』 월간 조선사, 2005년」[趙利濟／カーター・J・エックハート(編)『韓国近代化、奇跡の過程』月刊朝鮮社、2005年]『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 117-120, 2011/2

中村優希(研究動向)「アメリカ先住民史研究—ジョン・コリアを中心に—」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 79-92, 2011/2

〔博士後期〕

Kazuo Kobayashi, 'British Atlantic Slave Trade and East Indian Textiles, 1650s-1808', *Global History and Maritime Asia Working and Discussion Paper Series*, No. 19, pp. 26-52, 2010/8

クラウス・ヴェーバー(小林和夫訳)「ドイツの大西洋奴隷貿易と新大陸植民地経済 15-18世紀」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 34-50, 2011/2

安井倫子(書評論文)「経済発展の径路 ヨーロッパとアジア—Giovanni Arrighi, Adam Smith in Beijing: Lineages of the Twenty-First Century を中心に—」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 93-102, 2011/2

桑島穂, 小林和夫(書評論文)「イギリス帝国から世界システムへ—John Darwin, The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System 1830-1970, Cambridge, 2009 をめぐって—」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 105-116, 2011/2

〔その他〕

【2011年度】

〔博士前期〕

菊地乃依瑠(新刊紹介)「井野瀬久美恵(編)『イギリス文化史』『西洋史学』(日本西洋史学会), 241, p. 87, 2011/6

宗村敦子(書評)「竹内幸雄(著)『自由主義とイギリス帝国—スミスの時代からイラク戦争まで』」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 9, pp. 136-141, 2012/2

〔博士後期〕

森本慶太(書評)「踊共二・岩井隆夫編『スイス史研究の新地平—都市・農村・国家—』」『西洋史学』(日本西洋史学会) 244, pp. 76-78, 2012/3

〔その他〕

鷺田睦朗(新刊紹介)「ベルナール・レミィ(著), 大清水裕(訳)『ディオクレティアヌスと四帝統治』」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 8, pp. 120-122, 2011/2

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:2名 (計2名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:2名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

2011年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

津田博司 博士後期課程, 筑波大学・歴史人類学系, 助教, 2011/4

酒井一臣 博士後期課程, 京都橘大学・文学部, 助教, 2011/4

中村武司 助教, 弘前大学・人文学部, 専任講師, 2012/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2010年度:2名 2011年度:2名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010年度:0名 2011年度:0名

9. 刊行物

2010年度 『西洋史学』237号～240号 学術雑誌(日本西洋史学会)

『パブリック・ヒストリー』第8号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)

2011年度 『西洋史学』241号～244号 学術雑誌(日本西洋史学会)

『パブリック・ヒストリー』第9号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー

2008年度～現在に至る

日本西洋史学会『西洋史学』編集部

2008年度～現在に至る

大阪大学西洋史学会

2008年度～現在に至る

関西アメリカ史研究会

2008年度～現在に至る

アジア世界史学会(AAWH)事務局

2009年6月～2010年5月

東アジアブリテン史学会(EAABH)事務局

2011年3月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2010 年度

大阪大学西洋史学会若手セミナー

学内

- 第 1 回 中尾恭三「ボリスはいかにして『衰退』し『再興』するのか——K. ヴラスプロスのネットワーク論を手がかりとして」(2010/4/8)
- 第 2 回 森本慶太「『観光史』研究の回顧と展望——Hasso Spode の研究をてがかりに」(2010/5/6)
- 第 3 回 小林和夫「世界史研究の現状と課題——パトリック・マニングの著作を手がかりとして」(2010/5/20)
- 第 4 回 紫垣聡「西欧近世における『下からの』社会的コントロール——Roodenburg 論文を通じての研究動向」(2010/6/3)
- 第 5 回 水田大紀「イギリス近代史研究への招待——ジェントルマンをめぐる問題意識の変遷」(2010/6/17)
- 第 6 回 安井倫子「人種がアメリカ社会・政治の中で果たしてきた役割」(2010/7/1)
- 第 7 回 伊永雅昭「ナイジェリアを研究対象とした経緯」(2010/7/15)
- 第 8 回 吉田雪恵「ドイツ大学史研究の変遷」
石田真衣「プトレマイオス朝エジプト法制史研究」(2010/7/29)
- 第 9 回 中村優希「ネイティブ・アメリカン史研究動向——ジョン・コリアとの関連を中心に」(2010/9/28)
- 第 10 回 森新太「13 世紀末ボローニャにおける政治権力構造と商人層」(2010/10/14)
- 第 11 回 金辰姫「東アジア経済成長に関する理論の考察と今後の研究について」(2010/11/11)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー

- 第 35 回 2010 年 6 月 4 日 講師：古矢 旬（東京大学・教授） 学内
「グローバル化時代のアメリカ同時代史」
- 第 36 回 2010 年 7 月 23 日 講師：Lim Jie-Hyung（韓国・漢陽大学・教授） 学内
“A Transnational History of Victimhood Nationalism in East Asia and Eastern Europe”
Rakesch Batabyal（インド・ネルー大学・准教授）
“Countering Hegemony in Eastern Europe—The Indian Perspectives”
- 第 37 回 2010 年 11 月 15 日 講師：Robert McMahon（オハイオ州立大学・教授） 学内
“Historical Meanings of the Cold War in the Context of Global History”
- 第 38 回 2010 年 11 月 15 日 講師：Miles Taylor（ロンドン大学歴史学研究所・教授） 学内
“Queen Victoria and India”
- 第 39 回 2010 年 12 月 9 日 講師：Stephen Howe（ブリストル大学。教授） 学内
“Britain’s Africa, Harold Macmillan and the Long view of Decolonization, 1960-2010”

大阪大学グローバルヒストリー・ワークショップ

- 第 11 回 2010 年 4 月 9 日 講師：Klaus Weber（ロスチャイルド・アーカイヴ）他 3 名、中之島センター
“Atlantic Economy and Asian Trade in the ‘Long Eighteenth Century’”

2011 年度

大阪大学西洋史学会若手セミナー

学内

- 第 12 回 福島邦久・宗村敦子「卒論執筆に向けてのアドバイス」(2011/4/28)
- 第 13 回 中尾恭三「ヘレニズム時代における国家間交渉——テオスへのアシュリア認可をてがかりとして」(2011/5/26)
- 第 14 回 紫垣聡「書評：佐藤卓己『『キング』の時代——国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店，2002 年）」(2011/6/21)
- 第 15 回 鷺田睦朗「音楽堂のウィッラと都市ローマ——ローマ近郊研究の一動向」(2011/7/8)
- 第 16 回 石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける紛争解決——デモティック史料からみえてくるもの」(2011/11/11)
- 第 17 回 藤田弘晃「『政治指導者』としての紀元前 4 世紀のアテナイの将軍」

福島邦久「18世紀アジアにおけるオランダ東インド会社と私貿易商人——綿織物貿易を中心に」
(2011/11/22)

第18回 宗村敦子「ラント金鉱山におけるジョブ・カラー・パー 1924-1932年」
菊地乃依瑠「近代初期の科学と無神論——ボイルレクチャー」(2011/11/29)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー

第40回 2011年6月11日 講師：Richard Drayton (ロンドン大学・キングズカレッジ教授) 学内
“Masked Condominium”

第41回 2012年3月10日 講師：Dane Kennedy (ジョージ・ワシントン大学・教授) 学内
“Victorian Liberalism and Imperialism”

大阪大学グローバルヒストリー・ワークショップ

第12回 2011年10月1日 講師：Gwyn Campbell (マギル大学・インド洋世界センター所長・教授)
“The Indian Ocean World Slave Trade over the Long Dureé” 他4名。学内

第13回 2011年10月5日 講師：Gwyn Campbell (マギル大学・インド洋世界センター所長・教授)
“The Indian Ocean World in the Eighteenth and Nineteenth Centuries” 他4名。
東京大学・羽田科研ユーラシアプロジェクトと共催。 東京大学東洋文化研究所

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 江川 温 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。2012年4月より全学教育推進機構長。専攻：西欧中世史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

江川温(書評)「城戸毅著『百年戦争—中世末期の英仏関係—』『西洋史学』241, 日本西洋史学会, pp. 82-84, 2011/6

江川温(書評)「大宅明美『中世盛期西フランスにおける都市と王権』『図書新聞』3004, 株式会社図書新聞, p. 5, 2011/3

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(B) 一般、代表者：江川温

課題番号：23320159

研究題目：中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正当化

研究経費: 2011年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

中世カトリック圏における君主権の神話的・歴史的正当化を、正当化の物語それ自体、表現形態、伝達形態の歴史的变化に注目しつつ考察する。またフランス、イングランドといった中核国家とカスティーリャ、ハンガリーといったフロンティア国家、王権と領邦君主権といった対比を重視する。さらにこのような君主権の正当化が西欧のエトニ形成に果たした役割を考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・副会長	2008年4月～現在に至る
史学会・評議員	2005年4月～2012年3月
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る

2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。博士(文学)(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻:西洋史学。

2-1. 論文

竹中亨「ヨーロッパの歴史教育における学習成果・質保証」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52, pp. 99-122, 2012/3

Takenaka, Toru, "Where was a Brandt in post-war Japan?: The International Environment for Reconciliation in Asia in Comparison with that in Europe," Hans Seidel Foundation, ed., *Historical Reflection and Reconciliation after World War II*, Hans Seidel Foundation, pp. 80-92, 2011/3

Takenaka, Toru, "Isawa Shūji's 'National Music': National Sentiment and Cultural Westernisation in Meiji Japan," *Itinerario* 34-3, pp. 97-118, 2010/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

深堀聡子, 竹中亨(共訳)(フリア・ゴンザレス/ローベルト・ワーヘナール編著)「欧州教育制度のチューニング」明石書店, pp. 18-36, pp. 71-111, 2012/2

2-4. 口頭発表

Takenaka, Toru, "Japanese Ideas of World History," Cluster Asia & Europe, Heidelberg University, Heidelberg University, 2011/11

Takenaka, Toru, "Japanisch-deutsche Beziehungen als Kulturtransfer," Die Wahrnehmung Deutschlands und Europas in Nordostasien, Hankuk University of Foreign Studies, Hankuk University of Foreign Studies, 2011/11

Takenaka, Toru, "Where was a Japanese Brandt in Postwar Japan? International Environment for Reconciliation in Asia in Comparison with that in Europe" 中国社会科学院国際会議: Historical Reflections and the Process of Reconciliation in East Asia and Europe after WWII, 中国社会科学院, 2010/9

Takenaka, Toru, "Japanese Views on Global History," CLIOH-WORLD 4th Plenary Meeting: History of Globalization and Globalization of History, CLIOH-WORLD, Oulu University, 2010/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:竹中亨

課題番号: 19320118

研究題目: 近代化過程における宗教の再活性化の比較的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 600,000円

研究の目的:

近代化過程において、宗教的エネルギーは、種々の変貌を遂げながら、維持され、あるいは再活性化した。それを、欧米、日本の事例に則して比較的に研究することを旨としている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(大阪大学)2003年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻:イギリス帝国史・グローバルヒストリー。

3-1. 論文

秋田茂 「「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 45-史学篇, pp. 1-26, 2011/12
Akita, Shigeru, "The British Empire and the International Order of Asia in the 1930s and 1950s" *The Korean Journal of British Studies*, (The Korean Society of British History), 26, pp. 69-91, 2011/12
Akita, Shigeru, "World History and the Emergence of Global History in Japan", *Chinese Studies in History*, 43-3, M.E. Sharpe, pp. 84-96, 2010/4

3-2. 著書

秋田茂, 菅英輝他(共著) 『東アジアの歴史摩擦と和解可能性—冷戦後の国際秩序と歴史認識をめぐる諸問題』凱風社, pp. 346-367(第12章「南アジアにおける脱植民地化と歴史認識—インドのコモンウェルス残留」), 2011/4
Akita, Shigeru, Toyin Falola(共著), *Africa, Empire and Globalization—Essays in Honor of A.G. Hopkins*, Carolina Academic Press, pp. 417-431(Chapter 20 "The British Empire as 'Imperial Structural Power' within an Asian International Order"), 2011/4
秋田茂, 木畑洋一他(共編著) 『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで』ミネルヴァ書房, pp. 107-133(第5章「帝国主義の時代」), pp. 337-338(あとがき), 2011/3
秋田茂, 近藤和彦他(共著) 『イギリス史研究入門』山川出版社, pp. 272-293(第12章「帝国」), 2010/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂 「三報告へのコメント」『現代中国研究』(現代中国史研究会), 28, pp. 26-28, 2011/3
秋田茂 「部会13 1950-60年代のアジア国際秩序と国際援助計画:コロンボ・プランを中心に」『JAIR Newsletter』(日本国際政治学会), 126, p. 13, 2010/12
秋田茂, 西村雄志(共編著) (Dennis Flynn) 『グローバル化と銀』山川出版社, pp. 5-28, 2010/5

3-4. 口頭発表

Akita, Shigeru, “Economic Diplomacy of Jawaharlal Nehru Administration after Decolonization of South Asia”, The Sixth International Symposium of Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia: Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order, 北海道大学スラブ研究センター, 2012/1

Akita, Shigeru, “Re-Presenting Asia on the Global Stage: The Rise of Global Historical Studies in East Asia”, The Third Global History Globally Conference : Global History Globally, Humboldt-Universität zu Berlin , IGK Work and Human Lifecycle in Global History, 2011/10

秋田茂 「イギリスのアジア進出と南アジア世界:近代化とナショナリズム、帝国」神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会歴史分科会・2011年度研究会, 栄光学園, 2011/8

Akita, Shigeru, “The British Empire and the International Order of Asia in the 1930s and 1950s”, The Twentieth Anniversary Congress of Korean Society of British History: The British Empire: Memory and Legacy, Korean Society of British History, University of Cheongju, 2011/6

Akita, Shigeru, “Comments on Panel 388: Maritime Asian Merchants and the Asian Economy and Society in Transition, 1750-1900: Global Economic Changes and Local Responses”, Joint Conference of the Association for Asian Studies (AAS) and the International Convention of Asian Scholars (ICAS): Seventy Years of Asian Studies, Hawaii Convention Center, 2011/4

Akita, Shigeru, “Gentlemanly Capitalism and Global History from Asian Perspectives”, Memorial Conference in Honor of Professor A.G. Hopkins, Department of History, University of Texas, Austin, 2011/4

Akita, Shigeru, “The Aid-India Consortium and the International Order of Asia, 1958-1965”, The Third European Congress on World and Global History: Panel: ‘Historical Origins of “East Asian Resurgence”: Economic nationalism, Developmentalism and the International Order of Asia , c.1950s-1970s’, European Network in Universal and Global History, London School of Economics, 2011/4

秋田茂 「三報告へのコメント」中国現代史研究会ワークショップ:変動するグローバル資本主義と東アジア工業化, 中国現代史研究会, 神戸大学, 2010/12

Akita, Shigeru, “British Attitudes to the Aid-India Consortium in the late 1950s and early 1960s”, Historical and Contemporary Perspectives: India and Cold War, Nehru Memorial Museum & Library and Jawaharlal Nehru Institute for Advanced Study, Jawaharlal Nehru University, 2010/12

秋田茂 「コロボ・プランの変容とスターリング圏—1950年代後半-60年代初頭」日本国際政治学会2010年度研究大会, 札幌国際センター, 2010/10

秋田茂 「グローバルヒストリー研究におけるヨーロッパ中心史観克服の試み—アジア・大阪からの視点」大阪大学歴史教育研究会大会: 阪大史学の挑戦 2, 大阪大学, 2010/8

Akita, Shigeru, “The Making of a Genuinely Global Economic Historiography? ”, The 21st International Congress of Historical Sciences: Research Perspective in World and Global History, The International Committee of Historical Sciences, University of Amsterdam, 2010/8

Akita, Shigeru, “Marxist Historiography in Postwar Japan”, The 21st International Congress of Historical Sciences: The Ebb and Flow of Marxist Historiography, The International Committee of Historical Sciences, University of Amsterdam, 2010/8

Akita, Shigeru, “Japanese Efforts to Overcome Eurocentric Structures and Paradigms in the Study of Global History”, Global Dialogues on Global History, Freiburg Institute for Advanced Studies, University of Freiburg, 2010/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第20回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2011年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号: 20242013

研究題目: グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考

研究経費: 2010年度 直接経費 8,600,000円 間接経費 2,580,000円

2011年度 直接経費 4,200,000円 間接経費 1,260,000円

研究の目的:

近世の「長期の18世紀」から21世紀現代にいたる世界システムにおけるアジア世界の位置を再考し、新たな世界史像を提示する。具体的な検討課題として、(1)近世(長期の18世紀)におけるアジア各地の港市と後背地域の経済発展、(2)20世紀後半の東アジア地域のめざましい経済発展＝「東アジアの経済的再興」の歴史的起源を、世界システムの変容の観点から考察する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

社会経済史学会・理事	2008年4月～現在に至る
日本南アジア学会・常任理事、英文論集編集委員	2006年10月～2012年10月
日本学術会議・連携会員(史学)	2006年10月～現在に至る
大阪歴史科学協議会・研究委員	2006年6月～現在に至る
The Royal Historical Society (UK)・Fellow	2002年10月～現在に至る

4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋史、オーストラリアの歴史。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

藤川隆男, 松田祐子, 頼順子他(編)『アニメで読む世界史』山川出版社, pp. 6-9, pp. 227-235, 2011/9

藤川隆男『人種差別の世界史』刀水書房, 274p., 2011/7

藤川隆男, 中野聡, 安田常雄他(共著)『東アジア近現代通史8-ベトナム戦争の時代』岩波書店, pp. 380-398, 2011/6

藤川隆男, 小山哲, 上垣豊他(共著)『大学で学ぶ西洋史[近現代]』ミネルヴァ書房, pp. 184-190, 2011/4

藤川隆男, 松本悠子, 栗屋利江他(共著)『人の移動と文化の交差 ジェンダー叢書7』明石書店, pp. 252-270, 2011/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男(書評)「佐藤博志編『オーストラリアの教育改革——21世紀型教育立国への挑戦』」『オーストラリア研究』25, オーストラリア学会, pp. 88-92, 2011/3

4-4. 口頭発表

藤川隆男「オーストラリアのアジアへの接近と白豪主義の終焉」ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 2011/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号: 19510249

研究題目: オーストラリアにおける白人性の歴史的展開と世界構造

研究経費: 2010年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究の目的は、従来から取り組んできた白人性研究の理論的背景やその射程に関する研究を基にして、オーストラリアという特定の地域で、白人性に関する理論的枠組みを、歴史学的に検証することである。この理論的な枠組みを、オーストラリアにおける具体的な事例、反中国人運動、白豪主義、連邦運動、ヨーロッパ系エスニックのアイデンティティ、多文化主義(スポーツとメディア)などを通じて、順次検証するのがこの研究の主な内容である。

4-6-2. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号: 23510312

研究題目: 現代オーストラリアにおける「社会の歴史化」とナショナリズムの再編の研究

研究経費: 2011年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

研究の目的:

本研究の目的は、オーストラリアにおける従来の歴史学的な範囲における歴史ではなく、広く社会全般において歴史的なものに対する関心が高まり、それを展示、誇示したり、検証したり、利用したりする現象が拡大していることに着目し、その広がりとその原因、それが意味していることを明らかにすることである。とりわけ、歴史博物館の拡大や歴史教育の連邦レベルでの統一カリキュラムの導入に注目し、それを検証する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

オーストラリア学会・理事	2004年4月～現在に至る
大阪大学西洋史学会・理事	2003年6月～現在に至る
パブリック・ヒストリー・編集委員	2003年6月～現在に至る
日本西洋史学会・西洋史学・編集委員	1996年4月～現在に至る

5. 中野 耕太郎 准教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻現代史学)中退。文学修士(京都大学、1993年)。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授を経て、2007年10月より現職。専攻:アメリカ現代史。

5-1. 論文

中野耕太郎 「衝撃都市からゾーン都市へ—20世紀シカゴの都市改革再考」『史林』(史学研究会), 95-1, pp. 209-246, 2012/1

Nakano, Kotaro, "How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago" *Japanese Journal of American Studies*, (Japanese Association for the American Studies), 22, pp. 63-87, 2011/6

中野耕太郎 「研究フォーラム:アメリカにおける移民史研究の現在—東欧移民史の可能性」『歴史と地理 世界史の研究』226, pp. 56-59, 2011/2

中野耕太郎 「20 世紀国民秩序と人種の暴力—1919 年シカゴ人種暴動の検討」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 200, pp. 52-70, 2010/4

5-2. 著書

小山哲, 上垣豊, 中野耕太郎他(共著) 『大学で学ぶ西洋史 近現代』ミネルヴァ書房, pp. 240-246, 2011/4

常松洋, 肥後本芳男, 中野耕太郎他(共編著) 『アメリカ合衆国の形成と政治文化—建国から第一次世界大戦まで』昭和堂, pp. 104-105, pp. 154-179, 2010/10

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

中野耕太郎 「クルーシブル(垣塙)—第一次世界大戦とアメリカニズム」 「第一次世界大戦の総合的研究」研究会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2012/2

Nakano, Kotaro, “Discovery of Poverty” and Divided nationhood in Early Twentieth Century America”Workshop: Making Modern Citizens: Politics, Cultures and Struggles for Social Reform, History Department, University of North Carolina at Chapel Hill, University of North Carolina at Chapel Hill, 2011/9

中野耕太郎 「アメリカ革新主義の貧困観と近代市民の形成—統合の中の分断」 「近代市民規範のポリティックス」研究会, 科研プロジェクト(基盤研究 B) 「近代市民社会規範のポリティックス—「社会改良」の複合的メカニズムに関する史的考察」, 専修大学, 2011/9

中野耕太郎 「アメリカナイゼーションの戦争」ミニシンポジウム: 第一次世界大戦研究の焦点をどこに定めるのか—「世界性」と「総体性」、そして「現代」の問題性について, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2010/12

中野耕太郎 『「アメリカ史」叙述のグローバル化—変わりゆくアメリカ史概説』大阪大学歴史教育研究会第 44 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2010/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 中野耕太郎

課題番号: 21520746

研究題目: 20 世紀におけるアメリカの多元的国民統合と人種境界の形成

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2011 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

本研究は、第一次大戦期から 1920 年代半ばにかけて進行するアメリカ北部での人種隔離の定着過程を綿密に検証することで、社会的な人種境界の形成が同時期の南・東欧系移民の多元的統合といかなる相互関係にあったかを解明し、以後数十年間のアメリカ国民国家のあり方を規定した「秩序」の歴史的な性格を考察する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

関西アメリカ史研究会・代表幹事

2010 年 11 月～現在に至る

アメリカ学会・評議員	2009年4月～現在に至る
大阪大学西洋史学会・理事	2008年6月～現在に至る
二十世紀研究・編集委員	2008年4月～現在に至る
日本西洋史学会・編集委員	2003年4月～現在に至る

6. 栗原 麻子 准教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学)(京都大学、1998年)。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004年10月より現職。専攻:古代ギリシア史。

6-1. 論文

栗原麻子 「古典期アテナイにおける互酬的秩序 課題と展望」『パブリック・ヒストリー』9, 大阪大学西洋史学会, pp. 5-14, 2012/3

栗原麻子 「前4世紀アテナイにおける通婚禁止令とアポロドロス弁論の女たち」『西洋古代史研究』10, 京都大学大学院文学研究科西洋史学専修, pp. 23-43, 2010/12

栗原麻子 「[思い出さない]誓いをめぐって 前 403 年アテナイにおける和解儀礼」『古代文化』62-1, 古代学協会, pp. 59-70, 2010/6

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子(特集解説) 「ソシアビリテ論と紛争研究の接点をめぐって」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 9, pp. 1-4, 2012/3

栗原麻子 「アテナイ民主制と「男らしさ」三成美保(共編著)『「マスキュリティ」の比較文化史』(科学研究費基盤研究(B) 2009-2011年度 課題番号 21310171), pp. 41-53, 2012/3

栗原麻子(エッセイ) 「古代ギリシアの同性愛」三成美保, 服藤早苗(共編著)『ジェンダー史叢書 権力と身体』明石書店, pp. 79-82, 2011/1

栗原麻子(書評) 「橋場弦『賄賂と民主政一美德から犯罪へ』」『西洋史学』238, 日本西洋史学会, pp. 67-68, 2010/9

栗原麻子(解説) 「特輯『ギリシア・ローマ世界における都市と帝国の儀礼』に寄せて」『古代文化』62-1, 古代学協会, pp. 56-58, 2010/6

6-4. 口頭発表

栗原麻子 「前四世紀アテナイにおける市民の家と非市民女性ーアルキッペとネアイラー」女性史総合研究会(第162回)例会, ウィングス京都, 2011/12

栗原麻子 「変化の学とソシアビリテ研究ーアテナイ史の場合ー」第10回古代史研究会例会:シンポジウム(古代社会論の新たな展望), 京都大学, 2011/3

栗原麻子 「アッティカ法廷弁論と歴史研究 A. Lanni の近著をめぐって」第9回古代史研究会例会, 京都大学, 2010/4

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子
課題番号: 21520745

研究題目: リュクルゴス時代の公私関係

研究経費: 2010年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2011年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究は、いわゆる「法廷弁論家の時代」をめぐる静態的なアテナイ社会史・心性史研究を、動態的なものとして読み直すことを目的としている。市民意識にかかわる研究は、主史料である法廷弁論家の個性を捨象して進められてきた。本研究では、法廷弁論の利用法についての資料論的考察をふまえたうえで、ヘレニズムの萌芽期と目されるリュクルゴス時代における市民性の特質を明らかにする。公私2領域の分別、公人と私人の区別、報復と刑罰の関係性について取り上げることで、同時代の互酬的社会構造のなかにアテナイの市民性を位置づける試みであった。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

古代学協会・編集参与

2009年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員

2004年10月～現在に至る

7. 水田 大紀 助教

1977年生。2010年、大阪大学文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。Master of Philosophy (University of London, Institute of Historical Research, 2010)取得。日本学術振興会特別研究員PDを経て、2012年4月より現職。専攻: イギリス近代史。

7-1. 論文

水田大紀 「パトロネジの「終焉」—近代イギリスにおける官僚制度改革と能力主義の浸透—」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 9, 大阪大学西洋史学会, 47-53頁, 2012/2

水田大紀 「近代イギリス官僚制度改革史再考—調査委員会と官僚たちの同床異夢—」『史林』(史学研究会), 94-6, 史学研究会, 31-57頁, 2011/11

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

水田大紀 「帝国の中の「アングロ・アイリッシュ」—19世紀後半マルタにおける教育改革を通じて—」2010年度アイルランド研究年次大会, 日本アイルランド協会, 東洋大学, 2010/11

水田大紀 「19世紀後半イギリスにおける官僚制度改革と下級官吏の反応—通信省貯蓄課における「ロックアウト」を通じて—」2010年度広島史学研究大会西洋史部会, 広島史学研究会, 広島大学, 2010/10

Mizuta, Tomonori, "The Maltese Modern History in the British Empire" The first Finnish-Japanese workshop for doctoral students in history and economics, University of Jyväskylä, University of Jyväskylä, 2010/9

水田大紀 「イギリス近代史研究への招待—ジェントルマンをめぐる問題意識の変遷—」大阪大学西洋史学会第5回若手セミナー, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2010/6

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

7-7-1. 2010 年度～2011 年度、研究助成、助成金獲得者:水田大紀

助成金名:平成 22-23 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)

研究題目:イギリス近代における官僚制度改革とメリトクラシーの浸透に関する総合的実証研究

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2010 年度 直接経費 700,000 円 2011 年度 直接経費 600,000 円

研究の目的:

近代社会におけるメリトクラシーの国際的な広がりとその土台となる思想的背景について実証するため、1. 海外におけるイギリス官僚制度改革への関心と影響、2. メリトクラシーを支える社会思想とその変容の二項目を新しい論点として検討する。

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-10 考古学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉

准教授：高橋 照彦

助教：中久保辰夫(兼任)

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	3	1	0	0	0	0	3	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	4	2	1	1	1
2011	6	1	0	1	2
計	10	3	1	2	3

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標としている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習にくわえ、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向

けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費補助金などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、現地説明会の開催やHPでの情報発信を通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、大阪府、京都府、奈良県、あるいは愛知県や鹿児島県などへの臨地研修も実施した。大学院生については個別の論文指導やプロジェクトにかかわる共同研究なども行うことができた。学部生向けにも基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。就職支援については、大学院修了生などで、文化財行政にかかわる正規職員などとして就職する者がでている。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、2010年度には博士後期課程の在院生を中心に増加した。また、2011年度は博士後期課程の在籍者がいなくなったため、2010年に比べて総数は減少したものの、博士前期課程の在籍者でも1人1回以上の学会発表や論文発表を行っており、概ね成果を挙げた。宝塚市長尾山古墳の発掘調査を継続するとともに、2010年度には長尾山古墳発掘調査概報を編集、発行することもできた。さらに、以前に研究室で発掘調査を行っていた篠窠跡群大谷3号窠についても最終的な調査報告書をまとめ、500頁をこえる充実した内容のものとなった。このほか、教員は科学研究費補助金の助成を受けて、研究を推進することができた。

3. 社会連携

兵庫県宝塚市の長尾山古墳の調査において、例年通り発掘地点の現地説明会を開催し、HPでも速やかに発掘成果の情報を発信した。また、宝塚市教育委員会が行う発掘調査において調査指導・協力を行うこともでき、概報の作成などでも全面的に援助した。さらに、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。その一方で、所蔵保管資料については、大阪府立近つ飛鳥博物館などへの展示に出品するための協力など、各地からの閲覧や写真提供

にも積極的に応じており、京丹後市をはじめとして地方自治体に対する学術協力も行っている。また新たに、大阪府教育委員会とともに藤井寺市野中古墳出土品の保存修復活動に伴う社会連携活動も開始し、文化庁や朝日新聞文化財団などの助成を受けながら事業を推進することもできた。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果を果たしている。また、大学院修了生では、専門機関での採用が限られている厳しい状況のなかで、正規職員を含む就職の実績を挙げている。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を果たすことができた。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆において数値目標を達成できた。また、報告書の刊行、フィールド調査の実施なども、予定通りに行うことができた。当該年度の目標は十分に達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、野中古墳出土品の保存修復活動に伴う社会連携活動を新たに進めるなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	1	2
2011	1	0	1
計	2	1	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中久保辰夫 「古墳時代における渡来文化の受容と政治権力」 2011/3
主査：福永伸哉 副査：小林茂、高橋照彦

奥村茂輝 「奈良時代における王権と寺院造営」 2012/3
主査：高橋照彦 副査：福永伸哉、藤岡穰

【論文博士】

豊島直博 「鉄製武器の流通と初期国家形成」 2011/1
主査：福永伸哉 副査：武田佐知子、高橋照彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	3(1)	0(0)	3(0)	0(0)	0(0)	6(1)
2011	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	3(1)
計	5(2)	0(0)	3(0)	0(0)	1(0)	9(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	1	5	3	1	0	10
2011	0	3	1	0	0	4
計	1	8	4	1	0	14

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士前期〕

金澤雄太 2011「富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年の位置」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科, pp. 87-100, 2011/3

〔博士後期〕

奥村茂輝「渤海上京龍泉府と平城宮東院」『明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』明治大学大学院文学研究科, pp. 31-44, 2011/3

奥村茂輝「法華寺の成立過程」『南都佛教』93号, 南都佛教会, pp. 1-36, 2011/3

中久保辰夫「篠塚跡群大谷 3 号窯出土供膳器の性格と史的意義」『太邇波考古』第 31 号, 両丹考古学研究会, pp. 1-13, 2010/9

中久保辰夫「陶邑における韓式系軟質土器の変容過程」『韓式系土器研究』XI, 韓式系土器研究会, pp. 1-21, 2010/11

中久保辰夫「4・5 世紀における近畿地域の集落動態と渡来人」『明治大学と大阪大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』明治大学大学院文学研究科, pp. 95-104, 2011/3

【2011年度】

〔博士前期〕

高松由「棘付花卉形杏葉の変遷と彫金技術—7 世紀における新来技術の導入と定着—」『待兼山論叢』第 45 号, 大阪大学文学部, pp. 53-79, 2011/12

仲辻慧大「貯蔵器による最古期須恵器窯の再検討」『明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』明治大学大学院文学研究科, pp. 74-84, 2012/3

仲辻慧大「須恵器底部の爪圧痕の再検討」『篠塚跡群大谷 3 号窯の研究』大阪大学考古学研究室篠塚調査団, pp. 435-442, 2012/3

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

森暢郎・田中由理・中久保辰夫・高橋照彦「京都府篠大谷3号窯の調査と整理作業の成果」考古学研究会関西例会, 港区民センター研修室, 2010/5/29

〔博士後期〕

奥村茂輝「平城京を飾った瓦」山城郷土資料館特別展『平城の北・恭仁宮—木津川流域の奈良時代—』記念講演, 山城郷土資料館, 2010/11/6

奥村茂輝「渤海上京龍泉府と平城宮東院」明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2010/12/11

中久保辰夫・高橋照彦「緑釉陶器の系譜と規格性—京都府亀岡市篠窯跡群大谷3号窯の出土資料を中心に—」日本考古学協会, 国士舘大学, 2010/5/23

中久保辰夫「緑釉陶器の製品管理—篠窯跡群大谷3号窯出土資料を対象として—」大阪歴史学会考古部会6月例会, 阿倍野市民学習センター, 2010/6/11

中久保辰夫「The residence of immigrants from the Korean peninsula and its historical background during the Kofun period (古墳時代における韓半島系渡来人の定着とその歴史的背景)」科学研究費「古墳時代政権交代論の考古学的再検討」ワークショップ, 大阪大学文学研究科, 2010/7/6

中久保辰夫「일본의 고분시대 연구동향 2009 (日本の古墳時代研究動向 2009)」第12回古墳文化研究会定期発表会, 韓国・陝川, 2010/7/31

中久保辰夫「土器からみた5世紀の渡来人」日韓古文化研究会, 福島区民センター, 2010/9/5

中久保辰夫「4・5世紀における近畿地域の集落動態と渡来人」明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2010/12/12

【2011年度】

〔学部〕

竹内裕貴「西南四国における弥生土器の地域色—中期から後期を中心にして—」長岡京市中央生涯学習センター, 第114回京都弥生文化談話会, 2011/11/19

〔博士前期〕

仲辻慧大「貯蔵器による最古期須恵器窯の再検討」明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2011/12/24

仲辻慧大「貯蔵器による最古期須恵器窯の再検討」韓式系土器研究会, 泉北資料館, 2012/2/11

山中良平「山陰地域出土特殊器台の展開とその性格」考古学研究会岡山3月例会, 岡山県立図書館, 2012/3/10

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔博士前期〕

金澤雄太「万籟山古墳採集の円筒埴輪」『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 22-25, 2011/3

森暢郎「調査区の配置」『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 7-8, 2011/3

森暢郎「山田丘遺跡(吹田地区)における発掘調査 須恵器」『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』2, 寺前直人編, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, p. 5, 2011/3

仲辻慧大「北クビレ部 2010 調査区」『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 9-11, 2011/3

高松由「埋葬施設の構造」『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 15-17, 2011/3

山中良平「出土遺物」『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 19-21, 2011/3

〔博士後期〕

中久保辰夫「論文展望」『季刊 考古学』第 111 号, 雄山閣, pp.104-105, 2010/5

中久保辰夫「回顧と展望 古墳時代」『史学雑誌』第 119 編第 5 号, 史学会, pp. 27-32, 2010/5

澤田秀実・中久保辰夫「新木山古墳(三吉陵墓参考地)の限定公開参加記」『考古学研究』第 57 巻第 4 号, pp. 14-17, 2011/3

中久保辰夫「周辺古墳」『発掘調査の方法と遺構検出状況』『長尾山古墳第 6 次・第 7 次発掘調査概報』福永伸哉編, 大阪大学文学研究科, pp. 1-3・11-13, 2011/3

【2011 年度】

〔学部〕

木村理恵・竹内裕貴「分布調査と測量調査」『篠窠跡群大谷 3 号窠の研究』大阪大学考古学研究室篠窠調査団, pp.23-26, 2012/3

〔博士前期〕

高松雅文・仲辻慧大「歴史的環境」『篠窠跡群大谷 3 号窠の研究』大阪大学考古学研究室篠窠調査団, pp.2-8, 2012/3

仲辻慧大・田村美沙・野島智実「貯蔵具・文房具の法量・形態」『篠窠跡群大谷 3 号窠の研究』大阪大学考古学研究室篠窠調査団, pp.204-206, 2012/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2011 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

金澤 雄太 博士課程前期, 御所市教育委員会, 専門職員, 2011/4

森 暢郎 博士課程前期, 桜井市教育委員会, 専門職員, 2011/4

中久保辰夫 博士課程後期, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2011/4

山中 良平 博士課程前期, 赤穂市教育委員会, 専門職員, 2012/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2010 年度 : 0 名 2011 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 1 名

9. 刊行物

- 2011年度 大阪大学文学研究科考古学研究室『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』 2011/3
大阪大学文学研究科考古学研究室『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』 2011/3
2012年度 大阪大学考古学研究室篠窯調査団『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科
考古学研究報告第5冊 2012/3

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 「明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施, 2010
「明治大学と大阪大学・京都府立大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施, 2011

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究集会、2010/7/5・6
「明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」2010/12/11・12
「古代史・考古学合同勉強会」第1回、2011/1/31
「古代史・考古学合同勉強会」第2回、2011/2/21
「文献史料と考古資料から古代史を考える会」2011/4/21
「考古学・古代史合同研究会」第1回、2011/5/9
「考古学・古代史合同研究会」第2回、2011/6/13
「考古学・古代史合同研究会」第3回、2011/7/11
「考古学・古代史合同研究会」第4回、2011/10/17
「考古学・古代史合同研究会」第5回、2011/11/14
「考古学・古代史合同研究会」第6回、2012/1/16
「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会（第1回）、2011/7/1
「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会（第2回）、2011/12/17・18
「明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」2011/12/23・24

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学、2005年)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻:日本考古学。

1-1. 論文

- 福永伸哉「古墳時代研究の新たな広がり」福永伸哉(編)『古墳時代の考古学』8, 同成社, pp. 1-5, 2012/3
福永伸哉「古墳時代研究と時間軸」福永伸哉(編)『古墳時代の考古学』1, 同成社, pp. 1-6, 2011/12
福永伸哉「埋葬姿勢と埋葬配置」北條芳隆(編)『古墳時代の考古学』6, 同成社, pp. 227-234, 2011/10
北原梨江, 福永伸哉(共著)「丹後型円筒埴輪の2系統とその展開過程」『太邇波考古』(両丹考古学研究会), 33, pp. 1-11, 2011/8
福永伸哉「古墳時代政権交替と畿内の地域関係」福永伸哉(編)『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科, pp. 5-18, 2011/3
福永伸哉「銅鏡の政治利用と古墳出現」『日本考古学協会 2010年度兵庫大会研究発表資料集』(日本考古学協会), pp. 153-166, 2010/10

1-2. 著書

金関 恕, 新井 宏, 福永 伸哉 他(共著)『古代の鏡と東アジア』学生社, pp. 5-34, 2011/8

福永 伸哉(編)『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科, pp. 1-18, 2011/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永 伸哉「考古学から見た継体政権」『三島と古代水運 II』高槻市今城塚古代歴史館, pp. 72-74, 2011/10

福永 伸哉(編)「長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報」大阪大学文学研究科, pp. 26-27, 2011/3

福永 伸哉「三角縁神獣鏡と邪馬台国論——桜井茶臼山古墳の調査成果に寄せて——」『つどい』273, 豊中歴史同好会, pp. 1-5, 2010/10

福永 伸哉「奈良県コナベ古墳事前調査の見学」『日本考古学協会会報』170, 日本考古学協会, pp. 54-57, 2010/8

1-4. 口頭発表

福永 伸哉「初期国家形成過程から見る日本の古墳文化」百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際専門家会議, 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議, 2012/1(『百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録に向けた国際専門家会議資料』pp. 17-21, 2012/1)

福永 伸哉「国家の形成と前方後円墳の時代」百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際シンポジウム, 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議, 2012/1(『百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際シンポジウム報告書』pp. 25-34, 2012/3)

福永 伸哉「国家の形成と前方後円墳の時代」: 百舌鳥古墳群とその周辺, (財)大阪府文化財センター, 2011/2(『百舌鳥古墳群とその周辺』2011/2)

福永 伸哉「銅鏡の政治利用と古墳出現」日本考古学協会 2010 年度大会: 古墳出現過程と銅鏡, 日本考古学協会, 2010/10(『日本考古学協会 2010 年度大会研究発表要旨』pp. 22-23, 2010/10)

福永 伸哉「最新の調査研究報告への見解」泉大津市カルチャースクール: シンポジウム邪馬台国論争は決着したのか, 泉大津市・大阪府立弥生文化博物館, 2010/10(『シンポジウム邪馬台国論争は決着したのか』p. 2, 2010/10)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永 伸哉 第 19 回濱田青陵賞, 朝日新聞社・岸和田市, 2006/9

福永 伸哉 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2002/12

福永 伸哉 第 6 回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 福永 伸哉

課題番号: 20320122

研究題目: 古墳時代政権交替論の考古学的再検討

研究経費: 2010 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

研究の目的:

古墳時代研究における重要な論点の一つとなってきた「政権交替論」について、おもに 1990 年代以降の新出資料の分析と効果的なフィールドワークを結合させることによって全面的な再検討を行い、政治変動期に焦点をあてた最新の古墳時代政治史を提示する。さらに、そうした特徴が認められる古墳時代を国家形成論上からいかにとらえるかという理論研究や、東アジアや欧米の国家形成期との比較研究についても展望を示す。

1-6-2. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 福永 伸哉

課題番号: 23242048

研究題目: 21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信

研究経費: 2011 年度 直接経費 6,900,000 円 間接経費 2,070,000 円

研究の目的:

研究対象の細分化が著しい古墳時代研究において、その最先端の個別成果をいま一度統合し、明確な研究戦略のもとに企画するフィールド調査を加えながら、21 世紀初頭における到達点として向後数十年の検討・吟味に足るだけの総括的な古墳時代歴史像を提示するとともに、わが国の古墳時代研究の成果としては初めての体系的な海外発信を行うことによって、古墳時代研究の国際的認知と国際比較研究テーマへの発展をはかり、次世代の古墳時代研究の新たな道筋を切り開く。

1-6-3. 2011 年度～2012 年度、挑戦的萌芽研究、代表者: 福永伸哉

課題番号: 23650570

研究題目: 結晶構造解析に基づく弥生時代の青銅器破碎行為のプロセス復元

研究経費: 2011 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

「邪馬台国時代」とも呼ばれる弥生時代終末期(3世紀前半)の遺跡から、銅鐸や青銅鏡などが長さ数cmの小さな破碎断片となつて出土する例が急増している。本研究は、青銅器の結晶構造と破碎の特徴が関連しているのではないかという新しい着想のもとに、結晶構造解析による青銅の冷却速度と破壊靱性値の相関解明という従来試みられたことのない方法を用いて、もとの完形青銅器から破碎青銅器片が生じたプロセスを復元的に解明し、弥生時代から古墳時代への転換を示す象徴的な現象として注目されつつある青銅器破碎行為の実態とその歴史的意義について、実証的かつ独創的な理解提示を行う。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員	2011 年 10 月～現在に至る
桜井市纏向遺跡調査委員会・委員	2011 年 10 月～現在に至る
京丹後市史跡整備検討委員会・委員	2011 年 9 月～現在に至る
(財)大阪市博物館協会・理事	2011 年 4 月～現在に至る
(財)大阪府文化財センター・理事	2011 年 4 月～現在に至る
宝塚市長尾山古墳整備委員会・委員	2011 年 4 月～現在に至る
豊中市文化財審議委員会・委員	2010 年 4 月～現在に至る
考古学研究会・常任委員	2009 年 4 月～現在に至る
芦屋市会下山遺跡・城山遺跡調査委員会・副委員長	2008 年 11 月～2012 年 3 月
日本考古学協会・理事	2008 年 5 月～現在に至る
日本考古学協会・原稿査読委員	2008 年 5 月～現在に至る
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員	2008 年 5 月～現在に至る
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員	2008 年 5 月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員	2007 年 12 月～現在に至る
高槻市安満遺跡調査指導検討会・委員	2007 年 10 月～2012 年 3 月
川西市文化財審議委員会・委員	2006 年 6 月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員	2006 年 6 月～現在に至る
京丹後市史編纂委員会・委員	2005 年 6 月～現在に至る
大垣市昼飯大塚古墳調査整備委員会・委員	1994 年 12 月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人	1980 年 4 月～現在に至る

2. 高橋 照彦 准教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年より大阪大学大学院助教授、2007年より現職。専攻:日本考古学、東アジア考古学。

2-1. 論文

田中由理, 高橋照彦「大谷3号窯出土資料の成分分析結果に関する考察」高橋照彦・中久保辰夫(共編著)『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学考古学研究室篠窯調査団, pp. 297-306, 2012/3

高橋照彦「篠窯の歴史的位置付け—文献史料による考察—」高橋照彦・中久保辰夫(共編著)『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学考古学研究室篠窯調査団, pp. 483-498, 2012/3

高橋照彦「古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点—河内政権論を中心に—」福永伸哉(編)『古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点—河内政権論を中心に—』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 43-62, 2011/3

高橋照彦「銭貨と土器からみた仁明朝」角田文衛(監修)『仁明朝史の研究—承和転換期とその周辺—』(古代学協会), 思文閣出版, pp. 141-188, 2011/2

高橋照彦「彩釉山水文博と須恵器鼓胴—陶製品からみた馬場南遺跡—」上田正昭(監修)『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺—』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター), 柳原出版, pp. 220-244, 2010/12

2-2. 著書

高橋照彦, 中久保辰夫(共編著)『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学考古学研究室篠窯調査団, pp. 8-18, pp. 20-22, pp. 69-71, pp. 78-80, p. 86, pp. 108-118, pp. 217-233, pp. 499-520, 2012/3

白石太一郎, 今尾文昭, 高橋照彦他(共著)『天皇陵古墳を考える』学生社, pp. 219-272, 2012/1

森安孝夫, 高橋照彦他(共著)『ソグドからウイグルへ—シルクロード東部の民族と文化の交流—』汲古書院, pp. 544-551, pp. 563-566, pp. 615-616, pp. 622-625, pp. 628-629, 2011/12

小畑弘己, 高橋照彦, 田中史生他(共著)『Jr.日本の歴史』1, 小学館, pp. 137-292, 2010/10

高木博志, 山田邦和, 高橋照彦他(共著)『歴史のなかの天皇陵』思文閣出版, pp. 46-50, 2010/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦, 奥村茂輝, 中川あや他(共著)(書評)「古尾谷 知浩 著『文献史料・物質資料と古代史研究』」『日本史研究』590, pp. 84-91, 2011/10

2-4. 口頭発表

高橋照彦「畿内後・終末期古墳の墳丘・石室規模からみた階層性とその背景」21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会, 大阪大学大学院文学研究科, 2011/12

高橋照彦「五条野丸山古墳と欽明陵」奈良歴史地理の会, 奈良県中小企業会館, 2011/11

高橋照彦「さまざまなお金の世界」第23回大阪商業大学スライドカルチャー「お金の日本史」, 大阪商業大学, 2011/11

高橋照彦「近年の緑釉陶器研究の動向」白山市横江荘遺跡出土施釉陶器研究会, 白山市埋蔵文化財センター, 2011/10

高橋照彦「記紀と考古学からみた四・五世紀のヤマト政権」豊中歴史同好会, 蛭池公民館, 2011/9 (『つどい』287, pp. 1-7, 2011/12)

高橋照彦「土器からみた日本古代史研究」文献史料と考古資料から古代史を考える会, 大阪大学大学院文学研究科, 2011/4

高橋照彦「大阪の飛鳥時代」大阪・京都文化講座:大阪・京都の地宝と考古学, 大阪大学 21世紀懐徳堂、立命館大学文学部、立命館大阪オフィス, 立命館アカデミア@大阪, 2010/12

高橋照彦「終末期古墳と薄葬令」柏原市市民大学, 柏原市歴史資料館, 2010/9

森暢郎, 田中由理, 高橋照彦他「京都府篠大谷3号窯の調査と整理作業の成果」考古学研究会関西例会, 大阪市港区民センター, 2010/5

高橋照彦「古都奈良の文化財」懐徳堂春季講座：世界遺産を学ぶ—日本・中国編—，懐徳堂記念会，大阪大学中之島センター，2010/5（『懐徳』79，pp. 66-68，2011/1）

中久保辰夫，高橋照彦「緑釉陶器の系譜と規格外—京都府亀岡市篠窯跡群大谷3号窯の出土資料を中心に—」日本考古学協会総会，国士舘大学，2010/5（『日本考古学協会第76回総会 研究発表要旨』pp. 78-79，2010/5）

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2008年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者：高橋照彦

課題番号：20520659

研究題目：日本古代施釉陶器生産における畿内と東海の比較研究

研究経費：2010年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2011年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的：

日本古代の施釉陶器生産地のうち窯数や製品の流通量において抜きん出た畿内と東海の両地域に焦点を据え、これまで不十分であった双方の構造的な比較研究を行う。それにより、生産地の地域的特質と相互関係を解明し、古代から中世への手工業生産の推移に関して歴史的意味付けをより明確化することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

東洋陶磁学会・常任委員

2009年5月～現在に至る

史学研究会・評議員

2005年11月～現在に至る

3. 中久保辰夫 助教

1983年3月12日生。2011年3月大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(2011年、大阪大学)。2009年4月～2011年3月：日本学術振興会特別研究員。2011年4月より現職。専攻：日本考古学。

3-1. 論文

中久保辰夫「土器からみた渡来人と北河内の「牧」」『ヒストリア』(大阪歴史学会)，229，大阪歴史学会，pp. 43-45，2011/12

中久保辰夫「陶邑における韓式系軟質土器の変容過程」『韓式系土器研究』(韓式系土器研究会)，11，韓式系土器研究会，pp. 1-21，2010/11

中久保辰夫「篠窯跡群大谷3号窯出土供膳器の性格と史的意義」『太邇波考古』(両丹考古学研究会)，31，両丹考古学研究会，pp. 1-13，2010/9

3-2. 著書

高橋照彦，中久保辰夫(編)『篠窯跡群大谷3号窯の研究』，578p，2012/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中久保辰夫「土器からみた渡来人と北河内の「牧」」『ヒストリア』大阪歴史学会，pp. 43-45，2011/12

澤田秀実，中久保辰夫(共著)「新木山古墳(三吉陵墓参考地)の限定公開参加記」『考古学研究』(考古学研究会)，57-4，考古

学研究会, pp. 14-17, 2011/3

中久保辰夫 「周辺の古墳」福永伸哉(編)『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室, p. 1, 2011/3

中久保辰夫 「発掘調査の方法と遺構検出状況」福永伸哉(編)『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp. 11-14, 2011/3

中久保辰夫 「論文展望」『季刊 考古学』111, 雄山閣, pp. 104-105, 2010/5

中久保辰夫 「回顧と展望 古墳時代」『史学雑誌』(史学会), 119-5, 史学会, pp. 27-32, 2010/5

3-4. 口頭発表

中久保辰夫 「古墳時代前半期における摂津と播磨」第13回播磨考古学研究集会, 播磨考古学研究会, 姫路市教育会館, 2012/2『前期古墳からみた播磨』pp. 11-28, 2012/2

中久保辰夫 「平安時代前半期における窯業生産の変質—篠窯跡群大谷3号窯の調査事例から—」明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2011/12

中久保辰夫 「兵庫県宝塚市長尾山古墳の発掘調査と猪名川流域の首長系譜」科学研究費補助金「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究会, 大阪大学, 2011/12

中久保辰夫 「おいしいごはんの考古学」大阪大学×大阪ガス「アカデミックキング」, 21世紀懐徳堂・大阪ガス, 大阪ガスクッキングスクール千里, 2011/11

中久保辰夫 「新木山古墳(三吉陵墓参考地の限定公開)」考古学研究会岡山例会10月例会, 考古学研究会岡山例会, 岡山県立図書館, 2011/10

中久保辰夫 「宝塚市・長尾山古墳の発掘調査と北摂の古墳時代」池田郷土史学会10月例会, 池田郷土史学会, 池田市立中央公民館, 2011/10

中久保辰夫 「ミニシンポジウム「古墳時代の手工業生産」コメント」大阪歴史学会, 大阪歴史学会 2011年度大会, 神戸大学, 2011/6

中久保辰夫 「お茶わんのカケラからみえてくる平安時代」大阪大学 21世紀懐徳堂 i-spot 講座, 大阪大学 21世紀懐徳堂, 淀屋橋 ODONA, 2011/6

中久保辰夫 「4・5世紀における近畿地域の集落動態と渡来人」明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2010/12『明治大学と大阪大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』pp. 95-104, 2011/3)

中久保辰夫 「土器からみた5世紀の渡来人」日韓古文化研究会例会, 日韓古文化研究会, 福島区民センター, 2010/9

中久保辰夫 「The residence of immigrants from the Korean peninsula and its historical background during the Kofun Period」科研「古墳時代政権交代論の考古学的再検討」ワークショップ, 大阪大学大学院文学研究科, 大阪大学, 2010/7

中久保辰夫 「日本の古墳時代研究動向2009(原題:韓国語)」古墳文化研究会定期例会, 古墳文化研究会(韓国), 韓国・陝川, 2010/7

中久保辰夫 「緑釉陶器の製品管理」大阪歴史学会考古部会 6月例会, 大阪歴史学会考古部会, 阿倍野市民学習センター, 2010/6

高橋照彦, 中久保辰夫 「緑釉陶器の系譜と規格性」日本考古学協会, 日本考古学協会, 国士舘大学, 2010/5『日本考古学協会第76回総会 研究発表要旨』pp. 78-79, 2010/5)

森暢郎, 高橋照彦, 中久保辰夫他 「京都府篠大谷3号窯の調査と整理作業の成果」考古学研究会関西例会第164回例会, 考古学研究会関西例会, 港区民センター, 2010/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2010 年度～2011 年度、研究助成、助成金獲得者:中久保辰夫

助成金名:平成 22 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)

研究題目:古墳時代における渡来文化の受容と政治権力

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2010 年度 直接経費 400,000 円

研究の目的:

本研究は、日本列島の古墳時代を対象時期とし、土器の分析を基軸として渡来文化受容の共通性と地域性を明らかにすることを目的とする。分析内容としては、朝鮮半島に由来する土器の分布論的検討、朝鮮半島系土器と日本列島在来の土器の関係性を分析することによって、朝鮮半島から渡来した集団、文化、生活様式の受容過程を検討する。同時に、古墳から出土した渡来系文物の分析を行い、渡来文化の受容に中央や地方の政治権力がどのように関わったのかといった点についても考察する。

3-7-2. 2011 年度、研究助成、助成金獲得者:中久保辰夫

助成金名:平成 23 年度財団法人高梨学術奨励基金

研究題目:古墳時代における韓半島系渡来人の系譜

助成団体名:財団法人高梨学術奨励基金

助成金額:2011 年度 直接経費 300,000 円

研究の目的:

日本古代社会に韓半島から渡来した人々が果たした役割は大きいことはよく知られている。本研究は、古墳時代の渡来人が韓半島のどの地域を故地とし、そしてそこから移住した人や集団が日本列島在来社会の中でどのように受け入れられたのかといった課題に対して、考古資料の分析をもとに考察するものである。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員

2009 年 4 月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：堤 研二

助教：波江 彰彦

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
19	3	0	0	0	1	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	3	0	0	0	1
2011	3	0	1	0	0
計	6	0	1	0	1

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時まで実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の学会発表等をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員 1 名が外邦図に関する書籍（新書）を刊行した。他の教員 1 名は、科学研究費での助成研究を続けつつ、財団からの出版助成を受けて研究書を刊行した。また院生は 4 本の査読付き学会誌ないし紀要への論文掲載を実現した。教室構成員による研究書への寄稿も複数達成した。教員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も毎年おこなっている。教員 1 名は、2010 年度に代表者として科学研究費・若手研究（B）を新規に獲得した。また他の教員 1 名は、2011 年度に代表者として科学研究費・基盤研究（B）を新規に獲得した。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスをおこなうとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

外邦図を中心とする研究成果について、新聞社やテレビ番組制作会社の取材に協力してきた。また教室ならびに個人の HP でその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員・協議員など学外の職務にも積極的に応じた。大阪大学サステナビリティ研究機構について、本教室教員 2 名が兼任教員となって環境史関係の研究・教育をすすめた。教員 1 名は新書を刊行した。また、他の教員 1 名は出版助成によって研究書を刊行し、また、国際学会の準備委員や複数の国際研究ワークショップの実行委員として準備・開催等に従事した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践が可能であった。掲げた目標は達成できたとして自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成された。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(1)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)
2011	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
計	3(3)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	3	0	0	0	3
2011	0	3	0	0	0	3
計	0	6	0	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010 年度】

〔博士後期〕

渡邊英明「村明細帳を用いた近世武蔵国における市場網の分析」『人文地理』62-2, pp. 40-57, 2010/4(査読付き学会誌)

渡邊英明「近世中後期における二郷半領の村々と平沼六斎市——村明細帳の分析を中心に——」『葦のみち』21, pp.10-36, 2010/4

【2011 年度】

〔博士前期〕

森野友介・角野宏・多田隈健一・小嶋梓・波江彰彦・小林茂「台湾桃園台地の灌漑水利の発展と水田開発」『外邦図研究ニューズレター』9, pp. 40-47, 2012/3(査読付論文)

〔博士後期〕

渡邊英明「18～19 世紀の越後三条町における雁木通りの形成と機能」『人文地理』63-5, pp. 447-461, 2011/10(査読付き学会誌)

(2)口頭発表

【2010 年度】

〔博士後期〕

渡邊英明「近世中後期における所沢六斎市の構成と周辺農村による利用形態」歴史地理学会大会, 高崎経済大学(高崎市), 2010/5/15

渡邊英明「19 世紀の越後三条町における定期市の雁木下利用」人文地理学会大会, 奈良教育大学(奈良市), 2010/11/21

渡邊英明「江戸時代の武州久保田村における定期市の展開と市場争論」日本地理学会春季学術大会, 明治大学駿河台キャンパス(東京都千代田区), 2011/3/29

【2011 年度】

〔博士前期〕

小嶋梓「インナーシティにおけるひたつくりの 2 類型」日本地理学会春季学術大会, 首都大学東京南大沢キャンパス(八王子市), 2012/3/28

〔博士後期〕

渡邊英明「18～19 世紀の多雪都市における雁木通りの形成と機能」交通史研究会例会, 目白大学新宿キャンパス(東京都新宿区), 2011/7/23

渡邊英明「日記史料にみる江戸時代後期の定期市と人々の関わり」日本地理学会秋季学術大会, 大分大学旦野原キャンパス(大分市), 2011/9/23

(3)その他(書評・翻訳など)

【2011 年度】

〔博士前期〕

小林茂・小嶋梓・多田隈健一・顧立舒「日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図(大阪大学蔵)一解説と目録一」『外邦図研究ニューズレター』9, pp. 59-65, 2012/3

〔博士後期〕

渡邊英明「本の紹介 あきる野市五日市郷土館編『村明細帳—江戸時代の寄場村「五日市」と周辺の村々—』『多摩のあゆみ』142, pp. 92-94, 2011/5/15

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2011年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2010年度:0名 2011年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度:0名 2011年度:0名

9. 刊行物

【2010年度】

『外邦図研究ニューズレター』8号(2009年度科学研究費補助金[基盤研究(A)]中間報告書(2010年度への繰越金による), 研究代表者:小林茂, 2011/3)

【2011年度】

『外邦図研究ニューズレター』9号(2011年度大阪大学文学研究科共同研究経費「外邦図とGISを活用した環境変化分析手法に関する研究」報告書), 研究代表者:小林茂, 2012/3)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2010年度】

2010年日本地理学会秋季学術大会シンポジウム「アジアにおける近代初期の地理資料発掘・利用による環境変化研究」オーガナイザー, 2010年10月3日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 堤研二教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(九州大学、1986)・博士(文学)(九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞(1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞(2005)、大阪大学教育・研究功績賞(2006)、大阪府スポーツ少年団優良団表彰(2012)。専攻:人文地理学。

1-1. 論文

Tsutsumi, Kenji, "Formation of the Tourist Industry at the Core of a Shrine through the Modern and Present Eras: Social Capital and Agent around Dazaifu" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 7, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 69-85, 2012/2

Tsutsumi, Kenji, "Interscale and Interlevel Problems of Research on Social Capital in Rural Japan" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 7, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 241-256, 2012/2

堤研二 「地域科学、新経済地理学と日本の経済地理学に関する試論的考察:ERSA50周年と日本の経済地理学」大阪大学文学研究科『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学研究科), 45, 大阪大学文学研究科, pp. 1-25, 2011/12

堤研二 「山間地域集落の生活機能とソーシャル・キャピタル」藤田佳久(共編著)『山村政策の展開と山村の変容』原書房, pp. 219-243, 2011/3

Tsutsumi, Kenji, "Social Capital in Rural Studies in Japan: An Examination of Actual Forms of Social Capital Especially in Rural Japan" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 6, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 129-139, 2011/2

Tsutsumi, Kenji, "Settlement Activities and Social Capital of Depopulated Rural Areas in Japan" Westlund H. and Kobayashi, K.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 5, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 93-106, 2010/8

1-2. 著書

堤研二 『人口減少・高齢化と生活環境:山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会, 295p., 2011/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, "Regional Science and New Economic Geography in the Academia of Japanese Economic Geography" The 3rd Global Conference on Economic Geography, The 3rd Global Conference on Economic Geography, COEX (Seoul, South Korea), 2011/6

Tsutsumi, Kenji, "Formation of the Tourist Industry at the Core of a Shrine through the Modern and Present Eras: Social Capital and Agents around Dazaifu Tenmangu" The 8th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto,

Japan), Nara Prefecture New Public Hall, 2011/5

Tsutsumi, Kenji, “Comments to “Economic Entrepreneurship, Startups and Their Effects on Local Development: The Case of Sweden”” The 8th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), Nara Prefecture New Public Hall, 2011/5

堤研二 「コメント:多様な山村像の把握のために」経済地理学会 2010 年度松本地域大会シンポジウム:今日の山村問題と経済地理学の課題, 経済地理学会 2010 年度松本地域大会シンポジウム, 信州大学, 2010/10

Tsutsumi, Kenji, “Interscale and Interlevel Problems of Research on Social Capital in Rural Japan”The 7th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Swedish and Japanese Countryside, with a conference of the 50th years anniversary of European Regional Science Association (ERSA):Sustainable Regional Growth and Development in the Creative Knowledge Economy, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), Jönköping University, 2010/8

堤研二 「地域連携と子の育ち:地域の事情を知り、学校現場に生かす手法とは」豊中市立小曾根小学校・学力向上自主企画事業・校内研修会, 豊中市立小曾根小学校, 豊中市立小曾根小学校, 2010/8

Tsutsumi, Kenji, “Resources for Some Possibilities Bonding to Cultural Translation: Section of Human Geography at Graduate School of Letters, Osaka University”Japanese-German Presidents’ Conference: Cultural Translation, Japanese-German Presidents’ Conference, Heidelberg University, 2010/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 スポーツ少年団・優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤研二

課題番号: 20520684

研究題目: 地域統計データにみる人口減少期の社会経済変動のトレンドと市町村合併のインパクト

研究経費: 2010 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、人口減少地域を対象として、当該地域における社会経済的な中・長期変動のトレンドを把握した上で、当該地域の抱える問題点や課題を明らかにすることである。具体的には、複数時点での地域統計データを収集してデータベースを構築し、多変量解析による地域類型化とその変化の分析を行い、その背景の分析や、当該地域の問題に関係する対策・政策の再検討をすることを主眼点とする。

本研究の目的は 4 つの柱から構成される。すなわち、(1) 過疎地域をはじめとする人口減少地域の 30 年以上にわたる地域統計データを分析して、データベースを構築し、当該地域の特性(類型)とその変動パターンを析出し、(2) その変動の背景をグローバル、ナショナル、リージョナル、ローカルといった異なるスケール・レベルで検討し、(3) これまでの人口減少地域・過疎地域に関する対策・政策の効果・アウトカムや現在進行中の市町村合併の影響を分析し、(4) 市町村合併と小地域統計の問題について考察を加えること、である。

1-6-2. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:堤研二

課題番号: 23320182

研究題目: 中山間地域における林業・森林環境と住民生活に関するマネジメント＝モデルの構築

研究経費: 2011 年度 直接経費 3,600,000 円 間接経費 1,080,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル (FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を実施することにある。具体的には、(1) 森林環境保全のための管理モデル、(2) 林業再生のための合理的方策に関するモデル、(3) 中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4) それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

現代日本の森林環境と林業の課題として、地球温暖化問題・二酸化炭素排出量問題等への対応や輸入木材への依存からの脱却が求められている。こうした中で、少なからぬ蓄積量のある国内の森林資源を見直し、広域にわたって荒廃・放棄された森林を再生させながら、疲弊している林業を活性化させることが、環境問題や林業再生の観点からの近未来的な課題として明らかになってきている。一方で、中山間地域では基幹産業である林業の衰退だけでなく、人口激減と高齢化によって地域社会の生活機能の維持についても困難に直面している。このような諸問題の解決のためには、中山間地域の森林管理・林業・産業(兼業)や生活の総合的な関連性に目を向けた、持続可能性の高い現実的な地域マネジメントに関する政策提言が必要であり、そのための問題局面へとつながりうる実証的な地域調査に依拠したモデルの構築と提示を行うことが重要な課題である。中山間地域では、兼業によって林業や地域農業が支えられているという実態があるため、複眼的な研究視点も不可欠となる。前述の問題状況や課題をふまえて、日本の国土の大部分を占める森林・中山間地域を対象として、森林資源の自給と安全保障も斟酌し、森林荒廃を防いで林業再生と中山間地域の産業(兼業)・生活の保全を図りたいという強い目的意識を本研究は有する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・人文地理学事典編集委員	2011年8月～現在に至る
国際地理学連合京都国際地理学会議・組織委員・巡検委員長	2011年8月～現在に至る
人文地理学会・評議員	2010年11月～現在に至る
日本地理学会・代議員	2010年4月～現在に至る
日本地理学会・E-Journal Geo 編集委員	2008年4月～2012年3月

2. 波江 彰彦 助教

1979年生。2009年3月、大阪大学大学院文学研究科博士課程(文化形態論専攻)修了。博士(文学)(大阪大学)。日本学術振興会特別研究員(DC1)(2005年4月～2008年3月)、大阪大学大学院文学研究科特任研究員(2008年4月～2010年3月)を経て、2010年4月より現職。専攻:人文地理学。

2-1. 論文

森野友介, 角野宏, 多田隈健一, 小嶋梓, 波江彰彦, 小林茂(共著)「台湾桃園台地の灌漑水利の発展と水田開発」外邦図研究グループ『外邦図研究ニューズレター』9, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, pp. 40-47, 2012/3

Namie, Akihiko, “The Relationship between Public and Private Recycling of Solid Waste in Fukui Prefecture” Kobayashi, K., Westlund, H. and Jeong, H.(eds.) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas Vol. 6*, MARG (Marginal Areas Research Group), pp. 303-314, 2011/2

2-2. 著書

小林茂, 鳴海邦匡, 波江彰彦(編)『日本地理学の組織と活動—総合地理研究会と皇戦会—』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2010/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

波江彰彦 『『情報資源の分析からみえてくること』へのコメント—外邦図研究をふまえて—』外邦図研究グループ『外邦図研究ニューズレター』8, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, pp. 46-50, 2011/3

2-4. 口頭発表

波江彰彦 「大都市における 1990 年代以降のごみリサイクルの推移」人文地理学会大会, 人文地理学会, 立教大学, 2011/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 30-31, 2011/11)

波江彰彦 「大阪におけるごみ問題の近現代」2011 年度立命館大阪プロムナードセミナー大阪・京都文化講座(後期):大阪・京都の風土と景観, 立命館大阪キャンパス, 2011/11

Namie, Akihiko, "International Trade of Recyclable Waste and Recycling of Waste in Japan" The 5th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, Tohoku University, 2010/11

波江彰彦, 廣川和花 「近代大阪における第一次ペスト流行」人文地理学会大会, 人文地理学会, 奈良教育大学, 2010/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 38-39, 2010/11)

山近久美子, 渡辺理絵, 波江彰彦, 鈴木涼子, 小林茂 「1900 年代ロシア、ドイツ作製中国地図と外邦図—アメリカ議会図書館所蔵地図の検討—」人文地理学会大会, 人文地理学会, 奈良教育大学, 2010/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 30-31, 2010/11)

小林茂, 多田元信, 林香絵, 波江彰彦 「外邦図を利用したアジア太平洋地域の景観変化研究の可能性」日本地理学会秋季学術大会, 日本地理学会, 名古屋大学, 2010/10(『日本地理学会発表要旨集』78, p. 60, 2010/10)

波江彰彦 「中西報告・相田報告・出田報告へのコメント—外邦図研究をふまえて—」シンポジウム「日本の歴史的時空間情報の現在」, 国際日本文化研究センター, 2010/9(『平成 19~22 年度 科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書 近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備』(研究代表者:山田奨治), pp. 112-114, 2011/3)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010 年度~2012 年度、若手研究(B)、代表者:波江彰彦

課題番号: 22720308

研究題目: 国際資源循環が日本の廃棄物リサイクルに及ぼす影響に関する研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2011 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

国際資源循環が日本の廃棄物リサイクルに与えている影響やそれによって起きている変動を明らかにする。日本が本格的にリサイクルに取り組み始める1990年代から国際資源循環が拡大・活発化した2000年代までの推移を追究する。再生資源のフローと廃棄物リサイクルにかかわるステークホルダに注目して分析を進める。日本国内・日本対国外・国内の大都市地域という異なる地域スケールで起きているそれぞれの現象にアプローチし、多方面の検討から日本の廃棄物リサイクルに関する統合的な理解を目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・2010 年大会準備委員

2010 年 11 月~2010 年 11 月

人文地理学会・企画委員

2009 年 11 月~2011 年 10 月

2-12 日本文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一、加藤 洋介

講師：合山林太郎

助教：勢田 道生

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65	10	19	2	0	3	0	4	1

※うち留学生 24 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	*学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	14	7	0	5	0
2011	18	5	0	3	0
計	32	12	0	8	0

*国語学と合わせて

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での

口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修士生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本の会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年1回解題を付して展示公開し、またWeb上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼があった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7月、11月に院生発表会を、10月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

大学院では、高専教員1名、本学助教に1名、それぞれ就職が決定した。また学振特別研究員DC2に1名採用が決定、博士前後期課程や学部卒業生も含めて中高教員に8名、新聞社に1名が就職している。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて38本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も44本を数えるという状況にある。

2. 研究

科研費による研究プロジェクトとしては「近世上方文壇における人的交流の研究」(2011～)、「定家本源氏物語・伊勢物語の本文成立史に関する横断的研究」(～2010)、「定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究」(2011～)「野口寧斎についての基礎的研究、及び漢詩を中心とする明治文学についての考察」(～2010)、「森槐南を中心とする幕末・明治期日本漢文学の研究」(2011～)、「近世成立の南朝関係の史書に関する文献学的・史料論的研究」等を行った。

2010年1月および2011年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』94(10年6月)、95(10年12月)、96(11年6月)・97(11年12月)輯を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、それぞれの研究誌である『詞林』47号(10年4月)・48号(10年10月)・49号(11年4月)・50号(11年10月)、『阪大近代文学研究』第9号・10号(11年3月・12年3月)を刊行した。

3. 社会連携

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。「懐徳堂古典講座」にそれぞれ教員が(10年4月～12月加藤、11年4月～12月加藤)講師として出講した。他にも「立命館大阪プロムナードセミナー 大阪・京都文

化講座」(10年5月加藤・合山、6月飯倉・出原)、放送大学大阪学習センター(11年12月加藤)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても十分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	5	3	8
2011	3	0	3
計	8	3	11

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

井真弓	「中世王朝物語における包摂と隠蔽の方法論」2011/3 主査：加藤洋介 副査：出原隆俊、飯倉洋一
木下美佳	「『伊勢物語』の生成と享受」2011/3 主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一、岡島昭浩
坂井二三絵	「明治期の文学における〈装い〉—夏目漱石を中心に—」2011/3 主査：出原隆俊 副査：清水康次、合山林太郎
丹下暖子	「中世初期宮廷女流文学の研究」2011/3 主査：加藤洋介 副査：金水敏、合山林太郎
根来尚子	「其角と蕉門俳諧の研究」2011/3 主査：飯倉洋一 副査：金水敏、合山林太郎
勢田道生	「南朝に関する歴史の創造と受容についての研究」2011/9 主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一、合山林太郎
西尾元伸	「泉鏡花作品における〈点景〉—作品の創作手法をめぐって—」2012/3 主査：出原隆俊 副査：清水康次、合山林太郎

野上潤一 「中世後期学問史研究序説—〈書物のウェブ／知のネットワーク〉と交叉する学問の諸相をめぐって—」2011/3
主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一、合山林太郎

【論文博士】

佐藤秀明 「三島由紀夫の文学」2010/4
主査：出原隆俊 副査：清水康次、加藤洋介

出原隆俊 「異説・日本近代文学」2010/10
主査：飯倉洋一 副査：清水康次、加藤洋介

富田（渡辺）志津子 「播磨の俳人たち」2011/3
主査：飯倉洋一 副査：出原隆俊、加藤洋介

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	3(3)	0(0)	12(2)	0(0)	7(3)	22(8)
2011	1(1)	1(0)	13(6)	0(0)	1(1)	16(8)
計	4(4)	1(0)	25(8)	0(0)	8(4)	38(16)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	1	3	14	0	0	18
2011	4	7	15	0	0	26
計	5	10	29	0	0	44

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)著書

【2010年度】

〔博士後期〕

武井和人・木下美佳編『一条兼良自筆 伊勢物語愚見抄 影印・翻刻・研究』, 2011/1

(2)論文

【2010年度】

〔博士前期〕

仲沙織 「鞍の色にまよふ人」は誰か—『懐硯』巻二の四における謡曲「梅枝」の影響—『上方文藝研究』7, pp. 20-29, 2010/6

宮川真弥 『枕草子春曙抄』における『清少納言枕草紙抄』の影響について—『徒然草文段抄』所引『枕草子』を手掛りとして—『解釈』（解釈学会）, 56-9・10, pp. 37-45, 2010/10

ナルバンディアン・カリナ 「Female Anger in the literature of Heian period」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 47, pp. 53-69, 2010/4

〔博士後期〕

- ウィリヤェナワット・ピヤヌット「夏目漱石『彼岸過迄』—「平凡」の中に閉ざされる青年たち—『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 9, pp. 9-23, 2011/3
- カナパット・ルーンピロム「真名本『曾我物語』における北条政子の説話—苦悩の克服の様相—『日本研究論集』(大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会), 2, pp. 1-26, 2010/10
- 木下美佳『伊勢物語愚見抄』の『伊勢物語』理解 山本登朗編『伊勢物語 成立と享受 2 伊勢物語 享受の展開』(竹林舎), pp. 71-90, 2010/5
- 金昌哲『通俗西湖佳話』の翻訳方法について『語文』(大阪大学国語国文学会), 95, pp. 23-35, 2010/12
- 高嶋藍『とははずがたり』の恩一伏見再会の場面を視座として—『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 47, pp. 27-36, 2010/4
- 丹下暖子『讃岐典侍日記』下巻の成立背景—堀河天皇追慕と天皇の代替わり—『語文』(大阪大学国語国文学会), 94, pp. 1-10, 2010/6
- 丹下暖子「女性の日記と和歌—『蜻蛉日記』上巻を中心に—」『研究者海外派遣基金助成金(組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成 21 年度公募)「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」大阪大学・チューラーロンコーン大学・国際ワークショップ「日本・タイ相互交流の文学研究のために」報告・論文集, pp. 27-32, 2011/3
- 西尾元伸「泉鏡花『霊象』論—(救出劇)を経て「盲人」の見たもの—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 94, pp. 20-32, 2010/6
- 野上潤一『聖徳太子御憲法玄恵註抄』の『燈前夜話』利用についての覚書—清原宣賢抄物利用との差異から—『古代中世文学論考』(新典社古代中世文学論考刊行会), 24, pp. 231-271, 2010/8
- 野上潤一「内部徴証による『太平記鈔』日性編者説の再検討—『太平記鈔』生成の一端と法華宗僧の学問の一隅をめぐって—」『国語国文』(京都大学文学部国語学国文学研究室), 79-8, pp. 18-35, 2010/8
- 野上潤一『太平記鈔』と『徒然草寿命院抄』と『太平記賢愚抄』—慶長年間の学問の一隅をめぐって—『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 87-12, pp. 52-65, 2010/12
- 野上潤一『太平記鈔』・『徒然草寿命院抄』と『謡抄』—『謡抄』享受をめぐる文化圏と慶長年間の学問の一隅をめぐって—『古代中世文学論考』(新典社古代中世文学論考刊行会), 25, pp. 241-272, 2011/3
- 野上潤一「文明本『節用集』と『燈前夜話』—文明本『節用集』の生成/増補の一端と禅林の学問の一隅をめぐって—」『古代中世文学論考』(新典社古代中世文学論考刊行会), 25, pp. 273-302, 2011/3
- 白雨田『源氏物語』における「岩根の松」について—賀歌の変容—『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 48, pp. 1-17, 2010/10
- 宮本正章「与謝野晶子『新訳源氏物語』の成立—その本文生成に依拠したテキストは何であったかを中心として—」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 48, pp. 48-65, 2010/10
- モハマッド・モインウッディン「志賀直哉『十一月三日午後の事』をめぐる—他者へのまなざし—」『日本研究論集』(大阪大学大学院文学研究科日本文学研究室・チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座), 2, pp. 144-165, 2010/10
- モハマッド・モインウッディン「SCATTERED SOLDIERS, SMOKE and GUNPOWDER in Shiga Naoya's Novella Jūichi Gatsu Mikka gogo no koto」ウニタサチダナンド・水川富美子編『The Pen and The Sword: War Literature in Asia』(Indo-Japan Association for Literature and Culture, India), pp. 26-33, 2010
- モハマッド・モインウッディン「Notion of 'Self': Egoism in Shiga Naoya's wakai」ウニタサチダナンド編『Japanese Literature - The Indian Mirror』(Indo-Japan Association for Literature and Culture, India), pp. 114-126, 2010
- モハマッド・モインウッディン「志賀直哉『流行感冒』論—「自己」と「他者」を中心に—」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 9, pp. 24-40, 2011/3

【2011 年度】

〔博士前期〕

- 藪根知美「曲亭馬琴『三七全伝南柯夢』考—「三すぢの糸」に導かれる物語—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 97, pp.

28-40, 2011/12

〔博士後期〕

- 康盛国「雨森芳洲「少年行」と李白の詩」『日本研究論集』（大阪大学大学院文学研究科日本文学研究室・チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座）, 4, pp. 31-39, 2011/10
- 康盛国「『雨森芳洲・鵬海詩集』諸本の考察」『混沌』35, pp. 24-42, 2011/12
- 伊川健二・合山林太郎・小野潤子・康盛国「文学研究科共同研究「中近世日朝交流史の学際的研究」活動報告」『待兼山論叢』（大阪大学文学会）文化動態論編, 45, pp. 1-13, 2011/12
- 金命姫「樋口一葉『軒もる月』論—「十二通の文」との対峙—」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会）, 10, pp.1-15, 2012/3
- 莊千慧「漱石における心霊主義の受容—「哲学雑誌」を踏まえて—」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会）, 10, pp. 16-35, 2012/3
- テン・アリナ「『後撰和歌集』における七夕歌」『日本研究論集』（大阪大学大学院文学研究科日本文学研究室・チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座）, 4, pp. 12-18, 2011/10
- 田泉「大江文学における重複と変容—「奇妙な仕事」と「死者の奢り」を中心に—」『日本研究論集』（大阪大学大学院文学研究科日本文学研究室・チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座）, 4, pp. 64-82, 2011/10
- 田泉「大江健三郎『奇妙な仕事』論—犬の表象をめぐって—」『異文化コミュニケーションのための日本語教育（予稿集）』（高等教育出版社）, p. 908, 2011/8
- 西村真由美「宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』論—窓を蹴破る時—」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会）, 10, pp. 49-66, 2012/3
- 野上潤一「『五常内義抄』の享受と『聖徳太子御憲法玄恵註抄』（上）—『五常内義抄』と憲法学の交叉をめぐって—」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 50, pp. 30-59, 2011/10
- 野上潤一「清原宣賢抄物と『燈前夜話』—手控本生成の一端と講釈における利用をめぐって—」『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室）, 81-3, pp. 17-32, 2012/3
- 松本大「『河海抄』における『紫明抄』引用の実態について—引用本文の系統特定と注記の受容方法について—」『語文』（大阪大学国語国文学会）, 96, pp. 31-43, 2011/6
- 松本大「河内方の源氏学と『河海抄』—内閣文庫蔵十冊本『紫明抄』巻六卷末の『水原抄』抜き書き群をめぐって—」前田雅之編『中世の学芸と古典注釈 中世文学と隣接諸学 5』（竹林舎）, pp. 475-495, 2011/9
- 松本大「『河海抄』における歌学書引用の実態と方法—顕昭の歌学を中心に—」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 50, pp. 14-29, 2011/10
- ルーンピロム・カナパット「真名本『曾我物語』における大磯の虎—苦悩の克服と愛執の様相—」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 49, pp. 45-55, 2011/4
- ルーンピロム・カナパット「延慶本『平家物語』における二位殿・平時子—苦悩の様相と平家一門の後世救済に対する役割—」『語文』（大阪大学国語国文学会）, 97, pp. 1-13, 2011/12

(3)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

- 瓦井裕子「『源氏物語』における季節—暦月意識から逸脱する箇所をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第224回例会, 2010/8/28
- 坂之上紗織「宇津保物語』における姫の位置づけ」大阪大学古代中世文学研究会第222回例会, 2010/6/27
- 仲沙織「『新可笑記』巻四の一「船路の難儀」考」京都近世小説研究会2月例会, 2010/2/19
- 宮川真弥「『枕草子春曙抄』『清少納言枕草紙抄』の「原拠本」をめぐって」大阪大学古代中世文学研究会第220回例会, 2010/4/24

〔博士後期〕

カナバット・ルーンピロム「真名本『曾我物語』における大磯の虎—愛執の機能」大阪大学古代中世文学研究会第 226 回例会, 2011/2/19

木下美佳「新出本・一条兼良自筆『伊勢物語愚見抄』について」中古文学会関西西部会第 25 回例会, 2010/6/26

木下美佳「『伊勢物語愚見抄』初稿本の再検討」大阪大学古代中世文学研究会第 221 回例会, 2010/5/16

高嶋藍「『とはずがたり』における後深草院御幸—御所にいない院—」大阪大学古代中世文学研究会第 225 回例会, 2010/10/31

丹下暖子「七夕歌をめぐって」大阪大学古代中世文学研究会第 223 回例会, 2010/7/31

丹下暖子「女性の日記と和歌—『蜻蛉日記』を中心に—」大阪大学・チューラーロンコーン大学日本語セッションワークショップ, 2010/12/16

野上潤一「『太平記鈔』『徒然草寿命院抄』と『謡抄』—『謡抄』享受をめぐる文化圏と学問の一隅をめぐる—」2010 年度中世文学会春季大会, 2010/5/30

野上潤一「文明本『節用集』と『燈前夜話』—文明本『節用集』の生成／増補と禅林の学問の一隅をめぐる—」大阪大学古代中世文学研究会第 224 回例会, 2010/8/28

松本大「『河海抄』の諸本異同と注記内容の関係について」大阪大学古代中世文学研究会第 222 回例会, 2010/6/27

松本大「諸注釈書に対する『河海抄』の態度—『紫明抄』引用を中心として—」平成 23 年度大阪大学国語国文学会総会, 2011/1/8

松本大「河内家の源氏学と『河海抄』—内甲本『紫明抄』巻六巻末所引の『水原抄』逸文をめぐる—」大阪大学古代中世文学研究会第 227 回例会, 2011/3/26

宮本正章「中谷文雄氏蔵 与謝野晶子「源氏物語礼讃」(巻物)の紹介と「礼讃」の成立について」大阪大学古代中世文学研究会第 226 回例会, 2011/2/19

村山識「後宇多院の和歌関係事跡—詠歌集成とその分析—」大阪大学古代中世文学研究会第 220 回例会, 2010/4/24

モハマッド・モインウッディン「志賀直哉『流行感冒』論—自己の行方—」近代文学研究会, 京都府立大学, 2010/12/18

【2011 年度】

〔博士前期〕

坂之上紗織「『新古今和歌集』の「夢」をめぐって」大阪大学古代中世文学研究会第 228 回例会, 2011/5/21

坂之上紗織「『新古今和歌集』当代歌人詠にみる撰歌態度」大阪大学古代中世文学研究会第 233 回例会, 2011/11/23

瓦井裕子「『源氏物語』薄雲巻巻末における「遣水の蛭に見えまがふもをかし」の表現をめぐって」大阪大学古代中世文学研究会第 229 回例会, 2011/7/2

〔博士後期〕

康盛国「雨森芳洲「少年行」と李白の詩」第 2 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2011/5/27

合山林太郎・康盛国「李学達「草梁倭館詞」について—十九世紀朝鮮実学者の記した倭館・日本—」和漢比較文学会大会第 30 回, 2011/9/25

康盛国「『橘窓茶話』に表れたる雨森芳洲の漢詩観」日本近世文学会秋季大会, 2011/10/1

康盛国「釜山大学校との共同セミナー「同/異としての草梁倭館」についての報告」ワークショップ近世日本と倭館・朝鮮—研究の現在と展望(主催:2011 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「朝鮮漢文学と中近世の日本」研究グループ), 2012/3/2

金起台「『枕草子』の日記回想的章段の考察—単語と人物の使用法を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第 228 回例会, 2011/5/21

金起台「『枕草子』の日記回想的章段に表れた執筆意識の変化」大阪大学古代中世文学研究会第 235 回例会, 2012/1/21

金侖姫「樋口一葉『ゆく雲』論—末尾の解釈をめぐる—」平成 24 年度大阪大学国語国文学会総会, 2012/1/7

テン・アリナ「『拾遺和歌集』における七夕歌」大阪大学古代中世文学研究会第 229 回例会, 2011/7/2

テン・アリナ「屏風歌における七夕詠」大阪大学古代中世文学研究会第 234 回例会, 2011/12/23

- 田泉「大江健三郎『死者の奢り』論—「僕」の孤独をめぐって—」第2回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2011/5/27
- 田泉「大江健三郎「見るまえに跳べ」論」第11回日本語日本文化教育研究会, 2011/7/9
- 田泉「大江健三郎『奇妙な仕事』論—犬の表象をめぐって—」2011世界日本語教育研究大会, 2011/8/21
- 仲沙織「『新可笑記』「舟路の難義」における〈隅田川物〉の利用」日本近世文学会平成23年度春季大会, 2011/6/11
- 仲沙織「『新可笑記』巻五の二「みれば正銘にあらず」考」平成24年度大阪大学国語国文学会総会, 2012/1/7
- 野上潤一「中国史抄物『燈前夜話』の享受について—非抄物典籍における禅林抄物の利用と中世後期の学問の一隅をめぐって—」2011年度説話文学会大会, 2011/6/26
- 野上潤一「一条兼良『代始和抄』の享受と清原宣賢『日本書紀抄』断章—宣賢の吉田兼俱説集聚の一端と中世後期の学問の一隅をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第235回例会, 2012/1/21
- 松本大「『花鳥余情』が求めたもの—引歌注記から見える注釈的特徴—」大阪大学古代中世文学研究会第232回例会, 2011/10/23
- 松本大「『花鳥余情』の引歌注記—兼良の文脈理解と施注方法—」中古文学会関西西部会第30回例会, 2011/11/26
- 松本大「『花鳥余情』の「源氏の詞をとりてよめる歌」」大阪大学古代中世文学研究会第237回例会, 2012/3/17
- 宮川真弥「北村季吟の古典注釈の—様相—『枕草子春曙抄』漢籍関連注記を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第230回例会, 2011/8/7
- 宮川真弥「修訂と口訣と—季吟の注釈活動の一斑について—」大阪大学古代中世文学研究会第236回例会, 2012/2/18
- 宮本正章「橋本公夏の「源氏物語各卷所懐の和歌」を読む—『源氏作例秘訣』を参照して—」大阪大学古代中世文学研究会第236回例会, 2012/2/18
- ルーンピロム・カナパット「延慶本『平家物語』における平重衡をめぐる女性たち—再会・出会いと重衡救済—」大阪大学古代中世文学研究会第233回例会, 2011/11/23

(4)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔博士前期〕

- 青山絵美「紹介 堤和博著『和歌を力に生きる—道綱母と蜻蛉日記』『語文』(大阪大学国語国文学会), 94, p. 59, 2010/6
- 仲沙織「紹介 富田志津子著『播磨の俳人たち』『語文』(大阪大学国語国文学会), 95, p. 65, 2010/12

〔博士後期〕

- 白雨田訳「福田哲之「水泉子漢簡七言本《蒼頡篇》考—在《説文解字》以前小學書中的位置」(『簡帛網』(武漢大学簡帛研究中心), 2010/11
- 松本大「紹介 川崎佐知子著『狭衣物語』享受史論究』『語文』(大阪大学国語国文学会), 95, pp. 66-67, 2010/12
- モハマド・モインウッディン「翻訳(ヒンディー語—日本語): Poems by Dr. Yasmin Sultana Naqvi」, 『SAKURA KI BAYAR - Bharat-Japan Samanvay manch ka prayas』, 4, Kitab Mahal publication, Allahabad (インド), p. 85, 2010/10-12
- モハマド・モインウッディン、「Sahitya: Vikas ka Pratik」, 『SAKURA KI BAYAR - Bharat-Japan Samanvay manch ka prayas』, 4, Kitab Mahal publication, Allahabad (インド), pp. 18-19, 2010/10-12

【2011年度】

〔博士後期〕

- 高嶋藍「紹介 武井和人・木下美佳編『一条兼良自筆 伊勢物語愚見抄 影印・翻刻・研究』『語文』(大阪大学国語国文学会), 97, p. 72, 2011/12
- 宮本正章「紹介 伊井春樹著『与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」』『語文』(大阪大学国語国文学会), 97, pp. 67-68, 2011/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)
2011年度 PD:1名 DC2:1名 DC1:0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)
2011年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

勢田道生 博士後期課程, 大阪大学, 助教, 2010/4
中井賢一 研究生, 宇部高専, 准教授, 2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9名

2010年度:3名 2011年度:6名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 8名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2010年度:0名 2011年度:1名

9. 刊行物

2010年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第9号
『語文』(大阪大学国語国文学会)第94輯・第95輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第47号・第48号
『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第7号
2011年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第10号
『語文』(大阪大学国語国文学会)第96・97輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第49号・第50号
『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第8号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

2010年度

大阪大学国語国文学会総会

2011年1月8日

2011年度

和漢比較文学会例会(西部)

2011年4月23日

中古文学会関西支部会

2011年9月10日

大阪大学国語国文学会総会

2012年1月7日

[国際研究集会の開催]

第2回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会

2011年5月27日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2010年度：第220回	4月14日	第221回	5月16日	第222回	6月27日
第223回	7月31日	第224回	8月28日	第225回	10月31日
第226回	2月19日	第227回	3月26日		
2011年度：第228回	5月21日	第229回	7月2日	第230回	8月7日
第231回	9月4日	第232回	10月23日	第233回	11月23日
第234回	12月23日	第235回	1月21日	第236回	2月18日
第237回	3月17日				

上方読本を読む会

2010年度：4月24日 6月5日 7月31日 9月11日 10月16日 1月22日 3月26日
2011年度：5月21日 6月25日 7月30日 10月8日 1月21日 3月10日

『上方文藝研究』合評会

2011年度 2011年6月24日

「近世風俗文化の形成—忍頂寺務と忍頂寺文庫・小野文庫—」シンポジウム

2010年10月30日

「近世日本と倭館・朝鮮—研究の現在と展望—」ワークショップ

2012年3月2日

[事務局]

2009年度～2010年度 中古文学会関西支部事務局

2010年度～2011年度 日本近世文学会事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。博士(文学)。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

1-1. 論文

出原隆俊「芥川の鷗外受容の一面—『偷盗』・『孤独地獄』と『黄金杯』・『百物語』—」福岡女子大学国文学会『香椎鴻』(福岡女子大学国文学会), 56, pp. 43-55, 2012/3

出原隆俊「横光の鷗外翻訳作品等の利用について」大阪大学近代文学研究会『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 9, pp. 1-8, 2011/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

出原隆俊「鷗外自作・翻訳作品借用の近代文学史—芥川『偷盗』を中心に—」日本比較文学会 2011年度関西大会, 於・大阪大学, 2011/11/26

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1994年4月～現在に至る

2. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻:日本近世文学。

2-1. 論文

飯倉洋一 『『近代歌謡考説』とその周辺』国文学研究資料館公募共同研究成果報告書『近世風俗文化の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺』国文学研究資料館, pp. 159-168, 2012/3

飯倉洋一, 濱住真有 「中井履軒・上田秋成合賛鶉図について」『懷徳堂研究』5, 大阪大学文学研究科懷徳堂研究センター, pp. -3, 2012/2

飯倉洋一 「秋成の晩年と浄瑠璃—『胆大小心録』『春雨物語』を中心に—」『近松研究所紀要』21, 園田女子学園近松研究所, pp. 1-10, 2010/12

飯倉洋一 「交誼と報謝—秋成晩年の歌文—」『語文』95, 大阪大学国語国文学会, pp. 12-22, 2010/12

飯倉洋一 「秋成における古今集序の引用—『ぬば玉の巻』から『春雨物語』まで』『国文学解釈と鑑賞』75-8, ぎょうせい, pp. 38-45, 2010/8

2-2. 著書

飯倉洋一(共編著) 『大阪大学附属図書館所蔵忍頂寺文庫目録』大阪大学附属図書館, 136p., 2011/3

飯塚一幸, 湯浅邦弘, 飯倉洋一(共編) 『懷徳堂記念会百年誌』懷徳堂記念会, 188p., 2010/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

柏木加代子, 飯倉洋一 「ニース・シュレ美術館所蔵『北斎漫画』についての調査報告」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』56, 京都市立芸術大学, pp. 3-15, 2012/3

飯倉洋一 「韓国で進む日本文学研究」『産経新聞』産経新聞社, p. 4, 2011/10

飯倉洋一 「逆境こそチャンス」『西鶴と浮世草子研究』5, 笠間書院, pp. 350-351, 2011/6

飯倉洋一 「上方文藝研究の現在(8)」『上方文藝研究』8, 上方文藝研究会, pp. 108-109, 2011/6

飯倉洋一 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究—2010年度—」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』5, 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館, pp. 5-7, 2011/3

飯倉洋一(書評) 「大高洋司『京伝と馬琴(稗史もの)読本様式の形成』」『図書新聞』図書新聞, p. 3, 2011/1

飯倉洋一(書評) 「高田衛著『春雨物語論』」『日本文学』59-7, 日本文学協会, pp. 78-79, 2010/8

飯倉洋一 「上方文藝研究の現在 7 上方読本を読む会」『上方文藝研究』7, pp. 71-72, 2010/6

飯倉洋一 「畸人秋成の世界 9」『京都新聞』京都新聞社, p. 10, 2010/6

飯倉洋一 「畸人秋成の世界 11」『京都新聞』京都新聞社, p. 9, 2010/6

飯倉洋一 「畸人秋成の世界 13」『京都新聞』京都新聞社, p. 10, 2010/6

2-4. 口頭発表

飯倉洋一 「神医への報謝—谷川家蔵秋成遺墨の世界」柿衛文庫企画展「神医と秋成」記念講演会, 財団法人柿衛文庫, 2012/3

飯倉洋一 「上田秋成・中井履軒合賛鶉図について」京都近世小説研究会, 京都近世小説研究会, 2011/11

飯倉洋一, 濱住真有 「中井履軒・上田秋成合賛鶉図について」懷徳堂アーカイブ講座, 財団法人懷徳堂記念会, 2011/11

飯倉洋一 「妙法院宮文芸サロン—異色の親王とその周囲の人々」2011 年度立命館大阪プロムナードセミナー『大阪・京の文彩—
文学が織りなす二都のすがた—』, 大阪大学 21 世紀懷徳堂・立命館大学文学部・立命館大学大阪オフィス, 2011/6

飯倉洋一 「妙法院宮文芸サロンと蘆庵文庫」近世における蔵書形成と文芸享受」平成 23 年度第 1 回共同研究会, 人間文化研
究機構・国文学研究資料館, 2011/5

飯倉洋一 「偽りと倫理—上田秋成の晩年」教育研究フォーラム, 大阪大学文学研究科, 2010/12

飯倉洋一 「「菊花の約」試解—尼子経久の役割—」第1回上田秋成を語る, 「上田秋成を語る会」, 2010/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一・大谷俊太・加藤弓枝・神作研一・盛田帝子・山本和明 第6回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞, 雄松堂書店,
2010/10

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯倉洋一

課題番号: 22320048

研究題目: 近世上方文壇における人的交流の研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

2011 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 480,000 円

研究の目的:

本研究は、近世上方(京都・大阪)文壇におけるさまざまな人的交流について、従来の個々の人物研究・文壇史研究を総合的に把握した上で、「近世上方文壇の人物相互交流データベース」・「近世上方文壇における人的交流年表」の作成を基盤としながら、上方と江戸、上方と地方、京都と大阪、堂上と地下、文学と書画、雅文壇と俗文壇などの越境的交流にとくに注目し、多角的な視点からこれを分析・検討し、近世文学史・近世文化史へのあらたな視座を提示することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2008 年度～2010 年度、その他共同研究、助成金獲得者:飯倉洋一

助成金名: 人間文化研究機構国文学研究資料館公募研究

研究題目: 近世風俗文化の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺—

助成団体名: 人間文化研究機構国文学研究資料館

助成金額: 2010 年度 直接経費 1,362,000 円

研究の目的:

本研究は、音曲をはじめとする近世風俗文化研究に多大な業績を残した故忍頂寺務の研究を再確認・再評価し、とくに近世風俗文化研究のあらたな展開のための基礎的研究を行うことを目的とする。

具体的な目的として以下の 4 点をあげたい。

1 忍頂寺務旧蔵書の近世風俗文化史研究上の意義解明 2 忍頂寺務草稿の翻字と刊行 3 忍頂寺務の近世風俗文化史の再評価 4 昭和前期までの近世風俗文化史形成のネットワーク的復元

2-8. 外部役員等の引き受け状況

公益財団法人柿衛文庫・理事	2012年3月～現在に至る
「対馬宗家文書史料」調査員	2011年8月～2011年8月
日本近世文学会・事務局代表	2010年8月～現在に至る
園田女子学園大学近松研究所・評議員	2009年4月～現在に至る
財団法人柿衛文庫・柿衛賞選考委員	2007年6月～現在に至る
上方文化芸能協会・運営委員	2005年7月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・共同研究員	2004年4月～現在に至る
財団法人懐徳堂記念会・運営委員幹事	2003年4月～現在に至る
日本近世文学会・常任委員	2002年6月～2012年6月
日本近世文学会・委員	2000年6月～現在に至る
柳川市・柳川市史専門研究員	1995年4月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・文献資料調査員	1993年4月～現在に至る

3. 加藤 洋介 教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授、大阪大学准教授を経て、2010年10月より現職。専攻：日本平安文学。

3-1. 論文

-
- 加藤洋介 「河内本源氏物語の本文成立事情―手習巻再説―」高橋亨・久富木原玲・中根千絵(共編)『武家の文物と源氏物語 絵』翰林書房, pp. 107-115, 2012/3
- 加藤洋介 「失われた定家本源氏物語―飯島本桐壺巻の場合―」大阪大学古代中世文学研究会(編)『詞林』50, pp. 1-13, 2011/10
- 加藤洋介 「奥入付載の定家本源氏物語―飯島本若菜下・夕霧・総角巻の場合―」森一郎・岩佐美代子・坂本共展(共編)『源氏物語の展望』10, 三弥井書店, pp. 342-381, 2011/9
- 加藤洋介 「奥入付載の定家本源氏物語―第二次奥入付載本の場合―」大阪大学国語国文学会(編)『語文』96, pp. 13-30, 2011/6
- 加藤洋介 「奥入付載の定家本源氏物語―飯島本藤袴巻の場合―」大阪大学古代中世文学研究会(編)『詞林』48, pp. 34-47, 2010/10
- 加藤洋介 「室町期『伊勢物語』書写の一樣相―伝肖柏筆本・伝心敬筆本・坊所鍋島家本の三伝本をめぐって―」山本登朗(編)『伊勢物語 享受の展開』, 竹林舎, pp. 8-30, 2010/5

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

-
- 加藤洋介 「奥入付載の定家本源氏物語(二)―飯島本藤袴巻を中心に―」中古文学会関西部会 第二十六回例会, 大阪大谷大学, 2010/9(『中古文学会関西部会会報』9, p. 6, 2011/3)
- 加藤洋介 「定家本源氏物語研究の可能性」名古屋大学国語国文学会 春季大会シンポジウム, 名古屋大学, 2010/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号: 20520162

研究題目: 定家本源氏物語・伊勢物語の本文成立史に関する横断的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、池田亀鑑『源氏物語大成』の青表紙本校異および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』・山田清市『伊勢物語校本と研究』という伊勢物語の三校本の補訂および増補作業を基盤とする。その作業の過程において、本文変化の様相や音便・表記といった点について、定家本伊勢物語における本文変化を時系列上で捉え、もってそれを定家本源氏物語の検証へと資することを目的とする。この研究目的を遂行するため、上記の校本所収伝本の調査および収集を行ない、補訂および増補作業を実行する。

3-6-2. 2011年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号: 23320052

研究題目: 定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究

研究経費: 2011年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

本研究は、定家本伊勢物語と源氏物語の展開の様相を横断的に検証することによって、唯一の定家自筆本を復原するのではない、新たな定家本伊勢物語・源氏物語の本文形成史を構築しようとするものである。

伊勢物語・源氏物語の本文異同状況を確認する校本としては、池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』(1953～56年、以下『大成』と略称)、および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』(1933年)・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』(1961年)・山田清市『伊勢物語校本と研究』(1977年)(以下「伊勢物語の三校本」と略称)がある。しかしながら今日の研究環境から見て、これらは校本としての精度が低いと言わざるをえず、また数多く現存する室町期写本のデータが組み込まれていないため、源氏物語であれば、複数存在したであろう定家本の実態を捕捉できず、伊勢物語の場合では、伝本に恵まれた天福本や武田本は復原可能であるものの、流布本(根源本)と称される一群の定家本について、ほとんど研究の進展が見られない。

したがって本研究ではまず『大成』および「伊勢物語の三校本」を修正し、これまで等閑視されてきた室町期写本のデータを新たに加え、「表記・改行・音便」といった新たな視点を導入することによって、定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開の実相に迫ることを目的としている。両作品を横断的に検討し、伊勢物語から知られる定家本のヴァリエーションを源氏物語にも応用し、源氏物語から知られる「表記・改行・音便」の特徴を伊勢物語の側にも適用してみるという方法によって、伊勢物語・源氏物語双方の問題解明を図ろうとするのである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・編集委員	2011年4月～現在に至る
中古文学会・常任委員	2011年4月～現在に至る
中古文学会関西部会・事務局代表	2009年4月～2011年3月
中古文学会・委員	2007年4月～現在に至る
和歌文学会・委員	2007年4月～現在に至る

4. 合山 林太郎 講師

1977年生。2009年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。博士(文学)(東京大学、2010年)。国立国会図書館勤務を経て、2009年4月より現職。専攻:日本漢文学(近世・近代)。

4-1. 論文

合山林太郎 「幕末京撰の漢詩壇-広瀬旭莊・河野鉄兜・柴秋村を中心に」『日本文学』(日本文学協会), 60-10, pp. 30-39, 2011/10

合山林太郎 「森槐南の王漁洋批評-『漁洋山人精華録訓纂』への自筆書入れ翻刻』雲英末雄(編)『江戸書物の世界-雲英文庫を中心にたどる』笠間書院, pp. 848-856, 2010/10

合山林太郎 「幕末明治期の詠物詩-大沼枕山一派の詩風をめぐって-」『語文』(大阪大学国語国文学会), 94, pp. 11-19, 2010/6

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

合山林太郎(解説)「石濱文庫所蔵日本漢詩文関係文献についての覚書」堤一昭(編)『石濱文庫の学際的研究-大阪の漢学から世界の東洋学へ』(大阪大学大学院文学研究科 堤一昭研究室), pp. 12-13, 2012/3

合山林太郎, 山本悠子(資料紹介)「[稿本]『訪書雑録』飯倉洋一(編)『近世風俗文化の形成-忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺』(国文学研究資料館), 44, 適塾記念会, pp. 595-651, 2012/3

合山林太郎(解説)「鷗外の脳内」山崎一穎(編)『森鷗外-近代文学の傑人(別冊太陽 日本のこころ 193)』平凡社, pp. 135-147, 2012/2(東京大学附属図書館「鷗外文庫 書入本画像データベース」作業チームによる解題執筆協力有り。)

合山林太郎(資料紹介)「適塾をめぐる詩と書 第1回 適塾は豈唯に風月のみならんや 福沢諭吉」『適塾』44, 適塾記念会, pp. 107-109, 2011/12

伊川健二, 合山林太郎, 小野潤子, 康盛国(共編)「文学研究科共同研究「中近世日朝交流史の学際的研究」共同報告」『待兼山論叢・文化動態論編』(大阪大学文学会), 45, pp. 1-13(共同報告 pp. 7-9 担当), 2011/12

合山林太郎(書評)「書評 田中邦夫著『漱石『明暗』の漢詩』」『日本近代文学』84, 日本近代文学会, pp. 156-159, 2011/5

合山林太郎, 鷲原知良(共著)(解題)「忍頂寺文庫蔵淡路・神戸関係日本漢詩文集資料解題」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(大阪大学大学院文学研究科 飯倉洋一研究室), 5, pp. 8-17, 2011/3

4-4. 口頭発表

合山林太郎 「近世日本文学研究における日朝文化交流への眼差し」ワークショップ「近世日本と倭館・朝鮮-研究の現在と展望」, 大阪大学「朝鮮漢文学と中近世の日本」研究グループ, 大阪大学, 2012/3

合山林太郎 「「草梁倭館詞」研究から見えるもの」ワークショップ「同・異としての草梁倭館」, 釜山大学校韓国民族文化研究所(主催) 同史学科・漢文学科(主管), 釜山大学校, 2012/1

合山林太郎 「井上哲次郎と明治一〇年代の漢詩-漢詩改良の具体相をめぐって」日本近代文学会11月例会, 日本近代文学会, お茶の水女子大学, 2011/11

合山林太郎, 康盛国 「李学達「草梁倭館詞」について-十九世紀朝鮮実学者の記した倭館・日本」和漢比較文学会第30回大会, 和漢比較文学会, 筑波大学, 2011/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2009年度～2010年度、研究活動スタート支援、代表者:合山林太郎

課題番号: 21820020

研究題目: 野口寧斎についての基礎的研究、及び漢詩を中心とする明治文学についての考察

研究経費: 2010年度 直接経費 960,000円 間接経費 288,000円

研究の目的:

明治中期に活躍した野口寧斎(1867-1905)の手稿などを含む寧斎関係の資料を網羅的に収集・整理し、寧斎の文芸活動の全貌や、彼を取り巻く文化圏の様相を明らかにした。また、野口家の資料を用い、幕末・明治期の漢詩壇之ネットワークを明らかにした。

4-6-2. 2011年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:合山林太郎

課題番号: 551946

研究題目: 森槐南を中心とする幕末・明治期日本漢文学の研究

研究経費: 2011年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

明治期を代表する漢詩人・漢学者である森槐南の業績全体を整理する。また、槐南の詩論や詩作から、近世・近代の日本漢文学に関して新たな見取り図を呈示した。さらに、槐南と清の文人などとの唱和を分析することで、明治期の東アジア文化交渉についても考察した。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

和漢比較文学会・常任委員	2011年9月～現在に至る
日本近世文学会・常任委員	2009年6月～2012年6月
和漢比較文学会・情報化委員	2006年1月～2011年9月

5. 勢田 道生 助教

1980年生。2010年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(2011年)。2010年4月より現職。専攻:日本中・近世文学。

5-1. 論文

勢田道生 「『北畠准后伝』と神戸能房編『伊勢記』『語文』(大阪大学国語国文学会), 97, 大阪大学国語国文学会, pp. 13-27, 2011/12

勢田道生 「津久井尚重の研学と交流一附・名古屋市蓬左文庫蔵『講席余話并抄出』翻刻一」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 50, 大阪大学古代中世文学研究会, pp. 60-73, 2011/10

勢田道生 「神戸能房編『伊勢記』の著述意図と内容的特徴」『待兼山論叢』44, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2010/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

勢田道生 「津久井尚重『南朝編年記略』における『大日本史』利用の前提」第 237 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学
古代中世文学研究会, 大阪大学, 2012/3

勢田道生 「津久井尚重の研学と交流—近世後期における南朝史享受の—様相—」第 227 回大阪大学古代中世文学研究会, 大
阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2011/3

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2010 年度～2011 年度、研究活動スタート支援、代表者: 勢田道生

課題番号: 22820037

研究題目: 近世成立の南朝関係の史書に関する文献学的・史料論的研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,140,000 円 間接経費 342,000 円

2011 年度 直接経費 930,000 円 間接経費 279,000 円

研究の目的:

近世において南朝というテーマは、思想・文学・史学など、人文的諸分野にまたがる大きな問題であった。そのような多様な南朝史受容の基盤にあったのは、近世に編纂された史書や軍書であったと考えられるが、従来、このような文献については、十分な検討がなされてこなかった。よって、本研究は、近世成立の南朝関係の史書について文献学的・史料論的検討を加えることにより、近世のさまざまな南朝史享受の基盤を明らかにするとともに、これに関わる知識人の交流や、文献の流通の実態を明らかにすることを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次

准教授：橋本 順光

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	1	8	0	0	0	0	0	2

※うち留学生 3名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	5	1	1	3	4
2011	6	0	0	1	0
計	11	1	1	4	4

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低 1 本の論文を執筆、大学院生は毎年最低 1 回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することを目標とする。大学院生には、日本学術振興会研究員のほか、機会に応じて学内・学外の研究資金や渡航奨励プログラムへの応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部では一コマ多く延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

院生は、ほぼ全員が 1 本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この 2 年で教員は、多数の論文を執筆した。科学研究費助成を新規に獲得し、研究分担者として新規に 4 つの共同研究に参加した。教員による科学研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会の研究員、学内外の助成やプログラムにも毎年申請した。その結果、頭脳循環、OVC などで院生の多くが海外で調査および研究発表を行った。研究室の設備備品は定期的に点検し、可動式書棚一式を購入し、メーリングリストを整備した。それによって、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

2011 年に、チュラロンコーン大学と共催し、日タイ比較文学を専門とする平松秀樹非常勤講師の講義と提携して、大阪大学でワークショップを行った。同年には、日本比較文学会関西大会を大阪大学で開催した。両者ともに、院生と教員が積極的に協力し、発表を行った。この 2 年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般書へ論考を寄稿し、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学会、ジャポニズム学会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会の幹事・編集委員など学外の職務に従事し、運営と社会還元努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文、修士論文、博士論文のいずれにおいても、一定水準以上の内容となっており、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

前述の活動の結果、目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	3	0	3
2011	1	0	1
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 李丞鎮 「金鶴泳文学の変遷—吃音から民族へ—」 2010/9
主査：橋本順光 副査：出原隆俊、中直一
- 朴利鎮 「安部公房のクレオール性—<引揚者>から<亡命者的>立場へ—」 2010/9
主査：橋本順光 副査：出原隆俊、中直一
- 張杭萍 「中国近代ユーモア文学の射程—漱石という「鏡」から—」 2011/3
主査：清水康次 副査：出原隆俊、橋本順光、大東和重（近畿大学）
- 藤田瑞穂 「イリヤ・カバコフ作品研究—物語性をめぐる考察—」 2012/3
主査：橋本順光 副査：清水康次、中直一、加須屋明子（京都市立芸術大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	2(2)	1(0)	3(3)	0(0)	2(0)	8(5)
2011	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	2(1)
計	3(3)	1(0)	3(0)	0(0)	3(0)	10(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	7	6	2	0	2	17
2011	10	7	0	0	0	17
計	17	13	2	0	2	34

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

李丞鎮「金鶴泳作品における「吃音」—象徴と変容」『日本語文学・第45輯』（韓国日本語文会），pp. 201-224, 2010/6
（査読有）

ガルワーン・リンダ「現代ロシア文学における芸者の表象—オルガ・ラズレワの『ロシア人芸者』を中心に—」『ロシア東欧学会会誌』第39号，ロシア東欧学会，pp.70-81, 2011/3（査読有）

荊紅艶「郁達夫における谷崎潤一郎受容—『痴人の愛』と『迷羊』を中心として—The reception of Junichiro Tanizaki in Yu Dafu」『阪大比較文学』7号，阪大比較文学会，2011/3（査読有）

小橋玲治「The “Japanized” Translation of *Jane Eyre*」，『研究者海外派遣基金助成（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成21年度公募）「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」「日本・タイ相互の文学研究のために」報告・論文集』大阪大学大学院文学研究科，pp. 14-21, 2011/3（査読無）

曾嶸「作为文本叙事构成方法的引用—以大江健三郎《被偷換的孩子》为例」（中国語），『清華大学学报（哲学社会科学版）』第26卷，精華大学，pp. 5-12, 2011

曾嶸「堀田善衛と「上海体験」—「身分転換」でめざめた日中関係への思考—」（日本語），『阪大比較文学』7号，2011/3（査読有）

津田雅之「クルティウスとホフマンスタール—ロマンス語文化の受容をめぐる—」『独文学報』26，大阪大学ドイツ文学会，pp.75-96, 2010/11（査読有）

吉田大輔「The Social Positions of Western Artisan and Eastern Artist: A Comparative Study of Based on Two Artist's Novels in Japan」，『研究者海外派遣基金助成（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成21年度公募）「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」「日本・タイ相互の文学研究のために」報告・論文集』大阪大学大学院文学研究科，pp.14-21, 2011/3

【2011年度】

〔博士後期〕

津田雅之「100年に及ぶポンティニーからスリジーまでの歴史」Chaubet, François., Heurgon, Édith., et Paulhan, Claire., (sous la direction de), SIECLEColloque de Cerisy : 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, Condé-sur-Noireau, 2005, 544pp., 『世界言語研究センター論集』第7号，大阪大学世界言語研究センター，pp. 255-262, 2012/3/8

吉田大輔「彫像師の悲恋物語と仏師の悲恋物語—内田魯庵訳コンウェイ「彫像師」と幸田露伴「風流佛」—」『比較文学』第54巻，日本比較文学会，pp.80-93, 2012/3（査読有）

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

李丞鎮「金鶴泳作品における「民族性」—二・三世作家との比較を視野にいれて—」日本比較文学会第72回全国大会，東

京工業大学, 2010/6/20

李丞鎮「金鶴泳作品における「父親」—その変容に注目して—」韓国日本学連合学会 第 8 回学術大会・国際シンポジウム, 南ソウル大学, 2010/7/3

張杭萍「語られる体験—老舎『二馬』をめぐって—」中国文芸研究会 1 月例会, 関西学院大学大阪梅田キャンパス, 2011/1/30

藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ「十のアルバム」における物語性の構築と解体について」日本比較文学会第 46 回関西大会, 京都産業大学, 2010/11/6

藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品におけるテキストの役割について」2010 年度表象文化論学会第 5 回研究発表集会, 東京大学, 2010/11/13

ガルワーネ・リンダ, Sadomasochism and Race in Contemporary Japanese Literature: Murakami Ryu and Yamada Eimi. The XIX Congress of the International Comparative Literature Association (ICLA), Chung-An University, Seoul, South Korea, 2010/8/21.

ガルワーネ・リンダ, Japanese-Russian Mixed Bodies in Contemporary Russian Literature. National Bodies in Eastern Europe (Antipodean East European Study Group and the Russian Department at Canterbury University, Christchurch), Victoria University, Wellington, New Zealand, 2010/8/29.

ガルワーネ・リンダ, Undoing the Self by Doing the Other – The Representation of Russian Eroticism and Sexuality through the Representation of the Japanese in the works of Boris Akunin and Olga Lazoreva. A Graduate Student Conference: Undoing Eros: Love and Sexuality in Russian Culture, Department of Slavic Languages and Literatures, Princeton University, Princeton, USA, 2010/10/23.

ガルワーネ・リンダ, Russian Discovery of Japan through America: A Case of Complex East-West Literary Relationship, The 108th annual conference of the Pacific Ancient and Modern Language Association (PAMLA), Chaminade University, Honolulu, USA, 2010/11/13.

小橋玲治「日英の雑誌に見られる女性教師表象のカリカチュアの比較研究」グローバル COE「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成成果報告会, 大阪大学人間科学研究科, 2010/4/10

小橋玲治「日本の「ガヴァネス小説」—日本における「家庭教師小説」の変遷と永井荷風「地獄の花」—」近代文学研究会, 京都府立大学, 2010/9/25

小橋玲治「海を渡った女性教師たちとその表象の持つ意味の再考察」近代女性史分科会, 京都市会館男女共同参画センター・ウィングス京都, 2010/10/2

小橋玲治, 'Governess Novel' in Japan - As an Example of Translation of *Jane Eyre* in Japan -, International Conference on Japan-Thai Cross-Cultural Perspectives, タイ・チュラーロンコーン大学文学部比較文学科, 2010/12/17

津田雅之「トリエステにおけるコンフリクト—クラウディオ・マグリスにおける中欧の成立をめぐって—」グローバル COE「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成成果報告会, 大阪大学人間科学研究科, 2010/4/10

津田雅之「クルティウスによる二つのホフマンスタール論—貴族主義から神秘主義への変容—」日本比較文学会第 46 回関西大会, 京都産業大学, 2010/11/6

吉田大輔「江見水蔭『旅絵師』と紅葉「油画の女人は脱げじ」—明治二十年代前半、文学者と女性肖像—」日本比較文学会第 46 回関西大会, 京都産業大学, 2010/11/6

吉田大輔, Western Artisan and Eastern Artist? :A Comparative Study of Two Artist's Novels in Japan, International Conference on Japan-Thai Cross-Cultural Perspectives, タイ・チュラーロンコーン大学文学部比較文学科, 2010/12/17

【2011 年度】

〔博士後期〕

ガルワーネ・リンダ "Cyber-Orientalism: The Representation of Musume in Global Network." Comparative Literature and the Un-wordling of the Human Sciences in the Global Era, イブヌ・ゾハル大学 (アガディール、モロッコ), 2012/3/15

- ガルワネ・リンダ「オペレッタ『ゲイシャ』のロシアにおける成功—ロシア版の特徴を中心に—」 ジャポニズム学会第 5 回例会, 京都国立近代美術館, 2012/12/18
- ガルワネ・リンダ「ヴィクトル・ペレーヴィンの「アキコ」におけるヴァーチャルな日本と日本人の表象」日本比較文学会第 47 回関西大会, 大阪大学, 2011/11/26
- ガルワネ・リンダ “Myth for Myth - Motifs from Japanese Folklore and Mythology Used to Create or Support Myth of Japanese Sexuality in Russian Literature.” The 109th Annual Conference of the Pacific Ancient and Modern Language Association (PAMLA), スクリプス・カレッジ (クレアモント, カリフォルニア, アメリカ), 2011/11/6
- ガルワネ・リンダ「ボリス・ピリニャーク『物語の生まれ方についての物語』の総合的考察—日本人とセクシュアリティを中心に—」第 73 回全国大会, 九州産業大学, 2011/6/19
- ガルワネ・リンダ “The Representation of Japanese Woman in Contemporary Russian Literature - Viktor Pelevin and Olga Lazoreva.” 発表会—International Colloquium Debating Women: Past and Present. マデイラ大学(フンシャル、ポルトガル), 2011/6/4
- 津田雅之 ‘Sur les rôles de l’Alsacien Curtius et de la Luxembourgeoise Aline Mayrisch’, Pluralité des cultures : chances ou menaces ?, Chaire de Philologie romane, Université de Łódź, 2011/10/13.
- 津田雅之 ‘Depiction of Europe in Proust’s Autobiographic Novel’, IABA Europe 2011, Trajectories of (Be)longing: Europe in Life Writing, Tallinn University, 2011/5/18.
- 小橋玲治「明治の女性家庭教師表象—内田魯庵と水谷不倒の間の懸隔—」日本比較文学会第 47 回関西大会, 2011/11/26
- 曾嶸「作为叙事文本构成方法的“引用”—以大江健三郎《被偷換的孩子》为例—」中国清华大学三堡シンポジウム, 2011/4
- 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品における〈ゴミ〉と〈コレクション〉」表象文化論学会 第 6 回研究発表集会, 表象文化論学会, 2011/11
- 山田晃子「阪神間モダニズムにおけるファッション—雑誌『ファッション』における海外ファッション誌の受容の問題を中心に—」日本比較文学会第 73 回全国大会, 2011/6/18
- 山田晃子 Influence of Vogue Magazine on the Fashion and Woman Figures in Literary Works of “Hanshinkan Modernism” The 109th Annual Conference of the Pacific Ancient and Modern Language Association (PAMLA), スクリプス・カレッジ (クレアモント, カリフォルニア, アメリカ), 2011/11/6
- 山田晃子「20 世紀初頭のイギリスにおけるファッションのジャポニズム—1900 年 - 1916 年の *Queen* をを中心に—」ジャポニズム学会第 5 回例会, 京都国立近代美術館, 2011/12/18
- 吉田大輔「彫像師の悲恋と仏師の悲恋—内田魯庵訳コンウエイ「彫像師」と幸田露伴「風流佛」—」日本比較文学会第 73 回全国大会, 2011/6/19
- 吉田大輔「『西国立志編』から露伴文芸を再考する—ものつくりをいかに語るか—」日本比較文学会第 47 回関西大会, 2011/11/26

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010 年度】

〔博士後期〕

藤田瑞穂「第 5 回研究発表集会研究発表 2 報告文」『2010 年度表象文化論学会ニューズレター “REPRE”』第 11 号, 2010/12

吉田大輔「ジム・トンブソンと『熱い絹』に関するメモ」『研究者海外派遣基金助成(組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成 21 年度公募)「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」「日本・タイ相互の文学研究のために」報告・論文集』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 70-72, 2011/3

【2011 年度】

〔博士後期〕

津田雅之、報告書 ‘La contribution luxembourgeoise à l’intégration européenne par les activités des Mayrisch’ (EU

インスティテュート関西, 2012 年) 2012
ガルワーネ・リンダ (書評) “Kawaguchi, Yoko. *Butterfly's Sisters: The Geisha in Western Culture*. New Haven and London: Yale University Press, 2010.” 『ジャポニスム研究』第 31 号, pp. 119-121, 2011/11/30
藤田瑞穂 (研究ノート) 「イリヤ・カバコフ『彼らはのぞき込んでいる』をめぐって」『REPRE』12, 2011/12
山田晃子 (書評) 「Valerie Steele, Patricia Mears, Yuniya Kawamura, Hiroshi Narumi, *Japan Fashion Now*」『ジャポニスム研究』第 31 号, pp. 128-130, 2011/11/30

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

張杭萍 博士後期課程, 上海師範大学外国語学院日本語学部, 専任准教授, 2011/9

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度 : 0 名 2011 年度 : 0 名

9. 刊行物

2010 年度 『研究者海外派遣基金助成 (組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成 21 年度公募) 「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」 「日本・タイ相互の文学研究のために」 報告・論文集』, 大阪大学大学院文学研究科, 2011 年 3 月

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2010 年 4 月 11 日 日本比較文学会関西支部例会 開催校

2010 年 12 月 日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」採択事業「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる 21 世紀の地平—」事務局を比較文学研究室内設置

2011 年 7 月 7 日 チュラロンコーン大学との合同ワークショップ「日タイ比較文学研究の試み」主催

2011 年 11 月 26 日 日本比較文学会第 47 回関西大会 開催校

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻:日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「与謝野晶子「明るみへ」論—古い「私」からの解放—」奈良女子大学日本アジア言語文化学会『叙説』38, 奈良女子大学日本アジア言語文化学会, pp. 14-29, 2011/3

清水康次 「〈文学環境〉の視点から見た『白樺』—『白樺』の研究・序章—」大阪大学文学会『待兼山論叢 文化動態論篇』44, 大阪大学文学会, pp. 1-25, 2010/12

清水康次 「下人の物語の始まりと終わり—芥川龍之介「羅生門」—」至文堂『国文学 解釈と鑑賞』75-9, ぎょうせい, pp. 64-72, 2010/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 橋本 順光 准教授

1970 年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D.,(2008)。2001 年 4 月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009 年 4 月より現職。専攻:比較文学・英国地域研究。

2-1. 論文

橋本順光 「黄禍論の予言者チャールズ・ピアソン」『メトロポリタン史学』7, pp. 49-65, 2011/12

橋本順光 「「芸術家マンガ」試論—マンガの自意識と芸術家像の変容」『美術フォーラム 21』24, pp. 117-122, 2011/11

橋本順光 「第二ジャポニスム論の試み」『ジャポニスム研究』31, pp. 32-38, 2011/11

橋本順光 「ジョージ・バードウッドのインド工芸論」『ヴィクトリア朝文化研究』9, pp. 73-77, 2011/11

Hashimoto, Yorimitsu, 'Soft Power of Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Early 20th Century', Shigemi Inaga (ed.), *The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires*, 国際日本文化研究センター, pp. 69-80, 2011/3

橋本順光 「ブラングインの日本と日本のブラングイン」『ジャポニスム研究』30, pp. 88-95, 2010/12

2-2. 著書

橋本順光 「カーゴ・カルト幻想—飛行機崇拜の物語とその伝播—」柳廣孝・吉田司雄編著『天空のミステリー』青弓社, pp. 61-76, 2012/1

橋本順光 「ギリシア・ローマ神話」「オリエンタリズム」森岡裕一編著『西洋文学: 理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 43-55, pp. 149-163, 2011/10

橋本順光 「浅川巧とグルチャラン・シン—インドまで伝えられた韓国陶磁器の美」ソウル国際親善協会浅川学術会議報告書『時代の国境を越えた愛 浅川巧の林業と韓国民族工芸に関する研究』, pp. 120-131, 2011/9

橋本順光 「인도 도예가 구차란 싱」백조중 編著『한국을 사랑한 일본인 : 아사카와 다쿠미의 삶과 사랑』부코, pp.78-90, 2011/8 (「インドの陶芸家グルチャラン・シン」白朝鐘 編著『韓国を愛した日本人—浅川巧の生と愛』)

橋本順光 (編)『日本・タイ相互交流の文学研究のために』(研究者海外派遣基金助成金・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成 21 年度公募「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」報告書), 2011/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋本順光 (聞き手および解説)「吉永進一氏インタビュー」—柳廣孝(編)『現代日本における「オカルト」の浸透と海外への伝播に関する文化研究』(平成 20~22 年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)研究成果報告書), pp. 11-56, 2011/3

橋本順光 (聞き手および解説)「天宮清氏インタビュー」—柳廣孝(編)『現代日本における「オカルト」の浸透と海外への伝播に関する文化研究』(平成 20~22 年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)研究成果報告書), pp. 105-146, 2011/3

橋本順光 (研究ノート)「近代日本におけるタイ旅行記研究のための覚書」橋本順光(編)『日本・タイ相互交流の文学研究のために』(研究者海外派遣基金助成金・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成 21 年度公募「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」報告書), pp. 55-68, 2011/3

2-4. 口頭発表

橋本順光 「李朝白磁からデリー・ブルーへ—浅川巧とグルチャラン・シンの交流とその余波」日本比較文学会関西支部関西大会シンポジウム「朝鮮半島の表象と日本社会—1920 年から 1930 年代の美術を中心に」, 大阪大学, 2011/11/26

橋本順光 「浅川巧とグルチャラン・シン—インドまで伝えられた韓国陶磁器の美—」ソウル国際親善協会浅川学術会議「時代の国境を越えた愛 浅川巧の林業と韓国民族工芸に関する研究」, ソウル・プレスセンター, 2011/9/5

Hashimoto, Yorimitsu, 'Asian Design for the Asians? the Lotus Pattern Story concerning Gurcharan Singh's 1920 Visit to Takumi Asakawa in Korea' "New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, Chronologies, Methodologies", Victoria & Albert Museum, 2011/7/22

- 橋本順光 「欧州航路の比較文学—和辻哲郎の『風土』を中心に—」日本比較文学会第 73 回全国大会ワークショップ, 九州産業大学, 2011/6/18
- 橋本順光 「仏塔の国への憧憬と山田長政幻想 大鳥圭介から長谷川一夫まで」大阪大学・チュラーロンコーン大学 比較文学研究ワークショップ「近代日本におけるタイ表象再考」, 大阪大学, 2011/5/27
- 橋本順光 「境界を越える義経ジギスカン伝説—大陸雄飛論から冒険小説まで」北海道大学 GCOE プログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」特別セミナー, 北海道大学スラブ研究センター, 2011/3/9
- 橋本順光 「エドウィン・アーノルドの日本紀行とその受容」京都大学人文科学研究所共同研究班「近代日本と異文化接触—「同時代化」を生きた人々の記録」(代表シルヴィオ・ヴィータ)例会, 京都大学人文科学研究所, 2011/2/23
- 橋本順光 「鹿子木員信のインド旅行と国外退去について」科学研究費「戦前期日本ペン倶楽部の研究—日印文化交流と国際文化政策」(研究代表者 目野由希)研究会, 国士舘大学, 2011/1/16
- Hashimoto, Yorimitsu, 'The United Buddhist World? Manjiro Inagaki and the Bone Relic of the Buddha in Thailand' "International Conference on Japan–Thai Cross–Cultural Perspectives", Faculty of Arts, Chulalongkorn University, 2010/12/17
- 橋本順光 「昭和における山田長政伝説の変容 南洋一郎から手塚治虫まで」タイ、チュラーロンコーン大学文学部・大阪大学文学部合同ワークショップ, タイ、チュラーロンコーン大学文学部, 2010/12/16
- 橋本順光 「手塚治虫の「孔雀貝」(1958)にみるタイ—「王様と私」(1956)と山田長政の悲恋伝説を中心に—」シーナカリンウィロート大学文学部・大阪大学文学部合同ワークショップ, タイ、シーナカリンウィロート大学文学部, 2010/12/15
- 橋本順光 「二つのジャポニズムあるいは第二ジャポニズム論をめぐる問題整理」ジャポニズム学会・京都精華大学国際マンガ研究センター主催シンポジウム「ジャポニズムとマンガ “二つの日本美”」, 京都国際マンガミュージアム, 2010/12/5
- 橋本順光 「大英帝国の航路からみた横浜居留地——人種衝突と美術交流のあいだ」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 10 回大会シンポジウム「ヴィクトリア朝イギリスと開化期日英交流の諸相」, 名古屋大学, 2010/11/20
- Hashimoto, Yorimitsu, 'Jujitsu and Bushido in the British Empire in the early 20th century' The 38th International Research Symposium: "Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires", 国際日本文化研究センター, 2010/11/8
- 橋本順光 「ブラングインの日本と日本のブラングイン」ジャポニズム学会第 2 回例会シンポジウム「ブラングインとその時代 ジャポニズムの視点から」, 国立西洋美術館, 2010/4/24

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号: 2252036

研究題目: 20 世紀初頭のインド旅行記におけるアジア主義と黄禍論の日英比較研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2011 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

日露戦争以降、日本でのアジア主義の高まりとインドへの波及を警戒し、英国では黄禍論(小説)が盛んになる。神智学や仏教を媒介にした日印英のネットワークは、インド独立運動の煽動や幫助を疑われ、特に日本人インド旅行者は英国の官憲に監視されていた。本研究では、仏蹟巡礼の途上にあった鹿子木員信が 1919 年に英国政府によって強制送還された事件をめぐって、日英印の各種外交史料を照合することで、その実態を明らかにし、後代への影響を探る。あわせて 1910 年代から 1930 年代にかけて流行した日英のインド旅行記を発掘し、アジア主義という同床異夢に翻弄された人々の交錯と交流に光をあて、黄禍論小説という表象との相関を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本比較文学会・学会誌編集委員	2011年4月～現在に至る
ジャポニスム学会・理事	2011年4月～現在に至る
日本比較文学会関西支部・幹事	2009年4月～現在に至る
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・学会誌編集委員	2009年4月～現在に至る
ジャポニスム学会・監事	2009年4月～2011年3月

2-14 中国文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：高橋 文治、浅見 洋二

助教：谷口 高志

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	0	3	0	1	1	1	2	0

※うち留学生 0名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	5	1	0	0	0
2011	1	1	0	0	0
計	6	2	0	0	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、大学院生の留学、教員の海外出張も行われている。2010年度の大学院生の海外留学は1件、2011年度のそれは所属大学院生の減少の結果0件であった。中国政府給費留学生として、博士後期課程在籍中の学生が、2010年度に中山大学に留学している。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは2010年度に「特定領域研究」、2011年度に「基盤研究(C)」、「成果公開促進費」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員が科学研究費「成果公開促進費」を取得して学術書を出版したほか、学術書の編著者もつとめ、また科学研究費「特定領域研究」において国際的に重要な活動を展開し、優れた論文も発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめ、学会展望を執筆するなど、各学会において主導的活動を行った。

3. 社会連携

教員が年間で10回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでてきている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2011	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	1	0	0	1
2011	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	0	1

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

山上恵「蘇軾の黄州左遷期の詩について——甥安節を送る詩を中心に——」『待兼山論叢』44, pp. 19-33, 2010/12

【2011年度】

〔博士後期〕

堀史人「白居易『三教論衡』について」『待兼山論叢』45, pp. 17-31, 2011/12

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

堀史人「白居易『三教論衡』をめぐって」第10回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会, 名古屋大学文学部, 2010/11/20

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2011年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2010年度:0名 2011年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2010年度:1名 2011年度:0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

詞曲研究会 元典章文書の語学史的研究

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 高橋 文治 教授

1953 年生。1982 年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979 年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000 年 10 月現職。専攻:白話文学史。

1-1. 論文

高橋文治 「1258 年山西浮山県天聖宮給文二碑札記」中央ユーラシア学研究会(編)(内陸アジア言語の研究), 25, pp. 171-186, 2010/10

1-2. 著書

高橋文治 『モンゴル時代道教文書の研究』汲古書院, 495p., 2011/12

高橋文治, 小松謙, 金文京他(編)『元刊雜劇の研究(二)』汲古書院, 280p., 2011/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

高橋文治 「漢語文献が語るモンゴル支配」『阪大史学の挑戦2』プログラム, 大阪大学歴史教育研究会, 2010/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 第八回東方学会賞, 東方学会, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011 年度、研究成果公開促進費、代表者:高橋文治

課題番号: 235117

研究題目: モンゴル時代道教文書の研究

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、石刻史料として今日に残されるモンゴル時代の道教関係公文書類を時代順に検討し、それら道教文書がそもそも如何なるスタイルをとり如何なる文体で書かれたものだったのか、また、それらは如何なる内容を持ち如何なる経緯を経て碑刻になったのか体系的に整理・分析したものである。そのことによって本研究は、モンゴル時代の道教史がこの時代の政治史といかに深く関連したかを明らかにした。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士(京都大学、2009年)。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻:中国古典詩学。

2-1. 論文

浅見洋二 「子どもの情景、あるいは田園の憂鬱—楊万里の詩について—」『創文』1, 創文社, pp. 4-6, 2011/5

浅見洋二 「黄庭堅詩注の形成与黄氏『山谷年譜』—以真蹟及石刻の利用为中心—」『中山大学学报』51, 中山大学, pp. 24-43, 2011/3

浅見洋二 「中国宋代における生成論の形成—欧陽脩『集古録跋尾』から周必大編『欧陽文忠公集』へ—」『文学』11-5, 岩波書店, pp. 173-187, 2010/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

浅見洋二 「宋代文本生成論的形成: 従欧陽脩撰『集古録跋尾』到周必大編『欧陽文公集』」第7回宋代文学国際学術研討会, 宋代文学会, 河南大学, 2011/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度~2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号: 22520358

研究題目: 宋代における蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂と注釈に関する総合的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

宋代における蘇軾と黄庭堅の詩文集の整理・編纂および注釈について、その全体的な状況を詳細に明らかにするとともに、そこにあらわれた文学観の特質について考察を加える。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本中国学会・評議員

2011年10月~現在に至る

中国社会文化学会・評議員

2006年4月~現在に至る

3. 谷口 高志 助教

1977年生。2008年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2009年)。花園大学非常勤講師、神戸学院大学非常勤講師を経て、2011年4月現職。専攻:唐代文学。

3-1. 論文

谷口高志 「衝突の音——中晩唐期の詩歌に見られる聴覚的感性の変容」大阪大学中国学会(編)『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 51, 大阪大学中国学会, pp. 58-74, 2010/10

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-15 国語学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：金水 敏、岡島 昭浩

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65*	3	8	0	0	2	1	0	0

* (日本文学と合わせて)

※うち留学生 4 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	14	4	0	0	0
2011	18	1	0	3	3
計	32	5	0	3	3

* (日本文学と合わせて)

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国

語国文学会」を開催し、学会機関誌「語文」を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「語彙史研究会」「文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

■学部：卒業論文発表会を 2010 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 14 名(うち国語学 2 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2010 年 7 月および 11 月に実施した。4 名が修了した。修了生 1 名が大学に就職した(ほかに修了生である助教も他大学へ就職した)。学部・大学院合同の講義を半期 2 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 6 本掲載され、研究発表が 10 本行われた、という状況である。(以上、2010 年度)

■学部：卒業論文発表会を 2011 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 18 名(うち国語学 1 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2011 年 7 月および 11 月に実施した。1 名が修了、3 名が学位申請論文を提出し、その 3 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 2 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 8 本掲載され、研究発表が 5 本行われた、という状況である。学振の PD に 1 名採用された。(以上、2011 年度)

2. 研究

科学研究費に関わる研究では、引き続き「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」を行い、シンポジウムを行い、報告書を刊行した。また、「大阪大学国語国文学会」を 2011 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 94(6 月)・95 号(12 月)を刊行した。「語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2010 年度)

科学研究費に関わる研究では、「役割語の総合的研究」が新たに始められた。また、「大阪大学国語国文学会」を 2012 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 96(6 月)・97 号(12 月)を刊行した。「語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2011 年度)

3. 社会連携

金水教授が「知的世界への冒険 大阪府立北野高校」に 1 回、「探求特別講座 大阪府立千里高等学校」に 1 回、「日本語の将来(主催 日本学術会議・言語系学会連合)」に 1 回、「松山坊っちゃん会」に 1 回、出講した。(以上、2010 年度)

金水教授が、「第 1 回追手門寄席 古典・擬古典・創作落語の大阪弁」、「知的世界への冒険 大阪府立北野高校」、「筑波大学附属駒場高等学校 SSH 講演会」、「兵庫県立篠山鳳鳴高等学校総合科学コース特別授業」等に、出講した。(以上、2011 年度)

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、多くの論文を学術誌に載せ、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費で、「役割語の総合的研究」が始まった。それを含めて、目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	3	0	3
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

金晞泳 「「一的」ということばの発生と変遷」 2012/3

主査：岡島昭浩 副査：金水敏、石井正彦

大田垣仁 「日本語換喩表現の研究—名詞句単位の換喩を中心に—」 2012/3

主査：金水敏 副査：岡島昭浩、井元秀剛

森勇太 「日本語授受表現の歴史語用論的研究—策動表現における敬語との相互関係—」 2012/3

主査：金水敏 副査：岡島昭浩、日高水穂

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	4(4)	0(0)	2(0)	0(0)	0(0)	6(4)
2011	4(4)	0(0)	3(0)	1(1)	0(0)	8(5)
計	8(8)	0(0)	5(0)	1(1)	0(0)	14(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	2	4	4	0	0	10
2011	0	1	4	0	0	5
計	2	5	8	0	0	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

大田垣仁「換喩と述定—内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 94, pp. 44-56, 2010/6

金囁泳「連体修飾用法に関する一考察—「A 的ノ B」「A 的 B」「A 的ナ B」形式を中心に—」『日語日文学研究』(韓国日語日文学会), 73, pp. 89-109, 2010/5/31

金囁泳「「一的」の日本語化」『日本語学研究』(韓国日本語学会), 30, 2011/3/20

清田朗裕「「カレコレ」の語史—品詞の転成の問題に絡めて—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 95, pp. 48-58, 2010/12

森勇太「行為指示表現の歴史的変遷—尊敬語と受益表現の相互関係の観点から—」『日本語の研究』(日本語学会), 6-2, pp. 78-92, 2010/4

森勇太「移動を表さない「一てくる」の成立—受益表現「一てくれる」との関連から—」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 44, pp. 1-16, 2010/12

【2011年度】

〔博士後期〕

大田垣仁「換喩と個性—名詞句単位の換喩における語用論的コネクターの存否からみた—」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 45, pp. 21-36, 2011/12

竹村明日香「ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音表記—抄物の表記との対照を通して—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 96, pp. 57-70, 2011/6

竹村明日香「『日葡辞書』の開拗長音」『国語国文』(京都大学国語国文学研究室), 81-3, pp. 1-26 (左開き), 2012/3

伊藤由貴「近世・近代における助数詞「回」について—行為や出来事を数える用法を中心に—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 97, pp. 54-66, 2011/12

森勇太「申し出表現の歴史的変遷—謙讓語と与益表現の相互関係の観点から—」『日本語の研究』(日本語学会), 7-2, pp. 17-31, 2011/4

森勇太「やりもらい表現の歴史」『日本語学』(明治書院), 30-11, pp. 28-37, 2011/9

森勇太「授与動詞「くれる」の視点制約の成立—敬語との対照から—」『日本語文法』(日本語文法学会), 11-2, pp. 94-110, 2011/9

坂井美日「現代熊本市方言の準体助詞—「ツ」と「ト」の違いについて—」『阪大社会言語学ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 10, pp. 30-47, 2012/3

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

伊藤由貴「近世・近代における助数詞「回」—行為や出来事を数える用法を中心に—」第 273 回近代語研究会春季発表大会, 2010/5/28

金囁泳「明治期における漢語系接尾辞に関する一考察—「一的」との関連を中心に—」日本語学会・2010年度春季大会, 日本女子大学(目白キャンパス), 2010/5/29

金囁泳「「一的」の連用用法—「比較的」と「可及的・可成的」—」韓国日語日文学会・2010年度秋季国際学術大会, 韓国・慶熙大学, 2010/10/16

金囁泳「「一的」の連用用法—「比較的」を中心に—」台湾日本語文學會, 台湾・淡江大學淡水校園, 2010/12/18

竹村明日香「日葡辞書の開拗長音—「eo」表記の分布が意味するもの—」第 273 回近代語研究会春季発表大会, 2010/5/28

竹村明日香「ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音表記—抄物の表記との対照を通して—」平成 23 年度大阪大学国語国文学会総会, 2011/1/8

森勇太・水谷美保「行為指示表現の歴史的・地理的変異—尊敬語命令形をめぐって—」土曜ことばの会, 2010/4/17
森勇太「申し出表現の歴史的変遷—謙讓語と与益表現の相互関係の観点から—」日本語学会 2010 年度春季大会, 2010/5/30
森勇太・水谷美保「行為指示表現の地理的・歴史的変異—尊敬語命令形をめぐって—」日本方言研究会第 91 回研究発表
会, 2010/10/22

森勇太「授与動詞「くれる」の視点制約の成立—敬語との対照から—」日本語文法学会第 11 回大会, 2010/11/7

【2011 年度】

〔博士後期〕

清田朗裕「「X ハトモカク」について—中古和文資料との対照—」第 237 回筑紫日本語研究会, 九州地区九重共同研究所
大会議室, 2011/8/8

森勇太「謙讓語の機能の歴史」土曜ことばの会, 2011/4/30

森勇太「才型謙讓語の用法の歴史—受益者を高める用法をめぐって—」第 240 回筑紫日本語研究会, 2012/2/18

伊藤由貴「助数詞「個」における“用法の拡大”について」平成 24 年度大阪大学国語国文学会総会, 2012/1/7

坂井美日「いわゆる「主部内在関係節」の構造について—宮古島城辺方言・伊良部島伊良部方言・熊本市方言・八代市方
言からの検証—」筑紫日本語研究会第 241 回大会, 熊本大学, 2012/3

(3) その他(書評・翻訳など)

【2010 年度】

〔博士後期〕

金囁泳(翻訳)『조선이 그린 세계지도—몽골 제국의 유산과 동아시아—』, 소와당, 2010/5(タイトルの日本語訳:『朝
鮮が描いた世界地図—モンゴル帝国の遺産と東アジア—』, 原作:宮紀子『地図は語る—モンゴル帝国が生んだ世界図』
日本経済新聞出版社, 2007/6/20)

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2011 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2010 年度 : 1 名 2011 年度 : 1 名

9. 刊行物

*(日本文学専門分野とともに)

2010 年度 「語文」94, 95 輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年 2 回

2011 年度 「語文」96, 97 輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年 2 回

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局	国語語彙史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	国語文字史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	土曜ことばの会	2002 年度以前から現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1 月 1 日間)

研究誌「語文」を年 2 回編集・発行

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10 月 3 日間)

大学院研究発表会 (7 月・11 月 各 2 日間)

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 金水 敏 教授

1956 年生。1982 年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006 年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻: 国語学/言語学。

1-1. 論文

金水敏 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会(編)『近代語研究』(近代語学会), 16, 武蔵野書院, pp. 349-367, 2012/3

金水敏 「役割語と日本語教育」日本語教育学会(編)『日本語教育』(日本語教育学会), 150, pp. 34-40, 2011/12

Teshigawara, Mihoko, Kinsui, Satoshi (共著), "Modern Japanese 'Role Language' (Yakuwarigo): fictionalised orality in Japanese literature and popular culture," *Sociolinguistic Studies*, 5-1, Equinox Publishing, pp. 37-58, 2011/12

金水敏 「第 1 章 日本語史」益岡隆志(編)『はじめて学ぶ日本語学—ことばの奥深さを知る 15 章—』ミネルヴァ書房, pp. 1-35, 2011/10

金水敏 「言語資源論から平安時代語を捉える—平安時代「言文一途」論再考—」訓点語学会(編)『訓点語と訓点資料』127, pp. 80-89, 2011/9

金水敏 「言語の ecology/ecology の言語—国語・方言・グローバリゼーション—」韓国日語日文学会(編)『日語日文学研究』(韓国日語日文学会), 78-1, pp. 3-11, 2011/8

金水敏 「文法史とは何か」金水敏他(共編著)『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp. 1-17, 2011/7

金水敏 「統語論」金水敏他(共編著)『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp. 77-166, 2011/7

金水敏 「人称に関わる現象の歴史的変化」金水敏他(共編著)『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp. 191-202, 2011/7

金水敏 「現代日本語の役割語と発話」金水敏他(共編著)『役割語研究の展開』くろしお出版, pp. 7-16, 2011/5

- 金水敏 「翻訳における制約と創造性—役割語の観点から—」杉藤美代子(編)『音声文法』くろしお出版, pp. 169-179, 2011/3
- 金水敏 「日本語史とはなにか—言語を階層的な資源と見る立場から—」『早稲田大学日本語研究』(早稲田大学日本語学会), 20, pp. 1-10, 2011/3
- 金水敏 「日本語と英語との接触—昭和・平成を中心に—」『日本語学』29-14, 明治書院, pp. 64-72, 2010/11
- 金水敏 「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」韓国・江原大学校・日本学研究センター(編)『日東学研究』Vol. 2, 韓国・江原大学校・日本学研究センター, pp. 99-110, 2010/8
- 金水敏 「現代日本語の役割語:ステレオタイプの話体の研究」南雅彦(編)『言語学と日本語教育 IV』くろしお出版, pp. 1-7, 2010/6
- 金水敏 「「男ことば」の歴史—「おれ」「ぼく」を中心に」中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社, pp. 35-49, 2010/4

1-2. 著書

- 金水敏, 高山善行, 岡崎友子他(共著)『シリーズ日本語史 文法史』岩波書店, pp. 1-17(「第1章 文法史とは何か」), pp.77-166(「第3章 統語論」), pp. 191-202(「第5章 直示と人称 5.1 人称に関わる現象の歴史的变化」), 2011/7
- 金水敏他(編)『役割語研究の展開』くろしお出版, pp. 7-16, 2011/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

- 金水敏 「「役割語」研究の展望」日本学講演会, 釜山大学 日本研究所・日本語日文学部, 釜山大学, 2011/11
- 金水敏 「映画・アニメに出てくる“なまった英語”—役割語の観点から—」第36回神戸女学院大学英語英文学会, 神戸女学院大学文学部英文学科, 神戸女学院大学, 2011/11
- Kinsui, Satoshi, “New Horizons in Research on ‘Role Language’” The 13th International Conference of EAJS, European Association for Japanese Studies, Tallinn University, Estonia, 2011/8
- 金水敏 「落語から見た大阪弁の特徴」第1回追手門寄席:古典・擬古典・創作落語の大阪弁, 主催:学校法人 追手門学院, 共催:大阪よみうり文化センター, 後援:読売新聞大阪本社, 追手門学院 大阪城スクエア, 2011/4
- 金水敏 「役割語研究の達成と課題」公開シンポジウム「役割語・発話キャラクタ研究の展開」, 科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」(課題番号:19320060、研究代表者:金水 敏(大阪大学大学院文学研究科教授)、研究期間:平成 19~22 年度), 科学研究費補助金 基盤研究 (A)「人物像に応じた音声文法」(課題番号:19202013、研究代表者:定延利之(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)、研究期間:平成 19~22 年度), 協力:大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学, 2011/2
- 金水敏 「日本語史を構想する—言語を階層的な資源と見る見方から—」中右実先生御退休記念シンポジウム:明日の言語研究に向けて, 麗澤大学 言語研究センター, 麗澤大学, 2011/2
- 金水敏 「日本語の中の“役割語”」第54回駒澤國文国文学大会, 駒澤大学文学部国文学科, 駒澤大学, 2010/12
- 金水敏 「日本語史とは何か—言語を階層的な資源と見る立場から—」早稲田大学日本語学会 シンポジウム:「正しい」日本語と現実の日本語—日本語研究の面白さ—, 早稲田大学日本語学会, 早稲田大学, 2010/12『早稲田大学日本語研究』20, pp. 1-10, 2011/3
- 金水敏 「物語構成のための階層的な時間把握 —芥川龍之介「羅生門」を例に—」フランス語談話会:時制体系をめぐる対照言語学的視点, 日本フランス語学会, 京都大学, 2010/11『フランス語学研究』45, pp. 120-124, 2011/6
- 金水敏 「役割語とキャラクターをめぐる」同志社大学院生部会講演会, 同志社大学国文学科院生部会, 同志社大学, 2010/10
- 金水敏 「歴史から見たガノ交替」講演会, お茶の水大学戸次研究室, お茶の水大学, 2010/9
- 金水敏 「日本語の将来を考える視点—「言語資源論」の観点から—」言語系学会連合・日本学術会議シンポジウム:日本語の将来, 主催 日本学術会議・言語系学会連合 後援 国立国語研究所, 日本学術会議, 2010/9『学術の動向』16-5, pp. 95-99, 2011/5

金水敏 「漱石、写生文(、そして役割語)」第三回愛媛大学写生文研究会(松山坊っちゃん会と合同開催)、愛媛大学写生文研究会・松山坊っちゃん会、愛媛大学、2010/7『松山坊っちゃん会会報』11, pp. 1-3, 2010/10)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏 第25回新村出賞, 新村出記念財団, 2006/11

原口裕, 南出康世, 金水敏他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号: 19320060

研究題目: 役割語の理論的基盤に関する総合的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

「役割語」とは、ステレオタイプ的な人物像と、心理的連合によって結びつけられたスピーチスタイルのヴァリエーションのことを指す。本研究では、(1)「役割語の認知とその発達」(2)「役割語の対照言語学的研究」(3)「役割語を巡る作品と享受者のインタラクション」(4)「日常談話における役割語の運用」の諸点を明らかにするために、(a)「幼児・児童の役割語的知識に関する心理実験と、それに基づく役割語習得メカニズムの理論化」(b)「対照研究の理論的基盤の整備」(c)「ポピュラーカルチャー作品における役割語表現の機能に関する基礎研究」(d)「日常談話におけるキャラ語尾と発話キャラクターの関連に関する研究」(e)「国際的研究ネットワークの構築」の5つの課題を進めていく。併せて、本研究の遂行を通して、日本語教育を初めとする言語教育、国語教育、翻訳論、文学研究等の隣接領域へも応用的貢献への方策も探求していく。

1-6-2. 2011年度～2014年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号: 23320087

研究題目: 役割語の総合的研究

研究経費: 2011年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

「役割語」とは、特定の人物像(キャラクタ)と心理的に結びついた話し方(スピーチスタイル)である。本研究では、日本語を中心に役割語の研究を1)理論、2)起源・歴史、3)対照、4)応用、5)獲得・発達の4つの観点に分け、それぞれについて相互連携的に研究を推進しようとするものである。2)では個別の役割語構成要素についてその起源と発達過程を明らかにし、また3)では欧米語および東アジア諸言語を中心に、文化差についても勘案しながら、類型論的に考察する。また4)では日本語教育、人文学入門の分野における教育プログラム等の開発について検討する。また5)では4歳児～成人まで、成長の各段階での役割語知識の獲得過程について実証的に研究する。これらを総合し、1)として役割語の総合的な理論の構築を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・会長	2010年4月～2013年3月
日本語学会・理事	2009年6月～現在に至る
日本言語学会・評議員	2009年4月～現在に至る
日本語学会・評議員	2009年4月～現在に至る
訓点語学会・委員	2009年4月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2008年10月～現在に至る
関西言語学会・運営委員	2000年4月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授、本研究科助教授・准教授を経て2010年現職。専攻:国語学。

2-1. 論文

岡島昭浩 「近世語学“軽重”義」釘貫亨・宮地朝子『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房, pp. 213-228, 2011/10

岡島昭浩 「肩がこる」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 30, 和泉書院, pp. 191-201, 2011/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩 「ウェブ検索の応用」荻野綱男, 田野村忠温編『講座 ITと日本語研究 6 コーパスとしてのウェブ』明治書院, pp. 59-88, 2011/7

2-4. 口頭発表

岡島昭浩 「近世語学“軽重”義」名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」国際研究集会:ことばに向かう日本の学知——テキスト解釈の集積としての学史——, 名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」, 名古屋大学, 2010/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員	2009年5月～現在に至る
国語文字史研究会・委員	2009年4月～現在に至る
国語語彙史研究会・委員	2003年4月～現在に至る

2-16 英米文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 2 准教授 2 外国人教師 1 助教 1

教授：森岡 裕一、服部 典之

准教授：片渕 悦久、石割 隆喜

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
29	3	7	0	0	0	3	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	12	2	2	1	0
2011	8	5	4	1	0
計	20	7	6	2	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時まで社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。学部学生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技

術を身につけさせることを目標とした。また、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあう態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会叢書のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプロジェクトを模索することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好と言える。

2. 研究

当該年度中ほぼ全員の教員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍をしている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに 6 巻まで出版されており、今後の出版計画は第 8 巻まで進んでいる。この時期の課程博士号提出者は 2 名となっている。院生の研究発表については 1. でもふれたように口頭・論文ともに堅調であり、目標は十分に達成されたとと言える。

3. 社会連携

2010～11 年度にかけても卒業生を非常勤講師として継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ている。ペンシルヴァニア大学への派遣計画は 2010 年度までで計 14 名を送り出した。こうした海外派遣計画については今後も長期的展開が望めるように新たなプロジェクトを模索中である。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ内部から大学院進学者が出ているのは教育面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	0	1
2011	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 金崎八重 “Milton’s Pastoral and Nature in His Early Poems.” 2011/3.
主査：服部典之 副査：森岡裕一、片渕悦久、石割隆喜
- Satter, Sanyat “State of Belonging and UnBelonging : A Study of Familial Themes in Major Works of Amitav Ghosh in Reference to Toni Morrison.” 2011/9.
主査：森岡裕一 副査：服部典之、片渕悦久、石割隆喜

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(1)	2(0)	5(0)	0(0)	0(0)	8(1)
2011	1(1)	2(0)	4(0)	0(0)	0(0)	7(1)
計	2(2)	4(0)	9(0)	0(0)	0(0)	15(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	6	2	0	0	8
2011	0	3	4	0	0	7
計	0	9	6	0	0	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

金崎八重 “Changing World in *On the Morning of Christ's Nativity*: Milton's Reworking of Renaissance Tradition.”

『待兼山論叢』(文学篇) 44, pp. 17-34, 2010/12.

米田亮一 “Poetics of ‘Prophecy’ in E. M. Forster's *Aspects of the Novel*.” *Osaka Literary Review* 49, 大阪大学大学院

英米文学談話会, pp. 69-85, 2011/1.

Sattar, Sanyat “*Playing in the Dark* and the Quest of Identity: Morrison Painting the True Colours of

Americanness.” 『試論』 45, 東北大学『試論』同人会, pp. 47-70, 2010/7.

Sattar, Sanyat “‘Metaphysical Condensation, Fetishization and a Dehistoricizing Allegory’: Exploring Morrison's

Treatise in Reference to Hemingway's ‘Fathers and Sons’.” *Osaka Literary Review* 49, 大阪大学大学院英米文学談

話会, pp. 105-117, 2011/1.

田中和也 “A Strategy to Maintain the Sailors' World in the Last Scene of Joseph Conrad's *Chance*.” *Osaka Literary*

Review 49, 大阪大学大学院英米文学談話会, pp. 51-67, 2011/1.

田中和也 “A Subversion of Adventure Tales: the ‘Deferring’ Part, the Sea, and Histories in Joseph Conrad's *An*

Outcast of the Islands.” 『テクスト研究』第7号, pp. 4-19, 2011/2.

林智之 “Rebecca as a Critic of Chivalry: Scott's Poetics of Fiction: Walter Scott's Poetics of Fiction in *Ivanhoe*.” *Osaka*

Literary Review 49, 大阪大学大学院英米文学談話会, pp. 1-22, 2011/1.

吉井麻里子 “The Red Light Romance: The Narrator's ‘inmost Me’ in *The Scarlet Letter*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 44, pp.

35-49, 2010/12.

【2011年度】

〔博士後期〕

上里友子 “The Authorial Voice through Irony in *Of Human Bondage*.” *Osaka Literary Review* 50, 大阪大学大学院英

文学談話会, pp.31-47, 2011/1.

Garlington, Ian Stuart “R for Reappropriation: The Function of Utopia in the Superhero Narratives of Alan Moore.”

Osaka Literary Review 50, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 67-84, 2011/1.

米田亮一 “The Shade of Monteriano in E. M. Forster's *Where Angels Fear to Tread*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 45, pp.

37-50, 2011/12.

田中和也 “Skepticism, Action, and Ideas: Dr. Monygham as a Key to *Nostramo*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 45, pp. 51-66,

2011/12.

田中和也 “Peyrol's Last Departure: ‘Digressions’ and the ‘Vertical’ Structure in Joseph Conrad's *The Rover*.” 『関西

英文学研究』5, pp. 19-27, 2012/1. (『支部統合号』4号としては、pp. 321-29)

林智之 “Having Thus Passed the Rubicon”: Interpreting Defoe's Design for North Britain in His *Tour*.” *Osaka*

Literary Review 50, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 13-29, 2011/1.

水田博子 “D.H. Lawrence's Philosophy of Nature in *The Man Who Died*.” *Osaka Literary Review* 50, 大阪大学大学院

英文学談話会, pp. 49-65, 2011/1.

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

岩橋浩幸「抽象的過去への抵抗—*Prisoner's Dilemma*における物語行為の倫理—」日本アメリカ文学会第49回大会, 立正大学大崎キャンパス, 2010/10/9.

隠岐尚子「*Sula*におけるトラウマ的ヴィジョン」アメリカ文学会第49回全国大会, 立正大学大崎キャンパス, 2010/10/9.

金崎八重「*On the Morning of Christ's Nativity*におけるミルトンの自然」十七世紀英文学会関西支部第179回例会, 大阪YMCA会館, 2010/7/10.

米田亮一「*A Passage to India*の発話における声の調子と他者への志向性」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第2回, 大阪大学, 2010/8/13.

田中和也「冒険小説の転覆—Joseph Conradの*An Outcast of the Islands*における海・歴史・遅延—」テキスト研究学会第10回大会, 近畿大学, 2010/8/27.

田中和也「老人と海: Joseph Conradの*The Rover*における海への回帰、反リアリズム性、セルフパロディ」日本英文学会関西支部第5回大会, 大阪市立大学, 2010/12/18.

林智之「*Waverley*の中のハイランド旅行と美学的価値観」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究会第2回, 大阪大学, 2010/8/13.

安田沙織「『他人の心は暗い森のようなもの』—生前未発表短編にみる記憶と孤独—」日本ヘミングウェイ協会第21回大会ワーク・イン・プログレス, 関東学院大学, 2010/12/11.

【2011年度】

〔博士後期〕

上里友子「*David Copperfield*のmetonymyとフィクション」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第3回, 大阪大学, 2011/8/6.

米田亮一「ディコンストラクティブ・コネクション—*Howards End*におけるMargaret SchlegelとHenry Wilcoxの価値観をめぐる考察—」日本英文学会83回大会, 北九州大学, 2011/5/22.

米田亮一「*Where Angels Fear to Tread*におけるMonterianoの陰」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第3回, 大阪大学, 2011/8/6.

Sattar, Sanyat “Construction of Micro-Communities: Amitav Ghosh Bringing the Peripheries into Center.” 阪大英文学会44回大会, 大阪大学, 2011/10/22.

林智之「スコットランドのプリニウス・ペナントの『1772年スコットランド及びヘブリディーズ諸島旅行記』における旅行記の新たな地平線」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第3回, 大阪大学, 2011/8/6.

林智之「新たなる船出—トマス・ペナントのヘブリディーズ諸島探訪—」関西18世紀英文学研究会, 同志社大学, 2012/3/10.

水田博子「D.H. ロレンスの作品における自然の哲学—*The Man Who Died* (1929)を中心に—」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第3回, 大阪大学, 2011/8/6.

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:1名 大学院:3名 (計4名)

2011年度 学部:2名 大学院:0名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

麻島徳子 博士後期課程、広島経済大学、専任講師、2011/4

市橋孝道 博士後期課程、東北大学、助教、2011/3

馬淵恵里 博士後期課程、関西外国語大学、専任講師、2011/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2010年度:3名 2011年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 4名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度:0名 2011年度:0名

9. 刊行物

2010年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 49, 2010/12

2011年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 50, 2011/12

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第43回大会 2010/11/6

阪大英文学会第44回大会 2011/10/22

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 森岡 裕一 教授

1950 年生。1979 年、大阪大学大学院修士課程修了。文学修士(大阪大学、1979 年)文学博士(大阪大学、2006 年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻:アメリカ文学。

1-1. 論文

森岡裕一 「口語文体・パラタクシス・イニシエーション」森岡裕一(共著)『西洋文学』大阪大学出版会, pp. 30-42, 2011/10

森岡裕一 「短編連作」森岡裕一(共著)『西洋文学』大阪大学出版会, pp. 94-107, 2011/10

森岡裕一 「説論と強制—T・S・アーサーの後期禁酒小説」大井浩二(監修)『異相の時空間』英宝社, pp. 57-72, 2011/5

森岡裕一 「リグリーの怯え—『アンクル・トムの小屋』における男女の力学」『英米文学の可能性』刊行会(編)『英米文学の可能性』英宝社, pp. 641-651, 2010/4

1-2. 著書

森岡裕一(編著)『西洋文学』大阪大学出版会, 256p., 2011/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

森岡裕一 「口語文体からみたアメリカ文学」奈良女子大学英語英米文学会第40回大会特別講演, 奈良女子大学英語英米文学会, 2011/11/26

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森岡裕一 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2005/11

森岡裕一 大阪大学共通教育賞(2005 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2005/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:森岡裕一

課題番号: 21520249

研究題目: 19 世紀アメリカ禁酒小説研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2011 年度 直接経費 750,000 円 間接経費 225,000 円

研究の目的:

19 世紀中葉に大量に流布した禁酒小説を対象に、そのレトリック、題材、思想の分析を通して、19 世紀アメリカ文化の伏流をなす感傷主義の一端を解明する。その際、同様に大量に出版され受容された家庭小説というサブジャンルを対照軸にして、大量飲酒からの解放、女性解放といった「解放の言説」に特徴的なレトリック分析の観点から 19 世紀中葉のアメリカ精神史を見直したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員 2009 年 4 月～2011 年 3 月

日本ヘミングウェイ協会・運営委員 2001 年 4 月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員 1997 年 4 月～現在に至る

2. 服部 典之 教授

1958 年生。1981 年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士(大阪大学、2003 年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000 年 10 月文学研究科助教授、2008 年 4 月現職。専攻: 英文学。

2-1. 論文

服部典之(共著)「トバイアス・スモレット:スコットランドとブリテンの狭間で——スモレットにおける正統と周縁——」『スコットランド文学——その流れと本質』(開文社), 開文社, pp. 114-133, 2011/3

服部典之(共著)「南方へ: "Keep still on SOUTHING"——物語空間としての「南海」の発見——」鈴木美津子、服部典之、他(共編)『十八世紀イギリス文学研究——交渉する文化と言語』(日本ジョンソン協会), 4, 開拓社, pp. 2-18, 2010/5

2-2. 著書

服部典之他(共著)『西洋文学——理解と鑑賞——』大阪大学出版会, 256p., pp. 67-79, 2011/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

服部典之「＜言い返す女＞テレジア・コンスタンシア・フィリップスの法と誠」招待講演, 日本英文学会関西支部第6会大会, 2011/12

服部典之「恋と逃走のジャマイカ——*An Apology for the Conduct of Mrs. T.C. Phillips* のショック」, シンポジウム「涙と冒険のカリブ」, 日本ジョンソン協会第44回全国大会, 2011/5

服部典之「アビシニアン・ジョンソン」, シンポジウム「Simply Johnson」, 日本ジョンソン協会関東支部, 2010/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 服部典之
課題番号: 21520250

研究題目: 「南太平洋」という物語言説の変容と変奏

研究経費: 2010 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2011 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究は、南太平洋を舞台とした英文学作品を、18 世紀から現在に至るまで通時的に検証することによって、南太平洋という「場所」が英文学において持つ独特な意義を解明するものである。ユートピア幻想に似る憧憬の場である南太平洋(または 19 世紀までの用語では「南海」)は、イギリスという国家にとって植民の対象でもあった。さらに太平洋戦争(1941-45)が顕著に示すように、数多くの島々が点在する太平洋は、常に国家間の抗争を惹起する地であった。本研究は、英文学における「南太平洋」の意味の変容と変奏を明らかにすると共に、豊かな物語を生む幻想の地が、なぜ諸国家の抗争の誘因になったかという文化的理由を探る野心的な研究である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部編集委員会・委員長	2011年5月～2012年5月
日本英文学会関西支部理事	2011年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部編集委員会・副委員長	2010年5月～2011年5月
日本18世紀学会・常任幹事	2009年6月～2011年6月
日本英文学会大会準備委員会・委員長	2009年5月～2010年6月
日本オースティン協会・幹事	2006年6月～現在に至る
関西18世紀英文学研究会・世話人	2005年4月～現在に至る

3. 片淵 悦久 准教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。博士(文学)(大阪大学、2007年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻:アメリカ文学。

3-1. 論文

片淵悦久「バルコニーと若き恋人たち、あるいは物語更新論序説」『フィラメント』(大阪大学アニメーション研究会), 34, pp. 96-109, 2010/12

3-2. 著書

片淵悦久, 広瀬佳司他(共著)『笑いとユーモアのユダヤ文学』南雲堂, pp. 218-235, 2012/3

片淵悦久, 森岡裕一, 服部典之他(共著)『西洋文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 3-15, pp. 122-134, 2011/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

片淵悦久「マイケル・シェイボンの『カヴァリエ&クレイの驚くべき冒険』」日本女子大学文学部公開シンポジウム: ゴレムの表象—ユダヤの人造人間と現代—, 日本女子大学, 2011/2

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2010年度、挑戦的萌芽研究、代表者:片淵悦久

課題番号: 20652021

研究題目: アダプテーション理論にもとづいた〈物語〉のメディア横断性の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

研究の目的:

広範なメディア(言語、映像、パフォーマンス等)やジャンル(文学、映画、マンガ等)を横断するかたちで物語が更新されつつ作り直される現代の文化的状況を、アダプテーション(翻案)理論を軸にして分析、考察する。

3-6-2. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:片淵悦久

課題番号: 23520430

研究題目: アダプテーション理論を応用したメディア横断的物語更新理論の構築

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

研究の目的:

さまざまなメディア・ジャンルを横断して物語が作り直される広範な文化的現象を対象とし、「アダプテーション理論」を応用しながら、主流文化からサブカルチャーまでを射程に収めた「メディア横断的物語更新理論」の構築とその理論的体系化、および実践をめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員	2009 年 4 月～2011 年 3 月
日本ソール・ベロー協会・代表理事	2008 年 4 月～現在に至る
関西英語英米文学会・理事	2008 年 4 月～現在に至る

4. 石割 隆喜 准教授

1970 年生。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手・講師・助教授・准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:アメリカ文学。

4-1. 論文

石割隆喜「小説の非人間化——あるいはポストヒューマン的読書」日本英文学会(編)『第83回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 126-128, 2011/9

4-2. 著書

森岡裕一, 石割隆喜他(共著)『西洋文学——理解と鑑賞』大阪大学出版会, 256p., pp. 164-176, 2011/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石割隆喜(書評)「下河辺美知子編『アメリカン・テロル——内なる敵と恐怖の連鎖』」『アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会), 47, pp. 70-75, 2011/3

4-4. 口頭発表

石割隆喜「小説の非人間化——あるいはポストヒューマン的読書」日本英文学会第83回大会:ポストヒューマンの文学表象——動物・近代・テクノロジー, 日本英文学会, 北九州市立大学北方キャンパス, 2011/5『第83回大会 Proceedings』pp. 126-128, 2011/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第 22 回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2010 年度～2012 年度、若手研究(B)、代表者:石割隆喜

課題番号: 22720101

研究題目:「小説」論的観点からのピンチョン研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2011 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

本研究は、トマス・ピンチョンの代表作『重力の虹』のイラストレーション化がピンチョン文学のみならず今日の文学世界全体の中でどのような意味をもつのかを明らかにするために、現代アート作家ザック・スミスによる『重力の虹』イラスト作品全755枚を、所蔵するウォーカー・アート・センター(アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス市)へ赴き現地調査し、「小説」論的ポストモダニズム研究というべき観点からのピンチョン研究を実践的側面から推進してゆこうとするものである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員	2011年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会関西支部・評議員	2011年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部・大会準備委員	2010年4月～2011年3月

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriell College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriell College, Oxford University 卒業退学(MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員(1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

HARVEY, A. S. Paul , *Saint Mary 100*, Yamaguchi Shoten, 118p., 2011/10
HARVEY, A. S. Paul , *Manyoshu365*, Yamaguchi Shoten, 425p., 2011/8
HARVEY, A. S. Paul , *Isaiah Isaiah Bright Voice*, Yamaguchi Shoten, 95p., 2011/6
HARVEY, A. S. Paul , *Great China I*, Yamaguchi Shoten, 155p., 2011/3
HARVEY, A. S. Paul , *Saint John 550*, Yamaguchi Shoten, 126p., 2011/2
HARVEY, A. S. Paul , *Gospel 365*, Yamaguchi Shoten, 146p., 2010/9
HARVEY, A. S. Paul , *Song for Islam*, Yamaguchi Shoten, 84p., 2010/5

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻:アメリカ文学。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代 福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：テレーザ・シュペヒト

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	9	5	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	3	1	1	0	0
2011	3	1	1	0	0
計	6	2	2	0	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした地域文化論的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 *Forschungskolloquium* を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、外国人教師による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、言語文化研究科所属の併任教員および学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、プロジェクト研究や共同研究への積極的な参画をとおして、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこなう。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。新たな授業科目として、「中欧文化論」を開講した。ノヴァコヴィッチ外国人教師（2010 年度）およびシュペヒト特任講師（2011 年度より）は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめた。大学院では、より高度な内容の文献演習を開講するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、赤尾光春、藤田恭子、細見和之、阪井葉子を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

2. 研究

三谷教授はグローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学」および科研費基盤研究(C)の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。吉田准教授は、日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業でドイツ・ライプツィヒ大学文化学学科に所属し、ドイツにおける児童文学の成立についての研究をおこなった。シュペヒト特任講師は、「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」の支援を受けてドイツで調査を実施した。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。海外での研究活動も活発で、三谷教授も資料調査に出かけているほか、大阪大学交換留学制度により、長期の留学を果たした。

3. 社会連携

三谷教授と吉田准教授は、阪神ドイツ文学会、日本 18 世紀学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、また関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信・還元を図った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。論文作成の工程管理は、これまで個別指導による部分が主であったが、今後は全ての学生に共通の問題として、

指導を強めたい。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

2. 研究

三谷教授と吉田准教授は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究(短期調査を含む)を展開、また日本学術振興会特別研究員への応募もおこなった。今後は、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをおして、目標レベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	1	1
2011	0	0	0
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

大槻裕子 「ゲーテとスピノザ主義」 2010/10

主査：三谷研爾 副査：入江幸男、津田保夫、吉田耕太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(0)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	3(2)
2011	2(2)	1(1)	2(2)	0(0)	1(1)	6(6)
計	3(2)	1(1)	4(4)	0(0)	1(1)	9(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	1	2	2	0	1	6
2011	0	3	3	0	0	6
計	1	5	5	0	1	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「J. P. ヤコプスン『ニルス・リューネ』における「例外者」 —〈アラディン型〉人物類型の変成史との関係から—」『独文学報』第26号, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 53-73, 2010/11. (査読有)

奥山裕介「植物学から物語へ —J. P. ヤコプスン『モーウンス』における「自然」の表象—」『待兼山論叢(文学篇)』第44号, 大阪大学文学会, pp. 69-85, 2010/12. (査読有)

【2011年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「歓楽のディアレクティク 都市コペンハーゲンにおけるティヴォリ遊園と群衆の表象」『独文学報』第27号, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 5-27, 2011/11. (査読有)

飯田皆実「ウーヴェ・テルカンブ『塔』(2008)における「東ドイツ」像」『独文学報』第27号, 大阪ドイツ文学会, pp. 53-72, 2011/11. (査読有)

小松紀子「フランツ・カフカの動物物語における身体表現」『待兼山論叢(文学篇)』第45号, 大阪大学文学会, pp.85-99, 2011/12. (査読有)

奥山裕介「「大きな世界」との際会 —ヘンリック・イブセン『海の夫人』にみる北欧の「他者性」—」『コンフリクトの人文学』第5号, 大阪大学グローバルCOEプロジェクト「コンフリクトの人文学」国際研究教育拠点, pp. 117-144, 2012/3. (査読有)

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「19世紀デンマーク文学における自然科学者の位置 —〈アラディン型〉と〈ヌラディン型〉をめぐる言説の諸相—」文理シナジー学会, 於: 日本アムウェイ, 2010/5.

奥山裕介「19世紀デンマーク文学におけるユラン地域の表象」大阪大学グローバルCOEプログラム 中欧モダニズム／ナショナリズム／ローカリズム 問題構成と方法論をめぐる若手ワークショップ No.2, 於: 大阪大学, 2010/7.

土谷真理子「ゲーテの『ファウスト』におけるメフィストフェレスの言語戦略」「オイフォーリオンの会」於: 大阪教育大学, 2010/7.

土谷真理子「Goethes Schweizreisen」, DAAD「Germanistik Meisterklasse」於ドイツ・ヴァイマール市, 2010/7.

奥山裕介「19世紀デンマーク文学にみるスリースヴィ(シュレスヴィヒ)戦争の記憶 —J. P. ヤコプスン『ニルス・リューネ』における〈デンマーク性〉の問題—」大阪大学ドイツ文学会, 於: 大阪大学, 2010/11.

奥山裕介「J. P. ヤコプスンのアラベスク詩」文理シナジー学会, 於: 日本アムウェイ, 2010/11.

土谷真理子「ゲーテのスイス旅行」クヴェレ会, 2011/2.

【2011 年度】

[博士後期]

小松紀子「フランツ・カフカの動物物語」クヴェレ会, 2011/7.

奥山裕介「セーアン・キアゲゴとモダン都市空間」キェルケゴール協会第 12 回研究大会, 於: 大谷大学, 2011/6.

奥山裕介「リルケ『マルテ・ラウリツ・ブリゲの手記』における近代デンマーク社会」阪神ドイツ文学会第 206 回研究発表会, 於: 大阪市立大学, 2011/7/13.

飯田皆実「旧東ドイツ地方都市における文化的アイデンティティ再構築と作家の世代—ドレスデン・ノイマルクト広場再建プロジェクトを例に」戦争社会学研究会・「世代と歴史」研究会合同シンポジウム, 関西大学, 2011/12.

飯田皆実「想起される日常—転換文学をめぐる一考察」Inter-Uni Seminar KYUSHU/OSAKA 2012, 2012/3.

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2011 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010 年度 学部: 0 名 大学院: 2 名 (計 2 名)

2011 年度 学部: 0 名 大学院: 2 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2010 年度: 0 名 2011 年度: 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度: 0 名 2011 年度: 0 名

9. 刊行物

2010 年度 『独文学報』26 号

2011 年度 『独文学報』27 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2010年10月
大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2011年11月
Inter-Uni Seminar KYUSHU/OSAKA 2012	2011年3月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会	2010年7月、10月、11月
院生研究発表会	2011年7月、10月、11月

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

1-1. 論文

三谷研爾 「マイナー文学」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp.177-189, 2011/10

三谷研爾 「トーマス・マン『ブッデンブローック家の人びと』」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 217-230, 2011/10

三谷研爾 「写真と文学受容 フリントノルカス『フランツ・カフカはプラハに生きていた』に見る相互メディア性」日本オーストリア文学会(編)『オーストリア文学』(日本オーストリア文学会), 27, pp. 42-55, 2011/3

1-2. 著書

Mitani, Kenji (ed.), *Between "National" and "Regional". Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures*, School of Letters, Osaka University, 102p., 2012/3

園囿寺司, 伊東信宏, 三谷研爾(共編著)『コンフリクトのなかの芸術と表現 文化的ダイナミズムの地平』大阪大学出版会, 371p., 2012/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

三谷研爾 「プラハの作家カフカ — 言語と民族の境界を生きる」GCOE 土曜市民セミナー, 北海道大学グローバル COE「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」, 北海道大学, 2011/10

Mitani, Kenji, "Literature and Urbanisation. An Intertextual Approach to Prague German Language Writers" International Workshop OSAKA-PRAHA 2011:Between "National" and "Regional". Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, Institute for Musicology & Institute for German Studies, Osaka University, Charles University Prague, 2011/3

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号: 19520220

研究題目: 多言語地域における文化資源蓄積の比較研究

研究経費: 2010年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、ボヘミアとシレジアというふたつの多言語地域の文化環境にかんする学知の集積状況そのものに注目し、そうした歴史的展開を冷戦期、さらには1990年代以降の中欧地域の政治的・社会的なコンテクストに照らしながら、比較検討をおこなうことを目的とする。そのさいとりわけ、専門家による文献的研究が、博物館や図書館や展覧会などおもに空間メディアによって視覚化され、社会(公衆)へ接続可能な文化資源へと変換されている現状の検証をすすめる。また、両地域における状況を比較対照することによって、ドイツ-チェコ関係およびドイツ-ポーランド関係という、それぞれ固有の歴史的条件に規定される差異の側面を確認するとともに、中欧の多言語地域に共通する問題の位相を明らかにする。以上により、多言語地域研究に関する学術情報が文化資源へと転換・活用され、それがさらなる学知蓄積へと結びついていくプロセスを解明する。

1-6-2. 2011年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号: 23520379

研究題目: ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究経費: 2011年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究課題は、中欧の典型的な多言語・多民族地域だったボヘミアを対象とし、ナショナリズム対立がきわめて深刻化した1890年代～両大戦間期に、ドイツ系知識人によって蓄積された、この地域の文学史・民俗誌的な学術情報のディスクリプション分析をおこなう。それによって、彼らがブラハ以外の周縁地域の文化伝統をいかに理解・表象していたかを検証するとともに、ナショナリズムに拮抗・優越するローカリズムの思考モデルの構造を明らかにし、ナショナルなものを相対化しうるローカルな知の位相に光を当てる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西チェコ/スロバキア協会・会長

2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長

2008年1月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970年生まれ。東京外国語大学外国語学部(ドイツ語学科)卒。2007年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位修得退学。学術修士(東京外国語大学)。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009年4月より現職。専攻:ドイツ文化史・思想史。

2-1. 論文

吉田耕太郎 「子どもとしての民衆へのメルヒェン」大阪大学文学研究科(編)『待兼山論叢(文学篇)』45, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-20, 2011/11

吉田耕太郎 「文化としてのシレジア」大阪大学ドイツ文学会(編)『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 26, pp. 121-137, 2011/10

吉田耕太郎 「教養小説の系譜」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 16-29, 2011/10

吉田耕太郎 「ユートピア文学の系譜」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 135-148, 2011/10

2-2. 著書

吉田耕太郎, 富永茂樹『啓蒙の運命』名古屋大学出版会, pp. 12-38, 2011/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

吉田耕太郎「子供の身体をめぐる言説—18世紀ドイツ語圏の場合」Inter-Uni Seminar (九州大学), 2012/3/16

吉田耕太郎「18世紀の子ども—モード雑誌のなかの子供の記述を例に」阪神ドイツ文学会(大阪大学), 2011/4/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度、研究活動スタート支援、代表者:吉田耕太郎

課題番号: 21820022

研究題目: 雑誌メディアによる18世紀の情報空間の変容

研究経費: 2010年度 直接経費 960,000円 間接経費 288,000円

研究の目的:

18世紀ドイツ末に出版されはじめたモード雑誌は、次から次へと登場するモードという一過性の情報を伝えるメディアであった。このモード雑誌は、複数の人によって繰り返し読まれる情報の提供を目的とするこれまでのメディアと比較すると、まったくことなる仕方を受容されたメディアであった。このモード雑誌という印刷メディアを研究対象とすることで、18世紀ドイツの印刷メディアの変遷を明らかにすることが本研究の目的である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本独文学会・企画委員	2011年6月～現在に至る
ゲーテ協会関西支部・理事	2011年6月～現在に至る
日本18世紀学会・編集委員	2009年12月～2011年12月

3. テレーザ・シュペヒト 特任講師

1989 - 1998 Schulbildung und Abitur am König-Wilhelm-Gymnasium Hörter; 1999 - 2005 Studium des Internationalen Informationsmanagements an der Universität Hildesheim (Schwerpunkt: Angewandte Sprachwissenschaft und Literatur); 2007 - 2010 Mitarbeiterin am Lehrstuhl für Neuere deutsche Literatur und Literaturtheorie von Prof. Dr. Dieter Burdorf an der Universität Leipzig; 2011 Promotion zum Thema "Transkultureller Humor in der türkisch-deutschen Literatur der Postmigration" 専攻:ドイツ文学。

3-1. 論文

SPECHT, Theresa, "Was ist deutsch? Humorvolle Inszenierungen kultureller Identität in der türkisch-deutschen Literatur der Postmigration" *Zeitschrift für Studien zur deutschen Sprache und Literatur. Istanbul Beiträge*, 2-2011, pp. 5-20, 2011/10

3-2. 著書

SPECHT, Theresa, *Transkultureller Humor in der türkisch-deutschen Literatur*, Königshausen & Neumann, 369p., 2011/12

SPECHT, Theresa, “‘Du nicht kommen in unser Land’. Ästhetische Inszenierungen migrantischer Lebenslagen in ‘Ich Chef, du Turnschuh’ und ‘Soulkitchen’”, in: Scholz-Hänsel Michael, Franziska Eißner, *Armut in der Kunst der Moderne*, Jonas Marburg, pp. 201-210, 2011/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

SPECHT, Theresa, “Subversive Performances des ‘Moslem’ in der türkisch-deutschen Gegenwartsliteratur”, 10. Workshop des Netzwerks Terrorismusforschung: Terrorismus und (Inter-)Kulturalität, NTF (Netzwerks Terrorismusforschung), Universität Mainz, 2012/3

SPECHT, Theresa, “Komische Aspekte in Erwin Einzingers neuem Gedichtband *Die virtuelle Forelle*”, Seminar zur österreichischen Gegenwartsliteratur in Anwesenheit des Autors Erwin Einzinger, Nozawa Onsen, 2011/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 1 准教授 1 外国人教師 1 助教 0

教授：和田 章男

准教授：山上 浩嗣

外国人教師：アニエス・ディソン

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	5	5	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	2	2	1	1	0
2011	1	1	2	0	1
計	3	3	3	1	1

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身に付ける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・フランス文学の概説の講義などを通じて基礎知識を吸収するとともに、講読、作文、会話など応用力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。
- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を推進する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。

3. 社会連携

- ・朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、一般市民を対象としてフランスの文学、芸術、文化を紹介する。
- ・フランス文学研究室のホームページを充実し、研究内容をわかりやすく紹介することに努める。
- ・「ウェブ・ガリア」により、研究室発行機関誌『ガリア』の掲載論文を広く公開する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、中世から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2010 年度は 2 本、2011 年度は 1 本の卒業論文が提出されたが、いずれも優れた内容の論文となった。
- ・大学院生の研究指導においては、各セメスターに 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2010 年度は修士論文 2 本が提出され、そのうち 1 名が博士後期課程に進学した。2011 年度の博士前期課程修了者 1 名は、博士後期課程には進学せず、一般企業に就職した。
- ・2010 年度には学部生 2 名が、2011 年度には学部生 1 名が、それぞれ大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズの暗唱大会に参加。フランス語実践能力研鑽の良い機会となった (2011 年度は本選に進んだ)。
- ・2011 年度には、詩人アヌ・ポルチュガル氏および 19 世紀フランス文学研究者ジゼル・セジャンジャール氏の講演会を開催した。

2. 研究

- ・2010 年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会で博士後期課程学生 1 名が、関西支部大会で同 2 名が、それぞれ口頭発表を行った。
- ・2011 年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会で博士後期課程学生 1 名が、関西支部大会で同 2 名が、それぞれ口頭発表を行った。
- ・2010 年度、日本フランス語フランス文学会の学会誌に博士後期課程学生 1 名の論考が掲載された。
- ・2011 年度、日本フランス語フランス文学会の学会誌に博士後期課程学生 1 名の論考が掲載された。
- ・2010 年度、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に博士後期課程学生 1 名の論考が掲載された。
- ・2011 年度、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に博士後期課程学生 2 名の論考が掲載された。

- ・2011年度、博士後期課程学生の1名がフランスの学術雑誌に論文の掲載を認められた。
- ・2010年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として9月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』は50号記念号として発刊、6本の学術論文（うち4本はフランス語での執筆）、および「時の経過」というテーマの下に20本の論考が投稿され、記念号にふさわしい充実した内容となった。
- ・2011年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として10月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』51号を発刊、8本の学術論文（うち4本はフランス語で）を取めた。
- ・『ガリア』所収論文は発刊の1年後に「ウェブ・ガリア」に掲載されるが、サイトへのアクセス数も順調に伸びている。

3. 社会連携

- ・教員1名が朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、2週間に1回約20名の市民受講生を対象にして、フランス文学、芸術、文化を紹介した。
- ・教員1名が放送大学客員准教授としてラジオ講座「フランス語入門II」を担当するとともに、2012年開講のテレビ講座「フランス語入門I」の教材作成を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。2011年度の卒業生が文学部賞を受賞したことは特筆に値する。

この2年間に2人の学者、詩人、小説家の講演会を行い、日仏交流を推進するとともに、学生たちから活発な質問が出されたことは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。実作者との交流は文学研究を行う者にとって大きな刺激となっている。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

3. 社会連携

教員の1名が朝日カルチャーセンターおよびその他の市民向けの講座で、フランス文学、芸術、文化を紹介し、別の1名が放送大学客員准教授としてラジオ講座「フランス語入門II」を担当するとともに、2012年開講のテレビ講座「フランス語入門I」の教材作成を行うことにより、社会連携の目標も達成している。また研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」のアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	2	3
2011	0	0	0
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

林千宏 « La poétique visuelle de Michel Quillian, poète héritier de Ronsard : les divers aspects des expressions visuelles de *La Dernière Semaine* (1597) » (ロンサールの継承者ミシェル・キリアンにおける視覚的詩学：『黙示週』(1597)における視覚表現の諸相) 2011/2
主査：和田章男 副査：上野修、岩根久、山上浩嗣

【論文博士】

藤田義孝 「サン＝テグジュペリにおける物語形式の探求—5 作品の「語り」分析を通じて—」 2010/11

主査：和田章男 副査：森岡裕一、金崎春幸、山上浩嗣

川本真也 「マルセル・ブルーストの地理的エクリチュール—『失われた時を求めて』の「土地の名」の挿話をめぐって—」 2011/1

主査：和田章男 副査：服部典之、金崎春幸、山上浩嗣

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集 その他	計
2010	3(3)	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	5(5)
2011	1(1)	0(0)	2(2)	0(0)	2(0)	5(3)
計	4(4)	1(1)	3(3)	0(0)	2(0)	10(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	3	2	0	0	5
2011	1	3	2	0	0	6
計	1	6	4	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

安部朋子 「ディドロの美術批評『サロン』とブッサン絵画」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学関西支部), 17, pp. 3-14, 2011/3

安部朋子 「ディドロ『運命論者ジャックとその主人』における「時の経過」」*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 50, pp. 124-131, 2011/3

廣田大地 « La mise en page des *Fleurs du Mal*: réflexions sur la ligne de blanc et les marges » 『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会), 97, pp. 61-76, 2010/8

村上彩子 「『ノートル＝ダム・ド・パリ』におけるフランス王—消滅したルイ 11 世—」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 44, pp. 87-101, 2010/12

山本健二 「ランボーによる書き換えの意図 — 「錯乱 II - 言葉の錬金術」に引用された韻文詩をめぐって—」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学関西支部), 17, pp. 53-64, 2011/3

【2011 年度】

〔博士後期〕

青木佑介 « L'attente inassouvie chez Marguerite Duras : "La théorie des besoins" dans *Le Square* », *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 51, pp. 71-80, 2012/3

廣田大地 « La transgression du discours lyrique chez Baudelaire » 『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会), 99, pp. 61-79, 2011/8

廣田大地 « La poétique de la fenêtre chez Baudelaire », *L'Année Baudelaire*, 13-14, Paris, Honoré Champion, pp. 195-210, 2011/12

廣田大地 « Espace et Poésie chez Baudelaire : typographie, thématique et énonciation », パリ第3=新ソルボンヌ大学博士論文, 367p., 2011/12/6 口頭試問に合格

村上(黒川) 彩子 « Deux figures du roi dans *Notre-Dame de Paris* et *Marion de Lorme* », *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 51, pp. 1-10, 2012/3

(2)口頭発表

【2010 年度】

〔博士後期〕

安部朋子 「ディドロの美術批評『サロン』とプッサン絵画」 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 奈良女子大学, 2010/12/4

安部朋子 「ディドロ『運命論者ジャックとその主人』と時間」 大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2011/3/5

廣田大地 「『悪の花』後期詩篇に見る「叙情詩」の侵犯 — 語りの空間、語られる空間」 日本フランス語フランス文学会全国秋季大会, 南山大学, 2010/11/16

山本健二 「ランボーと 19 世紀「科学」—カリカチュアと公衆衛生の発展を通して—」 大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2010/10/2

山本健二 「ランボーによる書き換えの意図—「錯乱 II - 言葉の錬金術」に引用された韻文詩をめぐって—」 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 奈良女子大学, 2010/12/4

【2011 年度】

〔博士後期〕

青木佑介 「マルグリット・デュラス『モデラート・カンタービレ』における「隔たり」と「侵入」」 日本フランス語フランス文学会関西支部大会、大阪市立大学、2011/11/12

青木佑介 「マルグリット・デュラスの作品における「場」の変化—1950 年代の三作品を中心に」 大阪大学フランス語フランス文学会研究会、大阪大学、2012/3/10

太田晋介 「フランシス・ポンジュと戦後美術批評の試み « Y a-t-il des mots pour la peinture ? »」 大阪大学フランス語フランス文学会研究会、大阪大学、2011/9/24

太田晋介 「抵抗詩運動におけるフランシス・ポンジュの立ち位置をめぐって」 日本フランス語フランス文学会関西支部大会、大阪市立大学、2011/11/12

黒川彩子 「ユゴー『マリオン・ド・ロルム』における国王の表象—ルイ 13 世と「欺かれた人々の日」」 日本フランス語フランス文学会春季大会、一橋大学、2011/5/28

廣田大地 « Baudelaire numérisé », Colloque international « Baudelaire dans le monde : Traditions critiques et traductions », Bibliothèque historique de la ville de Paris, 2011/12/10

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

2011年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2011年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

廣田大地 博士後期課程単位修得退学、大谷大学、助教、2012/3

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2010年度:1名 2011年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度:0名 2011年度:0名

9. 刊行物

2010年度 *GALLIA*(機関誌:大阪大学フランス語フランス文学会) n°50

2011年度 *GALLIA*(機関誌:大阪大学フランス語フランス文学会) n°51

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第70回)(国内学会)	2012年3月10日
Gisèle Séginger 講演会 « Flaubert et le roman balzacien »	2011年11月21日
大阪大学フランス語フランス文学会(第69回)(国内学会)	2011年9月24日
Anne Portugal 講演会 « Tout contre l'image — Séductions et pièges de l'image en poésie »	2011年4月18日
大阪大学フランス語フランス文学会(第68回)(国内学会)	2011年3月5日
大阪大学フランス語フランス文学会(第67回)(国内学会)	2010年10月2日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 和田章男教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職。専攻:フランス文学。

1-1. 論文

Wada, Akio, "Approche génétique des épisodes du théâtre dans *À la recherche du temps perdu*", *Proust aux brouillons*, Brepols, pp. 269-284, 2011/12

和田章男 「書簡体小説と視点」『西洋文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 56-66, 2011/10

和田章男 「スタンダール『赤と黒』」『西洋文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 193-203, 2011/10

Wada, Akio, "La formation des noms de personnages dans la genèse de *À la recherche du temps perdu*", *Comment naît une oeuvre littéraire ? Brouillon, contextes culturels, évolutions thématiques*, Honoré Champion, pp. 233-243, 2011/3

1-2. 著書

和田章男他(共著)『西洋の文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 56-66, pp. 193-203, 2011/10

Wada, Akio 他(共編), *Cahier 26*, Brepols, 2010/12

和田章男他(共著)『文学作品が生れるとき—生成のフランス文学』京都大学学術出版会, pp. 399-422, 2010/10

和田章男(単著)『フランス表象文化史 — 美のモニュメント』大阪大学出版会, 257p., 2010/9

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「創造への誘い — 牛場暁夫『失われた時を求めて』交響する小説 —」『三田文学』(三田文学会), 107, 三田文学会, pp. 288-289, 2011/11

和田章男 「ロココの女王 — 二人のアントワネット」『デュフリ全集Ⅱ』浜松市楽器博物館, pp. 9-12, 2011/11

和田章男 「「遊び」の文化:ロココ」『デュフリ全集Ⅰ』浜松市楽器博物館, pp. 8-12, 2011/9

和田章男 「小黒昌文『プルースト芸術と土地』」『cahier』(日本フランス語フランス文学会), 6, pp. 32-33, 2010/9

1-4. 口頭発表

Wada, Akio, "Les Goncourt dans les manuscrits de Proust", 国際学会:Proust, l'œuvre des manuscrits, École Normale Supérieure, 2012/3

和田章男 「プルーストと『ゴンクールの日記』」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2011/10

Wada, Akio, "Proust et Leconte de Lisle" パリ第3大学ロベール教授セミナー講演, Université de Paris III, 2011/3

Wada, Akio, "Proust et la critique flaubertienne", 国際学会:Proust face à l'héritage du XIX^e siècle : Filiations et ruptures, 関西日仏学館, 2010/11

和田章男 「「印刷物の生成論」の先駆者プルースト」日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ:印刷論の生成論, 日本フランス語フランス文学会, 南山大学, 2010/10

Wada, Akio, "Proust et Balzac : la méthode de travail des deux écrivains", 国際学会:Balzac et alii, génétiques croisées, Histoire d'éditions, Groupe international de recherches balzaciennes, Université Paris-Diderot, Maison de Balzac, 2010/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号: 22520312

研究題目: 草稿資料に基づくプルーストと同時代文学事象の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究課題は、作家の文学観の形成および小説創造に同時代の文学事象がどのように影響したかを明らかにすることを目的とする。主たる観点は二つある。ひとつは、作家の草稿帳 75冊に見られる同時代の作家・作品への言及を網羅的に抽出し、新聞・雑誌等の文芸ジャーナリズムや出版状況の調査によって、プルーストの言及や引用の源泉を実証的に跡づけるとともに、作品生成への関与の有様を考察する。二つ目は、過去の作家に対するプルーストの見方を、受容史・批評史の中に位置づけ、同時代批評との関係を明瞭にすることである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会・会長	2008年4月～現在に至る
日本プルースト研究会・幹事長	2008年4月～2012年3月
関西プルースト研究会・世話役	2005年9月～現在に至る

2. 山上 浩嗣 准教授

1966年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学。パリ第4=ソルボンヌ大学博士(2010年)。東京大学助手、関西学院大学専任講師、同准教授、同教授を経て、2010年より現職。放送大学客員准教授も務める(2005年～)。専攻:フランス文学・思想。

2-1. 論文

山上浩嗣「一七世紀パリにおける宗教と政治—ジャンセニスムとパスカル」田中きく代、中井義明、朝治啓三、高橋秀寿(共編著)

『境界域からみる西洋世界—文化的ボーダーランドとマージナリティ』ミネルヴァ書房, pp. 133-152, 2012/3

山上浩嗣「西洋文学のなかのキリスト教」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 80-93, 2011/10

山上浩嗣「古典主義とロマン主義」森岡裕一(編)『西洋文学—理解と鑑賞』大阪大学出版会, pp. 108-121, 2011/10

Yamajo, Hirotsugu, “La dignité de l’homme selon Pascal” *Gallia*, (大阪大学フランス語フランス文学会), 50, pp. 13-22, 2011/3

山上浩嗣「パスカルにおける人間の尊厳」向井考史、「キリスト教的視点からの人間の尊厳と深淵」研究センター(共編)『人間の光と闇—キリスト教の視点から』関西学院大学出版会, pp. 105-125, 2010/9

2-2. 著書

原和之, 山上浩嗣(共著)『フランス語入門 I('12)』放送大学教育振興会, pp. 113-202, 2012/3

Yamajo, Hirotsugu, *Pascal et la vie terrestre. Épistémologie, ontologie et axiologie du « corps » dans son apologétique*, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』第52巻 モノグラフ編, 426p., 2012/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

山上浩嗣「フランス思想における西洋とその他者—モンテーニュ、ヴォルテール、ディドロ」大阪大学文学研究科共同研究「西歐近代文学における文明の自画像と他者像」シンポジウム, 平成 22 年度大阪大学文学研究科共同研究(山上班), 福岡ガーデンパレス, 2011/3

Yamajo, Hirotsugu, “Pascal et l’esprit de finesse”, Journée d’études dix-septiémistes françaises au Japon, 早稲田大学グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」, 早稲田大学早稲田キャンパス, 2010/11

山上浩嗣「パスカルにおける「愛」: charité, concupiscence, amour-propre」, 第 67 回大阪大学フランス語フランス文学研究会, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2010/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号: 23520377

研究題目: パスカルの人間学およびその起源と影響の研究

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

本研究課題「パスカルの人間学およびその起源と影響の研究」は、1)パスカルの人間学を、草稿資料をも用いて、彼自身のテキストに即して総合的に観察すること、2)パスカルの人間学の「起源」の局面を、とりわけモンテーニュからの影響を通じて検討すること、3)パスカルの人間学の「影響」の諸相を、同時代およびやや後年の著者たちの思想との比較を通じて考察すること、を主たる目的とする。これら三つの方向性は、近年飛躍的に発展してきたパスカルおよびポール＝ロワイヤル研究の動向に対応している。伝統的な研究主題に対して新たな知見と方法を適用することで、多角的にパスカル文献学の進展を図るものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会関西支部・実行委員	2010 年 7 月～2011 年 7 月
日本フランス語フランス文学会・学会誌編集委員	2007 年 7 月～2011 年 7 月

3. アニエス・ディソン 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の大学教授資格、記号学・言語学博士。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982 年より現職。専攻:フランス文学・語学。

3-1. 論文

DISSON, Agnès, “Anne Portugal : *La formule flirt*” *Cahier critique de Poésie*, 21, CIPM Marseille, p. 94, 2011/2

DISSON, Agnès, “Pierre Alferi : *Compressing and Disconnecting*” *SubStance, A review of theory and literary criticism*, 39-129, University of Wisconsin Press, USA, pp. 78-90, 2010/10

DISSON, Agnès, “Suzanne Doppelt : *Lazy Susie*” *Cahier critique de Poésie*, 20, CIPM Marseille, p. 109, 2010/9

DISSON, Agnès, “Le cheval noir de la prose : sur *Demain je meurs*, de Christian Prigent” *Il Particolare, numéro spécial Christian Prigent*, pp. 143-149, 2010/7

DISSON, Agnès, “Pierre Alferi : *Comme au cinéma*…” Jean-Louis Leutrat(編) *Cinéma & Littérature, le grand jeu*, Lille, De l’incidence, pp. 251-260, 2010/4

3-2. 著書

DISSON, Agnès, Véronique Montémont(編), *Jacques Roubaud, compositeur de mathématique et de poésie*, Éditions Absalon, Nancy, 438p., 2011/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

DISSON, Agnès, “Devenir plante — Ryoko Sekiguchi, Suzanne Doppelt, Justine Landau” 20th-21th Century French and Francophone Studies International Colloquium: Crossings, Frictions, Fusions / Traversées, frictions, fusions, Renaissance Hotel, Long Beach, CA, USA, 2012/3

DISSON, Agnès, “Jacques Roubaud, poète et prosateur : jeux de langage et création lexicale” 日本フランス語学会 2011 年7月談話会: Jeux de mots ; une littérature à la frontière de la linguistique, 日本フランス語学会, 跡見学園女子大学文京キャンパス, 2011/7

DISSON, Agnès, “La poésie contemporaine et la vie silencieuse du végétal” 日本フランス語フランス文学会 2011 年度春季大会ワークショップ: Des devenirs-végétaux en littérature : aperçus de la flore contemporaine, 日本フランス語フランス文学会, 一橋大学, 2011/5

DISSON, Agnès, “Jacques Roubaud : *la Grèce aller-retour*” Colloque International École Pratique des Hautes Études / Sorbonne Nouvelle: L’héritage greco-latin dans la littérature contemporaine, École Pratique des Hautes Études / Sorbonne Nouvelle, 2011/2

DISSON, Agnès, “Jacques Roubaud et la poésie japonaise”, Université Waseda, 2010/7 (Avec projection du film (réalisation Agnès Disson / Samson Sylvain) : Jacques Roubaud, Tokyo encore, 5 décembre 2009)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: アニエス・ディソン

課題番号: 23520378

研究題目: フランス現代詩研究—総合的および分析的見地から

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

In-depth analysis of historical context, formal and technical procedures of Contemporary French poetry today, in order to draw an extensive and comprehensive diagram of its recent developments in the 20th and 21st century (influences, filiations, common ground and divergences) and to attempt a scientific definition of the new notion of “Extrême contemporain” (extreme contemporary literature).

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-19 英語学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：大庭 幸男、岡田 禎之、加藤 正治、神山 孝夫

助教：吉本(樺沢)真由美

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
61	2	7	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	15	0	3	0	2
2011	14	2	1	1	2
計	29	2	4	1	4

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

大学院に關しての目標は、(1)生成文法や意味論、機能文法、語用論、言語変化論、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2)修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3)国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1)統語論、意味論、機能文法、語用論、音声学、言語変化論、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2)卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるように教育・指導すること、(3)中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や授業形態等に工夫を行うことや、研究室の

活動報告書を兼ねている HLC News を刊行し、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に送付することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約 450 部を送付する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

学部では、学校文法、生成文法理論、機能文法理論、意味論、語用論関係の講義と演習のほか卒業論文演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を刊行し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告をした。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 10 本、口頭発表が 23 本と活発に行われた。OUPEL についても予定通り刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催した。

3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会（関西支部）、関西言語学会などの各種学会の理事、編集委員、運営委員等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、編集委員、運営委員等の職

務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	1	1	2
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

伊藤千鶴 “Existential and Possessive Constructions: Complex Predicates and Argument Realization” 2011/9
主査：大庭幸男 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

【論文博士】

岩崎真哉 “The Mismatch Phenomena between Meaning and Form in Japanese and English” 2011/8
主査：大庭幸男 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	2(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	3(1)
2011	4(0)	1(1)	2(0)	0(0)	0(0)	7(1)
計	6(0)	2(2)	2(0)	0(0)	0(0)	10(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	2	2	5	0	0	9
2011	5	4	5	0	0	14
計	7	6	10	0	0	23

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010 年度】

〔博士後期〕

篠原弘樹 「*it*-Cleft 構文：意味と談話のインターフェイス」 *JELS* 28 (日本英語学会), pp. 150-156, 2011/3/10.

Shimamura, Koji “On Elimination of EPP: EPP as Semantic Feature, and Movement for Semantic Considerations,” *KLS* 30 (関西言語学会), pp. 144-155, 2010/6/26.

本田隆裕 「前置詞句の非対格性と擬似受動文について」『待兼山論叢』第 44 号 (大阪大学文学会), pp. 51-67, 2010/12/24.

【2011 年度】

〔博士前期〕

Tanaka, Hideharu “Negation, Focus and Inverse Scope,” *JELS* 29 (日本英語学会), pp. 332-336, 2012/2/29.

〔博士後期〕

篠原弘樹 「*it*-Cleft 構文の語用論—語用論的機能とその効果—」『待兼山論叢』第 45 号 (大阪大学文学会), pp. 67-84, 2011/12/26.

Shinohara, Hiroki “*Ly*-Adverbs and the Acceptability of the *It*-Cleft Construction,” *JELS* 29 (日本英語学会), pp. 304-310, 2012/2/29.

Shimamura, Koji. “*That*-trace Reconsidered: Definiteness and Complementizer Agreement,” *The Proceedings of 12th Tokyo Conference on Psycholinguistics* (Tokyo Conference on Psycholinguistics), pp. 229-248, 2011/11/11.

本田隆裕 「知覚動詞構文の能動文と受動文について」 *KLS* 31 (関西言語学会), pp. 60-71, 2011/6/7.

Honda, Takahiro “On Passivizability of Idioms in English and Japanese,” *OUPEL* 15 (大阪大学英語学研究室), pp. 1-25, 2011/12.

Yamaguchi, Maiko “A Preliminary Replication Study of The Properties of Contrastive Topic Marking in Japanese,” *OUPEL* 15 (大阪大学英語学研究室), pp. 65-78, 2011/12.

(2)口頭発表

【2010 年度】

〔博士前期〕

田中秀治 “Negation and Focus at Interfaces,” Generative Lyceum, 関西学院大学上ヶ原キャンパス, 2010/11/20.

田中秀治 “TP-Internal Focus Phrase in Japanese,” Generative Lyceum, 関西学院大学上ヶ原キャンパス, 2011/3/26.

〔博士後期〕

Imanishi, Yusuke “Right Meets Left,” invited talk at the Linguistic Theory and Japanese Language taught by Prof. Shigeru Miyagawa, MIT, 2010/10/26.

Komoto, Naoko “Internal Past, External Past, and Counterfactuality: Evidence from Japanese,” *Semantics and Linguistic Theory* 20 (SALT 20), The University of British Columbia and Simon Fraser University, 2010/5/1.

篠原弘樹 「*it*-Cleft 構文：意味と談話のインターフェイス」 日本英語学会第 28 回大会, 日本大学, 2010/11/14.

嶋村貢志, 工藤和也, 浅野真也 “Notes on *Koto to* Clause in Japanese,” Generative Lyceum, 関西学院大学上ヶ原キャンパス, 2010/6/19.

嶋村貢志 “*That*-trace Effect: Definiteness and Complementizer Agreement,” Generative Lyceum, 関西学院大学上ヶ原キャンパス, 2010/11/20.

本田隆裕 「知覚動詞構文の能動文と受動文について」 関西言語学会第 35 回大会, 京都外国語大学, 2010/6/26.

Yamaguchi, Maiko “Focus Overriding Effect Is Universal?,” *The English Linguistic Society of Japan 3rd International Spring Forum*, Aoyama Gakuin University, 2010/4/25.

【2011 年度】

〔博士前期〕

亀山里津子「英仏日語における、否定疑問文に対する応答のゆれ」日本言語学会第 143 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2011/11/26.

Tanaka, Hideharu “Negation, Focus and Inverse Scope,” The English Linguistic Society of Japan 4th International Spring Forum, poster presentation, Shizuoka University, 2011/4/24.

田中 秀治「Feature Inheritance to Inner Aspect」関西言語学会第 36 回大会, 大阪府立大学, 2011/6/11.

田中 秀治「TP 領域内の Focus Phrase : 日本語 Wa 助詞に関する一考察」日本言語学会第 143 回大会, 大阪大学, 2011/11/26.

〔博士後期〕

Imanishi, Yusuke “On Q(-particle): A Case Study in Kaqchikel and Japanese,” Mini-Syntax Meeting, MIT, 2011/5/18.

Imanishi, Yusuke “On Q: A Case Study in Kaqchikel and Japanese,” 沖縄理論言語学研究会, 沖縄大学, 2011/6/13.

Imanishi, Yusuke “Universal Grammar and Language Diversity: Sound and Structure,” 総合政策学部研究会, 関西学院大学, 2011/6/29.

Imanishi, Yusuke “How to Merge a Possessor WH in Kaqchikel (Mayan): Non-Uniform Merge and Null Resumption,” Syntax Square, MIT, 2011/11/1.

Imanishi, Yusuke “How to Merge a Possessor WH in Kaqchikel (Mayan): Non-Uniform Merge and Null Resumption,” The 42nd Annual Meeting of the North East Linguistic Society (NELS 42), The University of Toronto, 2011/11/13.

Imanishi, Yusuke “How to Merge a Possessor WH in Kaqchikel (Mayan): Non-Uniform Merge and Null Resumption,” poster presentation, 50th Anniversary of the MIT Graduate Program in Linguistics (Ling 50), MIT, 2011/12/9-10.

Shinohara, Hiroki “*Ly*-Adverbs and the Acceptability of the *it*-Cleft Construction,” The English Linguistic Society of Japan 4th International Spring Forum, Shizuoka University, 2011/4/24.

篠原弘樹「*-ly* 副詞と *it*-Cleft 構文」Kobe Linguistics Club, 同志社大学今出川キャンパス, 2011/7/30.

Shimamura, Koji and Lyn Shan Tieu, “When You Can and Can't See Double: Revisiting Focus Doubling in ASL,” Penn Linguistic Colloquium 36, University of Pennsylvania, 2012/3/26.

吉田亜美「討論における男女間のスピーチアクトの違い」社会言語科学会第 28 回研究発表大会, 龍谷大学深草キャンパス, 2011/9/17.

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2011 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部：1名 大学院：3名（計4名）

2011年度 学部：3名 大学院：3名（計6名）

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

黒川尚彦 博士後期課程 大阪工業大学 講師 2011/4

香本直子 博士後期課程 石川工業高等専門学校 講師 2011/10

村田和久 博士後期課程 大阪学院大学 講師 2012/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7名

2010年度：3名 2011年度：4名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 6名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度：0名 2011年度：0名

9. 刊行物

2010年度 *OLR (Osaka Literary Review)* No. 49

2011年度 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 15

OLR (Osaka Literary Review) No. 50

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 43 回大会	2010 年 11 月 6 日
阪大英文学会 44 回大会	2011 年 10 月 22 日
第 86 回待兼山ことばの会 (大阪言語研究会 167 回公開講演会)	2010 年 5 月 8 日
第 87 回待兼山ことばの会	2010 年 12 月 11 日
第 88 回待兼山ことばの会	2011 年 6 月 26 日
第 89 回待兼山ことばの会	2011 年 12 月 22 日

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949 年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997 年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999 年 4 月より現職。専攻:英語学。

1-1. 論文

大庭幸男 「二重目的語構文と多重 wh 疑問文」『ことばとこころの探究』pp. 26-43, 2012/3

大庭幸男 「英語の同族目的語構文の特異性について」『待兼山論叢』45, pp. 95-118, 2011/12

1-2. 著書

Oba, Yukio (共編), *Osaka University Papers in Linguistics*, 15, 大阪大学文学研究科英語学研究室, 84p., 2011/12

大庭幸男, 岡田禎之(共編著)『意味と形式のはざま』英宝社, pp. 253-265, 2011/5

大庭幸男 『英語構文を探求する』開拓社, 226p., 2011/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY Academic Achievement 2005-2006 の論文 100 選のうち 24graphics に
選ばれる, 大阪大学, 2006/11

大庭幸男 市河賞, 語学教育研究所, 1997/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男
課題番号: 21520507

研究題目: 言語の多様性に対する普遍文法理論の妥当性の検証

研究経費: 2010 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 300,000 円

2011 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究の目的は次の通りである。

(1) 普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」などの理論を正確に理解・把握した上で、これらの理論がどのように概念的な問題点を有しているかについて検討する。

(2) 「純粹の WH 疑問文」について、言語の多様性に関わる言語事実を通言語的に調査し、類型化を行う。具体的には、「純粹の WH 疑問文」の類型化において、WH 句の移動が存在するかしないか、複数の WH 句が移動できるかできないか、文末の疑問終助詞が存在するかしないか、などについて言語タイプごとに調査・整理する。

(3)WH 疑問文に関連する構文、例えば、「問い返しの疑問文」や「多重 WH 疑問文」に関して、さまざまな言語を調査・研究し、類型化を行う。具体的には、WH 句の移動が随意的になる英語タイプの言語、WH 句が移動しない日本語タイプの言語、WH 句が義務的に移動するスラブ語タイプの言語、その他の構文をとる中国語タイプの言語に類型化し、その特性を明らかにする。

(4)最後に、普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」がこれらの通言語的多様性をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を提示する。その後、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会・関西支部・理事	2011年4月～現在に至る
日本学術振興会・科学研究費専門委員(2段英語学)	2011年1月～2011年12月
日本英語学会・特別賞選考委員	2010年4月～現在に至る
日本学術振興会・科学研究費専門委員(2段英語学)	2010年1月～2010年12月
大阪大学英文学会・会長	2009年11月～現在に至る
日本英語学会・広報委員会委員長	2009年6月～2011年3月
日本英文学会 関西支部・編集委員会委員	2009年4月～2011年3月
財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査員	2007年4月～現在に至る
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る
関西言語学会・大会実行委員・運営委員	1993年12月～現在に至る

2. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻:英語学。

2-1. 論文

岡田禎之「名詞句の例外的概念拡張に認められる一般性と特殊性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 123-149, 2012/3

岡田禎之「名詞修飾表現における意味の基づく省略現象」大庭幸男・岡田禎之(共編著)『意味と形式のはざま』(阪大英文学会叢書), 6, 阪大英文学会, pp. 124-135, 2011/4

2-2. 著書

岡田禎之, 大庭幸男(共編著)『意味と形式のはざま』阪大英文学会叢書 6, 阪大英文学会, pp. 124-135, 2011/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Okada, Sadayuki, "On the (ir)regular conceptual expansion of modifiers" 4th International Conference on the Linguistics of Contemporary English (ICLCE4), Osnabrück University, Germany, 2011/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

Okada, Sadayuki, 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第37回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号: 22520496

研究題目: 語彙概念拡張の認可条件

研究経費: 2010年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2011年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

名詞句の概念拡張がどのような条件下で認可されるのかを考察することを目的とした研究である。当初は、比較表現に認められる通言語的な差異を通して、この問題にアプローチしていたが、その他の場合として、因果関係的な文脈における例外的な概念拡張事例の検証や、N like N型の定型表現などの事例を検証することで、より広く一般的な認可条件を特定することを目指している。また、例外的な概念拡張と、それ以外の事例に共通する特性にどのようなものが認められるのか、といった問題も考察している。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・編集委員

2011年10月～現在に至る

阪大英文学会・幹事

2010年10月～現在に至る

3. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

3-1. 論文

加藤正治 『『カンタベリー物語』にみられる否定辞neについて—研究ノート—』中村未樹(編)『英米研究』(大阪大学英米学会), 36, 大阪大学英米学会, pp. 33-53, 2012/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・評議員

2006年4月～2011年3月

4. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:印欧諸語の歴史と印欧語比較言語学、音声学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

神山孝夫 「印欧語比較言語学:成立までの経緯と方法論素描」日本英文学会北海道支部第56回大会, 日本英文学会, 札幌学院大学, 2011/10

神山孝夫 「外国語発音習得における母語音声習慣認識の必要性」日本英語音声学会関東支部第11回研究大会, 日本英語音声学会, 早稲田大学, 2011/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・理事・事務局長

2011年12月～現在に至る

日本歴史言語学会・設立準備委員・暫定事務局

2011年1月～2011年12月

大阪言語研究会・世話人

2008年1月～現在に至る

5. 吉本 真由美 助教

1979年生。2008年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(英語学専攻)単位修得退学。文学修士(大阪大学、2005年)。2010年4月より現職。専攻:英語学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2011年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:吉本真由美

課題番号: 23720249

研究題目: 形式と意味のインターフェース研究—日英語の比較構文に焦点をあてて

研究経費: 2011年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究の目的は、比較構文に対して、統語的アプローチと意味的アプローチの2方向からその特徴を明らかにし、統語と意味の接点を探ることにある。統語的アプローチからは、文構造や文の生成される過程を、意味的アプローチからは、文の意味解釈プロセスを捉える。具体的には、Ordinary Comparatives(OC), Subcomparatives(SC), Phrasal Comparatives(PC)と呼ばれる3つのタイプの比較構文を対象に、文が文法的であると容認される条件が、比較構文のタイプによって異なっていることを示し、その原因を説明する鍵として、比較構文に生じる形容詞や数量詞句の統語・意味特徴に注目する。これによって、比較構文の容認条件や文の生成過程、解釈プロセスが明らかにされることを示す。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-20 日本語学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 5 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：工藤真由美、青木 直子、石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己

准教授：マシュー・バーデルスキー、高木 千恵

助教：白岩 広行

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
38	14	12	0	0	9	8	4	2

※うち留学生 26 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	8	6	1	3	2
2011	14	3	1	4	1
計	22	9	2	7	3

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の中間発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的

な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。

5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度～2011年度)

1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行う機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を2年とも刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. 高校生への授業等を行い、研究成果を社会に広めることにつとめた。
2. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力した。
3. その他、学会の事務局や委員を積極的に引き受けた。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができています。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

社会連携の目標についてもほぼ達成されたと思われる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	3	1	4
2011	4	0	4
計	7	1	8

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

白岩広行	「日本語諸方言における推量形式の通時変化ー推量から確認要求へー」 2011/3 主査：渋谷勝己 副査：工藤真由美、田野村忠温
寺尾綾	「中間言語話者のスタイル切り換え」 2011/3 主査：渋谷勝己 副査：青木直子、石井正彦
朴秀娟	「現代日本語における極性に関わる副詞の記述的研究」 2011/3 主査：工藤真由美 副査：渋谷勝己、田野村忠温
金昴京	「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅ー韓国語母語話者を対象としてー」 2012/3 主査：渋谷勝己 副査：青木直子、高木千恵
河在必	「現代日本語における動詞・条件形の派生用法に関する記述的研究ー「みる」「いう」「おもう」を中心にー」 2012/3 主査：工藤真由美 副査：渋谷勝己、田野村忠温
平塚雄亮	「福岡市方言の言語変化と維持」 2012/3 主査：渋谷勝己 副査：工藤真由美、高木千恵
KUDOYAROVA TATIANA	「現代新聞における略語の使用と定着に関するコーパス言語学的研究」 2012/3 主査：石井正彦 副査：渋谷勝己、青木直子

【論文博士】

三宅知宏

「日本語研究のインターフェイス」 2010/9

主査：工藤真由美 副査：渋谷勝己、田野村忠温

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	1(1)	6(5)	5(0)	2(0)	0(0)	14(6)
2011	2(2)	3(3)	4(0)	0(0)	0(0)	9(5)
計	3(3)	9(8)	9(0)	2(0)	0(0)	23(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	3	1	1	0	0	5
2011	8	2	4	0	0	14
計	11	3	5	0	0	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士前期〕

野間純平「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp. 30-45, 2011/1

白岩広行・森田耕平・齊藤美穂・朴秀娟・森幸一・工藤真由美「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23, pp. 1-31, 2011/2

〔博士後期〕

小原貴子「外来語に現れるファ行子音の音声変異——ハ行音化現象と原音 [f] の流入——」『待兼山論叢 日本学篇』44, pp. 35-52, 2010/12

金妹伶「形態素の自立用法と結合用法の関係——外来語系語基「メール」の通時的な遷移傾向を例に——」『阪大日本語研究』23, pp. 111-129, 2011/2

金昴京「帰国子女の日本語の維持と摩滅」『日本語学』29-14, pp. 183-195, 2010/11

金昴京「第二言語の摩滅研究の潮流」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp. 96-115, 2011/1

クドヤーロワ・タチアーナ「略語の使用とカテゴリーの意味——『朝日新聞』の「コンビニ」を例に——」『阪大日本語研究』23, pp. 131-153, 2011/2

白岩広行「福島方言の問い返し疑問——イントネーションによる区別——」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp. 14-29, 2011/1

白岩広行「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp. 66-95, 2011/1

白岩広行「方言の推量形式における意味変化——談話的機能へ——」『阪大日本語研究』23, pp. 57-77, 2011/2

白岩広行「福島方言の文末イントネーション——意味的な記述への視点——」『日本語文法』11-1, pp. 88-104, 2011/3

白岩広行・森田耕平・齊藤美穂・朴秀娟・森幸一・工藤眞由美「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23, pp. 1-31, 2011/2

工藤眞由美・白岩広行「ボリビアの沖縄系移民社会における日本語の実態」『日本語学』29-22, pp. 4-16, 2010/6

末吉朋美「教師による「語りの場」の意義——ある日本語教師とのナラティブ探求を通して」『阪大日本語研究』23, pp. 79-109, 2011/2

平塚雄亮「福岡市若年層方言のッテ——標準語の「って」と対比して——」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp.55-65, 2011/1

【2011年度】

〔学部〕

森勇太・平塚雄亮・中村光「若年層の命令形の使用範囲——栗東市方言・福岡市方言・湖西市方言の対照から——」『阪大社会言語学研究ノート』10, 1-17, 2012/3

〔博士前期〕

野間純平「大阪方言における「イ」の機能——文末詞「ワイ」「カイ」の意味にもとづいて——」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp. 55-65, 2012/3

〔博士後期〕

クドヤローワ・タチアーナ「現代新聞における略語使用の変動傾向」『計量国語学』28-3, pp. 79-93, 2011/12

酒井雅史「兵庫県神戸市方言における命令表現」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp. 18-29, 2012/3

全紫蓮「副詞「まだまだ」の意味と機能」『待兼山論叢 日本学篇』45, pp. 83-101, 2011/11

平塚雄亮「福岡市方言のAspectマーカにみられる言語変化」『阪大日本語研究』24, pp. 55-74, 2012/2

平塚雄亮「福岡市方言の文末詞モン」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp. 48-54, 2012/3

平塚雄亮・原田走一郎「鹿児島県北薩方言の文末詞セン——用法の変化に注目して——」『日本語の研究』8-1, pp. 1-13, 2012/1

森勇太・平塚雄亮・中村光「若年層の命令形の使用範囲——栗東市方言・福岡市方言・湖西市方言の対照から——」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp. 1-17, 2012/3

脇坂真彩子「対面式タンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス：日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, pp. 75-102, 2012/2

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士前期〕

範玉梅・末吉朋美・脇坂真彩子・大河内瞳・菅田陽平「日本語教育研究の stories——教える側と学ぶ側 双方の視点から捉えた日本語教育の実態——」2010 世界日本語教育大会, 台湾国立政治大学 (中国台湾), 2010/7/31

野間純平「大阪方言の文末詞デとワ」終助詞科学研究発表会, 大阪大学 (大阪府豊中市), 2010/12/12

Sugata Yohei "Why volunteer teachers continue to support foreign children: What can be learned from their life stories," Centre for Language Study International Conference, National University of Singapore Centre for Language Study (Singapore), 2010/12/3

〔博士後期〕

末吉朋美「教師の「語りの場」の効果」2010 世界日本語教育大会, 台湾国立政治大学 (中国台湾), 2011/7/31

範玉梅・末吉朋美・脇坂真彩子・大河内瞳・菅田陽平「日本語教育研究の stories——教える側と学ぶ側 双方の視点から捉えた日本語教育の実態——」2010 世界日本語教育大会, 台湾国立政治大学 (中国台湾), 2010/7/31

朴秀娟「副詞「まるで」が共起する述語についての一考察—非比況の用法を中心に—」日本語学会 2010 年度秋季大会, 愛知大学 (愛知県豊橋市), 2010/10/24

〔その他〕

範玉梅・末吉朋美・脇坂真彩子・大河内瞳・菅田陽平「日本語教育研究の stories——教える側と学ぶ側 双方の視点か

ら捉えた日本語教育の実態——」2010 世界日本語教育大会, 台湾国立政治大学 (中国台湾), 2010/7/31

【2011 年度】

〔博士前期〕

岩井智哉「モラウとイタダクのヲ格名詞・動名詞の違いについて」第 1 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所 (東京都立川市), 2012/3/5

脇坂真彩子・尾形文・瀬井陽子・北澤美樹・菅田陽平「5 人の「生活者」のストーリーを通して見る ideal L2 self と日本語使用」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/21

菅田陽平「外国にルーツを持つ子どもを研究すること——質的インタビューを用いる際の研究倫理の視点から——」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/20

大河内瞳・鈴木麻友「海外で教える日本語教師の葛藤: 他者を自分の枠組みで捉える障壁」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/20

〔博士後期〕

大河内瞳・鈴木麻友「海外で教える日本語教師の葛藤: 他者を自分の枠組みで捉える障壁」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/20

小原貴子「12 歳で来日した中国語母語話者の来日 10~16 ヶ月テンス・アスペクト表現——テイルに先行するテイナイの習得——」第 22 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会, 国際交流基金日本語国際センター (埼玉県さいたま市), 2011/12/11

全紫蓮「副詞「もう」「すでに」の分析」韓国日本語学会 2011 年度 (第 24 回) 国際学術発表会, 誠信女子大学校 (韓国), 2011/9/17

原田走一郎「南琉球八重山黒島方言の形容詞について」日本方言研究会第 93 回研究発表会, 高知城ホール (高知県高知市), 2011/10/21

平塚雄亮「方言の維持と変化——福岡市方言の文末詞タイを例に——」日本語学会 2011 年度秋季大会, 高知大学 (高知県高知市), 2011/10/23

平塚雄亮「高年層のことばからみえてくるもの——福岡市方言を例に——」国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 (JLVC), 国立国語研究所 (東京都立川市), 2012/3/20

森田耕平「動詞中止形の継続相シテイテとシテオリの比較分析——シテオリの用いにくい場合を中心に——」日本語学会 2011 年度春季大会, 神戸大学 (兵庫県神戸市), 2011/5/29

脇坂真彩子「Teletandem による異文化接触: ドイツ人日本語学習者は何を学んだか?」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/20

脇坂真彩子・尾形文・瀬井陽子・北澤美樹・菅田陽平「5 人の「生活者」のストーリーを通して見る ideal L2 self と日本語使用」2011 世界日本語教育大会, 天津外国語大学 (中国), 2011/8/21

KUDOYAROVA TATIANA “Use Patterns and Register Distribution of Abbreviations in “Asahi Newspaper,” The American Association for Corpus Linguistics, Georgia State University (United States), 2011/10/7

KUDOYAROVA TATIANA “Abbreviations in Japanese Newspapers: a Diachronic Study in relation to Polysemisation,” The Philological Society, Worcester College, University of Oxford (United Kingdom), 2012/3/16

Wakisaka Masako “Foreign language learning by eTandem between Germany and Japan: A case study of a learner of Japanese,” International conference on eLearning future 2011, Unitec (New Zealand), 2011/11/30

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2011年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

金 昂京 博士後期課程、福岡大学、外国語講師、2012/4

呉 琴 博士前期課程、中国江蘇省淮海工学院外国語学院、助手教師、2011/6

白岩広行 博士後期課程、大阪大学、助教、2011/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2010年度:2名 2011年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3名

2010年度:2名 2011年度:1名

9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年1回) 定期刊行物

1989年度～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年1回) 逐次刊行物

1999年度～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【学会の開催】

社会言語科学会 第26回研究大会 於 大阪大学豊中キャンパス

2010年9月4日・5日

【事務局の引き受け】

変異理論研究会(研究会)事務局

1989年～現在に至る

[2010～2011年度の研究会開催状況]

第137回 2010年3月6日 於 奈良大学

第138回 2010年5月29日 於 日本女子大学

第139回 2010年7月24日～25日 於 関西大学セミナーハウス「六甲山荘」

第140回 2010年10月23日 於 愛知県豊橋市「こども未来館」

第141回 2011年1月30日 於 大阪大学

第142回 2011年4月23日 於 奈良大学

第143回 2011年5月28日 於 神戸大学

第144回 2011年7月23日～24日 於 関西大学セミナーハウス「彦根荘」

第 145 回 2011 年 10 月 22 日 於 高知県立大学

第 146 回 2012 年 1 月 22 日 於 大阪大学豊中キャンパス

土曜ことばの会 (研究会) 事務局

1980 年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大日本語学研究会 2010 年 9 月 25 日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館

研究発表: 朴秀娟 (D3) 「副詞「ちょっと」における極性との関係」

白岩広行 (D3) 「複数の推量形式を持つ方言について—用法分担の記述—」

講演: 水野義道 「災害時の外国人のための『やさしい日本語』に関する研究について」

阪大日本語学研究会 2011 年 10 月 1 日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館

研究発表: クドヤーロワ・タチアーナ (D3) 「日本の新聞における略語の使用パターンとその変動傾向」

平塚雄亮 (D3) 「高年層のことばは伝統方言とどう違うのか—福岡市方言の場合—」

末吉朋美 (D3) 「教師同士が語り合う場で何が起こるのか」

白岩広行 (助教) 「福島方言の行為指示表現—3・11に考えたこととあわせて—」

12. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 工藤 眞由美 教授

1949 年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、1999 年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998 年 4 月より現職。専攻: 現代日本語文法論、言語接触論。

1-1. 論文

工藤眞由美 「時間的限定性という観点が提起するもの」影山太郎(編)『属性叙述の世界』pp. 143-176, 2012/3

工藤眞由美 「時間的限定性について」『日本研究』51, 韓国外国語大学日本研究所, pp. 4-70, 2012/3

工藤眞由美 「愛媛県宇和島方言の時間の捉え方—標準語の文法を相対化する視点」呉人恵(編)『日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性』pp. 171-185, 2011/6

白岩広行, 森田耕平, 工藤眞由美他 「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-31, 2011/2

白岩広行, 工藤眞由美 「ボリビアの沖縄系移民社会における日本語の実態」『日本語学』29-6, pp. 4-16, 2010/6

工藤眞由美 「現代日本語の否定とアスペクト・テンス」加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美(共編)『否定と言語理論』pp. 308-330, 2010/6

工藤眞由美 「方言接触から見た存在動詞とアスペクト」上野善道(監修)『日本語研究の 12 章』pp. 71-83, 2010/6

工藤眞由美 「愛媛県宇和島方言の可能形式—努力による実現を明示する形式を中心に—」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 29, pp. 275-291, 2010/4

1-2. 著書

Koizumi, Junji, Kudo, Mayumi (共編著), *Conflict Studies in the Humanities Special Issue Migration and Identities: Conflict and the New Horizon*, Osaka University Global COE Program, A Research Base for Conflict Studies in the Humanities, pp. 115-133, 2011/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

工藤眞由美「奥田靖雄による形態論主義批判をめぐって」奥田靖雄没後 10 年シンポジウム, 言語学研究会, 2012/3

工藤眞由美「時間的限定性という観点が提起するもの」韓国外国語大学日本研究所国際シンポジウム: 言語類型論と個別言語研究—TAM システムを中心に—, 韓国外国語大学日本研究所/韓国日本語学会, 韓国外国語大学, 2011/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 工藤眞由美

課題番号: 21520470

研究題目: ボリビア日系・沖縄系移民社会における言語接触

研究経費: 2010 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2011 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は、ボリビア日系移民社会言語の実態を把握すべく、先に実施された、言語生活項目を主とした言語接触調査の分析を行うことで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みるものである。さらに、当該言語に関連する言語接触に関する文献調査を並行することにより、国内における言語接触研究の陥穽を補完することを目的としている。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東北大学高等教育開発推進センター・外部評価委員	2012 年 2 月～2012 年 6 月
大阪大学出版会・理事	2011 年 10 月～現在に至る
人間文化研究機構 国立国語研究所・運営委員	2009 年 10 月～現在に至る
近畿地区大学教育研究会・運営委員(常任委員)	2008 年 4 月～2012 年 3 月
日本言語学会・評議員	2005 年 5 月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2000 年 12 月～現在に至る
日本語学会・評議員	1997 年 6 月～現在に至る

2. 青木 直子 教授

1954 年生。1983 年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。PhD (Trinity College Dublin, 2003)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004 年 4 月より現職。専攻: 第二言語教育学。

2-1. 論文

Aoki, Naoko, "Teacher stories to improve theories of learner/teacher autonomy" C. J. Everhard & J. Mynard (eds.) *Autonomy in language learning: Opening a can of worms*, (International Association for Teaching English as a Foreign Language), pp. 33-36, 2011/12

2-2. 著書

青木直子, 中田賀之(共編著)『学習者オートノミー: 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房, pp. 1-22, pp. 241-263, pp. 265-266, 2011/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

青木直子 『『日本語ポートフォリオ』を使う日本語ボランティアの経験した難しさ』CEFR の日本への文脈化についてのシンポジウム、京都大学人間・環境学研究科外国語教育論講座、日本フランス語教育学会、JACET 教育問題研究会、「グローバル時代の外国語教育」研究グループ、京都大学、2011/7

Aoki, Naoko, “The role of advisor in advisor training” The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research, Hong Kong Institute of Education, 2010/12

Aoki, Naoko, “The role of stories in teacher development” CLaSIC 2010, National University of Singapore, Orchard Hotel, 2010/12 (*Proceedings of CLaSIC 2010*, pp. 36-44, 2010/12)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:青木直子

課題番号: 20520466

研究題目: 在日外国人の日本語学習支援ツール『日本語ポートフォリオ』を媒介とした支援者の学び

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

在日外国人の日本語習得を支援するボランティアが、学習ツール『日本語ポートフォリオ』を使いこなせるようになるまでにはどのような過程を経るのか、その過程で必要なサポートはどのようなものかを明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

International Association of Applied Linguistics Research Network

on Learner Autonomy・Convenor

2011年11月～現在に至る

“Innovation in Language Learning and Teaching” Routledge・編集委員

2006年1月～現在に至る

3. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻:現代日本語学。

3-1. 論文

石井正彦 『『新しい歴史教科書』の言語使用—中学校歴史教科書8種の比較調査から—』『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 24, pp. 1-34, 2012/2

石井正彦 「日本語コーパス言語学の展開」『日本言語文化』(韓国日本言語文化学会), 16, pp. 5-21, 2010/4

3-2. 著書

石井正彦, 斎藤倫明他(共編著) 『これからの語彙論』ひつじ書房, pp. 1-78, pp. 253-291, 2011/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

石井正彦, 金愛蘭 「同格連体名詞の外来語－文法機能からみた外来語の基本語化－」韓国日本語学会第 25 回国際学術発表会, 韓国日本語学会, 2012/3(『韓国日本語学会第 25 回国際学術発表会論文集』pp. 53-59, 2012/3)

石井正彦 「無性格語が特徴語になるとき－国立国語研究所「高校教科書の語彙調査」から－」計量国語学会第五十五回大会, 計量国語学会, 立正大学, 2011/9(『計量国語学』28-3, pp. 115-117, 2011/12)

石井正彦 「マルチメディア・コーパスと言語使用」日本語学会 2010 年度秋季大会:コーパス日本語学の新展開－コーパスと方法論の多様化－, 日本語学会, 愛知大学, 2010/10(『日本語の研究』7-2, pp. 84-86, 2011/4)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員

2009 年 4 月～現在に至る

4. 田野村 忠温 教授

1958 年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

4-1. 論文

田野村忠温 「コーパス言語学と語彙」斎藤倫明・石井正彦(共編)『これからの語彙論』ひつじ書房, pp. 149-161, 2011/12

田野村忠温 「コーパス言語学の新たな展開」『日本語学』30-14(2011 年 11 月臨時増刊号『言語研究の新たな展開』), 明治書院, pp. 95-104, 2011/11

田野村忠温 「日本語コーパスとコロケーション——辞書記述への応用の可能性——」『言語研究』138, 日本言語学会, pp. 1-23, 2010/9

Tanomura, Tadaharu, “Retrieving collocational information from Japanese corpora: Its methods and the notion of “circumcollocate,” Peter Grzybek, Emmerich Kelih and Ján Mačutek (eds.) *Text and Language: Structures・Functions・Interrelations*, Wien, Austria: Praesens Verlag, pp. 213-222, 2010

Tanomura, Tadaharu, “The concept of ‘circumcollocate’ and its significance for lexicography: A discussion with particular reference to the Japanese language,” Isabel Moskowich-Spiegel Fandiño, Begoña Crespo García, Inés Lareo Martín and Paula Lojo Sandino (eds.) *Language Windowing Through Corpora* (Conference proceedings in the electronic format), A Coruña, Spain: Universidade da Coruña, pp. 873-879, 2010

4-2. 著書

- 荻野綱男, 田野村忠温(共編著)『講座 IT と日本語研究 3 アプリケーションソフトの応用』明治書院, pp. 7-97, pp. 219-238, 2011/10
- 荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究 6 コーパスとしてのウェブ』明治書院, 2011/7
- 荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究 5 コーパスの作成と活用』明治書院, 2011/6
- 荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究 2 アプリケーションソフトの基礎』明治書院, 2011/5
- 荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究 7 ウェブによる情報収集』明治書院, 2011/4
- 荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究 1 コンピュータ利用の基礎知識』明治書院, 2011/4
- 田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦(共著)『コーパス日本語学の新展開』特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp. 23-31ほか総500頁のうち計約190頁を担当, 2010/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

- Tanomura, Tadaharu, “On ‘recursive collocation’: collocation containing collocation as a subpart,” *SdP-11 (Simposio Internacional de Sociología de las Palabras)*, Universidad de Murcia (Murcia, Spain), 2011/12
- 田野村忠温 「日本語のコロケーション研究——概念と課題——」中部日本・日本語学研究会, 岐阜聖徳学園大学, 2011/11
- 田野村忠温 「コーパスをめぐる2、3の報告——作家の表現の比較ほか——」国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会, 国立国語研究所, 2011/9
- 田野村忠温 「コーパス日本語研究の最新動向」言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- 田野村忠温 「コーパス日本語研究の知識と方法」言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- Tanomura, Tadaharu, “Corpus linguistics: the state of the art and applications,” 言語学講演会, 國立成功大學(台湾・台南市), 2011/9
- Tanomura, Tadaharu, “Constructing a huge Web corpus: its methods and problems,” 言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- 田野村忠温 「大規模コーパスとしてのインターネット」『現代日本語書き言葉コーパス』完成記念講演会, JA 共済ビル・カンファレンスホール, 2011/8
- 田野村忠温 「日本語研究とインターネット」2011年世界日本語教育研究大会, 天津外国語大学(中国・天津市), 2011/8
- 田野村忠温 「日本語コーパス——その現状と応用の可能性——」言語学講演会, シンガポール日本人会(シンガポール), 2011/3
- 田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「研究活動・成果の総括: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ, 時事通信ホール, 2011/3
- 田野村忠温 「日本語Webコーパスの構築——方法と課題——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2011/2
- 田野村忠温 「コーパスと日本語研究——動向と展望——」言語学講演会, 香港中文大學(中国・香港特別行政区), 2011/2
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス日本語学セミナー, 國立臺灣大學(台湾・台北市), 2010/12
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス日本語学講演会, 名古屋大学, 2010/12
- 田野村忠温 「日本語コロケーション研究の歴史と課題」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大班会議, ホテルスワ(つくば市), 2010/11
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス言語学ワークショップ, 高麗大学校(韓国・ソウル市), 2010/10
- 田野村忠温 「コーパスと日本語文法研究」北京日本学研究中心創立25周年記念国際シンポジウム(パネルディスカッション「コーパスと日本語学及び日本語教育学」), 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2010/10

田野村忠温 「Web コーパスとコロケーション」日本語学会 2010 年度秋季大会ワークショップ「コーパス日本語学の展開——コーパスと方法論の多様化——」, 愛知大学, 2010/10

田野村忠温 「日本語コロケーション研究の流れ」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2010/9

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 22 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議, 国立国語研究所, 2010/8

Tanomura, Tadaharu, “The concept of ‘circumcollocate’ and its significance for lexicography: A discussion with particular reference to the Japanese language,” *CILC10 (II Congreso Internacional de Lingüística de Corpus)*, Universidade da Coruña (A Coruña, Spain), 2010/5

田野村忠温 「コーパスの評価基準の多様性と相対性」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2010/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2006 年度～2010 年度、特定領域研究、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2010 年度 直接経費 7,300,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることをも目的とする。

4-6-2. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 19520342

研究題目: 大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費: 2010 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料(コーパス)を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、①電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、②電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

①については、研究代表者のこの分野における過去 10 年余りの経験を踏まえ、それを継続・発展させる形で、電子資料の特性を生かした日本語研究の可能性を具体的な事例研究を通じて追求し、電子資料利用の価値と方法を明らかにする。

②については、日本語研究の隆盛とそこでの特定のテーマへの研究の集中のかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題について、抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行う。また、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員	2009年12月～2010年11月
日本言語学会・常任委員	2006年4月～現在に至る
日本言語学会・評議員	2000年4月～現在に至る

5. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻:日本語学。

5-1. 論文

-
- 渋谷勝己「山形市方言の文末詞ヤーヨと対比してー」『阪大社会言語学研究ノート』10, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 78-88, 2012/3
- 渋谷勝己「接触言語学」『日本語学』30-14, 明治書院, pp. 244-255, 2011/11
- 渋谷勝己「社会言語学」益岡隆志(編)『はじめて学ぶ日本語学』ミネルヴァ書房, pp. 137-154, 2011/10
- 渋谷勝己「方言学史」真田信治他『方言学』朝倉書店, pp. 189-206, 2011/3
- 渋谷勝己「山形市方言における伝聞・引用形式テとド」『阪大社会言語学研究ノート』9, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 1-13, 2011/1
- 渋谷勝己「移民言語研究の潮流」『待兼山論叢 文化動態論篇』44, 大阪大学文学会, pp. 1-22, 2010/12
- 渋谷勝己「言語接触研究の動向」『日本語学』29-14, 明治書院, pp. 6-15, 2010/11

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

-
- 渋谷勝己「<書評・紹介> Mufwene, Salikoko S. *Language Evolution*」『言語研究』139, 日本言語学会, pp. 145-156, 2011/3

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号: 22520466

研究題目: 日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

2011年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

現代社会で使用される日本語には、日本国内で母語話者によって使用される変種のほか、海外に移住した日系人の用いる日本語変種や、日本語非母語話者が国内外で使用する日本語変種などがある。本研究では、世界各地の日系人日本語変種を対象にして記述的な研究を推進するとともに、記述の成果を言語生態学(ecolinguistics)の枠のなかで統一的な視点のもとでつぎあわせ、可能な限りの総合化を行いつつ、将来の発展的な研究を行ううえでの問題のありかを整理することを試みる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・編集委員	2010年6月～現在に至る
日本語文法学会・大会委員長	2010年4月～現在に至る
社会言語科学会・理事・広報委員長	2009年4月～2011年3月
日本語学会・評議員	2009年4月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2008年10月～現在に至る
日本方言研究会・世話人	2008年4月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006年7月～現在に至る

6. マシュー・バーデルスキー 准教授

1967年生。2006年 UCLA 大学院東アジア言語文化科 PhD 修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学(米ペンシルバニア州)客員助教授・メロン財団ポस्टドックフェロー、同准教授を経て、2011年10月より現職。専攻:日本語学。

6-1. 論文

BURDELSKI, Matthew 他, "Coordination of verbal and non-verbal actions in human-robot interaction at museums and exhibitions"

Jacob Mey *Journal of Pragmatics*, 42-9, pp. 2398-2414, 2010/9

BURDELSKI, Matthew, "Socializing politeness routines: action, other-orientation, and embodiment in a Japanese preschool" Jacob

Mey *Journal of Pragmatics*, 42-6, pp. 1606-1621, 2010/6

6-2. 著書

BURDELSKI, Matthew, *The Handbook of Language Socialization*, Wiley-Blackwell, pp. 275-295, 2011/12

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

BURDELSKI, Matthew, "Socializing children to honorifics in Japanese: stance and identity in interaction" American Association for

Applied Linguistics, Hilton Hotel, Boston, 2012/3

BURDELSKI, Matthew, "Early experiences with food: socializing affect, identity, and taste" 12th International Pragmatics

Conference, University of Manchester, 2011/7

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 高木 千恵 准教授

1974 年生。大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士(文学)。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010 年 10 月より現職。専攻:社会言語学。

7-1. 論文

高木千恵「大阪方言のとりたて形式カテについて」『阪大社会言語学研究ノート』10, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 66-77, 2012/3

高木千恵「関西」真田信治(編)『方言学』朝倉書店, pp. 74-88, 2011/3

高木千恵「標準語との接触による地域語の変容」『日本語学』29-14, 明治書院, pp. 74-83, 2010/11

日比谷潤子, 高木千恵(共著)「日系カナダ人の日本語」『日本語学』29-6, 明治書院, pp. 18-27, 2010/6

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高木千恵「大阪府」「高知県」真田信治・友定賢治(編)『県別 罵詈雑言辞典』東京堂出版, pp. 118-123, 167-171, 2011/10

7-4. 口頭発表

高木千恵「関西におけるワ行五段動詞ウ音便形の衰退と残存」危機方言プロジェクト研究会: 方言研究とテキスト—現状と展望, 国立国語研究所危機方言プロジェクト, 国立国語研究所, 2012/2

Takagi, Chie, “Dialect acquisition in the second generation of immigrants in Kansai area” 9th International Conference on Urban Language Survey, 都市言語学会(中国), 中国・厦門, 集美大学, 2011/11

高木千恵「日本語諸方言における同意要求表現」日本音声学会第 223 回研究例会 シンポジウム: 日本語諸方言における同意要求表現とその音調研究の可能性, 日本音声学会, 山梨大学, 2011/6

高木千恵「鈴木七郎編『海外第二世の綴り方集』にみる日系カナダ人二世児童の日本語」変異理論研究会第 142 回研究発表会, 変異理論研究会, 奈良大学, 2011/4

高木千恵「取り立て否定形式の文文化について: 西日本諸方言を中心に」土曜ことばの会 2011 年 4 月研究発表会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2011/4

高木千恵「諸方言におけるとりたて否定形の意味用法について」広島・方言研究会 2011 年 3 月研究発表会, 広島・方言研究会, 県立広島大学, 2011/3

Takagi, Chie, “The current situation of Kansai Japanese: its linguistic features and speakers’ attitude” 8th International Conference on Urban Language Survey, 都市言語学会(中国), 中国・長春, 吉林大学, 2010/6

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2009 年度～2013 年度, 若手研究(B), 代表者: 高木千恵

課題番号: 21720165

研究題目: 日本語諸方言における否定疑問形式の終助詞化に関する記述的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円
2011年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

否定疑問形式に由来する日本語諸方言のモダリティ形式に焦点を当て、各形式の用法を包括的に記述し、それぞれを対照させることで「否定疑問形式の終助詞化」という文法化現象の一類型を提示しようとする。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

日本方言研究会・事務局	2012年1月～現在に至る
日本語文法学会・会計監査	2011年4月～現在に至る
変異理論研究会・事務局	2008年4月～現在に至る

8. 白岩 広行 助教

1982年生まれ。2011年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2011年10月より現職。専門:方言や海外日本語変種の記述研究。

8-1. 論文

白岩広行「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 35-53, 2012/2

白岩広行「福島方言の文末イントネーション —意味的な記述への視点—」『日本語文法』(日本語文法学会), 11-1, 日本語文法学会, pp. 88-104, 2011/3

白岩広行, 森田耕平, 齊藤美穂他「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-31, 2011/2

白岩広行「方言の推量形式における意味変化 —談話的機能へ—」『阪大日本語研究』23, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 57-77, 2011/2

白岩広行「福島方言の問い返し疑問 —イントネーションによる区別—」『阪大社会言語学研究ノート』9, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 14-29, 2011/1

白岩広行「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」『阪大社会言語学研究ノート』9, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 66-95, 2011/1

工藤真由美, 白岩広行「ボリビアの沖縄系移民社会における日本語の実態」『日本語学』29-6, 明治書院, pp. 4-16, 2010/6

8-2. 著書

なし

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

白岩広行(辞典項目)「福島県」「茨城県」真田信治・友定賢治(編)『県別罵詈雑言辞典』東京堂出版, pp. 32-40, 2011/10

8-4. 口頭発表

白岩広行「南米ボリビアにおける沖縄系移民の言語生活」国際シンポジウム「国際日本学の構築に向けて」, 東京外国語大学国際日本研究センター, 東京外国語大学, 2012/3

白岩広行, 平本美恵「ハワイ移民1世に見る東西方言の接触 —文字化資料の整備と新たな発見—」「接触言語学による「言語変容類型論」の構築」研究発表会, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2011/12

白岩広行 「南米沖縄系移民の生活と言語接触の様相について」「日本語変種とクレオール形成過程」研究発表会, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2011/12

白岩広行 「ハワイ移民 1 世に見る方言接触 —福島県出身者による文法形式の使用—」「接触言語学による「言語変容類型論」の構築」研究発表会, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2011/9

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

8-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 3 講師 0 助教 1

教授：上倉 庸敬、藤田 治彦、内田 次信

准教授：加藤 浩、三宅 祥雄、田中 均

助教：渡辺 浩司

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
39	8	13	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	11	2	4	0	0
2011	9	3	2	2	0
計	20	5	6	2	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

1行をしっかり読み、1ページをしっかり読んでからはじめて1冊を理解することができる、そうした本の読みかたを学生に身につけてもらう。

自分がなにに興味を持ち、なにを問題だとみているかを他人と共有できるよう、発表のテクニックを学生に身につけてもらう。

他人がなにに興味を持ち、なにを問題だとみているかを理解できるよう、他人の話聞き、問答するテクニックを学生に身につけてもらう。

2. 研究

教員それぞれが各専門領域で、最低 1 冊の本を出す。

大学院生が 1 年に最低 1 回学会で発表し、最低 1 本の論文を学会誌に掲載する。

また、研究室全体で、1 年に最低 50 本の書評、展覧会評などを、新聞や雑誌などに掲載する。

3. 社会連携

画廊の展示、催し物への協力、美術館企画、各自治体主催の映画祭など通して、大学外の人々との交流をはかる。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

美学研究室における教育活動の中心は、非常勤を除く教員全員が参加して進める発表演習である。毎週 1 度、学部生は 2 名がそれぞれ 30 分前後、院生は 1 名が 1 時間前後、自分の研究を発表したのち、その内容について研究室に所属する全員で質疑討論を交わす。15 時前から始まり、20 時におよぶこともある。この演習をとおして、学生は研究テーマの見つけ方、研究の進め方、発表の工夫を身につけ、卒業論文、修士論文、博士論文の執筆手順と方法を学ぶ。あわせて、美学芸術学に関し自分のテーマだけに閉じこもらない広い視野を手に入れる。この授業は年間を通じ、休暇期間以外、休みなく行われた。

上倉教授は年間をとおして、古典古代からの美学史を毎年異なった視点から講じる美学序説、トマス・アクィナスと美学の関連を探る数年来の美学講義、映画芸術研究のための基礎知識と基礎概念を習得する芸術学講義、劇映画を論じて毎年異なる個別作品を研究する芸術学演習、主としてフランス語による美学文献講読を担当した。

藤田教授は、環境美学関連の英語文献の講読、建築史、工芸史、デザイン史関連の講義、くわえて、エラスムス・ムントゥス企画の英語での授業を提供した。

動態論との兼任の三宅祥雄准教授は、美学では映画理論の研究方法を検討する芸術学講義、および外国映画作品を細部にわたって研究する芸術学演習を担当した。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。

また、渡辺助教は、ドイツ語文献講読を担当した。

2. 研究

美学研究室編集の『美学研究』の刊行、各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する『大阪日日新聞』文化欄における「関西美術探訪」の連載を続けた。

藤田教授が中心になって推進した大型企画「頭脳循環プロジェクト」に大学院博士後期課程の学生たちが積極的に応募し、国外の研究機関でそれぞれの研鑽に励むことができたことは特記されなければならない。

文芸学研究室はギリシアとローマの喜劇・悲劇を中心とする研究を行った。内田次信教授は、古代ギリシアの喜劇と悲劇、ギリシア神話を研究し、加藤准教授はプラトンの文芸論やプロクロス詩学の詩学などを、また渡辺助教がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年 3 回開催すると共に、機関誌を年 1 冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を続けた。

藤田教授は、2011 年度の科学研究費研究課題（基盤研究（A））「アーツ・アンド・クラフツと民藝—ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究」について研究を行った。

3. 社会連携

上倉教授は京都映画祭の企画委員のほかに、NPO 法人コミュニティシネマの代表理事をつとめ、大阪市の映画事業に協力し、毎年アジア各国の映画人と交流を深め、その映画作品を日本に紹介するアジア映画祭の実行委員長となって、研究室学生の有志とともに、それぞれの映画祭成功に力を尽くした。

IV. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

充実した教育活動を実践し、目標をほぼ達成できた。

2. 研究

充実した研究活動を実践し、目標をほぼ達成できた。

3. 社会連携

充実した社会連携を実践し、目標を達成できた。

V. 基本情報(2010 年度～2011 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	0	0	0
2011	2	0	2
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

櫻間裕子 「ガエ・アウレンティの建築思想と実践—内部空間への志向—」 2011/9

主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、三宅祥雄

中野逸雄 「Adalbert Stifter の詩学 —『晩夏』をめぐる「自然」の表象に関する文化史的考察—」 2011/9

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、三谷研爾、三宅祥雄

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	4(4)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)
2011	2(2)	3(2)	0(0)	2(2)	0(0)	7(6)
計	6(6)	4(3)	0(0)	2(2)	0(0)	12(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	5	4	2	0	0	11
2011	2	5	2	0	4	13
計	7	9	4	0	4	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)著書

【2010年度】

〔日本学術振興会特別研究員 (PD)〕

天内大樹他 (共著) 「建築論が「様式」に触れなくなるまで」 「狭間の広場—アゴラの夢想、ニュルンベルクの悪夢—」
「乱立するテイストをホビーで束ねよ」 五十嵐太郎 (編) 『建築・都市ブックガイド21世紀』 彰国社, 2010/3

【2011年度】

〔博士後期〕

町田理樹他 (共著) 『百草百花 詩人会議新人賞詩選集'11』 詩人会議出版, 2011/7/25

(2)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナ『セーヌ』における供儀と祝祭」『美学』(美学会), 第237号, pp.25-36, 2010/12

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナの詩学—『時間の動物』をめぐって—」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), 第28号, pp. 1-12, 2011/3

SAKURAMA, Yuko. “Objects and Interior Architecture-Concerning Installation and Stage Design by Gae Aulenti”,
Design and Craft : a History of Convergences and Divergences, The 7th Conference of the International
Committee for Design History and Design Studies, (Universa Press), pp. 88-91, 2010/9

里中俊介「プラトン『国家』におけるムーシケー論」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 第44号, pp.29-50, 2010/12

YOKOMICHI, Hitoshi. “Tradition and Modern World : Questions of Symbolism”, The Journal of Asian Arts and
Aesthetics, (The Asian Society of Arts), pp.131-138, 2010/6

【2011年度】

〔博士前期〕

松岡佳世「座談会「書と抽象絵画」におけるかたちとオートマティスムの問題」『美術科研究』第29号, 大阪教育大学・
美術教育講座・芸術講座, pp. 115-126, 2012/3

中澤菜見子「妙心寺天球院の室空間」『芸術哲学研究』第1巻第1号, 行路社, pp. 1-13, 2012/3

- 中澤菜見子「役割を自由に楽しむ」『文化／批評 臨時増刊号 総特集 横断するポピュラーカルチャー』国際日本学研究会, 2012/3
- 豊泉俊大「絵画の知覚と創造性 —James Gibsonの知覚論を通して—」『芸術哲学研究』1号, 行路社, pp. 14-26, 2012/3 [博士後期]
- 岡田彰仁「『赤西蠣太』にみる伊丹万作の表現の特色—原作に描かれていない場面を中心に—」『京都精華大学紀要』第40号, 京都精華大学紀要委員会, pp. 183-211, 2012/3
- 中野逸雄 „Kritik der Leidenschaft: Adalbert Stifters ästhetische Theorie und seine Poetik,“ 国際版『美学』No.15, 美学会, pp. 51-60, 2011/5
- 中野逸雄「文学作品の課題をめぐる解釈の変容—Adalbert Stifterの『晩夏』受容史を起点に—」『待兼山論叢』第45号, 大阪大学文学研究科, pp. 1-23, 2012/3

(3)口頭発表

【2010年度】

[博士前期]

- 永井麻里子「モーリス・ベジャール『中国の不思議な役人』作品分析」第61回美学全国大会, 若手フォーラム, 関西学院大学, 2010/10/10
- 中岡穰「主体概念としての崇高—カントとフリードリヒ—」第42回文芸学研究会, 神戸大学, 2010/9/18
- 中岡穰「崇高における人間存在の二重性—カントとフリードリヒの崇高論—」第61回美学全国大会, 若手フォーラム, 関西学院大学, 2010/10/9
- 松岡佳世「写真からみるハンス・ベルメールの作品世界」第61回美学全国大会, 若手フォーラム, 関西学院大学, 2010/10/9
- MIYAISHI, Yumiko. “Shinji Koike and the Pioneer Days of Architectural Criticism in Japan”, The 18th International Congress of Aesthetics, Beijing University, 2010/8/12 [博士後期]
- AMANAI, Daiki. “Cross-cultural City Experience: The Effect of German Architecture in Shandong upon Japanese Architectural Movement”. The 18th International Congress of Aesthetics, Beijing University, 2010/8/13
- 天内大樹「赤レンガの大正と現代」大正イマジュリィ学会第8回全国大会, 同志社大学, 2011/3/26
- 井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナの演劇における心身の合一—『時間の動物』(1986年)の詩学をめぐって—」近現代演劇研究会2010年7月例会, 大阪大学, 2010/7/17
- SAKURAMA, Yuko. “Installation Art and Architectural Idea”, The 18th International Congress of Aesthetics, Beijing University, 2010/8/12
- SAKURAMA, Yuko. “Objects and Interior Architecture —Concerning Installation and Stage Design by Gae Aulenti—”, The 7th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, Palais des Académies, Brussel, 2010/9/20
- SASAKI, Masashi. “Why can't we discern anything but "consonant" or "dissonant" in Ornette Coleman's improvisation? —Concerning "modulation through keys" and "chromatic"—”, The 18th International Congress of Aesthetics, Beijing University, 2010/8/12

【2011年度】

[博士前期]

- 松岡佳世「ハンス・ベルメールの写真にみる<眼差し>」日本フェノロサ学会第32回年次大会, 同志社大学, 2011/9/16
- 松岡佳世「線臨書への取り組みとして」第4回批評を書くことを考えてみる会, Gallery AMI&KANOKO, 2011/10/22
- Kayo, MATSUOKA “Representation of Mechanical Device in Hans Bellmer's works”, “Multicultural Studies in Art and Aesthetics in the Age of Globalization”, Italy / Japan Research Workshops, the Academy of Science and the University of Bologna, Italia, 2012/3/26

中澤菜見子「障壁画と室空間に関する一考察—妙心寺天球院方丈と西本願寺書院の金地濃彩画を中心に—」第 62 回美学
会全国大会若手研究者フォーラム, 東北大学, 2011/10

Namiko Nakazawa “Relationship between Japanese Painting and Japanese Architectural Space”, Italy/Japan
Research Workshops ‘multicultural studies in art and aesthetics in the age of globalization’, University of Bologna,
2012/3/26

豊泉俊大「人とももの、寺と」、『おてらてん』如城寺, 2011/11

豊泉俊大「絵画の知覚と創造性—James Gibson の知覚論を通して—」三月の会, 大阪大学, 2012/3
〔博士後期〕

里中俊介「プラトン『法律』におけるムーシケー論」文芸学研究会, 神戸女学院大学, 2011/7/11

里中俊介「プラトン『法律』におけるムーシケー論」第 62 回美学会全国大会, 東北大学, 2011/10/16

小田昇平「アイデンティティの交感」第 2 回評論を書くことを考えてみる。—作品と作品との比較—, Gallery AMI &
KANOKO, 2011/4/9

小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における行動言語と相貌的知覚—指揮を通して身体表現について考えるた
めに—」美学会西部会第 283 回研究発表会, 京都大学, 2011/6/4

横道仁志「ボナヴェントゥラの三位一体論的美学」美学会西部会第 285 回研究会発表会, 大阪大学, 2011/9/24

秋岡啓子「精霊の息吹と作家の眼差し —長野順子 銅版画展「精霊たちの息吹」—」第 3 回評論を書くことを考えてみ
る。—作品と作品との比較—, Gallery AMI & KANOKO, 2011/6/25

(4)その他(書評・翻訳など)

【2010 年度】

〔博士前期〕

永井麻里子「鳥と金属半ばして共存する魅力、『METAR BIRD』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/6/29

永井麻里子「泉鏡花の古典を踊りで表現、ダンスの時間 Summer2010」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/7/20

永井麻里子「ひと味変えた展示法で見せる、ボストン美術館展 西洋絵画の巨匠たち」『大阪日日新聞』関西美術探訪,
2010/8/24

永井麻里子「2 枚の裸婦画 同と異、展覧会「小出楯重を歩く」」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2011/1/25

永井麻里子「観客と演者の垣根を問う、GRINDER-MAN MUSTANG Colors」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2011/3/15

中岡穰「呉服(くれは)の里」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/7/27

中岡穰「逸翁コレクションにみる中国陶磁の美—悠久の歴史—」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/11/23

松岡佳世「ケネス・スネルソンの彫刻<Dragon>」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/7/13

松岡佳世「ポスター天国」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/11/30

松岡佳世「山荘美学: 日高理恵子とさわひらき」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2011/2/15

宮石侑美子「蛍光灯で工夫された戦前の創作、大阪御堂筋線駅ホーム照明」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/9/7

宮石侑美子「親しみやすさを重視した 30 歳以下、U-30 Under 30 Architects exhibition」『大阪日日新聞』関西美術探
訪, 2010/10/2

宮石侑美子「春の京、街歩きが楽しみに、もうひとつの京都—モダニズム建築から見えてくるもの—」『大阪日日新聞』
関西美術探訪, 2011/4/5

〔博士後期〕

天内大樹「迎賓館赤坂離宮 旧東宮御所」「自由学園明日館」「東京国立近代美術館工芸館 旧近衛師団指令部庁舎」『東
京人』284 号, 都市出版, pp.16, 24, 26, 2010/7

天内大樹「第 5 回大会報告・パネル 5」, 表象文化論学会ニューズレター『REPRE』vol.10,
<http://repre.org/repre/vol10/conference05/03panel05.html>, 2010/10

天内大樹「多文化都市における建築体験—日本の建築運動に対する山東省ドイツ建築の影響—」『国学院雑誌』v.11, n.11,
pp. 324-339, 2010/11

- 天内大樹「2010-2011年の都市・建築・言葉 アンケート」『10+1 web site』2011年1月,
<http://tenplusone.inax.co.jp/monthly/2011/01/issue1.php>, 2011/1
- 町田理樹「カンバスを生きる」『詩人会議』6月号(第48巻6号), pp. 123-124, 2010/6/1
- 町田理樹「流れて」『詩人会議』8月号(第48巻8号), p.113, 2010/8/1
- 町田理樹「人世の切り口」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/8/10
- 町田理樹「木馬は走る」『詩人会議』9月号(第48巻9号), pp.131-132, 2010/9/1
- 町田理樹「よるがお」『詩人会議』11月号(第48巻11号), pp. 60-61, 2010/11/1
- 町田理樹「異文化の感性に触れる」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/11/16
- 町田理樹「“なにか”」『詩人会議』1月号, pp. 101-102, 2011/1/1
- 町田理樹「不良の品位」『詩人会議』2月号, p.141, 2011/2/1
- 町田理樹「犠牲者たちの肖像」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2011/2/22
- 横道仁志「東京SF大全」『TOKON10 OFFICIAL SOUVENIR BOOK』第49回日本SF大会 TOKON10 Official Souvenir
 Book 編集委員会, pp. 64-83, 2010/8
- 横道仁志「東京SF大全」『SFマガジン第654号』早川書房, pp. 82-97, 2010/9
- 横道仁志「ルノワール—伝統と革新—」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2010/6/1
- 横道仁志「ウフィツィ美術館自画像コレクション 巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2011/2/1
- 【2011年度】**
 [博士前期]
- 松岡佳世「山荘美学：日高理恵子とさわひらき」『大阪日日新聞』2011/2/15
- 松岡佳世「塚脇淳展「Drawings+Maquettes」」『大阪日日新聞』2011/8/16
- 松岡佳世「一瞬の劇場 Elliott Erwitt 展」『大阪日日新聞』2011/10/11
- 前田真由子、松岡佳世、向井智香「アゴラ・アイム vol.2 アートと社会」情報メディア学会, 同志社女子大学, 2011/11/24
 (学生主催シンポジウム登壇者)
- 中澤菜見子「障子のようで愛すべき“ほっこり系” 大阪大学総合学術博物館待兼山修学館ステンドグラス」『大阪日日新聞』2011年4月19日号, 9面, 2011/4/19
- 中澤菜見子「違和感なく柔らかな調和 特別展「浅川巧生誕百二十年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—」」『大阪日日新聞』2011年7月19日号, 8面, 2011/7/19
- 中澤菜見子「表情見とれるうちに、絵の中へ 「フェルメールからのラブレター展」」『大阪日日新聞』2011年8月9日号, 10面, 2011/8/9
- 中澤菜見子「色彩とイメージの驚き世界 「水墨画アラカルト—黙庵から鉄斎まで—」」『大阪日日新聞』2011年11月29日号, 10面, 2011/11/29
- 中澤菜見子「愛すべき雑器のいとおしさ 「没後50年・日本民藝館開館75周年 柳宗悦展—暮らしへの眼差し—」」『大阪日日新聞』2012年1月31日号, 10面, 2012/1/31
- 宮石侑美子「春の京、街歩きが楽しみに もうひとつの京都 —モダニズム建築から見えてくるもの—」『大阪日日新聞』2011年4月5日号, 2011/4/5
- 宮石侑美子「「正統派異端系」の魅力 建築家 白井晟一 精神と空間 SIRAI-ANIMA et PERSONA」『大阪日日新聞』2011年7月12日号, 10面, 2011/7/12
- 宮石侑美子「輝く女性たちの原点時期 心斎橋 きもの モダン —煌めきの大大阪時代—」『大阪日日新聞』2011年11月8日号, 10面, 2011/11/8
- 宮石侑美子「「作品」ではなく生きている「仕事」 「奥村昭夫と仕事」展」『大阪日日新聞』2012年3月13日号, 10面, 2012/3/13
- 豊泉俊大「落書きの『顔』持つアメ村壁画—『Peace on Earth』」『大阪日日新聞』2011年5月31日号, 10面, 2011/5/31
- 豊泉俊大「色が持つ本来の豊かさ—『インディゴ物語—藍が奏でる青の世界—』展」『大阪日日新聞』2011年8月30日号, 10面, 2011/8/30

日号, 10面, 2011/8/30

豊泉俊大「切り取れ、芸術の生、『他者』との出会い——『インド ポピュラー・アートの世界—近代西欧との出会いと展開—』展『大阪日日新聞』2011年11月1日号, 10面, 2011/11/1

豊泉俊大「見ること、リズムと絵——『キース・ヘリング展 —アートはみんなのもの—』」『大阪日日新聞』2012年2月21日号, 10面, 2012/2/21

豊泉俊大「イメージ豊かさ増す生の体感——『感じる服 考える服—東京ファッションの現在形—』展」『大阪日日新聞』2012年3月27日号, 10面, 2012/3/27

豊泉俊大「人とももの、寺と（評論冊子）」『おてらてん』Gallery AMI&KANOKO, 2011/12

中岡籬「混沌世紀末に満つ人々の体臭「陶酔のパリ・モンマルトル」展」『大阪日日新聞』2011/5/17

〔博士後期〕

水田百合子「草間彌生—永遠の永遠の永遠—衰えぬ創作意欲で圧倒」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012年2月28日号, 10面, 2012/2/28

町田理樹「画家に“なる”とき」『大阪日日新聞』2011年6月14日号（第21627号）, 2011/6/14

町田理樹「光をさがし求める画家」『大阪日日新聞』2011年6月28日号（第21641号）, 2011/6/28

町田理樹「交差する記憶、去来する時間」『大阪日日新聞』2011年11月22日号（第21783号）, 2011/11/22

町田理樹「たらいのうた」『詩人会議・4月号』pp. 134-135, 2011/4/1

町田理樹「痛み」『季刊びーぐる—詩の海へ—第11号—』濤標, pp. 122-123, 2011/4/20

町田理樹「キンモクセイの空」『詩人会議・5月号』p. 125, 2011/5/1

町田理樹「夕風」『詩人会議・6月号』pp. 136-137, 2011/6/1

町田理樹「11月2日（火）」『詩と思想・6月号』土曜美術社出版販売, p.174, 2011/6/1

町田理樹「画家に“なる”とき」『大阪日日新聞』2011年6月14日号（第21627号）, 2011/6/14

町田理樹「光をさがし求める画家」『大阪日日新聞』2011年6月28日号（第21641号）, 2011/6/28

町田理樹「狐火」『詩人会議・7月号』p. 99, 2011/7/1

町田理樹「ちんもくと言葉」『詩人会議・8月号』p. 116, 2011/8/1

町田理樹「白夜幻灯」『COAL SACK（石炭袋）70号』コールサック社, p. 252, 2011/8/31

町田理樹「つまんない、6月2日（火）」『詩と思想・9月号』土曜美術社出版販売, pp.174-175, 2011/9/1

町田理樹「無材」『詩と思想・10月号』土曜美術社出版販売, pp. 188-189, 2011/10/01

町田理樹「マイケルの法則」『詩と思想・11月号』土曜美術社出版販売, pp. 157-158, 2011/11/1

町田理樹「交差する記憶、去来する時間」『大阪日日新聞』2011年11月22日号（第21783号）, 2011/11/22

町田理樹「心電図 GH-207」「あたらしい感情について、八月三十日（火）」『詩と思想・12月号』土曜美術社出版販売, pp. 130-131, 2011/12/1

町田理樹「心電図 GH-207」「ばーにんぐ・れたー■愛しいぼ■へ〜」、『詩と思想・1月2月合併号』土曜美術社出版販売, pp. 10-11, pp. 199-200, 2012/1/1

町田理樹「ネオン断想」『詩人会議・2月号』pp. 131-132, 2012/2/1

町田理樹「かたつぶる、八月五日（金）」『詩人会議・3月号』p. 132, 2012/3/1

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

町田理樹、第十九回岐阜県文芸祭、創作小説部門、入選、2011/3/5

町田理樹、『詩と思想』2011年度読者投稿欄最優秀賞、土曜美術社出版販売、2011/12

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 1名 (計3名)

2011年度 PD: 0名 DC2: 3名 DC1: 0名 (計3名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部：1名 大学院：3名（計4名）

2011年度 学部：0名 大学院：3名（計3名）

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2010年度：2名 2011年度：1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度：0名 2011年度：0名

9. 刊行物

2010年度 『美学研究』7号

2011年度 『文芸学研究』15号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局	2010年度～2011年度
民族藝術学会事務局	2010年度～2011年度
待兼山芸術学会事務局	2010年度～2011年度
意匠学会事務局	2010年度～2011年度
文芸学研究会事務局	2010年度～2011年度
『文芸学研究』第14号合評会	2010年8月28日
『文芸学研究』第15号合評会	2011年8月10日
美学会	
西部会第279回研究発表会	2010年9月25日
西部会第285回研究発表会	2011年9月24日
第21回待兼山芸術学会	2011年4月2日
第22回待兼山芸術学会	2012年3月31日
ギリシア・ローマ神話学研究会事務局	2010年度～2011年度
第3回講演会・研究会	2010年3月13日
第4回講演会・研究会	2011年1月26日
第5回講演会・研究会	2012年2月25日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第28号刊行 2011年3月31日

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第29号刊行 2012年3月30日

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 上倉庸敬教授

1949年、横浜市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程(美学美術史学専攻)単位修得退学。京都大学文学部助手、神戸学院女子短期大学専任講師、大阪樟蔭女子大学助教授、大阪大学助教授を経て、96年より教授。2007年、大阪大学より博士(文学)。専攻:美学/芸術学/映画学。

1-1. 論文

上倉庸敬「ヨーロッパの愛に息づく自己発現——『アベラールとエロイズ』の場合」片岡幸彦・幸泉哲紀・安藤次男(編)『グローバル世紀への挑戦 文明再生の智慧』文理閣, pp. 161-173, 2010/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上倉庸敬(映画評)『『塔の上のラプンツェル』——夢追い求めるプリンセス』『信濃毎日新聞』2011/3

上倉庸敬(映画評)『『太平洋の奇跡—フォックスと呼ばれた男—』——米軍を翻弄した男の『戦争』』『信濃毎日新聞』2011/2

上倉庸敬(映画評)『『僕と妻の1778の物語』——2人見つめ合った日々』『信濃毎日新聞』2011/1

上倉庸敬(映画評)『『武士の家計簿』——そこにある幸せに共感』『信濃毎日新聞』2010/12

上倉庸敬「映画に描かれた忠臣蔵」『京都民報』2010/12

上倉庸敬(映画評)『『マザーウォーター』——風と水、シンプルな人生』『信濃毎日新聞』2010/11

上倉庸敬(映画評)『『桜田門外ノ変』——暴力を否定 揺るがぬ心底』『信濃毎日新聞』2010/10

上倉庸敬(映画評)『『魔法使いの弟子』——善良な姿 現実のように』『信濃毎日新聞』2010/9

上倉庸敬(映画評)『『食べて、祈って、恋をして』——生きる喜びに目覚める』『信濃毎日新聞』2010/9

上倉庸敬(映画評)『『必死剣 鳥刺し』——組織とは一鋭い問い』『信濃毎日新聞』2010/7

上倉庸敬(映画評)『『書道ガールズ！！わたしたちの甲子園』——等身大の少女たち映す』『信濃毎日新聞』2010/6

上倉庸敬(映画評)『『孤高のメス』——ぬくもりの波紋広げる』『信濃毎日新聞』2010/6

1-4. 口頭発表

上倉庸敬「高峰秀子の出発」, おおさかシネマフェスティバル・高峰秀子追悼講演, 大阪歴史博物館, 2011/3

上倉庸敬「黒澤映画と文学について考えるために」シンポジウム『黒澤明と文学』, 日本比較文学会第46回関西大会, 京都産業大学, 2010/11

上倉庸敬「日常の中の非日常——敗戦後の小津映画について『麦秋』の場合——」, アジア芸術学会第2回国内大会, 同志社大学, 2010/11

上倉庸敬「若尾文子と川島雄三——増村保造の目から見て——」, シネ・ピピア2, 2010/10

上倉庸敬「老いのゆたかさ——文化の中の老い——」, 泉北教養講座・堺市民芸術祭参加講演会, 梅文化会館, 2010/10

上倉庸敬「ルイ大王と17世紀末の美学」東京音楽大学公開ゼミナール, 2010/6

上倉庸敬「日本映画の歴史と京都」年季大会特別講演, 新SKY大学, 2010/6

上倉庸敬「美術監督・井川徳道の世界」, 大阪歴史博物館, 2010/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

CO2 実行委員会・委員長	2010年4月～現在に至る
NPO 法人コミュニティシネマ大阪・代表	2009年4月～現在に至る
大阪アジア映画祭実行委員会・委員長	2008年4月～現在に至る
日本映像学会・理事	2007年6月～2010年月
日本美学会・委員	1993年4月～現在に至る

2. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。専攻:美学/芸術学。

2-1. 論文

Fujita, Haruhiko, "Craft & Technocracy: the Mingei Movement and the Koseikai" *Design and Craft: a History of Convergences and Divergences*, (7th Conference of the International Committee of Design History and Design Studies), KONINKLIJKE VLAAMSE ACADEMIE VAN BELGE VOOR WETENSCHAPPEN EN KUNSTEN, pp. 426-429, 2010/09

2-2. 著書

藤田治彦 (共著)『民藝運動と建築』淡交社, pp. 5-24, 2010/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

藤田治彦 「ヴィオレ=ル=デュックと北斎漫画」意匠学会研究例会, 意匠学会, 大阪工業大学, 2011/9

Fujita, Haruhiko, "Design in Japan: Between Traditional Culture and New Paradigms" The 20th Anniversary Conference of Postgraduate Program in Industrial Design: Postgraduate Education in Design, Postgraduate Design Programm Universidad Nacional de Mexico, Universidad Nacional de Mexico, 2010/11

Fujita, Haruhiko, "What is Asia, and What is Asian Design?" A V&A Workshop: What is Asian Design?, Research Department, Victoria & Albert Museum, Victoria & Albert Museum, 2010/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/11

藤田治彦 意匠学会賞, 意匠学会, 2002/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤田治彦

課題番号: 23242014

研究題目: アーツ・アンド・クラフツと民藝—ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心に—

研究経費: 2011年度 直接経費 6,600,000円 間接経費 1,980,000円

研究の目的:

ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心に、イギリスを中心に全世界に拡大したアーツ・アンド・クラフツ運動と、日本の民藝運動とを比較研究する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2010年度～2012年度、研究助成、助成金獲得者: 藤田治彦

助成金名: 若手研究者戦略的海外派遣事業費補助金

研究題目: アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2010年度 直接経費 11,574,000円 2011年度 直接経費 23,797,000円

研究の目的:

文学からデザインにまでわたる広義の芸術を対象に、若手研究者を関連研究の世界的中心地であるロンドンに派遣して、比較芸術学、比較文化学、比較デザイン学的に調査研究を行い、当該分野を中心にわが国の学術の振興を図る。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会・委員	2008年4月～現在に至る
御堂筋都市彫刻設置検討委員会・委員	2008年4月～現在に至る
Journal of Modern Craft・editorial board member	2007年1月～現在に至る
Design and Culture・editorial board member	2007年1月～現在に至る
神戸ビエンナーレ組織委員会・委員	2006年4月～現在に至る
意匠学会・会長	2005年4月～現在に至る
国立国際美術館作品購入委員会・委員	2004年4月～現在に至る
大阪美しい景観づくり推進会議・アドバイザー	2004年4月～現在に至る
大阪21世紀協会・企画委員	2003年4月～現在に至る
民族芸術学会・理事	1999年4月～現在に至る
日本デザイン学会・評議員	1999年4月～現在に至る

3. 内田 次信 教授

1952年生。京都大学大学院文学研究科西洋古典文学専攻博士課程修了。博士(文学)。2006年より現職。専攻: 西洋古典文学／文芸学。

3-1. 論文

内田次信 『『オデュッセイア』の読まれ方(1)』『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 52, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 151-174, 2012/3

内田次信 「古代のホメロス批評とヘラクレイトス『ホメロスのアレゴリー』」国際高等研究所『近代精神と古典解釈』(国際高等研究所), 1102, 国際高等研究所, pp. 229-237, 2012/3

内田次信 「ノストイの文学としてのピロストラトス『ヘーローイコス』」日本西洋古典学会『西洋古典学研究』(日本西洋古典学会), LIX, 日本西洋古典学会, pp. 107-117, 2011/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

内田次信(翻訳)「トロイア陥落せず」京都大学学術出版会, pp. 1-303, 2012/2

内田次信(翻訳)「ギリシア喜劇全集7」岩波書店, pp. 134-321, 2010/8

3-4. 口頭発表

内田次信「ヘラクレスの死」ギリシア・ローマ神話学研究会, ギリシア・ローマ神話学研究会, 大阪大学, 2012/2

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. 加藤 浩 准教授

1960 年生。大阪大学文学部美学科(美学・芸芸学)卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程(芸術学)単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻: 芸芸学／神話論。

4-1. 論文

加藤浩「ミーメーシスからシュンボロンへ—プロクロス<詩学>の射程—」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-36, 2012/3

加藤浩「神話の合理的解釈—パライパトス『信じられない話』をめぐる考察—」加藤浩(編)『2011 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書「神話表象のアレゴリズム研究—文学・哲学・レトリックに即して—」』(大阪大学大学院文学研究科), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-84, 2012/3

加藤浩「プロクロスの神話解釈——『プラトン『国家』註解』第 6 論稿第 1 部より——」加藤浩(編)『2010 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書「神話表象の芸術化過程のメカニズムに関する研究—ギリシア神話に即して—」』(大阪大学大学院文学研究科), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-21, 2011/3

加藤浩「プロクロス『プラトン『国家』註解』第 5 論稿の研究」『待兼山論叢美学篇』(大阪大学文学会), 44, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-28, 2010/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

加藤浩「プロクロスの神話解釈——『プラトン『国家』註解』第 6 論稿第 1 部より——」ギリシア・ローマ神話学研究会第 4 回講演・

研究会,ギリシア・ローマ神話学研究会,大阪大学,2011/1

加藤浩「ミーメーシスとシュンボロン—プロクロス〈詩学〉の射程」第21回待兼山芸術学会,大阪大学,2011/4

加藤浩「プロクロスにおける神話のシュンボロン解釈」2011年度大阪大学大学院文学研究科共同研究発表会,大阪大学,2011/8

加藤浩「ホメロスとプラトンは一致調和するか—プロクロス『プラトン』国家』註解』第6論稿より—」第18回新プラトン主義協会大会,上智大学,2011/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学／映像論。

5-1. 論文

三宅祥雄「映画のなかの鏡／鏡のなかの映画」『Arts and Media』編集委員会(編)『Arts and Media』2,大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室,pp.182-187,2012/3

三宅祥雄「ハッピーエンドにあらがって」『Arts and Media』編集委員会(編)『Arts and Media』1,大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室,pp.184-185,2011/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事

2011年10月～現在に至る

6. 田中均 准教授

1974年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(美学芸術学、2007年)。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD、2005年から2008年)、山口大学人文学部講師(2008年から2011年)、同准教授(2011年から2012年)を経て現職。専攻:美学。

6-1. 論文

田中均 「「真実らしさ」から「崇高」へ——シラー『招霊術師』(Der Geisterseher)に内包された美学」『シェリング年報』(日本シェリング協会), 19, pp. 46-55, 2011/10

田中均 「ロマン主義的アイロニーのアクチュアリティ——現代演劇の事例に則して」『西日本哲学年報』(西日本哲学会), 18, pp. 35-50, 2010/10

6-2. 著書

仲正昌樹, 石田圭子, 田中均他(共著) 『批評理論と社会理論<1> アイスターシス』御茶の水書房, pp. 15-40, 2011/11

田中均 『ドイツ・ロマン主義美学』御茶の水書房, 235p., 2010/10

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

仲正昌樹, 安井正寛, 田中均他(共訳) (翻訳、アレックス・デミロヴィッチ(原著者)) 『非体制順応的知識人 第四分冊 フランクフルト学派の「真理政治」』御茶の水書房, pp. 147-181, 2011/4

田中均(訳) (翻訳、クリストフ・メンケ(原著者)) 「芸術作品の可能性」『美学芸術学研究』29, 東京大学美学芸術学研究室, pp. 195-215, 2011/3

柿木伸之, 胡屋武志, 田中均他(共訳) (翻訳、クリストフ・メンケ(原著者)) 『芸術の至高性 アドルノとデリダにおける美的経験』御茶の水書房, pp. 3-11, pp. 47-99, pp. 101-117, pp. 168-186, 2010/5

6-4. 口頭発表

Tanaka, Hitoshi, "Tour Performances: A New Trend in Japanese Contemporary Performing Arts" 18th International Congress of Aesthetics, International Association of Aesthetics, Peking University, 2010/8

田中均 「「真実らしさ」から「崇高」へ——シラー『招霊術師』(Der Geisterseher)に内包された美学」第19回日本シェリング協会大会, 日本シェリング協会, 神奈川大学, 2010/7

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

田中均 日本シェリング協会第7回研究奨励賞(2011年), 日本シェリング協会, 2011/7

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2010年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:田中均

課題番号: 60510683

研究題目: 「ツアー・パフォーマンス」の独自性と意義——調査と分析による解明

研究経費: 2010 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2011 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、現代芸術の新たな現象である「ツアー・パフォーマンス」(以下 TP と略す)の独自性と意義を解明することである。そのために、①平成22年度から24年度までの公演とその制作過程、関連するインスタレーション等を調査し、②調査結果および収集した資料に基づいて、TP の一つのジャンルとしての特性を明らかにするとともに、通時的な変容の過程を分析する。③さらに、類似する海外とりわけドイツ語圏の事例との比較を通じて、日本社会において TP が展開されることの意義を明らかにする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本シェリング協会・理事

2008 年 10 月～現在に至る

7. 渡辺 浩司 助教

1962 年生。1994 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994 年より現職。博士(文学、大阪大学、1998 年)。専攻: 文芸学／西洋古典学。

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

渡辺浩司 「アリストテレスの『ホメロス問題』」手島勳矢編著『近代精神と古典解釈——伝統の崩壊と再構築-』(高等研報告書 1102), pp. 212-228, 2012/3

渡辺浩司 「古代の教養から ギリシアからみえるもの」寄川条路編著『若者の未来をひらく——教養と教育——』角川学芸出版, pp.123-150, 2011/12

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 渡辺浩司

課題番号: 23520121

研究題目: 弁論術から美学へ——美学成立における古代弁論術の影響

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2011年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

美学は18世紀半ばにバウムガルテンによって創建された。美学成立において弁論術が果たした役割は大きいといわれている。しかしこれまで美学成立における弁論術の役割を具体的に解明した研究は少ない。本研究課題は、弁論術が美学成立に与えた影響を、古代弁論術のいくつかのテーマに焦点をあてて、美学的・文芸学的ないし西洋古典学的に解明するものである。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

美学会・幹事

2009年12月～2011年12月

民族芸術学会・委員

1994年4月～現在に至る

2-22 音楽学・演劇学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 1 助教 2(兼任1)

教授：市川 明、永田 靖、伊東 信宏

准教授：輪島 裕介

講師：中尾 薫

助教：山田 高誌、横田 洋

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
50	8	18	0	0	0	2	0	5

※うち留学生 6 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	10	7	0	2	2
2011	10	4	1	0	1
計	20	11	1	2	3

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、年1回開催されている合宿でも、学位論文についての中間報告会を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から40年近くを経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告2本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文2本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に1~2回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や共催する映画祭関連講演会などを積極的に開催する。21世紀懐徳堂やCSCDのイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加している。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2010年度~2011年度)

1. 教育

2010年度は永田教授、市川教授、伊東教授、山田助教の4人体制であったが、2011年度には輪島准教授、中尾講師を新たに迎え、教育活動も一層活発化した。講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行のインターンシップ報告書に受講学生の報告を寄稿した。

2. 研究

音楽学研究室では、2010年に刊行された輪島准教授の著書が著名な学術賞を受賞したほか、多くの成果を挙げた。演劇学研究室では教員3名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また教員の多くは、いずれも科学研究費での助成研究を続けている。また院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。とりわけ国際的な研究集会での外国語による発表が増加しており、演劇学研究室では、2011年5月に大学院生5名を台湾の国際学会に派遣し、口頭発表を行った。また音楽学研究室の教員は、各種学会の委員、理事としての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。演劇学研究室も、日本演劇学会の事務局を務めつつ、2011年には国際演劇学会を開催し、2名の院生が口頭発表するなど、国際的にも学会活動の拠点として存在感を示している。教員、招へい研究員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募なども毎年おこなっている。GCOEをはじめとする学内外の共同研究にも積極的に参加し、GCOE最終年度にあたる2011年度には、同GCOEの最終報告書、および海外での研究集会の報告書に多数の院生、修了生が寄稿した。さらに研究室が主催する『阪大音楽学報』も予定通り出版された。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿を定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、

音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月1回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、日本音楽学会などの委員、理事、日本演劇学会における理事、事務局長などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」や21世紀懐徳堂の行事を含む各種レクチャー・コンサートや、ラボカフェ、大阪大学シンポジウム、大阪大学総合学術博物館企画展などを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、例年どおりの水準を維持した。博士論文については、2009年度に特に多くの論文が提出されたが、2010～11年度は、それ以前の数に戻ったと言える。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、引き続き多くの論文を掲載し、学会でも評価が定着しつつある。2011年8月には International Federation for Theatre Research Osaka Conference 2011 “Tradition, Innovation, Community” を開催し、世界46カ国306名の参加者を得た。また2011年5月には、台湾で全国碩博士生戯劇学術研究会（台北芸術大学）に大学院生5名が参加し、英語による口頭発表を行った。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	2	0	0
2011	0	0	0
計	2	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 横田洋 「連鎖劇の研究 ―明治・大正期の映画と演劇の関係をめぐって―」 2010/9
主査：永田靖 副査：市川明、上倉庸敬
- 菊池あずさ 「蜷川幸雄の演出理念とその変遷 ―シェイクスピア上演を中心に―」 2010/9
主査：永田靖 副査：市川明、上倉庸敬

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	6(5)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	8(7)
2011	7(7)	1(0)	0(0)	1(0)	4(0)	13(7)
計	13(12)	3(2)	0(0)	1(0)	4(0)	21(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	2	5	3	0	0	10
2011	7	5	3	1	0	16
計	9	10	6	1	0	26

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

[博士後期]

(音楽学)

家田恭 “The Form at which a Composer Aimed: Viktor Ullmann’s Song Cycle *Der Mensch und sein Tag*”, 『交錯するアート・メディア』大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究拠点」2007-2009年度報告書, pp. 44-51, 2010

重川真紀 「“境界”という理想郷—シマノフスキのオペラ《ルッジェーロ王》をめぐる論争をてがかりに—」『交錯するアート・メディア』大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究拠点」2007-2009年度報告書, pp. 36-43, 2010

久岡加枝 「多声合唱にみるグルジア人の文化表象—帝政期の音楽学者の言説を中心に—」東洋音楽学会『東洋音楽研究』vol. 75 (2009), pp. 1-20, 2010

山口真季子 「《三人娘の家 *Das Dreimaederlhaus*》(1916)におけるシューベルト・イメージ」待兼山芸術学会『フィロカリア』vol. 28 (2011/3), pp. 13-32

Hrvatina, Klara (フルバティン、クララ), “The FolkSong Kagura Mai: To be or not to be preserved”, *International Forum for Young Musicologists* (abstracts and preliminary papers), The Musicological Society of Japan, April 2010, pp. 111-162.

(演劇学)

須川渡 「「役者子ども」のもつ想像力 —秋浜悟史『幼児たちのあとの祭り』と『ロビンフッド劇』をめぐって—」大阪大学文学会『待兼山論叢 美学篇』vol. 44 (2010/12), pp. 29-53

須川渡 「民話劇の系譜—劇団ぶどう座・川村光夫『うたよみざる』を中心に—」日本演劇学会『演劇学論集』vol. 50 (2010/5), pp. 163-181

戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷（その一）—初期台本の"同（音）"をめぐって—」待兼山芸術学会『フィロカリア』 vol.28 (2011/3), pp. 33-57

【2011 年度】

〔博士後期〕

（音楽学）

家田恭 “A Violinist from Czech Land : Paul Kling and Japan. Focused on the Premiere of the Opera “The Bartered Bride” in Japan,” *Between “National” and “Regional”: Reorientation of studies on Japanese and Central European Cultures*, ed. Kenji Mitani (三谷研爾編), Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 87-93, 2012/3/31

家田恭「チェコ人ヴァイオリニスト、パウル・クリングと日本—NHK 交響楽団における活動を中心に—」叢書コンフリクトの人文学 4『コンフリクトのなかの芸術と表現—文化的ダイナミズムの地平—』、園府寺司、伊東信宏、三谷研爾 編、大阪大学出版局, pp. 235-256, 2012/3/30

家田恭「コンテクストの変換がもたらす楽曲の「日本化」の様相—《蒲田行進曲》を例に—」待兼山芸術学会『フィロカリア』 vol. 29 (2012/3/30), pp. 37-54

奥村京子「リゲティの《ナンセンス・マドリガルズ》におけるパロディソング—<キラキラコウモリ>と<エビのカドリール>を題材に—」『阪大音楽学報』 vol. 9 (2011/7), pp. 21-37

菌田郁「東北地方の一人遣い人形芝居、猿倉人形の成立に関する一考察—『鑑鉄和尚の傘踊り』の成立状況をめぐって—」『民族芸術学会』民族芸術学会, vol.28(2012/3), pp. 173-180

谷利淳「“アウシュヴィッツ”以前の二つのオペラにおける表象の臨界—《ルル》と《モーゼとアロン》—」『阪大音楽学報』 vol. 9 (2011/7), pp. 67-80

山口真季子「E. エルトマンと E. クルシェネクによるシューベルト解釈」『阪大音楽学報』 vol. 9 (2011/7), pp. 51-65

（演劇学）

李星坤 “The Third Theatre —Kobo ABE's meaning in Japanese theatre after the World War”, 『全国碩博士生戯劇學術論文研討會兼讀劇會論文集』国立台北芸術大学, 2011/5

須川渡 “A symbol of the Tohoku Area in Japanese Modern Theatre —*Mekurabundo* and *Tomin Manzai*”, 『全国碩博士生戯劇學術論文研討會兼讀劇會論文集』国立台北芸術大学, 2011/5

神崎舞 “The Image of the Lotus in Robert Lepage's *The Blue Dragon* and Hergé's *The Blue Lotus*”, 『カナダ文学研究』 vol.19 (2011/12), pp. 37-52

神崎舞「越境するサーカス—ロバール・ルパージュ演出 シルク・ドゥ・ソレイユの『トーテム』—」待兼山芸術学会『フィロカリア』 vol. 29 (2012/3), pp. 55-67

藤本百々子 “The trends of the admission fees of Kabuki performances under the management of Shochiku in 1900-1925”, 『全国碩博士生戯劇學術論文研討會兼讀劇會論文集』国立台北芸術大学（台湾）, 2011/5

岡田蒔子 “On “the Motherness” in *Lear* by Rio KISHIDA and ONG Keng Sen” 『全国碩博士生戯劇學術論文研討會兼讀劇會論文集』国立台北芸術大学（台湾）, 2011/5

(2)口頭発表

【2010 年度】

〔博士後期〕

（音楽学）

奥村京子「リゲティの《サンフランシスコ・ポリフォニー》に聴く異文化接触の響き」日本音楽学会第 61 回全国大会、愛知芸術文化センター12 階, 2010/11/7

Kobayashi Hikari (小林ひかり) “Edvard Grieg and the Language Conflict in Norway around 1900”, The Musicological Society of Japan: International Forum for Young Musicologists 2010 in Yokohama, Keio University, Hiyoshi Campus, 2010/5/15

小林ひかり「明治・大正期の日本におけるグリーク受容と国民楽論争」日本音楽学会第 61 回全国大会, 愛知芸術文化センター, 2010/11/6

Hrvatín, Klara (フルバティン, クララ), “The Japanese Folk song Kagura Mai: To be or not to be Preserved”, The Musicological Society of Japan: International Forum for Young Musicologists 2010 in Yokohama, Keio University, Hiyoshi Campus, 2010/5/15

藺田郁「娯楽としての佐渡文弥人形芝居を考察する—担い手と観客の関係を通じて—」東洋音楽学会第 61 回全国大会, 東京学芸大学, 2010/11/14

山口真季子「E.エルトマンと E.クルシェネクによるシューベルトの作品分析」日本音楽学会第 60 回全国大会, 愛知芸術文化センター, 2010/11/6

(演劇学)

神崎舞「ロベール・ルパージュ演出『ドラゴンズ・トリロジー』—東洋の表象からみるケバック—」日本演劇学会全国大会, 明治大学, 2010/6/26

戸田健太郎「狂言の「地謡」の変遷 —初期台本の“同(音)”をめぐって—」六麓会 11 月例会, 兵庫私学会館, 2010/11/1

戸田健太郎「狂言の「地謡」についての一考察 —『福の神』・『鶏聲』・『千切木』の場合—」藝能史研究会, キャンパスプラザ京都, 2010/5/14

藤本百々子「明治・大正期における道頓堀 5 座の座席区分の変遷について」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2010/12/25

【2011 年度】

[博士後期]

(音楽学)

奥村京子「リゲティの『アリス』舞台化計画と《ナンセンス・マドリガルズ》との関連」日本音楽学会第 62 回全国大会, 東京大学, 2011/11

奥村京子「東欧亡命作曲家リゲティにおける「サンフランシスコ」の表象」大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成平成 22 年度(第 3 次)報告会, 大阪大学, 2011/6

藺田郁「猿倉人形の成立に関する一考察—放浪芸能との関わりから—」第 27 回民族芸術学会大会, 岡山市立オリエント美術館, 2011/4/23

Hrvatín, Klara (フルバティン, クララ), “In the milieu of experimental and collaborative 1960's Sogetsu Art Center, INN: Ibaraki Intercultural Network: People-to-People,” Creative Center Ibaraki, 2011/4/7

Hrvatín, Klara (フルバティン, クララ), “In the milieu of collaborative 1960's Sogetsu Art Center: Takemitsu Toru's film music for Otoshiana, in collaboration with Toshi Ichianagi and Yuji Takahashi,” Current Musicological Scene in East Asia, College of Music, Seoul National University, 2011/9/16-18 (国際学会、査読付)

Hrvatín Klara (フルバティン, クララ), My reaction to the IFYM 2010: its positive and negative aspects, ラウンドテーブル「グローバル化する音楽学: 日本からの提言」日本音楽学会第 62 回全国大会, 東京大学(駒場キャンパス), 2011/11/5-6.

フルバティン, クララ「映画『おとし穴』における武満徹と協力者たち: 高橋悠治へのインタビューを中心に」待兼山芸術学会第 22 回総会, 2012/3/31

(演劇学)

李星坤「第三の演劇 —戦後日本演劇における安部公房の意義—」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2011/4/2

李星坤 Seunggon Lee “The Third Theatre —Kobo ABE's meaning in Japanese theatre after the World War”, 全国碩博士生演劇学術研討会及読劇会, 台北芸術大学(台湾), 2011/5/21

李星坤 Seunggon Lee “Trial on the classic”, FIRT/IFTR Annual Conference Osaka, Osaka University, 2011/8/9

藤本百々子 Momoko Fujimoto “The trends of the admission fees of Kabuki performances under the management of Shochiku in 1900-1925”, 全国碩博士生演劇学術研討会及読劇会, 台北芸術大学(台湾), 2011/5/21

- 須川渡 Wataru Sugawa “ A symbol of the Tohoku Area in Japanese Modern Theatre—Mitsuo Kawamura *Mekurabundo (The Blind Grape)* and Satoshi Akihama *Tomin Manzai(The comedy Duo Hibernation)*”, 全国碩博士生戯劇学術研討会及読劇会, 台北芸術大学 (台湾), 2011/5/21
- 岡田蒔子 Fukiko Okada “On “the Motherness” in *Lear* by Rio KISIDA and ONG Keng Sen”, 全国碩博士生戯劇学術研討会及読劇会, 台北芸術大学 (台湾), 2011/5/21
- 神崎舞 “ The image of the Lotus in Robert Lepage's *The Blue Dragon*”, FIRT/IFTR Annual Conference Osaka, Osaka University, 2011/8/10
- 神崎舞 「越境するサーカス・ロバール・ルパージュ演出 シルク・ドゥ・ソレイユの『トーテム』—」近現代演劇研究会 12月例会 (大阪大学), 2011/12/17
- 戸田健太郎「狂言『舟ふな』、『花争』における能謡の演出法についての小考」六麓会 7月例会 (神戸市勤労会館), 2011/7/10

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

[博士前期]

(演劇学)

西恵野 「TTR 能プロジェクト 春公演『小鍛冶』一能の未来と平和への願い 剣に込め—」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室 (441)」 2011/3/8

[博士後期]

(音楽学)

小林ひかり「比叡山に建つペツォルト夫妻の供養塔」ペツォルト夫妻を記念する会『ペツォルトの世界』vol. 2 (2010/6/1), pp. 35-36

菌田郁「二つの現場からみえる佐渡の文弥人形」民族藝術学会『民族藝術』vol.27 (2011/3), pp. 246-247

谷利淳「マラルメ・プロジェクト」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学教室 (415)」文化欄, 2010/8/17

家田恭 (インタビュー記事)「ピアニスト、稲葉綾さんに聞く『レクチャーコンサートを前にして』」関西チェコ/スロバキア協会・協会誌『ブルタバ』vol. 91 (2010/10/1), p.4

家田恭「関西東欧雑貨探訪 大阪・北堀江『チャルカ』—アジのある店風景—」関西チェコ/スロバキア協会・協会誌『ブルタバ』vol. 91 (2010/10/1), p.5

家田恭「発表レポート：日本音楽学会関西支部第349回例会」日本音楽学会『関西支部通信』(2010/11/28)

(演劇学)

須川渡「ピッコロ劇団『あまに唄えば』—二つの「あま」重ね合わせ—」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室 (409)」 2010/7/6

神崎舞「劇団スタジオライブ音楽劇『じゃじゃ馬ならし』—女の武器生かし、たくましく—」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室 (417)」 2010/8/31

李星坤「無名塾『炎の人—ゴッホ小伝』—力強さで圧倒、仲代の演技—」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室(426)」 2010/11/9

戸田健太郎「新春気配際立つ厳かさ 八坂神社 初能奉納《翁》」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室(435)」 2011/1/18

【2011年度】

[博士前期]

(音楽学)

佐上善昭「関西の音と人 2—ピアノ界のマセラティ—」『大阪日日新聞』 2011/6/22

河合悠吾「関西の音と人 5—かわちながの世界民族音楽祭—」『大阪日日新聞』 2011/9/28

肥後楽「関西の音と人 8—北欧の音楽ピクニック—」『大阪日日新聞』 2011/12/28

樋口騰迪「関西の音と人 11—映画『ピアノマニア』—」『大阪日日新聞』 2011/3/28

(演劇学)

西惠野「秋の夜長、能世界の住人へ想い寄せて —第三回大江定期能—」『大阪日日新聞』2011/10/12
中川菜月「男と女の「強さ」心つかむ —團菊祭『女暫』『汐汲』『極付幡随長兵衛』—」『大阪日日新聞』2011/6/8
中川登美子「極限状態の人間演じる —広田ゆうみ 一人芝居『もうひとりの飼主』—」『大阪日日新聞』2011/7/13
金裕彬「助演も実力派そろい —韓国産ミュージカル『美女はつらいの』—」『大阪日日新聞』2011/11/9

〔博士後期〕

(音楽学)

家田恭「関西の音と人 1—フランス生まれびわ湖式音楽祭へ—」『大阪日日新聞』2011/5/25
家田恭(翻訳)(チェコ語)「ダヴィト・ラブス「ヴァーツラフ・ハヴェル大統領との別れ」関西チェコ/スロバキア協会・協会誌『ブルタバ』vol. 95 (2012/2/18), pp. 2-3
奥村京子「関西の音と人 4—星空とオルゴール—」『大阪日日新聞』2011/8/24
藪田郁「関西の音と人 7—サキタハヂメ&菊央雄司二人会くこのぎり」と邦楽の音の交叉点>—」『大阪日日新聞』2011/11/23
藪田郁「遠くて近いアイヌ音楽 —ワールドミュージックとしてのトンコリ—」民族芸術学会『民族藝術』vol.28 (2012/3), pp. 238-239
谷利淳「関西の音と人 3—マラルメ・プロジェクト評 21世紀のヴァーチャル・シアターのために—」『大阪日日新聞』2011/8/17

(演劇学)

岡田蒔子「消え行く精華小劇場への鎮魂 —遊劇体公演『蘇りて歌はん』—」『大阪日日新聞』「関西美術探訪—阪大美学研究室(450)」2011/5/10
李星坤「超現実的経験と二律背反、そして滑稽美 —下鴨車窓の『小町風伝』—」『大阪日日新聞』2012/2/8
須川渡「再生の祈りをこめて—いわき総合高校演劇部『Final Fantasy for XI. III. MMXI』—」AICT 日本センター関西支部『act』vol. 21, 2011/2
須川渡「伝える故郷の技とドラマ —能勢人形浄瑠璃・鹿角座公演—」『大阪日日新聞』2011/8/10
神崎舞「重厚さ増し観客魅了 —『猟銃』—」『大阪日日新聞』2011/12/14
戸田健太郎「人形と俳優の共演 —江戸糸あやつり人形座『コーカサスの白墨の輪』—」『大阪日日新聞』2012/3/14
岡田蒔子「鶴橋で続く常打ち小屋の魅力—「講談毎日亭 難波戦記リレー講談~豊臣戦隊ゴニンジャー」—」『大阪日日新聞』2012/1/11

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2011年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

2011年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度~2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010 年度～2011 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2010 年度：0 名 2011 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2010 年度：0 名 2011 年度：1 名

9. 刊行物

2011 年度 『阪大音楽学報』第 9 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

International Federation for Theatre Research Osaka Conference “Tradition, Innovation, Community”

2011 年 8 月 7～12 日

日本演劇学会事務局

2010 年度・2011 年度

近現代演劇研究会事務局

2010 年度・2011 年度

大阪ヨーロッパ映画祭講演会

2010 年 11 月 17 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東教授、山田助教、そして 2011 年度から加わった輪島准教授は、いずれもきわめて活発な研究活動を展開した。伊東教授は、ハンガリーでの国際研究集会に招聘されて研究発表を行ったほか、GCOE 最終報告書の編集、サントリー文化財団助成による東欧大衆音楽に関する研究会主催、さらに新聞、放送などを通じての社会への発信も多数行っている。輪島准教授は 2010 年に演歌に関する単著を刊行して国内外で重要な学術賞を受賞したほか、各種研究会での報告、雑誌への連載などによって多くの成果を発表した。山田助教は 18 世紀のオペラ研究を中心に、国内のきわめて多様な研究集会で報告を行ったほか、海外での成果発表にも積極的に取り組んだ。また、各教員は科学研究費の研究課題の代表、および分担研究者などとしても多様な課題に取り組んでいるほか、民族学博物館、国際日本文化研究センター、京都大学人文科学研究所などの諸機関における研究会にも参加している。さらに音楽学研究室は、多くの招へい研究員を受け入れているが、彼らが学生院生に刺激を与え、その研究成果を上記の報告書などで公表したことも研究室の研究活動をより層の厚いものにしたといえる。また、音楽学に特化しているという意味では、ほぼ日本で唯一という評価を得た紀要『阪大音楽学報』は、従来どおりの規模で刊行されたが、内容的には外部査読を取り入れることでより充実をはかりつつある。これらを総合すると、阪大音楽学研究室は、当該分野において全国的に見ても、最も多様で活発な研究を展開している拠点であり、各教員はそれをリードする成果を挙げていると考えられる。

(演劇学)

永田靖教授、市川明教授、中尾薫講師とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田が理事・事務局長、市川が理事を務める日本演劇学会の事務局がおかれている。全国大会や研究集会の開催に中心的に関わっている。またその分科会の近現代演劇研究会は実質的に永田が主宰して、毎年 5 回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。永田教授は近年国際会議への出席が頻繁となっており、FIRT 国際演劇学会を始め、主催する研究会をクアラルンプールや台北で開催して、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。市川もブレ

ヒト研究や現代演劇研究を軸にドイツばかりではなく、アジアを含む海外との接触が多く、活発に国際会議での研究活動を行っている。中尾も研究課題に関する展覧会を早稲田大学演劇博物館などで企画開催し、学内外で高い評価を得ているとともに、南京や香港などでの国際フォーラムや国際会議に積極的に参加している。演劇学研究室では、2011年8月に、International Federation for Theatre Research Osaka Conference 2011 “Tradition, Innovation, Community” を大阪大学で開催し、世界46カ国、306名の参加者を得て、最新の研究成果を発表し、研究の推進に努め、日本における演劇研究の拠点として国際的な評価を一層高めることとなった。永田、市川、中尾はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、早稲田大学映像学演劇学国際的研究拠点事業の共同研究者などとなって研究会や研究を組織しており、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム vol.11 「トランシルヴァニア民族舞踏」講師&出演：大塚奈美、ラーザール・アッティラ、ヴァルガ・イシュトヴァーン “チバーシュ”、チョーリ・シャンドル（大阪大学会館講堂） 2010年6月4日
- 音楽学セミナー（京都市立芸術大学、神戸女学院大学との共同開催）「フォルテピアノ・ワークショップ」講師：マルコム・ビルソン、伊東信宏 2010年10月2日
- 音楽学講演会「フォルテピアノの演奏をめぐる」講師：デイヴィッド・ブライトマン（オーバーリン大学） 2010年10月26日
- 音楽学&大阪大学文学部共同講演会「18 世宇木前半のオペラ・ブッフアの“メカニズム” —ペルゴレージ作曲《妹に恋した兄》（ナポリ、1732）を中心に—」（大阪大学スチューデントコモンズ）講師：パオロジョヴァンニ・マイオーネ（アヴェリーノ音楽院）、フランチェスコ・コッティチェッリ（ナポリ第2大学） 2010年11月26日
- 音楽学講演会「初期オペラの現代上演における諸問題—“オーセンティックな演奏”と“オーセンティックな受容体験”の対立を巡って—」講師：松本直美（ロンドン大学ゴールドスミス校） 2011年1月7日
- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム vol.12 「北谷直樹 チェンバロ・レクチャー&ミニ・リサイタル《遠い日のサウンドスケープ》」（B-Tech Japan Osaka 内サロン・スタジオ） 2011年11月13日
- 音楽学&大阪大学西洋美術史共同講演会「外国人画家たちが描いた楽器をもつ古（いにしえ）のイタリア美人」講師：河村英和（ナポリ大学） 2012年1月17日
- 演劇学講演会 Annelis Kuhlmann (Aarhus University) “The living archive —— Towards memories for the future of the theatre. The Archive of Odin Teatret as theatre historiographical model” 2010年11月26日
- 〈能勢浄るりプロジェクト〉「JYORURI カフェ ぶらり浄瑠璃 —おもしろいやな、コレが—」 2012年1月17-18日
- 大阪大学シンポジウム「日本いまからここから」第一部・パフォーマンス「アルビレオの観測所—レクイエムから明日へ—」出演 2011年3月4日
- 近現代演劇研究会 5月例会 研究発表：中筋朋（京都大学大学院）「近代演出の黎明期における「生き生きとした現実」の追究 —アンドレ・アントワヌを中心に—」、永田靖（大阪大学）「伝統と共同体—2011FIRT 大阪大会のために（1）」 2010年5月22日
- 近現代演劇研究会 7月例会 研究発表：芝田江梨（大阪市立大学大学院）「芸者とダンス—河合ダンスにみる女性芸能者への視線—」、井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナの演劇における心身の合一 —『時間の動物』（1986）の詩学をめぐって—」 2010年7月26日
- 近現代演劇研究会 10月例会 研究発表：瀬戸宏（摂南大学）「日本新派『不如帰』受容の中朝比較試論」 ディスカッション：瀬戸宏（摂南大学）・永田靖（大阪大学）「アジア演劇の近代比較研究の方法」 2010年10月23日
- 近現代演劇研究会 12月例会 研究発表：藤本百々子（大阪大学大学院）「明治・大正期における道頓堀5座の座席区分の変遷について」、毛利三彌（成城大学名誉教授）「イプセン及び北欧演劇の現在」 2010年12月25日

- 近現代演劇研究会特別集会 研究発表：Hsiu-Jen JIAN (Taipei National University of Arts) “Taiwan Children's Theatre in Taiwan during the Japanese Colonization”, Gilbert C. F. FONG (Hang Seng Management College, Hong Kong) “Walking on Two Legs: The Ecology of Hong Kong Theatre”, Zainal Abd. LATIFF (University of Malaya, Malaysia) “Traditional Theatre in Malaysia: Between Tradition and Change” 2011年2月27日
- 近現代演劇研究会12月例会 研究発表：「越境するサーカス・ロベール・ルパージュ演出シルク・ドゥ・ソレイユの『トーマム』」神崎舞（大阪大学大学院）、瀬戸宏（摂南大学）「宝塚音楽学校96期裁判について」2012年12月17日
- 近現代演劇研究会3月例会 研究発表：モニカ・レチンスカールフニェヴィチ（大阪大学）「西洋における宝塚歌劇受容の理論的実践的問題」ディスカッション：鴻英良（演劇批評家）・ディスカッサント 永田靖（大阪大学）「近代演劇の成立と演出家の誕生」 2012年3月24日

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 永田靖教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

1-1. 論文

永田靖 「「第3のあり方」をもとめて」『シアターアーツ』(AICT 国際演劇批評家協会日本センター), 49, 晩成書房, pp. 124-127, 2011/12

Nagata, Yasushi, “The future possibilities of inter-Asian theatre research” *Theatre Research International*, (International federation for Theatre Research), 35-2, Cambridge, pp. 285-296, 2010/10

1-2. 著書

Nagata, Yasushi, Pirkko Koski, Melissa Sihra(共著), *The Local meets the Global in Performance*, Cambridge, 199p., pp. 129-144, 2010/7

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「性愛の秤—プトウシキナの劇」『ブラボー、ラウレンシア！』(ロシア現代劇上演シリーズ第4作プログラム), 名取事務所, p. 2, 2012/3

永田靖 「一年のち」, *Arts and Media*, (大阪大学文学研究科アートメディア論コース), 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 20-21, 2012/3

永田靖 「客演の思想」, *Arts and Media*, (大阪大学文学研究科アートメディア論コース), 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 30-33, 2012/3

永田靖 「はじめに」『アジアにおける近現代演劇の国際的比較研究 2011 全国碩博士生戯劇学術論文研討會』(大阪大学文学研究科演劇学研究室), 大阪大学文学研究科演劇学研究室, p. 2, 2012/3

永田靖 「自分の中のもう一人」『近現代演劇研究』(日本演劇学会分科会近現代演劇研究会), Vol.5, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 2-3, 2011/11

永田靖 「国際演劇学会 2011 大阪大会「伝統、革新、共同体」報告」『演劇学論集』(日本演劇学会), 53, 日本演劇学会, pp. 95-97, 2011/11

Nagata, Yasushi, “Tradition, the Earthquake, and the Summer of Japan” *Program, IFTR Osaka Conference 2011*, (International Federation for Theatre Research), Theatre Studies Section, Osaka University, pp. 4-5, 2011/8

Nagata, Yasushi, “Tradition, Innovation, Community” *Book of Abstracts, IFTR Osaka Conference 2011*, (International Federation for Theatre Research), Theatre Studies Section, pp. 4-6, 2011/8

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Modernization of Theatre in Asia” IFTR Asian Theatre Working Group Taipei Meeting: The Modernization of Theatre in Asia/Asian Theatre in the first half of the 20th century, IFTR Asian Theatre Working Group, Guling Street Avant-Garde Theatre, 2012/1

永田靖他「1928年歌舞伎ソ連公演をめぐって」シンポジウム「1928年歌舞伎ソ連公演と日露演劇交流研究の可能性」:1928年歌舞伎ソ連公演と日露演劇交流研究の可能性, 早稲田大学日露演劇交流研究会, 早稲田大学, 2012/1

永田靖「阿波人形浄瑠璃について」アジア・太平洋伝統演劇フェスティバル: Asian Traditional Theatre, 国立台北藝術大学, 宜蘭国立伝統芸術中心, 2011/10

Nagata, Yasushi, “Organizer’s Talk “Greetings” ” International federation for Theatre Research, Osaka Conference 2011: Tradition, Innovation, Community, International federation for Theatre Research, Osaka University, 2011/8

Nagata, Yasushi, “Interaction of Tradition and Modernization” International Comparative Research Meeting of Asian Theatres, : Interaction of Tradition and Modernization, Modern and Contemporary Theatre WG, JSTR., Osaka University, 2011/2

永田靖他「大阪万博40周年の検証」大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム: 大阪万博40周年の検証, 大阪大学21世紀懐徳堂, 毎日新聞オーバルホール, 2010/12

永田靖「メイエルホリドと世界演劇—現実と異文化」早稲田大学演劇博物館演劇映像連携拠点「メイエルホリドと越境の20世紀」: メイエルホリドと越境の20世紀, 早稲田大学演劇博物館演劇映像連携拠点, 早稲田大学演劇博物館, 2010/12

Nagata, Yasushi, “Indian Contemporary Theater: tradition, its present, and its future” IATC International Symposium on Asia : International Collaboration and the Role of Criticism, International Association of Theatre Critic, Tokyo Metropolitan Art Space, 2010/11

Nagata, Yasushi, “On Japanese reception of Stanislavsky System” International Conference on Multiple Perspective on Modern Theatre Histories in Taiwan: Multiple Perspectives on Modern Theatre Histori(es) in Taiwan, National Taipei University of Arts, Department of Theatre, National Taipei University of Arts, Osaka University, 2010/10(*International Conference on Multiple Perspectives on Modern Theatre Histories in Taiwan*, pp. 57–67, 2010/10)

Nagata, Yasushi, “Two Anti-Japan Songs— Inter-Asian Theatre Research from Japanese View Point” FIRT/IFTR Annual Conference 2010 : Culture of Modernity, International federation for Theatre Research, Ludwig-Maximilians-Universität München, 2010/7(*Book of Abstracts*, 2010/7)

永田靖「伝統と共同体—FIRT大阪大会2011のために(1)」近現代演劇研究会5月例会, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 大阪大学, 2010/5

永田靖「伝統と共同体—FIRT大阪大会2011のために(2)」西洋比較演劇研究会5月例会, 西洋比較演劇研究会, 成城大学, 2010/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 永田靖

課題番号: 22320035

研究題目: アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究

研究経費: 2010年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

2011年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

現代のグローバリゼーションの進行する中で演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されて来たが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への

大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジアの特徴と芸術的特質を明確にするのが目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府高等学校芸術文化祭演劇部門/大阪府高等学校演劇研究大会・専門審査員	2011年11月～2012年3月
University of Malaya・Member of Panel of External Assessors	2011年3月～現在に至る
兵庫県立ピッコロ劇団企画運営委員会・運営委員	2011年3月～現在に至る
IFTR Asian Theatre Working Group ・Convenor	2009年7月～現在に至る
国立台北藝術大学戯劇系戯劇学刊 Taipei Theatre Journal・編集委員	2009年6月～現在に至る
International Federation for Theatre research Annual Conference 2011・Organizer	2008年7月～2012年7月
北翔大学北方圏学術情報センター・研究員	2007年4月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Member of Exective Committee	2005年7月～現在に至る
藝術学関連学会連合委員会・委員	2005年6月～現在に至る
日本演劇学会・理事	2002年6月～現在に至る
日本演劇学会・事務局長	2002年6月～現在に至る
日本映像学会紀要『映像学』・編集委員	2002年6月～2010年5月
日本映像学会関西支部・幹事	2002年4月～現在に至る
日本演劇学会分科会近現代演劇学会・主宰	2000年11月～現在に至る

2. 市川明教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より現職。専攻：ドイツ文学／ドイツ演劇。

2-1. 論文

- 市川明 「ハイナー・ミュラーにおけるドイツとドイツ史」『Arts and Media』2, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 4-27, 2012/3
- 市川明 「ブレヒトとフリッツ・ラングの“Hangmen Also Die”」『大阪大学文学研究科紀要』52, 大阪大学文学研究科, pp. 91-132, 2012/3
- Ichikawa, Akira, “Jan-Jan-Oper und Osaka Rap: Yukichi Matsumotos *Mizumachi* und *Keaton*” *The Brecht Yearbook*, 36, The International Brecht Society, pp. 84-93, 2011/10
- 市川明 「ブレヒトと日本/中国—叙事詩的演劇への道」『Arts and Media』1, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 8-27, 2011/3
- 市川明 「シュリンクの『朗読者』—過去の歴史と対峙する若者の苦悩」『民主文学』539, 日本民主主義文学同盟, pp. 146-151, 2010/9
- 市川明 「『レアとラウラ』—ドイツ統一20年に思う」『季論21』9, 本の泉社, pp. 155-162, 2010/7

2-2. 著書

Ichikawa, Akira (共著), *Lea und Laura*, 朝日出版社, pp. 1-118, 2011/11

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-6, 日本放送出版協会, pp. 5-75, 2010/9

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-5, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/8

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-4, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/7

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-3, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/6

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-2, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/5

Ichikawa, Akira, *Guten Tag, Berlin!*, 郁文堂, 80p., 2010/4

市川明 (共著)『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-1, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市川明 「アキラ・イン・ワンダーランド Part 2」『Arts and Media』2, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 171-173, 2012/3

市川明 「歩いていますか、カントリーロード? —木田宏明兄貴追悼」『Laterne』107, 同学社, pp. 24-26, 2012/2

市川明 「被災者支援の二つの公演——演劇人に今、何ができるのか」『シアターアーツ』49, 国際演劇評論家協会日本センター 晩成書房, pp. 87-93, 2011/12

市川明 「ブレヒト研究会と私」『ひろの』51, 財団法人ドイツ語学文学振興会, pp. 28-29, 2011/10

市川明 (劇評)「劇団大阪『フォルモサ』——麗しの島での人類学者の格闘」『act』20, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2011/8

市川明 「アキラ・イン・ワンダーランド」『Arts and Media』1, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 186-189, 2011/3

Ichikawa, Akira(インタビュー), “Japan in Magdeburg mit Kebab und Nachtschichten”, Magdeburger Volksstimme-Zeitung, 2011/2

市川明 「Weimar と前衛芸術」『まいにちドイツ語』60-6, 日本放送出版協会, pp. 76-77, 2010/9

市川明 「Ostalgic」『まいにちドイツ語』60-5, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/8

市川明 「ショプロン、夏の一日」『まいにちドイツ語』60-4, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/7

市川明 「ベルリン 1989年」『まいにちドイツ語』60-3, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/6

市川明 「ベルリンの壁」『まいにちドイツ語』60-2, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/5

市川明 「『レアとラウラ』を始めるにあたって」『まいにちドイツ語』60-1, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/4

2-4. 口頭発表

市川明 「ブレヒトとフリッツ・ラングの“Hangmen Also Die”」シンポジウム:ドイツ文学と映画, 阪神ドイツ文学会, 甲南大学, 2011/12

市川明 「地域コミュニティと文化—Arts & Theater『セイカ』への夢」精華小再生利用のためのシンポジウム: SEIKA!SEIKA!SEIKA!—精華小から/建築/演劇/アートを捉える, 日本建築家協会近畿支部, 中の島中央公会堂, 2011/11

Ichikawa, Akira, “Deutschland und die deutsche Geschichte bei Heiner Müller” International Brecht Kongress: Brecht ± Heiner Müller, Koreanische Brecht Gesellschaft, Seoul National University, 2011/4

Ichikawa, Akira, “Brecht, Kafka, Japanisches Theater – Das Opium der Verwandlung”: 150 Jahre Freundschaft Japan und Deutschland, Theater Magdeburg, 2011/2

Ichikawa, Akira, “Brecht und Japan/China – Über die Songs vom *Guten Menschen von Sezuan*” Internationaler Kongress der Universität Augsburg und der Brecht-Forschungsstätte der Staats- und Stadtbibliothek Augsburg: Verfremdungen. Ein Phänomen Bertolt Brechts in der Musik, Stadt Augsburg, Universität Augsburg, 2011/2

Ichikawa, Akira, “The Opium of Metamorphosis – Three Comical Sources in Brecht and in Japanese Theatre”, University of Visual- and Performingarts Colombo / University of Peradeniya, 2010/12

Ichikawa, Akira, “Jan-Jan-Oper und Osaka-Rap: Brecht-Nachklänge im Theater Ishinha” 13th IBS Symposium: Brecht in/and Asien, International Brecht Society, University of Hawaii at Manua, 2010/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦他 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3

市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号: 22320036

研究題目: プレヒト、ヴァイゲルとベルリーナー・アンサンブル 1949-1971

研究経費: 2010年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

2011年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

亡命から帰還したプレヒトが望んだのは自作を上演する劇団・劇場を持つことだった。1949年に創設されたベルリーナー・アンサンブルでは、プレヒトの妻であり女優であったヘレーネ・ヴァイゲルが総監督を務め、プレヒトは演出家として自作の有効性を舞台上で検証し続けた。本研究は、1949年(創設)から1971年(ヴァイゲルの死)までのベルリーナー・アンサンブルの活動を多様な角度から検討し、プレヒト演劇の本質に迫る試みである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会・幹事、編集委員	2010年4月～2012年3月
日本学術振興会・科学研究費委員会・専門委員	2010年1月～2010年12月
日本演劇学会・理事	2006年4月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004年4月～現在に至る

3. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科(音楽学)卒業。同大学院修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院(ハンガリー)客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授(後、准教授)、2010年4月より現職。専攻:音楽学。

3-1. 論文

伊東信宏 「バルトーク《子供のために》をめぐって」細川周平(編)『うたの地脈—民謡の通文化的研究—』ミネルヴァ書房, pp. 319-334, 2012/3

Ito, Nobuhiro, "Where chalga was born: a geopolitical sketch of Bulgaria's pop-folk music", in Proceedings of the *International Workshop OSAKA-PRAHA 2011*, Between "National" and "Regional" Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, ed. by Kenji MITANI, Overseas Visiting Program Complex for Multilingual and Multicultural Studies Osaka University, pp. 56-60, 2012/3

伊東信宏 「スカルラッティ、バルトーク、そして何人かの中東欧のピアニストたち」『ユリイカ』青土社, pp. 108-112, 2010/4

伊東信宏 「バルトークによる民俗音楽調査・研究・編曲」学位請求論文, pp. 1-243, 2010/4

3-2. 著書

園府寺司, 伊東信宏, 三谷研爾(共編著)『コンフリクトのなかの芸術と表現: 文化的ダイナミズムの地平』大阪大学出版会, 371p., pp. 149-164, 2012/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 伊東信宏 「アルミンク+新日本フィル」朝日新聞文化欄, 平成 24 年 2 月, 2012/2
- 伊東信宏 「アルカント・カルテット」朝日新聞文化欄, 平成 24 年1月, 2012/1
- 伊東信宏 「びわ湖ホール『ドン・ジョヴァンニ』」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 12 月, 2011/12
- 伊東信宏 「新国立劇場『ルサルカ』」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 12 月, 2011/12
- 伊東信宏 「マーラーとボヘミアの楽師たち(後編):クレズマー音楽としてのマーラー」『フィルハーモニー』NHK交響楽団機関誌, pp. 18-21, 2011/11
- 伊東信宏 「ハイドンのユダヤ」日本室内楽振興財団機関誌『奏』36, pp. 13-14, 2011/11
- 伊東信宏 「映画『かいじゅうたちのいるところ』をめぐる断章」『学会会報』891号, pp. 83-87, 2011/11
- 伊東信宏 「チッコリーニ・ピアリサイタル」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 11 月, 2011/11
- 伊東信宏 「マーラーとボヘミアの楽師たち(前編):《交響曲第1番》と奇怪な葬送」『フィルハーモニー』NHK交響楽団機関誌, pp. 19-21, 2011/10
- 伊東信宏 「古典四重奏団:バルトーク弦楽四重奏曲全曲解説」クレアシオン, pp. 9-20, 2011/10
- 伊東信宏 「サイトウキネン・フェスティバル『青ひげ公の城』」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 8 月 29 日夕刊, 2011/8
- 伊東信宏 「新国立劇場『コジ・ファン・トゥッテ』」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 6 月 27 日夕刊, 2011/6
- 伊東信宏 「マーラーと村の楽隊」(京都音楽家クラブ『会報』第631号, pp. 2-3, 2011/6
- 伊東信宏 「バルトークとスロヴァキア民謡」関西チェコ/スロバキア協会会報『ブルタバ』pp. 2-3, 2011/6
- 伊東信宏 「続・音楽を聴かせてください」日本室内楽振興財団機関誌『奏』35, pp. 13-14, 2011/5
- 伊東信宏 「宮崎国際音楽祭」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 5 月 23 日夕刊, 2011/5
- 伊東信宏 「ブリュッヘン&新日本フィル「ベートーヴェン・プロジェクト」第4回」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 3 月 2 日夕刊, 2011/3
- 伊東信宏 「オペラシアターこんにゃく座『ねこのくにのおきゃくさま』」朝日新聞文化欄, 平成 23 年 2 月 9 日夕刊, 2011/2
- 伊東信宏 「パーボ・ヤルビ&ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 12 月 8 日夕刊, 2010/12
- 伊東信宏 「ネルソンス&ウィーン・フィル」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 11 月 10 日夕刊, 2010/11
- 伊東信宏 「アーノンクール&ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス「ロ短調ミサ曲」」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 10 月 27 日夕刊, 2010/10
- 伊東信宏 「トゥルナヴェニ:リゲティの生家」『奏』34, 日本室内楽振興財団, pp. 13-14, 2010/10
- 伊東信宏 「「この歌は誰のもの?」(研究ノート)」『民族藝術学会会報』民族藝術学会, 77, pp. 1-2, 2010/9
- 伊東信宏 「英国ロイヤルオペラ「マノン」」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 9 月 15 日夕刊, 2010/9
- 伊東信宏 「児玉宏+大阪交響楽団」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 6 月 30 日夕刊, 2010/6
- 伊東信宏 「ファリャとチャルメラ」『奏』33, 日本室内楽振興財団, pp. 13-14, 2010/5
- 伊東信宏 「エマ・カークビー+ロンドン・バロック」朝日新聞文化欄, 平成 22 年 5 月 19 日夕刊, 2010/5
- 伊東信宏 「ティーレマン+ミュンヘン・フィル」朝日新聞文化欄, 平成22年4月7日夕刊, 2010/4

3-4. 口頭発表

- 伊東信宏 「ヴァイオリン音楽のオルタナティブ:ストラヴィンスキー・バルトーク・エネスク」, 京都芸術センター, 2012/1
- 伊東信宏 「ハイドンの境界性」グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」GCOE 市民セミナー, 北海道大学スラブ研究センター, 北海道大学博物館, 2011/8
- Ito, Nobuhiro, “Slovakian folk song arrangements by Bartók and their relationship to Stravinsky’s Les noces” “Scholarly Research and Performance Practice in Bartok Studies: The Importance of the Dialogue”:International Musicological Colloquium, Bartok Archives, Hungary, Szombathely, 2011/7
- 伊東信宏 「バルトークのピアノ音楽:大阪大学のパーゼンドルファーをめぐる」, 日本ピアノ教育連盟関西支部総会, ホテル阪神, 2011/5
- Ito, Nobuhiro, “Where chalga was born: a geopolitical sketch of Bulgaria’s pop-folk music”International Workshop OSAKA-PRAHA

2011, : Between “National” and “Regional” Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures , 大阪大学
およびカレル大学, Faculty of Philosophy, Charles University Prague, 2011/3

伊東信宏 「20 世紀ハンガリーのピアノ音楽の系譜:バルトーク/リゲティ+クルターク」京都市立芸術大学, 2011/3

伊東信宏 「トルコ人の知らないトルコ音楽とトルコ料理」アカデミックキング, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪ガス千里中央教室,
2010/11

伊東信宏 「ハイドンからバッハを読む」, 青山音楽記念館, 2010/9

伊東信宏 「楽器と音楽の相互作用:音楽史の立場から」日本音響学会秋期研究発表会, 日本音響学会, 関西大学, 2010/9

伊東信宏 「室内楽の魅力」室内楽セミナー,びわ湖ホール, 2010/9

伊東信宏 「古典派のクラヴィーア・ソナタを読む」懐徳堂古典講座, 懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2010/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2010/5

伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2

伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12

伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11

伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:伊東信宏

課題番号: 20520121

研究題目: ジェルジ・リゲティ研究:中東欧音楽史の視点から

研究経費: 2010 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2011 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究課題は、20 世紀後半を代表する作曲家の一人、ジェルジ・リゲティ(1923-2006 年)について、その創作を彼の文化的背景である中東欧音楽の文脈のなかで明らかにしようとするものである。具体的には、A)幼少期から学生時代にかけてのリゲティの音楽的環境を明らかにし、そこでの民俗音楽の役割などを検討すること、B)第二次大戦後、1956 年のハンガリー動乱までのハンガリーにおけるリゲティの活動を当時の社会状況との関連の中で読み解くこと、C)西欧亡命後、パリ、ケルンなどの「前衛音楽」のサークルにおけるリゲティの位置を、ブレーズやシュトックハウゼンを参照軸としながら明確にすること、D)リゲティ自身の「ヨーロッパ音楽」理解を彼の著作や音楽作品の分析によって明らかにすること、を目指す。そして、最終的にこれらを総合する論点として E)リゲティ唯一のオペラ《ル・グラン・マカーブル》を中心とする彼の諸作品を、中東欧音楽の視点から解釈することで、これまでとは次元の異なる作品理解を導く、というのが本課題の目的である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2011 年度、研究助成、助成金獲得者:伊東信宏

助成金名:サントリー文化財団研究助成

研究題目:旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の生成と展開

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2011 年度 直接経費 1,200,000 円

研究の目的:

1989 年の体制転換以降、旧東欧諸国には欧米の情報が流れ込み、文化の面でも急速な変化が起こった。その中でも注目すべき現象は、「演歌型」大衆音楽ともいべき新ジャンルの登場である。「演歌型」大衆音楽とは、1)欧米のポップスの基本語彙であるベース&ドラムスを基礎としながら、2)発声、歌い回し、楽器法などの点で、民俗音楽の要素を暗示しつつ、3)テレビやカセットテープといった媒体により大衆に浸透したジャンルで、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」、旧ユーゴスラヴィアの「ター

ボフォーク」などがその代表である。

欧米のポピュラー音楽に接した大衆が、単にそれらの虜になるだけでなく、独自の新しいジャンルを生み出したことは興味深い。本研究は、旧東欧諸国を対象とする研究者の協同により、これら諸国における「演歌型」大衆音楽の生成と展開(または不在)について比較し、文化の接触と変容の問題に新しい視座を提供する。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

ザ・フェニックスホール プログラム・アドバイザー	2011年4月～現在に至る
文化庁・芸術選奨推薦委員(2011年度)	2011年4月～2012年3月
文化庁・芸術祭選考委員(2011年度)	2011年4月～2012年3月
文化庁・芸術祭選考委員(2010年度)	2010年4月～2011年3月
民族芸術学会・理事	2008年4月～現在に至る
日本音楽学会・関西支部長	2007年4月～2011年3月
アリオン音楽財団・柴田南雄賞選考委員	2006年4月～現在に至る
朝日新聞音楽懇話会・委員	2000年4月～現在に至る
サントリー音楽財団・専門委員／音楽賞選考委員	2000年6月～現在に至る

4. 輪島 裕介 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学)博士課程単位修得退学。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師を経て、2011年4月より現職。専攻:音楽学。

4-1. 論文

- 輪島裕介 「三橋美智也とうたごえ運動—昭和三〇年代における「民謡」の地位」細川周平(編)『民謡からみた世界音楽—うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房, pp. 385-399, 2012/3
- 輪島裕介 「戦後放送音楽の「ホームソング」志向と三木鶏郎」『待兼山論叢美学篇』45, 大阪大学文学会, pp. 1-27, 2011/12
- 輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(1)—「カタコト歌謡」への道」『アルテス』1, アルテス・パブリッシング, pp. 157-164, 2011/11
- 輪島裕介 『戦後日本(大衆)音楽言説史序説』東京大学大学院人文社会系研究科学位請求論文, pp. 1-278, 2011/3
- 輪島裕介 「《東京行進曲》《こんにちは赤ちゃん》《アカシアの雨がやむとき》—日本レコード歌謡言説史序説」片山杜秀(編)『別冊「本」ラチオ スペシャル・イシュー 思想としての音楽』講談社, pp. 310-347, 2010/11

4-2. 著書

- 輪島裕介 『創られた「日本の心」神話—「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』光文社, 358p., 2010/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 輪島裕介(書評) 「佐藤剛『上を向いて歩こう』」『共同通信』2011/8
- 輪島裕介(書評) 「『中南米の音楽—歌・踊り・祝宴を生きる人々』(石橋純編)」『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 14, pp. 45-50, 2011/2
- 輪島裕介(書評) 「木本玲『グローバリゼーションと音楽文化』」『音楽学』(日本音楽学会), 55-2, pp. 116-118, 2010/

4-4. 口頭発表

- Wajima, Yusuke, "Whose Soul Is Enka?: Re-imagining "Japan" and "Asia" in Post 1970s Popular Music", Graduate Institute of Musicology, National Taiwan University, 2012/3
- 輪島裕介 「「東欧演歌」は「演歌」か?」サントリー文化財団研究助成「旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の生成と展開」(伊東信宏 研究代表)第2回研究会, 大阪大学, 2011/12

輪島裕介 「ブラジルにおける「国民的大衆音楽」の形成と変容」科学研究費・基盤研究(B)「モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果と21世紀グローバリズムの未来」(研究代表者:下河辺美知子)2011年度第1回研究会,成蹊大学,2011/9

輪島裕介 「思想化される歌謡曲」日本音楽学会西日本支部 2011年度第1回例会,日本音楽学会西日本支部,大阪市立大学,2011/6

輪島裕介 「「演歌」と「カタコト歌謡」日本のポピュラー音楽をどうとらえるかーグローバルとローカルの相克ー,成城大学グローバル研究センター,成城大学,2011/1

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

輪島裕介 第33回サントリー学芸賞 芸術・文学部門,サントリー文化財団,2011/11

輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ポピュラー音楽学会・選挙管理委員長

2011年12月～現在に至る

5. 中尾 薫 講師

1978年生。2001年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011年4月より現職。専攻:演劇学。

5-1. 論文

児玉竜一,中尾薫,原田真澄「アルベール・カーン博物館所蔵、日本演劇関係オートクロームおよびフィルムについて」『演劇映像学2012』Vol. 4,早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム,pp. 159-175,2012/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

竹本幹夫,入口敦志,中尾薫他「『葛巻昌興日記』所引能楽関係記事稿(三)」『演劇映像学 2011』Vol.4,早稲田大学演劇博物館グローバルCOE,pp. 103-126,2012/3

中尾薫「世阿弥を継ぐ—十五世観世大夫元章の革新—(報告)」,『早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館報』106号,早稲田大学演劇博物館,pp. 40-43,2012/3

中尾薫(書籍紹介)「松岡心平著『能—大和の世界』物語の舞台に能作者の思いを寄せる」『紫明』29,紫明の会,pp. 83-83,2011/11

中尾薫(展示図録解説冊子)「世阿弥を継ぐ—十五世観世大夫元章の革新—展示品目録と解説」早稲田大学演劇博物館,pp. 2-16,2011/11

中尾薫「世阿弥を継ぐ—十五世観世大夫元章の革新—」『早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館報』105号,早稲田大学演

劇博物館, pp. 18-21, 2011/9

竹本幹夫, 入口敦志, 中尾薫他(資料紹介・翻刻)『『葛巻昌興日記』所引能楽関係記事稿(二)』『演劇映像学 2010』Vol.4, 早稲田大学演劇博物館グローバル COE, pp. 163-167, 2011/3

中尾薫(書籍紹介)「世界と日本の演劇事情徹底比較!」小川幹雄著『舞台監督』, 『紫明』28, 紫明の会, p. 99, 2011/3

中尾薫(書籍紹介)「新刊紹介: 神田裕子著『能と古注釈』」『News Letter』, 8, 早稲田大学演劇博物館グローバル COE, p. 7, 2010/7

5-4. 口頭発表

金剛永謹, 横山太郎, 中尾薫「最古の能楽映像確認の経緯と概要」第18回能楽フォーラム: 昭和初年の金剛謹之輔の片影, 能楽学会, 於: 京都女子大学, 2012/3

Jessica YEUNG, Nakao, Kaoru, Grace Yee 他, “Institution and Arts Development” Asia ICH Performing Arts Forum: Forum2: Comparative Study on Intangible Cultural Heritage(Kun Opera and Noh Theatre), 進念・二十面體, 於: 香港文化中心劇場, 2011/11

Jessica YEUNG, Nakao, Kaoru, KE Jun 他, “Case Study: Jiansu Performing Arts Group Kun Opera House and Tessen-kai(Noh Theatre Company)” Asia ICH Performing Arts Forum: Forum3: Comparative Study on Cultural Institution Practicing Performing Arts Institution, 進念・二十面體, 於: 香港文化中心劇場, 2011/11

Jessica YEUNG, Nakao, Kaoru, 佐藤信他, “Case Study: The Kun Opera Museum of China and Waseda University Theatre Museum” Asia ICH Performing Arts Forum: Forum4: Comparative Study on Cultural Institutions: Research and Archival Institution, 進念・二十面體, 於: 香港文化中心劇場, 2011/11

Jessica YEUNG, 横道文司, Nakao, Kaoru 他, “Case Study: Zuni Icosahedron /Japan Foundation” Asia ICH Performing Arts Forum: Forum5: Comparative Study on Cultural Institutions: Advocacy Institution, 進念・二十面體, 於: 香港文化中心劇場, 2011/11

王廷信, 中尾薫, 清水寛二他「実践組織: 江蘇省演芸集団昆劇院と鏡仙会」国際昆劇フォーラム: 日中両国文化組織の比較研究, 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点, 於: 香港兆基創意書院多媒體劇場, 2011/6

中尾薫「観世元章研究概要—観世文庫の公開による新しい展望を見据えて—」能楽学会東京 10 月例会, 能楽学会, 於: 東京大学, 2010/10(『能と狂言』9, p. 151, 2011/4)

中尾薫「謡曲の伝承過程における作品世界の変貌—観世流の場合を例として—」平成 22 年度中世文学会春季大会, 中世文学会, 於: 法政大学, 2010/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2011 年度~2013 年度、若手研究(B)、代表者: 中尾薫

課題番号: 23720091

研究題目: 能楽の近代化の研究—明治・大正能楽上演記録データベースの構築を中心とする—

研究経費: 2010 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2011 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽を協力を支え、明治期・大正期にかけて能楽の存続と復活を実行した「能楽社」「能楽会」の活動について、その能楽へのはたらきかけや理念は、当時の能楽の実情にどの程度則していたのか、どの程度実現されたのかといった問題を明らかにする。そのために重要なデータとして明治・大正期能楽上演データベースを構築する。そして、最終的には「能楽社」「能楽会」といった能楽支援者の活動を、能楽の「近代化」という視点でとらえ、能楽はどのように近代化の潮流にのあったのか、近代化は行なわれたのか否かを追求する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本演劇学会・幹事	2012年6月～現在に至る
能楽学会・企画実行委員	2010年5月～現在に至る
藝能史研究会・事務局	2003年6月～現在に至る

6. 山田 高誌 助教

1977年、西宮市生まれ。修士(文学)。早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業(1999)。大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻(音楽学)博士前期課程修了(2002)、同大学院博士後期課程単位修得退学(2006)。2002年度、花王芸術・科学財団より助成を受け、イタリア国立ナポリ音楽院付属図書館にて長期調査を行い、国立バリー音楽院・上級ディプロマ取得(記譜史、2004)。また国立バジリカータ大学大学院修士課程(古楽の実践と理論)に学ぶ。(独)日本学術振興会特別研究員 DC2(大阪大学)、SPD(東京芸術大学)、同会海外特別研究員(バリー音楽院付属音楽研究所“カーサ・ピッチンニ”)を経て、2010年より現職。専攻：西洋音楽史、オペラ史。

6-1. 論文

山田高誌「ポリリー言語、芸術、古文書に裏付けられたその誇り」渋沢栄一財団(編)『青淵』2012年1月号、渋沢栄一財団, pp. 24-26, 2012/1

山田高誌、金澤正剛、大河内文恵他(共著)「ペルゴレージとその時代」東京都北区文化振興財団・北とびあ国際音楽祭(編)『北とびあ国際音楽祭「ペルゴレージ生誕 300周年記念“ペルゴレージフェスタ”総合プログラム』東京都北区文化振興財団, pp. 24-39, 2010/11

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山田高誌(記事)「銀行記録オペラ史の宝庫」『日本経済新聞』39247, 日本経済新聞, 2011/6

山田高誌(解説)「トラエッタの足跡 ～ビントからナポリへ、ナポリから「ヨーロッパ」へ」『トラエッタ・オペラ・フェスティバル in Japan』39152, トラエッタ・オペラ・フェスティバル実行委員, pp. 6-8, 2011/3

山田高誌(学会報告)「ヘレン・ガイヤー教授講演会 “Luigi Cherubini - the “unknown” - some aspects regarding the italian oeuvre(opera) and the edition project」『日本音楽学会《関西支部通信》』300, 日本音楽学会, 2011/2

山田高誌(記事)「没後 251 年目のヘンデル・イン・関西」『大阪日日新聞』39008, 大阪日日新聞, 2010/10

6-4. 口頭発表

山田高誌「レチタティーヴォの作曲システム」日本ロッシーニ協会例会, 日本ロッシーニ協会, 虎の門オカモトヤビル, 2011/12

山田高誌「オペラ史におけるゴルドーニの新機軸」慶応大学アートセンター&ダンテ・アリギエーリ協会東京支部、共催シンポジウム「カルロ・ゴルドーニ — 世界の大劇場ヴェネツィア」, 慶応大学アートセンター&ダンテ・アリギエーリ協会東京支部, 慶応大学アートセンター, 2011/9

山田高誌「18世紀イタリアオペラにみる“想像上の異国”と、宮廷人の食卓にみる“リアルな異国”」阪神シニアカレッジ・国際理解学科, 阪神シニアカレッジ, 阪神シニアカレッジ, 2011/7

山田高誌「18世紀イタリアオペラにみる“想像上のアラビア”」大阪ガス=大阪大学 21世紀懐徳堂アカデミックキング講座, 大阪ガス=大阪大学 21世紀懐徳堂, 大阪ガスクッキングスクール千里, 2011/6

山田高誌「ナポリ音楽院の教育と、キャリア形成システム」桐朋学園大学音楽学部音楽学専攻課程・合同ゼミナール，桐朋学園大学音楽学部，桐朋学園大学，2011/5

山田高誌「ナポリ銀行歴史文書館における音楽/劇場史研究：1770～90年代のナポリの音楽家のキャリア形成を例に」日本アーカイブズ学会、2011年度全国大会，日本アーカイブズ学会，学習院大学，2011/4

Yamada, Takashi, “La cantina dei costumi per le commedie napoletane del Ferdinando Maria Banci nel 1769((衣装業者)フェルディナンド・マリア・バンチの、1769年時点のナポリの喜劇/オペラ向け衣装倉庫)” ジョルジョ・チーニ財団(ヴェネツィア)主催、国際研究集会[Faschioning Opera and Musical Theatre: Stage Costumes in Europe from the Late Renaissance to 1900]，ヴェネツィア、ジョルジョ・チーニ財団，ヴェネツィア、ジョルジョ・チーニ財団，2011/3

山田高誌「《劇場支配人》と、メタオペラの系譜」モーツァルトフェライン第302回例会，モーツァルトフェライン，御茶ノ水、クリスチャンセンター，2011/3

山田高誌「“下から上”、文化の“高踏化”：18世紀後半のイタリアの喜劇オペラのジャンル、興行、音楽より」大阪大学文学研究科共同研究 BunCafe 第2回研究発表会，大阪大学文学研究科共同研究，大阪大学，2010/12

山田高誌「イタリア人はいつからトマトを食べ始めたのか？オペラ、歴史的料理本に探る」大阪ガス＝大阪大学 21世紀懐徳堂アカデミックッキング第3回，大阪ガス＝大阪大学 21世紀懐徳堂，大阪ガスクッキングスクール千里，2010/12

山田高誌「ペルゴレージとは誰だったのか」東京都北区文化振興財団・北とびあ国際音楽祭シンポジウム，東京都北区文化振興財団，北とびあベガサスホール，2010/11

山田高誌「パルテノペア共和国(1799)下の音楽家の動向：公証人文書にみるサン・カルロ劇場メンバーの行動から」イタリア学会第58回・全国大会，イタリア学会，大阪大学，2010/10

山田高誌「モーツァルトも目指したナポリのオペラ」大阪市計画調整局＝大阪大学 21世紀懐徳堂講座，大阪市計画調整局&大阪大学 21世紀懐徳堂，アイ・スポット，2010/6

山田高誌「ナポリのバロック音楽」日本イタリア古楽協会例会，日本イタリア古楽協会，代々木、国立オリンピック記念青少年総合センター，2010/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

Yamada, Takashi Premio OPERA IMAIE 2007(クラシック・現代音楽部門大賞)，Istituto per la tutela dei diritti degli artisti interpreti esecutori (IMAIE) (イタリア表演芸術家著作権保護協会主催・第2回イタリア国内CD/DVDコンテスト(2006/7年度)，2007/9/23

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本音楽学会『音楽学』・査読者	2011年9月～現在に至る
日本イタリア古楽協会・運営委員	2008年4月～現在に至る

7. 横田 洋 助教

1976年生まれ。2002年大阪大学文学部人文学科卒業。2005年大阪大学文学研究科博士前期課程修了。2008年大阪大学文学研究科博士後期課程単位修得退学。2010年博士(文学)号取得。2008年大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011年6月より現職。専攻：演劇学。

7-1. 論文

横田洋 「近代的芸術観と連鎖劇」後藤静夫(編)『近代日本における音楽芸能の再検討Ⅱ』(京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」研究会), 1, 京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター, pp. 57-70, 2012/3

横田洋 「演劇類似の系譜」近現代演劇研究会事務局(編)『近現代演劇研究』(日本演劇学会分科会近現代演劇研究会), 3, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 41-54, 2011/10

横田洋 「山長から澤正へー大正期の道頓堀とその観客ー」広瀬依子(編)『上方芸能』181, 『上方芸能』編集部, pp. 17-20, 2011/9

横田洋 「連鎖劇の研究ー明治・大正期の映画と演劇の関係をめぐってー」pp. 1-144, 2010/6

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

横田洋 「女優中村歌扇の軌跡ー映画・演劇・見世物とその交点ー」, 早稲田大学演劇博物館「無声映画のフィルムとテキストの対照に基づく相互的認定研究」研究会, 国立近代美術館フィルムセンター, 2011/7

横田洋 「近代的芸術観と連鎖劇の本領」, 京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」研究会, 京都市立芸術大学, 2010/12

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2009年度～2011年度、若手研究(B)、代表者:横田洋

課題番号: 21720049

研究題目: 連鎖劇における映画・演劇の相互の関係性についての総合的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2011年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

連鎖劇は映画と演劇を結びつけた芸能で、日本に映画が輸入された直後の大正期に大流行した芸能である。連鎖劇における映画と演劇の関係を検討することで、明治から大正期の映画の芸能史における位置付け、あるいは映画の登場が演劇に与えた影響などを検証し、映画史や演劇史あるいはその相互関係の歴史を再考を試みる。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

国際演劇学会・国際演劇学会大阪大会実行委員

2011年6月～2011年8月

2-23 美術史学

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 4(兼任 1) 准教授 2 講師 0 助教 2

教授：奥平 俊六、圀府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰

准教授：岡田 裕成、桑木野幸司

助教：濱住 真有、上原 真依

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	14	13	0	0	1	6	1	1

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2010年度～2011年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2010	16	4	2	1	1
2011	8	4	5	1	5
計	24	8	7	2	6

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点をひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文

化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館でのインターンシップなどの積極的利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間 1 本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1 人平均で年間 1 本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、教育実践センターにおける教育に協力し、2010-11 年度には各 4 セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。また、オプションとして日本画実習を行い、素材に直接触れ、自ら技法等を確認する機会を提供した。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促し、所期の目標を達成した。2010 年度には大学院生 2 名が、2011 年度には大学院生 1 名が大阪市立美術館でのインターンシップを修了した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間 3 名が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、アムステルダムより 17・18 世紀オランダ風俗画を専門とする青野純子先生を招き、国際的な水準の研究および講義に学生・院生たちが接する機会を設け、この他、中世キリスト教美術（早稲田大学益田朋幸教授）、室町水墨画（多摩美術大学島尾新教授）の専門家をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等をおよそ目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、5 人の専任教員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した（1 人が基盤研究(A)、2 人が基盤研究(B)、1 人が基盤研究(C)、1 人が若手研究(B)の研究代表者）。このほか、教員 1 人は人間科学研究科と合同で申請し、採択されたグローバル COE 「コンフリクトの人文学」の事業推進担当者としての任務を果たし、別の教員 1 人は 2010 年度には韓国国立中央博物館の権江美氏を日本学術振興会の外国人招へい研究者（長期）として招へいし、2011 年度には日本学術振興会研究費補助金（基盤研究(A)「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」）に関連する国際シンポジウムを主催した。なお、この間、美術史学会常任委員、民族芸術学会理事などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。

博士後期課程の学生は、論文等 11 件、口頭発表 22 件と、美術史学の専門分野の大学院として、めざましい研究成果を挙げる事ができた。

3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。

IV. 自己点検・自己評価(2010年度～2011年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。2010年度には修了生が文学研究科賞を受賞した。なお、学内からの大学院進学者が2010年度4名、2011年度3名を数え、こうした点でも、教育については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、5人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。外国人研究者の招聘など、国際的な水準の研究環境を整えるという目標も達成できた。博士の学位取得者は2名であった。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2010	1	0	1
2011	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

三田覚之 「飛鳥時代における仏教荘厳美術の研究 ―天寿国繡帳と金銅灌頂幡を中心として―」 2011/3

主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、橋爪節也

木下京子 「池玉瀾研究」 2012/3

主査：奥平俊六 副査：橋爪節也、藤岡穰

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	2(2)	2(0)	0(0)	2(2)	1(0)	7(4)
2011	2(2)	2(1)	1(1)	0(0)	0(0)	5(4)
計	4(4)	4(1)	1(1)	2(2)	1(0)	12(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	4	4	6	0	14
2011	0	5	3	0	2	10
計	0	9	7	6	2	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

〔博士後期〕

磯谷有亮「ジャック・リブシッツ作《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》—両大戦間期末期のフランスにおける美術の政治的意味形成とプロパガンダー—『美術史』170号, pp. 196-211, 2011/03

寺澤慎吾「善光寺参詣曼荼羅について—画面構成と制作背景の考察を中心に—」『フィロカリア』第28号, pp.79-122, 2011/3

古谷優子「寛政五年広寿山什物簿」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類 歴史』第8号, pp. 58-40, 2011/3

三田覚之「法隆寺献納宝物 金銅灌頂幡の再検討 —造立典拠を中心として—」『MUSEUM』625号, pp. 7-37, 2010/4

三本周作「鎌倉時代前・中期における仏像の金属製荘厳具—一意匠形式の分類と制作事情を中心に—」佛教藝術學會編『佛教藝術』313号, pp. 58-88, 2010/11, 毎日新聞社

山口隆介「快慶の軌跡と造像」『別冊太陽 運慶 時空を超えるかたち』平凡社, pp. 96-111, 2010/11

山口隆介「仏師肥後定慶の研究 —東京芸術大学蔵毘沙門天像を中心に—」『鹿島美術研究 年報27号別冊』pp. 372-383, 2010/12

【2011年度】

〔博士前期〕

曾田めぐみ「九品仏浄真寺所蔵絵馬 河鍋暁斎筆『白象と美人』にみる浮世と仏画の融合」『暁斎』108号(pp. 11-17), 2012/1

〔博士後期〕

金子岳史「【作品解説】福田太華《孔雀図》」『熊本県立美術館研究紀要』第12号, pp. 7-10, 2012/3

河内華子「ヘルドルプ・ホルツィウス作「マルティン・ヒュロー夫妻の肖像画」—17世紀ネーデルラント商人の結婚政策と肖像画—」『待兼山論叢』45号美学篇, pp. 45-67, 2011/12

鈴木慈子「「具体」以前の吉原治良 —こどもの造形との関わりを中心に—」『民族藝術』28号, pp. 181-189, 2012/3

三本周作「愛知・瀧山寺聖観音・梵天・帝釈天像の付属荘厳具 —荘厳形式も踏まえた三尊像の理解のために—」『フィロカリア』第29号, pp. 69-103, 2012/3

(2)口頭発表

【2010年度】

〔博士後期〕

磯谷有亮「ジャック・リブシッツ作《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》—1937年のパリ万国博覧会における美術とイデオロギー—」第63回美術史学会全国大会, 学習院大学, 2010/5/23

上原真依「19世紀イタリアにおける美術品流通とカルロ・クリヴェッリ作品—《カステル・トロジノー祭壇画》売却をめぐる—」イタリア学会第58回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2010/10/23

小野尚子「親密なるスラヴ民族—水上パレード企画に見る総合芸術家としてのムハ」美術史学会, 学習院大学, 2010/5/23

小野尚子「ムハの《スラヴ叙事詩》に絡むナショナリズムの変遷」大阪大学GCOEプログラム「中欧モダニズム/ナショナリズム/ローカリズム 問題構成と方法論をめぐる若手ワークショップ No.2」大阪大学, 2010/7/17

小野尚子「理想と愛国心と—《スラヴ叙事詩》と関連作品に見るムハ芸術」『生誕150年記念アルフォンス・ミュシャ展』関連事業講演会, 堺市博物館, 2011/2/13

小野尚子「Fraternal Slavdom. Mucha's Work as a Total Work of Art,」 International Workshop OSAKA-PRAHA 2011: Between National and Regional, Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, カレル大学, 2011/3/22

郷司泰仁「法華経と普賢菩薩」「法華経の光—天台法華宗、信濃へ—」展覧会記念講演会, 長野・常楽寺美術館, 2010/7/28

郷司泰仁「比叡山の仏画について—新出の高麗仏画を中心に—」大津市歴史博物館土曜講座, 大津市歴史博物館, 2010/11/13

郷司泰仁「延暦寺本「阿弥陀八大菩薩像」をめぐる」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2010/11/14

田中竜也「堺市所蔵美術作品展」関西絵葉書研究会, 大阪古書会館, 2010/3/13

三田覚之「法隆寺伝来 繡仏裂の分類と基礎的考察」美術史学会西支部例会, 大阪大学, 2010/9/14

山口隆介(講演)「鎌倉地方の仏像」鎌倉市教養センター, 2010/5/31

山口隆介(講演)「仏像のみかた」鎌倉市観光協会, 2010/7/8

萬屋健司「ヴィルヘルム・ハマスホイの室内画における芸術的展開—イェーテボリ美術館所蔵《室内》を中心に—」2010年鹿島美術財団研究発表会, 鹿島KIビル大会議, 2010/5/19

【2011年度】

〔博士前期〕

曾田めぐみ「九品仏浄真寺所蔵絵馬 河鍋狂斎筆『白象と美女』にみる、浮世と仏画の融合」河鍋暁斎研究会, 蕨眼科3階レクチャールーム, 2011/6/26

藤本真名美「明治の日本画家・谷口香嶠研究」大阪教育大学芸術学研究会, 大阪教育大学, 2012/3/17

〔博士後期〕

赤木美智「国芳作品における三国志画題について」国際浮世絵学会, 学習院大学, 2011/11/27

金岡直子「ギュスターヴ・モロー作《天界を觀想する大神パン》—諸宗教の調停者—」第64回美術史学会全国大会, 同志社大学, 2011/5/22

鈴木慈子「「具体」以前の吉原治良—こどもの造形との関わりを中心に—」第27回民族芸術学会大会, 岡山市立オリエント美術館, 2011/4/24

寺澤慎吾「昔のひとは災害をどう考えたか—日本人の災害観とその変遷—」吹田市立博物館夏季特別展「自然から学ぼう」吹田市立博物館, 2011/7/30

寺澤慎吾「山口・興隆寺『鎮宅靈符神像』について」天文文化研究会, 大阪工業大学, 2011/10/15

寺澤慎吾「吹田に伝わる仏教美術」吹田学事始め講座, 吹田市文化会館, 2012/2/11

中野悠「藤田嗣治の壁画制作」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2012/3/31

三本周作「愛知・瀧山寺の運慶作聖観音・梵天・帝釈天像をめぐる—その荘嚴形式も踏まえた一考察—」第21回待兼山芸術学会, 於大阪大学, 2011/4/2

(3)その他(書評・翻訳など)

【2010年度】

〔博士前期〕

藤本真名美・橋爪節也・濱住真有 共編「森琴石年表」熊田司・橋爪節也編『森琴石作品集』東方出版, pp. 227-239, 2010/1

〔博士後期〕

赤木美智『扇絵展』展覧会図録解説, 大阪市立美術館, 作品 : pp. 234-239, 258-259, 絵師略伝 : pp.218-231, 2010/4

赤木美智『ハンブルク浮世絵名品展』展覧会図録作品解説, 太田記念美術館, pp. 214-233, 2010/10

小野尚子『国立国際美術館巡回展 新しい美術の系譜』展覧会図録作品解説, pp. 14-15, 30, 32, 国立国際美術館／宮城県美術館／都城市立美術館, 2010/8

小野尚子『風穴 もうひとつのコンセプチュアリズム、アジアから』展覧会図録テキスト編集協力, 国立国際美術館, 2011/03

金子岳史『永青文庫の至宝』展覧会図録作品解説, 熊本県立美術館, pp. 245, 252-257, 259-262, 271-273, 2011/3

郷司泰仁『法華経の光一天台法華宗、信濃へー』展覧会図録作品解説, pp. 16-25, 31-33, 50-52, 常楽寺美術館, 2010/7

鈴木慈子「ミン・ティアンポ『空っぽの内容—山崎つる子の具体時代』」翻訳 (Tsuruko Yamazaki: Beyond Gutai 1957-2009, Paris: Almine Rech Gallery, 2010)

鈴木慈子「バート・ウィンザー＝タマキ『東洋の導師とモダン芸術家：戦後米国アートに見る役割分担』講演会原稿翻訳, 国際日本文化研究センター(京都), 2010/11/10

鈴木慈子「民族藝術の四つ辻 フィールドワーク便り パリの白髪一雄」『民族藝術学会会報』第78号, pp. 5-6, 2011/3

古谷優子『禅寺広寿山の名宝』展覧会図録作品解説, 北九州市立自然史・歴史博物館, pp.12-48, 57, 58, 62, 64-68, 71, 論考, pp. 76-80, 編集及び写真撮影, 2010/10

三本周作「《コラム》運慶作品の荘厳金具—滝山寺諸尊像と称名寺光明院大威徳明王像—」『運慶—中世密教と鎌倉幕府』展覧会図録, 神奈川県立金沢文庫, pp. 40, 2011/1

山口隆介『祈りの時代 仏さまの美術 諏訪市の文化財を中心に』特別展図録作品解説, サンリツ服部美術館, pp. 7-9, 18-23, 26-27, 2010/4

山口隆介「阿弥陀如来及び両脇侍像(円覚寺蔵)」口絵解説, 『鎌倉』109, 2010/7

山口隆介「運慶と鎌倉彫刻」(「古都探訪 鎌倉文化を見つめて」), 『神奈川新聞朝刊』, 2010/8/14

山口隆介『薬師如来と十二神将—いやしのみほとけたち—』図録作品解説, 鎌倉国宝館, pp. 98-102, 105-111, 2010/10

山口隆介「鎌倉仏師」(「古都探訪 鎌倉文化を見つめて」), 『神奈川新聞朝刊』, 2010/11/27

【2011年度】

〔博士後期〕

赤木美智(執筆編集)『大江戸ファッション事始め』展覧会リーフレット(16頁), 太田記念美術館, 2011/4

赤木美智『浮世絵戦国絵巻〜城と武将』展覧会図録, 太田記念美術館, 作品解説 : 作品No.144-No.169, 主要城郭マップ(pp. 184-185), 主要城郭解説(pp. 186-191), 2011/10

小野尚子『国立国際美術館 所蔵作品選』、クリスト作《包まれた缶》p. 69, ジョセフ・コースス作《カラー》p. 110, ダン・フレイヴィン作《無題(親愛なるマーゴ)》p. 163, 石原友明作《I.S.M. (スカート)》p. 173, キキ・スミス作《露の虹》pp. 212-213, マーク・クイン作《美女と野獣》p. 249, 国立国際美術館発行, 2012/4

鈴木慈子『ふれあい』No. 102 「関西の美術館で見る名画 岡田三郎助 仏蘭西風景」(p. 13), 財団法人納税協会連合会, 2011/6

鈴木慈子『月刊あいだ』185号, 今井祝雄「〈具体〉—それは「私の大学」だった」講演会の書き起こし(pp. 2-16), 2011/7

鈴木慈子『躍進』秋号 Vol. 526 「アートギャラリー① 小磯良平『斉唱』」伊藤ハム株式会社, 2011/10

鈴木慈子『Sea front シーフロント』Vol. 56 「一番新鮮な話題」兵庫県立美術館「芸術の館友の会」, 2011/10

鈴木慈子『REFLEXIONEN ひかり いろ かたち』展覧会図録, 年譜作成(p. 16), 作家略歴(p. 20, 42, 26, 50), 2011/11

鈴木慈子『アートランブル』Vol. 33 「コレクションから 舟越桂《消えない水滴》」(p. 1), 兵庫県立美術館, 2011/12

鈴木慈子『躍進』冬号 Vol. 527 「アートギャラリー② 金山平三『大石田の最上川』」伊藤ハム株式会社, 2012/1

- 鈴木慈子『カミーユ・ピサロと印象派 永遠の近代』展覧会図録, クレア・デュラン＝リュエル・スノレルツ「印象派展」全8回におけるピサロ」(翻訳 pp. 130-145), 作品解説(pp. 148-151, 162-167 計20件), 2012/3
- 鈴木慈子「新しいコンサヴァターがつくった展覧会」『民族藝術』28号, pp. 244-245, 2012/3
- 寺沢慎吾『さわる』展覧会図録作品解説, pp. 7-8, 吹田市立博物館, 2011/9
- 寺沢慎吾『すいはく 博物館だより』49号, 「大庄屋 中西家名品展」解説, pp. 1, 4-5, 8, 吹田市立博物館, 2012/3
- 寺沢慎吾『大庄屋 中西家名品展』展覧会図録(49頁), 執筆編集, 吹田市立博物館, 2012/3
- 山口隆介『天竺へ 三蔵法師3万キロの旅』奈良国立博物館特別展図録(作品解説), pp. 220, 226-227, 2011/7
- 山口隆介「地藏菩薩立像(東大寺蔵)」『奈良国立博物館だより』78号 名品展のみどころ, 2011/7
- 山口隆介「聖徳太子立像(孝養像)」『聖徳』209号, 2011/7
- 山口隆介「弥勒菩薩立像(林小路町自治会蔵)」(「鹿園観照」作品紹介), 『読売新聞朝刊』2011/7/15
- 山口隆介「深沙大将立像(金剛院蔵)」(「特別展 天竺へ」作品紹介), 『朝日新聞朝刊』2011/8/12
- 山口隆介『第六十三回 正倉院展』奈良国立博物館特別展図録(作品解説), 2011/10
- 山口隆介『奈良時代の東大寺』東大寺ミュージアム特別展図録(作品解説), 東大寺, pp. 187-188, 195, 2011/10
- 山口隆介『おん祭と春日信仰の美術』奈良国立博物館特別陳列図録(作品解説), pp. 39, 2011/12
- 山口隆介『聖徳太子一三九〇年御遠忌祈念 法隆寺展』特別展図録(作品解説), pp. 147, 153-155, 2012/3
- 山口隆介「十二神将立像(十二軀のうち申神・酉神・戌神)」『なにわ』(美術館だより 235号 奈良国立博物館 81), 2012/1
- 山口隆介『なら仏像館 名品図録』(作品解説), pp. 28, 30-31, 49, 52, 56, 126, 2012/1/1
- 山口隆介「十二神将立像(奈良国立博物館蔵)」(「鹿園観照」作品紹介), 『読売新聞朝刊』2012/3/21
- 萬屋健司『別冊太陽 香月泰男』pp. 65-83, 86-97, 平凡社, 2011/8
- 萬屋健司『みる・しる・しらべるコレクション vol. 4 香月泰男《シベリア・シリーズ》』pp. 49-64, 山口県立美術館, 2012/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

萬屋健司, 第17回鹿島美術財団賞優秀者, 鹿島美術財団, 2010年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2010年度 PD: 1名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計3名)

2011年度 PD: 1名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計3名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2010年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2011年度 学部: 1名 大学院: 2名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(2010年度～2011年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

上原真依 博士後期課程 大阪大学大学院文学研究科 助教 2011/4

寺沢慎吾 博士後期課程 吹田市立博物館 学芸員 2011/4

山口隆介 博士後期課程 奈良国立博物館 研究員 2011/4

三本周作 博士後期課程 和歌山県 文化財技師 2012/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2010年度～2011年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2010年度: 1名 2011年度: 2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名 権江美(韓国、国立中央博物館)
2010年度:1名 2011年度:0名

9. 刊行物

2010年度 『フィロカリア』第28号
2011年度 『フィロカリア』第29号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

美術史学会美術館博物館委員会シンポジウム 担当委員 橋爪節也 2010年5月1日
美術史学会西支部例会 担当委員 藤岡穰 2010年9月18日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学文学部(美術史)卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。文学修士。國華社研究員、大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て現職。京都国立博物館客員研究員、大和文華館評議員など。専攻:日本美術史/中近世絵画史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

奥平俊六, 秋田達也, 安永拓世他(共編著)『懷徳堂ゆかりの絵画』大阪大学出版会, 318p., pp. 1-128(このほかに編著者として、「まえがき」「あとがき」を執筆), 2012/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六(書評)「中村健之助・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』」『紫明』30, 紫明の会, p. 90, 2012/3

奥平俊六(番組監修)「額縁をくぐって物語の中へ 彦根屏風」NHK, BSプレミアム, 2012/3/8 放送

奥平俊六(番組監修)「超時空トラベル 京都に恋 洛中洛外図」NHK, BSプレミアム, 2012/3/29 放送

奥平俊六(書評)「馬淵美帆『絵を用い、絵を創る—日本絵画における先行図様の利用』」『紫明』29, 紫明の会, p. 80, 2011/10

奥平俊六(書評)「五十嵐公一『近世画壇のネットワーク—注文主と絵師』」『紫明』28, 紫明の会, p. 96, 2011/3

奥平俊六(書評)「水木しげる『水木サンのお福論』」『紫明』27, 紫明の会, p. 86, 2010/10

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六 第2回国華賞, 国華社, 1990/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

社会福祉法人素王会アトリエインカーブ・評議員	2006年5月～現在に至る
大和文華館・評議員	2005年4月～現在に至る
丹波市・文化財保護審議会委員	2005年4月～現在に至る
神戸市博物館・協議会委員	2003年4月～2012年3月
サンリツ服部美術館・評議員	2002年4月～2011年3月
京都国立博物館・客員研究員	1999年4月～現在に至る
山口県立美術館・収集審査委員	1998年4月～現在に至る

2. 圀府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋美術史。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

圀府寺司, 樋上千寿, 和田恵庭(編)『ああ、誰がシャガールを理解したのでしょうか?』大阪大学出版会, 226p., 2011/12

圀府寺司『ゴッホ 日本の夢に懸けた芸術家』角川書店, 204p., 2010/9

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

Tsukasa Kodera Praemium Erasmianum (エラスムス研究賞), エラスムス財団(オランダ), 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:圀府寺司

課題番号: 21320029

研究題目: イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

2011年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

本研究は、中東欧のイディッシュ語文化圏における芸術活動、ならびに19世紀末から20世紀初頭にかけてのボグロムによって西欧やアメリカに移住したイディッシュ語文化圏出身の芸術家たちの活動を主たる研究対象とし、この国家なき言語文化圏の芸術の様相を明確に浮き彫りにするとともに、それらが近代芸術史の中で果たしてきた役割を明確にすることを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員	2011年4月～現在に至る
国際美術史学会 CIHA・国内委員	2009年4月～現在に至る
民族芸術学会・理事	2000年4月～現在に至る

3. 橋爪 節也 教授

1958年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻:日本美術史/近世近代絵画史。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

奥平俊六, 橋爪節也他『懐徳堂ゆかりの絵画』大阪大学出版会, pp. 273-315, 2012/3

橋爪節也他『なつかしき未来「大阪万博」』創元社, pp. 32-63(インタビュー「大阪は野蛮な力を失った 小松左京」「大阪万博とアート 今井祝雄」), pp. 65-159(「大阪万博」徹底検証—大阪大学 21世紀懐徳堂シンポジウム), pp. 76-77, pp. 94-95, pp. 108-109, pp. 118-119, pp. 156-158, 2012/3

橋爪節也他著, 橋爪紳也監修/創元社編集部編『大阪の教科書 増補改訂版』創元社編集部, pp. 210-215, 2012/3

熊田司, 橋爪節也(共編著)『森琴石作品集』東方出版, pp. 169-182(論文), pp. 70-142(図版編集), pp. 227-239(年表編集), 2010/12

伊藤純, 橋爪節也, 船越幹央他(共著)『大阪の橋ものがたり』創元社, pp. 16-17(「九之助橋—橋向こうは誘惑の世界」), pp. 24-25(「田蓑橋—異国を思わせた黄昏の美」), pp.32-33(「戎橋—銘板に古き川柳散りばめて」), pp.40-41(「端建蔵橋—近代都市美、昭和初期に活写」), pp. 48-49(「十三大橋—日本家屋を連想させるアーチ」), pp.56-57(「幽霊橋—出た!?難波の裏にヒュードロロ」), pp.70-71(「肥後橋—佐伯が見た大阪の“バリ”」), pp. 80-81(「道頓堀橋—響き渡る地下鉄工事の錠音」), pp. 88-89(「信濃橋—名画の雪のメインストリート」), pp. 96-97(「高津原橋—よみがえる映画館の記憶」), pp. 112-113(「西国橋—“大大阪” 自慢の美観地区」), pp. 120-121(「新橋—おもちゃが伝える“大大阪”」), pp. 128-129(「瓦屋橋—上方芝居の古蹟、風情跡形もなく」), pp. 144-145(「藤中橋—篤志家のロマン、自分の名で架橋」), pp. 152-153(「下大和橋—道頓堀川、あふれる色気」), pp. 160-161(「安堂寺橋—高架下に今も漂う奇談怪談」), pp. 168-169(「港大橋—大スケールの赤い橋にこみ上げる思い」), pp. 176-177(「末吉橋—忘れられつつある格の高い橋」), pp. 184-185(「板屋橋—川が消えても残る記憶」), 2010/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさかKEY わーど第22回「天才画伯・佐伯祐三を思え」—パリに描く最後の傑作群—」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』3月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2012/3

橋爪節也「浪花おもしろ図鑑 「こっくりさん」まるで濡つくし 米国紐育府の理学士ランバモース氏発明「人身電気」の図画 一名コ

ツクリサンの理解」産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2012/3

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 21 回「われ、幻の大極殿を見たり」難波宮大極殿発見 50 年」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』2 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2012/2

橋爪節也「浪花おもしろ図鑑 自虐的大阪人も笑えまへんで『贅六バック』『東京バック』定期増刊号」産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2012/2

橋爪節也「浪花おもしろ図鑑 亡霊は今も大阪をひよろひよろと? 橋義陳『宝つかみ取』」産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2011/12

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 20 回“過去はいつも新しく、未来はつねに懐かしい”大正 100 年から平成 24 年の大阪へ」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』12 月 1 月合併号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/12

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 19 回御堂筋の秋—伝説のパレードの記憶—」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』11 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/11

橋爪節也「近代大阪と女性画家の時代—第 1 回 女性の内面を描いた島成園—」『やそしま』5, 財団法人 上方文化芸能協会, pp. 77-107, 2011/10

橋爪節也(インタビュー記事)「「水都・大阪の祖 安井道頓顕彰碑」2011 10 月 23 日 産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2011/10

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 18 回街歩きのたのしみ モダン大阪の三大“ブラ” —心ブラ・道ブラ・平ブラ」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』10 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/10

橋爪節也(雑誌『上方芸能』 特集 大正 100 年—去るもの来たもの—)「美術と都市 画家たち奮闘す」『上方芸能』181, 上方芸能, pp. 37-42, 2011/9

橋爪節也「「独裁」を主張する政治家の登場と森村泰昌の《なにものかへのレクイエム(独裁者はどこにいる)》」同誌編集世話人『視覚の現場・四季の結び』10, 醍醐書房, 2011/9

橋爪節也「浪花おもしろ図鑑 三味線に喰われる太夫「諺齋の宿替」」産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2011/9

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 17 回《大阪市歌》を知っていますか 森鷗外、幸田露伴が審査した文化財級の《市歌》」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』9 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/9

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 16 回なにわ“知”の巨人の貝類標本 木村兼葭堂のコレクション」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』8 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/8

橋爪節也(高島屋創業一八〇周年記念 森村泰昌新作展「絵写真+The KIMONO」カタログ)「創作の悪魔を駆する美術家—森村泰昌と《北野恒富・考》—」高島屋美術部, p. 2, 2011/7

橋爪節也(インタビュー記事)「「おおさか澁・プラスアルファ トーク&トーク 世界第六位の“大大阪”」2011 年 7 月 11 日」毎日新聞『毎日新聞』毎日新聞, 2011/7

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 15 回建築物ウクレレ化保存計画—アートが人の心を癒す—アーティスト伊達伸明がウクレレに託す思い」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』7 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/7

橋爪節也「兼葭堂と若沖についてのある仮説—「兼葭堂日記」の行間を深読みすると」同誌編集世話人『視覚の現場・四季の結び』9, 醍醐書房, pp. 36-37, 2011/6

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 14 回「盛り場をむかしに戻すはしひとつ」食満南北の句碑」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』6 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/6

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 13 回「みおつくし」のプライド」大阪市立総合生涯学習セン

- ター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』5月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/5
- 橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさかKEYワード第12回「“まっちゃまち”の四季一歩く五月人形ー 高級人形から駄菓子、赤本まで」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』4月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/4
- 橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY ワード第 11 回「“子の千三百六十五番…”を知ってますかーいまも生きる“落語スピリッツ”- (成瀬國晴絵馬)」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』3月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/3
- 橋爪節也(インタビュー記事)「住むまち大阪 Osaka Style scene37 暮らしと文化のショーウインドウ 百貨店が届けた豊かな暮らし」大阪市住まい公社『あんじゅ』vol.46 2011年春号, 大阪市都市整備局, pp. 3-4, 2011/3
- 橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY ワード第 10 回「アインシュタイン! ?アートで 20 世紀を回顧するアーティスト 森村泰昌」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』2月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2011/2
- 橋爪節也(インタビュー記事)「舞台はここに 森琴石「高麗橋之図」」産経新聞社『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2011/2
- 森村泰昌, 橋爪節也(対談)「「Dialogue 01 森村泰昌×橋爪節也」(対談)111-123 頁。並びに「森村泰昌の心齋橋空想美術館」8-35 頁制作に協力」『OSAKA ART TOURISM BOOK 大阪観考』大阪旋風プロジェクト(事務局:大阪市・財団法人大阪観光コンベンション協会)発行、株式会社京阪神エルマガジン社発売, pp. 118-123, 2011/3(森村泰昌《心齋橋空想美術館》の取材に協力)
- 橋爪節也(評論)「食満南北を思う その三 南北の著作と大阪・南地」『やそしま』4, 上方文化芸能協会, pp. 30-58, 2011/2
- 橋爪節也「“盛り場をむかしにもどすはしひとつ”ー句碑をたどる“南地”ツアーへの誘い」『大阪保険医雑誌』No.530 特集 町, 大阪府保険医協会, pp. 29-31, 2011/1
- 橋爪節也(評論)「小出権重を読む1ー3「下手もの漫談」「上方近代雑景」「勇ましき構成美」」『大阪春秋』No.141-平成 23 年新春号、特集 没後 80 年小出権重, pp. 18-35, 2011/1
- 橋爪節也(評論)「小出の描いたモダン都市ー《街景》大正十四年九月ー」『大阪春秋』No.141-平成 23 年新春号、特集 没後 80 年小出権重, pp. 36-39, 2011/1
- 橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY ワード第 9 回「今年のまずは第一歩 ~新春 錦絵双六~ (「衣装競似顔双六」)」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』12月1月合併号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/12
- 栗本智代, 橋爪節也(図書出版創元社ホームページ 栗本智代「カリスマ案内人で行く 大阪まち歩き」「第7回「アートなミナミを回遊する[前編]心齋橋筋界隈いまむかし」」栗本智代創元社, 2010/12
- 栗本智代, 橋爪節也(図書出版創元社ホームページ 栗本智代「カリスマ案内人で行く 大阪まち歩き」「第8回「アートなミナミを回遊する[後編]道頓堀の銘板からウクレレまで」」栗本智代創元社, 2010/12
- 橋爪節也「画人兼葭堂を鑑賞するための三つのキーワード」『兼葭堂だより』10, 木村兼葭堂顕彰会発行, pp. 1-4, 2010/11
- 橋爪節也(評論)「市立近代美術館は準備室の呪縛から解放されるかーフォーラム「私たちの近代美術館をつくるために」」『視覚の現場・四季の綻び』第7号, 醍醐書房, pp. 14-15, 2010/11
- 橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY ワード第 8 回「「とめの祭り」の月がきた 晩秋の風情を求めて神農さんへ(道修町・神農祭)」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』11月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/11
- 橋爪節也, 林哲夫「大新版 大坂町中珍説阿法陀羅經(明治 3 年)」(pp.13-15), 「普佛戦争略記 パノラマ セダンノ戦(明治 23 年)」(pp.28-30), 「不思議の女賊 洋妾お俊(明治 40 年)」(pp.43-45), 「美術雑誌パラシュート(大正 13 年)」(pp.112-114), 「大阪叢書(昭和 2 年)」(pp.127-129), 「大大阪(昭和 2 年)」(pp.130-132), 「古本屋(昭和 4 年)」(pp.142-144), 「詩集 蒼ざめた星座(昭和 4 年)」(pp.148-150), 「大大阪橋梁選集(昭和 4 年)」(pp.151-153), 「プレイガイド(昭和 7 年)」(pp.160-162), 「旗艦(昭和 10 年)」(pp.196-198), 「粹(昭和 11 年)」(pp.202-204), 「天王寺の蛸々眼鏡 子寿里庫叢書第零編(昭和 12 年)」(pp.208-210), 「大阪 南地の嵐(昭和 12 年)」(pp.211-213), 「喫茶人 秋季號(昭和 12 年)」(pp.214-216), 「ショップガイド(昭和 13 年)」(pp.217-219), 「旬刊 大阪(昭和 23 年)」(pp.250-253), 「THE HOST(昭和 29 年)」(pp.283-285) 林哲夫『書影でた

どる関西の出版 100 明治・大正・昭和の珍本稀書』創元社, 2010/10

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 7 回「筋」と“通り” ひらあ、かわらに、びんごあづち(「新撰増補大阪大絵図」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』10 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/10

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 6 回「活気あふれるなにわことば“いちびる”市場のにぎわいが“市振る(いちぶる)”のみなもと(滑稽浪華名所「ざこば魚市」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』9 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/9

橋爪節也(評論)「1970 年—よみがえった極私的な記憶—」『視覚の現場・四季の結び』第 6 号, 醍醐書房, 2010/8

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 5 回「涼しさや…夕涼みは大川でふかふかと(木谷千種「浄瑠璃船」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』8 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/8

橋爪節也(評論)「わんすあぼんなたいむ・いん・おおさか 田辺聖子と華やかなりしモダン大阪をめぐる断想」『ユリイカ』2010 年 7 月号、特集・田辺聖子, 青土社, pp. 180-195, 2010/7

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 4 回「大阪名物 造り物 “造り物”は夏祭りの季節(「四季造物 趣向種」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』7 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/7

橋爪節也(書評)「森村泰昌『露地庵先生のアンボン譚』市井の人たることを願う」産経新聞社『産経新聞』産経新聞社, 2010/6

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 3 回「えがかれた適塾 大阪の偉人のドラマをもっとえがいてくれないか」」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』6 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/6

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど第 2 回「再出現! 大阪万博 40 年 大阪が沸騰した記憶(前田藤四郎「長崎堂カステラ包装紙(EXPO70)大阪万博」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』5 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/5

橋爪節也他(評論)「大阪国新都市論 “オオサカ諸島にて(Osaka islands)”にて」大阪国独立を考える会 『大阪がもし日本から独立したら』マガジンハウス, pp. 117-123, 2010/4

橋爪節也(OSAKA 生涯学習情報誌連載)「おおさか KEY わーど 第 1 回「花の都? 花、花、花でチントンジャン…(浪華百景「さくら宮景」)」大阪市立総合生涯学習センター『OSAKA 生涯学習情報誌「いちょう並木」』4 月号, 大阪市立総合生涯学習センター, pp. 1-3, 2010/4

3-4. 口頭発表

橋爪節也「モダン道頓堀を歩く」道頓堀・丸万」展記念講演, 道頓堀・中座ビル1階展示会場, 2012/3

橋爪節也, 井溪明, 松岡政信他「アート de すみ博 2012「日本画が伝える住吉の美術風土」」アート de すみ博 2012 関連講演並びにトーク・コーディネーター, 住吉区役所・すみよし博覧会実行委員会, 住吉区民センター, 2012/3

橋爪節也「講演会「アートよもやま話“20 世紀少年”は私かも—第五回国内勸業博覧会から EXPO'70 へ—」吹田市立博物館 < 小松左京写真展—宇宙に翔く夢— >, 吹田市立博物館, 吹田市立博物館, 2012/3

橋爪節也「「浪花百景」を読む」, 大阪「NOREN」百年会, 堺筋倶楽部, 2012/3

橋爪節也「柔軟な発想」豊中市理科展表彰式記念講演, 豊中市, 豊中市教育センター, 2011/12

橋爪節也「絵画の中の近代大阪をどう読むか」, 豊中市中央公民館, 豊中市中央公民館, 2011/12

橋爪節也「ミュージアムで街は輝きだす —大阪の美術館の歴史と未来—」豊中市美術協会記念講演会, 豊中市美術協会, 大阪空港ホテル, 2011/11

高島幸次, 橋爪節也他「トーク「オチのない中之島放談」」第 43 回大阪大学 21 世紀懐徳堂講座大阪大学創立 80 周年記念スペシャル「芸術する学問」: 第 43 回大阪大学 21 世紀懐徳堂講座大阪大学創立 80 周年記念スペシャル, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール, 2011/11

橋爪節也「近代美人画の個性派—北野恒富とその周辺—」城西国際大学創立 20 周年記念・水田コレクション浮世絵名品展関連

- 企画 四季の風物詩, 城西大学水田美術館, 城西大学, 2011/10
- 五十殿利治, チャールズ・W・ハクストハウゼン, 橋爪節也他「国際シンポジウム「ミュージアムとしての大学キャンパス」」国際シンポジウム:国際シンポジウム「ミュージアムとしての大学キャンパス」, 科学研究費補助金(基盤研究(B))「大学における『アート・リソース』の活用に関する基礎的研究」, 名古屋大学, 2011/10
- 橋爪節也「心斎橋 きもの モダン ―煌めきの大大阪時代―」大阪歴史博物館 開館 10 周年記念特別展「心斎橋 きもの モダン ―煌めきの大大阪時代―」, 大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館, 2011/10
- 橋爪節也「大阪画壇と文楽」文楽座学, 特定非営利活動法人 人形浄瑠璃文楽座, 国立文楽劇場, 2011/8
- 橋爪節也「絵画のなかの近代大阪をどう読むか」サイエンスカフェ@待兼山, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館待兼山修学館, 2011/8
- 橋爪節也, 熊田司「特別展示資料解説」大正イマジュリイ学会特別研究会:大正イマジュリイ学会特別展示, 大正イマジュリイ学会, 大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室, 2011/6
- 橋爪節也他「学会近況報告」美術史学会シンポジウム:WHAT'S NEW?―リニューアルあれこれ―, 美術史学会 国立新美術館, 国立新美術館, 2011/5
- 江口太郎, 橋爪節也他「展覧会関連トーク」阪大生・手塚治虫一医師か?マンガ家か?―関連イベント:展覧会関連トークと木下東鶴「手塚治虫物語」, 豊中市, 豊中市立ルシオーレホール, 2011/5
- 橋爪節也「木村兼葎堂を知っていますか―“知”の巨人と呼ばれた大坂の町人学者―」近畿化学協会第28回通常総会, 近畿化学協会, 大阪科学技術センター, 2011/5
- 橋爪節也「大阪画壇とアール・ヌーヴォー? 北野恒富と島成園の周辺」講演会, 堺市立文化館, 堺市立文化館, 2011/3
- 橋爪節也「近代大阪の変貌―新発見の井上稔作品《肥後橋》《街の風景》によせて」井上稔展特別ギャラリーレクチャー, 奈良県立万葉文化館, 奈良県立万葉文化館, 2011/2
- 橋爪節也「大阪画壇と印刷―美術史を組み立てるのは誰か―」講演, 印刷文化研究会, 凸版印刷関西事業本部, 2011/2
- 橋爪節也他「阪大生によるギャラリートーク「小出楯重を斜め歩く」を指導。」展覧会「没後 80 年記念 小出楯重を歩く―1920 年代 大阪・神戸・芦屋―」芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館。大阪大学総合学術博物館連携事業, 芦屋市立美術博物館, 2011/1『大阪春秋』平成 23 年新春号、特集 没後 80 年小出楯重, pp. 58-60, 2011/1)
- 橋爪節也「高津宮と文楽」高津ルネッサンス【弐】講演会, 高津まちづくり推進協議会, 高津宮, 2010/12
- 橋爪節也「インターネットテレビ出演」インターネットテレビ PowderParty「特別番組 だいご 大坂三郷町中引き廻しツアー」, 製作者 powders, 2010/12
- 橋爪節也「大阪画壇から京都画壇へ―田能村直入と文人画」市民歴史講座, 市立枚方宿鍵屋資料館, 市立枚方宿鍵屋資料館, 2010/11
- 橋爪節也「ミュージアムが都市の輝きを増す―大阪圏と美術館再考―」大阪大学中之島講座, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター, 2010/11
- 橋爪節也他「(テレビ出演)よみがえる『ラジオ歌謡』とその時代〜大阪発・六十年ぶりの復活演奏〜」NHK 大阪放送局 開局八五周年記念番組 公開録画「よみがえる『ラジオ歌謡』とその時代〜大阪発・六十年ぶりの復活演奏〜」NHK 大阪ホール(2010 年 8 月 5 日)に出演, NHK 大阪放送局送局, NHK 大阪放送局送局, 2010/10(放送 NHK 総合TV(2010 年 10 月 13 日ダイジェスト版・西地区) BS2(2010 年 11 月 3、全曲版・全国送))
- 橋爪節也「輝けるモダン都市・大大阪とその文化的土壌」日本ERI大阪支店開設十周年記念講演会, 日本ERI, 大阪市中央公会堂小集会室, 2010/10
- 橋爪節也「幕末大坂の浮世絵「浪花百景」―なにがえがかれているか、みんなで探ろう―」サイエンスカフェ@待兼山, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2010/9
- 橋爪節也「<紙もの>コレクションって何?」芦屋市立美術博物館・連続講演会:「コレクションするということ」第2回, 芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館, 2010/7
- 橋爪節也他「関西の近代美術事情―大阪」シンポジウム:関西の近代美術を調べるということ, 明治美術学会, 京都国立近代美術館, 2010/7
- 橋爪節也「大阪画壇とその潮流」なにわなんでも大阪検定」特別講座「もっと大阪の魅力を知ろう」, 大阪商工会議所, 大阪商

工会議所, 2010/6

橋爪節也, 滝克則, 林哲夫他 「(パネリスト)宇崎純一と大阪ミナミ」フォーラム・パネルディスカッション :宇崎純一と大阪ミナミ, 大阪市立図書館・宇崎純一展開催実行委員会主催, 大阪市立中央図書館 5 階大会議室, 2010/5

橋爪節也, 安村敏信, 明尾圭造他 「(企画・司会進行)“伝説”を創る現場—展覧会の可能性を求めて—」美術史学会美術館博物館委員会東西合同シンポジウム:“伝説”を創る現場—展覧会の可能性を求めて—, 美術史学会, 大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール, 2010/5(『美術史』170, pp. 351-353, 2011/3)

橋爪節也 「描かれた天神祭」講演, 大阪天満宮, 大阪天満宮, 2010/5

橋爪節也 『『大大阪観光』の世界』講演, 水都の会, 中崎町・天人, 2010/5

橋爪節也 「中之島から“大大阪”探訪」第 26 回歴史ミュージアム講演会, 花外楼, 花外楼, 2010/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・西支部常任委員

2008 年 5 月～2010 年 5 月

4. 藤岡 穰 教授

1962 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009 年 4 月より現職。専攻:東洋美術史。

4-1. 論文

藤岡穰 「半跏思惟像と聖徳太子信仰」八尾市教育委員会文化財課(編)『八尾市文化財紀要』17, 八尾市教育委員会文化財課, pp. 1-35, 2012/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

藤岡穰 「半跏思惟像と聖徳太子信仰」八尾市文化財保護条例施行二十周年記念文化財講演会:歴史資産のまち やおの文化財を語る, 八尾市教育委員会文化財課, 八尾市歴史民俗資料館, 2011/11

藤岡穰 「京都・妙傳寺と兵庫・慶雲寺の半跏思惟像」国際シンポジウム:半跏思惟像はどこで作られたか?, 科学研究費補助金 基盤研究(A)「科学的調査に基づく半壊思惟像の日韓共同研究」, 奈良県新公会堂, 2011/11

藤岡穰 「半跏思惟像はいつ、どこで造られたのか?」北海道芸術学会アートーク Vol.24, 北海道芸術学会, 北海道大学, 2011/9

藤岡穰 「行像と生身—四天王寺聖霊院聖徳太子像をめぐる—」ロンドン大学 SOAS サマーワークショップ:前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響—, ロンドン大学 SOAS, ロンドン大学 SOAS Brunei Gallery, 2011/5

藤岡穰 「興福寺南円堂四天王像の再考—新たな運慶イメージの構築—」県立機関活用講座:運慶を学ぶ, 神奈川県, 神奈川県立金沢文庫, 2011/1

藤岡穰 「蔵王権現の誕生」三徳山シンポジウム:蔵王権現の成立と三徳山, 鳥取県・鳥取県教育委員会・三朝町・三朝町教育委員会・三徳山世界遺産登録運動推進協議会, 2010/12

藤岡穰 「四天王寺聖霊院と聖徳太子像の成立」第 483 回四天王寺仏教文化講演会, 総本山四天王寺, 2010/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2009 年度～2012 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号: 21242003

研究題目: 科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究

研究経費: 2010 年度 直接経費 9,300,000 円 間接経費 2,790,000 円

2011 年度 直接経費 5,500,000 円 間接経費 1,650,000 円

研究の目的:

日本、韓国に多く伝わる金銅製の半跏思惟像を主な対象として、蛍光X線による成分分析、X線透過撮影、マイクロスコープによる細部観察、三次元計測等の科学的調査を実施し、各作例の制作地や制作時期を再検討することを目的としている。韓国国立中央博物館との共同研究。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員

2010 年 6 月～2012 年 5 月

5. 岡田 裕成 准教授

1963 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部助教などを経て現職。専攻:西洋美術史。

5-1. 論文

岡田裕成 「自己／他者の表象をめぐる闘争 征服後メキシコの先住民エリートと文化境界上の美術」圀府寺司、伊東信宏、三谷研爾(編)『コンフリクトのなかの芸術と表現 文化的ダイナミズムの地平』大阪大学出版会, pp. 3-39, 2012/3

Okada, Hiroshige, ““Golden Compasses” on the Shores of Lake Titicaca: The Appropriation of European Visual Culture and the Patronage of Art by an Indigenous Cacique in the Colonial Andes” *Memories of the Graduate School of Letters, Osaka University*, 51, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 87-111, 2011/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 岡田裕成(解説)「グアダルupesの聖母像 歴史の変転がつくった「民衆の聖母」」『月刊みんぱく』411, 国立民族学博物館, p. 7, 2011/12
- 岡田裕成(辞典項目)「スペイン美術」「エル・グレコ」「聖衣剥奪」「オルガス伯の埋葬」「トレド大聖堂」「グラナダ大聖堂」「セビーリヤ大聖堂・アルカサル・インディアス総合文書館」川成洋、板東省次『スペイン文化事典』丸善, pp. 98-99, pp. 128-129, pp. 130-131, pp. 132-133, pp. 196-197, pp. 200-201, pp. 748-749, 2011/1
- 岡田裕成(展覧会評)「聖なるものが現れた the Sacred Made Real スペインの絵画と彫刻:1600-1700」『視覚の現場』醍醐書房, pp. 36-37, 2010/8

5-4. 口頭発表

- 岡田裕成「新大陸スペイン植民地の先住民社会とキリスト教美術」関西学院大学キリスト教と文化研究センター・フォーラム, 関西学院大学キリスト教と文化研究センター, 関西学院大学, 2012/3
- 岡田裕成「スペイン国王が愛したイタリアとネーデルラントの絵画 2 フェリペ 2 世とティツィアーノ:官能的な神話画と敬虔な宗教画のあいだで」めぐみ会公開講座, 神戸女学院大学, 2011/12
- 岡田裕成「スペイン国王が愛したイタリアとネーデルラントの絵画1 ヒエロニムス・ボス《快樂の園》:奇抜なるファンタジーの背後にあるもの」めぐみ会公開講座, 神戸女学院大学, 2011/11
- 岡田裕成「文化境界上の観衆 16 世紀メキシコの先住民布教区における図像イメージの受容と発信」『観衆論』的視座に立脚した比較美術史の試み・ワークショップ, 上智大学林道郎研究室, 上智大学, 2011/5
- 岡田裕成「エキゾティック／グロテスク:新大陸植民地に移植された古代地中海の記憶」スペイン、地中海の鏡(スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会 15 周年記念シンポジウム), スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会, セルバンテスセンター東京, 2010/11
- 岡田裕成「大航海時代の美術—スペインとラテンアメリカ 3 セビーリヤ、新大陸への玄関口に栄えた信仰の美術」めぐみ会公開講座, 神戸女学院大学, 2011/12
- 岡田裕成「大航海時代の美術—スペインとラテンアメリカ 2 メキシコのキリスト教美術:植民地布教区の聖堂装飾」めぐみ会公開講座, 神戸女学院大学, 2011/11
- 岡田裕成「大航海時代の美術—スペインとラテンアメリカ1 アルハンブラ宮殿から大聖堂へ:レコンキスタ完了期のスペイン美術」めぐみ会公開講座, 神戸女学院大学, 2011/11
- 岡田裕成「エル・グレコ、ベラスケスと黄金時代スペイン絵画」ボストン美術館展記念講演, 京都市美術館, 2010/7
- Okada, Hiroshige, “Golden Compasses” on the Shores of Lake Titicaca: The Appropriation of European Visual Culture in the Colonial Andes”, The Hispanic Institute at Columbia University, New York, 2010/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号: 243741

研究題目: 植民地中南米における「間文化的アイデンティティ」の美術

研究経費: 2010 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は、イスキルパンのアグスティノ会修道院聖堂壁画を象徴的な事例とする、ヌエバ・エスパーニャ副王領(メキシコ)の宣教修道院の美術装飾における「先住民的」なモチーフ群が、スペイン人統治者・宣教師の「エキゾティシズム」的な関心と、その「エキゾティシズム」をも利用しつつみずからの新たなアイデンティティを構築した先住民首長層の、相互的な関与のもとで生まれた「間文化的」な表象群であることを、植民地で制作された挿絵手稿本や、同時代のヨーロッパにおける新世界に関わる図像イメージの分析を通して解明する。

5-6-2. 2011年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号: 23520120

研究題目: 大航海時代後美術における他者像の類型・系譜とその象徴的機能

研究経費: 2011年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

本研究は、スペイン植民地を中心とする新大陸の先住民像に焦点を当て、その類型と系譜を明らかにする。同時に、「発見」の対象となった他者の像として、あるいは征服者側から他者の役割をあたえられた自己の像として、それらの先住民像が、ヨーロッパ、植民地双方の受容空間において、どのような象徴的機能や意味を担ったのかを解明する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

民族藝術学会・理事

2007年5月～現在に至る

6. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

6-1. 論文

桑木野幸司「甦ったエデン神苑—初期近代イタリアの植物園に関する考察—」文化動態論(編)『待兼山論叢』45, 大阪大学文学部, pp. 67-93, 2011/12

6-2. 著書

桑木野幸司(共著)『ルネサンスの演出家ヴァザーリ(第四章:庭園設計家ヴァザーリ)』白水社, pp. 202-269, 2011/5

Kuwakino, Koji, *L'architetto sapiente. Giardino, teatro, città come schemi mnemonici tra il XVI e il XVII secolo*, Olschki, 325p., 2011/2

Kuwakino, Koji, Olimpia Niglio(共編), *Giappone. Tutela e conservazione di antiche tradizioni*, Edizioni Plus, 244p., 2010/6

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司「十六世紀イタリアの庭園—建築、都市、ランドスケープの観点から—」『美術講演会講演録』(鹿島美術財団), 38, 鹿島美術財団, pp. 33-91, 2012/3

桑木野幸司「建築家ヴァザーリ:生誕500周年をめぐって」『Arts and Media』(アートメディア論研究室), 2, pp. 168-170, 2012/3

桑木野幸司(辞典項目)「(ルネッサンス)理想都市」「ヴィラと庭園—古代とルネッサンス」『イタリア文化事典』丸善出版, pp. 70-71, pp. 294-295, 2011/12

桑木野幸司「イタリア庭園の柑橘類」『地中海学会月報』(地中海学会), 345, 地中海学会, 2011/12

桑木野幸司(訳)(翻訳)『パラディオのローマ:古代遺跡・教会案内』白水社, pp. 1-333, 2011/11

桑木野幸司「蘇るパラディオールネサンス建築史文献案内」pp. 217-222, 2011/11

Kuwakino, Koji(書評), "Marco Beretta, Antonio Clericuzio & Lawrence M. Principe (eds.), *The Accademia del Cimento and its European Context* (Sagamore Beach: Science History Publications, 2009), pp. xiv+257, US\$ 49.95, ISBN 978 0 88135 387 7.", *Early Science and Medicine*, 16-4, pp. 366-368, 2011/9

桑木野幸司(訳)(翻訳)『建築家ムッソリーニ:独裁者が夢見たファシズムの都市』白水社, pp. 1-493, 2010/4

6-4. 口頭発表

桑木野幸司 「ヴァザーリと庭園」シンポジウム「ヴァザーリとイタリア・ルネサンスの芸術」, 京都大学・イタリア文化会館, 京都大学総合博物館, 2011/12/10

Kuwakino, Koji, “Memorizzare con metodo: ‘domus sapientiae’ nel Lambertus Thomas Schenkelius, *Gazophylacium artis memoriae* (1610)” Convegno internazionale: Arti e pratiche della memoria, Scuola Normale Superiore di Pisa, Scuola Normale Superiore di Pisa, 2011/12/16

桑木野幸司 「ヴァザーリと庭園」国際シンポジウム「ウフィツィと宮廷建築家ジョルジョ・ヴァザーリ」, イタリア文化会館・イタリア外務省, イタリア文化会館(東京), 2011/9/27

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会賞, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2011年度、研究活動スタート支援、代表者:桑木野幸司

課題番号: 23820026

研究題目: 十六世紀後半のトスカーナ大公国の視覚芸術文化における記憶術からの影響

研究経費: 2011年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

古典古代の修辞学において体系化されてきた「記憶術」なる情報整理法が、初期近代イタリアの視覚芸術に与えた影響を、トスカーナ大公国の芸術文化を中心に分析する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 濱住 真有 助教

1974年生。実践女子大学文学部(国文学)卒、同大学院文学研究科美術史学専攻修士課程修了。修士(文学)。実践女子大学文学部美学美術史学科・博物館学課程助手、同大学非常勤講師、大月市立大月短期大学非常勤講師を経て、大阪大学大学院文学研究科文化表現論博士後期課程入学、中途退学して現職。専攻: 日本美術史/近世絵画史。

7-1. 論文

飯倉洋一, 濱住真有(共著) 「中井履軒・上田秋成合贊「鶉図」について」懐徳堂研究センター(共著)『懐徳堂研究』3, pp. 3-15, 2012/2

濱住真有 「江戸時代における中国絵画受容の問題——池大雅の款記に見られる「写意」をめぐる——」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 44, pp. 1-27, 2010/12

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

濱住真有 「作品解説 12 件(うち 2 件は共著)」『三木家寄託資料調査報告書』大阪大学大学院文学研究科懐徳堂研究センター, 2010/12

濱住真有他(共編)(共著者:橋爪節也・藤本真名美)「森琴石年表」熊田司・橋爪節也『森琴石作品集』東方出版, pp. 227-239, 2010/12

濱住真有 「絵師解説 26 件、作品解説 12 件、英文リスト(共著)」『鴻池コレクション扇絵名品展図録』大阪市立美術館, 2010/4

7-4. 口頭発表

濱住真有 「中井履軒・上田秋成合賛「鶉図」について」懐徳堂アーカイブ講座, 大阪大学懐徳堂記念会, 2011/11

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

濱住真有 第 3 回『美術史』論文賞, 美術史学会, 2005/5

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2011 年度～2012 年度、若手研究(B)、代表者:濱住真有

課題番号: 23720048

研究題目: 江戸時代中期における室町水墨画の位置:池大雅を中心に

研究経費: 2011 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

18 世紀の京都において、室町時代の画家、如拙、周文などの水墨画がどのように理解されていたのかについて、作画上の具体的な問題として解明しようとするものである。従来、江戸時代の文人画に対する明清画の影響はさまざまに語られてきたが、彼らが一見、否定していたようにも見える室町水墨画も、作画において一規範となり得ていたと考えられる。これを江戸時代の文人画を代表する池大雅(1723-76)の作品を中心に、同時代のいわゆる漢画系諸派の動向も視野に入れつつ考察する。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

8. 上原 真依 助教

1980 年生。京都大学文学部(イタリア語学イタリア文学)卒、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(美術史学)修了、同研究科博士後期課程(美術史学)単位修得退学。文学修士。2011 年 4 月より現職。専攻:西洋美術史。

8-1. 論文

上原真依 「19 世紀イタリアにおける美術品市場—マルケ地方における祭壇画売却をめぐるコンフリクト—」関府寺司, 伊東信宏, 三谷研爾(編)『コンフリクトのなかの芸術と表現』(コンフリクトの人文学), 4, 大阪大学出版会, pp. 195-216, 2012/3

上原真依 「カルロ・クリヴェッリ《カステル・トロジノー祭壇画》—売却関連記録を中心に—」(編)『民族藝術』(民族藝術学会), 27, pp. 164-175, 2011/4

8-2. 著書

なし

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

8-4. 口頭発表

上原真依 「19 世紀イタリアにおける美術品流通 ―クリヴェッリの祭壇画売却に関する史料を中心に―」地中海学会例会，地中海学会，東京芸術大学，2011/12/10(『地中海学会月報』349, p. 3, 2012/4)

上原真依 「19 世紀イタリアにおける美術品流通とカルロ・クリヴェッリ作品 ―《カステル・トロジノー祭壇画》売却をめぐる―」イタリア学会 第 58 回大会，イタリア学会，大阪大学，2010/10/23

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

上原真依 第9回『美術史』論文賞，美術史学会，2011/5

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

8-7-1. 2011 年度、研究助成、助成金獲得者：上原真依

助成金名：美術に関する調査研究助成

研究題目：19 世紀イタリアにおける美術品流通 ―カメリーノ由来のカルロ・クリヴェッリ祭壇画をめぐる―

助成団体名：鹿島美術財団

助成金額：2011 年度 直接経費 700,000 円

研究の目的：

15 世紀の画家カルロ・クリヴェッリの祭壇画は、どのように解体され、流通したのか。19 世紀のナポレオン政権下でカメリーノからミラノに輸送された、4 点のクリヴェッリ祭壇画に関する報告書や輸送資料を読み解き、その輸送状況を明らかにするとともに、各祭壇画に関する新知見を整理し、先行研究における祭壇画再構成をあらためて検証する。

8-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 0

教授：武田佐知子、江川 温、堤 研二

准教授：堤 一昭、井本 恭子

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
17	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 3 名。ほかに学部研究生(留学生)1名。

3. 修了生(2010年度～2011年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2010	2
2011	1
計	3

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「共生文明論講義」「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、歴史学研究各分野の最新状況を知る「歴史学のフロンティア」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により各年度合計4本の単著論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会の開催に協力し、さらに教員の一部が放送大学に出講することによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、特に歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が全員参加するグループ研究報告をおこない、成果を報告書としてまとめることで、プレゼンテーションや編集の能力育成をはかることができた。また通常の授業とは別個に修士論文作成への中間報告の場を設けて、指導・助言体制を強化した。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、各年度とも論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかの助成研究が複数行われた。2010年度に科学研究費・基盤研究(B)「最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発」の成果報告書2冊に、修士課程の大学院生の模擬授業報告/グループ研究報告4本を載せることができたことは本コースの趣旨にもかない、特筆すべきことである。

教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力するという目標については、2010年度に研究代表者をつとめる科研プロジェクトの一環として国内での大規模な研究集会(大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」。全国より高等学校教員を中心に約160名参加)の開催に協力したのをはじめ、複数の教員が科研チームのメンバーとして、国内・国外での研究集会などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会(大阪大学歴史教育研究会月例会など)も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員1名が放送大学に出講した。また本コースの教員1名が世話役の一人として「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

修士論文提出による修了者は3名であった。そのうち1名が公立高等学校教諭(地理歴史)に就いたことは、教育に関する高度専門職業人の養成をめざす本コースの趣旨にもかなうものである。修了大学院生以外の学生(長期履修制度を利用する学生、社会人学生を含む)も、授業以外に研究会での模擬授業準備/グループ研究および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考える。なお修士論文作成および進路についての指導・助言体制を入学時からさらに強化すべきとも考えている。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

V. 基本情報(2010年度～2011年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	0(0)	1(0)	0(0)	3(0)	4(0)
2011	0(0)	0(0)	2(0)	0(0)	0(0)	2(0)
計	0(0)	0(0)	3(0)	0(0)	3(0)	6(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	3	0	0	3
2011	0	0	5	1	0	6
計	0	0	8	1	0	9

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010年度】

猪原達生・大井喜代・金澤雄太・茶田希恵「ローマ帝国の東方交易」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発 成果報告書シリーズ2』(平成20-22年度科学研究費補助金(基盤研究(B)・課題番号)・研究代表者 堤一昭) 模擬授業報告(2), pp. 18-34, 2010/9

小野潤子・吉川和希・高木純一「最初のヘゲモニー国家 17世紀のオランダ」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発 成果報告書シリーズ4《近現代のグローバル・ヒストリーにおけるヘゲモニー国家とアジア》』(平成20-22年度科学研究費補助金(基盤研究(B)・課題番号)・研究代表者 堤一昭), pp. 20-38, 2011/2

中村優希・高橋果江・矢景裕子「19世紀イギリスのヘゲモニー」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発 成果報告書シリーズ4《近現代のグローバル・ヒストリーにおけるヘゲモニー国家とアジア》』(平成20-22年度科学研究費補助金(基盤研究(B)・課題番号)・研究代表者 堤一昭), pp.39-61, 2011/2

坂東亜美・齊藤若菜・金辰姫「20世紀アメリカのヘゲモニー」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発 成果報告書シリーズ4《近現代のグローバル・ヒストリーにおけるヘゲモニー国家とアジア》』(平成20-22年度科学研究費補助金(基盤研究(B)・課題番号)・研究代表者 堤一昭), pp.62-83, 2011/2

藤森衣子・三崎護・中村優希・鈴江文子・後藤敦史・小林茂「アメリカ議会図書館蔵、手描き旅順砲台図および5千分の1地形図一解説と目録」『外邦図研究ニューズレター』8号, pp. 23-43, 2011/3

【2011年度】

藤森衣子「1908年の在神戸アメリカ領事報告」『待兼山論叢・文化動態論篇』(大阪大学文学研究科)第45号, pp. 37-65, 2011/12

伊川健二・合山林太郎・小野潤子・康盛国「文学研究科共同研究「中近世日朝交流史の学際的研究」活動報告」『待兼山論叢・文化動態論篇』（大阪大学文学研究科）第45号, pp. 1-13, 2011/12

(2)口頭発表

【2010年度】

小野潤子・吉川和希・高木純一「最初のヘゲモニー国家 17世紀のオランダ」大阪大学歴史教育研究会第42回例会, 院生によるグループ報告: 近現代のグローバル・ヒストリー②, 大阪大学豊中キャンパス, 2010/5/15

中村優希・高橋果江・矢景裕子「19世紀イギリスのヘゲモニー」大阪大学歴史教育研究会第43回例会, 院生によるグループ報告: 近現代のグローバル・ヒストリー③, 大阪大学豊中キャンパス, 2010/6/19

坂東亜美・齊藤若菜・金辰姫「20世紀アメリカのヘゲモニー」大阪大学歴史教育研究会第44回例会, 院生によるグループ報告: 近現代のグローバル・ヒストリー④, 大阪大学豊中キャンパス, 2010/7/17

【2011年度】

小野潤子「早田左衛門太郎: 対馬と朝鮮の新しい関係をつくったドン」2011 朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会対馬大会実行委員会主催: 対馬易地聘礼 200 周年記念朝鮮通信使講座特別講演, 対馬市交流センター, 2011/8/28

坂倉美早紀・福島邦久・李希泉「暦から見る世界史—社会との関わりをとおして」大阪大学歴史教育研究会第55回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2011/11/19

甲斐田純・宗村敦子・多賀良寛「身体観の東西—伝統的身体観とその変容」大阪大学歴史教育研究会第56回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2011/12/17

渡部玲子・鉄本麻由子・藤田弘晃・荒木陸「歴史人口学からみた日本の歩み」大阪大学歴史教育研究会第57回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2012/1/21

小野潤子「画像資料でよみ解く〈草梁倭館詞〉(寫眞 〈草梁倭館詞〉)」大阪大学文学研究科共同研究「朝鮮漢文学と中近世日本」・釜山大学韓民族文化研究所共催研究会: 「同/異としての草梁倭館」(同/異 草梁倭館), 韓国・釜山大学人文学部, 2012/1/28

小野潤子「釜山現地踏査報告倭館の道をたどる」大阪大学文学研究科共同研究「朝鮮漢文学と中近世日本」研究会: 「朝鮮・倭館と近世日本 - 研究の現在と展望 - 」大阪大学大学教育実践センター開放型セミナー室, 2012/3/2

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2010年度 大学院: 1名 (計1名)

2011年度 大学院: 1名 (計1名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2010年度~2011年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2010年度: 1名 2011年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2010 年度 : 0 名 2011 年度 : 0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 武田 佐知子 教授

1948 年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻: 日本古代史・服装史。

1-1. 論文

武田佐知子「古代浴衣復元のための覚え書き」鈴木則子(編)『「歴史における周縁と共生～疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼」研究成果論集』pp. 131-142, 2012/3

1-2. 著書

武田佐知子 (CD)『古代日本の衣服の変遷 ―貴族の服装と庶民の貫頭衣―』アートデイズ, 2010/11

武田佐知子(編)『太子信仰と天神信仰——信仰と表現の位相——』思文閣, 352p., 2010/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

武田佐知子「衣服と笏」学術シンポジウム「古代シナノ地域史の再構築—地域から古代史を読み直す—」: 第Ⅱ部「戸隠神社所蔵の(重要文化財)通天牙笏と古代の笏」, 日本学術振興会科学研究費「目録学の構築と古典学の再生」/ 社団法人 金鶏会, THE SAIHOKUKAN HOTEL (旧 長野ホテル犀北館), 2011/10

武田佐知子「仏教文化史から見る聖徳太子」第 5 回学術研究大会: 聖徳太子をめぐる諸問題, 藝林会, 2011/9

武田佐知子「古代人は何を着ていたか」, 総社市/古代吉備のロマン学—総社観光大学—, 岡山県立大学, 2011/8

武田佐知子「第二部 パネルディスカッション」東京新聞フォーラム「よみがえる古代の大和 卑弥呼の実像」, 東京新聞, 江戸東京博物館ホール, 2011/8

武田佐知子「ズボンとスカートの歴史学」, 東京学芸大学附属高等学校, 2011/2

武田佐知子「古代吉備の風景」, 総社市第 25 回国民文化祭, 総社市総合文化センター, 2010/11

武田佐知子「古代の衣服と社会」立命館大学講演会: 古代の衣服と社会, 立命館大学, 立命館大学衣笠校舎清心館, 2010/11

武田佐知子「咲くやこの花—大阪の歴史と四天王寺・聖徳太子—」, 大阪大学工学部同窓会桜花会, 大阪大学银杏会館, 2010/11

武田佐知子「聖徳太子像の謎」, 愛媛県 法蓮寺, 2010/10

武田佐知子「一遍と熊野詣」, 世界遺産熊野本宮館, 世界遺産熊野本宮館多目的ホール, 2010/10

武田佐知子「邪馬台国の女王、卑弥呼の衣服」, 長野高校金鶏会, 長野高校同窓会金鶏会館, 2010/7

武田佐知子「古代の国際関係と邪馬台国の女王卑弥呼の衣服」文化講座『三輪山セミナー』, 大神神社, 2010/6

武田佐知子「民族衣装における異装と共装」第 37 回総会・研究発表大会 公開シンポジウム: 異装の考現学, 日本生活学会,

武庫川女子大学, 2010/5

武田佐知子 「遣唐使粟田真人の冠から見た日本古代の礼服冠について」国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」, 奈良
県立橿原考古学研究所附属博物館 平城遷都 1300 年記念春季特別展「大唐皇帝陵展」実行委員会, なら 100 年会館,
2010/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

武田佐知子 紫綬褒章, 2003/11

武田佐知子 第8回濱田青陵賞, 大阪府岸和田市／朝日新聞社, 1995/9

武田佐知子 サントリー学芸賞 思想・歴史部門, サントリー文化財団, 1985/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2010 年度、研究助成、助成金獲得者:武田佐知子

助成金名:サントリー文化財団研究助成

研究題目:創唱宗教における民間信仰受容による変化の総合的研究

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2010 年度 直接経費 1,000,000 円

研究の目的:

これまでの歴史学が創唱宗教の社会的展開の様相や、教義の系譜などに関心を持ってきたのに対し、民俗学では民間信仰の事例報告に重きをおいて、その地域的特性を明らかにすることに主たる関心を払ってきたため、その結果として両者の狭間における宗教状況については研究がほとんど見られない現状に鑑み、創唱宗教と民間信仰の狭間における宗教状況を明らかにする。本研究では、7 月 7 日における習俗・行事に焦点を絞り、従来の「七夕」についての研究史を、天文学や国文学の視点からも批判的に検討するとともに、7 月 7 日の行事・習俗について、それを先験的に「七夕」とするのではなく、あるがままの行事・習俗について現地調査し、その本質を考える。

1-7-2. 2011 年度、研究助成、助成金獲得者:武田佐知子

助成金名:サントリー文化財団研究助成

研究題目:七月七日の習俗について

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2011 年度 直接経費 1,000,000 円

研究の目的:

前年度に実施した「創唱宗教における民間信仰受容による変化の総合的研究」を研究の方向性を明確化し進展させたものである。従来の歴史学と民俗学が役割分担したかのように研究対象としてきた創唱宗教と民間信仰の研究の狭間には、両学問間の連絡体制の不備から落ち込んでしまった多様な信仰形態が存在する。七夕の起源・役割・行事の内容等に関する理解に学術的な統一性や共通性が希薄である中、七月七日の習俗を全て七夕の習俗と同一視する安易な解釈が定説化している実態がある。本研究においては、七月七日の習俗の多様性をさぐり、当該日の行事がどのような信仰によって形成されたものかを具体例によって検証する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

文化審議会・整備計画委員	2010 年 9 月～現在に至る
大阪府・山片蟠桃賞選考委員	2010 年 4 月～2012 年 3 月
小林国際奨学財団・評議員	2010 年 3 月～現在に至る

大阪市博物館協会・評議員
女性史総合研究会・女性史学賞選考委員

2009年10月～現在に至る
2006年4月～現在に至る

2. 江川 温 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。2012年4月より全学教育推進機構長。専攻:西欧中世史。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

江川温(書評)「城戸毅著『百年戦争—中世末期の英仏関係—』『西洋史学』241, 日本西洋史学会, pp. 82-84, 2011/6

江川温(書評)「大宅明美『中世盛期西フランスにおける都市と王権』『図書新聞』3004, 株式会社図書新聞, p. 5, 2011/3

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(B) 一般、代表者:江川温

課題番号: 23320159

研究題目: 中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的統制化

研究経費: 2011年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

中世カトリック圏における君主権の神話的・歴史的統制化を、統制化の物語それ自体、表現形態、伝達形態の歴史的変化に注目しつつ考察する。またフランス、イングランドといった中核国家とカスティーリヤ、ハンガリーといったフロンティア国家、王権と領邦君主権といった対比を重視する。さらにこのような君主権の統制化が西欧のエトニ形成に果たした役割を考察する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・副会長	2008年4月～現在に至る
史学会・評議員	2005年4月～2012年3月
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る

3. 堤研二 教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(九州大学、1986)・博士(文学)(九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞(1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞(2005)、大阪大学教育・研究功績賞(2006)、大阪府スポーツ少年団優良団表彰(2012)。専攻:人文地理学。

3-1. 論文

Tsutsumi, Kenji, "Formation of the Tourist Industry at the Core of a Shrine through the Modern and Present Eras: Social Capital and Agent around Dazaifu" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H. (共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 7, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 69-85, 2012/2

Tsutsumi, Kenji, "Interscale and Interlevel Problems of Research on Social Capital in Rural Japan" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H. (共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 7, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 241-256, 2012/2

堤研二 「地域科学、新経済地理学と日本の経済地理学に関する試論的考察:ERSA50周年と日本の経済地理学」大阪大学文学研究科『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学研究科), 45, 大阪大学文学研究科, pp. 1-25, 2011/12

堤研二 「山間地域集落の生活機能とソーシャル・キャピタル」藤田佳久(共編著)『山村政策の展開と山村の変容』原書房, pp. 219-243, 2011/3

Tsutsumi, Kenji, "Social Capital in Rural Studies in Japan: An Examination of Actual Forms of Social Capital Especially in Rural Japan" Kobayashi K., Westlund, L. and Jeong, H. (共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 6, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 129-139, 2011/2

Tsutsumi, Kenji, "Settlement Activities and Social Capital of Depopulated Rural Areas in Japan" Westlund H. and Kobayashi, K. (共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 5, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 93-106, 2010/8

3-2. 著書

堤研二 『人口減少・高齢化と生活環境:山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会, 295p., 2011/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, "Regional Science and New Economic Geography in the Academia of Japanese Economic Geography" The 3rd Global Conference on Economic Geography, The 3rd Global Conference on Economic Geography, COEX (Seoul, South Korea), 2011/6

Tsutsumi, Kenji, "Formation of the Tourist Industry at the Core of a Shrine through the Modern and Present Eras: Social Capital and Agents around Dazaifu Tenmangu" The 8th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), Nara Prefecture New Public Hall, 2011/5

Tsutsumi, Kenji, "Comments to "Economic Entrepreneurship, Startups and Their Effects on Local Development: The Case of Sweden"" The 8th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside,

MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), Nara Prefecture New Public Hall, 2011/5

堤研二 「コメント:多様な山村像の把握のために」経済地理学会 2010 年度松本地域大会シンポジウム:今日の山村問題と経済地理学の課題, 経済地理学会 2010 年度松本地域大会シンポジウム, 信州大学, 2010/10

Tsutsumi, Kenji, "Interscale and Interlevel Problems of Research on Social Capital in Rural Japan" The 7th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Swedish and Japanese Countryside, with a conference of the 50th years anniversary of European Regional Science Association (ERSA): Sustainable Regional Growth and Development in the Creative Knowledge Economy, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), Jönköping University, 2010/8

堤研二 「地域連携と子の育ち:地域の事情を知り、学校現場に生かす手法とは」豊中市立小曾根小学校・学力向上自主企画事業・校内研修会, 豊中市立小曾根小学校, 豊中市立小曾根小学校, 2010/8

Tsutsumi, Kenji, "Resources for Some Possibilities Bonding to Cultural Translation: Section of Human Geography at Graduate School of Letters, Osaka University" Japanese-German Presidents' Conference: Cultural Translation, Japanese-German Presidents' Conference, Heidelberg University, 2010/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 スポーツ少年団・優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤研二

課題番号: 20520684

研究題目: 地域統計データにみる人口減少期の社会経済変動のトレンドと市町村合併のインパクト

研究経費: 2010 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、人口減少地域を対象として、当該地域における社会経済的な中・長期変動のトレンドを把握した上で、当該地域の抱える問題点や課題を明らかにすることである。具体的には、複数時点での地域統計データを収集してデータベースを構築し、多変量解析による地域類型化とその変化の分析を行い、その背景の分析や、当該地域の問題に関係する対策・政策の再検討をすることを主眼点とする。

本研究の目的は 4 つの柱から構成される。すなわち、(1) 過疎地域をはじめとする人口減少地域の 30 年以上にわたる地域統計データを分析して、データベースを構築し、当該地域の特性(類型)とその変動パターンを析出し、(2) その変動の背景をグローバル、ナショナル、リージョナル、ローカルといった異なるスケール・レベルで検討し、(3) これまでの人口減少地域・過疎地域に関する対策・政策の効果・アウトカムや現在進行中の市町村合併の影響を分析し、(4) 市町村合併と小地域統計の問題について考察を加えること、である。

3-6-2. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:堤研二

課題番号: 23320182

研究題目: 中山間地域における林業・森林環境と住民生活に関するマネジメント=モデルの構築

研究経費: 2011 年度 直接経費 3,600,000 円 間接経費 1,080,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル(FTMM)」を構築する目的でのパイロット

ト研究を実施することにある。具体的には、(1) 森林環境保全のための管理モデル、(2) 林業再生のための合理的方策に関するモデル、(3) 中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4) それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

現代日本の森林環境と林業の課題として、地球温暖化問題・二酸化炭素排出量問題等への対応や輸入木材への依存からの脱却が求められている。こうした中で、少なからぬ蓄積量のある国内の森林資源を見直し、広域にわたって荒廃・放棄された森林を再生させながら、疲弊している林業を活性化させることが、環境問題や林業再生の観点からの近未来的な課題として明らかになってきている。一方で、中山間地域では基幹産業である林業の衰退だけでなく、人口激減と高齢化によって地域社会の生活機能の維持についても困難に直面している。このような諸問題の解決のためには、中山間地域の森林管理・林業・産業(兼業)や生活の総合的な関連性に目を向けた、持続可能性の高い現実的な地域マネジメントに関する政策提言が必要であり、そのための問題局面へとつながりうる実証的な地域調査に依拠したモデルの構築と提示を行うことが重要な課題である。中山間地域では、兼業によって林業や地域農業が支えられているという実態があるため、複眼的な研究視点も不可欠となる。前述の問題状況や課題をふまえて、日本の国土の大部分を占める森林・中山間地域を対象として、森林資源の自給と安全保障も斟酌し、森林荒廃を防いで林業再生と中山間地域の産業(兼業)・生活の保全を図りたいという強い目的意識を本研究は有する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・人文地理学事典編集委員	2011年8月～現在に至る
国際地理学連合京都国際地理学会議・組織委員・巡検委員長	2011年8月～現在に至る
人文地理学会・評議員	2010年11月～現在に至る
日本地理学会・代議員	2010年4月～現在に至る
日本地理学会・E-Journal Geo 編集委員	2008年4月～2012年3月

4. 堤 一昭 准教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:東洋史学。

4-1. 論文

堤一昭「チンギス・カン画像の“興亡”——石濱文庫所蔵の満洲国モンゴル人むけカレンダーをめぐる——」堤一昭(編)『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ——』(平成23年度大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書), pp. 22-37, 2012/3

堤一昭「「中国」の構造をめぐる現代日本の議論——帝国から国民国家へ——」周太平・包文勝(編)『現代中国與東亜新格局 5 百年中国與周邊地域』, 内蒙古大学, pp. 213-222, 2011/8

4-2. 著書

堤一昭(編)『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ——』平成23年度大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書, 46p., 2012/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堤一昭「モンゴル帝国の基本構造——チンギス・カンからクビライ・カアンへ——」大阪大学歴史教育研究会(編)『大阪大学歴史

教育研究会 成果報告書シリーズ 5 ——「阪大史学の挑戦 2」——』(最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成(平成 23-25 年度科学研究費補助金・基盤研究(A)), 大阪大学歴史教育研究会, pp. 65-73, 2011/11

堤一昭 「石濱純太郎を紹介する新聞記事2件(1923 年, 1927 年)および解説」堤一昭(編)『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ——』(平成 23 年度大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書), pp. 16-21, 2012/3

4-4. 口頭発表

堤一昭 「現代日本圍繞”中国”構造的議論——從帝国到国民国家」現代中国与東亜新格局教学与研究工作坊(第五回): 百年中国与周边地域, 内蒙古大学蒙古学学院, 内蒙古大学, 2011/8(『現代中国与東亜新格局教学与研究工作坊 摘要集』pp. 37-40, 2011/8)

堤一昭 「『世界史』教科書中の中国史——30 年間の变化を見る試み——」大阪大学歴史教育研究会・第 53 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科, 2011/7

堤一昭 「大阪大学所蔵石濱純太郎収集拓本の整理状況」第 4 回 中国石刻合同研究会, 中国石刻合同研究会, 明治大学, 2011/7(『東アジア石刻研究』4, 明治大学東アジア石刻文物研究所, p. 117, 2012/3)

堤一昭 「漢籍をめぐる基礎知識」大阪大学附属図書館平成 22 年度図書関係業務に関する研修 2「図書館員のための漢籍の第一歩」, 大阪大学附属図書館, 2011/3

堤一昭 「モンゴル帝国の基本構造——チンギス・カンからクビライ・カアンへ——」大阪大学歴史教育研究会大会——阪大史学の挑戦 2——, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学中之島センター, 2010/8

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 堤一昭

課題番号: 20320094

研究題目: 最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発

研究経費: 2010 年度 直接経費 5,341,432 円 間接経費 1,620,000 円

研究の目的:

最新の歴史研究の成果を高校・大学(教養教育)に反映させるために、適切な内容の選定、解説法の検討などをおこない、教材・教授資料を作成することを目的とする。現行の歴史教育では分断されている高校日本史と世界史の統合的理解をめざす。具体的には刷新の著しい分野の解説集の作成、およびモデル的カリキュラムの検討により、従来の記述と最新の研究成果との相違を示し、従来の教育内容の地域・時代ごとの記述量のアンバランスを是正することをめざす。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2011 年度、研究助成、代表研究者: 堤一昭

助成金名: JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成

研究題目: モンゴル帝国と中世グローバル化の研究

助成団体名: JFE21 世紀財団

助成金額: 2011 年度 直接経費 1,500,000 円

研究の目的:

西暦 13～14 世紀のモンゴル帝国時代における”グローバル化”の実態を解明し、これまでのグローバル・ヒストリー研究の成果と結合することによって、アジアの現状に対する Vision 構築に新たな視点を提供することを第一の目的とする。さらにその成果を専門研究者にだけでなく、特に世界史や日本史教育の現場に立つ教員に還元することで、若い世代に歴史から現在・将来のアジアと日本のあり方を考えさせる素材を提供することを第二の目的とする。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学歴史教育研究会・代表	2010年4月～2011年3月
日本モンゴル学会・理事・編集委員	2008年5月～現在に至る

5. 井本 恭子 准教授

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:人類学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・常任委員	2011年4月～現在に至る
イタリア学会・幹事および評議員	2010年10月～現在に至る
地中海学会・事務局員	2005年4月～現在に至る

2-25 アート・メディア論

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 0

教授：市川 明、永田 靖、圀府寺 司

准教授：三宅 祥雄、桑木野幸司

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
24	1	0	0	0	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 3 名

3. 修了生(2010年度～2011年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2010	9
2011	7
計	16

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。

新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また、学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、阪大総合学術博物館などにおける展覧会企画など、「書物」、「実践」ともに研究はまずまず順調に遂行されている。紀要『アート&メディア』を創刊した。

3. 社会連携

維新派の上演ならびに講演、美術館における講演、展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

上記 1～3 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといっている。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『アート&メディア』を創刊したことには大きな意義がある。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといっている。

V. 基本情報(2010 年度～2011 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	0(0)	12(12)	0(0)	0(0)	12(12)
2011	0(0)	0(0)	9(9)	0(0)	0(0)	9(9)
計	0(0)	0(0)	21(21)	0(0)	0(0)	21(21)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	1	0	1	0	0	2
2011	0	0	0	0	0	0
計	1	0	1	0	0	2

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010 年度】

Arts & Media, 創刊号, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2011/3 (以下雑誌名すべて同じ)

岡野由美子「美術館来館者を取りまく情報環境」 pp. 30-53

高原みずき「企業メセナ研究」 pp. 54-69

山田正吾「映画『SELF AND OTHERS』のテキスト分析」 pp. 70-87

田村恒憲「スポーツ新聞の紙面に見るニュース製作の方法」 pp. 88-99

西尾真由子「メディアアートとデザインの展望」 pp. 100-115

川西遥「2010年の森村泰正論、アフターインタビュー」 pp. 116-131

川井遊木「大阪府立現代美術センター〈キッズアートラボ 2009〉」 pp. 132-143

松本ひとみ「私の出会った地域と活動」 pp. 144-151

櫻井つかさ「ECLIPSE Master Class」 pp. 152-159

松尾真恵「KEBAB とは何だったのか」 pp. 160-169

小野紗也香「多層的な演劇の可能性」 pp. 170-176

鳥集あすか「ティム・バートン監督作品『アリス・イン・ワンダーランド』のプロモーションに参加して」 pp.177-181

【2011 年度】

川井遊木「20 世紀初頭ウィーンにおける美術と美術教育—フランス・チゼックの活動と 1908 年クンストシヤウを中心に」『Cross Sections』 vol. 14, 2012 年 3 月, 京都国立近代美術館

Arts & Media, 第2号, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2012/3 (以下雑誌名すべて同じ)

田村恒憲「物語としてのニュース」 pp. 28-43

小野紗也香「ブレヒトとズーアカンプーブレヒトと出版する」 pp. 44-64

植野美緒「アヴァンギャルド重森三玲が現代に残した波紋—庭園、そして芸術をめぐる問い（重森千青氏インタビュー）」 pp. 80-93

岡田かいり「演劇のちから—支援に演劇はどう生かされるか」 pp. 106-117

岡本酉子「軽演劇にかかわるふたつのイベントに参加して」 pp. 118-123

朴美華「文化庁メディア芸術祭京都展『パラレルワールド京都』における活動報告」 pp. 124-131

佐々木教順「畠山直哉展に寄せて—〈シェルトンベ〉についての一考察」 pp. 140-149

谷脇栗太「からほりとわたくし—からほりまちアート顛末記」 pp. 150-157

チン・ユウシ「学術・芸術・メディアにおける知的防衛についての小考察」 pp. 158-167

(2) 口頭発表

【2010年度】

鳥集あすか「〈少女〉イメージの変遷」横断するポピュラー・カルチャー研究交流ワークショップ, 大阪大学, 2011/7/30

鳥集あすか「Alice in Communicational-Land」国際日本学研究会, 龍華科技大学(台湾), 2011/8/23

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2010年度 大学院: 0名 (計0名)

2011年度 大学院: 0名 (計0名)

4. コース出身の高度職業人・研究者

(2010年度～2011年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10名

2010年度: 4名 2011年度: 6名

<内訳> 技術職(学芸員) 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 9名(期限付)

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度: 0名

2011年度: 0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2011年3月, Arts & Media (紀要) を創刊

2012年3月, Arts & Media (紀要) 第2号を刊行

7. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 市川明教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より現職。専攻:ドイツ文学/ドイツ演劇。

1-1. 論文

- 市川明 「ハイナー・ミュラーにおけるドイツとドイツ史」『Arts and Media』2, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 4-27, 2012/3
- 市川明 「ブレヒトとフリッツ・ラングの“Hangmen Also Die”」『大阪大学文学研究科紀要』52, 大阪大学文学研究科, pp. 91-132, 2012/3
- Ichikawa, Akira, “Jan-Jan-Oper und Osaka Rap: Yukichi Matsumotos *Mizumachi* und *Keaton*” *The Brecht Yearbook*, 36, The International Brecht Society, pp. 84-93, 2011/10
- 市川明 「ブレヒトと日本/中国—叙事詩的演劇への道」『Arts and Media』1, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 8-27, 2011/3
- 市川明 「シュリンクの『朗読者』—過去の歴史と対峙する若者の苦悩」『民主文学』539, 日本民主主義文学同盟, pp. 146-151, 2010/9
- 市川明 「『レアとラウラ』—ドイツ統一20年に思う」『季論21』9, 本の泉社, pp. 155-162, 2010/7

1-2. 著書

- Ichikawa, Akira (共著), *Lea und Laura*, 朝日出版社, pp. 1-118, 2011/11
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-6, 日本放送出版協会, pp. 5-75, 2010/9
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-5, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/8
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-4, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/7
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-3, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/6
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-2, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/5
- Ichikawa, Akira, *Guten Tag, Berlin!*, 郁文堂, 80p., 2010/4
- 市川明 (共著) 『まいにちドイツ語/レアとラウラと楽しむドイツ語』60-1, 日本放送出版協会, pp. 5-73, 2010/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 市川明 「アキラ・イン・ワンダーランド Part 2」『Arts and Media』2, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 171-173, 2012/3
- 市川明 「歩いていますか、カントリーロード?—木田宏明兄貴追悼」『Laterne』107, 同学社, pp. 24-26, 2012/2
- 市川明 「被災者支援の二つの公演—演劇人に今、何ができるのか」『シアターアーツ』49, 国際演劇評論家協会日本センター 晩成書房, pp. 87-93, 2011/12
- 市川明 「ブレヒト研究会と私」『ひろの』51, 財団法人ドイツ語学文学振興会, pp. 28-29, 2011/10
- 市川明 (劇評) 「劇団大阪『フォルモサ』—麗しの島での人類学者の格闘」『act』20, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2011/8
- 市川明 「アキラ・イン・ワンダーランド」『Arts and Media』1, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, pp. 186-189, 2011/3
- Ichikawa, Akira (インタビュー), “Japan in Magdeburg mit Kebab und Nachtschichten”, *Magdeburger Volksstimme-Zeitung*, 2011/2
- 市川明 「Weimar と前衛芸術」『まいにちドイツ語』60-6, 日本放送出版協会, pp. 76-77, 2010/9
- 市川明 「Ostalgic」『まいにちドイツ語』60-5, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/8
- 市川明 「ショプロン、夏の日」『まいにちドイツ語』60-4, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/7

市川明 「ベルリン 1989年」『まいにちドイツ語』60-3, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/6

市川明 「ベルリンの壁」『まいにちドイツ語』60-2, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/5

市川明 「『レアとラウラ』を始めるにあたって」『まいにちドイツ語』60-1, 日本放送出版協会, pp. 74-75, 2010/4

1-4. 口頭発表

市川明 「ブレヒトとフリッツ・ラングの“Hangmen Also Die”」シンポジウム:ドイツ文学と映画, 阪神ドイツ文学会, 甲南大学, 2011/12

市川明 「地域コミュニティと文化—Arts & Theater『セイカ』への夢」精華小再生利用のためのシンポジウム: SEIKA!SEIKA!SEIKA!—精華小から/建築/演劇/アートを捉える, 日本建築家協会近畿支部, 中の島中央公会堂, 2011/11

Ichikawa, Akira, “Deutschland und die deutsche Geschichte bei Heiner Müller” International Brecht Kongress: Brecht ± Heiner Müller, Koreanische Brecht Gesellschaft, Seoul National University, 2011/4

Ichikawa, Akira, “Brecht, Kafka, Japanisches Theater – Das Opium der Verwandlung”: 150 Jahre Freundschaft Japan und Deutschland, Theater Magdeburg, 2011/2

Ichikawa, Akira, “Brecht und Japan/China – Über die Songs vom *Guten Menschen von Sezuan*” Internationaler Kongress der Universität Augsburg und der Brecht-Forschungsstätte der Staats- und Stadtbibliothek Augsburg: Verfremdungen. Ein Phänomen Bertolt Brechts in der Musik, Stadt Augsburg, Universität Augsburg, 2011/2

Ichikawa, Akira, “The Opium of Metamorphosis – Three Comical Sources in Brecht and in Japanese Theatre”, University of Visual- and Performingarts Colombo / University of Peradeniya, 2010/12

Ichikawa, Akira, “Jan-Jan-Oper und Osaka-Rap: Brecht-Nachklänge im Theater Ishinha” 13th IBS Symposium: Brecht in/and Asien, International Brecht Society, University of Hawaii at Manua, 2010/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦他 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3

市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度~2012年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号: 22320036

研究題目: ブレヒト、ヴァイゲルとベルリーナー・アンサンブル 1949-1971

研究経費: 2010年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

2011年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

亡命から帰還したブレヒトが望んだのは自作を上演する劇団・劇場を持つことだった。1949年に創設されたベルリーナー・アンサンブルでは、ブレヒトの妻であり女優であったヘレーネ・ヴァイゲルが総監督を務め、ブレヒトは演出家として自作の有効性を舞台上で検証し続けた。本研究は、1949年(創設)から1971年(ヴァイゲルの死)までのベルリーナー・アンサンブルの活動を多様な角度から検討し、ブレヒト演劇の本質に迫る試みである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会・幹事、編集委員	2010年4月~2012年3月
日本学術振興会・科学研究費委員会・専門委員	2010年1月~2010年12月
日本演劇学会・理事	2006年4月~現在に至る
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004年4月~現在に至る

2. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

2-1. 論文

永田靖 「「第3のあり方」をもとめて」『シアターアーツ』(AICT 国際演劇批評家協会日本センター), 49, 晩成書房, pp. 124-127, 2011/12

永田靖 「国際演劇学会 2011 大阪大会「伝統、革新、共同体」報告」『演劇学論集』(日本演劇学会), 53, 日本演劇学会, pp. 95-97, 2011/11

Nagata, Yasushi, “Tradition, the Earthquake, and the Summer of Japan” *Program, IFTR Osaka Conference 2011*, (International Federation for Theatre Research), Theatre Studies Section, Osaka University, pp. 4-5, 2011/8

Nagata, Yasushi, “The future possibilities of inter-Asian theatre research” *Theatre Research International*, (International federation for Theatre Research), 35-2, Cambridge, pp. 285-296, 2010/10

2-2. 著書

Nagata, Yasushi, Pirkko Koski, Melissa Sihra(共著), *The Local meets the Global in Performance*, Cambridge, 199p., pp. 129-144, 2010/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「性愛の秤—プトゥーシキナの劇」『ブラボー、ラウレンシア！』(ロシア現代劇上演シリーズ第4作プログラム), 名取事務所, p. 2, 2012/3

永田靖 「一年のち」, *Arts and Media*, (大阪大学文学研究科アートメディア論コース), 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 20-21, 2012/3

永田靖 「客演の思想」, *Arts and Media*, (大阪大学文学研究科アートメディア論コース), 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 30-33, 2012/3

永田靖 「はじめに」『アジアにおける近現代演劇の国際的比較研究 2011 全国碩博士生戯劇学術論文研討會』(大阪大学文学研究科演劇学研究室), 大阪大学文学研究科演劇学研究室, p. 2, 2012/3

永田靖 「自分の中のもう一人」『近現代演劇研究』(日本演劇学会分科会近現代演劇研究会), Vol.5, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 2-3, 2011/11

Nagata, Yasushi, “Tradition, Innovation, Community” *Book of Abstracts, IFTR Osaka Conference 2011*, (International Federation for Theatre Research), Theatre Studies Section, pp. 4-6, 2011/8

2-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Modernization of Theatre in Asia” IFTR Asian Theatre Working Group Taipei Meeting: The Modernization of Theatre in Asia/Asian Theatre in the first half of the 20th century, IFTR Asian Theatre Working Group, Guling Street Avant-Garde Theatre, 2012/1

永田靖他 「1928年歌舞伎ソ連公演をめぐって」シンポジウム「1928年歌舞伎ソ連公演と日露演劇交流研究の可能性」: 1928年歌舞伎ソ連公演と日露演劇交流研究の可能性, 早稲田大学日露演劇交流研究会, 早稲田大学, 2012/1

永田靖 「阿波人形浄瑠璃について」アジア・太平洋伝統演劇フェスティバル: Asian Traditional Theatre, 国立台北藝術大学, 宜蘭国立伝統芸術中心, 2011/10

Nagata, Yasushi, “Organizer’s Talk “Greetings” ” International federation for Theatre Research, Osaka Conference 2011: Tradition, Innovation, Community, International federation for Theatre Research, Osaka University, 2011/8

Nagata, Yasushi, “Interaction of Tradition and Modernization” International Comparative Research Meeting of Asian Theatres, :

Interaction of Tradition and Modernization, Modern and Contemporary Theatre WG, JSTR., Osaka University, 2011/2

永田靖他「大阪万博40周年の検証」大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム:大阪万博40周年の検証,大阪大学21世紀懐徳堂,毎日新聞オーバルホール,2010/12

永田靖「メイエルホリドと世界演劇ー現実と異文化」早稲田大学演劇博物館演劇映像連携拠点「メイエルホリドと越境の20世紀」:メイエルホリドと越境の20世紀,早稲田大学演劇博物館演劇映像連携拠点,早稲田大学演劇博物館,2010/12

Nagata, Yasushi,“Indian Contemporary Theater: tradition, its present, and its future”IATC International Symposium on Asia : International Collaboration and the Role of Criticism, International Association of Theatre Critic, Tokyo Metropolitan Art Space, 2010/11

Nagata, Yasushi,“On Japanese reception of Stanislafsky System”International Conference on Multiple Perspective on Modern Theatre Histories in Taiwan:Multiple Perspectives on Modern Theatre Histori(es) in Taiwan, National Taipei University of Arts, Department of Theatre, National Taipei University of Arts, Osaka University, 2010/10(*International Conference on Multiple Perspectives on Modern Theatre Histories in Taiwan*, pp. 57-67, 2010/10)

Nagata, Yasushi,“Two Anti-Japan Songs- Inter-Asian Theatre Research from Japanese View Point”FIRT/IFTR Annual Conference 2010 : Culture of Modernity, International federation for Theatre Research, Ludwig-Maximilians-Universitat Munchen, 2010/7(*Book of Abstracts*, 2010/7)

永田靖「伝統と共同体ーFIRT大阪大会2011のために(1)」近現代演劇研究会5月例会,日本演劇学会近現代演劇研究会,大阪大学,2010/5

永田靖「伝統と共同体ーFIRT大阪大会2011のために(2)」西洋比較演劇研究会5月例会,西洋比較演劇研究会,成城大学,2010/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度~2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号: 22320035

研究題目: アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究

研究経費: 2010年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

2011年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

現代のグローバリゼーションの進行する中で演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されて来たが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジアの特徴と芸術的特質を明確にするのが目的である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府高等学校芸術文化祭演劇部門/大阪府高等学校演劇研究大会・専門審査員	2011年11月~2012年3月
マレーシア大学人事専門評価委員会・委員	2011年3月~現在に至る
兵庫県立ピッコロ劇団企画運営委員会・運営委員	2011年3月~現在に至る

IFTR Asian Theatre Working Group ・Convenor	2009年7月～現在に至る
国立台北藝術大学戯劇系戯劇学刊 Taipei Theatre Journal・編集委員	2009年6月～現在に至る
International Federation for Theatre research Annual Conference 2011・Organizer	2008年7月～2012年7月
北翔大学北方圏学術情報センター・研究員	2007年4月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Member of Exective Committee	2005年7月～現在に至る
藝術学関連学会連合委員会・委員	2005年6月～現在に至る
日本演劇学会・理事	2002年6月～現在に至る
日本演劇学会・事務局長	2002年6月～現在に至る
日本映像学会紀要『映像学』・編集委員	2002年6月～2010年5月
日本映像学会関西支部・幹事	2002年4月～現在に至る
日本演劇学会分科会近現代演劇学会・主宰	2000年11月～現在に至る

3. 圀府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋美術史。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

圀府寺司, 樋上千寿, 和田恵庭(編) 『ああ、誰がシャガールを理解したでしょうか?』大阪大学出版会, 226p., 2011/12

圀府寺司 『ゴッホ 日本の夢に懸けた芸術家』角川書店, 204p., 2010/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

Tsukasa Kodera Praemium Erasmianum (エラスムス研究賞), エラスムス財団(オランダ), 1989/2

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:圀府寺司

課題番号: 21320029

研究題目: イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

2011年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

本研究は、中東欧のイディッシュ語文化圏における芸術活動、ならびに19世紀末から20世紀初頭にかけてのポグロムによって西欧やアメリカに移住したイディッシュ語文化圏出身の芸術家たちの活動を主たる研究対象とし、この国家なき言語文化圏の芸術の様相を明確に浮き彫りにするとともに、それらが近代芸術史の中で果たしてきた役割を明確にすることを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員	2011年4月～現在に至る
国際美術史学会 CIHA・国内委員	2009年4月～現在に至る
民族芸術学会・理事	2000年4月～現在に至る

4. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学／映像論。

4-1. 論文

三宅祥雄 「映画のなかの鏡／鏡のなかの映画」『Arts and Media』編集委員会(編)『Arts and Media』2, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, pp. 182-187, 2012/3

三宅祥雄 「ハッピーエンドにあらがって」『Arts and Media』編集委員会(編)『Arts and Media』1, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, pp. 184-185, 2011/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事	2011年10月～現在に至る
---------------	----------------

5. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院修了。Dottore di Ricerca in Storia delle

arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

5-1. 論文

桑木野幸司 「甦ったエデン神苑—初期近代イタリアの植物園に関する考察—」文化動態論(編)『待兼山論叢』45, 大阪大学文学部, pp. 67-93, 2011/12

5-2. 著書

桑木野幸司(共著) 『ルネサンスの演出家ヴァザーリ(第四章:庭園設計家ヴァザーリ)』白水社, pp. 202-269, 2011/5

Kuwakino, Koji, *L'architetto sapiente. Giardino, teatro, città come schemi mnemonici tra il XVI e il XVII secolo*, Olschki, 325p., 2011/2

Kuwakino, Koji, Olimpia Niglio(共編), *Giappone. Tutela e conservazione di antiche tradizioni*, Edizioni Plus, 244p., 2010/6

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司 「十六世紀イタリアの庭園—建築、都市、ランドスケープの観点から—」『美術講演会講演録』(鹿島美術財団), 38, 鹿島美術財団, pp. 33-91, 2012/3

桑木野幸司 「建築家ヴァザーリ:生誕500周年をめぐって」『Arts and Media』(アートメディア論研究室), 2, pp. 168-170, 2012/3

桑木野幸司(辞典項目) 「(ルネッサンス)理想都市」「ヴィラと庭園—古代とルネサンス」『イタリア文化事典』丸善出版, pp. 70-71, pp. 294-295, 2011/12

桑木野幸司 「イタリア庭園の柑橘類」『地中海学会月報』(地中海学会), 345, 地中海学会, 2011/12

桑木野幸司(訳)(翻訳) 『パラディオのローマ:古代遺跡・教会案内』白水社, pp. 1-333, 2011/11

桑木野幸司 「蘇るパラディオールネサンス建築史文献案内」pp. 217-222, 2011/11

Kuwakino, Koji(書評), “Marco Beretta, Antonio Clericuzio & Lawrence M. Principe (eds.), *The Accademia del Cimento and its European Context* (Sagamore Beach: Science History Publications, 2009), pp. xiv+257, US\$ 49.95, ISBN 978 0 88135 387 7.”, *Early Science and Medicine*, 16-4, pp. 366-368, 2011/9

桑木野幸司(訳)(翻訳) 『建築家ムッソリーニ:独裁者が夢見たファシズムの都市』白水社, pp. 1-493, 2010/4

5-4. 口頭発表

桑木野幸司 「ヴァザーリと庭園」シンポジウム「ヴァザーリとイタリア・ルネサンスの芸術」, 京都大学・イタリア文化会館, 京都大学総合博物館, 2011/12/10

Kuwakino, Koji, “Memorizzare con metodo: ‘domus sapientiae’ nel Lambertus Thomas Schenkelius, *Gazophylacium artis memoriae* (1610)” Convegno internazionale: *Arti e pratiche della memoria*, Scuola Normale Superiore di Pisa, Scuola Normale Superiore di Pisa, 2011/12/16

桑木野幸司 「ヴァザーリと庭園」国際シンポジウム「ウフィツィと宮廷建築家ジョルジョ・ヴァザーリ」, イタリア文化会館・イタリア外務省, イタリア文化会館(東京), 2011/9/27

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会賞, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2011年度、研究活動スタート支援、代表者:桑木野幸司

課題番号: 23820026

研究題目: 十六世紀後半のトスカーナ大公国の視覚芸術文化における記憶術からの影響

研究経費: 2011 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

古典古代の修辞学において体系化されてきた「記憶術」なる情報整理法が、初期近代イタリアの視覚芸術に与えた影響を、トスカーナ大公国の芸術文化を中心に分析する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-26 文学環境論

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次、和田 章男、平田 由美

准教授：石割 隆喜

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
10	0	0	0	0	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2010年度～2011年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2010	4
2011	1
計	5

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界(環境)との関わりを多角的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。1つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研

究の 1 方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にしっかりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

ほぼ当初の計画通りの成果があがっている。日本語文献と英語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることによりかなりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、コースの教員全員が参加する発表会を通して、院生の研究課題について真摯な討論を行ない、充実した指導と助言ができた。また、現在、アメリカ・ロシア・中国からの留学生が在籍しており、広く日本・東洋・西洋の文学を研究領域とすることの実が挙がってきている。

2. 研究

当該年度中の教員の著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼり、注目すべき活動が見られた。教員は、各種の研究発表大会への参加、海外出張による国際的学術交流への関与等に積極的に取り組んだ。院生は、2010 年度に 4 人、2011 年度に 1 人の修了生を出すことができた。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高まってきた。

3. 社会連携

いくつかの授業で出版や文学の書誌についての問題を扱った。また、2010 年度は、修士論文の 1 本が米国での出版にかかわる問題、1 本が日本での出版や流行にかかわる問題を扱っており、それらの論文作成を通して、学生と教員が現代の出版の一端について理解を深めることができた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、2010 年度と 2011 年度に提出された計 5 本の修士論文は、いずれも充実した個性的な研究であり、高い評価が得られた。また、修了生以外の院生たちに関しても、読解力・理解力・分析力などが着実に向上し、個々の研究テーマについての考究も進んできている。そのような状況であるので、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員の作成論文や学会参加の成果は十分に上がっており、大学院生にも論文等の成果があり、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2010 年度～2011 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2011	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	1	0	0	1
2011	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	0	1

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2010 年度】

蓮井美里「A “Novel” Outline of Cell Phone Novels : Via Henry James’s *The Friends of the Friends*」『待兼山論叢』（文
化動態論篇），第 44 号, pp.47-74, 2010/12

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2010 年度 大学院：0 名（計 0 名）

2011 年度 大学院：0 名（計 0 名）

4. コース出身の高度職業人・研究者

(2010 年度～2011 年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、
アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2010年度：0名　2011年度：0名

<内訳>　技術職　0名　ジャーナリスト　0名　アーティスト　0名　中・高等学校の教員　0名
その他　0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計　0名

2010年度：0名　2011年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「与謝野晶子「明るみへ」論—古い「私」からの解放—」奈良女子大学日本アジア言語文化学会『叙説』38, 奈良女子大学日本アジア言語文化学会, pp. 14-29, 2011/3

清水康次 「〈文学環境〉の視点から見た『白樺』—『白樺』の研究・序章—」大阪大学文学学会『待兼山論叢 文化動態論篇』44, 大阪大学文学学会, pp. 1-25, 2010/12

清水康次 「下人の物語の始まりと終わり—芥川龍之介「羅生門」」至文堂『国文学 解釈と鑑賞』75-9, ぎょうせい, pp. 64-72, 2010/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職。専攻:フランス文学。

2-1. 論文

Wada, Akio, "Approche génétique des épisodes du théâtre dans *À la recherche du temps perdu*", *Proust aux brouillons*, Brepols, pp. 269-284, 2011/12

和田章男 「書簡体小説と視点」『西洋文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 56-66, 2011/10

和田章男 「スタンダール『赤と黒』」『西洋文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 193-203, 2011/10

Wada, Akio, "La formation des noms de personnages dans la genèse de *À la recherche du temps perdu*", *Comment naît une oeuvre littéraire ? Brouillon, contextes culturels, évolutions thématiques*, Honoré Champion, pp. 233-243, 2011/3

2-2. 著書

和田章男他(共著)『西洋の文学—理解と鑑賞—』大阪大学出版会, pp. 56-66, pp. 193-203, 2011/10

Wada, Akio 他(共編), *Cahier 26*, Brepols, 2010/12

和田章男他(共著)『文学作品が生れるとき—生成のフランス文学』京都大学学術出版会, pp. 399-422, 2010/10

和田章男(単著)『フランス表象文化史 — 美のモニュメント』大阪大学出版会, 257p., 2010/9

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「創造への誘い — 牛場暁夫『失われた時を求めて』交響する小説 —」『三田文学』(三田文学会), 107, 三田文学会, pp. 288-289, 2011/11

和田章男 「ロココの女王 — 二人のアントワネット」『デュフリ全集Ⅱ』浜松市楽器博物館, pp. 9-12, 2011/11

和田章男 「「遊び」の文化:ロココ」『デュフリ全集Ⅰ』浜松市楽器博物館, pp. 8-12, 2011/9

和田章男 「小黒昌文『プルースト芸術と土地』」『cahier』(日本フランス語フランス文学会), 6, pp. 32-33, 2010/9

2-4. 口頭発表

Wada, Akio, "Les Goncourt dans les manuscrits de Proust", 国際学会:Proust, l'œuvre des manuscrits, École Normale Supérieure, 2012/3

和田章男 「プルーストと『ゴンクール日記』」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2011/10

Wada, Akio, "Proust et Leconte de Lisle"パリ第3大学ロベール教授セミナー講演, Université de Paris III, 2011/3

Wada, Akio, "Proust et la critique flaubertienne", 国際学会:Proust face à l'héritage du XIX^e siècle : Filiations et ruptures, 関西日仏学館, 2010/11

和田章男 「「印刷物の生成論」の先駆者プルースト」日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ:印刷論の生成論, 日本フランス語フランス文学会, 南山大学, 2010/10

Wada, Akio, "Proust et Balzac : la méthode de travail des deux écrivains", 国際学会:Balzac et alii, génétiques croisées, Histoire d'éditions, Groupe international de recherches balzaciennes, Université Paris-Diderot, Maison de Balzac, 2010/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号: 22520312

研究題目: 草稿資料に基づくプルーストと同時代文学事象の研究

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究課題は、作家の文学観の形成および小説創造に同時代の文学事象がどのように影響したかを明らかにすることを目的とする。主なる観点は二つある。ひとつは、作家の草稿帳 75冊に見られる同時代の作家・作品への言及を網羅的に抽出し、新聞・雑誌等の文芸ジャーナリズムや出版状況の調査によって、プルーストの言及や引用の源泉を実証的に跡づけるとともに、作品生成への関与の有様を考察する。二つ目は、過去の作家に対するプルーストの見方を、受容史・批評史の中に位置づけ、同時代批評との関係を明瞭にすることである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会・会長	2008年4月～現在に至る
日本プルースト研究会・幹事長	2008年4月～2012年3月
関西プルースト研究会・世話役	2005年9月～現在に至る

3. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学専攻科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

3-1. 論文

平田由美 「「列女」から「烈女」へ:近代日本の伝記における女性表象」、『タイ国日本研究国際シンポジウム 2010 論文報告書』, チュラローンコーン大学, pp. 151-171, 2011/9

平田由美 「女の書き物を奪胎する——後藤明生における“父の物語”の創生——」、『表現研究』92, 表現学会, pp. 33-41, 2010/10

平田由美 ‘토론하는 공중公衆’의 등장:대중적 공론장으로서의 소신문小新聞 미디어’, 『일본의 문화사 3:근대 지식의성립』, Somyong Publishing, Seoul, pp. 221-252, 2011/2

Hirata, Yumi, “The Narrative apparatus of Modern Literature: The Shifting “Standpoint” of Early Meiji Writers”, Michael Bourdaghs ed., *The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies*, University of Michigan Press, Ann Arbor, pp. 73-96, 2010/5

平田由美 「「引揚げ」物語をめぐるジェンダーと言語:後藤明生における過去の表象」、『日本学』30 輯, 東国大学校文化学院 日本学研究所, pp. 107-134, 2010/5

3-2. 著書

平田由美 『女性表現の明治史——樋口一葉以前——』(岩波人文書セレクション版)岩波書店, 320p., 2011/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平田由美 「ことばをひらく」, 『文学』11-4, 岩波書店, pp. 113-114, 2010/7

平田由美 「西川祐子著『日記をつづるということ——国民教育装置とその逸脱——』, 『女性史学』20, 女性史総合研究会, pp. 162-164, 2010/7

3-4. 口頭発表

Hirata, Yumi, “Colonial Children in Postwar Japan: Displaced Identities betwixt and between”, *The Discourses and Memories on Trans-border Movements in Postwar Japan and Beyond*, Department of Culture Studies and Oriental Languages, University of Oslo, Norway, 2011/8

平田由美 「《移動》をめぐる文学表象」, 《越境移動與漂流的記憶》, 国立交通大学社会與文化研究所, 国立交通大学(台湾), 2011/1

平田由美 「ポストコロニアリズムと《移動》の文学表象」, 《植民地とディアスポラ》, 建国大学アジア・ディアスポラ研究所, 建国大学(韓国), 2010/12

平田由美 「「列女」から「烈女」へ——近代日本の伝記における女性表象——」, タイ国日本研究国際シンポジウム 2010, チュラロンコーン大学(タイ), 2010/10

平田由美 「女の書き物を奪胎する——後藤明生における“父の物語”の創生——」, 表現学会全国大会, 表現学会, お茶の水女子大学, 2010/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2010年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美
課題番号: 19520154

研究題目: 近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2011年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的な事象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員基盤研究等第1段審査委員

2009年11月～2010年11月

4. 石割 隆喜 准教授

1970年生。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手・講師・助教授・准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:アメリカ文学。

4-1. 論文

石割隆喜「小説の非人間化——あるいはポストヒューマン的読書」日本英文学会(編)『第83回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 126-128, 2011/9

4-2. 著書

森岡裕一, 石割隆喜他(共著)『西洋文学——理解と鑑賞』大阪大学出版会, 256p., pp. 164-176, 2011/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石割隆喜(書評)「下河辺美知子編『アメリカン・テロル——内なる敵と恐怖の連鎖』」『アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会), 47, pp. 70-75, 2011/3

4-4. 口頭発表

石割隆喜「小説の非人間化——あるいはポストヒューマン的読書」日本英文学会第83回大会:ポストヒューマンの文学表象——動物・近代・テクノロジー, 日本英文学会, 北九州市立大学北方キャンパス, 2011/5『第83回大会 Proceedings』pp. 126-128, 2011/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2010年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:石割隆喜

課題番号: 22720101

研究題目: 「小説」論的観点からのピンチョン研究

研究経費: 2010年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2011年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究は、トマス・ピンチョンの代表作『重力の虹』のイラストレーション化がピンチョン文学のみならず今日の文学世界全体の中でどのような意味をもつのかを明らかにするために、現代アート作家ザック・スミスによる『重力の虹』イラスト作品全755枚を、所蔵するウォーカー・アート・センター(アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス市)へ赴き現地調査し、「小説」論的ポストモダニズム研究というべき観点からのピンチョン研究を実践的側面から推進してゆこうとするものである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員	2011年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会関西支部・評議員	2011年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部・大会準備委員	2010年4月～2011年3月

2-27 言語生態論

I. 現在の組織

1. 教員(2012年4月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：大庭 幸男、加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己

2. 在学生(2012年4月現在)

2012年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
4	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2010年度～2011年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2010	2
2011	1
計	0

II. 掲げた目標(2010年度～2011年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5名の教員が個々に担当する講義および演習等をとおして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらずに独自に研究課題を設定して、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学のそれぞれ講義と演習、ならびに町田健教授(名古屋大学)が担当した言語学講義を選択・履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、マンガに見られる日英語の擬音語、高齢者の外来語理解、英語における as の関係代名詞としての用法と、さまざまな課題を独自に設定して研究を進めた。その中には既存の枠組みに収まらないものもかなりの数含まれる。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

2010～2011 年度入学者に社会人は含まれなかった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2010 年度～2011 年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、5名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、成功の度合いは様々だが、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

2010年度の修了者2名は培った技能を生かした業種に就くことができた。よって研究者養成とともに、社会人を高度専門職業人として養成し、教育・研究の成果を社会に還元するという目標は一定程度達成されたと考える。

V. 基本情報(2010 年度～2011 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2010	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2011	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2010	0	0	0	0	0	0
2011	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2010年度 大学院：0名（計0名）

2011年度 大学院：0名（計0名）

4. コース出身の高度職業人・研究者

(2010年度～2011年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2010年度：0名 2011年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2010年度：0名 2011年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

- 2010年5月8日 第86回待兼山ことばの会
(=大阪言語研究会 167回公開講演会)
- 2010年12月11日 第87回待兼山ことばの会
The 19th Indo-European Colloquim of Japan
(=大阪言語研究会 168回公開講演会)
- 2011年6月26日 第88回待兼山ことばの会

7. 教員の研究活動(2010年度～2011年度の過去2年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻:英語学。

1-1. 論文

大庭幸男 「二重目的語構文と多重 wh 疑問文」『ことばとこころの探究』pp. 26-43, 2012/3

大庭幸男 「英語の同族目的語構文の特異性について」『待兼山論叢』45, pp. 95-118, 2011/12

1-2. 著書

Oba, Yukio (共編), *Osaka University Papers in Linguistics*, 15, 大阪大学文学研究科英語学研究室, 84p., 2011/12

大庭幸男, 岡田禎之(共編著)『意味と形式のはざま』英宝社, pp. 253-265, 2011/5

大庭幸男 『英語構文を探求する』開拓社, 226p., 2011/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY Academic Achievement 2005-2006 の論文 100 選のうち 24graphics に
選ばれる, 大阪大学, 2006/11

大庭幸男 市河賞, 語学教育研究所, 1997/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男
課題番号: 21520507

研究題目: 言語の多様性に対する普遍文法理論の妥当性の検証

研究経費: 2010年度 直接経費 900,000円 間接経費 300,000円

2011年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は次の通りである。

(1) 普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」などの理論を正確に理解・把握した上で、これらの理

論がどのように概念的な問題点を有しているかについて検討する。

(2)「純粹の WH 疑問文」について、言語の多様性に関わる言語事実を通言語的に調査し、類型化を行う。具体的には、「純粹の WH 疑問文」の類型化において、WH 句の移動が存在するかしないか、複数の WH 句が移動できるかできないか、文末の疑問終助詞が存在するかしないか、などについて言語タイプごとに調査・整理する。

(3)WH 疑問文に関連する構文、例えば、「問い返しの疑問文」や「多重 WH 疑問文」に関して、さまざまな言語を調査・研究し、類型化を行う。具体的には、WH 句の移動が随意的になる英語タイプの言語、WH 句が移動しない日本語タイプの言語、WH 句が義務的に移動するスラブ語タイプの言語、その他の構文をとる中国語タイプの言語に類型化し、その特性を明らかにする。

(4)最後に、普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」がこれらの通言語的多様性をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を提示する。その後、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会・関西支部・理事	2011年4月～現在に至る
日本学術振興会・科学研究費専門委員(2段英語学)	2011年1月～2011年12月
日本英語学会・特別賞選考委員	2010年4月～現在に至る
日本学術振興会・科学研究費専門委員(2段英語学)	2010年1月～2010年12月
大阪大学英文学会・会長	2009年11月～現在に至る
日本英語学会・広報委員会委員長	2009年6月～2011年3月
日本英文学会 関西支部・編集委員会委員	2009年4月～2011年3月
財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査員	2007年4月～現在に至る
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る
関西言語学会・大会実行委員・運営委員	1993年12月～現在に至る

2. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

2-1. 論文

加藤正治 『『カンタベリー物語』にみられる否定辞neについて—研究ノート—』中村未樹(編)『英米研究』(大阪大学英米学会), 36, 大阪大学英米学会, pp. 33-53, 2012/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・評議員

2006年4月～2011年3月

3. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

3-1. 論文

田野村忠温 「コーパス言語学と語彙」斎藤倫明・石井正彦(共編)『これからの語彙論』ひつじ書房, pp. 149-161, 2011/12

田野村忠温 「コーパス言語学の新たな展開」『日本語学』30-14(2011年11月臨時増刊号『言語研究の新たな展開』), 明治書院, pp. 95-104, 2011/11

田野村忠温 「日本語コーパスとコロケーション——辞書記述への応用の可能性——」『言語研究』138, 日本言語学会, pp. 1-23, 2010/9

Tanomura, Tadaharu, “Retrieving collocational information from Japanese corpora: Its methods and the notion of “circumcollocate,” Peter Grzybek, Emmerich Kelih and Ján Mačutek (eds.) *Text and Language: Structures・Functions・Interrelations*, Wien, Austria: Praesens Verlag, pp. 213-222, 2010

Tanomura, Tadaharu, “The concept of ‘circumcollocate’ and its significance for lexicography: A discussion with particular reference to the Japanese language,” Isabel Moskowich-Spiegel Fandiño, Begoña Crespo García, Inés Lareo Martín and Paula Lojo Sandino (eds.) *Language Windowing Through Corpora* (Conference proceedings in the electronic format), A Coruña, Spain: Universidade da Coruña, pp. 873-879, 2010

3-2. 著書

荻野綱男, 田野村忠温(共編著)『講座 IT と日本語研究3 アプリケーションソフトの応用』明治書院, pp. 7-97, pp. 219-238, 2011/10

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究6 コーパスとしてのウェブ』明治書院, 2011/7

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究5 コーパスの作成と活用』明治書院, 2011/6

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究2 アプリケーションソフトの基礎』明治書院, 2011/5

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究7 ウェブによる情報収集』明治書院, 2011/4

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究1 コンピュータ利用の基礎知識』明治書院, 2011/4

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦(共著)『コーパス日本語学の展開』特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp. 23-31ほか総500頁のうち計約190頁を担当, 2010/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

- Tanomura, Tadaharu, “On ‘recursive collocation’: collocation containing collocation as a subpart,” *SdP-11 (Simposio Internacional de Sociología de las Palabras)*, Universidad de Murcia (Murcia, Spain), 2011/12
- 田野村忠温 「日本語のコロケーション研究——概念と課題——」中部日本・日本語学研究会, 岐阜聖徳学園大学, 2011/11
- 田野村忠温 「コーパスをめぐる2、3の報告——作家の表現の比較ほか——」国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会, 国立国語研究所, 2011/9
- 田野村忠温 「コーパス日本語研究の最新動向」言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- 田野村忠温 「コーパス日本語研究の知識と方法」言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- Tanomura, Tadaharu, “Corpus linguistics: the state of the art and applications,” 言語学講演会, 國立成功大學(台湾・台南市), 2011/9
- Tanomura, Tadaharu, “Constructing a huge Web corpus: its methods and problems,” 言語学講演会, 元智大學(台湾・中壢市), 2011/9
- 田野村忠温 「大規模コーパスとしてのインターネット」『現代日本語書き言葉コーパス』完成記念講演会, JA 共済ビル・カンファレンスホール, 2011/8
- 田野村忠温 「日本語研究とインターネット」2011年世界日本語教育研究大会, 天津外国語大学(中国・天津市), 2011/8
- 田野村忠温 「日本語コーパス——その現状と応用の可能性——」言語学講演会, シンガポール日本人会(シンガポール), 2011/3
- 田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「研究活動・成果の総括: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ, 時事通信ホール, 2011/3
- 田野村忠温 「日本語 Web コーパスの構築——方法と課題——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2011/2
- 田野村忠温 「コーパスと日本語研究——動向と展望——」言語学講演会, 香港中文大學(中国・香港特別行政区), 2011/2
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス日本語学セミナー, 國立臺灣大學(台湾・台北市), 2010/12
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス日本語学講演会, 名古屋大学, 2010/12
- 田野村忠温 「日本語コロケーション研究の歴史と課題」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大班会議, ホテルスワ(つくば市), 2010/11
- 田野村忠温 「電子資料と日本語研究——動向と展望——」コーパス言語学ワークショップ, 高麗大学校(韓国・ソウル市), 2010/10
- 田野村忠温 「コーパスと日本語文法研究」北京日本学研究中心創立 25 周年記念国際シンポジウム(パネルディスカッション「コーパスと日本語学及び日本語教育学」), 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2010/10
- 田野村忠温 「Web コーパスとコロケーション」日本語学会 2010 年度秋季大会ワークショップ「コーパス日本語学の新展開——コーパスと方法論の多様化——」, 愛知大学, 2010/10
- 田野村忠温 「日本語コロケーション研究の流れ」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2010/9
- 田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 22 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度全体会議, 国立国語研究所, 2010/8
- Tanomura, Tadaharu, “The concept of ‘circumcollocate’ and its significance for lexicography: A discussion with particular reference to the Japanese language,” *CILC10 (II Congreso Internacional de Lingüística de Corpus)*, Universidade da Coruña (A Coruña, Spain), 2010/5
- 田野村忠温 「コーパスの評価基準の多様性と相対性」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2010/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2010年度、特定領域研究、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2010年度 直接経費 7,300,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることも目的とする。

3-6-2. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 19520342

研究題目: 大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費: 2010年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料(コーパス)を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、①電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、②電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

①については、研究代表者のこの分野における過去10年余りの経験を踏まえ、それを継続・発展させる形で、電子資料の特性を生かした日本語研究の可能性を具体的な事例研究を通じて追求し、電子資料利用の価値と方法を明らかにする。

②については、日本語研究の隆盛とそこでの特定のテーマへの研究の集中のかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題について、抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行う。また、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員	2009年12月～2010年11月
日本言語学会・常任委員	2006年4月～現在に至る
日本言語学会・評議員	2000年4月～現在に至る

4. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:印欧諸語の歴史と印欧語比較言語学、音声学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

神山孝夫 「印欧語比較言語学:成立までの経緯と方法論素描」日本英文学会北海道支部第56回大会, 日本英文学会, 札幌学院大学, 2011/10

神山孝夫 「外国語発音習得における母語音声習慣認識の必要性」日本英語音声学会関東支部第11回研究大会, 日本英語音声学会, 早稲田大学, 2011/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・理事・事務局長	2011年12月～現在に至る
日本歴史言語学会・設立準備委員・暫定事務局	2011年1月～2011年12月
大阪言語研究会・世話人	2008年1月～現在に至る

5. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻:日本語学。

5-1. 論文

渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ヤーヨと対比してー」『阪大社会言語学研究ノート』10, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 78-88, 2012/3

渋谷勝己 「接触言語学」『日本語学』30-14, 明治書院, pp. 244-255, 2011/11

渋谷勝己 「社会言語学」益岡隆志(編)『はじめて学ぶ日本語学』ミネルヴァ書房, pp. 137-154, 2011/10

渋谷勝己 「方言学史」真田信治他『方言学』朝倉書店, pp. 189-206, 2011/3

渋谷勝己 「山形市方言における伝聞・引用形式テとド」『阪大社会言語学研究ノート』9, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 1-13, 2011/1

渋谷勝己 「移民言語研究の潮流」『待兼山論叢 文化動態論篇』44, 大阪大学文学会, pp. 1-22, 2010/12

渋谷勝己 「言語接触研究の動向」『日本語学』29-14, 明治書院, pp. 6-15, 2010/11

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己 「<書評・紹介>Mufwene, Salikoko S. *Language Evolution*」『言語研究』139, 日本言語学会, pp. 145-156, 2011/3

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号: 22520466

研究題目: 日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

2011年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

現代社会で使用される日本語には、日本国内で母語話者によって使用される変種のほか、海外に移住した日系人の用いる日本語変種や、日本語非母語話者が国内外で使用する日本語変種などがある。本研究では、世界各地の日系人日本語変種を対象にして記述的な研究を推進するとともに、記述の成果を言語生態学(ecolinguistics)の枠のなかで統一的な視点のもとでつぎあわせ、可能な限りの総合化を行いつつ、将来の発展的な研究を行ううえでの問題のありかを整理することを試みる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・編集委員	2010年6月～現在に至る
日本語文法学会・大会委員長	2010年4月～現在に至る
社会言語科学会・理事・広報委員長	2009年4月～2011年3月
日本語学会・評議員	2009年4月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2008年10月～現在に至る
日本方言研究会・世話人	2008年4月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006年7月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2010 年度～2011 年度の過去 2 年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957 年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了(1999 年)。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。専攻:言語学, 韓国語学, 日本語学。

1-1. 論文

鄭聖汝 「ナル型言語と他動性--実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して--」鄭聖汝(編)『平成 21 年度-23 年度科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書:アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 131-153, 2012/3

鄭聖汝 「非意図的な出来事と損失構文--理論と実証の両面からの検討--」鄭聖汝(編)『平成 21 年度-23 年度科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書:アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 154-177, 2012/3

Yoshinari Yuko, Prashant Pardeshi, Sung-Yeo Chung, "Usage of Transitive Verbs in the Depiction of Accidental Events in Japanese and Korean", 『平成 21 年度-平成 23 年度科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書:アジア諸言語における他動詞と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 115-130, 2012/3

吉成祐子, パルデン・プラシャント, 鄭聖汝「非意図的な出来事における他動詞使用と「責任」意識: 日・韓・マラーティー語の対照を通じて」岸本秀樹(編)『ことばの対照』くろしお出版, pp. 175-189, 2010/9

鄭聖汝 「직접사동과 간접사동, 무엇이 문제였나?—새로운 이론적 모델의 제안을 위하여—(直接使役と間接使役、何が問題だったのか?—新しい理論的モデルの提案のために—)」鄭聖汝・李廷玟(共編著)『한국어 연구의 새 지평(韓国語 研究の新地平)』太學社, pp. 113-150, 2010/4

1-2. 著書

鄭聖汝(編)『平成 21 年度-平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C):アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究』大阪大学大学院文学研究科, 185p., 2012/3

鄭聖汝, 李廷玟(共編著)『한국어 연구의 새 지평(韓国語研究の新地平), 太學社, 383p., 2010/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

鄭聖汝, 黒川尚彦 「「今の私がある」存在文と歴史的属性用法」日本語文法学会, 東京外国語大学, 2011/12『日本語文法学会

第12回大会発表予稿集』pp. 123-129, 2011/12)

Yoshinari Yuko, Prashant Pardeshi, Sung-Yeo Chung, “Use of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study” Japanese/Korean Linguistics Conference 21, Seoul University, 2011/10

鄭聖汝 「なる型言語と他動性—実験調査による日本語・韓国語・マラーティー語の相違を通して—」Morphology and Lexicon Forum 2011, 大阪大学, 2011/9

鄭聖汝, 円山拓子 「非意志自動詞と「可能」—日本語と韓国語の観点から—」第2回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム, 延辺大学(中国), 2011/8(『第二回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム予稿集』p. 91, 2011/8)

吉成祐子, パルデン・ブラシャント, 鄭聖汝 「他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証: 日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用」. 2011.3.5.」Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), San-Francisco State University (USA), 2011/3

鄭聖汝 「한국어는 DO-language 인가?—실험결과에서 보여지는 일본어, 마라티어와의 차이를 통하여—(韓国語は DO-language か?—実験結果から見られる日本語・マラーティー語との相違を通して—)」社団法人韓国言語学会 2010 年冬共同学術大会, 社団法人韓国言語学会, 韓国外国語大学校, 2010/12 (『社団法人韓国言語学会 2010 年冬共同学術大会発表論文集』pp. 59-69, 2010/12)

鄭聖汝, 吉成祐子 「非意図性と他動性の相関関係: 意味的他動性と統語的自他のはざままで」日本語文法学会第11回大会: 日本語文法第11回大会パネルセッション: 自動詞・他動詞の対照研究—理論的研究と実証的研究の融合をめざして—, 日本語文法学会, 就実大学, 2010/11(『日本語文法学会第11回大会発表予稿集』pp. 84-93, 2010/11)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 鄭聖汝

課題番号: 21520400

研究題目: アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究

研究経費: 2010年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2011年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、他動性の分野において、これまであまり包括的・統一的に研究されてこなかった非典型的な出来事と非規範的構文の関係に焦点を当て、アジア諸言語(日本語、韓国語、マラーティー語)の対照研究を行い、以下のことを目標とする。(1)他動性のプロトタイプから逸脱した非典型的な出来事の言語表現化において、言語観に見られる類似性・個別性の詳細を記述する。(2)非典型的な出来事の言語表現化の背後にあるとされる認知的メカニズムの心理的な実在性を実験的手法によって実証する。(3)他動性と言語構造の対応関係を統一的に記述できる枠組みの開発および理論構築を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・大会運営委員

2011年4月～現在に至る

日本語文法学会・学会誌委員

2010年4月～現在に至る

編集後記

ここに発刊する『年報 2012』は、文学研究科および文学部の 2010 年度および 2011 年度の 2 年間の教育・研究活動の記録である。

昨年度、外部評価を既に行っているため、本『年報』については、比較的余裕をもって編集スケジュールを組むことができた。もちろん、完成にいたるまでには、多くの文学研究科所属教職員の理解と協力を頂戴したことは言うまでもない。

第 1 部に収録した、研究科のさまざまな活動に関する報告記事は、関係する教員や各事務部局に個別に依頼して収集した。基本的な編集方針と形式は、前刊『年報 2010』を参考にし、それを踏襲した。ただし、「OVC プログラム」「エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム」などと並んで、新たに「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」への参画もあり、海外派遣・交流の活動が際立っている。

第 2 部の各専門分野・コースのデータの収集に際しては、コースオーガナイザーの教員や助教のみなさんの協力が大きな助けとなった。年報のページのかなりの部分を占める教員個人のデータは、既に 5 年前から導入・活用された、入力用のエクセルシートが大いに役立った。しかしながら、データを点検・修正し、一定の形式に整える作業には、かなりの時間を費やした。また教員だけでなく院生の業績データの収集は、各専門分野・コースから寄せられる情報に依存しており、その取りまとめにも多くの労力を要した。

以上の記事やデータは、おおむね 11 月中に収集を完了することが出来た。夏休み前から秋学期開始早々の多忙を極める中で快くご協力頂いた関係の皆さまにお礼申し上げたい。

最後になったが、評価・広報室の永島とも子さんには特別の謝意を表さなければならない。全体の設計からはじまり、刊行スケジュールの管理や教職員への諸連絡、データの収集・編集・校正・印刷・刊行までの膨大な作業と、その間の評価・広報室へのフィードバックならびに印刷業者との連絡をして頂いた。年度初めに行われた評価・広報室の室員の大幅な入れ替えがあってもかかわらず、このように恙無く本『年報』が完成したのも、ひとえに永島さんの労を厭わない献身的な作業のお陰である。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

2013 年 1 月

荒川正晴、飯倉洋一、内田次信、堂山英次郎

大阪大学大学院文学研究科
年報 2012
教育・研究(2010-2011年度)
2013年2月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
印刷 (株)ケーエスアイ

後下為各用... 聖... 一... 所... 踏...

一... 行... 業... 内...

心... 切... 破...

一... 人... 切... 破... 變... 多... 立... 經... 环... 海... 傍... 人...

子... 及... 出...

心

安... 七... 年... 成... 六... 月